

明 暗

夏目漱石



一冊堂青空文庫

明暗

夏目漱石

—

医者は探りさぐを入れた後あとで、手術台の上から津田つだを下おろした。

「やっぱり穴が腸まで続いているんです。この前探まえさぐった時は、途中に瘢痕はんこんの隆起りゅうきがあったので、ついそこが行いきどまりだとばかり思っおもって、ああ云いったんですが、今日疎通きようつうを好くするために、そいつをがりがり掻かき落おして見ると、まだ奥があるんです」

「そうしてそれが腸まで続いているんですか」

「そうです。五分ぐらいだと思っていたのが約一寸ほどあるんです」

津田の顔には苦笑の裡うちに淡く盛り上げられた失望の色が見えた。医者は白いだぶだぶした上着の前に両手を組み合わせたまま、ちよつと首を傾けた。その様子が「御気の毒ですが事実だから仕方がありません。医者は自分の職業に対して虚言うそを吐く訳に行かないんですから」という意味に受取れた。

津田は無言のまま帯を締め直して、椅子いすの背に投げ掛けられた袴はかまを取り上げながらまた医者の方を向いた。

「腸まで続いているとすると、癒^{なお}りっこないんですか」

「そんな事はありません」

医者は活潑^{かつぱつ}にまた無雑作^{むぞうさ}に津田の言葉を否定した。併^{あわ}せて彼の気分をも否定するごとくに。

「ただ今^{いま}までのように穴の掃除ばかりしては駄目なんです。それじゃいつまで経^たっても肉の上^{あか}りこはないから、今度は治療法を変えて根本的の手術を一思^{ひとおも}いにやるよりほかに仕方がありませんね」

「根本的の治療と云うと」

「切開^{せつかい}です。切開して穴と腸といっしょにしてしまふんです。す

ると天然自然割かれた面の両側が癒着して来ますから、まあ本式に癒るようになるんです」

津田は黙って點頭いた。彼の傍には南側の窓下に据えられた洋卓の上に一台の顕微鏡が載っていた。医者と懇意な彼は先刻診察所へ這入った時、物珍らしさに、それを覗かせて貰ったのである。その時八百五十倍の鏡の底に映ったものは、まるで図に撮影ったように鮮やかに見える着色の葡萄状の細菌であつた。

津田は袴を穿いてしまつて、その洋卓の上に置いた皮の紙入を取り上げた時、ふとこの細菌の事を思い出した。すると連想が急に彼の胸を不安にした。診察所を出るべく紙入を懷に収めた彼は

すでに出ようとしてまた躊躇ちゆうちゆうした。

「もし結核性のものだとすると、たとい今おっしやったような根本的な手術をして、細い溝みぞを全部腸の方へ切り開いてしまっても癒らないでしょう」

「結核性なら駄目です。それからそれへと穴を掘って奥の方へ進んで行くんだから、口元だけ治療したって役にや立ちません」

津田は思わず眉まゆを寄せた。

「私わたしのは結核性じゃないんですか」

「いえ、結核性じゃありません」

津田は相手の言葉にどれほどの真実さがあるかを確かめようと

して、ちよつと眼を医者の上に据^すえた。医者は動かなかつた。

「どうしてそれが分るんですか。ただの診察で分るんですか」

「ええ。診^み察た様子で分ります」

その時看護婦が津田の後に廻^{あと}つた患者の名前を室^{へや}の出口に立つて呼んだ。待ち構えていたその患者はすぐ津田の背後に現われた。津田は早く退却しなければならなくなった。

「じゃいつその根本的手術をやっていたただけでしょう」

「いつでも。あなたの御都合の好い時でようござんす」

津田は自分の都合を善く考えてから日取をきめる事にして室外に出た。

電車に乗った時の彼の気分は沈んでいた。身動きのならないほど客の込み合う中で、彼は釣革つりかわにぶら下りながらただ自分の事ばかり考えた。去年の疼痛とうつうがありありと記憶の舞台ぶたいに上のぼった。白いベッドの上に横よこたえられた無残みじめな自分の姿が明かに見えた。鎖を切って逃げる事ができない時に犬の出すような自分の唸うなり声が判はっ然きり聴えた。それから冷たい刃物の光と、それが互に触れ合う音と、最後に突然両方の肺臓から一度に空気を搾しぼり出だすような恐ろしい力の圧迫と、圧おされた空気が圧おされながらに収縮する事がで

きないために起るとしか思われない劇^{はげ}しい苦痛とが彼の記憶を襲^{おそ}った。

彼は不愉快になった。急に気を換^かえて自分の周囲を眺めた。周囲のものは彼の存在にすら気がつかずにみんな澄ましていた。彼はまた考えつづけた。

「どうしてあんな苦しい目に会ったんだろう」

荒川堤^{あらかわづつみ}へ花見に行った帰り途から何らの予告なしに突発した当時の疼痛^{とうつう}について、彼は全くの盲目^{めくら}漢であった。その原因はあらゆる想像のほかにあった。不思議というよりもむしろ恐ろしかった。

「この肉体はいつ何時なんどきどんな変へんに会わないとも限らない。それどころか、今現げんにどんな変がこの肉体のうちに起りつつあるかも知れない。そうして自分は全く知らずにいる。恐ろしい事だ」

ここまで働らいて来た彼の頭はそこでとまる事ができなかつた。どつと後うしろから突き落すような勢で、彼を前の方に押しやった。突然彼は心うちの中で叫んだ。

「精神界も同じ事だ。精神界も全く同じ事だ。いつどう変わるか分らない。そうしてその変るところをおれは見たのだ」

彼は思わず唇くちびるを固く結んで、あたかも自尊心きようしんを傷けられた人のような眼を彼の周囲に向けた。けれども彼の心のうちに何事が起

りつつあるかをまるで知らない車中の乗客は、彼の眼遣めづかいに対して少しの注意も払わなかった。

彼の頭は彼の乗っている電車のように、自分自身の軌道レールの上を走って前へ進むだけであつた。彼は二三日にさんち前ある友達から聞いたポアンカレの話[。]を思い出した。彼のために「偶然」の意味を説明してくれたその友達[。]は彼に向つてこう云つた。

「だから君、普通世間で偶然だ偶然だという、いわゆる偶然の出来事というのは、ポアンカレの説によると、原因があまりに複雑過ぎてちよつと見当がつかない時に云うのだね。ナポレオンが生れるためには或特別の卵と或特別の精虫の配合が必要で、その

必要な配合が出来得るためには、またどんな条件が必要であったかと考えて見ると、ほとんど想像がつかないだろう」

彼は友達の言葉を、単に与えられた新らしい知識の断片として聞き流す訳に行かなかった。彼はそれをぴたりと自分の身の上に当て^あ嵌^はめて考えた。すると暗い不可思議な力が右に行くべき彼を左に押しやったり、前に進むべき彼を後ろ^{うし}に引き戻したりするよう^{ひと}に思えた。しかも彼はついぞ今まで自分の行動について他から牽制^{けんせい}を受けた覚^{おぼえ}がなかった。する事はみんな自分の力でし、言う事はことごとく自分の力で言ったに相違なかった。

「どうしてあの女はあすこへ嫁に行っただろう。それは自分で

行こうと思ったから行ったに違ない。しかしどうしてもあすこへ嫁に行くはずではなかったのに。そうしてこのおれはまたどうしてあの女と結婚したのだろう。それもおれが貰^{もら}おうと思ったからこそ結婚が成立したに違ない。しかしおれはいまだかつてあの女を貰^{もら}おうとは思っていなかったのに。偶然？　ポアンカレのいわゆる複雑の極致？　何だか解らない」

彼は電車を降りて考えながら宅^{うち}の方へ歩いて行った。

角^{かど}を曲^まつて細^こい小^{こう}路^じへ這^{はい}入^いった時、津田はわが門前に立^たつてい
る細君の姿を認めた。その細君はこ^こちを見^みていた。しかし津田
の影^{かげ}が曲^まり角^{かど}から出^でるや否^やや、すぐ正面の方^{ほう}へ向^むき直^{ただ}った。そう
して白^{しろ}い纖^{ほそ}い手^てを額^{かぶ}の所^{ところ}へ翳^{かざ}すよう^{よう}にあてが^あつて何^{なに}か見^み上^あげる風^{ふう}
をした。彼女^{かのじょ}は津田が自^{みづか}分のすぐ傍^{そば}へ寄^よつて来^きるまでその態^{たい}度^どを
改^{あらた}めなかつた。

「おい何^{なに}を見^みてい^いるんだ」

細君は津田の聲^{こゑ}を聞^きくとさも驚^{おどろ}ろいたよう^{よう}に急^{いそ}にこ^こちをふり
向^むいた。

「ああ吃^{びっくり}驚^{おどろ}した。——御^ご歸^{かへ}り遊^{あそ}ばせ」

同時に細君は自分のもっているあらゆる眼の輝きを集めて一度に夫の上に注ぎかけた。それから心持腰を曲めて軽い会釈をした。

半ば細君の嬌態に応じようとした津田は半ば逡巡して立ち留まった。

「そんな所に立って何をしているんだ」

「待ってたのよ。御帰りを」

「だって何か一生懸命に見ていたじゃないか」

「ええ。あれ雀よ。雀が御向うの宅の二階の庇に巢を食ってるんでしょ」

津田はちよつと向うの宅の屋根を見上げた。しかしそこには雀らしいものの影も見えなかった。細君はすぐ手を夫の前に出した。

「何だい」

「ステツキ洋杖」

津田は始めて気がついたように自分の持っている洋杖を細君に渡した。それを受取った彼女はまた自分で玄関の格子戸こうしどを開けて夫を先へ入れた。それから自分も夫のあと後につ跟着脱くつぬぎから上あがつた。

夫に着物を脱ぎ換えさせた彼女は津田が火鉢ひばちの前に坐すわるか坐ら

ないうちに、また勝手の方から石^{しゃぼん}鹸入^{いれ}を手拭^{てぬぐい}に包んで持ってた。

「ちよつと今のうち一^{ひと}風呂浴びていらっしやい。またそこへ坐り込むと臆^{おっくう}劫になるから」

津田は仕方なしに手を出して手拭^{てぬぐい}を受取った。しかしすぐ立とうとはしなかった。

「湯は今日はやめにしようかしら」

「なぜ。――さっぱりするから行っていらっしやいよ。帰るとすぐ御飯にして上げますから」

津田は仕方なしにまた立ち上った。室^{へや}を出る時、彼はちよつと

細君の方をふり返った。

「今日帰りに小林さんへ寄って診て貰って来たよ」

「そう。そうしてどうなの、診察の結果は。おおかたもう癒ってるんでしよう」

「ところが癒らない。いよいよ厄介な事になっちまった」

津田はこう云ったなり、後を聞きたがる細君の質問を聞き捨てにして表へ出た。

同じ話題が再び夫婦の間に戻って来たのは晩食が済んで津田がまだ自分の室へ引き取らない宵の口であつた。

「厭ね、切るなんて、怖くって。今までのようにそっとしておい

たつてよかないの」

「やっぱり医者の方から云うとこのままじゃ危険なんだろうね」

「だけど厭だわ、あなた。もし切り損ないでもすると」

細君は濃い恰好かつこうの好い眉まゆを心持寄せて夫を見た。津田は取り合
ずに笑っていた。すると細君が突然気がついたように訊きいた。

「もし手術をするとすれば、また日曜でなくっちゃいけないんで
しょう」

細君にはこの次の日曜に夫と共に親類から誘われて芝居見物に
行く約束があつた。

「まだ席を取ってないんだから構やしないさ、断わつたつて」

「でもそりゃ悪いわ、あなた。せっかく親切にああ云ってくれるものを断^{ことわ}っちゃ」

「悪かないよ。相当の事情があって断わるんなら」

「でもあたし行きたいんですもの」

「御前は行きたければおいでな」

「だからあなたもいらっしやいな、ね。御厭^{おいや}？」

津田は細君の顔を見て苦笑を洩^もらした。

四

細君は色の白い女であつた。そのせいで形の好い彼女の眉が一
際引立きわつて見えた。彼女はまた癖のようによくその眉を動かし
た。惜しい事に彼女の眼は細過ぎた。おまけに愛嬌あいきやうのない一重瞼ひとえまぶち
であつた。けれどもその一重瞼の中に輝やく瞳子ひとみは漆黑しつこくであつ
た。だから非常によく働らいた。或時は専横せんおうと云つてもいいくら
いに表情を恣ほしままにした。津田は我知らずこの小さい眼から出る
光に牽ひきつけられる事があつた。そうしてまた突然何の原因もな
しにその光から跳ね返はされる事もないではなかつた。

彼がふと眼を上げて細君を見た時、彼は刹那せつな的に彼女の眼に宿
る一種の怪しい力を感じた。それは今まで彼女の口にしつつあつ

た甘い言葉とは全く釣り合わない妙な輝やきであつた。相手の言葉に対して返事をしようとした彼の心の作用がこの眼つきのためにちよつと遮断しゃだんされた。すると彼女はすぐ美しい齒を出して微笑した。同時に眼の表情があとかたもなく消えた。

「嘘うそよ。あたし芝居なんか行かなくってもいいのよ。今のはただ甘ったれたのよ」

黙つた津田はなおしばらく細君から眼を放さなかつた。

「何だつてそんなむずかしい顔をして、あたしを御覧になるの。」

——芝居はもうやめるから、この次の日曜に小林さんに行つて手術を受けていらつしやい。それで好いでしよう。岡本へは二三日にさんちじ

中に端書^{ゆうはがき}を出すか、でなければ私がちよつと行って断わつて来ますから」

「御前は行ってもいいんだよ。せつかく誘つてくれたもんだから」

「いえ私も止^よしにするわ。芝居よりもあなたの健康の方が大事ですもの」

津田は自分の受けべき手術についてなお詳^{くわ}しい話を細君にしなければならなかった。

「手術ってたつて、そう腫物^{できもの}の膿^{うみ}を出すように簡単にや行かないんだよ。最初^{げんざい}下剤^{げざい}をかけてまず腸^{きん}を綺麗^{きれい}に掃除しておいて、それ

からいよいよ切開すると、出血の危険があるかも知れないというので、創口^{きずぐち}へガーゼを詰めたまま、五六日の間はじっとして寝て
いるんだそうだから。だからたといこの次の日曜に行くとしたと
ころで、どうせ日曜一日じゃ済まないんだ。その代り日曜が延び
て月曜になろうとも火曜になろうとも大した違にやならないし、
また日曜を繰り上げて明日^{あした}にしたところで、明後日^{あさって}にしたところ
で、やっぱり同じ事なんだ。そこへ行くとまあ楽な病気だね」
「あんまり楽でもないわあなた、一週間も寝たぎりで動く事がで
きなくっちゃ」

細君はまたぴくぴくと眉を動かして見せた。津田はそれに全く

無頓着むとんじゃくであると云った風に、何か考えながら、二人の間に置かれた長火鉢ながひばちの縁ふちに右の肘ひじを靠もたせて、その中に掛けてある鉄瓶てつびんの蓋ふたを眺めた。朱銅しゅどうの蓋の下では湯たぎの沸る音が高くした。

「じゃどうしても御勤めを一週間ばかり休まなくっちゃならないわね」

「だから吉川よしかわさんに会って訳を話して見た上で、日取をきめようかと思っていますところだ。黙って休んでも構わないようなもの、そうも行かないから」

「そりゃあなた御話しになる方がいいわ。平生ふだんからあんなに御世話になっっているんですもの」

「吉川さんに話したら明日^{あした}からすぐ入院しろって云うかも知れない」

入院という言葉聞いた細君は急に細い眼を広げるようにした。

「入院？ 入院なさるんじゃないでしょう」

「まあ入院さ」

「だって小林さんは病院じゃないっていつかおっしゃったじゃないの。みんな外来の患者ばかりだって」

「病院というほどの病院じゃないが、診察所の二階が空^あいてるものだから、そこへ入^はいる事もできるようになってるんだ」

「綺麗きれい？」

津田は苦笑した。

「自宅うちよりは少しあ綺麗かも知れない」

今度は細君が苦笑した。

五

寝る前の一時間か二時間を机に向って過ごす習慣になっていた津田はやがて立ち上った。細君は今まで通りの楽な姿勢で火鉢ひばちに倚よりかかったまま夫を見上げた。

「また御勉強？」

細君は時々立ち上がる夫に向ってこう云った。彼女がこういう時には、いつでもその語調のうちに或物足らなさがあるように津田の耳に響いた。ある時の彼は進んでそれに媚^こびようとした。あの時の彼はかえって反感的にそれから逃^{のが}れなくなった。どちらの場合にも、彼の心の奥底には、「そう御前のような女とばかり遊んじやいられない。おれにはおれでする事があるんだから」という相手を見^み縊^くった自覚^びがぼんやり働^{はたら}いていた。

彼が黙^{もく}って間^{あい}の襖^{ふすま}を開けて次の室^{へや}へ出て行こうとした時、細君はまた彼の背後^{うしろ}から声を掛けた。

「じゃ芝居はもうおやめね。岡本へは私から断っておきましょうね」

津田はちよつとふり向いた。

「だから御前はおいでよ、行きたければ。おれは今のような訳で、どうなるか分らないんだから」

細君は下を向いたぎり夫を見返さなかつた。返事もしなかつた。津田はそれぎり勾配こうばいの急な階子段はしごだんをぎしぎし踏んで二階へ上あがつた。

彼の机の上には比較的大きな洋書が一冊載のせてあつた。彼は坐るなりそれを開いて枝折しおりの挿はさんである頁ページを目標めあてにそこから読みに

かかった。けれども三四日等閑さんよっかなおざりにしておいた咎とがが祟たたつて、前後の
続き具合がよく解らなかつた。それを考え出そうとするためには
勢い前の所をもう一遍読み返さなければならぬので、気の差さし
た彼は、読む事の代りに、ただ頁をばらばらと翻ひるがえして書物の厚味
ばかりを苦にするように眺めた。すると前途遼遠りようえんという気が自おのずか
ら起つた。

彼は結婚後三四カ月目に始めてこの書物を手にした事を思い出
した。気がついて見るとそれから今日こんにちまでにもう二カ月以上も
経たっているのに、彼の読んだ頁はまだ全体の三分の二にも足らな
かつた。彼は平生から世間へ出る多くの人が、出るとすぐ書物に

遠ざかってしまふのを、さも下らない愚物ぐぶつのように細君の前で罵ののっていた。それを夫の口癖として聴かされた細君はまた彼を本当の勉強家として認めなければならぬほど比較的多くの時間が二階で費やされた。前途遼遠という氣と共に、面目ないという心持がどこからか出て来て、意地悪く彼の自尊心をくすぐった。

しかし今彼が自分の前にひろげている書物から吸収しようと力つとめている知識は、彼の日々の業務上に必要なものではなかった。それにはあまりに専門的で、またあまりに高尚過ぎた。学校の講義から得た知識ですら滅多めったに実際の役に立ためた例のない今の勤め向きとはほとんど没交渉と云つてもいいくらいのものであった。彼

はただそれを一種の自信力として貯たくわえておきたかった。他の注意を惹ひく粧しょう飾しょくとしても身に着けておきたかった。その困難が今の彼に臆おぼろげ気ながら見えて来た時、彼は彼の己惚おのぼれに訊きいて見た。

「そう旨うまくは行かないものかな」

彼は黙もくって煙草たばこを吹かした。それから急に気がついたように書物を伏せて立ち上った。そうして足早あしはやに階子段をまたぎしぎし鳴らして下へ降りた。

六

「おいお延^{のぶ}」

彼は襖越^{ふすまこ}しに細君の名を呼びながら、すぐ唐紙^{からかみ}を開けて茶の間の入口に立った。すると長火鉢^{ながひばち}の傍^{わき}に坐っている彼女の前に、いつの間にか取り拵^{とぎ}られた美しい帯と着物の色がたちまち彼の眼に映った。暗い玄関から急に明るい電灯の点^ついた室^{へや}を覗^{のぞ}いた彼の眼にそれが常よりも際立^{きわだ}って華麗^{はなやか}に見えた時、彼はちよつと立ち留^{とど}まって細君の顔と派出^{はで}やかな模様^{もよう}とを等分^{みくら}に見較^{くら}べた。

「今時分そんなものを出してどうするんだい」

お延は檜扇^{ひおうぎ}模様の丸帯の端^{はじ}を膝の上に載せたまま、遠くから津田を見やった。

「ただ出して見たのよ。あたしこの帯まだ一遍も締めた事がないんですもの」

「それで今度その服装で芝居に出かけようと云うのかね」

津田の言葉には皮肉に伴う或冷やかさがあつた。お延は何にも答えずに下を向いた。そうしていつもする通り黒い眉をぴくりと動かして見せた。彼女に特異なこの所作は時として変に津田の心を唆かすと共に、時として妙に彼の氣持を悪くさせた。彼は黙つて縁側へ出て厠の戸を開けた。それからまた二階へ上がろうとした。すると今度は細君の方から彼を呼びとめた。

「あなた、あなた」

同時に彼女は立って来た。そうして彼の前を塞ぐふさようにして訊きいた。

「何か御用なの」

彼の用事は今の彼にとって細君の帯よりも長襦袢ながじゆばんよりもむしろ大事なものであつた。

「御父さんからまだ手紙は来なかつたかね」

「いいえ来ればいつもの通り御机の上に載せておきますわ」

津田はその予期した手紙が机の上に載っていないなかつたから、わざわざ下りて来たのであつた。

「郵便函ゆうびんばこの中を探させましょうか」

「来れば書留だから、郵便函の中へ投げ込んで行くはずはないよ」

「そうね、だけど念のためだから、あたしちよいと見て来るわ」
御延は玄関の障子しょうじを開けて沓脱くつぬぎへ下りようとした。

「駄目だよ。書留がそんな中に入ってる訳がないよ」

「でも書留でなくってただのが入ってるかも知れないから、ちよつと待っていらっしやい」

津田はようやく茶の間へ引き返して、先刻飯さつきを食う時に坐った座蒲団ざぶとんが、まだ火鉢ひばちの前に元の通り据すえてある上に胡坐あぐらをかい
た。そうしてそこに燦爛さんらんと取り乱された濃い友染模様ゆうぜんもようの色を見

守った。

すぐ玄関から取って返したお延の手にははたして一通の書状があつた。

「あつてよ、一本。ことによると御父さまからかも知れないわ」
こう云いながら彼女は明るい電灯の光に白い封筒を照らした。

「ああ、やっぱりあたしの思った通り、御父さまからよ」

「何だ書留じゃないのか」

津田は手紙を受け取るなり、すぐ封を切って読み下した。しかしそれを読んでしまつて、また封筒へ収めるために巻き返した時には、彼の手がただ器械的に動くだけであつた。彼は自分の手元

も見なければ、またお延の顔も見なかった。ぼんやり細君のよそ
行着ゆきぎの荒い御召おめしの縞柄しまがらを眺めながら独りひとごとのように云った。

「困るな」

「どうなすったの」

「なに大した事じゃない」

見栄みえの強い津田は手紙の中に書いてある事を、結婚してまだ間
もない細君に話したくなかった。けれどもそれはまた細君に話さ
なければならぬ事でもあった。

「今月はいつも通り送金ができないからそっちでどうか都合しておけというんだ。年寄はこれだから困るね。そんならそうともつと早く云ってくればいいのに、突然金の要る間際になつて、こんな事を云つて来て……」

「いったいどういう訳なんでしょう」

津田はいったん巻き収めた手紙をまた封筒から出して膝の上で繰り広げた。

「貸家が二軒先月末に空いちまったんだそうだ。それから塞がってる分からも家賃が入って来ないんだそうだ。そこへ持つて来て、庭の手入だの垣根の繕いだので、だいぶ臨時費が嵩んだから

今月は送れないって云うんだ」

彼は開いた手紙を、そのまま火鉢ひばちの向う側にいるお延の手に渡した。御延はまた何も云わずにそれを受取ったぎり、別に読もうともしなかった。この冷かな細君の態度を津田は最初から恐れていたのであった。

「なにそんな家賃あてなんぞ当にしないだって、送ってさえくれようと思えばどうにでも都合はつくのさ。垣根を繕うたっていくらかかるものかね。煉瓦れんがの塀へいを一丁も拵こしらえやしまいし」

津田の言葉に偽いつわりはなかった。彼の父はよし富裕でないまでも、毎月息子夫婦まいげつむすこのためにその生計の不足を補ってやるくらいの出費

に窮する身分ではなかった。ただ彼は地味な人であった。津田から云えば地味過ぎるぐらい質素であった。津田よりもずっと派出はで好きな細君から見ればほとんど無意味に近い節儉家であった。

「御父さまはきつと私達わたしたちが要らない贅沢ぜいたくをして、むやみに御金をばっばつと遣つかうようにでも思っていらっしゃるのよ。きつとそうよ」

「うんこの前京都へ行つた時にも何だかそんな事を云つてたじゃないか。年寄はね、何でも自分の若い時の生計くらしを覚えていて、同年輩の今の若いものも、万事自分のして来た通りにしなければならぬように考えるんだからね。そりや御父さんの三十もおれの

三十も年齒としに變りはないかも知れないが、周囲ぐるりはまるで違っているんだからそうは行かないさ。いつかも会へ行く時會費はいくらだと訊きくから五円だって云ったら、驚ろいて恐ろしいような顔をした事があるよ」

津田は平生ふだんからお延が自分の父を輕蔑けいべつする事を恐れていた。それでいて彼は彼女の前にわが父に対する非難がましい言葉を洩もらさなければならなかった。それは本当に彼の感じた通りの言葉であつた。同時にお延の批判に対して先手を打つという点で、自分と父の言訳にもなつた。

「で今月はどうするの。ただでさえ足りないところへ持って来

て、あなたが手術のために一週間も入院なさると、またそっちの方でもいくらかかかるでしょう」

夫の手前老人に対する批評を憚はばかった細君わとうの話頭は、すぐ實際問題の方へ入って来た。津田の答は用意されていなかった。しばらくして彼は小声で独語ひんごのように云った。

「藤井の叔父に金があると、あすこへ行くんだが……」

お延は夫の顔を見つめた。

「もう一遍御父さまのところへ云って上げる訳にや行かないの。ついでに病気の事も書いて」

「書いてやれない事もないが、また何とかとか云って来られる

と面倒だからね。御父さんに捕まると、そりやなかなか埒^{らち}は開^あかないよ」

「でもほかに当^{あて}がなければ仕方なかないの」

「だから書かないとは云わない。こっちの事情が好く向うへ通じるようにする事はするつもりだが、何しろすぐの間には合わないからな」

「そうね」

その時津田は真^まともにお延の方を見た。そうして思い切ったよ
うな口調で云った。

「どうだ御前岡本さんへ行つてちよつと融通して貰つて来ない

か」

八

「厭^{いや}よ、あたし」

お延はすぐ断った。彼女の言葉には何の淀^{よど}みもなかった。遠慮と斟酌^{しんしゃく}を通り越したその語気が津田にはあまりに不意過ぎた。彼は相当の速力で走っている自動車を、突然停^とめられた時のような衝撃^{シヨツク}を受けた。彼は自分に同情のない細君に対して気を悪くする前に、まず驚ろいた。そうして細君の顔を眺めた。

「あたし、厭よ。岡本へ行つてそんな話をするのは」

お延は再び同じ言葉を夫の前に繰り返した。

「そうかい。それじゃ強しいて頼まないでもいい。しかし……」

津田がこう云いかけた時、お延は冷かな（けれども落ちついた）夫の言葉を、掬すくつて追おい退のけるように遮さへぎった。

「だって、あたしきまりが悪いんですもの。いつでも行くたんびに、お延は好い所へ嫁に行つて仕合せだ、厄介はなし、生計くらひに困るんじゃないつて云われつけているところへ持つて来て、不意にそんな御金の話なんかすると、きつと変な顔をされるにきまつて
いるわ」

お延が一概に津田の依頼を斥けたのは、夫に同情がないというよりも、むしろ岡本に対する見栄に制せられたのだという事がようやく津田の腑に落ちた。彼の眼のうちに宿った冷やかな光が消えた。

「そんなに楽な身分のように吹聴しちゃ困るよ。買い被られるのもいいが、時によるとかえってそれがために迷惑しいとも限らないからね」

「あたし吹聴した覚なんかないわ。ただ向うでそうきめているだけよ」

津田は追窮もしなかった。お延もそれ以上説明する面倒を取ら

なかった。二人はちよつと会話を途切^{とぎ}らした後でまた實際問題に立ち戻つた。しかし今まで自分の經濟に關して余り心を痛めた事のない津田には、別にどうしようという分別^{ぶんべつ}も出なかった。「御父さんにも困つちまうな」というだけであつた。

お延は偶然思いついたように、今までそつちのけにしてあつた、自分の晴着と帯に眼を移した。

「これどうかしましょうか」

彼女は金^{きん}の入つた厚い帯の端^{はじ}を手にとつて、夫の眼に映るやうに、電灯の光に翳^{かざ}した。津田にはその意味がちよつと呑^のみ込めなかつた。

「どうかするって、どうするんだい」

「質屋へ持っていったら御金を貸してくれるでしょう」

津田は驚ろかされた。自分がいまだかつて経験した事のないようなやりくり算段を、嫁に來たての若い細君が、疾くとの昔から承知しているとすれば、それは彼にとって驚ろくべき価値のある発見に相違なかった。

「御前自分の着物かなんか質に入れた事があるのかい」

「ないわ、そんな事」

お延は笑いながら、輕蔑さげすむような口調で津田の問を打ち消した。

「じゃ質に入れるにしたところで様子が分らないだろう」

「ええ。だけどそんな事何でもないでしょう。入れると事がきまれば」

津田は極端な場合のほか、自分の細君にそうした下卑げびた真似まねをさせたくなかった。お延は弁解した。

「時ときが知ってるのよ。あの婢おんなは宅うちにいる時分よく風呂敷包を抱えて質屋へ使いに行った事があるんですって。それから近頃じゃ端はが書きさえ出せば、向うから品物を受取りに来てくれるっていうじゃありませんか」

細君が大事な着物や帯を自分のために提供してくれるのは津田

にとって嬉しい事実であつた。しかしそれをあえてさせるのはまた彼にとつての苦痛にほかならなかつた。細君に対して気の毒というよりもむしろ夫の矜りを傷けるといふ意味において彼は躊躇した。

「まあよく考えて見よう」

彼は金策上何らの解決も与えずにまた二階へ上つて行つた。

九

翌日津田は例のごとく自分の勤め先へ出た。彼は午前にも一回

ひよつくり階子段はしごだんの途中で吉川に出会った。しかし彼は下りくだがけ、向は上りむこうがけだったので、擦れ違すちがひに叮嚀ていねいな御辞儀おじぎをしたぎり、彼は何にも云わなかった。もう午飯ひるめしに間もないという頃、彼はそつと吉川の室へやの戸を敲たたいて、遠慮がちな顔を半分ほど中へ出した。その時吉川は煙草たばこを吹かしながら客と話をしていた。その客は無論彼の知らない人であつた。彼が戸を半分ほど開けた時、今まで調子づいていたらしい主客の会話が突然止まつた。そうして二人ともこつちを向いた。

「何か用かい」

吉川から先へ言葉をかけられた津田は室の入口で立ちどまつ

た。

「ちよつと……」

「君自身の用事かい」

津田は固^{もと}より表向の用事で、この室へ始終^{しじゅうじゆつにゆう}出入すべき人ではなかつた。跋^{ばつ}の悪そうな顔つきをした彼は答えた。

「そうです。ちよつと……」

「そんなら後^{あと}にしてくれたまえ。今少し差支^{さしつか}えるから」

「はあ。気がつかない事をして失礼しました」

音のしないように戸を締^しめた津田はまた自分の机の前に歸つた。

午後になってから彼は二返にへんばかり同じ戸の前に立った。しかし二返共吉川の姿はそこに見えなかった。

「どこかへ行かれたのかい」

津田は下へ降りたついでに玄関にいる給使きゆうじに訊きいた。眼鼻だちの整ったその少年は、石段の下に寝ている毛の長い茶色の犬の方へ自分の手を長く出して、それを段上へ招き寄せる魔術のごとくに口笛を鳴らしていた。

「ええ先刻さつき御客さまといっしよに御出かけになりました。ことによると今日はもうこちらへは御帰りにならないかも知れませんよ」

毎日人の出入でいりの番ばかりして暮しているこの給使は、少なくともこの点にかけて、津田よりも確な予言者であつた。津田はだれが伴つれて来たか分らない茶色の犬と、それからその犬を友達にしようとして大いに骨を折っているこの給使とをそのままにしておいて、また自分の机の前に立ち戻つた。そうしてそこで定刻まで例のごとく事務を執とつた。

時間になつた時、彼はほかの人よりも一足後おくれて大きな建物を出た。彼はいつもの通り停留所の方へ歩きながら、ふと思ひ出したように、また隠袋ポケットから時計を出して眺めた。それは精密な時刻を知るためよりもむしろ自分の歩いて行く方向を決するためで

あつた。歸りに吉川の私宅^{うち}へ寄つたものが、止したものかと思つて、無意味に時計と相談したと同じ事であつた。

彼はとうとう自分の家とは反対の方角に走る電車に飛び乗つた。吉川の不在勝な事をよく知り抜いている彼は、宅^{うち}まで行つたところで必ず会えるとも思つていなかった。たまさかいたにしたところで、都合が悪ければ会わずに歸されるだけだという事も承知していた。しかし彼としては時々吉川家の門を潜^{くぐ}る必要があつた。それは礼儀のためでもあつた。義理のためでもあつた。また利害のためでもあつた。最後には単なる虚栄心のためでもあつた。

「津田は吉川と特別の知り合である」

彼は時々こういう事実を背中に背負^{しよ}って見たくなつた。それからその荷を背負^つたままみんなの前に立ちたくなつた。しかも自^{みづか}ら重^おんずるといつた風の彼の平生の態度を毫^{ごう}も崩^{くず}さずに、この事実を背負^つていたかつた。物をなるべく奥の方へ押し隠しながら、その押し隠しているところを、かえって他^{ひと}に見せたがるのと同じような心理作用の下^{もと}に、彼は今吉川の玄関に立つた。そうして彼自身は飽^あくまでも用事のためにわざわざここへ来たものと自分を解釈していた。

十

厳めしい表玄関の戸はいつもの通り締まっていた。津田はその上半部に透し彫のように簾め込まれた厚い格子の中を何気なく覗いた。中には大きな花崗石の沓脱が静かに横たわっていた。それから天井の真中から蒼黒い色をした鋳物の電灯笠が下がっていた。今までついぞここに足を踏み込んだ例のない彼はわざとそこを通り越して横手へ廻った。そうして書生部屋のすぐ傍にある内玄関から案内を頼んだ。

「まだ御帰りになりません」

小倉こくらの袴はかまを着けて彼の前に膝ひざをついた書生の返事は簡単であつた。それですぐ相手が帰るものと呑のみ込んでいるらしい彼の様子が少し津田を弱らせた。津田はとうとう折り返して訊きいた。

「奥さんはおいでですか」

「奥さんはいらっしゃいます」

事実を云うと津田は吉川よりもかえって細君の方と懇意であつた。足をここまで運んで来る途中の彼の頭の中には、すでに最初から細君に会おうという気分がだいぶ働らいていた。

「ではどうぞ奥さんに」

彼はまだ自分の顔を知らないこの新らしい書生に、もう一返取

次を頼み直した。書生は厭いやな顔もせず奥へ入った。それからまた出て来た時、少し改まった口調で、「奥さんが御目におかかりになるとおっしゃいますからどうぞ」と云って彼を西洋建の応接間へ案内した。

彼がそこにある椅子に腰をかけるや否や、まだ茶も苳たばこぼん盆も運ばれない先に、細君はすぐ顔を出した。

「今御歸りがけ？」

彼はおろした腰をまた立てなければならなかった。

「奥さんはどうなすって」

津田の挨拶あいさつに軽い会釈えしやくをしたなり席に着いた細君はすぐこう訊き

いた。津田はちよつと苦笑した。何と返事をしていいか分らなかった。

「奥さんができたせいかな近頃はあんまり宅^{うち}へいらつしやらなくなつたようね」

細君の言葉には遠慮も何もなかった。彼女は自分の前に年^{とし}齡^{した}下の男を見るだけであつた。そうしてその年^{とし}齡^{した}下の男はかねて眼^め下^{した}の男であつた。

「まだ嬉^{うれ}しいんでしょう」

津田は軽く砂を揚げて来る風を、じつとしてやり過^すぎす時のように、おとなしくしていた。

「だけど、もうよっぽどになるわね、結婚なすってから」

「ええもう半歳はんとしと少しになります」

「早いものね、ついこの間あいだだと思っていたのに。——それでどうなのこの頃は」

「何がです」

「御夫婦仲がよ」

「別にどうという事ありません」

「じゃもう嬉しいうれいところは通り越しちまったの。嘘うそをおっしゃい」

「嬉しいところなんか始めからないんですから、仕方がありません」

ん」

「じゃこれからよ。もし始めからないなら、これからよ、嬉しいところの出て来るのは」

「ありがとう、じゃ楽しみにして待っていきましょう」

「時にあなた御いくつ？」

「もうたくさんです」

「たくさんじゃないわよ。ちよつと伺いたいから伺ったんだから、正直に淡泊たんぱくとおっしゃいよ」

「じゃ申し上げます。実は三十です」

「すると来年はもう一ね」

「順に行けばまあそうなる勘定かんじょうです」

「お延さんは？」

「あいつは三です」

「来年？」

「いえ今年」

十一

吉川の細君はこんな調子でよく津田に調戯からかった。機嫌きげんの好い時はなおさらであつた。津田も折々は向うを調戯い返した。けれど

も彼の見た細君の態度には、笑談じょうだんとも真面目まじめとも片のつかない或物が閃ひらめく事がたびたびあった。そんな場合に会あいふと、根強い性質たに出来上ちっている彼は、談話の途中でよく拘泥こだわった。そうしてもし事情が許すならば、どこまでも話の根を掘ほじって、相手の本意を突き留めようとした。遠慮のためにそこまで行けない時は、黙って相手の顔色だけを注視した。その時の彼の眼には必然の結果としていつでも軽い疑いの雲がかかった。それが臆病にも見えた。注意深くも見えた。または自衛的に慢たかぶる神経の光を放つかのごとくにも見えた。最後に、「思慮しりょに充みちた不安」とでも形容してしかるべき一種の匂も帯びていた。吉川の細君は津田に

会ったんびに、一度か二度きつと彼をそこまで追い込んだ。津田はまたそれと自覚しながらいつの間にかそこへ引き摺り込まれた。

「奥さんはずいぶん意地が悪いですね」

「どうして？ あなた方の御年齒を伺ったのが意地が悪いの」

「そう云う訳でもないですが、何だか意味のあるような、またなような訊き方をしておいて、わざとその後をおっしゃらないんだから」

「後なんかありやしないわよ。いったいあなたはあんまり研究家だから駄目ね。学問をするには研究が必要かも知れないけれど

も、交際に研究は禁物よ。^{きんもつ}あなたがその癖をやめると、もっと人^{ひと}好^{ずき}のする好い男になれるんだけれども」

津田は少し痛かった。けれどもそれは彼の胸に来る痛さで、彼の頭に^{こた}応える痛さではなかった。彼の頭はこの露骨な打撃の前に冷然として相手を見下^{みくだ}していた。細君は微笑した。

「嘘^{うそ}だと思うなら、帰ってあなたの奥さんに訊^きいて御覧遊ばせ。お延さんもきつと私と同意見だから。お延さんばかりじゃないわ、まだほかにもう一人あるはずよ、きつと」

津田の顔が急に堅^{くちびる}くなった。唇の肉が少し動いた。彼は眼を自分の膝^{ひざ}の上に落したぎり何も答えなかった。

「解ったでしよう、誰だか」

細君は彼の顔を覗のぞき込むようにして訊きいた。彼は固もとよりその誰であるかをよく承知していた。けれども細君の云う事を肯定する気は毫毫もなかった。再び顔を上げた時、彼は沈黙の眼を細君の方に向けた。その眼が無言の裡うちに何を語っているか、細君には解らなかった。

「御氣に障さわったら堪忍かんにんしてちょうだい。そう云うつもりで云ったんじゃないんだから」

「いえ何とも思っちゃんいません」

「本当に？」

「本当に何とも思っちゃいません」

「それでやっと安心した」

細君はすぐ元の軽い調子を恢復かいふくした。

「あなたまだどこか子供子供したところがあるのね、こうして話していると。だから男は損なようでやっぱり得とくなのね。あなたはそら今おっしゃった通りちようどでしょう、それからお延さんが今年三になるんだから、年齒でいうと、よっぽど違うんだけれども、様子からいうと、かえって奥さんの方が更ふけてるくらいよ。更けてると云っちゃ失礼に当るかも知れないけれども、何と云ったらいいでしょうね、まあ……」

細君は津田を前に置いてお延の様子を形容する言葉を思案するらしかった。津田は多少の好奇心をもつて、それを待ち受けた。「まあ老成^{ろうせい}よ。本当に怜悯^{りこう}な方^{かた}ね、あんな怜悯な方は滅多^{めった}に見た事がない。大事にして御上げなさいよ」

細君の語勢からいうと、「大事にしてやれ」という代りに、「よく気をつけろ」と云つても大した変りはなかった。

十二

その時二人の頭の上に下^{さが}っている電灯がぱつと点いた。先刻^{さつき}取

次に出た書生がそつと室の中へ入って来て、音のしないようにブラインドを卸ろして、また無言のまま出て行つた。瓦斯煖炉の色のだんだん濃くなつて来るのを、最前から注意して見ていた津田は、黙つて書生の後姿を目送した。もう好い加減に話を切り上げて帰らなければならぬという気がした。彼は自分の前に置かれた紅茶茶碗の底に冷たく浮いている檸檬の一切を除けるようにしてその余りを残りにく啜つた。そうしてそれを相図に、自分の持つて来た用事を細君に打ち明けた。用事は固より単簡であつた。けれども細君の諾否だけですぐ決定されべき性質のものではなかつた。彼の自由に使用したいという一週間前後の時日を、月

のどこへ置いていいか、そこは彼女にもまるで解らなかった。

「いつだって構やしないんでしょう。繰合せくりあわさえつければ」

彼女はさも無雑作むぞうさな口ぶりで津田に好意を表してくれた。

「無論繰合せはつくようにしておいたんですが……」

「じゃ好いじゃありませんか。明日あしたから休んだって」

「でもちよつと伺った上でないと」

「じゃ帰ったら私からよく話しておきましょう。心配する事も何にもないわ」

細君は快よく引き受けた。あたかも自分が他のひとのために働らいてやる用事がまた一つできたのを喜ぶようにも見えた。津田はこ

の機嫌きげんのいい、そして同情のある夫人を自分の前に見るのが嬉しうれかった。自分の態度なり所作しよさなりが原動力になって、相手をそうさせたのだという自覚が彼をなおさら嬉しくした。

彼はある意味において、この細君から子供扱いにされるのを好すいていた。それは子供扱いにされるために二人の間に起る一種の親しみを自分が握る事ができたからである。そうしてその親しみをよくよく立ち割って見ると、やはり男女両性の間にしか起り得ない特殊な親しみであつた。例えて云うと、或人が茶屋女などに突然背中を打どやされた刹那せつなに受ける快感に近い或物であつた。

同時に彼は吉川の細君などがどうしても子供扱いにする事ので

きない自己を裕ゆたかにもっていた。彼はその自己をわざと押し蔵かくして細君の前に立つ用意を忘れなかった。かくして彼は心置なく細君から嬲なぶられる時の軽い感じを前に受けながら、背後はいつでも自分の築いた厚い重い壁に倚よりかかっていた。

彼が用事を済まして椅子いすを離れようとした時、細君は突然口を開ひらいた。

「また子供のように泣いたり唸うなったりしちやいけませんよ。大きな体なりをして」

津田は思わず去年の苦痛を思い出した。

「あの時は実際弱りました。唐紙からかみの開閉あけたてが局部こたに応えて、そのた

んびにびくんびくんと身体全体が寢床の上で飛び上ったくらいな
んですから。しかし今度は大丈夫です」

「そう？ 誰が受合ってくれたの。何だか解ったもんじゃないわ
ね。あんまり口幅くちはばつたい事をおっしゃると、見届けに行きます
よ」

「あなたに見舞みまいに来ていただけのような所じゃありません。狭
くって汚なくって変な部屋なんですから」

「いっこう構わないわ」

細君の様子は本気なのか調戯からかうのかちよつと要領を得なかつ
た。医者専門が、自分の病氣以外の或方面に属するので、婦人

などはあまりそこへ近づかない方がいいと云おうとした津田は、少し口籠くちごもって躊躇ちゆうちゆうした。細君は虚に乗じて肉薄した。

「行きますよ、少しあなたに話す事があるから。お延さんの前じゃ話しにくい事なんだから」

「じゃそのうちまた私の方から伺います」

細君は逃げるようにして立った津田を、笑い声と共に応接間から送り出した。

往来へ出た津田の足はしだいに吉川の家を遠ざかった。けれども彼の頭は彼の足ほど早く今までいた応接間を離れる訳に行かなかった。彼は比較的人通りの少ない宵闇よいやみの町を歩きながら、やはり明るい室内の光景をちらちら見た。

冷たそうに燦きらつく肌合はだあいの七宝製しっぽうの花か瓶びん、その花瓶なめの滑らかな表面に流れる華麗はなやかな模様の色、卓上に運ばれた銀きせの丸盆、同じ色の角砂糖入と牛乳入、蒼黒あおくろい地じの中に茶の唐草模様からくさを浮かした重みそうな窓掛すみ、三隅きんぱくに金箔を置いた装飾用のアルバム、——こういうものの強い刺戟しげきが、すでに明るい電灯もとの下を去って、暗い戸外へ出た彼の眼の中を不秩序に往来した。

彼は無論この渦うずまく色の中に坐っている女主人公の幻影を忘れる事ができなかった。彼は歩きながら先刻さつき彼女と取り換わせた会話を、ぽつりぽつり思い出した。そうしてその或部分に來ると、あたかも炒豆いりまめを口に入れた人のように、咀嚼そしゃくしつつ味わった。

「あの細君はことによると、まだあの事件について、おれに何か話をする気かも知れない。その話を実はおれは聞きたくないのだ。しかしまた非常に聞きたいのだ」

彼はこの矛盾した両面を自分の胸うちの中で自分に公言した時、たちまちわが弱点を曝露ばくろした人のように、暗い路の上で赤面した。彼はその赤面を通り抜けるために、わざとすぐ先へ出た。

「もしあの細君があ的事件についておれに何か云い出す気がある
とすると、その主意ははたしてどこにあるだろう」

今の津田はけっしてこの問題に解決を与える事ができなかった。
た。

「おれに調戯^{からか}うため？」

それは何とも云えなかった。彼女は元来他^{ひと}に調戯^{からか}う事の好^{すき}な女
であつた。そうして二人の間柄^{あいだがら}はその方面の自由を彼女に与える
に充分であつた。その上彼女の地位は知らず知らずの間に今の彼
女を放慢にした。彼を焦^じらす事から受け得られる単なる快感のた
めに、遠慮^{うち}の埒^{うち}を平気で跨^{また}ぐかも知れなかった。

「もしそうでないとしたら、……おれに対する同情のため？　おれを贖^{ひいき}負にし過ぎるため？」

それも何とも云えなかった。今までの彼女は実際彼に対して親切でもあり、また贖^{ひいき}負にもしてくれた。

彼は広い通りへ来てそこから電車へ乗った。堀^{ほり}端^{ばた}に沿うて走るその電車の窓硝子^{まどガラス}の外には、黒い水と黒い土手と、それからその土手の上に蟠^{わだか}まる黒い松の木が見えるだけであつた。

車内の片隅^{かたすみ}に席を取った彼は、窓を透^{すか}してこのさむぎむしい秋の夜^よの景色^{けしき}にちよつと眼を注いだ後^{あと}、すぐまたほかの事を考えなければならなかった。彼は面倒になつて昨^{ゆうべ}夕はそのままにしてお

いた金の工面くめんをどうかしなければならぬ位地いちにあつた。彼はすぐまた吉川の細君の事を思い出した。

「先刻さつぎ事情を打ち明けてこつちから云い出しさえすれば訳はなかつたのに」

そう思うと、自分が氣を利きかしたつもりで、こう早く席を立つて来てしまったのが残り惜しくなつた。と云つて、今さらその用事だけで、また彼女に会いに行く勇氣は彼には全くなかつた。

電車を下りて橋を渡る時、彼は暗い欄干らんかんの下に蹲踞うずくまる乞食こじきを見た。その乞食は動く黒い影のように彼の前に頭を下げた。彼は身に薄い外套がいとうを着けていた。季節からいうとむしろ早過ぎる瓦斯ガスだ

暖炉んろの温かい焰ほのおをもう見て来た。けれども乞食と彼との懸隔けんかくは今の彼の眼中にはほとんど入る余地はいがなかった。彼は窮した人のように感じた。父が例月の通り金を送ってくれないのが不都合に思われた。

十四

津田は同じ気分で自分の宅うちの門前まで歩いた。彼が玄関の格子こうしへ手を掛けようとすると、格子のまだ開かない先に、障子しょうじの方がすうと開いたあ。そうしてお延の姿がいつの間にか彼の前に現われ

ていた。彼は吃驚^{びっくり}したように、薄化粧^{うすげしやう}を施こした彼女の横顔を眺めた。

彼は結婚後こんな事でよく自分の細君から驚ろかされた。彼女の行為は時として夫の先^{せん}を越すという悪い結果を生む代りに、時としては非常に気の利^きいた証拠^{しょうこ}をも挙げた。日常瑣末^{さまつ}の事件のうち、よくこの特色を発揮する彼女の所作^{しよさ}を、津田は時々自分の眼先にちらつく洋刀^{ナイフ}の光のように眺める事があつた。小さいながら冴^さえているという感じと共に、どこか気味の悪いという心持ちも起つた。

咄嗟^{とつさ}の場合津田はお延が何かの力で自分の帰りを予感したよう

に思った。けれどもその訳を訊きく気にはならなかった。訳を訊いて笑いながらはぐらかされるのは、夫の敗北のように見えた。

彼は澄まして玄関から上へ上がった。そうしてすぐ着物を着換えた。茶の間の火鉢ひばちの前には黒塗の足のついた膳ぜんの上に布巾ふきんを掛けたのが、彼の帰りを待ち受けるごとくに据すえてあつた。

「今日もどこかへ御廻り？」

津田が一定の時刻に宅うちへ帰らないと、お延はきつとこういう質問を掛けた。勢いきおい津田は何とか返事をしなければならなかった。

しかしそう用事ばかりで遅くなるとも限らないので、時によると彼の答は変に曖昧あいまいなものになった。そんな場合の彼は、自分のた

めに薄化粧をしたお延の顔をわざと見ないようにした。

「あてて見ましようか」

「うん」

今日の津田はいかにも平気であつた。

「吉川さんでしょう」

「よくあたるね」

「たいてい容子ようすで解りますわ」

「そうかね。もつとも昨夜吉川さんゆうべに話をしてから手術の日取を

きめる事にしようって云ったんだから、あたる訳は訳だね」

「そんな事がなくったって、妾あかしあてるわ」

「そうか。偉いね」

津田は吉川の細君に頼んで来た要点だけをお延に伝えた。

「じゃいつから、その治療に取りかかるの」

「そういう訳だから、まあいつからでも構わないようなもんだけれども……」

津田の腹には、その治療にとりかかる前に、是非金の工面くめんをしななければならないという屈託くつたくがあった。その額は無論大したものではなかった。しかし大した額でないだけに、これという簡便な調達方ちようだつかたの胸に浮ばない彼を、なお焦いらつかせた。

彼は神田にいる妹いもうとの事をちよつと思ひ浮べて見たが、そこへ足

を向ける気にはどうしてもなれなかった。彼が結婚後家計膨脹ぼうちやうと
いう名義もとの下に、毎月まいげつの不足を、京都にいる父から填補てんぽして貰もらう
事になった一面には、盆暮ぼんくれの賞与で、その何分なんぶんかを返済するとい
う条件があつた。彼はいろいろの事情から、この夏その条件を履りこ
行うしなかつたために、彼の父はすでに感情を害していた。それを
知っている妹はまた大体の上においてむしろ父の同情者であつ
た。妹の夫の手前、金の問題などを彼女の前に持ち出すのを最初
から屑くずよしとしなかつた彼は、この事情のために、なおさら堅く
なつた。彼はやむをえなければ、お延の忠告通り、もう一返父に
手紙を出して事情を訴えるよりほかに仕方がないと思つた。それ

には今の病気を、少し手重^{ておも}に書くのが得策だろうとも考えた。父^ふ母^ぼに心配をかけない程度で、実際の事実^{じじつ}に多少の光沢^{くわさく}を着けるくらい^{くらい}の事は、良心の苦痛を忍ばないで誰にでもできる手加減であつた。

「お延昨夜^{ゆうべ}お前の云つた通りもう一遍御父さんに手紙を出そうよ」

「そう。でも……」

お延は「でも」と云つたなり津田を見た。津田は構わず二階へ上^{あが}つて机の前に坐つた。

十五

西洋流のレターペーパーを使いつけた彼は、机の抽斗^{ひきだし}からラヴェンダー色の紙と封筒とを取り出して、その紙の上へ万年筆で何心なく二三行書きかけた時、ふと気がついた。彼の父は洋筆^{ペン}や万年筆でだらしなく綴^{つづ}られた言文一致の手紙などを、自分の倅^{せがれ}から受け取る事は平生^{ひごろ}からあまり喜こんでいなかった。彼は遠くにいる父の顔を眼の前に思い浮べながら、苦笑して筆を擱^おいた。手紙を書いてやったところでとうてい効能^{ききめ}はあるまいという気が続いて起った。彼は木炭紙に似たざらつく厚い紙の余りへ、山羊髯^{やぎひげ}

を生やした細面ほそおもての父の顔をいたずらにスケッチして、どうしようかと考えた。

やがて彼は決心して立ち上った。襖ふすまを開けて、二階の上り口あがりぐちの所に出て、そこから下にいる細君を呼んだ。

「お延お前の所に日本の巻紙と状袋があるかね。あるならちよいとお貸し」

「日本の？」

細君の耳にはこの形容詞が変に滑稽こっけいに聞こえた。

「女のならあるわ」

津田はまた自分の前に粋いきな模様入の半切はんきりを拡ひろげて見た。

「これなら気に入るかしら」

「中さえよく解るように書いて上げたら紙なんかどうでもよかないの」

「そうは行かないよ。御父さんはあれでなかなかむずかしいんだからね」

津田は真面目な顔をしてなお半切を見つめていた。お延の口元には薄笑いの影が差した。

「時をちよいと買わせにやりましょうか」

「うん」

津田は生返事をした。白い巻紙と無地の封筒さえあれば、必ず

自分の希望が成功するという訳にも行かなかった。

「待っていらっしやい。じきだから」

お延はすぐ下へ降りた。やがて潜り戸が開いて下女の外へ出る足音が聞こえた。津田は必要の品物が自分の手に入るまで、何もせずに、ただ机の前に坐って煙草を吹かした。

彼の頭は勢い彼の父を離れなかった。東京に生れて東京に育つたその父は、何ぞというとすぐ上方の悪口を云いたがる癖に、いつか永住の目的をもって京都に落ちついてしまった。彼がその土地を余り好まない母に同情して多少不賛成の意を洩らした時、父は自分で買った土地と自分が建てた家とを彼に示して、「これを

どうする気か」と云った。今よりもまだ年の若かった彼は、父の言葉の意味さえよく解らなかった。所置はどうでもできるのにと思った。父は時々彼に向って、「誰のためでもない、みんな御前のためだ」と云った。「今はそのありがた味みが解らないかも知れないが、おれが死んで見ろ、きつと解る時が来るから」とも云った。彼は頭の中で父の言葉と、その言葉を口にする時の父の態度とを描き出した。子供の未来の幸福を一手いってに引き受けたような自信に充みちたその様子が、近づくべからざる予言者のように、彼には見えた。彼は想像の眼で見る父に向って云いたくなった。

「御父さんが死んだ後あとで、一度に御父さんのありがた味が解るよ

りも、お父さんが生きているうちから、毎月正まいげつ確にお父さんのあ
りがた味が少しずつ解る方が、どのくらい楽だか知れやしませ
ん」

彼が父の機嫌きげんを損そこねないような巻紙の上へ、なるべく金を送つて
くれそんな文句を、堅苦しい候文で認したため出したのは、それから約
十分後ごであつた。彼はぎごちない思いをして、ようやくそれを書
き上げた後あとで、もう一遍読み返した時に、自分の字の拙ますい事につ
くづく愛想あいそを尽かした。文句はとにかく、こんな字ではとうてい
成功する資格がないようにも思つた。最後に、よし成功しても、
こっちで要いる期日までに金はとても来ないような気がした。下女

にそれを投函とうかんさせた後あと、彼は黙って床の中へ潜もぐり込みながら、腹の中で云った。

「その時はその時の事だ」

十六

翌日の午後津田は呼び付けられて吉川の前に立った。

「昨日きのう宅へ来たってね」

「ええちよつと御留守へ伺って、奥さんに御目にかかって参りました」

「また病気だそうじゃないか」

「ええ少し……」

「困るね。そうよく病気をしちや」

「何実はこの前の続きです」

吉川は少し意外そうな顔をして、今まで使っていた食後の小楊^{こよう}子を口から吐き出した。それから内隠袋^{うちかくし}を探^{さが}って蓆入^{たばこいれ}を取り出そうとした。津田はすぐ灰皿の上にあつた燐寸^{マッチ}を擦^すった。あまり気を利^きかそうとして急^せいたものだから、一本目は役に立たないで直ぐ消えた。彼は周章^{あわ}てて二本目を擦^すって、それを大事そうに吉川の鼻の先へ持って行^いった。

「何しろ病氣なら仕方がない、休んでよく養生したらいいだろう」

津田は礼を云つて室^{へや}を出ようとした。吉川は煙^{けむ}りの間から訊^きいた。

「佐々木には断つたろうね」

「ええ佐々木さんにもほかの人にも話して、繰^くり合せ^{あわ}をして貰^{もら}う事にしています」

佐々木は彼の上^{うわ}役^{やく}であつた。

「どうせ休むなら早い方がいいね。早く養生して早く好くなつて、そうしてせつせと働^{はたら}かなくっちゃ駄^だ目^めだ」

吉川の言葉はよく彼の^{きしやう}気性を現わしていた。

「都合がよければ明日^{あした}からにしたまえ」

「へえ」

こう云われた津田は否^{いや}応^{おう}なしに明日から入院しなければならな
いような心持がした。

彼の身体^{からだ}が半分戸の外へ出かかった時、彼はまた後^{うしろ}から呼びと
められた。

「おい君、お父さんは近頃どうしたね。相変らずお丈夫かね」

ふり返った津田の鼻を葉巻の好^{におい}香が急に冒^{おか}した。

「へえ、ありがとう、お蔭^{かげ}さまで達者でございます」

「大方詩でも作って遊んでるんだろう。気楽でいいね。昨夕も岡本と或所で落ち合って、君のお父さんの噂をしたがね。岡本も羨ましがってたよ。あの男も近頃少し閑暇になったようなものやっぱり、君のお父さんのようにや行かないからね」

津田は自分の父がけっしてこれらの人から羨やましがられてい
るとは思わなかった。もし父の境遇に彼らをおいてやろうという
ものがあつたなら、彼らは苦笑して、少なくとももう十年はこの
ままにしておいてくれと頼むだろうと考えた。それは固より自分
の性格から割り出した津田の観察に過ぎなかった。同時に彼らの
性格から割り出した津田の観察でもあつた。

「父はもう時勢じせい後れおくですから、ああでもして暮らしているよりほかに仕方がございません」

津田はいつの間にかまた室の中に戻って、元通りの位置に立っていた。

「どうして時勢後れどころじゃない、つまり時勢に先だっているから、ああした生活が送れるんだ」

津田は挨拶あいさつに窮した。向うの口の重宝ちようほうなのに比べて、自分の口の不重宝ぶちようほうさが荷になった。彼は手持無沙汰てもちぶさたの気味で、緩ゆるく消えて行く葉巻の煙りを見つめた。

「お父さんに心配を掛けちゃいけないよ。君の事は何でもこつち

に分ってるから、もし悪い事があると、僕からお父さんの方へ知らせてやるぜ、好いかね」

津田はこの子供に対するような、笑談しょうだんとも訓戒とも見分みわけのつかない言葉を、苦笑しながら聞いた後で、ようやく室外に逃のがれ出でた。

十七

その日の帰りがけに津田は途中で電車を下りて、停留所から賑にぎやかな通りを少し行った所で横へ曲った。質屋の暖簾のれんだの碁会所ごかいしょ

の看板だの鳶とびの頭かしらのいそうな格子戸こうしどづく作りだのを左右に見ながら、
彼は彎曲わんきよくした小路こうじの中ほどにある擦硝子張すりガラスはりの扉を外から押して内
へ入った。扉の上部に取り付けられた電鈴べルが鋭どい音を立てた
時、彼は玄関の突き当りの狭い部屋から出る四五人の眼の光を一
度に浴びた。窓のないその室へやは狭いばかりでなく實際暗かった。
外部そとから急に入って来た彼にはまるで穴蔵のような感じを与え
た。彼は寒そうに長椅子の片隅かたすみへ腰をおろして、たった今暗い中
から眼を光らして自分の方を見た人達を見返した。彼らの多くは
室の真中に出してある大きな瀬戸物火鉢ひばちの周囲まわりを取り巻くように
して坐っていた。そのうちの二人は腕組のまま、二人は火鉢の縁ふち

に片手を翳^{かざ}したまま、ずっと離れた一人はそこに取り散らした新聞紙の上へ甜^なめるように顔を押し付けたまま、また最後の一人は彼の今腰をおろした長椅子の反対の隅に、心持身体^{からだ}を横にして洋袴^ンの膝頭^{ひざがしら}を重ねたまま。

電鈴^{ベル}の鳴った時申し合せたように戸口をふり向いた彼らは、一^{いち}瞥^{べつ}の後^{のち}また申し合せたように静かになってしまった。みんな黙って何事をか考え込んでいるらしい態度で坐っていた。その様子が津田の存在に注意を払わないというよりも、かえって津田から注意されるのを回避するのだとも取れた。単に津田ばかりでなく、お互に注意され合う苦痛を憚^{はば}かって、わざとそつぽへ眼を落して

いるらしくも見えた。

この陰気な一群いちぐんの人々は、ほとんど例外なしに似たり寄ったりの過去をもっているものばかりであった。彼らはこうして暗い控室の中で、静かに自分の順番の来るのを待っている間に、むしろ華はなやかに彩いろどられたその過去の断片のために、急に黒い影を投げかけられるのである。そうして明るい所へ眼を向ける勇気がないので、じっとその黒い影の中に立ち竦すくむようにして閉じ籠こもっているのである。

津田は長椅子の肱掛ひじかけに腕を載のせて手を額にあてた。彼は黙禱もくとうを神に捧げるようなこの姿勢のもとに、彼が去年の暮以来この医者

の家で思いがけなく会った二人の男の事を考えた。

その一人は事実彼の妹婿いもむこにほかならなかった。この暗い室の中で突然彼の姿を認めた時、津田は吃驚びっくりした。そんな事に対して比較的無頓着むとんじやくな相手も、津田の驚ろき方が反響したために、ちよつと挨拶あいさつに窮したらしかった。

他の一人は友達であつた。これは津田が自分と同性質の病氣に罹かかっているものと思ひ込んで、向うから平氣に声をかけた。彼らはその時二人いっしょに医者いしやの門を出て、晩飯を食いながら、性セックスと愛ラヴという問題についてむずかしい議論をした。

妹婿の事は一時の驚ろきだけで、大した影響もなく済んだが、

それぎりで後のなさそうに思えた友達と彼との間には、その後異
常な結果が生れた。

その時の友達の言葉と今の友達の境遇とを連結して考えなければならなかった津田は、突然衝撃を受けた人のように、眼を開いて額から手を放した。

すると診察所から紺セルの洋服を着た三十恰好の男が出て来て、すぐ薬局の窓の所へ行った。彼が隠袋から紙入を出して金を払おうとする途端に、看護婦が敷居の上に立った。彼女と見知り越の津田は、次の患者の名を呼んで再び診察所の方へ引き返そうとする彼女を呼び留めた。

「順番を待っているのが面倒だからちよつと先生に訊きいて下さい。明日あしたか明後日あさって手術を受けに来て好いかつて」

奥へ入った看護婦はすぐまた白い姿を暗い室へやの戸口に現わした。

「今ちようど二階が空あいておりますから、いつでも御都合よろの宜よろしい時にどうぞ」

津田は逃のがれるように暗い室を出た。彼が急いで靴を穿はいて、擦すり硝子張ガラス張りの大きな扉を内側へ引いた時、今まで真暗に見えた控室にぱつと電灯が点ついた。

十八

津田の宅^{うち}へ歸ったのは、昨日^{きのう}よりはやや早目であつたけれども、近頃急に短かくなつた秋の日脚^{ひあし}は疾^とくに傾いて、先刻^{さつき}まで往来にだけ残っていた肌寒^{はださむ}の余光が、一度に地上から払い去られるように消えて行く頃であつた。

彼の二階には無論火が点いていなかった。玄関も真暗であつた。今角^{かど}の車屋の軒灯^{けんとう}を明らかに眺めて来たばかりの彼の眼は少し失望を感じた。彼はがらりと格子^{こうし}を開けた。それでもお延は出て来なかつた。昨日の今頃待ち伏せでもするようにして彼女から

毒気を抜かれた時は、余り好い心持もしなかったが、こうして迎える人もない真暗な玄関に立たされて見ると、やっぱり昨日の方が愉快だったという気が彼の胸のどこかでした。彼は立ちながら、「お延お延」と呼んだ。すると思いがけない二階の方で「はい」という返事がした。それから階子段はしごだんを踏んで降りて来る彼女の足音が聞こえた。同時に下女が勝手の方から馳かけ出して来た。

「何をしているんだ」

津田の言葉には多少不満の響きがあった。お延は何にも云わなかった。しかしその顔を見上げた時、彼はいつもの通り無言の裡うちに自分を牽ひきつけようとする彼女の微笑を認めない訳に行かな

かった。白い歯が何より先に彼の視線を奪った。

「二階は真暗じゃないか」

「ええ。何だかぼんやりして考えていたもんだから、つい御帰りに気がつかなかったの」

「寝ていたな」

「まさか」

下女が大きな声を出して笑い出したので、二人の会話はそれぎり切れてしまった。

湯に行く時、お延は「ちよつと待って」と云いながら、石鹼と手拭てぬぐいを例の通り彼女の手から受け取って火鉢ひばちの傍そばを離れようとす

る夫を引きとめた。彼女は後ろ向になつて、重ね箆笥の一番下の抽斗ひきだしから、ネルを重ねた銘仙めいせんの襦袍どてらを出して夫の前へ置いた。

「ちよつと着てみてちようだい。まだ圧おしが好く利きいていないかも知れないけども」

津田は煙けむに巻かれたような顔をして、黒八丈くろはちじょうの襟えりのかかった荒たてしまいどてらの襦袍みまを見守もつた。それは自分の買った品でもなければ、拵うしろえてくれと誂あつえた物でもなかった。

「どうしたんだい。これは」

「拵えたのよ。あなたが病院へ入る時の用心に。ああいう所で、あんまり変な服装なをしてるのは見つともないから」

「いつの間に拵えたのかね」

彼が手術のため一週間ばかり家を空^{うち}けなければならぬと云つて、その訳をお延に話したのは、つい二三日^{にさんちまえ}前の事であつた。その上彼はその日から今日^{きょう}に至るまで、ついぞ針を持って裁^{たちもの}物板の前に坐^{すわ}つた細君の姿を見た事がなかつた。彼は不思議の感に打たれざるを得なかつた。お延はまた夫のこの驚きをあたかも自分の労力に対する報酬のごとくに眺めた。そうしてわざと説明も何も加えなかつた。

「布^{きれ}は買ったのかい」

「いいえ、これあたしの御古^{おふる}よ。この冬着ようと思つて、洗張^{あらいはり}を

したまま仕立てずにしまつといたの」

なるほど若い女の着る柄がらだけに、縞しまがただ荒いばかりでなく、色合いろあいもどつちかというとむしろ派出はで過ぎた。津田は袖そでを通したわが姿を、奴やつこ風のような風をして、少しきまり悪そうに眺めた後でお延に云った。

「とうとう明日あしたか明後日あさってやって貰う事にきめて来たよ」

「そう。それであたしはどうなるの」

「御前はどうもしやしないさ」

「いっしょに随ついて行っちやいけないの。病院へ」

お延は金の事などをまるで苦にしていならしく見えた。

十九

津田の明^{あく}る朝眼^{あさ}を覚^さましたのはいつもよりずっと遅^{おそ}かった。家の内^{なか}はもう一片^{ひとかたづき}付^つかたづいた後のようにひっそり閑^{かん}としていた。

座敷から玄関を通^とつて茶の間の障子^{しょうじ}を開^{ひら}けた彼は、そこの火鉢の傍^{そば}にきちんと坐^まつて新聞を手にしている細君を見た。穏やかな家庭を代表^{だいひょう}するような音を立てて鉄瓶^{てつびん}が鳴^{なり}っていた。

「気を許^{ゆる}して寝^ねると、寝坊^{ねぼう}をするつもりはなくつても、つい寝過^{ねあや}ごすもんだな」

彼は云い訳^{わけ}らしい事をいって、曆^{れき}の上^{うへ}にかけてある時計を眺^{なが}め

た。時計の針はもう十時近くの所を指^さしていた。

顔を洗ってまた茶の間へ戻った時、彼は何気なく例の黒塗の膳^{ぜん}に向った。その膳は彼の着席を待ち受けたというよりも、むしろ待ち草臥^{くたび}れたといった方が適當であつた。彼は膳の上に掛けてある布巾^{ふきん}を除^とろうとしてふと気がついた。

「こりやいけない」

彼は手術を受ける前日^{前日}に取るべき注意を、かつて医者から聞かされた事を思い出した。しかし今の彼はそれを明らかに覚えていなかった。彼は突然細君に云った。

「ちよつと訊^きいてくる」

「今すぐ？」

お延は吃驚^{びっくり}して夫の顔を見た。

「なに電話でだよ。訳やない」

彼は静かな茶の間の空気を自分で蹴散^{けち}らす人のように立ち上ると、すぐ玄関から表へ出た。そうして電車通りを半丁^{はんちよう}ほど右へ行つた所にある自動電話へ馳^かけつけた。そこからまた急ぎ足に取つて返した彼は玄関に立つたまま細君を呼んだ。

「ちよつと二階にある紙入を取ってくれ。御前の墓口^{がまぐち}でも好い」
「何^{なん}になさるの」

お延には夫の意味がまるで解らなかつた。

「何でもいいから早く出してくれ」

彼はお延から受取った墓口を懐中へ放り込んだまま、すぐ大通りの方へ引き返した。そうして電車に乗った。

彼がかなり大きな紙包を抱えてまた戻って来たのは、それから約三四十分後で、もう午に間もない頃であつた。

「あの墓口の中にや少しつきや入っていないんだね。もう少しあるのかと思ったら」

津田はそう云いながら腋に抱えた包みを茶の間の畳の上へ放り出した。

「足りなくって？」

お延は細かい事にまで気を遣^{つか}わないではいられないという眼つきを夫の上に向けた。

「いや足りないというほどでもないがね」

「だけど何をお買いになるかあたしちつとも解らないんですもの。もしかすると髪結床^{かみいどこ}かと思っただけれども」

津田は二カ月以上手を入れない自分の頭に気がついた。永く髪を刈らないと、心持番^{ばん}の小さい彼の帽子が、被^{かぶ}るたんびに少しずつきしんで来るようだという、つい昨日^{きのう}の朝受けた新らしい感じまで思い出した。

「それにあんまり急いでいらっしたもんだから、つい二階まで

取りに行けなかったのよ」

「実はおれの紙入の中にも、そうたくさん入ってる訳じゃないんだから、まあどっちにしたって大した変りはないんだがね」

彼は墓口の悪口ばかり云えた義理でもなかった。

お延は手早く包紙を解いて、中から紅茶の缶と、麵麩と牛酪を取り出した。

「おやおやこれ召しやるの。そんなら時を取りにおやりになればいいのに」

「なにあいつじゃ分らない。何を買って来るか知れやしない」
やがて好い香のするトーストと濃いけむりを立てるウーロン茶

とがお延の手で用意された。

朝飯あさめしとも午飯ひるめしとも片のつかない、極きわめて単純な西洋流の食事を済ました後で、津田は独ひとりごとのように云った。

「今日は病気の報知かたがた無沙汰見舞ぶさたみまいに、ちよつと朝の内藤井の叔父おじの所まで行つて来きようと思つてたのに、とうとう遅くなつちまつた」

彼の意味は仕方がないから午後にこの訪問の義務を果そうというのであつた。

藤井というのは津田の父の弟であつた。広島に三年長崎に二年という風に、方々移り歩かなければならない官吏生活を余儀なくされた彼の父は、教育上津田を連れて任地任地を巡礼のように経^へめぐる不便と不利益とに痛^{いた}く頭を悩ましたあげく、早くから彼をその弟に託して、いっさいの面倒を見て貰う事にした。だから津田は手もなくこの叔父に育て上げられたようなものであつた。したがって二人の関係は普通の叔父甥^{おい}の域^{いき}を通り越していた。性質や職業の差違を問題のほかに置いて評すると、彼らは叔父甥というよりもむしろ親子であつた。もし第二の親子という言葉が使えらるなら、それは最も適切にこの二人の間柄^{あいだがら}を説明するものであつ

た。

津田の父と違ってこの叔父はついで東京を離れた事がなかった。半生の間^{しじゆう}始終動き勝であつた父に比べると、単にこの点だけでもそこに非常な相違があつた。少なくとも非常な相違があるように津田の眼には映じた。

「^{かんまん}緩慢なる人世の旅行者」

叔父がかつて津田の父を評した言葉のうちにこういう文句があつた。それを何気なく小耳に^{はさ}挟んだ津田は、すぐ自分の父をそういう人だと思ひ込んでしまった。そうして^{こんにち}今日までその言葉を忘れなかった。しかし叔父の使つた文句の意味は、頭の発達しな

い当時よく解らなかつたと同じように、今になつても判然はつきりしなかつた。ただ彼は父の顔を見るたんびにそれを思い出した。肉の少ない細面ほそおもての腮あごの下に、売卜者うらないしや見たような疎髯そぜんを垂らしたその姿と、叔父のこの言葉とは、彼にとってほとんど同じものを意味していた。

彼の父は今から十年ばかり前に、突然へんろ遍路に倦うみ果てた人のように官界を退いた。そうして実業に従事し出した。彼は最後の八年を神戸で費ついやした後あと、その間に買つておいた京都の地面へ、新しい普請ふしんをして、二年前にとうとうそこへ引き移った。津田の知らない間まに、この閑静かんせいな古い都が、彼の父にとって隠栖いんせいの場所

と定められると共に、終焉しゆうえんの土地とも変化したのである。その時叔父は鼻の頭へ皺しわを寄せるようにして津田に云った。

「兄貴はそれでも少し金が溜たまったと見えるな。あの風船玉が、じつと落ちつけるようになったのは、全く金の重みのために違ない」

しかし金の重みのいつまで経たってもかからない彼自身は、最初から動かなかつた。彼は始終しじゆう東京にいて始終貧乏おぼえしていた。彼はいまだかつて月給というものを貰もらった覚おぼえのない男であつた。月給が嫌いというよりも、むしろくれ手がなかつたほどわがままだつたという方が適當かも知れなかつた。規則づくめな事に何でも反

対したがった彼は、年を取ってその考が少し変って来た後でも、やはり以前の強情を押し通していた。これは今さら自分の主義を改めたところで、ただ人に軽蔑けいべつされるだけで、いっこう得とくにはならないという事をよく承知しているからでもあつた。

実際の世の中に立つて、端的たんできな事実と組み打ちをして働らいた経験のないこの叔父は、一面において当然迂濶うかつな人生批評家でなければならぬと同時に、一面においてははなはだ鋭利な観察者であつた。そうしてその鋭利な点はことごとく彼の迂濶な所から生み出されていた。言葉を換かえていうと、彼は迂濶の御蔭おかげで奇警きけいな事を云つたり為したりした。

彼の知識は豊富な代りに雑駁ざつぱくであつた。したがって彼は多くの問題に口を出したがつた。けれどもいつまで行つても傍觀者の態度を離れる事ができなかった。それは彼の位地いちが彼を余儀なくするばかりでなく、彼の性質が彼をそこに抑おさえつけておくせいでもあつた。彼は或頭をもっていた。けれども彼には手がなかつた。もしくは手があつても、それを使おうとしなかつた。彼は始終懷ふし手てをしていたがつた。一種の勉強家であると共に一種の不精者ふしょうものに生れつゝいた彼は、ついに活字で飯を食わなければならぬ運命の所有者に過ぎなかつた。

こういう人にありがちな場末生活ばすえせいかつを、藤井は市の西北にしきたにあたる
 高台の片隅かたすみで、この六七年続けて来たのである。ついこの間まで
 郊外に等しかったその高台のここかしこに年々ねんねん建て増される大小
 の家が、年々彼の眼から蒼い色あおを奪って行くように感ぜられる
 時、彼は洋筆ペンを走らす手を止めてや、よく自分の兄の身の上を考え
 た。折々は兄から金でも借りて、自分も一つ住宅こしうちを拵えて見よう
 かしらという気を起した。その金を兄はとても貸してくれそうも
 なかった。自分もいざとなると貸して貰う性分ではなかった。

「緩慢^{かんまん}なる人生の旅行者」と兄を評した彼は、実を云うと、物質的に不安なる人生の旅行者であつた。そうして多数の人の場合において常に見出されるごとく、物質上の不安は、彼にとってある程度の精神的不安に過ぎなかつた。

津田^{つち}の宅からこの叔父の所へ行くには、半分道^{はんぶんみち}ほど川沿^{かわぞい}の電車を利用する便利があつた。けれどもみんな歩いたところで、一時間とかからない近距離なので、たまさかの散歩がてらには、かえってやかましい交通機関の援^{たすけ}に依らない方が、彼の勝手であつた。

一時少し前に宅^{うち}を出た津田は、ぶらぶら河縁^{かわべり}を伝^{つた}って終点の方

に近づいた。空は高かった。日の光が至る所に充ちていた。向うの高みを蔽おおっている深い木立こたちの色が、浮き出したように、くつきり見えた。

彼は道々今朝けさ買い忘れたりチネの事を思い出した。それを今日の午後四時頃に吞めと医者から命令された彼には、ちよつと薬種屋へ寄つてこの下剤を手に入れておく必要があつた。彼はいつもの通り終点を右へ折れて橋を渡らずに、それとは反対な賑にぎやかな町の方へ歩いて行こうとした。すると新らしく線路を延長する計画でもあると見えて、彼の通路に当る往来の一部分が、最も無遠慮な形式で筋違すじかいに切断されていた。彼は残酷に在来の家屋を搔かき

撈^{むし}つて、無理にそれを取り払ったような凸凹^{でこぼこ}だらけの新道路の角^{かど}に立^たつて、その片隅^{かたすみ}に塊^{かた}まっている一群^{いちぐん}の人々を見た。群集はまばらではあるが三列もしくは五列くらいの厚さで、真中にいる彼とほぼ同年輩ぐらいな男の周囲に半円形をかたちづくっていた。

小肥^{こぶと}りにふとったその男は双子木綿^{ふたこもめん}の羽織着物に角帯^{かくおび}を締^しめて俎^{まな}下駄^{ない}を穿^はいていたが、頭には笠^{かさ}も帽子も被^{かぶ}っていなかった。彼の後^{うしろ}に取り残された一本の柳を盾^{たて}に、彼は綿^{めん}フラネルの裏の付いた大きな袋を両手で持ちながら、見物人を見廻した。

「諸君僕がこの袋の中から玉子を出す。この空^{から}っぽうの袋の中からきつと出して見せる。驚ろいちゃいけない、種は懷中にあるん

だから」

彼はこの種の人間としてはむしろ不相応おうふうな言葉でこんな事を云った。それから片手を胸の所で握にぎって見せて、その握にぎった拳こぶしをまたぱつと袋の方へぶつけるように開いた。「そら玉子を袋の中へ投げ込んだぞ」と騙だまさなばかりに。しかし彼は騙だましたのではなかった。彼が手を袋の中へ入れた時は、もう玉子がちゃんとその中に入っていた。彼はそれを親指と人さし指の間に挟はさんで、一応半円形をかたちづくっている見物にとつくり眺めさせた後で地面の上に置いた。

津田は輕蔑けいべつに嘆賞を交えたような顔をして、ちよつと首を傾け

た。すると突然後うしろから彼の腰のあたりを突つつくもののあるのに
気がついた。軽い衝撃シヨックを受けた彼はほとんど反射作用のように後うしろ
をふり向いた。そうしてそこにさも悪戯いたずら小僧らしく笑いながら
立っている叔父の子を見出した。徽章きしょうの着いた制帽と、半洋袴はんズボン
と、背中にしょった背囊はいのうとが、その子の来た方角を彼に語るには
充分であつた。

「今学校の帰りか」

「うん」

子供は「はい」とも「ええ」とも云わなかった。

「お父さんはどうした」

「知らない」

「相変らずかね」

「どうだか知らない」

自分が十ぐら^{とお}いであつた時の心理状態をまるで忘れてしまった津田には、この返事が少し意外に思えた。苦笑した彼は、そこへ気がつくと共に黙つた。子供はまた一生懸命に手品遣^{てずまつか}いの方ばかり注意しだした。服装から云うと一夜作^{いちや}りとも見られるその男は

この時精一杯大きな声を張りあげた。

「諸君もう一つ出すから見ていたまえ」

彼は例の袋を片手でぐっと締^し扱^ごいて、再び何か投げ込む真^ま似^ねを小器用にした後、麗^あ々^{れいれい}と第二の玉子を袋の底から取り出した。それでも飽^あき足らないと見えて、今度は袋を裏返しにして、薄汚ない棉^{めん}フラネルの縞^{しま}柄^{がら}を遠慮なく群衆の前に示した。しかし第三の玉子は同じ手真似と共に安々と取り出された。最後に彼はあたかも貴重品でも取扱うような様子で、それを丁寧^{ていねい}に地面の上へ並べた。

「どうだ諸君こうやって出そうとすれば、何個^{いくつ}でも出せる。しか

しそう玉子ばかり出してもつまらないから、今度は一つ生きた鶏とりを出そう」

津田は叔父の子供をふり返った。

「おい真事まこともう行こう。小父おじさんはこれからお前の宅うちへ行くんだよ」

真事には津田よりも生きた鶏の方が大事であつた。

「小父さん先へ行つてさ。僕もつと見ているから」

「ありや嘘うそだよ。いつまで経つたつて生きた鶏なんか出て来やしないよ」

「どうして？ だって玉子はあるなに出たじゃないの」

「玉子は出たが、鶏は出ないんだよ。ああ云って嘘を吐いていつまでも人を散らさないようにするんだよ」

「そうしてどうするの」

そうしてどうするのかその後の事は津田にもちつとも解らなかった。面倒になった彼は、真事を置き去りにして先へ行こうとした。すると真事が彼の袂たもとを捉つかえた。

「小父さん何か買ってさ」

宅で強請ねだられるたんびに、この次この次といって逃げておきながら、その次行く時には、つい買ってやるのを忘れるのが常のようになつていた彼は、例の調子で「うん買ってやるさ」と云つ

た。

「じゃ自動車、ね」

「自動車は少し大き過ぎるな」

「なに小さいのさ。七円五十銭のさ」

七円五十銭でも津田にはたしかに大き過ぎた。彼は何にも云わずに歩き出した。

「だってこの前もその前も買ってやるっていったじゃないの。小父^じさんの方があの玉子を出す人よりよっぽど嘔吐^{うそつ}きじゃないか」

「あいつは玉子を出す^{とり}が鶏^となんか出せやしないんだよ」

「どうして」

「どうしてって、出せないよ」

「だから小父さんも自動車なんか買えないの」

「うん。——まあそうだ。だから何かほかのものを買ってやる
う」

「じゃキッドの靴さ」

毒気を抜かれた津田は、返事をする前にまた黙って一二間歩いた。彼は眼を落して真事まことの足を見た。さほど見苦しくもないその靴は、茶とも黒ともつかない一種変な色をしていた。

「赤かったのを宅うちでお父さんが染めたんだよ」

津田は笑いだした。藤井が子供の赤靴を黒く染めたという事柄ことごと

が、何だか彼にはおかしかった。学校の規則を知らないで拵こしえ
た赤靴を規則通りに黒くしたのだという説明を聞いた時、彼はま
た叔父の窮策きゆうさくを滑稽こっけい的に批判したくなった。そうしてその窮策か
ら出た現在のお手際てぎわを揶揄くすぐったような顔をしてじろじろ眺め
た。

二十三

「真事、そりゃ好い靴だよ、お前」

「だってこんな色の靴誰も穿はいていないんだもの」

「色はどうでもね、お父さんが自分で染めてくれた靴なんか滅多^{めった}に穿^はけやしないよ。ありがたいと思つて大事にして穿かなくつちやいけない」

「だつてみんなが彪犬^{むくいぬ}の皮だ彪犬の皮だつて擲揄^{からか}うんだもの」

藤井の叔父と彪犬の皮、この二つの言葉をつなげると、結果はまた新らしいおかしみになった。しかしそのおかしみは微^{かす}かな哀傷を誘つて、津田の胸を通り過ぎた。

「彪犬じゃないよ、小父さんが受け合つてやる。大丈夫彪犬じゃない立派な……」

津田は立派な何といつていいかちよつと行きつまつた。そこを

好い加減にしておく真事ではなかった。

「立派な何さ」

「立派な——靴さ」

津田はもし懷中が許すならば、真事まことのために、望み通りキツドの編上あみあげを買ってやりたい気がした。それが叔父に対する恩返しむなざんの一端になるようにも思われた。彼は胸算むなざんで自分の懷ふところにある紙入ふところの中を勘定かんじょうして見た。しかし今の彼にそれだけの都合をつける余裕はほとんどなかった。もし京都から為替かわせが届くならばとも考えたが、まだ届くか届かないか分らない前に、苦しい思いをして、それだけの実意を見せるにも及ぶまいという世間心せけんしんも起った。

「真事、そんなにキッドが買いたければね、今度宅へ来た時、小母さんに買って貰い。小父さんは貧乏だからもつと安いもので今日は負けといてくれ」

彼は賺すようにまた宥めるように真事の手を引いて広い往来をぶらぶら歩いた。終点に近いその通りは、電車へ乗り降りの必要上、無数の人の穿物で絶えず踏み堅められる結果として、四五年この方町並が生れ変ったように立派に整のつて来た。ところどころのショーウィンドーには、一概に場末ものとして馬鹿にできないような品が綺麗に飾り立てられていた。真事はその間を向う側へ馳け抜けて、朝鮮人の飴屋の前へ立つかと思うと、また此方側

へ戻つて来て、金魚屋の軒の下に佇立^{たたず}んだ。彼の馳け出す時には、^{ポケット}隠袋の中でビー玉の音が、きつとじゃらじゃらした。

「今日学校でこんなに勝っちゃった」

彼は隠袋の中へ手をぐつと挿^さし込んで掌^{てのひら}いっぱいにそのビー玉を載^のせて見せた。水色だの紫色だのの丸い硝子玉^{ガラス}が迸^{ほと}ばしるように往来の真中へ転がり出した時、彼は周章^{あわ}ててそれを追いかけた。そうして後^{うしろ}を振り向きながら津田に云った。

「小父さんも拾つてさ」

最後にこの目まぐるしい叔父の子のために一軒の玩具屋^{おもちゃや}へ引き摺^ずり込まれた津田は、とうとうそこで一円五十銭の空気銃を買つ

てやらなければならぬ事になった。

「雀^{すずめ}ならいいが、むやみに人を狙^{ねら}っちゃいけないよ」

「こんな安い鉄砲じゃ雀なんか取れないだろう」

「そりゃお前が下手だからさ。下手ならいくら鉄砲が好くったって取れないさ」

「じゃ小父さんこれで雀打ってくれる？　これから宅^{うち}へ行つて」

好い加減をいうとすぐ後^{あと}から実行を逼^{せま}られそうな様子なので、

津田は生返^{なまへんじ}事をしたなり話をほかへそらした。真事は戸田だの渋

谷だの坂口だのと、相手の知りもしない友達の名前を勝手に並べ

立てて、その友達を片端^{かたっぱし}から批評し始めた。

「あの岡本って奴^{やつ}、そりゃ狡猾^{ずる}いんだよ。靴を三足も買ってもらってるんだもの」

話はまた靴へ戻って来た。津田はお延と関係の深いその岡本の子と、今自分の前でその子を評している真事とを心^{うち}の中で比較した。

二十四

「御前^{おまい}近頃岡本の所へ遊びに行くかい」

「ううん、行かない」

「また喧嘩けんかしたな」

「ううん、喧嘩なんかしない」

「じゃなぜ行かないんだ」

「どうしてでも——」

真事まことの言葉には後あとがありそうだった。津田はそれが知りたかった。

「あすこへ行くといろんなものをくれるだろう」

「ううん、そんなにくれない」

「じゃ御馳走ごちそうするだろう」

「僕こないだ岡本の所でライスカレーを食べたら、そりゃ辛からかつ

たよ」

ライスカレーの辛いぐらいは、岡本へ行かない理由になりそうもなかった。

「それで行くのが厭いやになった訳でもあるまい」

「ううん。だってお父さんが止せって云うんだもの。僕岡本の所へ行ってブランコがしたいんだけども」

津田は小首を傾けた。叔父おじが子供を岡本へやりたがらない理由わけは何だろうと考えた。肌合はだあいの相違、家風の相違、生活の相違、それらのものがすぐ彼の心に浮かんた。始終机しじゅうに向って沈黙の間に活字的の気焰きえんを天下に散布している叔父は、実際の世間において

けっして筆ほどの有力者ではなかった。彼は暗あんにその距離を自覚していた。その自覚はまた彼を多少頑固かたくなにした。幾分か排外的にもした。金力権力本位の社会に出て、他ひとから馬鹿にされるのを恐れる彼の一面には、その金力権力のために、自己の本領を一分いちぶでも冒されては大変だという警戒の念が絶えずどこかに働いているらしく見えた。

「真事なぜお父さんに訊きいて見なかったのだい。岡本へ行っちゃなぜいけないんですって」

「僕き訊いたよ」

「訊いたらお父さんは何と云った。——何とも云わなかったろ

う」

「ううん、云った」

「何と云った」

真事は少し羞恥^{はにか}んでいた。しばらくしてから、彼はぽつりぽつり句切^{くぎり}を置くような重い口調^{くちよう}で答えた。

「あのね、岡本へ行くとね、何でも一^{はじめ}さんの持つてるものをね、宅^{うち}へ帰って来てからね、買ってくれ、買って欲しいから、それでいけないって」

津田はようやく気がついた。富の程度に多少等差のある二人の活計^{くらしむき}向は、彼らの子供が持つ玩具^{おもちゃ}の末に至るまでに、多少等差を

つけさせなければならなかったのである。

「それでこいつ自動車だのキッドの靴だのって、むやみに高いものばかり強請^{ねだる}んだな。みんな一^{はじめ}さんの持つてるのを見て来たんだろう」

津田は擲^{から}揶^かい半分手を挙^あげて真事の背中を打とうとした。真事は跋^{ぼつ}の悪い真相を曝^{ばく}露^ろされた大人^{おとな}に近い表情をした。けれども大人のように言訳がましい事はまるで云わなかった。

「嘘^{うそ}だよ。嘘^{うそ}だよ」

彼は先刻^{さつき}津田に買ってもらった一円五十銭の空気銃を担^{かつ}いだままどんだん自分の宅^{うち}の方へ逃げ出した。彼の隠^{かく}袋^しの中にあるビー

玉が数珠じゆずを劇はげしく揉もむように鳴った。背囊はいのうの中では弁当箱だか教科書だかが互にぶつかり合う音がごとりごとりと聞こえた。

彼は曲り角の黒板塀くろいたべいの所でちよつと立ちどまって鼯いたちのように津田をふり返ったまま、すぐ小さい姿を小路こうじのうちに隠した。津田がその小路を行き尽して突つきあたりにある藤井の門を潜くぐった時、突然ドンという銃声が彼の一間ばかり前で起った。彼は右手の生いけ垣がきの間から大事そうに彼を狙撃そげきしている真事の黒い姿を苦笑をもつて認めた。

座敷で誰かと話をしている叔父の声を聞いた津田は、格子の間から一足の客靴を覗いて見たなり、わざと玄関を開けずに、茶の間の縁側の方へ廻った。もと植木屋でもあったらしいその庭先には木戸の用心も竹垣の仕切もないので、同じ地面の中に近頃建て増された新らしい貸家の勝手口を廻ると、すぐ縁鼻まで歩いて行けた。目隠しにしては少し低過ぎる高い茶の樹を二三本通り越して、彼の記憶にいつまでも残っている柿の樹の下を潜った津田は、型のごとくそこに叔母の姿を見出した。障子の簾入硝子に映るその横顔が彼の眼に入った時、津田は外部から声を掛けた。

「叔母さん」

叔母はすぐ障子を開けた。

「今日はどうしたの」

彼女は子供が買って貰った空気銃の礼も云わずに、不思議そうな眼を津田の上に向けた。四十の上をもう三つか四つ越したこの叔母の態度には、ほとんど愛想あいそというものがなかった。その代り時と場合によると世間並せけんなみの遠慮を超越した自然が出た。そのうちにはほとんど性セックスの感じを離れた自然さえあった。津田はいつでもこの叔母と吉川の細君とを腹の中で比較した。そうしていつでもその相違に驚ろいた。同じ女、しかも年齢としのそう違わない二人の女が、どうしてこんなに違った感じを他ひとに与える事ができるかと

いうのが、第一の疑問であつた。

「叔母さんは相変らず色気がないな」

「この年齢になつて色気があつちや氣狂だわ」

津田は縁側^{えんがわ}へ腰をかけた。叔母は上れ^{あが}とも云わないで、膝^{ひざ}の上に載^のせた紅絹^{もみ}の片^{きれ}へ軽い火熨斗^{ひのし}を当てていた。すると次の間からほどき物を持って出て来たお金^{きん}さんという女が津田にお辞儀^{じぎ}をしたので、彼はすぐ言葉をかけた。

「お金さん、まだお嫁の口はきまりませんか。まだなら一つ好いところを周旋しましょうか」

お金さんはえへへと人の好さそうに笑いながら少し顔を赤らめ

て、彼のために座蒲団ざぶとんを縁側えんがわへ持って来きようとした。津田はそれを手で制して、自分から座敷の中に上り込んだ。

「ねえ叔母さん」

「ええ」

気のなさそうな生返事なまへんじをした叔母は、お金さんが生温なまぬるい番茶を形式的に津田の前へ注ついで出した時、ちよつと首をあげた。

「お金さん由雄よしおさんによく頼たのんでおおきなさいよ。この男は親切で嘘うそを吐つかない人だから」

お金さんはまだ逃げ出さずにもじもじしていた。津田は何とか云わなければすまなくなつた。

「お世辞せじじゃありません、本当の事です」

叔母は別に取り合う様子もなかった。その時裏で真事の打つ空
気銃の音がぽんぽんしたので叔母はすぐ聴耳ききみみを立てた。

「お金さん、ちよつと見て来て下さい。バラ丸だまを入れて打つと危あぶ
険ないから」

叔母は余計なものを買ってくれたと云わんばかりの顔をした。

「大丈夫ですよ。よく云い聞かしてあるんだから」

「いえいけません。きつとあれで面白半分にお隣りの鶏とりを打つに
違ちがないから。構たまわないから丸だけ取り上げて来て下さい」

お金さんはそれを好い機しおに茶の間から姿をかくした。叔母は

黙って火鉢ひばちに挿さし込んだ鰻こてをまた取り上げた。皺しわだらけな薄い絹が、彼女の膝の上で、綺麗きれいに平たく延びて行くのを何気なく眺めながていた津田の耳に、客間の話し声が途切れ途切れに聞こえて来た。

「時に誰です、お客は」

叔母は驚ろいたようにまた顔を上げた。

「今まで気がつかなかったの。妙ねあなたの耳もずいぶん。ここで聞いてたってよく解るじゃありませんか」

津田は客間にいる声の主を、坐^{すわ}ったまま突き留めようと力^{つと}めて見た。やがて彼は軽く膝を拍^うった。

「ああ解った。小林でしょう」

「ええ」

叔母は嫣然^{にこり}ともせず、簡単な答を落ちついて与えた。

「何だ小林か。新らしい赤靴なんか穿^はき込んで厭^{いや}にお客さんぶつてるもんだから誰かと思つたら。そんなら僕も遠慮しずにあつちへ行けばよかった」

想像の眼で見るにはあまりに陳腐^{ちんぷ}過ぎる彼の姿が津田の頭の中に出て来た。この夏会った時の彼の異^いな服装^{なふり}もおのずと思い出さ

れた。白縮緬しろちりめんの襟えりのかかった襦袢じゆばんの上へ薩摩緋さつまがすりを着て、茶の千筋せんすじの袴はかまに透綾すきやの羽織はかまをはおったその拵こしらへえは、まるで傘屋かさやの主人あるじが町内の葬式の供に立った帰りがけで、強飯こわめしの折ふところでも懐ふところに入れているとしか受け取れなかった。その時彼は泥棒に洋服を盗まれたという言訳を津田にした。それから金を七円ほど貸してくれと頼んだ。これはある友達が彼の盗難に同情して、もし自分の質に入れたある夏服を受け出す余裕が彼にあるならば、それを彼にやってもいいと云ったからであつた。

津田は微笑しながら叔母に訊きいた。

「あいつまた何だって今日に限って座敷なんかへ通って、堂々と

お客ぶりを發揮しているんだろう」

「少し叔父さんに話があるのよ。それがここじゃちよつと云い悪にくい事なんでね」

「へえ、小林にもそんな真面目まじめな話があるのかな。金の事が、それでなければ……」

こう云いかけた津田は、ふと真面目な叔母の顔を見ると共に、後あとを引っ込ましてしまった。叔母は少し声を低くした。その声はむしろ彼女の落ちついた調子に釣り合っていた。

「お金きんさんの縁談の事もあるんだからね。ここであんまり何かいうと、あの子がきまりを悪くするからね」

いつもの高調子と違って、茶の間で聞いているとちよつと誰だか分らないくらいな紳士風の声を、小林が出しているのは全くそれがためであつた。

「もうきまつたんですか」

「まあ旨く行きそうなのさ」

叔母の眼には多少の期待が輝やいた。少し乾燥ぎ気味になつた津田はすぐ付け加えた。

「じゃ僕が骨を折って周旋しなくつても、もういいんだな」

叔母は黙つて津田を眺めた。たとい軽薄とまで行かないでも、こういう巫山戯た空虚うな彼の態度は、今の叔母の生活気分とま

るでかけ離れたものらしく見えた。

「由雄さん、お前さん自分で奥さんを貰う時、やっぱりそんな料^{しやう}簡^{けん}で貰ったの」

叔母の質問は突然であると共に、どういう意味でかけられたのかさえ津田には見当^{けんとう}がつかなかった。

「そんな料簡^{りやうけん}って、叔母さんだけ承知しているぎりで、当人の僕にや分らないんだから、ちよつと返事のしようがないがな」

「何も返事を聞かなくなっただって、叔母さんは困りやしないけれどもね。——女一人を片づける方^{ほう}の身になって御覧なさい。たいていの事じゃないから」

藤井は四年前^{ぜん}長女を片づける時、仕度^{したく}をしてやる余裕がないのですでに相当の借金をした。その借金がようやく片づいたと思うと、今度はもう次女を嫁にやらなければならなくなった。だからここでもしお金さんの縁談が纏^{まと}まるとすれば、それは正に三人目の出費^{ものいり}に違なかつた。娘とは格が違うからという意味で、できるだけ儉約したところで、現在の生計向^{くらしむき}に多少苦しい負担の暗影を投げる事はたしかであつた。

こういう時に、せめて費用の半分でも、津田が進んで受け持つ事ができたなら、年頃彼の世話をしてきた藤井夫婦にとっては何れも満足な報酬であつたろう。けれども今のところ財力の上で叔父叔母に捧げ得る彼の同情は、高々真事の穿きたがっているキツドの靴を買ってやるくらいなものであつた。それさえ彼は懐都合で見合せなければならなかつたのである。まして京都から多少の融通を仰いで、彼らの経済に幾分の潤沢をつけてやろうなどという親切気はてんで起らなかつた。これは自分が事情を報告したところで動く父でもなし、父が動いたところで借りる叔父でもない頭からきめてかかっているせいでもあつた。それで彼はただ自

分の所へさえ早く為替かわせが届いてくれればいいという期待に縛しばられて、叔母の言葉にはあまり感激した様子も見せなかった。すると叔母が「由雄よしおさん」と云い出した。

「由雄さん、じゃどんな料簡で奥さんを貰もらったの、お前さんは」「まさか冗談じょうたんに貰もらやしません。いくら僕だってそう浮ふついたところばかりから出来上ってるように解釈されちゃ可哀相かわいそうだ」

「そりや無論本気でしようよ。無論本気には違なからうけれどもね、その本気にもまたいろいろ段等だんとうがあるもんだからね」

相手次第では侮辱とも受け取られるこの叔母の言葉を、津田はかえって好奇心で聞いた。

「じゃ叔母さんの眼に僕はどう見えるんです。遠慮なく云つて下さいな」

叔母は下を向いて、ほどこ物をいじくりながら薄笑いをした。それが津田の顔を見ないせいだか何だか、急に気味の悪い心持を彼に与えた。しかし彼は叔母に対して少しも退避^{たじろ}ぐ気はなかった。

「これでもいざとなると、なかなか真面目^{まじめ}なところもありますからね」

「そりゃ男だもの、どこかちゃんとしたところがなくっちゃ、毎日会社へ出たって、勤まりっこありやしないからね。けども――

」

こう云いかけた叔母は、そこで急に気を換えたようにつけ足した。

「まあ止よみましょう。今さら云ったって始まらない事だから」

叔母は先刻さつき火熨斗ひのしをかけた紅絹もみの片きれを鄭寧ていねいに重ねて、濃い渋しぶを引いた畳紙たたしの中へしまい出した。それから何となく拍子ひょうしめ抜けのした、しかもどこかに物足らなそうな不安の影を宿している津田の顔を見て、ふと気がついたような調子で云った。

「由雄さんはいったい贅ぜい沢たく過ぎるよ」

学校を卒業してから以来の津田は叔母に始終しじゆうこう云われつけて

いた。自分でもまたそう信じて疑わなかった。そうしてそれを大した悪い事のようにも考えていなかった。

「ええ少し贅沢です」

「服装^{なり}や食物ばかりじゃないのよ。心が派出^{はで}で贅沢に出来上ってるんだから困るっていうのよ。始終御馳走^{ごちそう}はないかないかって、きよろきよろそこいらを見廻してる人みたように」

「じゃ贅沢どころかまるで乞食^{こじき}じゃありませんか」

「乞食じゃないけれども、自然真面目^{まじめ}さが足りない人のように見えるのよ。人間は好い加減なところで落ちつくと、大変見つとも好いもんだがね」

この時津田の胸を掠^{かす}めて、自分の従妹^{いとこ}に当る叔母の娘の影が突然通り過ぎた。その娘は二人とも既婚の人であつた。四年前に片づいた長女は、その後夫^{のち}に従つて台湾に渡つたぎり、今でもそこに暮^くしていた。彼の結婚と前後して、ついこの間嫁に行つた次女は、式が済むとすぐ連れられて福岡へ立つてしまつた。その福岡は長男の真弓^{まゆみ}が今年から籍を置いた大学の所在地でもあつた。

この二人の従妹^{いとこ}のどっちも、貰おうとすれば容易^{たやす}く貰える地位にあつた津田の眼から見ると、けっして自分の細君として適當の候補者ではなかつた。だから彼は知らん顔をして過ぎた。当時彼の取つた態度を、叔母の今の言葉と結びつけて考えた津田は、別

にこれぞと云つて疾^やましい点も見出し得なかつたので、何気ない風をして叔母の動作を見守っていた。その叔母はついと立って戸棚の中にある支^し那^な鞆^{かばん}の蓋^{ふた}を開けて、手に持った畳紙をその中にしまった。

二十八

奥の四畳半で先^さ刻^{つき}からお金^{きん}さんに学課の復習をして貰^{もら}っていた真^ま事^{こと}が、突然お金さんにはまるで解らない仏蘭西語^{フランス語}の読本^{さくぽん}を浚^{さら}い始めた。ジュ・シュイ・ポリ、とか、チュ・エ・マラード、と

か、一字一字の間にわざと長い句切くぎりを置いて読み上げる小学二年生の頓狂とんきやうな声を、例いつもながらおかしく聞いている津田の頭の上で、今度は柱時計がボンボンと鳴った。彼はすぐ袂たもとに入れてあるリチネを取り出して、飲みにくそうに、どろどろした油の色を眺めた。すると、客間でも時計の音に促うながされたような叔父の声がした。

「じゃあっちへ行こう」

叔父と小林は縁伝いに茶の間へ入って来た。津田はちよつと居い住居すまいを直して叔父に挨拶あいさつをしたあとで、すぐ小林の方を向いた。

「小林君だいぶ景気が好いようだね。立派な服を拵こしらえたじゃない

か」

小林はホームスパンみたようなざらざらした地合じあいの背広せびろを着ていた。いつもと違ってその洋袴ズボンの折目がまだ少しも崩くずれていないので、誰の眼にも仕立卸したておろしとしか見えなかった。彼は変り色の靴下を後うしろへ隠すようにして、津田の前に坐すわり込んだ。

「へへ、冗談じょうだん云っちゃいけない。景気の好いのは君の事だ」

彼の新調はどこかのデパートメント・ストアの窓硝子まどガラスの中に飾みつてある三つ揃ぞろいに括くくりつけてあつた正札を見つけて、その価段ねだん通りのものを彼が注文して拵そろえたのであつた。

「これで君二十六円だから、ずいぶん安いものだろう。君見たい

な贅^{ぜい}沢^{たく}やから見たらどうか知らないが、僕なんぞにやこれでたくさんだからね」

津田は叔母の手前重ねて悪口^{わるくち}を云う勇氣もなかった。黙って茶^{ちや}碗^{わん}を借り受けて、八の字を寄せながらリチネを飲んだ。そこにいるものがみんな不思議そうに彼の所作^{しよさ}を眺めた。

「何だいそれは。変なものを飲むな。薬かい」

今日^{こんにち}まで病気という病気をした例^{ためし}のない叔父の医薬に対する無知はまた特別のものであった。彼はリチネという名前を聞いてすら、それが何のために服用されるのか知らなかった。あらゆる疾^{しつ}

病^{へい}とほとんど没交渉なこの叔父の前に、津田が手術だの入院だのという言葉を使つて、自分の現在を説明した時に、叔父は少しも感動しなかった。

「それでその報知にわざわざやつて来た訳かね」

叔父は御苦労さまと云わぬばかりの顔をして、胡麻^{ごましお}塩だらけの髯^{ひげ}を撫^なでた。生やしていると云うよりもむしろ生えていると云つた方が適当なその髯は、植木屋を入れない庭のように、彼の顔のところどころ爺^じ々^じむさく見せた。

「いったい今の若いものは、から駄目だね。下らん病氣ばかりして」

叔母は津田の顔を見てにやりと笑った。近頃急に「今の若いものは」という言葉を、癖のように使い出した叔父の歴史を心得ている津田も笑い返した。よほど以前この叔父から惑病わくびょうは同源どうげんだの疾患は罪惡だのと、さも偉そうに云い聞かされた事を憶おもい出すと、それが病氣に罹かからない自分の自慢とも受け取れるので、なおのこと滑稽こっけいに感ぜられた。彼は薄笑いと共にまた小林の方を見た。小林はすぐ口を出した。けれども津田の予期とは全くの反対を云った。

「何今の若いものだって病氣をしないものもあります。現に私わたくしなんか近頃ちつとも寝た事がありません。私考えるに、人間は金が

無いと病氣にや罹^からないもんだろうと思います」

津田は馬鹿馬鹿しくなった。

「つまらない事をいうなよ」

「いえ全くだよ。現に君なんかがよく病氣をするのは、するだけの余裕があるからだよ」

この不^ふ論^{ろん}理^りな断案は、云い手が真^ま面^じ目^めなだけに、津田をなお失笑させた。すると今度は叔父が賛成した。

「そうだよこの上病氣にでも罹った日にやどうにもこうにもやり切れないからね」

薄暗^{へや}くなった室の中で、叔父の顔が一番薄暗く見えた。津田は

立って電灯のスイッチを^{ねじ}振った。

二十九

いつの間にか勝手口へ出て、お金さんと下女を相手に皿^{さら}小鉢^{こぼち}の音を立てていた叔母がまた茶の間へ顔を出した。

「由雄さん久しぶりだから御飯を食べておいで」

津田は明日^{あした}の治療を控えているので断って帰ろうとした。

「今日は小林といっしょに飯を食うはずになっているところへお前が来たのだから、ことによると御馳走^{ごちそう}が足りないかも知れない

が、まあつき合って行くさ」

叔父にこんな事を云われつけない津田は、妙な心持がして、また尻を据えた。

「今日は何事があるんですか」

「何ね、小林が今度——」

叔父はそれだけ云って、ちよつと小林の方を見た。小林は少し得意そうににやにやしていた。

「小林君どうかしたのか」

「何、君、なんでもないんだ。いずれきまったら君の宅へ行つて詳しい話をするがね」

「しかし僕は明日^{あした}から入院するんだぜ」

「なに構わない、病院へ行くよ。見舞かたがた」

小林は追いかけて、その病院のある所だの、医者^{いしや}の名だのを、さも自分に必要な知識らしく訊^きいた。医者^{いしや}の名が自分と同じ小林なので「はあそれじゃあの堀^{ほり}さんの」と云ったが急に黙ってしまった。堀^{ほり}というのは津田の妹婿^{めいご}の姓であつた。彼がある特殊な病氣のために、つい近所にいるその医者のもとへ通^{かよ}つたのを小林はよく知っていたのである。

彼の詳^{くわ}しい話^わというのを津田はちよつと聞いて見たい気がした。それは先刻^{さつき}叔母^{おば}の云ったお金さんの結婚問題らしくもあつ

た。またそうでないらしくも見えた。この思わせぶりな小林の態度から、多少の好奇心を唆^{そそ}られた津田は、それでも彼に病院へ遊びに来いとは明言しなかった。

津田が手術の準備だと云って、せっかく叔母の拵^{こしら}えてくれた肉にも肴^{さかな}にも、日頃大好な茸飯^{たけめし}にも手をつけないので、さすがの叔母も気の毒がつて、お金さんに頼んで、彼の口にする事のできる麵^{パン}麩と牛乳を買って来させようとした。ねとねとしてむやみに齒の間に挟^{はさ}まるここいらの麵麩に内心辟易^{へきえき}しながら、また贅^{ぜい}沢^{たく}だと云われるのが少し怖^{こわ}いので、津田はただおとなしく茶の間を立つお金さんの後姿^{うしろすがた}を見送った。

お金さんの出て行った後で、叔母はみんなの前で叔父に云った。

「どうかまああの子も今度の縁が纏まるようになると仕合せですがね」

「纏まるだろうよ」

叔父は苦のなさそうな返事をした。

「至極よさそうに思います」

小林の挨拶も気軽かった。黙っているのは津田と真事だけであった。

相手の名を聞いた時、津田はその男に一二度叔父の家で会った

ような心持もしたが、ほとんど何らの記憶も残っていなかった。

「お金さんはその人を知ってるんですか」

「顔は知ってるよ。口は利きいた事がないけれども」

「じゃ向うも口を利いた事なんかないんでしょう」

「当り前さ」

「それでよく結婚が成立するもんだな」

津田はこういつて然しかるべき理窟りくつが充分自分の方にあると考えた。それをみんなに見せるために、彼は馬鹿馬鹿しいというよりもむしろ不思議であるという顔つきをした。

「じゃどうすれば好いんだ。誰でもみんなお前が結婚した時のよ

うにしくつちやいけないというのかね」

叔父は少し機嫌きげんを損じたらしい語気で津田の方を向いた。津田はむしろ叔母に対するつもりでいたので、少し気の毒になった。

「そういう訳じゃないんです。そういう事情のもとにお金さんの結婚が成立しちや不都合だなんていう気は全くなかったのです。たといどんな事情だろうと結婚が成立さえすれば、無論結構なんですから」

それでも座は白^{しろ}けてしまった。今まで心持よく流れていた談話が、急に堰^せき止められたように、誰も津田の言葉を受け継^ついで、順々に後^{あと}へ送^{おく}ってくれるものがなくなった。

小林は自分の前にある麦酒^{ビール}の洋盃^{コップ}を指^さして、ないしよのような小さい声で、隣りにいる真事^{まこと}に訊^きいた。

「真事^{まこと}さん、お酒を上げましょうか。少し飲んで御覧なさい」
「苦^{にが}いから僕^{いや}厭^だだよ」

真事はすぐ跳^はねつけた。始めから飲ませる気のなかった小林は、それを機^{しお}にははと笑った。好い相手ができたと思ったのか真事は突然小林に云った。

「僕一円五十銭の空気銃をもってるよ。持って来て見せようか」
すぐ立って奥の四畳半へ馳^かけ込んだ彼が、そこから新らしい玩^{おも}具^{ちや}を茶の間へ持ち出した時、小林は行きがかり上、ぴかぴかする空気銃の嘆賞者とならなければすまなかった。叔父も叔母も嬉^{うれ}しがっているわが子のために、一言^{いちごん}の愛嬌^{あいきよう}を義務的に添える必要があつた。

「どうも時計を買えの、万年筆を買えのって、貧乏な阿爺^{おやじ}を責めて困る。それでも近頃馬だけはどうかこうか諦^{あきら}められたようだから、まだ始末が好い」

「馬も存外安いもんですな。北海道へ行きますと、一頭五六円で

立派なのが手に入ります」

「見て来たような事を云うな」

空気銃の御蔭^{おかげ}で、みんながまた満遍^{まんべん}なく口を利^きくようになった。結婚が再び彼らの話頭^{のぼ}に上った。それは途切^{とぎ}れた前の続きに相違^{ちが}なかった。けれどもそれを口にする人々は、少しずつ前と異^{ちが}った気分によつて、彼らの表現を支配されていた。

「こればかりは妙なものでね。全く見ず知らずのものが、いっしょになったところで、きつと不縁^{ふえん}になるとも限らないしね、またいくらこの人ならばと思ひ込んでできた夫婦でも、末始^{すえしじゆう}終和合するとは限らないんだから」

叔母の見て来た世の中を正直に纏めるところなるよりほかに仕方なかった。この大きな事実の一隅にお金さんの結婚を安全にこうとする彼女の態度は、弁護的というよりもむしろ説明的であつた。そうしてその説明は津田から見ると最も不完全でまた最も不安全であつた。結婚について津田の誠実を疑うような口ぶりを見せた叔母こそ、この点にかけて根本的な真面目さを欠いているとしか彼には思えなかつた。

「そりや楽な身分の人の云い草ですよ」と叔母は開き直つて津田に云つた。「やれ交際だの、やれ婚約だのって、そんな贅沢な事を、我々風情が云つてられますか。貰つてくれ手、来てくれ手が

あれば、それでありがたいと思わなくっちゃならないくらいのも
のです」

津田はみんなの手前今のお金さんの場合についてかれこれ云い
たくなかった。それをいうほどの深い関係もなくまた興味もない
彼は、ただ叔母が自分に対してもつ、不真面目ふまじめという疑念を塗り
潰つぶすために、向うの不真面目さを啓発しておかなくてはいけない
という心持に制せられるので、黙ってしまふ訳に行かなかった。
彼は首を捻ひねって考え込む様子をしながら云った。

「何もお金さんの場合をとにかく批評する気はないんだが、いつ
たい結婚を、そう容易たやすく考えて構わないものか知ら。僕には何だ

か不真面目なような気がしていけないがな」

「だって行く方で真面目に行く気になり、貰う方でも真面目に貰う気になれば、どこと云って不真面目なところが出て来^きようはずがないじゃないか。由雄さん」

「そういう風に手つとり早く真面目になれるかが問題でしょう」

「なればこそ叔母さんなんぞはこの藤井家へお嫁に来て、ちゃんとこうしているじゃありませんか」

「そりゃ叔母さんはそうでしょうが、今の若いものは……」

「今だって昔だって人間に変わりがあるものかね。みんな自分の決心一つです」

「そう云った日にやまるで議論にならない」

「議論にならなくっても、事実の上で、あたしの方が由雄さんに勝ってるんだから仕方がない。いろいろ選^えり好^{この}みをしたあげく、お嫁さんを貰った後でも、まだ選り好みをして落ちつかずにいる人よりも、こっちの方がどのくらい真面目だか解りやしない」

先刻^{さつき}から肉を突ツついていた叔父は、自分の口を出さなければならぬ時機に到着した人のように、皿から眼を放した。

「だいぶやかましくなつて来たね。黙つて聞いていると、叔母甥おばおいの対話とは思えないよ」

二人の間にこう云つて割り込んで来た叔父はその実行司じつでも審判官でもなかった。

「何だか双方敵愾てきがいしん心をもつて云い合つてるようだが、喧嘩けんかでもしたのかい」

彼の質問は、単に質問の形式を具えた注意に過ぎなかった。真まこ事を相手にビー珠だまを転がしていた小林が偷ぬすむようにしてこつちを見た。叔母も津田も一度に黙つてしまった。叔父はついに調停者の態度で口を開かなければならなくなつた。

「由雄、御前見たような今の若いものには、ちよつと理解出来悪^{にく}いかも知れないがね、叔母さんは嘘^{うそ}を吐^ついてるんじゃないよ。知りもしないおれの所へ来るとき、もうちゃんと覚悟をきめていたんだからね。叔母さんは本当に来ない前から来た後^{あと}と同じように真面目だったのさ」

「そりゃ僕だって伺わないでも承知しています」

「ところがさ、その叔母さんがだね。どういう訳でそんな大決心をしたかというのだね」

そろそろ酔の廻った叔父は、火熱^{ほて}った顔へ水分を供給する義務を感じた人のように、また洋盃^{コップ}を取り上げて麦酒^{ビール}をぐいと飲ん

だ。

「実を云うとその訳を今日^{きょう}までまだ誰にも話した事がないんだが、どうだ一つ話して聞かせようか」

「ええ」

津田も半分は真面目であつた。

「実はだね。この叔母さんはこれでこのおれに意^いがあつたんだ。つまり初めからおれの所へ来たかつたんだね。だからまだ来ないうちから、もう猛烈に自分の覚悟をきめてしまつたんだ。――」

「馬鹿な事をおっしやい。誰があなたのような醜男^{ぶおとこ}に意^いなんぞあるもんですか」

津田も小林も吹き出した。独^{ひと}りきよとした真事は叔母の方を向いた。

「お母さん意があるって何」

「お母さんは知らないからお父さんに伺って御覧」

「じゃお父さん、何さ、意があるってのは」

叔父はにやにやしながら、禿^はげた頭の真中を大事そうに撫^なで廻した。気のせいかなその禿が普通の時よりは少し赤いように、津田の眼に映った。

「真事、意があるってえのはね。——つまりそのね。——まあ、好きなのさ」

「ふん。じゃ好いじゃないか」

「だから誰も悪いと云ってやしない」

「だって皆みんなな笑うじゃないか」

この問答の途中へお金きんさんがちょうど帰って来たので、叔母はすぐ真事の床を敷かして、彼を寝間ねまの方へ追いやった。興に乗った叔父の話はますます発展するばかりであつた。

「そりや昔むかしだって恋愛事件はあつたよ。いくらお朝あさが怖こわい顔をしたってあつたに違ないが、だね。そこにまた今の若いものにはとうてい解らない方面もあるんだから、妙だろう。昔は女の方で男に惚ほれたけれども、男の方ではけっして女に惚れなかったもん

だ。——ねえお朝そうだったろう」

「どうだか存じませんよ」

叔母は真事の立った後へ坐あとって、さっさと松茸飯まつたけめしを手盛てもりにして食べ始めた。

「そう怒ったって仕方がない。そこに事実があると同時に、一種の哲学があるんだから。今おれがその哲学を講釈してやる」

「もうそんなむずかしいものは、伺わなくってもたくさんです」

「じゃ若いものだけに教えてやる。由雄も小林も参考のためによく聴いとくがいい。いったいお前達ひとは他の娘を何だと思う」

「女だと思ってます」

津田は交ぜ返し半分わざと返事をした。

「そうだろう。ただ女だと思っただけで、娘とは思わないんだろう。それがおれ達とは大違いだて。おれ達は父母ふぼから独立したただの女として他人の娘を眺めた事がいまだかつてない。だからどこのお嬢さんを拝見しても、そのお嬢さんには、父母という所有者がちゃんと食つついてるんだと始めから観念している。だからいくら惚ほれたくつても惚れられなくなる義理じゃないか。なぜと云って御覧、惚れるとか愛し合うとかいうのは、つまり相手をこっちが所有してしまうという意味だろう。すでに所有権のついてるものに手を出すのは泥棒じゃないか。そういう訳で義理堅い

昔の男はけっして惚れなかったね。もっとも女はたしかに惚れたよ。現にそこで松茸飯を食ってるお朝なぞも実はおれに惚れたのさ。しかしおれの方じゃかつて彼女を愛した覚がない」

「どうでもいいから、もう好い加減にして御飯になさい」

真事を寝かしつけに行ったお金さん呼び返した叔母は、彼女にいいつけて、みんなの茶碗に飯をよそわせた。津田は仕方なしに、ひとり下味まぜい食しょく麵めん麩ふをにちやにちや噛かんだ。

食後の話はもうはずまなかった。と云って、別にしんみりした方面へ落ちて行くでもなかった。人々の興味を共通に支配する題目の柱が折れた時のように、彼らはてんでんばらばらに口を聞いた後で、誰もそれを会話の中心に纏めようと努力するものがないのに気が付いた。

餉台ちやうだいの上に両肱りようひじを突いた叔父が酔後すいごの欠あくびを続けざまに二つした。叔母が下女を呼んで残物ざんぶつを勝手へ運ばした。先刻さっきから重苦しい空気の影響を少しずつ感じていた津田の胸に、今夜聞いた叔父の言葉が、月の面おもてを過ぎる浮雲のように、時々薄い陰を投げた。そのたびに他人から見ると、麦酒ビールの泡と共に消えてしまふべきは

ずの言葉を、津田はかえって意味ありげに自分で追いかけて見たり、また自分で追い戻して見たりした。そこに気のついた時、彼は我ながら不愉快になった。

同時に彼は自分と叔母との間に取り換わされた言葉の投げ合も思い出さずにはいられなかった。その投げ合の間、彼は始終自分を抑えつけて、なるべく心の色を外へ出さないようにしていた。そこに彼の誇りがあると共に、そこに一種の不快も潜^{ひそ}んでいたことは、彼の気分が彼に教える事実であつた。

半日以上の暇を潰^{つぶ}したこの久しぶりの訪問を、単にこういう快不快の立場から眺めた津田は、すぐその対照として活潑^{かっぱつ}な吉川夫

人とその綺麗きれいな応接間とを記憶の舞台に躍おどらした。つづいて近頃
ようやく丸髻まるまげに結い出したお延のぶの顔が眼の前に動いた。

彼は座を立とうとして小林を顧かえりみた。

「君はまだいるかね」

「いや。僕ももう御暇おいとましよう」

小林はすぐ吸い残した敷島しきしまの袋を洋袴ズボンの隠袋かくしへねじ込んだ。す
ると彼らの立ち際たちぎわに、叔父が偶然らしくまた口を開いた。

「お延はどうしたい。行こう行こうと思ひながら、つい貧乏暇な
しだもんだから、御無沙汰ごぶさたをしている。宜よろしく云ってくれ。お前
の留守ひまにや閑ひまで困るだろうね、彼の女おんなも。いったい何をして暮し

てるかね」

「何って別にする事もないでしょうよ」

こう散漫に答えた津田は、何と思ったか急に後あとからつけ足した。

「病院へいっしょに入りたいなんて気楽な事をいうかと思うと、やれ髪を刈れの湯に行けのって、叔母さんよりもよっぽどやかましい事を云いますよ」

「感心じゃないか。お前のようなお洒落しゃれにそんな注意をしてくれるものはほかにありやしないよ」

「ありがたい仕合せだな」

「芝居^{しばや}はどうだい。近頃行くかい」

「ええ時々行きます。この間も岡本から誘われたんだけど、あいにくこの病気の方の片をつけなけりやならないんでね」

津田はそこでちよつと叔母の方を見た。

「どうです、叔母さん、近い内帝劇へでも御案内しましょうか。たまにゃああいう所へ行つて見るのも薬ですよ、気がはれられしてね」

「ええありがとう。だけど由雄さんの御案内じゃ――」

「お厭ですか」

「厭より、いつの事だか分らないからね」

芝居場^{しばいば}などを余り好まない叔母のこの返事を、わざと正面に受けた津田は頭を掻^かいて見せた。

「そう信用がなくなった日にゃ僕もそれまでだ」
叔母はふふんと笑った。

「芝居はどうでもいいが、由雄さん京都の方はどうして、それから」

「京都から何とか云って来ましたかこっちへ」

津田は少し真剣な表情をして、叔父と叔母の顔を見比べた。けれども二人は何とも答えなかった。

「実は僕の所へ今月は金を送れないから、そっちでどうでもし

ろって、お父さんが云って来たんだが、ずいぶん乱暴じゃありませんか」

叔父は笑うだけであつた。

「兄貴あにきは怒ってるんだらう」

「いったいお秀ひでがまた余計な事を云ってやるからいけない」

津田は少し忌々いまいましそうに妹の名前を口にした。

「お秀に咎とがはありません。始めから由雄さんの方が悪いにきまつてるんだもの」

「そりゃそうかも知れないけれども、どこの国にあなた阿爺おやじから送って貰った金を、きちんきちん返す奴やつがあるもんですか」

「じゃ最初からきちんきちん返すって約束なんかしなければいいのに。それに……」

「もう解りましたよ、叔母さん」

津田はとても敵^{かな}わないという心持をその様子に見せて立ち上がった。しかし敗北の結果急いで退却する自分に景気を添えるため、促^{うな}がすように小林を引張って、いっしょに表へ出る事を忘れなかった。

戸外^{そと}には風もなかった。静かな空気が足早に歩く二人の頬^{ほお}に冷たく触れた。星の高く輝やく空から、眼に見えない透明な露^{つゆ}がしとしと降りているらしくも思われた。津田は自分で外套^{がいとう}の肩を撫^なでた。その外套の裏側に滲^しみ込んでくるひんやりした感じを、はつきり指先で味わって見た彼は小林を顧^{かえり}みた。

「日中^{にっちゅう}は暖^{あつた}かだが、夜になるとやっぱり寒いね」

「うん。何と云ってももう秋だからな。実際外套が欲しいくらいだ」

小林は新調の三^みつ揃^{ぞろい}の上に何にも着ていなかった。ことさらに爪先^{つまさき}を厚く四角に拵^{こしら}えたいかつい亜米利加^{アメリカ}型の靴^{がた}をごとごと鳴ら

して、太い洋杖ステッキをわざとらしくふり廻す彼の態度は、まるで冷たい空気に抵抗する示威運動者に異ことならなかった。

「君学校にいた時分作ったあの自慢の外套はどうした」

彼は突然意外な質問を津田にかけた。津田は彼にその外套を見せびらかした当時を思い出さない訳に行かなかった。

「うん、まだあるよ」

「まだ着ているのか」

「いくら僕が貧乏だって、書生時代の外套を、そう大事そうにいつまで着ているものかね」

「そうか、それじゃちょうど好い。あれを僕にくれ」

「欲しければやっても好い」

津田はむしろ冷やかに答えた。靴足袋くつたびまで新らしくしている男が、他の着古ひとした外套を貰いたがるのは少し矛盾であつた。少くとも、その人の生活に横よこたわる、不規則な物質的の凸凹たかびくを証拠しょうこ立てていた。しばらくしてから、津田は小林に訊きいた。

「なぜその背広せびろといっしょに外套も持えなかつたんだ」

「君おんと同おんなじように僕を考えちゃ困るよ」

「じゃどうしてその背広だの靴だのができたんだ」

「訊き方が少し手酷てきびし過ぎるね。なんぼ僕だつてまだ泥棒はしないから安心してくれ」

津田はすぐ口を閉じた。

二人は大きな坂の上に出た。広い谷を隔てて向に見える小高い岡が、怪獣の背のように黒く長く横わっていた。秋の夜の灯火がところどころに点々と少量の暖かみを滴らした。

「おい、帰りにどこかで一杯やろうじゃないか」

津田は返事をする前に、まず小林の様子を窺った。彼らの右手には高い土手があつて、その土手の上には蓊鬱した竹藪が一面に生い被さっていた。風がないので竹は鳴らなかつたけれども、眠ったように見えるその笹の葉の梢は、季節相応な蕭索の感じを津田に与えるに充分であつた。

「ここはいやに陰気な所だね。どこかの大名華族の裏に当るんで、いつまでもこうして放ほうつてあるんだろう。早く切り開いちまえばいいのに」

津田はこういつて当面の挨拶あいさつをごまかそうとした。しかし小林の眼に竹藪なぞはまるで入らなかった。

「おい行こうじゃないか、久しぶりで」

「今飲んだばかりなのに、もう飲みたくなったのか」

「今飲んだばかりって、あれっばかり飲んだんじゃ飲んだ部へ入らないからね」

「でも君はもう充分ですって断っていたじゃないか」

「先生や奥さんの前じゃ遠慮があつて酔えないから、仕方なしにああ云つたんだね。まるつきり飲まないんならともかくも、あのくらい飲ませられるのはかえつて毒だよ。後から適當の程度まで酔つておいて止めないと身体に障るからね」

自分に都合の好い理窟を勝手に拵らえて、何でも津田を引張ろうとする小林は、彼にとって少し迷惑な伴侶であつた。彼は冷かし半分に訊いた。

「君が奢るのか」

「うん奢つても好い」

「そうしてどこへ行くつもりなんだ」

「どこでも構わない。おでん屋でもいいじゃないか」
二人は黙って坂の下まで降りた。

三十四

順路からいうと、津田はそこを右へ折れ、小林は真直まっすぐに行かなければならなかった。しかし体ていよく分れようとして帽子へ手をかけた津田の顔を、小林は覗のぞき込むように見て云った。

「僕もそっちへ行くよ」

彼らの行く方角には飲み食いに都合のいい町が二三町続いてい

た。その中程にある酒場バーめいた店の硝子戸ガラスどが、暖かそうに内側から照らされているのを見つけた時、小林はすぐ立ちどまった。

「ここが好い。ここへ入ろう」

「僕は厭だよ」

「君の気に入りそうな上等の宅うちはここいらにないんだから、ここで我慢しようじゃないか」

「僕は病氣だよ」

「構わん、病氣の方は僕が受け合ってやるから、心配するな」

「冗談じょうだん云うな。厭いやだよ」

「細君には僕が弁解してやるからいいだろう」

面倒になった津田は、小林をそこへ置き去りにしたまま、さつ
さへ行こうとした。すると彼とすれすれに歩を移して来た小林
が、少し改まった口調くちようで追究ついきゆうした。

「そんなに厭か、僕といっしよに酒を飲むのは」

実際そんなに厭であつた津田は、この言葉を聞くとすぐとまつ
た。そうして自分の傾向とはまるで反対な決断を外部そとへ現わし
た。

「じゃ飲む」

二人はすぐ明るい硝子戸ガラスどを引いて中へ入った。客は彼らのほかに
五六人いたぎりであつたが、店があまり広くないので、比較的

込み合っているように見えた。割合樂に席の取れそうな片隅かたすみを択えらんで、差し向いに腰をおろした二人は、通した注文の来る間、多少物珍らしそうな眼を周囲あたりへ向けた。

服装から見た彼らの相客中あいきやくちゅうに、社会的地位のありそうなものは一人もなかった。湯歸りと見えて、縞しまの半纏はんてんの肩へ濡ぬれ手拭てぬぐいを掛けたのだの、木綿物もめんものに角帯かくおびを締め、わざとらしく平打ひらうちの羽織ひもの紐ひもの真中へ擬物まがいものの翡翠ひすいを通したのだのはむしろ上等の部であった。ずっとひどいのは、まるで紙屑買としか見えなかった。腹掛はらがけ股引ももひきも一人交まじっていた。

「どうだ平民的でいいじゃないか」

小林は津田の猪口^{ちよく}へ酒を注ぎ^つながらこう云った。その言葉を打ち消すような新調したての派出^{はで}な彼の背広^{せびろ}が、すぐことさらしく津田の眼に映ったが、彼自身はまるでそこに気がついていないらしかった。

「僕は君と違ってどうしても下等社界の方に同情があるんだからな」

小林はあたかもそこに自分の兄弟分でも揃^{そろ}っているような顔をして、一同を見廻した。

「見たまえ。彼らはみんな上流社会より好人相をしているから」

挨拶あいさつをする勇氣のなかつた津田は、一同を見廻す代りに、か

えつて小林を熟視した。小林はすぐ讓歩した。

「少くとも陶然とうぜんとしているだろう」

「上流社会だつて陶然とするからな」

「だが陶然としかたが違ふよ」

津田は昂然こうぜんとして両者の差違を訊きかなかつた。それでも小林は少しも悄氣しよげずに、ぐいぐい杯さかずきを重ねた。

「君はこういう人間を輕蔑けいべつしているね。同情に価あたいしないものとして、始めから見くびっているんだ」

こういうや否や、彼は津田の返事も待たずに、向うにいる牛乳

配達見たような若ものに声をかけた。

「ねえ君。そうだろう」

出し抜けに呼びかけられた若者は倔強くつきやうな頸筋くびすじを曲げてちよつとこつちを見た。すると小林はすぐ杯さかづきをそつちの方へ出した。

「まあ君一杯飲みたまえ」

若者はにやにやと笑った。不幸にして彼と小林との間には一間ほどの距離があつた。立つて杯を受けるほどの必要を感じなかつた彼は、微笑するだけで動かなかつた。しかしそれでも小林には満足らしかった。出した杯を引込めながら、自分の口へ持つて行つた時、彼はまた津田に云つた。

「そらあの通りだ。上流社会のように高慢ちきな人間は一人もいやしない」

三十五

インヴァネスを着た小作りな男が、半纏はんてんの角刈かくがりと入れ違ちがいに這は入いって来て、二人から少し隔へだたった所に席を取った。廂ひさしを深くおろした鳥打とりうちを被かぶったまま、彼は一応ぐるりと四方あたりを見廻みまわした後あとで、懷ふところへ手を入れた。そうしてそこから取り出した薄い小型の帳面を開けて、読むのだから考えるのだから、じっと見つめていた。彼は

つまで経^たつても、古ぼけたトンビを脱^だごうとしなかった。帽子も頭へ載せたままであつた。しかし帳面はそんなに長くひろげていなかった。大事そうにそれを懷^かへしまうと、今度は飲みながら、じろりじろりと他の客^{ほか}を、見ないようにして見始めた。その相間^{あいま}には、ちんちくりんな外套^{がいとう}の羽根の下から手を出して、薄い鼻の下^なの髭^{ひげ}を撫^なでた。

先刻^{さつき}から気をつけるともなしにこの様子に気をつけていた二人は、自分達の視線が彼の視線に行き合つた時、ぴたりと真向^{まむき}になつて互に顔を見合せた。小林は心持前へ乗り出した。

「何だか知^しつてゐるか」

津田は元の通りの姿勢を崩さくずなかった。ほとんど返事あたに価たいしないという口調で答えた。

「何だか知るもんか」

小林はなお声を低くした。

「あいつは探偵たんていだぜ」

津田は答えなかった。相手より酒量の強い彼は、かえって相手ほど平生を失わなかった。黙って自分の前まへにある猪口ちよくを干した。

小林はすぐそれへなみなみと注ついだ。

「あの眼つきを見ろ」

薄笑はくせういをした津田はようやく口を開ひらいた。

「君見たいにむやみに上流社会の悪口をいうと、さっそく社会主義者と間違えられるぞ。少し用心しろ」

「社会主義者？」

小林はわざと大きな声を出して、ことさらにインヴァネスの男の方を見た。

「笑わかせやがるな。こっちや、こう見えたって、善良なる細民の同情者だ。僕に比べると、乙に上品ぶって取り繕^{つく}ろってる君達の方がよっぽどの悪者だ。どっちが警察へ引っ張られて然^{しか}るべきだかよく考えて見ろ」

鳥打の男が黙って下を向いているので、小林は津田に喰^くってか

かるよりほかに仕方がなかった。

「君はこうした土方や人足をてんから人間扱いにしないつもりかも知れないが」

小林はまたこう云いかけて、そこいらを見廻したが、あいにくどこにも土方や人足はいなかった。それでも彼はいつこう構わずにしゃべりつづけた。

「彼らは君や探偵よりいくら人間らしい崇高な生地きじをうぶのままもってるか解らないぜ。ただその人間らしい美しさが、貧苦きくという塵埃ほこりで汚よごれているだけなんだ。つまり湯に入れないから穢きたないんだ。馬鹿にするな」

小林の語気は、貧民の弁護というよりもむしろ自家じかの弁護らしく聞こえた。しかしむやみに取り合ってこっちの体面を傷きずけられては困るという用心が頭に働くので、津田はわざと議論を避けていた。すると小林がなお追おっかけて来た。

「君は黙ってるが僕のいう事を信じないね。たしかに信じない顔つきをしている。そんなら僕が説明してやろう。君は露西亞ロシアの小説を読んだろう」

露西亞の小説を一冊も読んだ事のない津田はやはり何とも云わなかった。

「露西亞の小説、ことにドストエフスキの小説を読んだものは必

ず知ってるはずだ。いかに人間が下賤げせんであろうとも、またいかに無教育であろうとも、時としてその人の口から、涙がこぼれるほどありがたい、そうして少しも取り繕つくろわない、至純至精の感情が、泉のように流れ出して来る事を誰でも知ってるはずだ。君はあれを虚偽と思うか」

「僕はドストエヴスキを読んだ事がないから知らないよ」

「先生に訊きくと、先生はありや嘘うそだと云うんだ。あんな高尚な情操をわざと下劣な器うつわに盛って、感傷的に読者を刺戟しげきする策略に過ぎない、つまりドストエヴスキがあたったために、多くの模倣者が続出して、むやみに安っぽくしてしまった一種の芸術的技巧に

過ぎないというんだ。しかし僕はそうは思わない。先生からそんな事を聞くと腹が立つ。先生にドストエフスキは解らない。いくら年齢としを取ったって、先生は書物の上で年齢を取っただけだ。いくら若かろうが僕は……」

小林の言葉はだんだん逼せまって来た。しまいには彼は感慨に堪たえんという顔をして、涙をぽたぽたテーブルクロス卓布の上に落した。

三十六

不幸にして津田の心臓には、相手に釣り込まれるほどの酔が

廻っていなかった。同化の埒外らちがいからこの興奮状態を眺める彼の眼はついに批判的であった。彼は小林を泣かせるものが酒であるか、叔父であるかを疑った。ドストエフスキであるか、日本の下層社会であるかを疑った。そのどっちにしたところで、自分とあまり交渉のない事もよく心得ていた。彼はつまらなかった。また不安であった。感激家によって彼の前にふり落された涙の痕あとを、ただ迷惑そうに眺めた。

探偵たんていとして物色ぶつしやくされた男は、懐ふところからまた薄い手帳を出して、その中へ鉛筆で何かしきりに書きつけ始めた。猫のように物静かでありながら、猫のようにすべてを注意しているらしい彼の挙動

が、津田を変な気持ちにした。けれども小林の酔は、もうそんなところを通り越していた。探偵などはまるで眼中になかった。彼は新調の背広せびろの腕をいきなり津田の鼻の先へ持つて来た。

「君は僕が汚ない服装なをすると、汚ないと云つて軽蔑けいべつするだろう。またたまに綺麗きれいな着物を着ると、今度は綺麗だと云つて軽蔑するだろう。じゃ僕はどうすればいいんだ。どうすれば君から尊敬されるんだ。後生ごしやうだから教えてくれ。僕はこれでも君から尊敬されたいんだ」

津田は苦笑しながら彼の腕を突き返した。不思議にもその腕には抵抗力がなかった。最初の勢が急にどこかへ抜けたように、お

となしく元の方角へ戻って行つた。けれども彼の口は彼の腕ほど素直ではなかった。手を引込ました彼はすぐ口を開いた。

「僕は君の腹の中をちゃんと知ってる。君は僕がこれほど下層社会に同情しながら、自分自身貧乏な癖に、新らしい洋服なんか拵えたので、それを矛盾だと云って笑う氣だろう」

「いくら貧乏だって、洋服の一着ぐらい拵えるのは当り前だよ。拵えなけりや赤裸はだかで往来を歩かなければなるまい。拵えたって結構じゃないか。誰も何とも思つてやしないよ」

「ところがそうでない。君は僕をただめかすんだと思つてる。お洒落しゃれだと解釈している。それが悪い」

「そうか。そりや悪かった」

もうやりきれないと観念した津田は、とうとう降参の便利を悟ったので、好い加減に調子を合せ出した。すると小林の調子も自然と変って来た。

「いや僕も悪い。悪かった。僕にも洒落気しやれけはあるよ。そりや僕も充分認める。認めるには認めるが、僕がなぜ今度この洋服を作ったか、その訳を君は知るまい」

そんな特別の理由を津田は固もとより知ろうはずがなかった。また知りたくもなかった。けれども行きがかり上訊きいてやらない訳にも行かなかった。両手を左右へひろげた小林は、自分で自分の服な

装を見廻しながら、むしろ心細そうに答えた。

「実はこの着物で近々都落をやるんだよ。朝鮮へ落ちるんだよ」

津田は始めて意外な顔をして相手を見た。ついでに先刻から苦
になつていた襟飾の横つちよに曲つているのを注意して直させた
後で、また彼の話を聴きつづけた。

長い間叔父の雑誌の編輯をしたり、校正をしたり、その間には
自分の原稿を書いて、金をくれそうな所へ方々持つて廻つたりし
て、始終忙がしそうに見えた彼は、とうとう東京にいたたまれな
くなつた結果、朝鮮へ渡つて、そこの或新聞社へ雇われる事に、
はば相談がきまつたのであつた。

「こう苦しくっちゃ、いくら東京に辛防^{しんぼう}していったって、仕方がないからね。未来のない所に住んでるのは実際厭^{いや}だよ」

その未来が朝鮮へ行けば、あらゆる準備をして自分を待っていいような事をいう彼は、すぐまた前言を取り消すような口も利^きいた。

「要するに僕なんぞは、生涯^{しょうがいのうらう}漂浪して歩く運命をもって生れて来た人間かも知れないよ。どうしても落ちつけないんだもの。たとい自分が落ちつく気でも、世間が落ちつかせてくれないから残酷だよ。駈落者^{かけおちもの}になるよりほかに仕方がないじゃないか」

「落ちつけないのは君ばかりじゃない。僕だってちっとも落ちつ

いていられやしない」

「もったいない事をいうな。君の落ちつけないのは贅沢だからさ。僕のは死ぬまで麵麩を追かけて歩かなければならないんだから苦しいんだ」

「しかし落ちつけないのは、現代人の一般の特色だからね。苦しめるのは君ばかりじゃないよ」

小林は津田の言葉から何らの慰藉を受ける気色もなかった。

先刻さつきから二人の様子を眺めていた下女が、いきなり来て、わざとらしく食卓テーブルの上を片づけ始めた。それを相図のように、インヴァネスを着た男がすうと立ち上った。疾とうに酒をやめて、ただ話ばかりしていた二人も澄ましている訳に行かなかった。津田は機会を捉とらえてすぐ腰を上げた。小林は椅子を離れる前に、まず彼らの間に置かれたM・C・C・の箱を取った。そうしてその中からまた新らしい金口きんぐちを一本出してそれに火を点つけた。行きがけの駄賃だちんらしいこの所作しよさが、煙草たばこの箱を受け取って袂たもとへ入れる津田の眼を、皮肉に擦くすぐったくした。

時刻はそれほどでなかったけれども、秋の夜よの往来は意外に更ふ

けやすかった。昼は耳につかない一種の音を立てて電車が遠くの方を走っていた。別々の気分に働らきかけられている二人の黒い影が、まだ離れずに河の縁ふちをつたって動いて行つた。

「朝鮮へはいつ頃行くんだね」

「ことによると君の病院へ入はいつているうちかも知れない」

「そんなに急に立つのか」

「いやそうとも限らない。もう一遍先生が向うの主筆に会つてくれてからでないと、判然はつきりした事は分らないんだ」

「立つ日がかい、あるいは行く事がかい」

「うん、まあ——」

彼の返事は少し曖昧であつた。津田がそれを追究もしないで、さつさと行き出した時、彼はまた云い直した。

「実を云うと、僕は行きたくもないんだがなあ」

「藤井の叔父が是非行けとでも云うのかい」

「なにそうでもないんだ」

「じゃ止したらいいじゃないか」

津田の言葉は誰にでも解り切つた理窟なだけに、同情に飢えていそうな相手の気分を残酷に射貫いたと一般であつた。数歩の後、小林は突然津田の方を向いた。

「津田君、僕は淋しいよ」

津田は返事をしなかった。二人はまた黙って歩いた。浅い河床^{かわどこ}の真中を、少しばかり流れている水が、ぼんやり見える橋杭^{はしぐい}の下で黒く消えて行く時、幽^{かす}かに音を立てて、電車の通る相間^{あいま}相間に、ちよろちよると鳴った。

「僕はやっぱり行くよ。どうしても行った方がいいんだからね」
「じゃ行くさ」

「うん、行くとも。こんな所にいて、みんなに馬鹿にされるより、朝鮮か台湾に行った方がよっぽど増しだ」

彼の語気は癪走^{かんぱし}っていた。津田は急に穏やかな調子を使う必要を感じた。

「あんまりそう悲観しちゃいけないよ。年齒としさえ若くって身体からださえ丈夫なら、どこへ行ったって立派に成効せいこうできるじゃないか。――君が立つ前一つ送別会を開こう、君を愉快にするために」
今度は小林の方がいい返事をしなかった。津田は重ねて跋ばつを合せる態度に出た。

「君が行ったらお金きんさんの結婚する時困るだろう」
小林は今まで頭のなかになかった妹の事を、はっと思い出した人のように津田を見た。

「うん、あいつも可哀相かわいそうだけれども仕方がない。つまりこんなやぐざな兄貴あにきをもったのが不仕合せだと思って、諦あきららめて貰もらうん

だ」

「君がいなくったって、叔父や叔母がどうかしてくれるんだろう」

「まあそんな事になるよりほかに仕方がないからな。でなければこの結婚を断って、いつまでも下女代りに、先生の宅うちで使って貰うんだが、——そいつはまあどっちにしたって同じようなもんだろう。それより僕はまだ先生に気の毒な事があるんだ。もし行くとなると、先生から旅費を借りなければならぬからね」

「向うじゃくれないのか」

「くれそうもないな」

「どうにかして出させたら好いだろう」

「さあ」

一分ばかりの沈黙を破った時、彼はまた独り言ひとごとのように云った。

「旅費は先生から借りる、外套がいとうは君から貰う、たった一人の妹は置いてき堀ほりにする、世話はないや」

これがその晩小林の口から出た最後の台詞せりふであった。二人はついに分れた。津田は後あとをも見ずにさっさと宅の方へ急いだ。

彼の門は例いつもの通り締しまっていた。彼は潜くぐり戸どへ手をかけた。ところが今夜はその潜り戸もまた開あけなかつた。立てつけの悪いせいかと思つて、二三度やり直したあげく、力任せに戸を引いた時、ごとりという重苦かきがねしい※の抵抗力を裏側に聞いた彼はようやく断念した。

彼はこの予想外の出来事に首を傾けて、しばらく戸の前に佇立たたずんだ。新らしい世帯を持つてから今日こんにちに至るまで、一度も外泊した覚おぼえのない彼は、たまに夜遅く帰る事があつても、まだこうした経験には出会あひなかつたのである。

今日きょうの彼は灯点ひともし頃から早く宅へ歸りたがっていた。叔父の家

で名ばかりの晩飯を食ったのも仕方なしに食ったのであった。進みもしない酒を少し飲んだのも小林に対する義理に過ぎなかった。夕方以後の彼は、むしろお延のぶの面影おもかげを心におきながら外で暮していた。その薄ら寒い外から帰って来た彼は、ちょうど暖かい家庭の灯火ともしびを慕って、それを目標めあてに足を運んだのと一般であった。彼の身体からだが土塀どべいに行き当った馬のようにとまると共に、彼の期待も急に門前で喰いとめられなければならなかった。そうしてそれを喰いとめたものがお延であるか、偶然であるかは、今の彼にとってけっして小さな問題でなかった。

彼は手を挙あげて開あかない潜くぐり戸どをとんとんと二つ敲たたいた。「こ

こを開けろ」というよりも「ここをなぜ締めた」といって詰問する
ような音が、更^ふけ渡^{わた}りつつある往来の暗がりに響いた。すると
内側ですぐ「はい」という返事がした。ほとんど反響に等しいく
らい早く彼の鼓膜を打ったその声の主は、^{ぬし}下女でなくてお延で
あった。急に静まり返った彼は戸の此方側^{こちらがわ}で耳を澄ました。用の
ある時だけ使う事にしてある玄関先の電灯のスイッチを振^{ひね}る音
が明らかに聞こえた。格子^{こうし}がすぐがらりと開いた。入口の開き戸
がまだ閉^たててない事はたしかであつた。

「どなた？」

潜りのすぐ向う側まで来た足音が止^とまると、お延はまずこう

云つて誰^{すいか}何した。彼はなおの事^せ急ぎ込んだ。

「早く開けろ、おれだ」

お延は「あらッ」と叫んだ。

「あなただったの。御免^{ごめん}遊^{あそ}ばせ」

ごとごと云わして※^{かきがね}を外^{はず}した後で夫を内へ入れた彼女はいつも

より少し蒼^{あお}い顔をしていた。彼はすぐ玄関から茶の間へ通り抜け

た。

茶の間はいつもの通りきちんと片づいていた。鉄瓶^{てつびん}が約束通り

鳴っていた。長火鉢^{ながひばち}の前には、例によって厚いメリンスの座蒲団^{ざぶとん}

が、彼の帰りを待ち受けるごとくに敷かれてあった。お延の坐り

つけたその向^{むこう}には、彼女の座蒲団のほかに、女持の硯箱^{すずりばこ}が出してあつた。青貝で梅の花を散らした螺鈿^{らでん}の蓋^{ふた}は傍^{わき}へ取り除^とけられて、梨地^{なしじ}の中に簞^はめ込^こんだ小さな硯^いがつやつやと濡^ぬれていた。持主が急いで座を立つた証^{しょうこ}拠^こに、細い筆の穂先が、巻紙の上へ墨を滲^{にじ}ませて、七八寸書きかけた手紙の末を汚^{けが}していた。

戸締^{とじま}りをして夫^{あと}の後から入ってきたお延は寝巻^{ねまき}の上へ平生着^{ふだんぎ}の羽織を引っかけたままそこへべたりと坐つた。

「どうもすみません」

津田は眼を上げて柱時計を見た。時計は今十一時を打つたばかりのところであつた。結婚後彼がこのくらいな刻限に帰つたの

は、例外にしたところで、けっして始めてではなかった。

「何だって締め出しなんか喰わせたんだい。もう帰らないとでも思ったのか」

「いいえ、さつきから、もうお帰りか、もうお帰りかと思って待ってたの。しまいにあんまり淋さむしくってたまらなくなっただから、とうとう宅うちへ手紙を書き出したの」

お延の両親は津田の父母と同じように京都にいた。津田は遠くからその書きかけの手紙を眺めた。けれどもまだ納得なっとくができなかった。

「待ってたものがなんで門なんか締めるんだ。物騒ぶっそうだからかね」

「いいえ。――あたし門なんか締めやしないわ」

「だって現げんに締まっていたじゃないか」

「時ときが昨夕ゆうべ締めっ放しにしたまんまなのよ、きっと。いやな人」

こう云ったお延はいつもする癖の通り、ぴくぴく彼女の眉まゆを動かして見せた。日中用のない潜くぐり戸どの※かきがねを、朝外はすし忘れたという弁解は、けっして不合理なものではなかった。

「時はどうしたい」

「もう先刻さつき寝かしてやったわ」

下女を起してまで責任者を調べる必要を認めなかった津田は、潜くぐり戸どの事をそのままにして寝た。

三十九

あくる朝の津田は、顔も洗わない先から、昨夜寝るまで全く予想していなかった不意の観物みものによつて驚ろかされた。

彼の床を離れたのは九時頃であつた。彼はいつもの通り玄関を抜けて茶の間から勝手へ出ようとした。すると嬋娟あでやかに盛粧せいそうしたお延が澄ましてそこに坐っていた。津田ははつと思つた。寝起ねおきの顔へ水をかけられたような夫の様子に満足したらしい彼女は微笑を洩もらした。

「今御眼覚おめざめ？」

津田は眼をばちつかせて、赤い手絡てがらをかけた大丸髻おおまるまげと、派出はでな刺繡ぬいをした半襟はんえりの模様と、それからその真中にある化粧けしょうご後の白い顔とを、さも珍らしい物でも見るような新らしい眼つきで眺めた。

「いったいどうしたんだい。朝っぱらから」

お延は平気なものであった。

「どうもしないわ。——だって今日はあなたが医者様へいらつしやる日じゃないの」

昨夜遅くそこへ脱ぎ捨てて寝たはずの彼の袴はかまも羽織も、畳んだなり、ちゃんと取り揃そろえて、渋紙しぶかみの上へ載のせてあった。

「お前もいっしょに行くつもりだったのかい」

「ええ無論行くつもりだわ。行っちゃ御迷惑なの」

「迷惑って訳はないがね。――」

津田はまた改めて細君の服装なりを吟味ぎんみするように見た。

「あんまりおつくりが大袈裟おおげさだからね」

彼はすぐ心の中うちでこの間見た薄暗い控室の光景を思い出した。

そこに坐っている患者の一群ひとむれとこの着飾った若い奥様とは、とても調和すべき性質のものでなかった。

「だってあなたは日曜よ」

「日曜だって、芝居やお花見に行くのとは少し違うよ」

「だって妾……」
あたし

津田に云わせれば、日曜はなおの事患者が朝から込み合うだけであつた。

「どうもそういうでこな服装なりをして、あのお医者様へ夫婦お揃いそろで乗り込むのは、少し——」

「辟易？」
へきえき

お延の漢語が突然津田を撥くすぐつた。彼は笑い出した。ちよつと眉を動かしたお延はすぐ甘垂あまつたれるような口調を使った。

「だってこれから着物なんか着換えるのは時間がかかって大変なんですもの。せつかく着ちまつたんだから、今日はこれで堪忍かんにんし

てちようだいよ、ね」

津田はとうとう敗北した。顔を洗っているとき、彼は下女に俤くるまを二台云いつけるお延の声を、あたかも自分が急せき立たてられでもするように世話せわしなく聞いた。

普通の食事を取らない彼の朝飯あさめしはほとんど五分とかからなかった。楊枝ようじも使わないで立ち上あった彼はすぐ二階へ行いこうとした。

「病院へ持もって行くものを纏まとめなくっちゃ」

津田の言葉と共に、お延はすぐ自分の後うしろにある戸棚とだなを開けた。

「ここに拵こしらえてあるからちよつと見てちようだい」

よそ行着ゆきぎを着た細君いたわを労いたらなければならなかった津田は、やや
重い手提鞆てさげかばんと小さな風呂敷包ふろしきづつみを、自分の手で戸棚とだなから引き摺ひずり出
した。包の中には試しに袖そでを通してばかりの例の襦袍どてらと平紵ひらぐけの寝ね巻まき紐ひもが這入はいっているだけであつたが、鞆かばんの中からは、楊枝ようしだの歯は
磨粉みがきだの、使いつけたラヴェンダー色の書翰用紙しょかんようしだの、同じ色の
封筒だの、万年筆だの、小さい鋏はさみだの、毛抜だのが雑然と現われ
た。そのうちで一番重くて嵩張かさばった大きな洋書を取り出した時、
彼はお延に云つた。

「これは置いて行くよ」

「そう、でもいつでも机の上に乗っていて、枝折しおりが挟はさんであるか

ら、お読みになるのかと思って入れといたのよ」

津田君は何にも云わずに、二カ月以上もかかってまだ読み切れない経済学の独逸書ドイツしょを重そうに畳の上に置いた。

「寝ていて読むにや重くって駄目だよ」

こう云った津田は、それがこの大部たいぶの書物を残して行く正当の理由であると知りながら、あまり好い心持がしなかった。

「そう、本はどれが要いるんだか妾分らないから、あなた自分でお好きなのを択よってちょうだい」

津田は二階から軽い小説を二三冊持って来て、経済書の代りに鞆の中へ詰め込んだ。

四十

天氣が好いので幌ほろを畳たたました二人は、鞆かばんと風呂敷包を、各自めいめいの俤くろまの上に一つずつ乗せて家を出た。小路こうじの角を曲つて電車通りを一二丁行くと、お延の車夫が突然津田の車夫に声をかけた。俤は前後ともすぐとまった。

「大變。忘れものがあるの」

車上でふり返つた津田は、何にも云わずに細君の顔を見守つた。念入ねんいりに身仕舞みじまいをした若い女の口から出る刺戟しげき性に富んだ言葉のために引きつけられたものは夫ばかりではなかった。車夫も梶かじ

棒^{ぼう}を握ったまま、等しくお延^{のぶ}の方へ好奇の視線を向けた。傍^{そば}を通る往来の人さえ一瞥^{いちべつ}の注意を夫婦の上へ与えないではいられなかった。

「何だい。何を忘れたんだい」

お延は思案するらしい様子をした。

「ちよつと待っててちょうだい。すぐだから」

彼女は自分の俤^{ちゆう}だけを元へ返した。中ぶらりんの心的状態でそこに取り残された津田は、黙ってその後姿を見送った。いったん小路の中に隠れた俤^{はげ}がやがてまた現われると、劇^{はげ}しい速力でまた彼の待っている所まで馳^かけて来た。それが彼の眼の前でとまった

時、車上のお延は帯の間から一尺ばかりの鉄製の鎖くさりを出して長くぶら下げて見せた。その鎖の端はじには環わがあつて、環の中には大小五六個の鍵かぎが通してあるので、鎖を高く示そうとしたお延の所作しよさと共に、じゃらじゃらという音が津田の耳に響いた。

「これ忘れたの。箆たんすの上に置きつ放しにしたまま」

夫婦以外に下女しかいない彼らの家庭では、二人揃そろつて外出する時の用心に、大事なものに錠じょうを卸おろしておいて、どっちかが鍵だけ持って出る必要があつた。

「お前預かつておいで」

じゃらじゃらするものを再び帯の間に押し込んだお延は、平手ひらて

でぽんとその上を敲たたきながら、津田を見て微笑した。

「大丈夫」

俤は再び走かけ出した。

彼らの医者に着いたのは予定の時刻より少し後おくれていた。しかし午ひるまでの診察時間に間に合わないほどでもなかった。夫婦して控室に並んで坐るのが苦になるので、津田は玄関を上ると、すぐ薬局の口へ行った。

「すぐ二階へ行ってもいいでしょうね」

薬局にいた書生は奥から見習いの看護婦を呼んでくれた。まだ十六七にしかならないその看護婦は、何の造ぞう作さもなく笑いながら

津田にお辞儀じぎをしたが、傍に立っているお延の姿を見ると、少し物々しさに打たれた気味で、いったいこの孔雀くじゃくはどこから入って来たのだろうという顔つきをした。お延が先せんを越して、「御厄介ごやっかいになります」とこっちから挨拶あいさつをしたので、始めて気がついたように、看護婦も頭を下げた。

「君、こいつを一つ持ってくれたまえ」

津田は車夫から受取った鞆かばんを看護婦に渡して、二階の上り口あがぐちの方へ廻った。

「お延こっちだ」

控室の入口に立って、患者のいる部屋の中を覗のぞき込んでいたお

延は、すぐ津田の後に随ついて階子段はしごだんを上あった。

「大変陰気へやな室ね、あすこは」

南東みなみひがしの開あいた二階は幸さいわいに明るかった。障子しょうじを開けて縁側えんがわへ出た

彼女は、つい鼻の先にある西洋洗濯屋の物干ものほしを見ながら、津田を顧かえりみた。

「下と違ってここは陽気ね。そうしてちよつといいお部屋ね。畳は汚よごれているけれども」

もと請負師うけおいしか何かの妾宅しやうたくに手を入れて出来上ったその医院の二階には、どことなく粹いきな昔の面影おもかげが残っていた。

「古いけれども宅うちの二階よりましかも知れないね」

日に照らされてきらきらする白い洗濯物の色を、秋らしい気分で眺めていた津田は、こう云って、時代のために多少燻ぶった天井の床柱だのを見廻した。

四十一

そこへ先刻の看護婦が急須へ茶を淹れて持って来た。

「今仕度をしておりますから、少しの間どうぞ」

二人は仕方なしに行儀よく差向いに坐ったなり茶を飲んだ。

「何だか気がそわそわして落ちつかないのね」

「まるでお客さまに行ったようだろう」

「ええ」

お延は帯の間から女持の時計を出して見た。津田は時間の事よりもこれから受ける手術の方が気になった。

「いったい何分ぐらいで済むのかなあ。眼で見ないでもあの刃物^{はもの}の音だけ聞いていると、好い加減変な心持になるからな」

「あたし怖^{こわ}いわ、そんなものを見るのは」

お延は実際怖^{まゆ}そうに眉を動かした。

「だからお前はここに待つといでよ。わざわざ手術台の傍^{そば}まで来て、穢^{きた}ないところを見る必要はないんだから」

「でもこんな場合には誰か身寄みよりのものが立ち合わなくっちゃ悪い
んでしょう」

津田は真面目まじめなお延の顔を見て笑い出した。

「そりゃ死ぬか生きるかっていうような重い病気の時の事だね。

誰がこれしきの療治に立合人たちあいじんなんか呼んで来る奴やつがあるものか
ね」

津田は女に穢きたないものを見せるのが嫌きらいな男であつた。ことに自
分の穢きたないところを見せるは厭いやであつた。もつと押しつめてい
と、自分で自分の穢きたないところを見るのでさえ、普通の人以上に
苦痛を感じる男であつた。

「じゃ止よしましょう」と云ったお延はまた時計を出した。

「お午ひるまでに済ひむでしようか」

「済ひむだろうと思うがね。どうせこうなりやいつだって同おんなじこつちやないか」

「そりやそうだけど……」

お延は後を云わなかった。津田も訊きかなかった。

看護婦がまた階はしご子段の上へ顔を出した。

「支度したくができましたからどうぞ」

津田はすぐ立ち上った。お延も同時に立ち上ろうとした。

「お前はそこに待つといでと云うのに」

「診察室へ行くんじゃないのよ。ちよつとここの電話を借りるのよ」

「どこかへ用があるのかね」

「用じゃないけど、——ちよつとお秀さんの所へあなたの事を知らせておこうと思って」

同じ区内にある津田の妹の家はそこからあまり遠くはなかった。今度の病気について妹いもの事をあまり頭の中に入れていなかった。津田は、立とうとするお延を留めた。

「いいよ、知らせないでも。お秀なんかに知らせるのはあんまり仰山ぎやうさん過ぎるよ。それにあいつが来るとやかましくっていけないか

らね」

年は下でも、性質の違ふこの妹は、津田から見たある意味の苦^{にが}手^てであつた。

お延は中腰^{ちゆうごし}のまま答えた。

「でも後^{あと}でまた何か云われると、あたしが困るわ」

強^しいてとめる理由^{みい}も見出し得^だなかつた津田は仕方なしに云つた。

「かけても構わないが、何も今に限つた事はないだろう。あいつは近所だから、きつとすぐ来るよ。手術をしたばかりで、神経が過敏になつてるところへもつて来て、兄さんが何とかで、お父さ

んがかんとかだと云われるのは実際楽じゃないからね」

お延は微かな声で階下を憚かるような笑い方をした。しかし彼女の露わした白い歯は、気の毒だという同情よりも、滑稽だという単純な感じを明らかに夫に物語っていた。

「じゃお秀さんへかけるのは止すから」

こう云ったお延は、とうとう津田といっしょに立ち上った。

「まだほかにかける所があるのかい」

「ええ岡本へかけるのよ。午ままでにかけるって約束があるんだから、いいでしょう、かけても」

前後して階子段を下りた二人は、そこで別々になった。一人が

電話口の前に立った時、一人は診察室の椅子へ腰をおろした。

四十二

「リチネはお飲みでしたらうね」

医者は糊の強い洗い立ての白い手術着をごわごわさせながら津田に訊いた。

「飲みましたが思ったほど効目ききめがないようでした」

昨日きのうの津田にはリチネの効目を気にするだけの暇さえなかった。それからそれへと忙がしく心を使わせられた彼がこの下剤げざいか

ら受けた影響は、ほとんど精神的に零^{ゼロ}であつたのみならず、生理的にも案外微弱であつた。

「じゃもう一度浣腸^{かんちよう}しましょう」

浣腸の結果も充分でなかつた。

津田はそれなり手術台に上^{のぼ}つて仰向^{あおもけ}に寝た。冷たい防水布がじ

かに皮膚に触れた時、彼は思わず冷^{ひや}りとした。堅い括^くり枕^{まくら}に着け

た彼の頭とは反対の方角からばかり光線が差し込むので、彼の眼

は明りに向つて寝る人のように、少しも落ちつけなかつた。彼は

何度も瞬^{まばた}きをして、何度も天井^{てんじよう}を見直した。すると看護婦が手術

の器械を入れたニッケル製の四角な浅い盆みたようなものを持つ

て彼の横を通ったので、白い金属性の光がちらちらと動いた。仰向けに寝ている彼には、それが自分の眼を掠^{かす}めて通り過ぎると思われなかった。見てならない気味の悪いものを、ことさらに偷^{ぬす}み見たのだという心持がなおのこと募^つった。その時表の方で鳴る電話のベルが突然彼の耳に響いた。彼は今まで忘れていたお延の事を急に思い出した。彼女の岡本へかけた用事がやっと済んだ時に、彼の療治はようやく始まったのである。

「コカインだけでやります。なに大して痛い事はないでしょう。もし注射が駄目だったら、奥の方へ薬を吹き込みながら進んで行くつもりです。それで多分できそうですから」

局部を消毒しながらこんな事を云う医者 of 言葉を、津田は恐ろしいようなまた何でもないような一種の心持で聴いた。

局部魔睡きょくますいは都合よく行つた。まじまじと天井を眺めている彼は、ほとんど自分の腰から下に、どんな大事件が起っているか知らなかった。ただ時々自分の肉体の一部に、遠い所で誰かが圧迫を加えているような気がするだけであつた。鈍い抵抗にぶがそこに感ぜられた。

「どんなです。痛かないでしょう」

医者 of 質問には充分の自信があつた。津田は天井を見ながら答えた。

「痛がありません。しかし重い感じだけがあります」

その重い感じというのを、どう云い現わしていいか、彼には適当な言葉がなかった。無神経な地面が人間の手で掘り割られる時、ひよっとしたらこんな感じを起しはしまいかという空想が、ひよっくり彼の頭の中に浮かんた。

「どうも妙な感じです。説明のできないような」

「そうですか。我慢できますか」

途中で脳貧血でも起されては困ると思っただけらしい医者という言葉つきが、何でもない彼をかえって不安にした。こういう場合予防のために葡萄酒ぶどうしゅなどを飲まされるものかどうか彼は全く知らなかつ

たが、何しろ特別の手当を受ける事は厭いやであつた。

「大丈夫です」

「そうですか。もう直じきです」

こういう会話を患者と取り換わせながら、間断なく手を働らかせている医者態度には、熟練からのみ来る手際てぎわが閃ひらめいていそうに思われた。けれども手術は彼の言葉通りそう早くは片づかなかつた。

切物きれものの皿に当って鳴る音が時々した。鋏はさみで肉をじよきじよき切るような響きが、強く誇張されて鼓膜を威嚇いかくした。津田はそのたびにガーゼで拭き取られなければならない赤い血潮の色を、想像

の眼で腥^{なまぐ}さそうに眺めた。じつと寝かされている彼の神経はじつとしているのが苦になるほど緊張して来た。むず痒^{かゆ}い虫のようなものが、彼の身体^{からだ}を不安にするために、気味悪く血管の中を這^はい廻った。

彼は大きな眼を開いて天井^{てんじょう}を見た。その天井の上には綺麗^{きれい}に着飾ったお延がいた。そのお延が今何を考えているか、何をしているか、彼にはまるで分らなかった。彼は下から大きな声を出して、彼女を呼んで見たくなった。すると足の方で医者^{いしや}の聲がした。

「やっと済みました」

むやみにガーゼを詰め込まれる、こそばゆい感じのした後で、
医者はまた云った。

「はんこん癍痕が案外堅いんで、出血の恐れがありますから、当分じっと
していて下さい」

最後の注意と共に、津田はようやく手術台から下ろされた。

四十三

診察室を出るとき、後から随うしろいて来た看護婦が彼に訊きいた。
「いかがです。気分のお悪いような事はございませんか」

「いいえ。――蒼い顔あおでもしているかね」

自分自身に多少懸念けねんのあった津田はこう云って訊き返さなければならなかった。

創口きずぐちにできるだけ多くのガーゼを詰め込まれた彼の感じは、他が想像する倍以上に重苦しいものであった。彼は仕方なしにのそのそ歩いた。それでも階子段はしごだんを上る時には、割さかれた肉とガーゼとが擦れ合こすあってざらざらするような心持がした。

お延は階段の上に立っていた。津田の顔を見ると、すぐ上から声を掛けた。

「済んだの？ どうして？」

津田ははつきりした返事も与えずに室へやの中に這入はいった。そこには彼の予期通り、白いシートに裹つつまれた蒲団ふとんが、彼の安臥あんがを待つべく長々と延べてあった。羽織を脱ぎ捨てるが早いか、彼はすぐその上へ横になった。鼠地ねずみじのネルを重ねた銘仙めいせんの襦袍どてらを後うしろから着せるつもりで、両手で襟えりの所を持ち上げたお延は、拍子ひょうしめ抜けのした苦笑と共に、またそれを袖そで畳たたみにして床とこの裾すその方に置いた。

「お薬はただかなくていいの」

彼女は傍そばにいる看護婦の方を向いて訊きいた。

「別に内用のお薬は召し上らないでも差支さしつかえないのでございます。お食事の方はただいま拵こしらえてこちらから持って参ります」

看護婦は立ちかけた。黙って寝ていた津田は急に口を開いた。

「お延、お前何か食うなら看護婦さんに頼んだらいいだろう」

「そうね」

お延は躊躇ちゆうちゆうした。

「あたしどうしようかしら」

「だって、もう昼過だろう」

「ええ。十二時二十分よ。あなたの手術はちょうど二十八分かったのね」

時計の蓋ふたを開けたお延は、それを眺めながら精密な時間を云つた。津田が手術台の上で俎まないたへ乗せられた魚のように、おとなしく

我慢している間、お延はまた彼の見つめなければならなかった天井の上で、時計と睨めっ競でもするように、手術の時間を計っていたのである。

津田は再び訊いた。

「今から宅へ帰ったって仕方がないだろう」

「ええ」

「じゃここで洋食でも取って貰って食ったらいいじゃないか」

「ええ」

お延の返事はいつまで経っても捗々しくなかった。看護婦はとうとう下へ降りて行った。津田は疲れた人が光線の刺戟を避ける

ような気分で眼をねむった。するとお延が頭の上で、「あなた、あなた」というので、また眼を開あかなければならなかった。

「心持が悪いの？」

「いや」

念を押したお延はすぐ後あとを云った。

「岡本でよろしくって。いずれそのうち御見舞あがに上りますからって」

「そうか」

津田は軽い返事をしたなり、また眼をつぶろうとした。するとお延がそうさせなかった。

「あの岡本でね、今日是非芝居へいっしょに来て云うんです
が、行っちゃいけないって」

気がよく廻る津田の頭に、今朝からのお延の所作が一度に閃め
いた。病院へ随いて来るにしては派出過ぎる彼女の衣裳といい、
出る前に日曜だと断った彼女の注意といい、ここへ来てから、そ
わそわして岡本へ電話をかけた彼女の態度といい、ことごとく芝
居の二字に向って注ぎ込まれているようにも取れた。そういう眼
で見ると、手術の時間を精密に計った彼女の動機さえ疑惑の種に
ならないではすまなかった。津田は黙って横を向いた。床の間の
上に取り揃えて積み重ねてある、封筒だの書翰用紙だの缺だの書

物だのが彼の眼についた。それは先刻さつきかばん鞆へ入れて彼がここへ持つて来たものであつた。

「看護婦に小さい机を借りて、その上へ載せようと思つたんですけれども、まだ持つて来てくれないから、しばらくの間、ああしておいたのよ。本でも御覧になつて」

お延はすぐ立つて床の間から書物をおろした。

四十四

津田は書物に手を触れなかつた。

「岡本へは断ったんじゃないのか」

不審よりも不平な顔をした彼が、向^{むき}を変えて寝返りを打った時に、堅固にできていない二階の床^{ゆか}が、彼の意を迎えるように、ずしんと鳴った。

「断ったのよ」

「断ったのに是非来いっていうのかね」

この時津田は始めてお延の顔を見た。けれどもそこには彼の預期した何物も現われて来なかった。彼女はかえって微笑した。

「断ったのに是非来いっていうのよ」

「しかし……」

彼はちよつと行きつまつた。彼の胸には云うべき事がまだ残っているのに、彼の頭は自分の思わく通り迅速しんそくに働らいてくれなかった。

「しかし——断つたのに是非来いなんていうはずがないじゃないか」

「それを云うのよ。岡本もよっぽどの没分曉わからずやね」

津田は黙ってしまった。何といって彼女を追究ついきゅうしていいか見当けんとうがつかなかった。

「あなたまだ何かあたしを疑ぐっていらっしやるの。あたし厭だ

わ、あなたからそんなに疑ぐられちゃ」

彼女の眉がまゆさもさも厭そうに動いた。

「疑ぐりやしないが、何だか変だからさ」

「そう。じゃその変なところを云ってちょうだいな、いくらでも説明するから」

不幸にして津田にはその変なところが明瞭にめいりよう云えなかった。

「やっぱり疑ぐっていらっしやるのね」

津田ははつきり疑っていないと云わなければ、何だか夫として自分の品格にかか関わるような気がした。と云って、女から甘く見られるのも、彼にとって少なからざる苦痛であった。二つの我がが我

を張り合つて、彼の心のうちで闘う間、よそ目に見える彼は、比較的冷静であつた。

「ああ」

お延は微かな溜息を洩らしてそつと立ち上つた。いったん閉て切つた障子をまた開けて、南向の縁側へ出た彼女は、手摺の上へ手を置いて、高く澄んだ秋の空をぼんやり眺めた。隣の洗濯屋の物干に隙間なく吊されたワイ襯衣だのシーツだのが、先刻見た時と同じように、強い日光を浴びながら、乾いた風に揺れていた。

「好いお天気だ事」

お延が小さな声で独りごとのようにこう云つた時、それを耳に

した津田は、突然籠かごの中にいる小鳥の訴えを聞かされたような心持がした。弱い女を自分の傍そばに縛しばりつけておくのが少し可哀相かわいそうになった。彼はお延に言葉をかけようとして、接穂つぎほのないのに困った。お延も欄干らんかんに身を倚よせたまますぐ座敷の中へ戻って来なかった。

そこへ看護婦が二人の食事を持って下から上あがって来た。

「どうもお待遠さま」

津田の膳ぜんには二個の鶏卵けいらんと一合のソップと麵麩パンがついているだけであった。その麵麩も半片の二分ノ一と分量はいつのまにか定められていた。

津田は床の上に腹這はらばいになつたまま、むしゃむしゃ口を動かしながら、機会を見計らつて、お延に云つた。

「行くのか、行かないのかい」

お延はすぐ肉匙フオークの手を休めた。

「あなた次第よ。あなたが行けとおっしゃれば行くし、止よせとおっしゃれば止すわ」

「大変柔順だな」

「いつでも柔順だわ。——岡本だつてあなたに伺つて見た上で、もしいとおっしゃつたら連れて行つてやるから、御病氣が大した事でなかったら、訊きいて見ろつて云うんですもの」

「だってお前の方から岡本へ電話をかけたんじゃないか」

「ええそりゃそうよ、約束ですもの。一返断いっぺんったけれども、模様次第では行けるかも知れないだろうから、もう一返その日の午ひるまでに電話で都合を知らせろって云って来たんですもの」

「岡本からそういう返事が来たのかい」

「ええ」

しかしお延はその手紙を津田に示していなかった。

「要するに、お前はとうなんだ。行きたいのか、行きたくないのか」

津田の顔色を見定めたお延はすぐ答えた。

「そりゃ行きたいわ」

「とうとう白状したな。じゃおいでよ」

二人はこういう会話と共に午飯ひるめしを済ました。

四十五

手術後の夫を、やっと安静状態に寝かしておいて、自分一人下へ降りた時、お延はもう約束の時間をだいぶおく後らせていた。彼女は自分の行先を車夫に教えるために、ただ一口ひとくち劇場の名を云ったなり、すぐ俥こしに乗った。門前に待たせておいたその俥は、角の帳

場にある四五台のうちで一番新らしいものであった。

小路こうじを出た護謨輪ゴムわは電車通りばかり走った。何の意味なしに、ただ賑にぎやかな方角へ向けてのみ速力を出すといった風の、景氣の好い車夫の駟方かけかたが、お延に感染した。ふつくらした厚い席の上で、彼女の身体からだが浮うわつきながら早く揺うごくと共に、彼女の心にも柔らかで軽快な一種の動揺が起った。それは自分の左右前後に紛ふんとして活躍する人生を、容赦なく横切って目的地へ行く時の快感であつた。

車上の彼女は宅うちの事を考える暇がなかった。機嫌きげんよく病院の二階へ寝かして来た津田の影像イメジが、今日一日ぐらい安心して彼を忘

れても差支さしつかえないという保証を彼女に与えるので、夫の事もまるで苦にならなかった。ただ目前の未来が彼女の俤とともに動いた。芝居その物に大した嗜好しこうを始めからもっていない彼女は、時間おくが後れたのを気にするよりも、ただ早くそこに行き着くのを気にした。こうして新らしい俤で走っている道中が現に刺戟しげきであると同様の意味で、そこへ行き着くのはさらに一層の刺戟であつた。

俤は茶屋の前でとまった。挨拶あいさつをする下女にすぐ「岡本」と答えたお延の頭には、提灯ちようちんだの暖簾のれんだの、紅白の造り花などがちらちらした。彼女は俤を降りる時一度に眼に入つたこれらの色と形

の影を、まだ片づける暇もないうちに、すぐ廊下伝いに案内されて、それよりも何層倍か錯綜さくそうした、また何層倍か濃厚な模様を、縦横に織り拡げている、海のような場内へ、ひよっこり顔を出した。それは茶屋の男が廊下の戸を開けて「こちらへ」と云った時、その隙間すきまから遠くに前の方を眺めたお延の感じであつた。好んでこういう場所へ出入しゅつにゅうしたがる彼女にとって、別に珍らしくもないこの感じは、彼女にとって、永久に新しい感じであつた。だからまた永久に珍らしい感じであるとも云えた。彼女は暗闇くらやみを通り抜けて、急に明海あかるみへ出た人のように眼を覚さました。そうしてこの氛囲ふんいきの片隅かたすみに身を置いた自分は、眼の前に動く生きた大き

な模様的一部分となつて、**挙止動作共**ことごとくこれからその中に織り込まれて行くのだという自覚が、緊張した彼女の胸にはつきり浮んだ。

席には岡本の姿が見えなかった。細君に娘二人を入れても三人にしかならないので、お延の坐るべき余地は充分あつた。それでも姉娘の継子つぎこは、お延の座があいにく自分の影になるのを氣遣きづかうように、後うしろを向いて筋違すじかいに身体からだを延ばしながらお延に訊きいた。

「見えて？ 少しこと換かわつてあげましょうか」

「ありがとう。ここでたくさん」

お延は首を振つて見せた。

お延のすぐ前に坐っていた十四になる妹娘の百合子は左利なので、左の手に軽い小さな象牙製の双眼鏡を持ったまま、その脇を、赤い布で裹んだ手摺の上に載せながら、後をふり返った。

「遅かったのね。あたし宅の方へいらっしゃるのかと思ってたのよ」

年の若い彼女は、まだ津田の病気について挨拶かたがたお延に何か云うほどの智慧をもたなかった。

「御用があつたの？」

「ええ」

お延はただ簡単な返事をしたぎり舞台の方を見た。それは先刻

から姉妹きょうだいの母親が傍目わきめもふらず熱心に見つめている方角であつた。彼女とお延は最初顔を見合せた時に、ちよつと黙礼を取り替わせただけで、拍子木ひょうしぎの鳴るまでついに一言ひとことも口を利きかなかつた。

四十六

「よく来られたのね。ことによると今日はむずかしいんじゃないかって、先刻さつきつぎ継と話してたの」

幕が引かれてから、始めてうち寛くつろいだ様子を示した細君は、

ようやくお延に口を利き出した。

「そら御覧なさい、あたしの云った通りじゃなくって」

誇り顔に母の方を見てこう云った継子はすぐお延に向ってその後を云い足した。

「あたしお母さまと賭をしたのよ。今日あなたが来るか来なかった。お母さまはことによると来ないだろうっておっしゃるから、あたしきつといらっしゃるに違ないって受け合ったの」

「そう。また御神籤を引いて」

継子は長さ二寸五分幅六分ぐらいの小さな神籤箱の所有者であつた。黒塗の上へ篆書の金文字で神籤と書いたその箱の中に

は、象牙ぞうげを平たく削けずった精巧の番号札が数通かずとおり百本納められていた。彼女はよく「ちよつと見て上げましょうか」と云いながら、小楊枝こようじいれ入を取り扱あつかうような手つきで、短冊たんざくがた形の薄い象牙札を振り出しては、箱の大きさと釣り合うようにできた文句もんく入の折手本おりでほんを繰くりひろげて見た。そうしてそこに書いてある蠅はえの頭ほどんな細かい字を読むために、これも附属品として始めから添えてある小さな虫眼鏡を、羽二重はぶたえの裏をつけた更紗さらさの袋から取り出して、もつたいらしくその上へ翳かざしたりした。お延が津田と浅草へ遊びに行つた時、玩具おもちゃとしては高過ぎる四円近くの代価を払って、仲見世から買って歸つた精巧なこの贈物は、来年二十一になる継子に

とつて、処女の空想に神秘の色を遊戯的ゆうぎてきに着けてくれる無邪気な
装飾品であつた。彼女は時として帙入ちつのままそれを机の上から
取つて帯の間に挟はさんで外出する事さえあつた。

「今日も持つて来たの？」

お延は調戲からかいはんぶん半分彼女に訊きいて見なくなつた。彼女は苦笑しながら首を振つた。母が傍そばから彼女に代つて返事をするごとくに云つた。

「今日の予言はお神籤みくじじゃないのよ。お神籤よりもつと偉えらい予言
なの」

「そう」

お延は後が聞きたそうにして、母子おやこを見比べた。

「継つぎはね……」と母が云いかけたのを、娘はすぐ追被おっかぶせるようにとめた。

「止よしてちようだいよ、お母さま。そんな事ここで云っちゃ悪いわよ」

今まで黙って三人の会話を聴きいていた妹娘の百合子ゆりこが、くすくす笑い出した。

「あたし云ってあげてもいいわ」

「お止しなさいよ、百合子さん。そんな意地の悪い事するのは。

いいわ、そんなら、もうピアノを浚さらって上げないから」

母は隣りにいる人の注意を惹^ひかないように、小さな声を出して笑った。お延もおかしかった。同時になお訳^きが訊きたかった。

「話してちょうだいよ、お姉さまに怒られたって構わないじゃないの。あたしがついてるから大丈夫よ」

百合子はわざと腮^{あご}を前へ突き出すようにして姉を見た。心持小鼻をふくらませたその態度は、話す話さないの自由を我に握った人の勝利を、もののしく相手に示していた。

「いいわ、百合子さん。どうしても勝手になさい」

こう云いながら立つと、継子は後の戸^{うしろ}を開けてすぐ廊下へ出た。

「お姉さま怒ったのね」

「怒ったんじゃないよ。きまりが悪いんだよ」

「だってきまりの悪い事なんかかないの。あんな事云ったって」

「だから話してちょうだいよ」

年齒^{とし}の六つほど下な百合子の小供らしい心理状態を観察したお延は、それを旨^{うま}く利用しようと試みた。けれども不意に座を立つた姉の挙動が、もうすでにその状態を崩^{くず}していたので、お延の慫^{しん}憑^{ぽう}は何の効目^{ききめ}もなかった。母はとうとうすべてに対する責任を一人で背負^{しよ}わなければならなかった。

「なに何でもないんだよ。継がね、由雄さんはああいう優しい好い人で、何でも延子さんのいう通りになるんだから、今日はきつと来るに違ないって云っただけなんだよ」

「そう。由雄が継子さんにはそんなに頼母たのもしく見えるの。ありがたいわね。お礼を云わなくっちゃならないわ」

「そうしたら百合子が、そんならお姉様も由雄さん見たような人の所へお嫁に行くといいつて云ったんでね、それをお前の前で云われるのが恥ずかしいもんだから、ああやって出て行ったんだよ」

「まあ」

お延は弱い感投詞^{かんとうし}をむしろ淋^{さみ}しそうに投げた。

四十七

手前勝手な男としての津田が不意にお延の胸に上った。自分の朝夕^{あさゆう}尽している親切は、ずいぶん精一杯なつもりでいるのに、夫の要求する犠牲には際限がないのかしらんという、不断からの疑念が、濃い色でぱつと頭の中へ出た。彼女はその疑念を晴らしてくれる唯一^{ゆいいつ}の責任者が今自分の前にいるのだという自覚と共に、岡本の細君を見た。その細君は、遠くに離れている両親をもった

彼女から云えば、東京中で頼りにするたった一人の叔母であつた。

「良人おとというものは、ただ妻の情愛を吸い込むためにのみ生存する海綿かいめんに過ぎないのだろうか」

これがお延のとうから叔母おばにぶつかつて、質ただして見たい問であつた。不幸にして彼女には持つて生れた一種の氣位きぐらいがあつた。

見方次第では瘦我慢やせがまんとも虚栄心とも解釈のできるこの氣位が、叔母に対する彼女を、この一点で強く牽制けんせいした。ある意味からいうと、毎日土俵の上で顔を合せて相撲すもうを取っているような夫婦関係というものを、内側の二人から眺めた時に、妻はいつでも夫の相

手であり、またたまには夫の敵であるにしたところで、いったん世間に向ったが最後、どこまでも夫の肩を持たなければ、体よく夫婦として結びつけられた二人の弱味を表へ曝さらすような気がして、恥ずかしくていられないというのがお延の意地であつた。だから打ち明け話をして、何か訴えたくてたまらない時でも、夫婦から見れば、やっぱり「世間」という他人の部類へ入れべきこの叔母の前へ出ると、敏感のお延は外聞が悪くって何も云う気にならなかつた。

その上彼女は、自分の予期通り、夫が親切に親切を返してくれないのを、足りない自分の不行届ふゆきとどきからでも出たように、傍はたから解

釈されてはならないと日頃から掛念けねんしていた。すべての噂うわさのうちで、愚鈍という非難を、彼女は火のように恐れていた。

「世間には津田よりも何層倍か気きむずかしい男を、すぐ手の内に丸め込む若い女さえあるのに、二十三にもなって、自分の思うように良人おっとを綾あやなして行けないのは、畢竟ひつきよう知恵ちえがないからだ」

知恵と徳とをほとんど同じように考えていたお延には、叔母からこう云われるのが、何よりの苦痛であった。女として男に対する腕をもっていないと自白するのは、人間でありながら人間の用をなさないと自白するくらいの屈辱として、お延の自尊心きようしんを傷けたのである。時と場合が、こういう立ち入った談話を許さない劇

場でないにしたところで、お延は黙っているよりほかに仕方がなかった。意味ありげに叔母の顔を見た彼女は、すぐ眼を外そらせた。

舞台一面に垂れている幕がふわふわ動いて、継つぎめ目の少し切れた間から誰かが見物の方を覗のぞいた。気のせいかもしれないが、お延の方を見ているようなので、彼女は今向け換えたばかりの眼をまたよそに移した。下は席を出る人、座へ戻る人、途中を歩く人で、一度にざわつき始めていた。坐すわったぎりの大多数も、前後左右に思い思いの姿勢を取ったり崩くずしたりして、片時も休まなかった。無数の黒い頭が渦うずのように見えた。彼らの或者の派出はでな扮装つくりが、色彩の運動から来る落ちつかない快感を、乱雑にちらちらさせた。

土間^{どま}から眼を放したお延は、ついに谷を隔^{へだ}てた向う側を吟味^{ぎんみ}し始めた。するとちようどその時後^{うしろ}をふり向いた百合子が不意に云った。

「あすこに吉川さんの奥さんが来ていてよ。見えたでしょう」

お延は少し驚ろかされた眼を、教わった通りの見当^{けんとう}へつけて、

そこに容易^{たやす}く吉川夫人らしい人の姿を発見した。

「百合子さん、眼が早いのね、いつ見つけたの」

「見つけやしないのよ。先刻^{さつき}から知ってるのよ」

「叔母さんや継子さんも知ってるの」

「ええ皆^{みんな}な知ってるのよ」

知らないのは自分だけだったのによやく気のついたお延が、
なおその方を百合子の影から見守っていると、故意だか偶然だ
か、いきなり吉川夫人の手にあつた双眼鏡が、お延の席に向けら
れた。

「あたし厭いやだわ。あんなにして見られちゃ」

お延は隠れるように身を縮ちぢめた。それでも向側むこうがわの双眼鏡は、な
かなかお延の見当から離れなかった。

「そんならいいわ。逃げ出しちまうだけだから」

お延はすぐ継子の後あとを追おっかけて廊下へ出た。

四十八

そこから見渡した外部そとの光景も場所柄ばしよがらだけに賑にぎわっていた。裏へ貫ぬきを打って取り除はずしのできるように拵こしらえた透すかしの板敷を、絶間なく知らない人が往ったり来たりした。廊下の端はじに立って、半なかば柱に身を靠もたせたお延が、継子の姿を見出みいだすまでには多少の間がかかった。それを向う側に並んでいる売店の前に認めた時、彼女はすぐ下へ降りた。そうして軽く足早に板敷を踏んで、目指めざす人のいる方へ渡った。

「何を買ってるの」

後うしろから覗のぞき込むようにして訊きいたお延の顔と、驚おどろろいてふり返った継子の顔とが、ほとんど擦すれ擦すれになつて、微笑ほほえみ合つた。

「今困つてるところなのよ。一はじめさんが何かお土産みやげを買かつてくれつて云うから、見ているんだけど、あいにく何なんにもないのよ、あの人の喜びそうなものは」

疳かん違ちがいをして、男の子の玩具おもちゃを買おうとした継子は、それからそれへといろいろなものを並べられて、買うには買われず、止よすには止されず、弱つているところであつた。役者に縁故のある紋もんなどを着けた花簪はなかんざしだの、紙入だの、手拭てぬぐいだのの前に立って、もじ

もじしていた彼女は、どうしたらよかろうという訴えの眼をお延に向けた。お延はすぐ口を利きいてやった。

「駄目よ、あの子は、拳銃ピストルとか木剣ぼっけんとか、人殺しのできそうなものでなくっちゃ気に入らないんだから。そんな物こんな粹いきな所にあろうはずがないわ」

売店の男は笑い出した。お延はそれを機しおに年下の女の手を取った。

「とにかく叔母さんに訊いてからになさいよ。——どうもお気の毒さま、じゃいずれまた後のちほど」

こう云ったなりさっさと歩き出した彼女は、気の毒そうにして

いる継子を、廊下の端まで引張るはじようにして連れて来た。そこでとまった二人は、また一本の軒柱のきばしらを盾たてに立話をした。

「叔父さんはどうなすったの。今日はなぜいらっしやらないの」
「来るのよ、今に」

お延は意外に思った。四人でさえ窮屈なところへ、あの大きな男が割り込んで来るのはたしかに一事件ひとじけんであつた。

「あの上叔父さんに来られちゃ、あたし見たいに薄っぺらなもの
は、お圧おされてへしゃげちまうわ」

「百合子さんと入れ代るのよ」

「どうして」

「どうしてもその方が都合が好いんでしょう。百合子さんはいてもいなくっても構わないんだから」

「そう。じゃもし、由雄が病気でなくって、あたしといっしょに来たらどうするの」

「その時はその時で、またどうかするつもりなんです。もう一間^{いっけん}取るとか、それでなければ、吉川さんの方といっしょになるとか」

「吉川さんとも前から約束があつたの？」

「ええ」

継子はその後を云わなかった。岡本と吉川の家庭がそれほど接

近しているとも考えていなかったお延は、そこに何か意味があるのではないかと、ちよつと不審を打って見たが、時間に余裕のある人の間に起りがちな、単に娯楽のための約束として、それを眺める余地も充分あるので、彼女はついに何にも訊^きかなかった。二人の話はただ吉川夫人の双眼鏡に触れただけであつた。お延はわざと手真^{てま}似^ねまでして見せた。

「こうやって真^まともに向けるんだから、敵^{かな}わないわね」

「ずいぶん無遠慮でしょう。だけど、あれ西洋風なんだって、宅^{うち}のお父さまがそうおっしゃってよ」

「あら西洋じゃ構わないの。じゃあたしの方でも奥さんの顔をあ

あやってつけつけ見ても好い訳ね。あたし見て上げようかしら」

「見て御覧なさい、きつと嬉うれしがってよ。延子さんはハイカラだつて」

二人が声を出して笑い合っている傍そばに、どこからか来た一人の若い男がちよつと立ちどまつた。無地の羽織ともぬいに友縫もんの紋を付けて、セルの行灯袴あんどんばかまを穿はいたその青年紳士は、彼らと顔を見合せるや否や、「失礼」と挨拶あいさつでもして通り過ぎるように、鄭重ていちょうな態度を無言のうちに示して、板敷へ下りて向うへ行つた。継子あかは赧あかくなつた。

「もう這はい入りましょうよ」

彼女はすぐお延を促^{うな}がして内へ入った。

四十九

場^{じやうちゆう}中の様子は先刻^{さつき}見た時と何の変りもなかった。土間を歩く男^{なん}女の姿^{によ}が、まるで人の頭の上を渡っているように煩^{わず}らわしく眺^{なが}められた。できるだけ多くの注意を惹^ひこうとする浮誇^{ふこ}の活動さえ至る所に出現した。そうして次の色彩に席を譲るべくすぐ消滅した。眼中の小世界はただ動揺であつた、乱雑であつた、そうしていつでも粉飾^{ふんしよく}であつた。

比較的静かな舞台ぶたいの裏側では、道具方の使う金槌かなづちの音が、一般の予期を唆そそるべく、折々場内へ響き渡った。合間合間には幕うしろの後で拍子木ひょうしぎを打つ音が、攪かき廻まわされた注意を一点に纏まとめようとする警柝けいたくの如ように聞こえた。

不思議なのは観客であつた。何もする事のないこの長い幕間まくあいを、少しの不平も云わず、かつて退屈の色も見せず、さも太平らしく、空疎な腹に散漫な刺戟しげきを盛つて、他愛たわいなく時間のために流されていた。彼らは穏和おだやかであつた。彼らは楽しそうに見えた。お互の吐はく呼吸いきに酔よつ払はらった彼らは、少し醒さめかけると、すぐ眼を転じて誰かの顔を眺めた。そうしてすぐそこに陶然たる或物を

認めた。すぐ相手の気分と同化する事ができた。

席に戻った二人は愉快らしく四辺あたりを見廻した。それから申し合せたように問題の吉川夫人の方を見た。婦人の双眼鏡はもう彼らを覗ねらっていなかった。その代り双眼鏡の主人もどこかへ行つてしまった。

「あらいらっしやらないわ」

「本当ね」

「あたし探さがしてあげましょうか」

百合子はすぐ自分の手に持ったこっちのオペラグラスを眼へ宛あてがった。

「いない、いない、どこかへ行っちゃった。あの奥さんなら二人
前まえぐらい肥ふとってるんだから、すぐ分るはずだけれども、やっぱり
いないわよ」

そう云いながら百合子は象牙の眼鏡を下へ置いた。綺麗な友染
模様の背中が隠れるほど、帯を高く背負しよった令嬢としては、言葉
が少しもよそゆきでないので、姉はおかしさを堪こらえるような口元
に、年上らしい威厳を示して、妹を窘たしなめた。

「百合子さん」

妹は少しも応こたえなかった。例の通りちよつと小鼻を膨ふくらませ
て、それがどうしたんだといった風の表情をしながら、わざと継

子を見た。

「あたしもう帰りたくなつたわ。早くお父さまが来てくれると好いんだけどな」

「帰りたければお帰りよ。お父さまがいらっしやらなくつても構わないから」

「でもいるわ」

百合子はやはり動かなかつた。子供でなくつてはふるまいにくいこの腕白らしい態度の傍に、かたわらお延が年相応の分別ふんべつを出して叔母に向つた。

「あたしちよつと行って吉川さんの奥さんに御挨拶ごあいさつをして来ま

しょうか。澄^すましていちゃ悪いわね」

実を云うと彼女はこの夫人をあまり好いていなかった。向うでもこつちを嫌^きっているように思えた。しかも最初先方から自分を嫌い始めたために、この不愉快な現象が二人の間に起つたのだという臃^{おぼろげ}気な理由さえあつた。自分が嫌われるべき何らのきつかけも与えないのに、向うで嫌い始めたのだという自信も伴^{ともな}つていた。先刻^{さつき}双眼鏡を向けられた時、すでに挨拶^{あいさつ}に行かなければならないと気のついた彼女は、即座にそれを断行する勇気を起し得なかった。内心の不安を質問の形に引き直して叔母に相談しかけながら、腹の中では、その義務を容易^{たやす}く果させるために、叔母

が自分と連れ立って、夫人の所へ行ってくれはしまいかと暗^{あん}に願っていた。

叔母はすぐ返事をした。

「ああ行つた方がいいよ。行つといでよ」

「でも今いらつしやらないから」

「なにきつと廊下にでも出ておいでなんだよ。行けば分るよ」

「でも、——じゃ行くから叔母さんもいっしよにいらつしやいな」

「叔母さんは——」

「いらつしやらない？」

「行ってもいいがね。どうせ今に御飯を食べる時に、いっしょになるはずになってるんだから、御免蒙ごめんこうむってその時にしようかと
思ってるのよ」

「あらそんなお約束があるの。あたしちつとも知らなかったわ。
誰と誰がいっしょに御飯を召上めしやがるの」

「みんなよ」

「あたしも？」

「ああ」

意外の感に打たれたお延は、しばらくしてから答えた。

「そんならあたしもその時にするわ」

五十

岡本の来たのはそれから間もなくであつた。茶屋の男に開けて貰^{もら}つた戸の隙間^{すきま}から中を覗^{のぞ}いた彼は、おいでおいでをして百合子を廊下へ呼び出した。そこで二人がみんなの邪魔にならないような小声^{たちばなし}の立談を、二言三言取り換わした後で、百合子は約束通り男に送られてすぐ場外へ出た。そうして入れ代りに入つて来た彼がその後^{あと}へ窮屈^{きうくつ}そうに坐つた。こんな場所ではちよつと身体^{からだ}の位置^{かえ}を変えるのさえ臆^{おっくう}劫^{おっくう}そうに見える肥満な彼は、坐つてしまつてからふと氣のついたように、半分ばかり背後^{うしろ}を向いた。

「お延、代ってやろうか。あんまり大きいのが前を塞いで邪魔だ
ろう」

一夜作りの山が急に出来上ったような心持のしたお延は、舞台
へ気を取られている四辺へ遠慮して動かなかつた。毛織ものを肌
へ着けた例のない岡本は、毛だらけな腕を組んで、これもおつき
合だと云った風に、みんなの見ている方角へ視線を向けた。そこ
では色の生っ白い変な男が柳の下をうろろろしていた。荒い縞の
着物をぞろりと着流して、博多の帯をわざと下の方へ締めたその
色男は、素足に雪駄を穿いているので、歩くたびにちやらちやら
いう不愉快な音を岡本の耳に響かせた。彼は柳の傍にある橋と、

橋の向うに並んでいる土蔵の白壁を見廻して、それからそのついでに観客の方へ眼を移した。然るに観客の顔はことごとく緊張していた。雪駄をちゃらちゃら鳴らして舞台の上を往ったり来たりするこの若い男の運動に、非常な重大の意味でもあるように、満場は静まり返って、咳一つするものがなかった。急に表から入って来た彼にとって、すぐこの特殊な空氣に感染する事が困難であつたのか、また馬鹿らしかったのか、しばらくすると彼はまた窮屈そうに半分後を向いて、小声でお延に話しかけた。

「どうだ面白いかね。——由雄さんはどうだ。——」

簡単な質問を次から次へと三つ四つかけて、一口ずつの返事を

お延から受け取った彼は、最後に意味ありげな眼をしてさらに訊きいた。

「今日はどうだった。由雄さんが何とか云やしなかったかね。おおかたぐずぐず云ったんだろう。おれが病気で寝ているのに貴様一人芝居しばやへ行くななんて不埒ふうちせんばん千万だとか何とか。え？　きつとそうだろう」

「不埒千万だなんて、そんな事云やしないわ」

「でも何か云われたろう。岡本は不都合な奴だぐらい云われたに違あるまい。電話の様子がどうも変だったぜ」

小声でさえ話をするものが周囲あたりに一人もない所で、自分だけ長

い受け答をするのはきまりが悪かったので、お延はただ微笑していた。

「構わないよ。叔父さんが後で話をしてやるから、そんな事は心配しないでいいよ」

「あたし心配なんかしちゃいないわ」

「そうか、それでも少しゃ気がかりだろう。結婚早々旦那様の御機嫌を損じちゃ」

「大丈夫よ。御機嫌なんか損じちゃいないって云うのに」

お延は煩さそうに眉を動かした。面白半分調戲って見た岡本は少し真面目になった。

「実は今日お前を呼んだのはね、ただ芝居しばやを見せるためばかりじゃない、少し呼ぶ必要があったんだよ。それで由雄さんが病気のところを無理に来て貰ったような訳だが、その訳さえ由雄さんに後から話しておけば何でもない事さ。叔父さんがよく話しておくよ」

お延の眼は急に舞台を離れた。

「理由わけっていったい何」

「今ここじゃ話し悪いにくがね。いずれ後で話すよ」

お延は黙るよりほかに仕方なかった。岡本はつけ足すように云った。

「今日は吉川さんといっしょに食堂で晩食ばんめしを食べる事になってるんだよ。知ってるかね。そら吉川もあすこへ来ているだろう」

先刻さつきまで眼につかなかった吉川の姿がすぐお延の眼に入った。

「叔父さんといっしょに来たんだよ。倶楽部クラブから」

二人の会話はそこで途切とぎれた。お延はまた真面目に舞台の方を見出した。しかし十分経たつか経たないうちに、彼女の注意がまたそつと後の戸うしろを開ける茶屋の男によって乱された。男は叔母に何か耳語ささやいた。叔母はすぐ叔父の方へ顔を寄せた。

「あのね吉川さんから、食事の用意を致させておきましたから、この次の幕間まくあいにどうぞ食堂へおいで下さいますようにって」

叔父はすぐ返事を伝えさせた。

「承知しました」

男はまた戸をそつと閉てて出て行つた。これから何が始まるのだろうかと思つたお延は、黙つて会食の時間を待つた。

五十一

彼女が叔父叔母の後に随あといて、継子といつしよに、二階の片隅かたすみにある奥行の深い食堂に入るべく席を立つたのは、それから小一時間後であつた。のち彼女は自分と肩を並べて、すれすれに廊下を歩

いて行く従妹いとこに小声で訊きいて見た。

「いったいこれから何が始まるの」

「知らないわ」

継子は下を向いて答えた。

「ただ御飯を食べるぎりなの」

「そうなんでしょう」

訊きこうとすれば訊こうとするほど、継子の返事が曖昧あいまいになつて

くるように思われたので、お延はそれぎり口を閉じた。継子は前

に行く父母ちちははに遠慮があるのかも知れなかった。また自分は何なんにも

承知していないのかも分らなかった。あるいは承知していても、

お延に話したくないので、わざと短かい返事を小さな声で与えな
いとも限らなかつた。

鋭い一瞥いちべつの注意を彼らの上に払って行きがちな、廊下で出逢であう
多数の人々は、みんなお延よりも継子の方に余分の視線を向け
た。忽然こつぜんお延の頭に彼女と自分との比較が閃ひらめいた。姿恰好すがたかつこうは継
子に立ち優まさつていても、服装なりや顔形かおかたちでは是非ひけを取らなければな
らなかつた彼女は、いつまでも子供らしく羞恥はにかんでいるような、
またどこまでも気苦労のなさそうに初々ういういしく出来上つた、処女と
しては水の滴したたるばかりの、この従妹いとこを軽い嫉妬しつとの眼で視みた。そ
こにはたとい気の毒だという侮蔑ぶべつの意こころが全く打ち消されていない

にしたところで、ちよつと彼^ひ我^がの地位を易^かえて立つて見たいぐら
いな羨望^{せんぼう}の念が、著^{いちじ}るしく働らいていた。お延は考えた。

「処女であつた頃、自分にもかつてこんなお嬢さんらしい時期が
あつたらうか」

幸か不幸か彼女はその時期を思い出す事ができなかった。平生
継子を標準^{めやす}におかないで、何とも思わずに暮していた彼女は、今
その従妹と肩を並べながら、賑^{にぎ}やかな電灯で明るく照らされた廊
下の上に立つて、またかつて感じた事のない一種の哀愁^{あいしゆう}に打たれ
た。それは軽いものであつた。しかし涙に変化しやすい性質^たのも
のであつた。そうして今嫉妬^{しつと}の眼で眺めたばかりの相手の手を、

固く握り締め^したくなるような種類のものであった。彼女は心の中で継子に云った。

「あなたは私より純潔です。私が羨^{うらや}ましがるほど純潔です。けれどもあなたの純潔は、あなたの未来の夫に対して、何の役にも立たない武器に過ぎません。私のように手落なく仕向けてすら夫は、けっしてこっちの思う通りに感謝してくれるものではありません。あなたは今に夫の愛を繋^{つな}ぐために、その貴^{たつと}い純潔な生^き地^じを失わなければならないのです。それだけの犠牲を払って夫のために尽してすら、夫はことによるとあなたに辛^{つら}くあたるかも知れません。私はあなたが羨^{うらや}ましいと同時に、あなたがお気の毒です。

近いうちに破壊しなければならぬ貴い宝物を、あなたはそれと心づかずに、無邪気にもっているからです。幸か不幸か始めから私には今あなたのもっているような天然そのままの器うつわが完全に具わっておりませんでしたから、それほどの損失もないのだと云えば、云われないこともないでしょうが、あなたは私と違います。

あなたは父母ふぼの膝下しつかを離れると共に、すぐ天真の姿を傷きずけられます。あなたは私よりも可哀相かわいそうです」

二人の歩き方は遅かった。先に行った岡本夫婦が人に遮さへぎられて見えなくなった時、叔母はわざわざ取って返した。

「早くおいでなね。何をぐずぐずしているの。もう吉川さんの方

じゃ先へ来て待っていらっしやるんだよ」

叔母の眼は継子の方にばかり注がれていた。言葉もとくに彼女に向ってかけられた。けれども吉川という名前を聞いたお延の耳には、それが今までの気分を一度に吹き散らす風のように響いた。彼女は自分のあまり好いていない、また向うでも自分をあまり好いていないらしい、吉川夫人の事をすぐ思い出した。彼女は自分の夫が、平生から一方ならぬ恩顧おんこを受けている勢力家の妻君として、今その人の前に、能う限りの愛嬌あいぎょうと礼儀とを示さなければならなかった。平静のうちに一種の緊張を包んで彼女は、知らん顔をして、みんなの後に随あといて食堂に入った。

五十二

叔母の云った通り、吉川夫婦は自分達より一足早く約束の場所へ来たものと見えて、お延の目標まとにするその夫人は、入口の方を向いて叔父と立談たちばなしをしていた。大きな叔父の後姿よりも、向う側に食はみ出している大々だいたいした夫人のかつぷくが、まずお延の眼に入った。それと同時に、肉づきの豊かな頬に笑いを漲みなぎらしていた夫人の方でも、すぐ眸ひとみをお延の上に移した。しかし咄嗟とつさの電火作用は起ると共に消えたので、二人は正式に挨拶あいさつを取り換かわすまで、ついに互を認め合わなかった。

夫人に投げかけた一瞥^{いちべつ}についで、お延はまたその傍^{そば}に立っている若い紳士を見ない訳に行かなかった。それが間違もなく、先刻^{さつき}廊下で継子といっしょになって、冗談^{じょうだん}半分夫人の双眼鏡をはしたなく批評し合った時に、自分達を驚ろかした無言の男なので、彼女は思わずひやりとした。

簡単な挨拶が各自の間に行われる間、控目^{うしろめ}にみんなの後に立っていた彼女は、やがて自分の番が廻って来た時、ただ三好^{みよし}さんとしてこの未知の人に紹介された。紹介者は吉川夫人であつたが、夫人の用いる言葉が、叔父に対しても、叔母に対しても、また継子に対しても、みんな自分に対するのと同じ事で、その間に少し

も変りがないので、お延はついにその三好の何人^{なんびと}であるかを知らずにしまった。

席に着くとき、夫人は叔父の隣りに坐^{すわ}った。一方の隣には三好が坐らせられた。叔母の席は食卓の角であつた。継子のは三好の前であつた。余つた一脚の椅子^{いす}へ腰を下ろすべく余儀なくされたお延は、少し躊躇^{ちゆうちよ}した。隣りには吉川がいた。そうして前は吉川夫人であつた。

「どうですかけたら」

吉川は催促するようにお延を横から見上げた。

「さあどうぞ」と気軽に云つた夫人は正面から彼女を見た。

「遠慮しずにおかけなさいよ。もうみんな坐つてゐるんだから」

お延は仕方なしに夫人の前に着席した。先を越すつもりでいたのに、かえつて先を越されたという拙い感じが胸のどこかにあつた。自分の態度を礼儀から出た本当の遠慮と解釈して貰うように、これから仕向けて行かなければならないという意志もすぐ働いた。その意志は自分と正反対な継子の初心らしい様子を、食卓に眺めた時、ますます強固にされた。

継子はまたいつもよりおとなし過ぎた。ろくろく口も利かないで、下ばかり向いている彼女の態度の中には、ほとんど苦痛に近い或物が見透された。気の毒そうに彼女を一目見やったお延は、

すぐ前にいる夫人の方へ、彼女に特有な愛嬌あいぎょうのある眼を移した。社交に慣れ切った夫人も黙っている人ではなかった。

調子の好い会話の断片が、二三度二人の間を往ったり来たりした。しかしそれ以上に発展する余地のなかった題目は、そこでぴたりととまってしまった。二人の間に共通な津田を話の種にしようと思ったお延が、それを自分から持ち出したものかどうかと遅ち疑ぎしているうちに、夫人はもう自分を置き去りにして、遠くにいる三好に向った。

「三好さん、黙っていないで、ちつとあっちの面白い話でもして継子さんに聞かせてお上げなさい」

ちようど叔母と話を途切^{とぎ}らしていた三好は夫人の方を向いて静かに云った。

「ええ何でも致しましょう」

「ええ何でもなさい。黙ってちやいけません」

命令的なこの言葉がみんなを笑わせた。

「また独逸^{ドイツ}を逃げ出した話でもするがいい」

吉川はすぐ細君の命令を具体的にした。

「独逸を逃げ出した話も、何度となく繰^くり返^{かえ}すんでね、近頃はもう他^{ひと}よりも自分の方が陳腐^{ちんぷ}になっ^てしまいました」

「あなたのような落ちついた方^{かた}でも、少しは周章^{あわて}たでしょうね」

「少しどころなら好いですが、ほとんど夢中でしたろう。自分じゃよく分らないけれども」

「でも殺されるとは思わなかったでしょう」

「さよう」

三好が少し考えていると、吉川はすぐ隣りから口を出した。

「まさか殺されるとも思うまいね。ことにこの人は」

「なぜです。人間がずうずうしいからですか」

「という訳でもないが、とにかく非常に命を惜しがる男だから」

継子が下を向いたままくすくす笑った。戦争前後に独逸を引き上げて来た人だという事だけがお延に解った。

五十三

三好を中心にした洋行談がひとしきり弾はずんだ。相間相間あいまに巧みなきっかけを入れて話の後を釣り出して行く吉川夫人のお手際てぎわを、黙って観察していたお延は、夫人がどんな努力で、彼ら四人の前に、この未知の青年紳士を押し出そうと試みつつあるかを見抜いた。穩和おだやかというよりもむしろ無口な彼は、自分でそうと気がつかないうちに、彼に好意をもった夫人の口車くちぐるまに乗せられて、最も有利な方面から自分をみんなの前に説明していた。

彼女はこの談話の進行中、ほとんど一言も口を挟さしはさむ余地を与

えられなかった。自然の勢い沈黙の謹聴者たるべき地位に立った彼女には批判の力ばかり多く働らいた。卒直と無遠慮の分子を多量に含んだ夫人の技巧が、毫ごうも技巧の臭味くさみなしに、着々成功して行く段取だんどりを、一步ごとに眺めた彼女は、自分の天性と夫人のそれとの間に非常の距離がある事を認めない訳に行かなかった。しかしそれは上下の距離でなくって、平面の距離だという気がした。では恐るるに足りないかというところではそうでなかった。一部分は得意な現在の地位からも出て来るらしい命令的態度のほか、夫人の技巧には時として恐るべき破壊力が伴って来はしまいかという危険の感じが、お延の胸のどこかでした。

「こっちの気のせいかしらん」

お延がこう考えていると、問題の夫人が突然彼女の方に注意を移した。

「延子さんが呆あきれていらっしやる。あたしがあんまりしゃべるもんだから」

お延は不意を打たれて退避たじろいだ。津田の前でかつて挨拶あいさつに困った事のない彼女の智恵が、どう働いて好いか分らなくなつた。ただ空疎な薄笑が瞬間の虚きよを充みたした。しかしそれは御役目にもならない偽りの愛嬌あいぎょうに過ぎなかつた。

「いいえ、大変面白く伺うかがっております」と後あとから付け足した時

は、お延自分でももう時機の後おくれている事に気がついていた。またやり損そくなつたという苦にがい感じが彼女の口の先まで湧わいて出た。今日こそ夫人の機嫌きげんを取り返してやろうという気込きごみが一度に萎なえた。夫人は残酷に見えるほど早く調子を易かえて、すぐ岡本に向つた。

「岡本さんあなたが外国から帰っていらしってから、もうよつぽどになりますね」

「ええ。何しろ一昔前ひとむかしまえの事ですからな」

「一昔前って何年頃なの、いったい」

「さよう西暦せいれき……」

自然だか偶然だか叔父はもったいぶった考え方をした。

「普仏戦争時分？」
ふふつせんそう

「馬鹿にしちやいけません。これでもあなたの旦那様を案内して
だんなさま
倫敦ロンドンを連れて歩いて上げた覚おぼえがあるんだから」

「じゃ巴理パリで籠城ろうじょうした組じゃないのね」

「冗談じゃない」

三好の洋行談をひとしきりで切り上げた夫人は、すぐ話頭を、それと関係の深い他の方面へ持って行った。自然吉川は岡本の相手にならなければすまなくなつた。

「何しろ自動車のできたてで、あれが通ると、みんなふり返って

見た時分だったからね」

「うん、あの鈍臭いのろくさバスがまだ幅を利きかしていた時代だよ」

その鈍臭いバスが、そういう交通機関を自分で利用した記憶のないほかの者にとって、何の思い出にならなかったにも関わらず、当時を回顧する二人の胸には、やっぱり淡い一種の感慨を惹ひき起すらしく見えた。継子と三好を見較みくらべた岡本は、苦笑しながら吉川に云った。

「お互に年を取ったもんだね。不断はちつとも気がつかずに、まだ若いつもりかなんかで、しきりにはしゃぎ廻っているが、こうして娘の隣に坐って見ると、少し考えるね」

「じゃ始終しじゆうその子の傍そばに坐まっていていらっしたら好いでしよう」

叔母はすぐ叔父に向った。叔父もすぐ答えた。

「全くだよ。外国から帰って来た時にや、この子がまだ」と云いかけてちよつと考えた彼は、「幾つだっけかな」と訊きいた。叔母がそんな呑気のんきな人に返事をする義務はないといわぬばかりの顔をして黙っているの、吉川が傍から口を出した。

「今度はお爺じいさまお爺さまって云われる時機が、もう眼前がんぜんに逼せまつて来たんだ。油断はできません」

継子が顔を赧あかくして下を向いた。夫人はすぐ夫の方を見た。

「でも岡本さんにや自分の年齒としを計る生きた時計が付いてるか

ら、まだよいんです。あなたと来たら何にも反省器械はんせいきかいを持っていらっしやらないんだから、全く手に余るだけですよ」

「その代りお前だっていつまでもお若くっていらっしやるじゃないか」

みんなが声を出して笑った。

五十四

彼らほど多人数たにんずでない、したがって比較的静かなほかの客が、まるで舞台をよそにして、気楽そうな話ばかりしているお延のいち一

群^{ぐん}を折々見た。時間を倏約するため、わざと軽い食事を取ったものたちが、珈琲^{コヒー}も飲まずに、そろそろ立ちかける時が来ても、お延の前にはそれからそれへと新らしい皿が運ばれた。彼らは中途で拭布^{ナプキン}を放^{ほう}り出す訳^だに行かなかった。またそんな世話しない真似^{まね}をする気もないらしかった。芝居を観^みに来たというよりも、芝居場へ遊びに来たという態度で、どこまでもゆつくり構えていた。

「もう始まったのかい」

急に静かになった食堂を見廻した叔父は、こう云って白服のボイに訊^きいた。ボイは彼の前に温かい皿を置きながら、鄭寧^{ていねい}に答え
た。

「ただ今開あきました」

「いいや開いたって。この際眼よりも口の方が大事だ」

叔父はすぐ皮付の鶏とりの股ももを攻撃し始めた。向うにいる吉川も、舞台で何が起こっていようとまるで頓着とんじゃくしないらしかった。彼はすぐ叔父の後あとへついて、劇とは全く無関係な食物くいものの挨拶あいさつをした。

「君は相変らず旨うまそうに食うね。——奥さんこの岡本君が今よりもっと食って、もっと肥ってた時分、西洋人の肩車かたぐるまへ乗った話をお聞きですか」

叔母は知らなかった。吉川はまた同じ問を継子にかけた。継子も知らなかった。

「そうでしょうね、あんまり外聞がいぶんの好い話じゃないから、きつと隠しているんですよ」

「何が？」

叔父はようやく皿から眼を上げて、不思議そうに相手を見た。
すると吉川の夫人が傍そばから口を出した。

「おおかた重過ぎてその外国人を潰つぶしたんでしよう」

「そんならまだ自慢になるが、みんなに変な顔をしてじろじろ見られながら、倫敦ロンドンの群衆の中で、大男の肩の上へ噛かじりついていたんだ。行列を見るためにね」

叔父おじはまだ笑いもしなかった。

「何を捏造^{ねつぞう}する事やら。いったいそりやいつの話だね」

「エドワード七世の戴冠^{たいかん}式の時^{しき}さ。行列を見ようとしてマンションハウスの前に立ってたところが、日本と違って向うのものがあんまり君より背丈^{せいざい}が高過ぎるもんだから、苦し紛^{まぎ}れにいつしよに行つた下宿の亭主に頼んで、肩車に乗せて貰つたって云うじゃないか」

「馬鹿を云っちゃいけない。そりや人違だ。肩車へ乗つた奴はちゃんと知ってるが、僕じゃない、あの猿だ」

叔父の弁解はむしろ真面目^{まじめ}であつた。その真面目な口から猿という言葉が突然出た時、みんなは一度に笑つた。

「なるほどあの猿ならよく似合うね。いくら英吉利人イギリスじんが大きい
たつて、どうも君じゃ辻褄つじつまが合わない過ぎると思ったよ。――あの
猿と来たらまたずいぶん矮小わいしょうだからな」

知っていながらわざと間違えたふりをして見せたのか、あるい
は最初から事実を知らなかったのか、とにかく吉川はやつと腑ふに
落ちたらしい言葉遣いことばづかをして、なおその当人の猿という渾名あだなを、
一座を賑にぎわせる滑稽こっけいの余音よいんのごとく繰り返かえした。夫人は半ばなか好奇
的で、半ば戒飭かいちよくてき的な態度を取った。

「猿だなんて、いったい誰の事をおっしゃるの」
「なにお前の知らない人だ」

「奥さん心配なさらなくても好ござんす。たとい猿がこの席に
ようとも、我々は表裏なく彼を猿々と呼び得る人間なんだから。
その代り向うじゃ私の事を豚々って云ってるから、同なじ事
です」

こんな他愛もない会話が取り換わされている間、お延はついに
社交上の一員として相当の分前を取る事ができなかつた。自分を
吉川夫人に売りつける機会はいつまで経つても来なかつた。夫人
は彼女を眼中に置いていなかった。あるいはむしろ彼女を回避し
ていた。そうして特に自分の一軒置いて隣りに坐っている継子に
ばかり話しかけた。たとい一分間でもこの従妹を、注意の中心と

して、みんなの前に引き出そうとする努力の迹あとさえありありと見えた。それを利用する事のできない継子が、感謝とは反対に、かえって迷惑そうな表情を、遠慮なく外部そとに示すたびに、すぐ彼女と自分を比較したくなるお延の心には羨望せんぼうの漣漪さざなみが立った。

「自分がもしあの従妹の地位に立ったなら」

会食中の彼女はしばしばこう思った。そうしてその後あとから暗あんに人馴ひとなれない継子を憐あわれんだ。最後には何という気の毒な女だろうという軽侮けいぶの念いつが例もの通り起った。

彼らの席を立ったのは、男達の燻らし始めた食後の葉巻に、白い灰が一寸近くも溜った頃であつた。その時誰かの口から出た「もう何時だろう」というきっかけが、偶然お延の位地に変化を与えた。立ち上る前の一瞬間を捉えた夫人は突然お延に話しかけた。

「延子さん。津田さんはどうなすつて」

いきなりこう云つておいて、お延の返事も待たずに、夫人はすぐその後を自分で云い足した。

「先刻から伺おう伺おうと思つてた癖に、つい自分の勝手な話ばかりして——」

この云訳いいわけをお延は腹の中で嘘うそらしいと考えた。それは相手の使
う当座の言葉つきや態度から出た疑でなくって、彼女に云わせる
と、もう少し深い根拠こんきよのある推定であつた。彼女は食堂へ這入はいつ
て夫人に挨拶あいさつをした時、自分の使つた言葉をよく覚えていた。そ
れは自分のためというよりも、むしろ自分の夫のために使つた言
葉であつた。彼女はこの夫人を見るや否や、恭こやうやしく頭を下げて、
「毎度津田が御厄介ごやっかいになりました」と云つた。けれども夫人はそ
の時その津田については一言も口を利かなかつた。自分が挨拶を
交換した最後の同席者である以上、そこにはそれだけの口を利く
余裕が充分あつたにも関わらず、夫人は、すぐよそを向いてし

まった。そうして二三日^{にさんちまえ}前津田から受けた訪問などは、まるで忘れていたような風をした。

お延は夫人のこの挙動を、自分が嫌^{きら}われているからだとかばかり解釈しなかった。嫌われている上に、まだ何か理由があるに違ないと思った。でなければ、いくら夫人でも、とくに津田の名前を回避^{そぶり}するような素振を、彼の妻たるものに示すはずがないと思った。彼女は自分の夫がこの夫人の気に入っているという事実をよく承知していた。しかし単に夫を臆^{ひいき}負にしてくれるという事が、何でその人を妻の前に談話の題目として憚^{はば}かられるのだろう。お延は解らなかった。彼女が会食中、当然他^{ひと}に好かれべき女性とし

ての自己の天分を、夫人の前に發揮するために、二人の間に存在する唯一ゆいいつの共通点とも見られる津田から出立しようと試みて、ついに立し得なかったのも、一つはこれが胸に痞つかえていたからであつた。それをいよいよ席を立とうとする間際まぎわになつて、向うから切り出された時のお延は、ただ夫人の云訳に対してのみ、嘘うそらしいという疑を抱いだくだけではすまなかつた。今頃になつて夫の病氣の見舞をいつてくれる夫人の心の中には、やむをえない社交上の辞令以外に、まだ何か存在しているのではなからうかと考えた。

「ありがとうございます。お蔭かげさまで」

「もう手術をなすったの」

「ええ今日^{こんち}」

「今日^{きょう}？　それであなたよくこんな所へ来られましたね」

「大した病気でもございませんものですから」

「でも寝ていらっしゃるんでしょう」

「寝てはおります」

夫人はそれで構わないのかという様子をした。少なくとも彼女の黙っている様子がお延にはそう見えた。他^{ひと}に對して男らしく無遠慮にふるまっている夫人が、自分にだけは、まるで別な人間として出てくるのではないかと思われた。

「病院へ御入りおはいになつて」

「病院と申すほどの所ではございませんが、ちようどお医者様の二階が空あいておるので、五六日そこへおいていただく事にしております」

夫人は医者の名前と住所ところとを訊きいた。見舞に行くつもりだとも何とも云わなかったけれども、実はそのために、わざわざ津田の話を持ち出したのじやなかろうかという氣のしたお延は、始めて夫人の意味が多少自分に呑み込めたような心持もした。

夫人と違って最初から津田の事をあまり念頭においていなかったらしい吉川は、この時始めて口を出した。

「当人に聞くと、去年から病氣を持ち越しているんだってね。今の若さにそう病氣ばかりしちゃ仕方がない。休むのは五六日に限った事もないんだから、癒^{なお}るまでよく養生するように、そう云って下さい」

お延は礼を云った。

食堂を出た七人は、廊下でまた二組に分れた。

五十六

残りの時間を叔母の家族とともに送ったお延には、それから何

の波瀾はらんも来なかつた。ただ襦袍どてらを着て横臥おうがした寝巻姿ねまきすがたの津田の面影かげが、熱心に舞台を見つめている彼女の頭の中に、不意に出て来る事があつた。その面影は今まで読みかけていた本を伏せて、ここに坐っている彼女を、遠くから眺めているらしかった。しかしそれは、彼女が喜こんで彼を見返そうとする刹那せつなに、「いや疳違かんちがいをしちやいけない、何をしているかちよつと覗のぞいて見ただけだ。お前なんかに用のあるおれじゃない」という意味を、眼つきで知らせるものであつた。騙だまされたお延は何だ馬鹿らしいという氣になった。すると同時に津田の姿も幽霊のようにすぐ消えた。二度目にはお延の方から「もうあなたのような方の事は考えて上

げません」と云い渡した。三度目に津田の姿が眼に浮んだ時、彼女は舌打したうちをしたくなつた。

食堂へ入る前の彼女はいまだかつて夫の事を念頭においていなかったもので、お延に云わせると、こういう不可抗な心の作用は、すべて夕飯後ゆうめしごに起つた新らしい経験にほかならなかつた。彼女は黙つて前後二様にようの自分を比較して見た。そうしてこの急劇な変化の責任者として、胸のうちで、吉川夫人の名前を繰くり返かえさない訳に行かなかつた。今夜もし夫人と同じ食卓テーブルで晚餐ばんさんを共にしなかつたならば、こんな変な現象はけつして自分に起らなかつたろうという気が、彼女の頭のどこかでした。しかし夫人のいかなる点

が、この苦い酒を醸す醗酵分子となつて、どんな具合に彼女の頭のなかに入り込んだのかと訊かれると、彼女はとても判然した返事を与えることができなかった。彼女はただ不明瞭な材料をもつていた。そうして比較的明瞭な断案に到着していた。材料に不足な掛念を抱かない彼女が、その断案を不備として疑うはずはなかった。彼女は総ての原因が吉川夫人にあるものと固く信じていた。

芝居が了ねていったん茶屋へ引き上げる時、お延はそこでまた夫人に会う事を恐れた。しかし会つてもう少し突ッ込んで見たいような氣もした。歸りを急ぐ混雑した間際に、そんな機会の来る

はずもないと、始めから諦^{あきら}められている癖に、そうした好奇心の心が、会いたくないという回避の念の蔭^{かげ}から、ちよいちよい首を出した。

茶屋は幸にして異^{ちが}っていた。吉川夫婦の姿はどこにも見えなかった。襟^{えり}に毛皮の付いた重そうな二重廻^{にじゅうまわ}しを引掛^{ひっか}けながら岡本がコートに袖^{そで}を通しているお延^{かえり}を顧みた。

「今日は宅^{うち}へ来て泊^とって行かないかね」

「え、ありがとう」

泊^とるとも泊^とらないとも片づかない挨拶^{あいさつ}をしたお延^{かえり}は、微笑^{あざわ}しながら叔母を見た。叔母はまた「あなたの気^き楽^{らく}さ加減^{かへん}にも呆^{あき}れます

ね」という表情で叔父を見た。そこに気がつかないのか、あるいは気がついてても無頓着むとんじやくなのか、彼は同じ事を、前よりはもっと真面目じめな調子で繰り返した。

「泊って行くなら、泊つといでよ。遠慮は要いらないから」

「泊っていけったって、あなた、宅うちにや下女がたった一人で、この子の帰るのを待ってるんですもの。そんな事無理ですわ」

「はあ、そうかね、なるほど。下女一人じゃ不用心だね」

そんなら止よすが好かろうと云った風の様子をした叔父は、無論最初からどっちでも構わないものをちよつと問題にして見たただけであつた。

「あたしこれでも津田へ行つてからまだ一晩も御厄介ごやっかいになつた事はなくつてよ」

「はあ、そうだったかね。それは感心に品行方正いたりの至だね」

「厭だ事。——由雄だつて外へ泊つた事なんか、まだ有りやしないわ」

「いや結構ですよ。御夫婦お揃そろいで、お堅くつていらつしやるのは

——」

「何よりもつて恐悦至極きようえつしごく」

先刻さつき聞いた役者の言葉を、小さな声で後あとへ付け足した継子は、

そう云つた後で、自分ながらその大胆さに呆あきれたように、薄赤く

なつた。叔父はわざと大きな声を出した。

「何ですって」

継子はきまりが悪いので、聞こえないふりをして、どんどん門かどの方ぐちへ歩いて行つた。みんなもその後あとに随ついて表へ出た。

車へ乗る時、叔父はお延に云つた。

「お前宅うちへ泊れなければ、泊らないでいいから、その代りいつかおいでよ、二三日中にさんちじゅうにね。少し訊ききたい事があるんだから」

「あたしも叔父さんに伺わなくっちゃならない事があるから、今日のお礼かたがた是非上るわ。もしか都合ができたら明日あしたにでも

伺つてよ、好くつて」

「オー、ライ」

四人の車はこの英語を相図^{あいず}に走^かけ出^だした。

五十七

津田の宅^{うち}とほぼ同じ方角に当る岡本の住居^{すまい}は、少し道程^{みちのり}が遠いので、三人の後^{あと}に随^ついたお延の護謨輪^{ゴムわ}は、小路^{こうじ}へ曲る例の角^{かど}までいっしょに来る事ができた。そこで別れる時、彼女は幌^{ほろ}の中から、前に行く人達に声をかけた。けれどもそれが向うへ通じたか

通じないか分らないうちに、彼女の俤くろまはもう電車通りを横に切れ
ていた。しんとした小路の中で、急に一種の淋さみしさが彼女の胸を
打った。今まで団体的に旋回していたものが、吾われ知らず調子を踏ふ
み外はずして、一人圈外けんがいにふり落された時のように、淡いながら頼り
を失った心持で、彼女は自分の宅うちの玄関を上った。

下女は格子こうしの音を聞いても出て来なかった。茶の間には電灯が
明るく輝やいているだけで、鉄瓶てつびんさえいつものように快い音を立
てなかった。今朝けさ見たと何の変りもない室へやの中を、彼女は今朝と
違った眼で見廻した。薄ら寒い感じが心細い気分を抱擁ほうようし始め
た。その瞬間が過ぎて、ただの淋しさが不安の念に変わりかけた

時、歡樂に疲れた身体を、からだ長火鉢の前に投げかけようとした彼女は、突然勝手口の方を向いて「時、時」と下女の名前を呼んだ。同時に勝手の横に付いている下女部屋の戸を開けた。

二畳敷の真中に縫物をひろげて、その上に他愛なく突ツ伏していたお時は、急に顔を上げた。そうしてお延を見るや否や、いきなり「はい」という返事を判然はつきりして立ち上った。それと共に、針仕事のため、わざと低目にした電灯の笠へ、崩れくずかかった束髪くずの頭をぶつけたので、あらぬ方かたへ波をうった電球が、なおのこと彼女を狼狽ろうばいさせた。

お延は笑いもしなかった。叱る気にもならなかった。こんな場

合に自分ならという彼^ひ我^がの比較さえ胸に浮かばなかった。今の彼女には寝ぼけたお時でさえ、そこにいてくれるのが頼母^{たのも}しかつた。

「早く玄関を締めてお寝。潜^{くぐ}りの※^{かきがね}はあたしがかけて来たから」
下女を先へ寝かしたお延は、着物も着換えずにまた火鉢^{ひばち}の前へ坐った。彼女は器械的に灰をほじくって消えかかった火種に新しい炭を継^つぎ足^たした。そうして家庭としては欠くべからざる要件のごとくに、湯を沸^わかした。しかし夜更^{よふけ}に鳴る鉄瓶^{てつびん}の音に、一人耳を澄ましている彼女の胸に、どこからともなく逼^{せま}ってくる孤独の感が、先刻^{さつき}帰った時よりもなお劇^{はげ}しく募^つって来た。それが平生

遅い夫の戻りを待ちあぐんで起す淋^{さび}しみに比べると、遙^{はる}かに程度が違うので、お延は思わず病院に寝ている夫の姿を、懐^{なつ}かしそうに心の眼で眺めた。

「やっぱりあなたがいらっしやらないからだ」

彼女は自分の頭の中に描き出した夫の姿に向ってこう云った。そうして明日^{あした}は何をおいても、まず病院へ見舞に行かなければならないと考えた。しかし次の瞬間には、お延の胸がもうぴたりと夫の胸に食^{くっ}ついていなかった。二人の間に何だか挟^{はさ}まってしまった。こっちで寄り添おうとすればするほど、中間^{ちゅうかん}にあるその邪魔ものが彼女の胸を突ツついた。しかも夫は平気で澄ましていた。

半ば意地になつた彼女の方でも、そんなら宜しゅうございますといつて、夫に背中を向けなくなつた。

こういう立場まで来ると、彼女の空想は会釈なく吉川夫人の上に飛び移らなければならなかつた。芝居場で一度考えた通り、もし今夜あの夫人に会わなかつたなら、最愛の夫に対して、これほど不愉快な感じを抱かずにすんだらうにという氣ばかり強くした。

しまいに彼女はどこかにいる誰かに自分の心を訴えなくなつた。昨夜書きかけた里へやる手紙の続を書こうと思つて、筆を執りかけた彼女は、いつまで経つても、夫婦仲よく暮しているから

安心してくれという意味よりほかに、自分の思いを巻紙の上に運ぶ事ができなかった。それは彼女が常に両親に対して是非云いた言葉であつた。しかし今夜は、どうしてもそれだけでは物足りない言葉であつた。自分の頭を纏める事に疲れ果た彼女は、とうとう筆を投げ出した。着物もそこへ脱ぎ捨てたまま、彼女はついに床へ入った。長い間眼に映った劇場の光景が、断片的に幾通りの強い色になって、興奮した彼女の頭をちらちら刺戟するの^{しげき}で、彼女は焦らされる人のように、いつまでも眠に落ちる事ができなかつた。

五十八

彼女は枕の上で一時を聴いた。二時も聴いた。それから何時だなんじか分らない朝の光で眼を覚さました。雨戸の隙間すきまから差し込んで来るその光は、明らかに例いっもより寝過いごした事を彼女に物語いつていた。

彼女はその光で枕元に取り散らされた昨夕ゆうべの衣裳を見た。上着と下着と長襦袢ながじゆばんと重なり合あって、すぼりと脱ぎ捨てられたまま、畳の上に崩くずれているので、そこには上下裏表うえしたうらおもての、しだらなく一度に入り乱れた色の塊かたまりりがあるだけであいった。その色の塊かたまりりの下か

ら、細長く折目の付いた端はじを出した金糸入りの檜扇ひおうぎもよう模様の帯は、彼女の手の届く距離まで延びていた。

彼女はこの乱雑な有様を、いささか呆あきれた眼で眺めた。これがかねてから、几帳面きちようめんを女徳じょとくの一つと心がけて来た自分の所作しよさかと思ふと、少しあさましいような心持にもなった。津田に嫁とついで以後、かつてこんな不体裁ふしだらを夫に見せた覚おぼえのない彼女は、その夫が今自分と同じ室へやの中に寝ていないのを見て、ほっと一息した。

だらしないのは着物の事ばかりではなかった。もし夫が入院しないで、例いつもの通り宅うちにいたならば、たといどんなに夜更よふかしをしようとも、こう遅くまで、気を許して寝ているはずがないと

思った彼女は、眼が覚めると共に跳ね起きなかった自分を、どうしても怠けものとして軽蔑しない訳に行かなかった。

それでも彼女は容易に起き上らなかった。昨夕の不首尾を償うためか、自分の知らない間に起きてくれたお時の足音が、先刻から台所で聞こえるのを好い事にして、彼女はいつまでも肌触りの暖かい夜具の中に包まれていた。

そのうち眼を開けた瞬間に感じた、すまないという彼女の心持がだんだん弛んで来た。彼女はいくら女だって、年に一度や二度このくらいの事をしてでも差支えなかつた。彼女はいつにない暢びりした気

分で、結婚後始めて経験する事のできたこの自由をありがたく味わった。これも畢竟夫が留守のお蔭かげだと気のついた時、彼女は当分一人になった今の自分を、むしろ祝福したいくらいに思った。そうして毎日夫と寝起ねおきを共にしていながら、つい心にもとめず、今日まで見過ごしてきた窮屈というものが、彼女にとって存外重い負担であつたのに驚ろかされた。しかし偶発的に起つたこの瞬間の覚醒かくせいは無論長く続かなかつた。いったん解放された自由の眼で、やきもきした昨夕ゆうべの自分を嘲あざけるように眺めた彼女が床を離れた時は、もうすでに違つた気分支配されていた。

彼女は主婦としていつもやる通りの義務を遅いながら綺麗きれいに片

づけた。津田がいないので、だいぶ省ける^{はぶ}手数^{てすう}を利用して、下女も煩^{わづら}わさずに、自分で自分の着物を畳んだ。それから軽い身仕舞^{みじまい}をして、すぐ表へ出た彼女は、寄道もせず、通里から半丁ほど行つた所にある、新らしい自動電話の箱の中に入つた。

彼女はそこで別々の電話を三人へかけた。その三人のうちで一番先に扱^{えら}ばれたものは、やはり津田であつた。しかし自分で電話口へ立つ事のできない横臥^{おうが}状態にある彼の消息は、間接に取次の口から聞くよりほかに仕方がなかつた。ただ別に異状のあるはずはないと思つていた彼女の予期は外^{はず}れなかつた。彼女は「順当でございませす、お変りはございません」という保証の言葉を、看護

婦らしい人の声から聞いた後で、どのくらい津田が自分を待ち受けているかを知るために、今日は見舞に行かなくってもいいかと尋ねて貰った。すると津田がなぜかと云って看護婦に訊き返させた。夫の声も顔も分らないお延は、判断に苦しんで電話口で首を傾けた。こんな場合に、彼は是非来てくれと頼むような男ではなかった。しかし行かないと、機嫌を悪くする男であつた。それでは行けば喜ぶかというところでもなかった。彼はお延に親切の仕損をさせておいて、それが女の義務じゃないかといった風に、取り澄ました顔をしないとも限らなかった。ふとこんな事を考えた彼女は、昨夕吉川夫人から受け取ったらしく自分では思ってい

る、夫に対する一種の感情を、つい電話口で洩^もらしてしまった。

「今日は岡本へ行かなければならないから、そちらへは参りませ
んって云って下さい」

それで病院の方を切った彼女は、すぐ岡本へかけ易^かえて、今に
行ってもいいかと聞き合せた。そうして最後に呼び出した津田の
妹へは、彼の現状を一口報告^{ひとくち}的に通じただけで、また宅^{うち}へ歸っ
た。

五十九

お時の御給仕で朝食兼帯の午の膳あさめしけんたい ひる ぜんに着くのも、お延にとって
は、結婚以来始めての経験であつた。津田の不在から起るこの変
化が、女王クイーンらしい気持を新らしく彼女に与えると共に、毎日の習
慣に反して貪むさぼり得たこの自由が、いつもよりはかえつて彼女を
囚とらえた。身体からだのゆつくりした割合に、心の落ちつけなかつた彼女
は、お時に向つて云つた。

「旦那様だんなさまがいらっしゃらないと何だか変ね」

「へえ、御淋おさむしゅうございます」

お延はまだ云い足りなかつた。

「こんな寢坊をしたのは始めてね」

「ええ、その代りいつでもお早いんだから、たまには朝とお午といっしょでも、宜^{よろ}しゅうございましょう」

「旦那様がいらっしやらないと、すぐあの通りだなんて、思やしくなくて」

「誰がでございます」

「お前がさ」

「飛んでもない」

お時のわざとらしい大きな声は、下手な話し相手よりもひどくお延の趣味に^{こた}へた。彼女はすぐ黙^{もく}ってしまった。

三十分ほど^た経^たって、お時の沓^{くつ}脱^{ぬぎ}に揃^{そろ}えたよそゆきの下駄^げを穿^はい

てまた表へ出る時、お延は玄関まで送って来た彼女を顧かえりみた。

「よく気をつけておくれよ。昨夕見たいに寝てしまうと、不用心だからね」

「今夜も遅く御帰りになるんでございますか」

お延はいつ帰るかまるで考えていなかった。

「あんなに遅くはならないつもりだがね」

たまさかの夫の留守に、ゆっくり岡本で遊んで来たいような気が、お延の胸のどこかでした。

「なるだけ早く帰って来て上げるよ」

こう云い捨てて通りへ出た彼女の足は、すぐ約束の方角へ向つ

た。

岡本の住居は藤井の家とほぼ同じ見当にあるので、途中までは例の川沿の電車を利用する事ができた。終点から一つか二つ手前の停留所で下りたお延は、そこに掛け渡した小さい木の橋を横切って、向う側の通りを少し歩いた。その通りは二三日前の晩、酒場を出た津田と小林とが、二人の境遇や性格の差違から来る纏れ合った感情を互に抱きながら、朝鮮行きだの、お金さんだのを問題にして歩いた往来であつた。それを津田の口から聞かされていなかった彼女は、二人の様子を想像するまでもなく、彼らとは反対の方角に無心で足を運ばせた後で、叔父の宅へ行くには是非

共上^{のぼ}らなければならぬ細長い坂へかかった。すると偶然向うから来た継子に言葉をかけられた。

「昨日^{さくじつ}は」

「どこへ行くの」

「お稽古^{けいこ}」

去年女学校を卒業したこの従妹^{いとこ}は、余暇^{ひま}に任せていろいろなものを習っていた。ピアノだの、茶だの、花だの、水彩画だの、料理だの、何へでも手を出したが、その人の癖を知っているのです。お稽古という言葉聞いた時、お延は、つい笑いたくなくなつた。

「何のお稽古？ トーダンス？」

彼らはこんな楽屋落がくやおちの笑談じょうたんをいうほど親しい間柄あいだがらであつた。しかしお延から見れば、自分より余裕のある相手の境遇に対して、多少の皮肉を意味しないとも限らないこの笑談が、肝心かんじんの当人に、いっこう諷刺ふうしとしての音響を伝えずにすむらしかつた。

「まさか」

彼女はただこう云つて機嫌きげんよく笑つた。そうして彼女の笑は、いかに鋭敏なお延でも、無邪氣その物だと許さない訳に行かなかつた。けれども彼女はついにどこへ何の稽古に行くかをお延に告げなかつた。

「冷かすから厭いやよ」

「また何か始めたの」

「どうせ慾張だから何を始めるか分らないわ」

稽古事の上で、継子が慾張という異名を取っている事も、彼女の宅では隠れない事実であつた。最初妹からつけられて、たちまち家族のうちに伝播でんぱんしたこの悪口わるくちは、近頃彼女自身によって平氣に使用されていた。

「待っていらっしやい。じき歸つて来るから」

軽い足でさつさと坂を下りて行く継子の後姿を一度ふり返つて見たお延の胸に、また尊敬と輕侮とを搗つき交まぜたその人に対するいつもの感じが起つた。

六十

岡本の邸宅^{やしき}へ着いた時、お延はまた偶然叔父の姿を玄関前^みに見出した。羽織も着ずに、兵児帯^{へこおび}をだらりと下げて、その結び目の所に、後^{うしろ}へ廻した両手を重ねた彼は、傍^{そば}で鋤^{くわ}を動かしている植木屋としきりに何か話をしていたが、お延を見るや否や、すぐ向うから声を掛けた。

「来たね。今庭いじりをやってるところだ」

植木屋の横には、大きな通草^{あけび}の蔓^{つる}が巻いたまま、地面の上に投げ出されてあつた。

「そいつを今その庭の入口の門の上へ這はわせようというんだ。
ちよつと好いだろう」

お延は網代組あじろぐみの竹垣の中程にあるその茅門かやもんを支えている新ちようななぐりの柱と丸太の桁けたを見較べた。

「へえ。あの袖垣そでがきの所にあつたのを抜いて来たの」

「うんその代りあすこへは玉縁たまぶちをつけた目関垣めせきがきを拵こしらえたよ」

近頃身体からだに暇ができて、自分の意匠いしょう通り住居すまいを新築したこの叔父の建築に関する単語は、いつの間にか急に殖ふえていた。言葉を聴いただけではとても解らないその目関垣というものを、お延はただ「へえ」と云つて応答あしうっているよりほかに仕方がなかった。

「食後の運動には好いわね。お腹なかが空すいて」

「笑談じょうたんじゃない、叔父さんはまだ午飯ひるめしまえ前なんだ」

お延を引張って、わざわざ庭先から座敷へ上った叔父は「住すみ、住」と大きな声で叔母を呼んだ。

「腹が減って仕方がない、早く飯にしてくれ」

「だから先刻さつきみんなといっしょに召上めしやがれば好いのに」

「ところが、そう勝手元の御都合のいいようにばかりは参らんです、世の中というものはね。第一物ものに区切くぎりのあるという事をあなたは御承知ですか」

自業自得な夫に対する叔母の態度が澄ましたものであると共

に、叔父の挨拶あいさつも相変らずであつた。久しぶりで故郷の空気を吸つたような感じのしたお延は、心のうちで自分の目の前にいるこの一対いっついの老夫婦と、結婚してからまだ一年と経たたない、云わば新生活の門出かどでにある彼ら二人とを比較して見なければならなかつた。自分達も長ながの月日さえ踏んで行けば、こうなるのが順当なのだろうか、またはいくら永くいっしょに暮らしたところで、性格が違えば、互いの立場も末始終すえしじゆうまで変つて行かなければならないのか、年の若いお延には、それが智恵と想像で解けない一種の疑問であつた。お延は今の津田に満足してはいなかつた。しかし未来の自分も、この叔母のように膏氣あぶらけが抜けて行くだろうとは考え

られなかった。もしそれが自分の未来に横^{よこ}わる必然の運命だとすれば、いつまでも現在の光沢^{つや}を持ち続けて行こうとする彼女は、いつか一度悲しいこの打撃を受けなければならなかった。女らしいところがなくなってしまったのに、まだ女としてこの世の中に生存するのは、真^{しん}に恐ろしい生存であるとしか若い彼女には見えなかった。

そんな距離の遠い感想が、この若い細君の胸に湧^わいているとは夢にも気のつきようはずのない叔父は、自分の前に据^すえられた膳^{ぜん}に向って胡坐^{あぐら}を掻^かきながら、彼女を見た。

「おい何をぼんやりしているんだ。しきりに考え込んでいるじゃ

ないか」

お延はすぐ答えた。

「久しぶりにお給仕でもしましょう」

飯櫃おはちがあいにくそこにないので、彼女が座を立ちかけると叔母が呼びとめた。

「御給仕をしたくったって、麵麩パンだからできないよ」

下女が皿の上に狐色に焦こげたトーストを持って来た。

「お延、叔父さんは情なさけない事になっちまったよ。日本に生れて米の飯が食えないんだから可哀想かわいそうだろう」

糖尿病とうにょうびょうの叔父は既定の分量以外に澱粉質でんぷんしつを摂取せつしゅする事を主治医

から厳禁されてしまったのである。

「こうして豆腐ばかり食ってるんだがね」

叔父の膳にはとても一人では平らげ切れないほどの白い豆腐が生なまのままなまで供えられた。

むくむくと肥え太った叔父の、わざとする情なさけなさそうな顔を見たお延は、大して気の毒にならないばかりか、かえって笑いたく
なつた。

「少しや断食でもした方がいいんでしょう。叔父さんみたいに肥って生きてるのは、誰だつて苦痛に違ないから」

叔父は叔母を顧かえりみた。

「お延は元から悪口やだったが、嫁に行ってから一層達者になつたようだね」

六十一

小さいうちから彼の世話になつて成長したお延は、いろいろの角度で出沒しゅつぽつするこの叔父の特色を他人よりよく承知していた。

肥った身体からだに釣り合わない神経質の彼には、時々自分の室へやに入つたぎり、半日ぐらい黙つて口を利きかずにいる癖がある代りに、他の顔ひとさえ見ると、また何かしらしゃべらないでは片時かたときもい

られないといった気作きさくな風があつた。それが元氣のやり場所に困るからというよりも、なるべく相手を不愉快にしたくないという对人的な想いおもやりや、または客を前に置いて、ただのつそつとしてゐる自分の手持無沙汰てもちぶさたを避けるためから起る場合が多いので、用件以外の彼の談話には、彼の平生の心がけから来る一種の興味的中心があつた。彼の成效せいこうに少なからぬ貢献をもたらしただけに思われる、社交上極きわめて有利な彼のこの話術は、その所有者の天から稟うけた諧謔趣味かいぎやくしゆみのために、一層派出はでな光彩を放つ事がしばしばあつた。そうしてそれが子供の時分から彼の傍そばにいたお延の口
に、いつの間にか乗り移ってしまった。機嫌きげんのいい時に、彼を向

うへ廻して軽口^{かるくち}の吐き競^{くら}をやるくらいは、今の彼女にとって何の努力も要^いらない第二の天性のようなものであつた。しかし津田に嫁^といでからの彼女は、嫁ぐとすぐにこの態度を改めた。ところが最初^{つし}慎み^{つし}のために控えた悪口^{わるくち}は、二カ月経つても、三カ月経つてもなかなか出て来なかつた。彼女はついにこの点において、岡本にいた時の自分とは別個の人間になつて、彼女の夫に対してなければならなくなつた。彼女は物足らなかつた。同時に夫を欺^{あざ}むいてゐるような気がしてならなかつた。たまに来て、もとに変わらない叔父の様子を見ると、そこに昔^{むか}しの自由を憶^{おも}い出させる或物があつた。彼女は生豆腐^{なまどうふ}を前に、胡坐^{あぐら}を掻^かいてゐる剽軽^{ひょうきん}な彼の顔

を、過去の記念のように懐かし気に眺めた。

「だってあたしの悪口は叔父さんのお仕込じゃないの。津田に教わった覚おぼえなんか、ありやしないわ」

「ふん、そうでもあるめえ」

わざと江戸っ子を使った叔父は、そういう種類の言葉を、いっさい家庭に入れてはならないものごとくに忌いみ嫌きらう叔母の方を見た。傍はたから注意するとなお面白がって使いたがる癖をよく知っているので、叔母は素知そしらぬ顔をして取り合わなかった。すると目標あてが外はずれた人のように叔父はまたお延に向った。

「いったい由雄さんはそんなに厳格な人かね」

お延は返事をしず、ただにやにやしていた。

「ははあ、笑ってるところを見ると、やっぱり嬉しいんだな」

「何がよ」

「何がよって、そんなに白しろばつくれなくつても、分わつていらあな。――だが本当に由雄さんはそんなに厳格な人かい」

「どうかあたしよく解とらないわ。なぜまたそんな事を真面目まじめくさつてお訊ききになるの」

「少しこつちにも料簡りょうけんがあるんだ、返答次第では」

「おお怖こわい事。じゃ云いつちまうわ。由雄は御察しの通り厳格な人よ。それがどうしたの」

「本当にかい」

「ええ。ずいぶん叔父さんも苦^く嗽^どいのね」

「じゃこっちでも簡潔に結論を云っちまう。はたして由雄さんが、お前のいう通り厳格な人ならばだ。とうてい悪口の達者なお前には向かないね」

こう云いながら叔父は、そこに黙って坐っている叔母の方を、
頷^{あご}でしゃくって見せた。

「この叔母さんなら、ちようどお誂^{あつ}らえ向^{むき}かも知れないがね」
淋しい心持が遠くから来た風のように、不意にお延の胸を撫^なで
た。彼女は急に悲しい気分に囚^{とら}えられた自分を見て驚ろいた。

「叔父さんはいつでも気楽そうで結構ね」

津田と自分とを、好過ぎるほど仲の好い夫婦と仮定してかかった、調戲からかいはんぶん半分の叔父の笑談じょうたんを、ただ座興から来た出鱈目でたらめとして笑ってしまうには、お延の心にあまり隙すきがあり過ぎた。と云って、その隙を飽くまで取り繕とつくろって、他人の前に、何一つ不足のない夫を持った妻としての自分を示さなければならぬとのみ考えている彼女は、心に感じた通りの何物をも叔父の前に露出する自由をもっていなかった。もう少しで涙が眼の中に溜たまろうとしたところを、彼女は瞬またたきでごまかした。

「いくらお誂あつらえ向むきでも、こう年を取っちゃ仕方がない。ねえお

延」

年の割にどこへ行っても若く見られる叔母が、こう云って水々した光沢つやのある眼をお延の方に向けた時、お延は何にも云わなかった。けれども自分の感情を隠すために、第一の機会を利用する事は忘れなかった。彼女はただ面白そうに声を出して笑った。

六十二

親身しんみの叔母よりもかえって義理の叔父の方を、心の中で好いていたお延は、その報酬として、自分もこの叔父から特別に可愛かわいが

られているという信念を常にもっていた。洒落しゃらくでありながら神経質に生れついた彼の気合きあいをよく呑み込んで、その両面に行き渡った自分の行動を、寸分たが違わず叔父の思い通りに樂々と運んで行く彼女には、いつでも年齢としの若さから来る柔軟性が伴っていたので、ほとんど苦痛というものなしに、叔父を喜ばし、また自分に満足を与える事ができた。叔父が鑑賞の眼を向けて、常に彼女の所作しよさを眺めていてくれるように考えた彼女は、時とすると、変化に乏しい叔母の骨はどうしてあんなに堅いのだろうと怪しむ事さえあった。

いかにして異性を取り扱うべきかの修養を、こうして叔父から

ばかり学んだ彼女は、どこへ嫁に行っても、それをそのまま夫に
応用すれば成効せいこうするに違ないと信じていた。津田といっしよに
なった時、始めて少し勝手の違うような感じのした彼女は、この
生れて始めての経験を、なるほどという眼つきで眺めた。彼女の
努力は、新らしい夫を叔父のような人間に熟こなしつけるか、または
すでに出来上った自分の方を、新らしい夫に合うように改造する
か、どっちかにしなければならぬ場合によく出合った。彼女の
愛は津田の上にあつた。しかし彼女の同情はむしろ叔父型の人間
に注そそがれた。こんな時に、叔父なら嬉うれしがってくれるものと思
う事がしばしば出て来た。すると自然の勢いが彼女にそれを逐ちく一いち

叔父に話してしまえと命令した。その命令に背くほど意地の強い彼女は、今までどうかこうか我慢して通して来たものを、今更告白する気にはとてもなれなかった。

こうして叔父夫婦を欺む^{あざ}いてきたお延には、叔父夫婦がまた何の掛念^{けねん}もなく彼女のために騙^{だま}されているという自信があつた。同時に敏感な彼女は、叔父の方でもまた彼女に打ち明けたくつて、しかも打ち明けられない、津田に対する、自分のと同程度ぐらいなある秘密をもっているという事をよく承知していた。有体^{ありてい}に見^み透^かした叔父の腹の中を、お延に云わせると、彼はけっして彼女に大切な夫としての津田を好いていなかったのである。それが二人

の間に横よこわる氣質の相違から来る事は、たとい二人を比較して見た上でなくても、あまり想像に困難のかからない仮定であつた。少くとも結婚後のお延はじきそこに気がついた。しかし彼女はまだその上に材料をもっていた。粗放のようで一面に緻密ちみつな、無頓むとんじ着やくのようで同時に鋭敏な、口先は冷淡でも腹の中には親切氣のあつるこの叔父は、最初会見の当時から、すでに直觀的に津田を嫌きらつていたらしかった。「お前はああいう人が好きなのかね」と訊きかれた裏側に、「じゃおれのようなものは嫌きらだつたんだね」という言葉が、ともに響いたらしく感じた時、お延は思わずはつとした。しかし「叔父さんの御意見は」とこつちから問い返した時の

彼は、もうその気^き下^ま味^ずい関^{せき}を通り越していた。

「おいでよ、お前さえ行く気なら、誰にも遠慮は要^いらないから」と親切に云ってくれた。

お延の材料はまだ一つ残っていた。自分に対して何にも云わなかった叔父の、津田に関するもっと露骨な批評を、彼女は叔母の口を通して聞く事ができたのである。

「あの男は日本中の女がみんな自分に惚^ほれなくっちゃならないよ
うな顔つきをしているじゃないか」

不思議にもこの言葉はお延にとって意外でも何でもなかった。

彼女には自分が津田を精^{せい}一^{いつ}杯^{はい}愛し得るという信念があった。同時

に、津田から精一杯愛され得るという期待も安心もあつた。また叔父の例の悪口わるくちが始まつたという気が何より先に起つたので、彼女は声を出して笑つた。そうして、この悪口はつまり嫉妬しつとから来たのだと一人腹の中で解釈して得意になつた。叔母も「自分の若い時の己惚おのぼれは、もう忘れているんだからね」と云つて、彼女に相槌づちを打つてくれた。……

叔父の前に坐つたお延は自分の後うしろにあるこんな過去を憶おもい出さない訳に行かなかつた。すると「厳格」な津田の妻として、自分が向くとか向かないとかいう下らない彼の笑談じょうだんのうちに、何か真面目じめな意味があるのではなかつたかという気さえ起つた。

「おれの云った通りじゃないかね。なければ仕合せだ。しかし万一何かあるなら、また今ないにしたところで、これから先ひよつと出て来たなら遠慮なく打ち明けなけりやいけないよ」

お延は叔父の眼の中に、こうした慈愛の言葉さえ読んだ。

六十三

感傷的の気分を笑に紛まぎらした彼女は、その苦痛から逃のがれるために、すぐ自分の持って来た話題を叔父叔母の前に切り出した。

「昨日きのうの事は全体どういう意味なの」

彼女は約束通り叔父に説明を求めなければならなかった。すると返答を与えるはずの叔父がかえって彼女に反問した。

「お前はと思う」

特に「お前」という言葉に力を入れた叔父は、お延の腹でも読むような眼遣いめづかをして彼女をじっと見た。

「解らないわ。藪やぶから棒にそんな事訊きいたって。ねえ叔母さん」
叔母はにやりと笑った。

「叔父さんはね、あたしのようなうっかりものには解らないが、お延にならきつと解る。あいつは貴様きより気が利きいてるからって
おっしゃるんだよ」

お延は苦笑するよりほかに仕方なかった。彼女の頭には無論臃^{おぼ}気^{ろげ}ながらある臆測^{おくそく}があつた。けれども強^しいられないのに、伶俐^{りこう}ぶつてそれを口外するほど、彼女の教育は蓮葉^{はすは}でなかった。

「あたしにだつて解りっこないわ」

「まああてて御覧。たいてい見当^{けんとう}はつくだろう」

どうしてもお延の方から先に何か云わせようとする叔父の気色^{けしき}を見て取った彼女は、二三度押問答の末、とうとう推察の通りを云った。

「見合じゃなくつて」

「どうして。——お前にはそう見えるかね」

お延の推測を首肯^{うけが}う前に、彼女の叔父から受けた反問がそれからそれへと続いた。しまいには彼は大きな声を出して笑った。

「あたった、あたった。やっぱりお前の方が住^{すみ}より伶俐^{れい}巧^{くわう}だね」

こんな事で、二人の間に優劣^まをつける気楽な叔父を、お住とお延が馬鹿にして冷評^{ひやか}した。

「ねえ、叔母さんだってそのくらいの事ならたいてい見当がつくわね」

「お前も御賞^{おほめ}にあずかったって、あんまり嬉^{うれ}しくないだろう」

「ええちつともありがたかないわ」

お延の頭に、一座を切り舞わした吉川夫人の幹旋^{あっせん}ぶりがまた描^{えが}

き出^{いだ}された。

「どうもあたしそうだろうと思ったの。あの奥さんが始終^{しじゆう}継子さんと、それからあの三好さんて方^{かた}を、引き立てよう、引き立てようとして、骨を折っていらっしやるんですもの」

「ところがあのお継と来たら、また引き立たない事^{おびただ}夥しいんだからな。引き立てようとすれば、かえって引き下がるだけで、まるで紙袋^{かんぷくろ}を被^{かぶ}った猫見^{ねこみ}たいだね。そこへ行くと、お延のようなのはどうしても得^{とく}だよ。少くとも当世^{とうせい}向^{むき}だ」

「厭^{いや}にしゃあしゃあしているからでしょう。何だか賞^ほめられてるんだか、悪く云われてるんだか分らないわね。あたし継子さんの

ようなおとなしい人を見ると、どうかしてあんなになりたいと思うわ」

こう答えたお延は、叔父のいわゆる当世向を発揮する余地の自分に与えられなかった、したがって自分から見ればむしろ不成効ふせいこうに終わった、昨夕ゆうべの会合を、不愉快と不満足の眼で眺めた。

「何でまたあたしがあの席に必要なだったの」

「お前は継子の従姉いとこじゃないか」

ただ親類だからというのが唯一ゆいいつの理由だとすれば、お延のほかにも出席しなければならぬ人がまだたくさんあった。その上相手の方では当人がたった一人出て来ただけで、紹介者の吉川夫婦

を除くと、向うを代表するものは誰もいなかった。

「何だか変じゃないの。そうするともし津田が病気でなかったら、やっぱり親類として是非出席しなければ悪い訳になるのね」

「それやまた別口だ。ほかに意味があるんだ」

叔父の目的中には、昨夕ゆうべの機会を利用して、津田とお延を、一度でも余計吉川夫婦に接近させてやろうという好意が含まれていたのである。それを叔父の口から判切はっきり聴かされた時、お延は日頃自分が考えている通りの叔父の気性きしょうがそこに現われているように思っあて、暗あんに彼の親切を感謝すると共に、そんならなぜあの吉川夫人ともっと親しくなれるように仕向けてくれなかったのかと恨うら

んだ。二人を近づけるために同じ食卓に坐らせたには坐らせたが、結果はかえって近づけない前より悪くなるかも知れないという特殊な心理を、叔父はまるで承知していないらしかった。お延はいくら行き届いても男はやっぱり男だと批評したくなった。しかしその後から、吉川夫人と自分との間に横わる一種微妙な関係を知らない以上は、誰が出て来ても畢竟どうする事もできないのだから仕方がないという、嘆息を交えた寛恕の念も起つて来た。

六十四

お延はその問題をそこへ放り出したまま、まだ自分の腑に落ちずに残っている要点を片づけようとした。

「なるほどそういう意味合だったの。あたし叔父さんに感謝しなくっちゃならないわね。だけどまだほかに何かあるんでしょう」

「あるかも知れないが、たといないにしたところで、単にそれだけでも、ああしてお前を呼ぶ価値は充分あるだろう」

「ええ、有るには有るわ」

お延はこう答えなければならなかった。しかしそれにしては勧誘の仕方が少し猛烈過ぎると腹の中で思った。叔父は果して最後の一物を胸に蔵い込んでいた。

「実はお前にお婿さんの眼利めききをして貰もらおうと思ったのさ。お前はよく人を見抜く力をもってるから相談するんだが、どうだろうあの男は。お継の未来の夫としていいだろうか悪いだろうか」

叔父の平生から推して、お延はどこまでが真面目まじめな相談なのか、ちよつと判断に迷った。

「まあ大変な御役目うけたまを承うわったのね。光栄の至りだ事」
こう云いながら、笑って自分の横にいる叔母を見たが、叔母の様子おきが案外沈着なので、彼女はすぐ調子を抑えた。

「あたしのようなものが眼利めききをするなんて、少し生意気よ。それにただ一時間ぐらいああしていっしょに坐っていただけじゃ、誰

だつて解りつこないわ。千里眼でもなくっちゃ」

「いやお前にはちよつと千里眼らしいところがあるよ。だから皆みんななが訊ききたがるんだよ」

「冷評ひやかしちゃ厭いやよ」

お延はわざと叔父を相手にしないふりをした。しかし腹の中では自分に媚こびる一種の快感を味わった。それは自分が實際他ひとにそう思われているらしいという把捉はそくから来る得意にほかならなかった。けれどもそれは同時に彼女を失意にする覲面てきめんの事実で破壊されべき性質のものであった。彼女は反対に近い例証としてその裏面にすぐ自分の夫を思い浮べなければならなかった。結婚前千里

眼以上に彼の性質を見抜き得たとばかり考えていた彼女の自信は、結婚後今日こんにちに至るまでの間に、明らかな太陽に黒い斑点のできるように、思い違いかんちがいの痕迹こんせきで、すでにそこそこ汚よごれていた。畢竟夫ひつきょうに対する自分の直覚は、長い月日の経験によつて、訂正されべく、補修されべきものかも知れないという心細い真理に、ようやく頭を下げかけていた彼女は、叔父に煽あおられてすぐ図に乗るほど若くもなかった。

「人間はよく交際つきあつて見なければ實際解らないものよ、叔父さん」

「そのくらいな事は御前に教わらないだつて、誰だつて知つてら

あ

「だからよ。一度会ったぐらいで何にも云える訳がないっていうのよ」

「そりゃ男の云い草ぐさだろう。女は一眼見ても、すぐ何かいうじゃないか。またよく旨い事うまいを云うじゃないか。それを云って御覧というのさ、ただ叔父さんの参考までに。なにもお前に責任なんか持たせやしないから大丈夫だよ」

「だって無理ですもの。そんな予言者みたいな事。ねえ叔母さん」

叔母はいつものようにお延に加勢かせいしなかった。さればと云っ

て、叔父の味方にもならなかった。彼女の予言を強いる気色を見せない代りに、叔父の悪強いもとめなかった。始めて嫁にやる可愛い長女の未来の夫に関する批判の材料なら、それがどんなに軽かろうと、耳を傾むける値打は充分あるといった風も見えた。お延は当り障りのない事を一口二口云っておくよりほかに仕方がなかった。

「立派な方じゃありませんか。そうして若い割に大変落ちついていらっしやるのね。……」

その後を待っていた叔父は、お延が何にも云わないので、また催促するように訊いた。

「それつきりかね」

「だって、あたしあの方かたの一軒いっけん置いてお隣へ坐らせられて、ろくろくお顔も拝見しなかったんですもの」

「予言者をそんな所へ坐らせるのは悪かったかも知れないがね。」

——何かありそうなもんじゃないか、そんな平凡な観察でなしに、もっとお前の特色を発揮するような、ただ一言ひとことで、ずばりと向うの急所へあたるような……」

「むずかしいのね。——何しろ一度ぐらいじゃ駄目よ」

「しかし一度だけで何か云わなければならぬ必要があるとしたらどうだい。何か云えるだろう」

「云えないわ」

「云えない？　じゃお前の直覚は近頃もう役に立たなくなっただね」

「ええ、お嫁に行ってから、だんだん直覚が擦^すり減^へらされてしまったの。近頃は直覚じゃなくって鈍^{どん}覚^{かく}だけよ」

六十五

口先でこんな押問答を長たらしく繰り返していたお延の頭の中には、また別の考えが絶えず並行して流れていた。

彼女は夫婦和合の適例として、叔父から認められている津田と自分を疑わなかった。けれども初対面の時から津田を好いてくれなかった叔父が、その後彼の好悪こうおを改めるはずがないという事もよく承知していた。だから睦むつましそうな津田と自分とを、彼は始終しじゅう不思議な眼で、眺めているに違ないと思っていた。それを他の言葉で云い換えると、どうしてお延のような女が、津田を愛し得るのだろうという疑問の裏に、叔父はいつでも、彼自身の先見に対する自信を持ち続けていた。人間を見損みそくなつたのは、自分でなくて、かえってお延なのだという断定が、時機を待って外部に揺曳ようえいするため、彼の心に下層にいつも沈澱ちんでんしているらしかった。

「それなのに叔父はなぜ三好に対する自分の評を、こんなに執^{しつこ}濃く聴こうとするのだろうか」

お延は解^げしかねた。すでに自分の夫を見損なったものとして、暗^{あん}に叔父から目^め指^さされているらしい彼女に、その自覚を差しおい
て、おいそれと彼の要求に応ずる勇氣はなかった。仕方がないの
で、彼女はしまいに黙ってしまった。しかし年来遠慮のなさ過ぎ
る彼女を見慣れて来た叔父から見ると、この際彼女の沈黙は、不
思議に近い現象にほかならなかった。彼はお延を措^おいて叔母の方
を向いた。

「この子は嫁に行ってから、少し人間が変わって来たようだね。だ

いぶ臆病になった。それもやっぱり旦那様の感化かな。不思議なもんだな」

「あなたがあんまり苛めるからですよ。さあ云え、さあ云えて、責めるように催促されちゃ、誰だって困りますよ」

叔母の態度は、叔父を窘めるよりもむしろお延を庇護う方に傾いていた。しかしそれを嬉しがるには、彼女の胸が、あまり自分の感想で、いっぱいになり過ぎていた。

「だけどこりや第一が継子さんの問題じゃなくって。継子さんの考え一つできまるだけだとあたし思うわ、あたしなんか余計な口を出さないだつて」

お延は自分で自分の夫を択えらんだ当時の事を憶おもい起さない訳に行
かなかった。津田を見出みいだした彼女はすぐ彼を愛した。彼を愛した
彼女はすぐ彼の許もとに嫁とつぎたい希望を保護者に打ち明けた。そうし
てその許諾と共にすぐ彼に嫁いだ。冒頭から結末に至るまで、彼
女はいつでも彼女の主人公であつた。また責任者であつた。自分
の料簡りょうけんをよそにして、他人の考えなどを頼りたがつた覚おぼえはいまだ
かつてなかった。

「いったい継子さんは何とおっしゃるの」

「何とも云わないよ。あいつはお前よりなお臆病だからね」

「肝心かんじんの当人がそれじゃ、仕方がないじゃありませんか」

「うん、ああ臆病じゃ実際仕方がない」

「臆病じゃないのよ、おとなしいのよ」

「どっちにしたって仕方がない、何にも云わないんだから。あるいは何にも云えないのかも知れないね、種がなくなつて」

そういう二人が漫然として結びついた時に、夫婦らしい関係が、はたして両者の間に成立し得るものかというのが、お延の胸に横^{よこた}わる深い疑問であつた。「自分の結婚ですらこうなのに」という論理^{ロジック}がすぐ彼女の頭に閃^{ひら}めいた。「自分の結婚だって畢竟^{ひつぎやう}は似たり寄つたりなんだから」という風に、この場合を眺める事のできなかつた彼女は、一直線に自分の眼をつけた方ばかり見た。

馬鹿らしいよりも恐ろしい気になった。なんという気楽な人だろうとも思った。

「叔父さん」と呼びかけた彼女は、呆れたように細い眼を強く張って彼を見た。

「駄目だよ。あいつは初めっから何にも云う気がないんだから。元来はそれでお前に立ち合って貰ったような訳なんだ、実を云うとね」

「だってあたしが立ち合えばどうするの」

「とにかく継が是非つぎそうしてくれっておれ達に頼んだんだ。つまりあいつは自分よりお前の方をよっぽど伶俐りこうだと思ってるんだ。

そうしてたとい自分は解らなくつても、お前なら後からいろいろ云ってくれる事があるに違ないと思ひ込んでゐるんだ」

「じゃ最初からそうおっしゃれば、あたしだってその氣で行くのに」

「ところがまたそれは厭いやだというんだ。是非黙つててくれというんだ」

「なぜでしょう」

お延はちよつと叔母の方を向いた。「きまりが悪いからだよ」と答える叔母を、叔父は遮やんぎつた。

「なにきまりが悪いばかりじゃない。成心せいしんがあつちや、好い批評

ができないというのが、あいつの主意なんだ。つまりお延の公平に得た第一印象を聞かして貰いたいというんだろう」

お延は初めて叔父に強^しいられる意味を理解した。

六十六

お延から見た継子は特殊の地位を占めていた。こちらの利害を心にかけてくれるという点において、彼女は叔母に及ばなかった。自分と気が合うという意味では叔父よりもずっと縁が遠かった。その代り血統上の親和力や、異性に基^{もとづ}く牽引^{けんいん}性^{せい}以外に、年齢

の相似から来る有利な接触面をもっていた。

若い女の心を共通に動かすいろいろな問題の前に立って、興味に充^みちた眼を見張る時、自然の勢として、彼女は叔父よりも叔母よりも、継子に近づかなければならなかった。そうしてその場合における彼女は、天分から云って、いつでも継子の優者であった。経験から推せば、もちろん継子の先輩に違なかった。少なくともそういう人として、継子から一段上に見られているという事を、彼女はよく承知していた。

この小さい嘆美者には、お延のいうすべてを何でも真^まに受ける癖があった。お延の自覚から云えば、一つ家に寝起^{ねおき}を共にしてい

る長い間に、自分の優越を示す浮誇ふこの心から、柔軟性じゅうなんせいに富んだこの従妹いとこを、いつの間にかそう育て上げてしまったのである。

「女は一目見て男を見抜かなければいけない」

彼女はかつてこんな事を云って、無邪気な継子おおを驚ろかせた。

彼女はまた充分それをやり終おせるだけの活きた眼力がんりきを自分に具え

ているものとして継子おに対した。そうして相手の驚きが、羨うらやみか

ら嘆賞まぎわに変わって、しまいに崇拜の間際まで近づいた時、偶然彼女

の自信を実現すべき、津田と彼女との間に起った相思の恋愛事件

が、あたかも神秘の焰ほのおのごとく、継子の前に燃え上った。彼女の

言葉は継子にとってついに永久の真理その物になった。一般の世

間に向って得意であつた彼女は、とくに継子に向って得意でなければならなかつた。

お延の見た通りの津田が、すぐ継子に伝えられた。日常接触の機会を自分自身にもっていない継子は、わが眼わが耳の範囲外に食^はみ出^だしている未知の部分を、すべて彼女から与えられた間接の知識で補なつて、容易に津田という理想的な全体を造り上げた。

結婚後半年以上を経過した今のお延の津田に対する考えは變つていた。けれども継子の彼に対する考えは毫^{ごう}も變らなかつた。彼女は飽^あくまでもお延を信じていた。お延も今更前言を取り消すよ
うな女ではなかつた。どこまでも先見の明によつて、天の幸福を

享^うける事のできた少数の果報者として、継子の前に自分を標榜^{ひょうぼう}していた。

過去から持ち越したこういう二人の関係を、余儀なく記憶の舞台に躍^{おど}らせて、この事件の前に坐らなければならなくなったお延は、辛い^{つら}よりもむしろ快よくなかった。それは皆^みんなが寄つてたかつて、今まで糊塗^{こと}して来た自分の弱点を、早く自白しろと間接に責めるように思えたからである。こっちの「我^が」以上に相手が意地の悪い事をするように見えたからである。

「自分の過失に対しては、自分が苦しみさえすればそれでたくさ
んだ」

彼女の腹の中には、平生から貯蔵してあるこういう弁解があった。けれどもそれは何事も知らない叔父や叔母や継子に向って叩きつける事のできないものであった。もし叩きつけるとすれば、彼ら三人を無心に使噓して、自分に当擦りをやらせる天に向ってするよりほかに仕方がなかった。

膳を引かせて、叔母の新らしく淹れて来た茶をがぶがぶ飲み始めた叔父は、お延の心にこんな交み入った蟠まりが蜿蜒つていよ
うと思うはずがなかった。造りたての平庭を見渡しながら、晴々
した顔つきで、叔母と二言三言、自分の考案になった樹や石の配
置について批評しあった。

「来年はあの松の横の所へ楓かえでを一本植えようと思うんだ。何だかここから見ると、あすこだけ穴が開あいてるようでおかしいからね」

お延は何の気なしに叔父の指さしている見当けんとうを見た。隣家となりと地続じつづきになっている塀際へいぎわの土をわざと高く盛り上げて、そこへ小さな孟宗藪もうそうやぶをこんもり繁しげらした根の辺あたりが、叔父のいう通り疎まばらに隙すいていた。先刻さつきから問題を変えよう変えようと思って、暗あんに機会を待っていた彼女は、すぐ気転を利きかした。

「本当ね。あすこを塞ふさがないと、さもさも藪やぶを拵こしらえましたって云うように変ね」

談話は彼女の予期した通りよその溝へ流れ込んだ。しかしそれが再びもとの道へ戻って来た時は、前より急な傾斜面を通らなければならなかった。

六十七

それは叔父が先刻玄関先で鋤くわを動かしていた出入でいりの植木屋に呼ばれて、ちよつと席を外はずした後あと、また庭口から座敷へ上つて来た時の事であつた。

まだ学校から帰らない百合子ゆりこや一の噂うわさに始まつた叔母とお延の

談話は、その時また偶然にも継子の方に滑り込みつつあった。

「慾張屋さん、もう好い加減に帰りそうなもんだのにね、何をしているんだろう」

叔母はわざわざ百合子の命けた渾名で継子を呼んだ。お延はすぐその慾張屋の様子を思い出した。自分に許された小天地のうちでは飽くまで放恣なくせに、そこから一步踏み出すと、急に謹慎の模型見たように竦んでしまう彼女は、まるで父母の監督によって仕切られた家庭という籠の中で、さも愉快らしく囀る小鳥のようなもので、いったん戸を開けて外へ出されると、かえってどう飛んでいいか、どう鳴いていいか解らなくなるだけであつた。

「今日は何のお稽古けいこに行ったの」

叔母は「あてて御覧」と云った後で、すぐ坂の途中から持って来たお延の好奇心を満足させてくれた。しかしその稽古の題目が近頃熱心に始め出した語学だと聞いた時に、彼女はまた改めて従妹いとこの多慾に驚ろかされた。そんなにいるいろいろなものに手を出していったい何にするつもりだろうという気さえした。

「それでも語学だけには少し特別の意味があるんだよ」

叔母はこう云って、弁護かたがた継子の意味をお延に説明した。それが間接ながらやはり今度の結婚問題に関係しているのだ。お延は叔母の手前殊勝しゆせうらしい顔をしてなるほどと首肯うなずかなけ

ればならなかった。

夫の好むもの、でなければ夫の職業上妻が知っていると都合の
好いもの、それらを予想して結婚前に習っておこうという女の心
かけは、未来の良人りょうじんに対する親切に違なかった。あるいは単に男
の気に入るためとしても有利な手段に違なかった。けれども継子
にはまだそれ以上に、人間としてまた細君としての大事な稽古けいこが
いくらでも残っていた。お延の頭に描き出されたその稽古は、不
幸にして女を善くよするものではなかった。しかし女を鋭敏にする
ものであった。悪く摩擦まさつするには相違なかった。しかし伶俐れいりに研
ぎ澄すますものであった。彼女はその初歩を叔母から習った。叔父の

お蔭かげでそれを今日こんにちに発達させて来た。二人はそういう意味で育て上げられた彼女を、満足の眼で眺めているらしかった。

「それと同じ眼がどうしてあの継子に満足できるだろう」

従妹いとこのどこにも不平らしい素振そぶりさえ見せた事のない叔父叔母は、この点においてお延に不可解であつた。強しいて解釈しようとするれば、彼らは姪めいと娘を見る眼に区別をつけているとでも云うよりほかに仕方がなかつた。こういう考えに襲ほつわれると、お延は突然口惜くやしくなつた。そういう考えがまた時々発作ほつさのようにお延の胸を掴つかんだ。しかし城府を設けない行き届いた叔父の態度や、取扱いに公平を欠いた事のない叔母の親切で、それはいつでも燃え

上る前に吹き消された。彼女は人に見えない袖そでを顔へあてて内部の赤面を隠しながら、やっぱり不思議な眼をして、二人の心持を解けない謎なぞのように不断から見つめていた。

「でも継子さんは仕合せね。あたし見たいに心配性しんぱいしょうでないから」「あの子はお前よりもずっと心配性だよ。ただ宅うちにいと、いくら心配したくっても心配する種がないもんだから、ああして平気でいられるだけなのさ」

「でもあたしなんか、叔父さんや叔母さんのお世話になってた時分から、もっと心配性だったように思うわ」

「そりやお前と継つぎとは……」

中途で止めた叔母は何をいう気が解らなかった。性質が違うという意味にも、身分が違うという意味にも、また境遇が違うという意味にも取れる彼女の言葉を追究する前に、お延ははっと思つた。それは今まで気のつかなかった或物に、突然ぶつかったような動悸がしたからである。

「昨日の見合に引き出されたのは、容貌の劣者として暗に従妹の器量を引き立てるためではなかったらうか」

お延の頭に石火のようなこの暗示が閃めいた時、彼女の意志も平常より倍以上の力をもつて彼女に逼った。彼女はついに自分を抑えつけた。どんな色をも顔に現さなかった。

「継子さんは得とくな方かたね。誰にでも好かれるんだから」

「そうも行かないよ。けれどもこれは人の好々すきずきだからね。あんな馬鹿でも……」

叔父が縁側えんがわへ上ったのと、叔母がこう云いかけたのとは、ほとんど同時であつた。彼は大きな声で「継がどうしたって」と云いながらまた座敷へ入つて来た。

六十八

すると今まで抑おさえつけていた一種の感情がお延の胸に盛り返し

て来た。飽くまで機嫌きげんの好い、飽くまで元氣みに充ちた、そうして飽くまで楽天的に肥え太ったその顔が、瞬間のお延をとっさに刺しげ戟きした。

「叔父さんもずいぶん人が悪いのね」

彼女は藪やぶから棒にこう云わなければならなかった。今日こんにちまで二人の間に何百遍なんびやっぺんとなく取り換わされたこの常套じょうとうな言葉を使ったお延の声は、いつもと違っていた。表情にも特殊なところがあつた。けれども先刻さつきからお延の腹の中にどんな潮うしおの満干みちひがあつたか、そこにまるで氣のつかずにいた叔父は、平生の細心にも似ず、全く無邪氣であつた。

「そんなに人が悪うがすかな」

例の調子でわざと空つとぼけた彼は、澄まして刻煙草きざみを雁首がんくびへ詰めた。

「おれの留守るすにまた叔母さんから何か聴きいたな」

お延はまだ黙っていた。叔母はすぐ答えた。

「あなたの人の悪いぐらい今さら私から聴かないでもよく承知してるそうですよ」

「なるほどね。お延は直覺派だからな。そうかも知れないよ。何しろ一目見てこの男の懷中には金がいくらあつて、彼はそれを犢ふ鼻禪んどしのミツへ挟はさんでいるか、または胴巻どうまきへ入れて臍へその上に乗つけ

ているか、ちゃんと見分ける女なんだから、なかなか油断はできないよ」

叔父の笑談はけっして彼の予期したような結果を生じなかった。お延は下を向いて眉と睫毛をいっしょに動かした。その睫毛の先には知らない間に涙がいつぱい溜った。勝手を違えた叔父の悪口もぱたりととまった。変な圧迫が一度に三人を抑えつけた。

「お延どうかしたのかい」

こう云った叔父は無言の空虚を充たすために、煙管で灰吹を叩いた。叔母も何とかその場を取り繕ろわなければならなくなつた。

「何だね小供らしい。このくらいな事で泣くものがありますか。いつもの笑談じゃないか」

叔母の小言こごとは、義理のある叔父の手前を兼た挨拶あいさつとばかりは聞えなかった。二人の関係を知り抜いた彼女の立場を認める以上、どこから見ても公平なものであった。お延はそれをよく承知していた。けれども叔母の小言をもっともと思えば思うほど、彼女はなお泣きたくなかった。彼女の唇くちびるが顫ふるえた。抑えきれない涙が後から後からと出た。それにつれて、今まで堰せきとめていた口の関も破れた。彼女はついに泣きながら声を出した。

「何もそんなにまでして、あたしを苛いじめなくったって……」

叔父は当惑そうな顔をした。

「苛めやしないよ。賞^ほめてるんだ。そらお前が由雄さんの所へ行
く前に、あの人を評した言葉があるだろう。あれを皆^{みんな}な蔭^{かげ}で感心
しているんだ。だから……」

「そんな事承^{うかが}わなくっても、もうたくさんです。つまりあたしが
芝居へ行ったのが悪いんだから。……」

沈黙がすこし続いた。

「何だかとんだ事になっちまったんだね。叔父さんの調^{から}戯^かい方^{かた}が
悪かったのかい」

「いいえ。皆^{みな}んなあたしが悪いんでしょう」

「そう皮肉を云っちゃいけない。どこが悪いか解らないから訊くんだ」

「だから皆みんなあたしが悪いんだって云ってるじゃありませんか」
「だが訳を云わないからさ」

「訳なんかないんです」

「訳がなくなつて、ただ悲しいのかい」

お延はなお泣き出した。叔母は苦々にがにがしい顔をした。

「何だねこの人は。駄々うちツ子じゃあるまいし。宅うちにいた時分、いくら叔父さんに調戲われたって、そんなに泣いた事なんか、ありやしないくせに。お嫁に行きたてで、少し旦那だんなから大事にされ

ると、すぐそうなるから困るんだよ、若い人は」

お延は唇を噛くちびるんで黙った。すべての原因が自分にあるものとのみ思い込んだ叔父はかえって気の毒そうな様子を見せた。

「そんなに叱しかったってしょうがないよ。おれが少し冷評ひやかし過ぎたのが悪かったんだ。——ねえお延そうだろう。きっとそうに違ちがな

い。よしよし叔父さんが泣かした代りに、今に好い物をやる」

ようやく発作ほっさの去ったお延は、叔父からこんな風に小供扱せいいにされる自分をどう取り扱せって、跋はつの悪いこの場面に、平静な一転化を与えたものだろうと考えた。

六十九

ところへ何にも知らない継子^{つぎこ}が、語学^{けいこ}の稽古^{けいこ}から帰って来て、ひよつくり顔を出した。

「ただいま」

和解の心棒を失って困っていた三人は、突然それを見出^{みいだ}した人のように喜こんだ。そうしてほとんど同時に挨拶^{あいさつ}を返した。

「お帰んなさい」

「遅^さかったのね。先刻^{さつき}から待^{まち}ってたのよ」

「いや大変な^{まちかね}お待兼^{まちかね}だよ。継子^{つぎこ}さんはどうしたろう、どうしたろ

うって」

神経質な叔父の態度は、先刻の失敗を取り戻す意味を帯びているので、平生よりは一層快豁かいかつであつた。

「何でも継子さんに逢つて、是非話したい事があるんだそうだ」
こんな余計な事まで云つて、自分の目的とは反対な影を、お延の上に逆さかさに投げておきながら、彼はかえつて得意になっているらしかつた。

しかし下女が襖越ふすまこしに手を突いて、風呂の沸わいた事を知らせに来た時、彼は急に思いついたように立ち上つた。

「まだ湯なんかに入っちゃいられない。少し庭に用が残ってるか

ら。――お前達先へ入るなら入るがいい」

彼は氣に入りの植木屋を相手に、残りの秋の日を土の上に費や
すべく、再び庭へ下り立った。

けれどもいったん背中を座敷の方へ向けた後でまたふり返っ
た。

「お延、湯に入って晩飯でも食べておいで」

こう云って二三間歩いたかと思うと彼はまた引き返して来た。

お延は頭がよく働くその世話せわしない様子を、いかにも彼の特色ら
しく感心して眺めた。

「お延が来たから晩に藤井でも呼んでやろうか」

職業が違っても同じ学校出だけに古くから知り合の藤井は、津田との関係上、今では以前よりよほど叔父に縁の近い人であった。これも自分に対する好意からだと解釈しながら、お延は別に嬉しいうれと思う気にもなれなかった。藤井一家と津田、二つのものが離れているよりも、はるか余計に、彼女は彼らより離れていた。

「しかし来るかな」といった叔父の顔は、まさにお延の腹の中を物語っていた。

「近頃みんなおれの事を隠居隠居っていうが、あの男の隠居主義と来たら、遠い昔からの事で、とうていおれなどの及ぶところ

じゃないんだからな。ねえ、お延、藤井の叔父さんは飯を食いに来いしたら、来るかい」

「そりやどうだかあたしにや解らないわ」

叔母は婉曲^{えんきよく}に自己を表現した。

「おおかたいらっしやらないでしょう」

「うん、なかなかおいそれとやって来そうもないね。じゃ止^よすか。——だがまあ試しにちよつと掛けてみるがいい」

お延は笑い出した。

「掛けてみるったって、あすこにや電話なんかありやしないわ」

「じゃ仕方がない。使でもやるんだ」

手紙を書くのが面倒だったのか、時間が惜しかったのか、叔父はそう云ったなりさつさと庭口の方へ歩いて行つた。叔母も「じゃあたしは御免蒙ごめんこうむつてお先へお湯に入ろう」と云いながら立ち上つた。

叔父の潔癖を知つて、みんなが遠慮するのに、自分だけは平気で、こんな場合に、叔父の言葉通り断行して顧かえりみない叔母の態度は、お延にとって羨うらやましいものであつた。また忌いまわしいものであつた。女らしくない厭いやなものであると同時に、男らしい好いものであつた。ああできたらしさぞ好かろうという感じと、いくら年をとつてもああはやりたくないという感じが、彼女の心にいつも

の通り交錯こうさくした。

立って行く叔母の後姿うしろすがたを彼女がぼんやり目送もくそうしていると、一人残った継子が突然誘った。

「あたしのお部屋へ来なくって」

二人は火鉢ひばちや茶器で取り散らされた座敷をそのままにして外へ出た。

七十

継子の居間はとりも直さず津田に行く前のお延の居間であつ

た。そこに机を並べて二人いた昔の心持が、まだ壁にも天井にも残っていた。硝子戸ガラスどを箴はめた小さい棚たなの上に行儀よく置かれた木彫の人形もそのままであった。薔薇ばらの花を刺繡ぬいにした籃入かごいりのピンクッションもそのままであった。二人してお対ついに三越から買つて来た唐草模様からくさの染付そめつけの一輪挿いちりんざしもそのままであった。

四方を見廻したお延は、従妹いとこと共に暮した処女時代の匂においを至る所に嗅かいだ。甘い空想に充みちたその匂が津田という対象を得てついに実現された時、忽然こつぜん鮮やかな焰ほのおに変化した自己の感情の前に扑舞べんぶしたのは彼女であった。眼に見えないでも、瓦斯ガスがあつたから、ぱっと火が点ついたのだと考えたのは彼女であった。空想と現

実の間には何らの差違を置く必要がないと論断したのは彼女であつた。顧^{かえり}みるとその時からもう半年^{はんとし}以上経過していた。いつか空想はついに空想にとどまるらしく見え出して来た。どこまで行つても現実化されないものらしく思われた。あるいは極^{きわ}めて現実化され悪^{にく}いものらしくなって来た。お延の胸^{うち}の中には微^{かす}かな溜^{ため}息^{いき}さえ宿^すつた。

「昔は淡い夢のように、しだいしだいに確実な自分から遠ざかつて行くのではなからうか」

彼女はこういう観念の眼で、自分の前に坐^{すわ}っている従妹を見た。多分は自分と同じ径路を踏んで行かなければならない、また

ひよっとしたら自分よりもつと予期に外れた未来に突き当らなければならぬこの処女の運命は、叔父の手にある諾否の賽が、置の上に転がり次第、今明日中にでも、永久に片づけられてしまうのであった。

お延は微笑した。

「継子さん、今日はあたしがお神籤を引いて上げましょうか」

「なんで？」

「何でもないのよ。ただよ」

「だってただじゃつまらないわ。何かきめなくっちゃ」

「そう。じゃきめましょう。何がいいでしょうね」

「何がいいか、そりゃあたしにや解らないわ。あなたがきめて下さらなくっちゃ」

継子は容易に結婚問題を口へ出さなかった。お延の方からむやみに云い出されるのも苦痛らしかった。けれども間接にどこかでそこに触れて貰もらいたい様子がありありと見えた。お延は従妹いとこを喜よろこばせてやりたかった。と云って、後で自分の迷惑になるような責任を持つのは厭いやであった。

「じゃあたしが引くから、あなた自分でおきめなさい、ね。何でも今あなたのお腹の中で、一番知りたいと思ってる事があるでしょう。それにするのよ、あなたの方で、自分勝手に。よくっ

て」

お延は例の通り継子の机の上に乗っている彼ら夫婦の贈物を取ろうとした。すると継子が急にその手を抑えた。

「厭よ」

お延は手を引込めなかった。

「何が厭なの。いいからちよいとお貸しなさいよ。あなたの嬉しがるのを出して上げるから」

神籤みくじに何の執着もなかったお延は、突然こうして継子と戯たわむれたくなった。それは結婚以前の処女らしい自分を、彼女に憶おもい起させる良い媒介なかだちであつた。弱いものの虚きよを衝つくために用いられる腕

の力が、彼女を男らしく活潑かつぱつにした。抑えられた手を跳ね返した。彼女は、もう最初の目的を忘れていた。ただ神籤箱みくじばこを継子の机の上から奪い取りたかった。もしくはそれを言い前に、ただ継子と争いたかった。二人は争った。同時に女性の本能から来るわざとらしい声を憚りはばかなく出して、遊技ゆうぎ的な戦いに興を添えた。二人はついに硯箱すずりばこの前に飾ってある大事な一輪挿いちりんざしを引っ繰ひくり返かえした。紫檀しだの台からころろと転がり出したその花瓶かびんは、中にある水を所ところ嫌きらわず打ち空あけながら畳の上に落ちた。二人はようやく手を引いた。そうして自然の位置から不意に放り出ほうだされた可愛らしい花瓶を、同じように黙って眺めた。それから改めて顔を見合わせるや否

や、急に抵抗する事のできない衝動を受けた人のように、一度に笑い出した。

七十一

偶然の出来事がお延をなお小供らしくした。津田の前でかつて感じた事のない自由が瞬間に復活した。彼女は全く現在の自分を忘れた。

「継子さん早くぞうきん雑巾を取っていらっしやい」

「厭よ。あなたがこぼ零したんだから、あなた取っていらっしやい」

二人はわざと譲り合った。わざと押問答をした。

「じゃジャン拳けんよ」と云い出したお延は、緘ほそい手を握って勢よく継子の前に出した。継子はすぐ応じた。宝石の光る指が二人の間にちらちらした。二人はそのたんびに笑った。

「狡猾ずるいわ」

「あなたこそ狡猾いわ」

しまいにお延が負けた時には零こぼれた水がもう机掛と畳の目の中へ綺麗きれいに吸い込まれていた。彼女は落ちつき払たもとって袂たもとから出した手巾ハンケチで、濡ぬれた所を上から抑おさえつけた。

「雑巾なんか要いりゃしない。こうしておけば、それでたくさん

よ。水はもう引いちまったんだから」

彼女は転がった花瓶はないけを元の位置に直して、
擡くだけかかった花を鄭てい寧ねいにその中へ挿さし込んだ。そうして今までの頓興とんきようをまるで忘れた
人のように澄まし返った。それがまたたまらなくおかしいと見え
て、継子はいつまでも一人で笑っていた。

発作ほっさが静まった時、継子は帯の間に隠した帙入ちついりの神籤みくじを取り出
して、傍そばにある本箱の抽斗ひきだしへしまい易かえた。しかもその上からぴ
ちんと錠じようを下おろして、わざとお延の方を見た。

けれども継子にとっていつまでも続く事のできるらしいこの無
意味な遊技的感興は、そう長くお延を支配する訳に行かなかつ

た。ひとしきり我を忘れた彼女は、従妹いとこより早く醒さめてしまっ
た。

「継子さんはいつでも気楽で好いわね」

彼女はこう云って継子を見返した。当あたり障さわりのない彼女の言葉
はとても継子に通じなかった。

「じゃ延子さんは気楽でないの」

自分だって気楽な癖にと云わんばかりの語気のうちには、誰か
らでも、世間見ずの御嬢さん扱いにされる兼かねての不平も交っ
てい

「あなたとあたしといったところが違うんでしょう」

二人は年齢としが違った。性質も違った。しかし気兼苦労という点にかけて二人のどこにどんな違があるか、それは継子のまだ考えた事のない問題であつた。

「じゃ延子さんどんな心配があるの。少し話してちょうだいな」

「心配なんかないわ」

「そら御覧なさい。あなただってやっぱり気楽じゃないの」

「そりや気楽は気楽よ。だけどあなたの気楽さは少し訳が違ふのよ」

「どうしてでしょう」

お延は説明する訳に行かなかつた。また説明する気になれな

かった。

「今に解るわ」

「だけど延子さんとあたしとは三つ違よ、たった」

継子は結婚前と結婚後の差違をまるで勘定^{かんじょう}に入れていなかった。

「ただ年齢ばかりじゃないのよ。境遇の変化よ。娘が人の奥さんになるとか、奥さんがまた旦那様^{だんなさま}を亡^なくなくて、未亡人^{びぼうじん}になるとか」

継子は少し怪訝^{けげん}な顔をしてお延を見た。

「延子さんは宅^{うち}にいた時と、由雄さんの所へ行ってからと、どっ

ちが気楽なの」

「そりゃ……」

お延は口籠くちごもった。継子は彼女に返答を拵こしらえる余地を与えなかった。

「今の方が気楽なんでしょう。それ御覧なさい」

お延は仕方なしに答えた。

「そうばかりにも行かないわ。これで」

「だってあなたが御自分で望んでいらした方じゃないの、津田さんは」

「ええ、だからあたし幸福よ」

「幸福でも気楽じゃないの」

「気楽な事も気楽よ」

「じゃ気楽は気楽だけれども、心配があるの」

「そう継子さんのように押しつめて来ちゃ敵かなわないわね」

「押しつめる気じゃないけれども、解らないから、ついそうなるのよ」

七十二

だんだん勾配こうはいの急いになって来た会話は、いつの間まにか継子の結

婚問題に滑^{すべ}り込んで行つた。なるべくそれを避けたかつたお延には、今までの行きがかり上、またそれを避ける事のできない義理があつた。経験に乏しい処女の期待するような予言はともかくも、男女^{なんによ}関係に一日^{いちじつ}の長ある年上の女として、相当の注意を与えてやりたい親切もないではなかつた。彼女は差し障^{さわ}りのない際^{きわ}どい筋の上を婉曲^{えんきよく}に渡つて歩いた。

「そりや駄^だ目^めよ。津田の時は自分の事だから、自分によく解つただけれども、他^{ひと}の事になるとまるで勝手が違つて、ちつとも解らなくなるのよ」

「そんなに遠慮しないだつてよかないの」

「遠慮じゃないのよ」

「じゃ冷淡なの」

お延は答える前にしばらく間まをおいた。

「継子さん、あなた知ってて。女の眼は自分に一番縁故の近いものに会った時、始めてよく働らく事ができるのだという事を。

眼が一秒で十年以上の手柄てがらをするのは、その時に限るのよ。しかもそんな場合は誰だしょうがいって生涯にそうたんとありやしないわ。ことによると生涯に一返いっぺんも来ないですんでしまうかも知らないわ。だからあたしなんかの眼はまあ盲目めくら同然よ。少なくとも平生は」

「だって延子さんはそういう明るい眼をちゃんと持っていていらっ

しやるんじゃないの。そんならなぜそれをあたしの場合に使って下さらなかったの」

「使わないんじゃない、使えないのよ」

「だって岡目八目おかめはちもくって云うじゃありませんか。傍はたにいるあなたには、あたしより余計公平に分るはずだわ」

「じゃ継子さんは岡目八目で生涯の運命をきめてしまいう気なの」
「そうじゃないけれども、参考にやなるでしょう。ことに延子さんを信用しているあたしには」

お延はまたしばらく黙っていた。それから少し前よりは改あらたまった態度で口を利きき出した。

「継子さん、あたし今あなたにお話ししたでしょう、あたしは幸福だった」

「ええ」

「なぜあたしが幸福だかあなた知ってて」

お延はそこで句切くぎりをおいた。そうして継子の何かいう前に、すぐ後を継つぎ足たした。

「あたしが幸福なのは、ほかに何にも意味はないのよ。ただ自分の眼で自分の夫を択えらぶ事ができたからよ。岡目八目でお嫁に行かなかったからよ。解とって」

継子は心細そうな顔をした。

「じゃあたしのようなものは、とても幸福になる望はないのね」

お延は何か云わなければならなかった。しかしすぐは何とも云えなかった。しまいに突然興奮したらしい急な調子が思わず彼女の口から迸^{ほとば}しり出した。

「あるのよ、あるのよ。ただ愛するのよ、そうして愛させるのよ。そうさえすれば幸福になる見込はいくらでもあるのよ」

こう云ったお延の頭の中には、自分の相手としての津田ばかりが鮮明に動いた。彼女は継子に話しかけながら、ほとんど三好^{みよし}の影さえ思い浮べなかった。幸いそれを自分のためとのみ解釈した継子は、真^まともにお延の調子を受けるほど感激しなかった。

「誰を」と云った彼女は少し呆れたようにお延の顔を見た。「昨^{ゆう}夕^べお目にかかったあの方^{かた}の事？」

「誰でも構わないのよ。ただ自分でこうと思い込んだ人を愛するのよ。そうして是非その人に自分を愛させるのよ」

平生包^{つつ}み蔵^{かく}しているお延の利かない気^き性^{しょう}が、しだいに鋒^{ほう}鉞^{ぼう}を露^{あら}わして来た。おとなしい継子はそのたびに少しずつ後^{あと}へ退^{さが}った。

しまいに近寄りにくい二人の間の距離を悟った時、彼女は微^{かす}かな溜息^{ためいき}さえ吐^ついた。するとお延が忽然^{こっぜん}また調子を張り上げた。

「あなたあたしの云う事を疑^{うたぐ}っていらっしやるの。本当よ。あたし嘘^{うそ}なんか吐^ついちゃいないわ。本当よ。本当にあたし幸福なの

よ。解ったでしょう」

こう云って絶対に継子を首肯うけがさせた彼女は、後からまた独り言ひとごとのように付け足した。

「誰だってそうよ。たとい今その人が幸福でないにしたところで、その人の料簡りょうけん一つで、未来は幸福になれるのよ。きつとなれるのよ。きつとなって見せるのよ。ねえ継子さん、そうでしょう」

お延の腹の中を知らない継子は、この予言をただ漠然ばくぜんと自分の身の上に応用して考えなければならなかった。しかしいくら考えてもその意味はほとんど解らなかった。

七十三

その時廊下伝いに聞こえた忙がしい足音の主ががらりと室^{へや}の入口を開けた。そうして学校から帰った百合子が、遠慮なくつかつか入って来た。彼女は重そうに肩から釣^かるした袋を取って、自分の机の上に置きながら、ただ一口「ただいま」と云って姉に挨拶^{あいさつ}した。

彼女の机を据^すえた場所は、ちようどもとお延の坐^すっていた右手の隅^{すみ}であつた。お延が津田へ片づくや否や、すぐその後^{あと}へ入る事のできた彼女は、従姉^{いとこ}のいなくなつたのを、自分にとって大変な

好都合こうつごうのように喜よろこんだ。お延はそれを知しってるので、わざと言葉をかけた。

「百合子さん、あたしまたお邪魔に上ありましたよ。よくって」

百合子は「よくいらっしやいました」とも云いわなかった。机の角へ右の足を載のせて、少し穴の開あきそうになった黒い靴足袋くつたびの親指の先を、手で撫なでていたが、足を畳の上へおろすと共に答えた。

「好いわ、来ても。追おい出されたんでなければ」

「まあひどい事」と云いって笑わらったお延は、少し間まをおいてから、また彼女を相手にした。

「百合子さん、もしあたしが津田を追い出されたら、少しは可哀かわい相そうだと思って下さるでしょう」

「ええ、そりや可哀相だと思って上げてもいいわ」

「そんなら、その時はまたこのお部屋へおいて下すって
「そうね」

百合子は少し考える様子をした。

「いいわ、おいて上げて。お姉さまがお嫁に行った後なら」

「いえ継子さんがお嫁にいらっしやる前よ」

「前に追い出されるの？ そいつは少し——まあ我慢してなるべく追い出されないようにしたらいいでしょう、こっちの都合もあ

る事だから」

こう云った百合子は年上の二人と共に声を揃えて笑った。そうして袴も脱がずに、火鉢の傍へ来てその間に坐りながら、下女の手持ってきた木皿を受取って、すぐその中にある餅菓子を食べ出した。

「今頃お八ツ？　このお皿を見ると思い出すのね」

お延は自分が百合子ぐらゐであつた当時を回想した。学校から帰ると、待ちかねて各自の前に置かれる木皿へ手を出したその頃の様子がありありと目に浮かんだ。旨そうに食べる妹の顔を微笑して見ていた継子も同じ昔を思い出すらしかった。

「延子さんあなた今でもお八ツ召しやがって」

「食べたり食べなかったりよ。わざわざ買うのは億劫だし、そうかつて宅うちに何かあっても、昔むかのように旨おいしくないのね、もう」

「運動が足りないからでしょう」

二人が話しているうちに、百合子は綺麗きれいに木皿からを空にした。そうして木に竹を接ついだような調子で、二人の間に割り込んで来た。

「本当よ、お姉さまはもうじきお嫁に行くのよ」

「そう、どこへいらっしゃるの」

「どこだか知らないけれども行く事は行くのよ」

「じゃ何という方の所へいらっしやるの」

「何という名だか知らないけれども、行くのよ」

お延は根気よく三度目の問を掛けた。

「それはどんな方なの」

百合子は平気で答えた。

「おおかた由雄さんみたいな方なんでしょう。お姉さまは由雄さんが大好きなんだから。何でも延子さんの云う通りになって、大変好い人だって、そう云っててよ」

薄赤くなった継子は急に妹いもうとの方へかかって行つた。百合子は頓とんき興ような声を出してすぐそこを飛び退いた。

「おお大変大変」

入口の所でちよつと立ちどまってこう云った彼女は、お延と継子をそこへ残したまま、一人で室を逃げ出して行つた。

七十四

お延が下女から食事の催促を受けて、二返目に継子と共に席を立つたのは、それから間もなくであつた。

一家のものは明るい室に晴々した顔を揃えた。先刻何かに拗ねて縁の下へ這入つたなり容易に出て来なかつたという一さえ、機

嫌^んよく叔父と話をしていた。

「一さんは犬みたいよ」と百合子がわざわざ知らせに来た時、お延はこの小さい従妹^{いとこ}から、彼がぱくりと口を開^あいて上から鼻の先へ出された餅菓子^{もちがし}に食いついたという話を聞いたのであった。

お延は微笑しながらいわゆる犬みたいな男の子の談話に耳を傾けた。

「お父さま彗星^{ほっきぼし}が出ると何か悪い事があるんでしよう」

「うん昔の人はそう思っていた。しかし今は学問が開^{ひら}けたから、そんな事を考えるものは、もう一人もなくなっちまった」

「西洋では」

西洋にも同じ迷信が古代に行われたものかどうか、叔父は知らないしかった。

「西洋？　西洋にや昔からない」

「でもシーザーの死ぬ前に彗星が出たっていうじゃないの」

「うんシーザーの殺される前か」と云った彼は、ごまかすよりほかに仕方がないしかった。

「ありや羅馬ローマの時代だからな。ただの西洋とは訳が違うよ」

一はしめはそれで納得なっとくして黙った。しかしすぐ第二の質問をかけた。

前よりは一層奇抜なその質問は立派に三段論法の形式を具えていた。井戸を掘って水が出る以上、地面の下は水でなければならな

い、地面の下が水である以上、地面は落^{おっ}こちなければならぬ。
しかるに地面はなぜ落こちないか。これが彼の要^{よう}旨であつた。そ
れに対する叔父の答弁がまたすこぶるしどろもどろなので、傍^{はた}の
ものはみんなおかしがつた。

「そりやお前落ちないさ」

「だって下が水なら落ちる訳じゃないの」

「そう旨^{うま}くは行かないよ」

女連^{おんなれん}が一度に笑い出すと、一はたちまち第三の問題に飛び移つ
た。

「お父さま、僕この宅^{うち}が軍艦だと好いな。お父さまは？」

「お父さまは軍艦よりただの宅の方が好いね」

「だって地震の時宅なら潰れるじゃないの」

「ははあ軍艦ならいくら地震があっても潰れないか。なるほどこいつは気がつかなかった。ふうん、なるほど」

本式に感服している叔父の顔を、お延は微笑しながら眺めた。

先刻^{さつき}藤井を晚餐^{ばんさん}に招待するといった彼は、もうその事を念頭においていないらしかった。叔母も忘れたように澄ましていた。お延はつい一に訊^きいて見たくなつた。

「一さん藤井の真事^{まこと}さんと同級なんでしょう」

「ああ」と云った一は、すぐ真事についてお延の好奇心を満足さ

せた。彼の話は、とうてい子供でなくては云えない、観察だの、批評だの、事実だのに富んでいた。食卓は一時彼の力で賑わった。

みんなを笑わせた真事の逸話の中に、下のようなのがあった。

ある時学校の帰りに、彼は一といっしょに大きな深い穴を覗き込んだ。土木工事のために深く掘り返されて、往来の真中に出来上ったその穴の上には、一本の杉丸太が掛け渡してあった。一は真事に、その丸太の上を渡ったら百円やると云った。すると無鉄砲な真事は、背囊を背負って、彪犬の皮で拵えたといわれる例の靴を穿いたまま、「きつとくれる？」と云いながら、ほとんど平

たい幅をもっていない、つるつる滑りすべそうな材木を渡り始めた。最初は今に落ちるだろうと思って見ていた一は、相手が一步一步と、危ないながらゆっくりゆっくり自分に近づいて来るのを見て、急に怖こわくなった。彼は深い穴の真上にある友達をそこへ置き去りにして、どんどん逃げだした。真事はまた始終足元しじゆうに気を取られなければならないので、丸太を渡り切ってしまうまでは、一がどこへ行ったか全く知らずにいた。ようやく冒険を仕遂しとげて、約束通り百円貰おうと思って始めて眼を上げると、相手はいつの間にか逃げてしまつて、一の影も形もまるで見えなかったというのである。

「一の方が少し小伶俐こりこうのようだな」と叔父が評した。

「藤井さんは近頃あんまり遊びに来ないようね」と叔母が云った。

七十五

小供が一つ学校の同級にいる事のほかに、お延の関係から近頃岡本と藤井の間に起った交際には多少の特色があつた。否いやでも顔を合せなければならぬ祝儀しゅうぎぶしゅうぎ不祝儀の席を未来に控えている彼らは、事情の許す限り、双方から接近しておく便宜を、平生から認

めない訳に行かなかった。ことに女の利害を代表する岡本の方は、藤井よりも余計この必要を認めなければならぬ地位に立っていた。その上岡本の叔父には普通の成功者に附随する一種の如才^{さい}なさがあった。持って生れた楽天的な広い横断面^{おうだんめん}もあった。神経質な彼はまた誤解を恐れた。ことに生計^{くらしむき}向に不自由のないものが、比較的貧しい階級から受けがちな尊大^{ふそん}不遜の誤解を恐れた。多年の多忙と勉強のために損なわれた健康を回復するために、当分閑地についた昨今の彼には、時間の余裕も充分あった。その時間の空虚なところを、自分の趣味に適^{かな}う模細工^{モザイク}で毎日埋^うめて行く彼は、今まで自分と全く縁故のないものとして、平気で通り過ぎ

た人や物にだんだん接近して見ようという意志ももっていた。

これらの原因が困^{こん}絡^{がら}がつて、叔父は時々藤井の宅^{うち}へ自分の方から出かけて行く事があつた。排外的に見える藤井は、律義^{りちぎ}に叔父の訪問を返そうともしなかったが、そうかと云つて彼を厭^{いや}がる様子も見せなかつた。彼らはむしろ快よく談じた。底^{そこ}まで打ち解けた話にはできないにしたところで、ただ相互の世界を交換するだけでも、多少の興味にはなつた。その世界はまた妙に食い違つていた。一方から見るといかにも迂^う濶^{かつ}なものが、他方から眺めるといかにも高尚であつたり、片側で卑俗と解釈しなければならぬものを、向うでは是非とも實際的に考えたがつたりするところに、

思わざる発見がひよいひよい出て来た。

「つまり批評家って云うんだろね、ああ云う人の事を。しかしあれじゃ仕事はできない」

お延は批評家という意味をよく理解しなかった。実際の役に立たないから、口先で偉そうな事を云って他をひとごまかすんだろうと思った。「仕事ができなくって、ただ理窟りくつを弄もてあそんでいる人、そういう人に世間はどんな用があるだろう。そういう人が物質上相当の報酬を得ないで困るのは当然ではないか」。これ以上進む事のできなかった彼女は微笑しながら訊きいた。

「近頃藤井さんへいらして」

「うんこないだもちよつと散歩の歸りに寄つたよ。草臥くたびれた時、休むにはちょうど都合の好い所にある宅だからね、あすこは」

「また何か面白いお話しでもあつて」

「相変らず妙な事を考えてるね、あの男は。こないだは、男が女を引張り、女がまた男を引張るつて話をさかにやつて来た」

「あら厭いやだ」

「馬鹿らしい、好い年をして」

お延と叔母はこもごも呆あきれたような言葉を出す間に、継子だけはよそを向いた。

「いや妙な事があるんだよ。大将なかなか調べているから感心

だ。大将のいうところによると、こうなんだ。どこの宅うちでも、男の子は女親を慕い、女の子はまた反対に男親を慕うのが当り前だというんだが、なるほどそう云えば、そうだね」

親身しんみの叔母よりも義理の叔父を好いていたお延は少し真面目まじめになつた。

「それでどうしたの」

「それでこうなんだ。男と女は始終しじゅう引張り合わないと、完全な人間になれないんだ。つまり自分に不足なところがどこかにあつて、一人じゃそれをどうしても充みたす訳に行かないんだ」

お延の興味は急に退ひきかけた。叔父の云う事は、自分の疾とうに

知っている事実に過ぎなかった。

「昔から陰陽いんようわごう和合わがっっていうじゃありませんか」

「ところが陰陽和合が必然でありながら、その反対の陰陽不和がまた必然なんだから面白いじゃないか」

「どうして」

「いいかい。男と女が引張り合うのは、互に違ったところがあるからだろう。今云った通り」

「ええ」

「じゃその違ったところは、つまり自分じゃない訳だろう。自分とは別物だろう」

「ええ」

「それ御覧。自分と別物なら、どうしたっていっしょになれっこないじゃないか。いつまで経ったって、離れているよりほかに仕方がないじゃないか」

叔父はお延を征服した人のようにからからと笑った。お延は負けなかった。

「だけどそりや理窟よ」

「無論理窟さ。どこへ出ても立派に通る理窟さ」

「駄目よ、そんな理窟は。何だか変ですよ。ちようど藤井の叔父さんがふり廻しそうな屁理窟よ」

お延は叔父をやり込める事ができなかった。けれども叔父のいう通りを信ずる気にはなれなかった。またどうあつても信ずるのは厭いやであつた。

七十六

叔父は面白半分まだいろいろな事を云つた。

男が女を得て成じやう仏ぶつする通りに、女も男を得て成じやう仏ぶつする。しかし

それは結婚前の善男善女に限られた真理である。一度ひとたび夫婦関係が

成立するや否や、真理は急に寝返りを打って、今までとは正反対

の事実を我々の眼の前に突きつける。すなわち男は女から離れなければ成仏できなくなる。女も男から離れなければ成仏し悪にくくなる。今までの牽引けんいん力がたちまち反撥はんぱつ性に変化する。そうして、昔から云い習わして来た通り、男はやっぱり男同志、女はどうしても女同志という諺ことわざを永久に認めたくなる。つまり人間が陰陽和合の実を挙あげるのは、やがて来るきたべき陰陽不和の理を悟るために過ぎない。……

叔父の言葉のどこまでが藤井の受売うけうりで、どこからが自分の考えなのか、またその考えのどこまでが真面目まじめで、どこからが笑談じょうだんなのか、お延にはよく分らなかった。筆を持つ術すべを知らない叔父は

恐ろしく口の達者な人であつた。ちよつとした心棒しんぼうがあると、その上に幾枚でも手製の着物を着せる事のできる人であつた。俗にいう警句という種類のものが、いくらでも彼の口から出た。お延が反対すればするほど、膏あぶらが乗つてとめどなく出て来た。お延はとうとう好い加減にして切り上げなければならなかつた。

「ずいぶんのべつね、叔父さんも」

「口じゃとても敵かないっこないからお止よしよ。こつちで何かいうと、なお意地になるんだから」

「ええ、わざわざ陰陽不和を醸かもすように仕向けるのね」

お延が叔母とこんな批評を取り換わせている間、叔父はにこに

こして二人を眺めていたが、やがて会話の途切れるのを待って、徐ろに宣告を下した。

「とうとう降参しましたかな。降参したなら、降参したで宜しい。敗けたものを追窮はしないから。——そこへ行くと男にはまた弱いものを憐れむという美点があるんだからな、こう見えても」

彼はさも勝利者らしい顔を粧って立ち上がった。障子を開けて室の外へ出ると、もったいぶった足音が書斎の方に向いてだんだん遠ざかって行った。しばらくして戻って来た時、彼は片手に小型の薄っぺらな書物を四五冊持っていた。

「おいお延、好いものを持って来た。お前明日^{あした}にでも病院へ行くなら、これを由雄さんの所へ持ってッておやり」

「何よ」

お延はすぐ書物を受け取って表紙を見た。英語の標題が、外国語に熟しない彼女の眼を少し悩ませた。彼女は拾い^{ひろ}読^{よみ}にぼつぽつ読み下した。ブック・オフ・ジョークス。イングリッシ・ウィット・エンド・ヒュモア。……

「へええ」

「みんな滑稽^{こっけい}なもんだ。洒落^{しゃれ}だとか、謎^{なぞ}だとかね。寝ていて読むにはちょうど手頃で好いよ、肩が凝^こらなくってね」

「なるほど叔父さん向むきのものね」

「叔父さん向でもこのくらいな程度なら差支さしつかえあるまい。いくら由雄さんが厳格だって、まさか怒りやしまい」

「怒るなんて、……」

「まあいいや、これも陰陽和合のためだ。試しに持ってッてみるさ」

お延が礼を云って書物を膝ひざの上に置くと、叔父はまた片々かたかたの手に持った小さい紙片かみぎれを彼女の前に出した。

「これは先刻さつきお前を泣かした賠償金ばいしょうきんだ。約束だからついでに持つておいで」

お延は叔父の手から紙片を受取らない先に、その何であるかを知った。叔父はことさらにそれをふり廻した。

「お延、これは陰陽不和になった時、一番よく利^きく薬だよ。たいていの場合には一服吞むとすぐ平癒^{へいゆ}する妙薬だ」

お延は立っている叔父を見上げながら、弱い調子で抵抗した。

「陰陽不和じゃないのよ。あたし達のは本当の和合なのよ」

「和合ならなお結構だ。和合の時に吞めば、精神がますます健全になる。そうして身体^{からだ}はいよいよ強壯になる。どっちへ転んでも間違のない妙薬だよ」

叔父の手から小切手を受け取って、じっとそれを見つめていた

お延の眼に涙がいつぱい溜^{たま}った。

七十七

お延は叔父の送らせるといふ俤^{くろま}を断った。しかし停留所まで自身で送ってやるという彼の好意を断りかねた。二人はついに連れ立って長い坂を河縁^{かわべり}の方へ下りて行つた。

「叔父さんの病気には運動が一番いいんだからね。——なに歩くのは自分の勝手さ」

肥^いっていて呼息^{いき}が短いので、坂を上^{のぼ}るときおかしいほど苦し

る彼は、まるで帰りを忘れたような事を云った。

二人は途々夜の更ふけた昨夕ゆうべの話をした。仮寝うたたねをして突ツ伏していたお時の様子などがお延の口に上った。もと叔父の家うちにいたという縁故で、新夫婦二人ふたりぎりの家庭に住み込んだこの下女に対して、叔父は幾分か周旋者の責任を感じなければならなかった。

「ありや叔母さんがよく知ってるが、正直で好い女なんだよ。留る守すなんぞさせるには持つて来いだって受合ったくらいだからね。だが独ひとりで寝ちまっちゃ困るね、不用心で。もっともまだ年齒としが年齒だからな。眠い事も眠いだろうよ」

いくら若くっても、自分ならそんな場合にぐっすり寝込まれる

訳のものでないという事をよく承知していたお延は、叔父のこの
想^{おも}いやりをただ笑いながら聴いていた。彼女に云わせれば、こう
して早く帰るのも、あんなに遅くなった昨日^{きのう}の結果を、今度は繰^く
り返^{かえ}させたくないという主意からであつた。

彼女は急いでそこへ来た電車に乗った。そうして車の中から叔
父に向つて「さよなら」といった。叔父は「さよなら、由雄さん
によろしく」といった。二人が辛^{かろ}うじて別れの挨拶^{あいさつ}を交換するや
否や、一種の音と動揺がすぐ彼女を支配し始めた。

車内のお延は別に纏^{まと}まつた事を考えなかつた。入れ替り立ち替
り彼女の眼の前に浮ぶ、昨日^{きのう}からの関係者の顔や姿は、自分の

乗っている電車のように早く廻転するだけであつた。しかし彼女はそうして目眩めまぐるしい影像イメジを一貫いっかんしている或物を心のうちに認めた。もしくはその或物が根調こんちようで、そうした断片的な影像が眼の前に飛び廻るのだとも云えた。彼女はその或物を拈定ねんていしなければならなかつた。しかし彼女の努力は容易に成效せいこうをもつて酬くしいられなかつた。団子を認めた彼女は、ついに個々を貫くしいている串を見定める事のできないうちに電車を下りてしまった。

玄関の格子こうしを開ける音と共に、台所の方から駈かけ出して来たお時は、彼女の予期通り「お帰り」と云つて、鄭寧ていねいな頭を畳の上に押し付けた。お延は昨日に違つた下女の判切はつきりした態度を、さも自

分の手柄てがらでもあるように感じた。

「今日は早かったでしょう」

下女はそれほど早いとも思っていないらしかった。得意なお延の顔を見て、仕方なさそうに、「へえ」と答えたので、お延はまた譲歩した。

「もっと早く帰ろうと思ったんだけどね、つい日が短かいものだから」

自分の脱ぎ棄てた着物をお時に畳ませる時、お延は彼女に訊きいた。

「あたしのいない留守に何にも用はなかったらうね」

お時は「いいえ」と答えた。お延は念のためもう一遍問を改めた。

「誰も来^きやしなかつたろうね」

するとお時が急に忘れたものを思い出したように調子高^{ちようしだか}な返事をした。

「あ、いらつしゃいました。あの小林さんとおつしゃる方が」

夫の知人としての小林の名はお延の耳に始めてではなかった。

彼女には二三度その人と口を利^きいた記憶があつた。しかし彼女はあまり彼を好いていなかった。彼が夫からはなはだ軽く見られているという事もよく呑み込んでいた。

「何しに来たんだろう」

こんなぞんざいな言葉さえ、つい口先へ出そうになった彼女は、それでも尋常な調子で、お時に訊き返した。

「何か御用でもおありだったの」

「ええあの外套がითを取りにいらっしやいました」

夫から何にも聞かされていないお延に、この言葉はまるで通じなかった。

「外套？ 誰の外套？」

周密なお延はいろいろな問をお時にかけて、小林の意味を知ろうとした。けれどもそれは全くの徒勞であった。お延が訊きけば訊

くほど、お時が答えれば答えるほど、二人は迷宮に入るだけであった。しまいに自分達より小林の方が変だという事に気のついた二人は、声を出して笑った。津田の時々使うノンセンスと云う英語がお延の記憶に蘇^{よみ}生えった。「小林とノンセンス」こう結びつけて考えると、お延はたまらなくおかしくなった。発作^{ほっさ}のように込み^こ上げてくる滑稽^{こっけい}感に遠慮なく自己を託した彼女は、電車^{うち}の中から持ち越して帰って来た、気がかりな宿題を、しばらく忘れていた。

お延はその晩京都にいる自分の両親へ宛てて手紙を書いた。——
昨日も昨日も書きかけて止めにしたその音信を、今日は是非とも
片づけてしまわなければならないと思い立った彼女の頭の中に
は、けっして両親の事ばかり働いているのではなかった。

彼女は落ちつけなかった。不安から逃れようとする彼女には注
意を一つ所に集める必要があつた。先刻からの疑問を解決したい
という切な希望もあつた。要するに京都へ手紙を書けば、わざわざ
わしがちな自分の心持を纏めて見る事ができそうに思えたのであ
る。

筆を取り上げた彼女は、例の通り時候の挨拶から始めて、無沙

汰^たの申し訳までを器械的に書き了^{おわ}った後で、しばらく考えた。京都へ何か書いてやる以上は、是非とも自分と津田との消息を^ま的におかなければならなかった。それはどの親も新婚の娘から聞きたがる事項であつた。どの娘もまた生家^{せいか}の父母^{ふぼ}に知らせなくつてはすまない事項であつた。それを差し措^おいて里へ手紙をやる必要はほとんどあるまいとまで平生から信じていたお延は、筆を持ったまま、目下自分と津田との間柄^{あいだがら}は、はたしてどんなところにどういう風に関係しているかを考えなければならなかった。彼女はありのままその物を父母^{ふぼ}に報知する必要に^{せま}逼られてはいなかった。けれどもある男に嫁^{とつ}いだ一個の妻として、それを見極^{みきわ}めておく要

求を痛切に感じた。彼女はじっと考え込んだ。筆はそこでとまっていた。動かなくなった。その動かなくなった筆の事さえ忘れて、彼女は考えなければならなかった。しかも知ろうとすればするほど、確^{しか}としたところは手に掴^{つか}めなかった。

手紙を書くまでの彼女は、ざわざわした散漫な不安に悩まされていた。手紙を書き始めた今の彼女は、ようやく一つ所に落ちついた。そうしてまた一つ所に落ちついた不安に悩まされ始めた。先刻^{さつき}電車の中で、ちらちら眼先につき出したいろいろの影^{イメジ}像は、みんなこの一点に向って集注するのだという事を、前後両様の比較から発見した彼女は、やっと自分を苦しめる不安の大根^{おおね}に辿^{たど}り

ついた。けれどもその大根の正体はどうしても分らなかった。勢い彼女は問題を未来に繰り越さなければならなかった。

「今日こんにち解決ができなければ、明日みょうにち解決するよりほかに仕方がない。明日解決ができなければ明後日みょうごにち解決するよりほかに仕方がない。明後日解決ができなければ……」

これが彼女の論法ロジックであつた。また希望であつた。最後の決心であつた。そうしてその決心を彼女はすでに継子の前で公言していたのである。

「誰でも構わない、自分のこうと思ひ込んだ人を飽あくまで愛する事によつて、その人に飽くまで自分を愛させなければやまない」

彼女はここまで行く事を改めて心に誓った。ここまで行つて落ちつく事を自分の意志に命令した。

彼女の気分は少し軽^{かる}くなった。彼女は再び筆を動かした。なるべく父^ふ母^ぼの喜びそうな津田と自分の現況を憚^{はば}りなく書き連ねた。幸福そうに暮している二人の趣^{おもむき}が、それからそれへと描^び出^りされた。感激に充^みちた筆の穂先がさらさらと心持よく紙の上を走るのが彼女には面白かった。長い手紙がただ一息に出来上った。その一息がどのくらいの時間に相当しているかという事を、彼女はまるで知らなかった。

しまい^おに筆を擱いた彼女は、もう一遍自分の書いたものを最初

から読み直して見た。彼女の手を支配したと同じ気分が、彼女の眼を支配しているの、彼女は訂正や添削てんさくの必要をどこにも認めなかった。日頃苦にして、使う時にはきつと言海げんかいを引いて見る、うろ覚えの字さえそのままでも氣にかからなかった。てには違のために意味の通じなくなつたところを、二三力所ちよいちよいと取り繕つくろつただけで、彼女は手紙を巻いた。そうして心の中でそれを受取る父母に断つた。

「この手紙に書いてある事は、どこからどこまで本当です。嘘うそや、気休きやすめや、誇張は、一字ありません。もしそれを疑う人があ
るなら、私はその人を憎にくみます、軽蔑けいべつします、唾つばきを吐きかけま

す。その人よりも私の方が真相を知っているからです。私は上部うわかわの事実以上の真相をここに書いています。それは今私にだけ解っている真相なのです。しかし未来では誰にでも解らなければならぬ真相なのです。私はけっしてあなた方を欺あざむいてはおりません。私があなた方を安心させるために、わざと欺騙あざむきの手紙を書いたのだというものがあつたなら、その人は眼の明いた盲目めくらです。その人こそ嘔吐うそつきです。どうぞこの手紙を上げる私を信用して下さい。神様はすでに信用していらっしゃるのですから」

お延は封書を枕元へ置いて寝た。

七十九

始めて京都で津田に会った時の事が思い出された。久しぶりに父母ちちははの顔を見に帰ったお延は、着いてから二三日にさんちして、父に使を頼まれた。一通の封書と一帙いっちつの唐本とうほんを持って、彼女は五六町隔へだたつた津田の宅うちまで行かなければならなかった。軽い神経痛に悩まされて、寝たり起きたりぶらぶらしていた彼女の父は、病中の徒然つれづれを慰なぐさめるために折々津田の父から書物を借り受けるのだという事を、お延はその時始めて彼の口から聞かされた。古いのを返して新らしいのを借りて来るのが彼女の用向であつた。彼女は津田の

玄関に立つて案内を乞うた。玄関には大きな衝立ついたてが立ててあった。白い紙の上に躍おどっているように見える変な字を、彼女が驚ろいて眺めていると、その衝立の後うしろから取次に現われたのは、下女でも書生でもなく、ちようどその時彼女と同じように京都の家うちへ来ていた由雄であつた。

二人は固もとよりそれまでに顔を合せた事がなかつた。お延の方ではただ噂うわさで由雄を知っているだけであつた。近頃家へ歸つて来たとか、または歸つているとかいう話は、その朝始めて父から聞いたぐらいのものであつた。それも父に新らしく本を借りようという気が起つて、彼がそのための手紙を書いた。事のついでに過ぎ

なかった。

由雄はその時お延から帙入ちつりの唐本とうほんを受取って、なぜだか、明詩みんしへ別裁っさいという嚴めいかしい字で書いた標題を長らくの間見つめていた。

その見つめている彼を、お延はまたいつまでも眺めていなければならなかった。すると彼が急に顔を上げたので、お延が今まで熱心に彼を見ていた事がすぐ発覚してしまった。しかし由雄の返事を待ち受ける位地に立たせられたお延から見れば、これもやむをえない所作しよさに違なかった。顔を上げた由雄は、「父はあいにく今留守ですが」と云った。お延はすぐ帰ろうとした。すると由雄がまた呼びとめて、自分の父宛あての手紙を、お延の知っている前で、断

りも何にもせず、開封した。この平氣な挙動がまたお延の注意を惹いた。彼の遣口は不法であつた。けれども果斷に違なかつた。彼女はどうしても彼を粗野とか乱暴とかいう言葉で評する氣にならなかつた。

手紙を一目見た由雄は、お延を玄関先に待たせたまま、入用の書物を探しに奥へ這入つた。しかし不幸にして父の借ろうとする漢籍は彼の眼のつく所になかつた。十分ばかりしてまた出て来た彼は、お延を空しく引きとめておいた詫を述べた。指定の本はちよつと見つからないから、彼の父の歸り次第、こつちから届けるようにすると云つた。お延は失礼だというので、それを断つ

た。自分がまた明日^{あした}にでも取りに来るからと約束して宅^{うち}へ帰った。

するとその日の午後由雄が向うから望みの本をわざわざ持ってきてくれた。偶然にもお延がその取次に出た。二人はまた顔を見合せた。そうして今度はすぐ両方で両方を認め合った。由雄の手に提^さげた書物は、今朝お延の返しに行ったものに比べると、約三倍の量があつた。彼はそれを更紗^{さらさ}の風呂敷に包んで、あたかも鳥籠^{かご}でもぶら下げているような具合にしてお延に示した。

彼は招ぜられるままに座敷へ上ってお延の父と話をした。お延から云えば、とても若い人には堪^たえられそうもない老人向の雑談

を、別に迷惑そうな様子もなく、方角違の父と取り換わせた。彼は自分の持って来た本については何事も知らなかった。お延の返しに行った本についてはなお知らなかった。劃の多い四角な字の重なっている書物は全く読めないのだと断った。それでもこちらから借りに行った呉梅村詩ごばいそんしという四文字よもじをあて的に、書棚をあっちこつちと探してくれたのであった。父はあつく彼の好意を感謝した。……

お延の眼にはその時の彼がちらちらした。その時の彼は今の彼と別人べつじんではなかった。といって、今の彼と同人でもなかった。平たく云えば、同じ人が変わったのであった。最初無関心に見えた彼

は、だんだん自分の方に牽ひきつけられるように變つて來た。いったん牽きつけられた彼は、またしだいに自分から離れるように變つて行くのではなからうか。彼女の疑うたがいはほとんど彼女の事實であつた。彼女はその疑うたがいを拭ぬぐい去るために、その事實を引ひツ繰くり返さなければならなかつた。

八十

強い意志がお延の身体全体からだに充みち渡つた。朝になつて眼を覺さました時の彼女には、怯懦きようだほど自分に縁の遠いものはなかつた。寢ね

起^きの悪過ぎた前の日の自分を忘れたように、彼女はすぐ飛び起きた。夜具を跳^はね退^のけて、床を離れる途^と端^{たん}に、彼女は自分で自分の腕の力を感じた。朝寒^{あささむ}の刺戟^{しげき}と共に、締^しまった筋肉が一度に彼女を緊縮させた。

彼女は自分の手で雨戸を手繰^{たぐ}った。戸外^{そと}の模様はいつもよりまだよッぽど早かった。昨日^{きのう}に引き換えて、今日は津田のいる時よりもかえって早く起きたという事が、なぜだか彼女には嬉^{うれ}しかった。怠^{なま}けて寝過した昨日の償^{つぐな}い、それも満足の一つであつた。

彼女は自分で床を上げて座敷を掃^はき出した後で鏡台に向つた。そうして結^ゆってから四日目になる髪を解^といた。油で汚^{よご}れた所へ二

三度櫛くしを通して、癖がついて自由にならないのを、無理に廂ひさしに束つかね上げたあ。それが済んでから始めて下女を起した。

食事のできるまでの時間を、下女と共に働らいた彼女は、膳ぜんに着いた時、下女から「今日は大変お早うございましたね」と云われた。何にも知らないお時は、彼女の早起を驚ろいているらしかった。また自分が主人より遅く起きたのをすまない事でもしたように考えているらしかった。

「今日は旦那様だんなさまのお見舞に行かなければならないからね」

「そんなにお早くいらっしゃるんでございますか」

「ええ。昨日きのう行かなかったから今日は少し早く出かけましょう」

お延の言葉遣は平生より鄭寧で片づいていた。そこに或落ちつきがあった。そうしてその落ちつきを裏切る意気があった。意気に伴なう果斷も遠くに見えた。彼女の中にある心の調子がおのずと態度にあらわれた。

それでも彼女はすぐ出かけようとはしなかった。櫂を外して盆を持ったお時を相手に、しばらく岡本の話などをした。もと世話になった覚のあるその家族は、お時にとっても、興味に充ちた題目なので、二人は同じ事を繰り返すようにしてまで、よく彼らについて語り合った。ことに津田のいない時はそうであった。というのは、もし津田がいると、ある場合には、彼一人が除外物にさ

れたような変な結果に陥^{おちい}るからであつた。ふとした拍子からそんな氣^き下^ま味^ずい思^{おも}いを一二度経験した後で、そこに氣をつけ出したお延は、そのほかにまだ、富裕な自分の身内を自慢らしく吹聴^{ふいちやう}したがる女と夫から解釈される不快を避けなければならない理由もあつたので、お時にもかねてその旨^{むね}を言い含めておいたのである。

「御嬢さまはまだどこへもおきまりになりませんのでございますか」

「何だかそんな話もあるようだけれどもね、まだどうなるかよく解らない様子だよ」

「早く好い所へいらっしやるようになる、結構でございますがね」

「おおかたもうじきでしょう。叔父さんはあんな性急だから。それに継子さんはあたしと違って、ああいう器量好しだしね」

お時は何か云おうとした。お延は下女のお世辞を受けるのが苦痛だったので、すぐ自分でその後をつけた。

「女はどうしても器量が好くないと損ね。いくら伶俐でも、気が利いていても、顔が悪いと男には嫌われるだけね」

「そんな事はございません」

お時が弁護するように強くこういだったので、お延はなお自分を

主張したくなつた。

「本当よ。男はそんなものなのよ」

「でも、それは一時の事で、年を取るとそうは参りますまい」

お延は答えなかつた。しかし彼女の自信はそんな弱いものではなかつた。

「本当にあたしのような不器量なものは、生れ變つてでも来なくっちゃ仕方がない」

お時は呆れた顔あきをしてお延を見た。

「奥様が不器量なら、わたくしなんか何といえがいいのでございましょう」

お時の言葉はお世辞でもあり、事実でもあつた。両方の度合をよく心得ていたお延は、それで満足して立ち上つた。

彼女が外出のため着物を着換えていると、戸外そとから誰か来たらしい足音がして玄関の号鈴ベルが鳴つた。取次に出たお時に、「ちよつと奥さんに」という声が聞こえた。お延はその声の主ぬしを判断しようとして首を傾けた。

八十一

袖そでを口へ当ててくすくす笑いながら茶の間へ駈かけ込んで来たお

時は、容易に客の名を云わなかった。彼女はただおかしさを噛み殺そうとして、お延の前で悶え苦しんだ。わずか「小林」という言葉を口へ出すのでさえよほど手間取った。

この不時の訪問者をどう取り扱っていいか、お延は解らなかった。厚い帯を締めかけているので、自分がすぐ玄関へ出る訳に行かなかった。といって、掛取でも待たせておくように、いつまでも彼をそこに立たせるのも不作法であつた。姿見の前に立ち竦んだ彼女は当惑の眉を寄せた。仕方がないので、今出がけだから、ゆっくり会ってはいられないがとわざわざ断らした後で、彼を座敷へ上げた。しかし会って見ると、満更知らない顔でもないの

で、用だけ聴いてすぐ帰って貰う事もできなかつた。その上小林は斟酌しんしゃくだの遠慮だのを知らない点にかけて、たいていの人に引ひを取らないように、天から生みつけられた男であつた。お延の時間が逼せまっているのを承知の癖に、彼は相手さえ悪い顔をしなければ、いつまで坐り込んでいても差支さしかえないものと独りひとで合点がてんしているらしかつた。

彼は津田の病気をよく知っていた。彼は自分が今度地位を得て朝鮮に行く事を話した。彼のいうところによれば、その地位は未来に希望のある重要なものであつた。彼はまた探偵に跟つけられた話をした。それは津田といっしよに藤井から帰る晩の出来事だと

云つて、驚ろいたお延の顔を面白そうに眺めた。彼は探偵に跟けられるのが自慢らしかった。おおかた社会主義者として目指めざされているのだろうという説明までして聴かせた。

彼の談話には気の弱い女に衝撃シヨツクを与えるような部分があつた。

津田から何にも聞いていないお延は、怖々こわごわながらついそこに釣り込まれて大切な時間を度外においた。しかし彼の云う事を素直にはいはい聴いているとどこまで行つてもはてしがなかった。しまいはこっちから催促して、早く向うに用事を切り出させるように仕向けるよりほかに途みちがなくなつた。彼は少しきまりの悪そうな様子をしてようやく用向を述べた。それは昨夕ゆうべお延とお時をさ

んざ笑わせた外套がいとうの件にほかならなかった。

「津田君から貰うっていう約束をしたもんですから」

彼の主意は朝鮮へ立つ前ちよつとその外套を着て見て、もしあんまり自分の身体からだに合わないようなら今のうちに直させたいというのであった。

お延はすぐ入用いりようの品を筆筒たんすの底から出してやろうかと思った。けれども彼女はまだ津田から何にも聞いていなかった。

「どうせもう着る事なんかろうとは思うんですが」といつて逡巡ためらった彼女は、こんな事に案外やかましい夫の気性きしょうをよく知っていた。着古した外套がいとう一つが本で、他日細君の手落呼わりておちよばなどを

された日には耐たまらないと思った。

「大丈夫ですよ、くれるって云ったに違ちがないんだから。嘘うそなんか吐つきやしませんよ」

出してやらないと小林を嘘吐うそつきとしてしまうようなものであった。

「いくら酔払っていたって気は確たしかなんですからね。どんな事があつたって貰う物を忘れるような僕じゃありませんよ」

お延はとうとう決心した。

「じゃしばらく待ってて下さい。電話でちよつと病院へ聞き合せてやりますから」

「奥さんは実に几帳面きちようめんですね」と云って小林は笑った。けれどもお延の暗あんに恐れていた不愉快そうな表情は、彼の顔のどこにも認められなかった。

「ただ念のためにですよ。あとでわたくしがまた何とか云われると困りますから」

お延はそれでも小林が気を悪くしない用心に、こんな弁解がましい事を付け加えずにはいられなかった。

お時が自働電話へ駈かけつけて津田の返事を持って来る間、二人はなお対座した。そうして彼女の帰りを待ち受ける時間を談話で繋つないだ。ところがその談話は突然な閃ひらめきで、何にも予期してい

なかったお延の心臓を躍おどらせた。

八十二

「津田君は近頃だいぶおとなしくなったようですね。全く奥さんの影響でしょう」

お時が出て行くや否や、小林は藪やぶから棒ぼうにこんな事を云い出した。お延は相手が相手なので、当あたらず障さわらずの返事をしておくに限ると思った。

「そうですか。私自身じゃ影響なんかまるでないように思ってお

りますかね」

「どうして、どうして。まるで人間が生れ変わったようなものです」

小林の云い方があまり大袈裟おおげさなので、お延はかえって相手を冷ひや評かし返してやりたくなった。しかし彼女の氣位きぐうがそれを許さなかったもので、彼女はわざと黙っていた。小林はまたそんな事を顧こり慮よする男ではなかった。秩序も段落も構わない彼の話題は、突飛とっぴにここかしこを駈かけ回めぐる代りに、時としては不ぶ作さ法ほうなくらい一直線に進んだ。

「やッぱり細君の力には敵かないませんね、どんな男でも。——僕の

ような独身ものには、ほとんど想像がつかないけれども、何かあるんでしょね、そこに」

お延はとうとう自分を抑える事ができなくなった。彼女は笑い出した。

「ええあるわ。小林さんなんかにはとても見当けんとうのつかない神秘的なものがたくさんあるわ、夫婦の間には」

「あるなら一つ教えていただきたいもんですね」

「独ひとりものが教わったって何にもならないじゃありませんか」

「参考になりますよ」

お延は細い眼のうちに、賢かしこそうな光りを見せた。

「それよりあなた御自分で奥さんをお貰いになるのが、一番捷徑ちかみちじゃありませんか」

小林は頭を搔かく真似まねをした。

「貰いたくつても貰えないんです」

「なぜ」

「来てくれ手がなければ、自然貰えない訳じゃありませんか」

「日本は女の余ってる国よ、あなた。お嫁なんかどんなのもそこいらにごろごろ転がってるじゃありませんか」

お延はこう云ったあとで、これは少し云い過ぎたと思った。しかし相手は平氣であつた。もつと強くて烈はげしい言葉に平生から慣

れ抜いている彼の神経は全く無感覚であつた。

「いくら女が余っていても、これから駈かけ落おちをしようという矢先ですからね、来ッこありませんよ」

駈落という言葉が、ふと芝居でやる男女二人の道行みちゆきをお延おもに想い起させた。そうした濃厚な恋愛を象かたどる艶めかしい歌舞伎姿かぶきすがたを、ちらりと胸に描いた彼女は、それと全く縁の遠い、他の着古ひとした外套がいとうを貰うために、今自分の前に坐っている小林を見て微笑した。

「駈落かけおちをなさるのなら、いつそ二人でなすつたらいいでしょう」
「誰とです」

「そりゃきまっていますわ。奥さんのほかに誰も伴^つれていらっしやる方はないじゃありませんか」

「へえ」

小林はこう云ったなり畏^{かしこ}まった。その態度が全くお延の予期に外^{はず}れていたで、彼女は少し驚ろかされた。そうしてかえって予期以上おかしくなった。けれども小林は真^ま面^め目であつた。しばらく間^まをおいてから独^{ひと}り言^{ごと}のような口調で、彼は妙なことを云い出した。

「僕^{ぼく}だつて朝鮮^{さんがい}三界^{さんがい}まで駈^か落^おのお供^{とも}をしてくれるような、実^{じつ}のあ
る女があれば、こんな変な人間にならないで、すんだかも知れま

せんよ。実を云うと、僕には細君がないばかりじゃないんです。何にもないんです。親も友達もないんです。つまり世の中がないんですね。もっと広く云えば人間がないんだとも云われるでしょうが」

お延は生れて初めての人に会ったような気がした。こんな言葉をまだ誰の口からも聞いた事のない彼女は、その表面上の意味を理解するだけでも困難を感じた。相手をどう捌くなしていいかの点になると、全く方角が立たなかった。すると小林の態度はなお感慨を帯びて来た。

「奥さん、僕にはたった一人の妹いもうとがあるんです。ほかに何にもな

い僕には、その妹が非常に貴重に見えるのです。普通の人の場合よりどのくらい貴重だか分りやしません。それでも僕はその妹をおいて行かなければならないのです。妹は僕のあとへどこまでも喰ッついて来たがります。しかし僕はまた妹をどうしても伴^っれて行く事ができないのです。二人いっしょにいるよりも、二人離れ離れになっている方が、まだ安全だからです。人に殺される危険がまだ少ないからです」

お延は少し気味が悪くなった。早く帰って来てくれればいいと思うお時はまだ帰らなかつた。仕方なしに彼女は話題を変えてこの圧迫から逃^のれようと試みた。彼女はすぐ成功した。しかしそれ

がために彼女はまたとんでもない結果に陥^{おちい}った。

八十三

特殊の経過をもったその時の問答は、まずお延の言葉から始まった。

「しかしあなたのおっしゃる事は本当なんでしょうかね」

小林ははたして沈痛らしい今までの態度をすぐ改めた。そうしてお延の思わく通り向うから訊^きき返して来た。

「何がです、今僕の云った事がですか」

「いいえ、そんな事じゃないの」

お延は巧みに相手を岐路^{わきみち}に誘い込んだ。

「あなた先刻^{さつき}おっしゃったでしょう。近頃津田がだいぶ變つて来たつて」

小林は元へ戻らなければならなかった。

「ええ云いました。それに違ないから、そう云ったんです」

「本当に津田はそんなに變つたでしょうか」

「ええ變りましたね」

お延は腑^ふに落ちないような顔をして小林を見た。小林はまた何か証拠^{しやうこ}でも握っているらしい様子をしてお延を見た。二人がしば

らく顔を見合せている間、小林の口元には始終しじゆう薄笑いの影が射していた。けれどもそれは終ついに本式の笑いとなる機会を得ずに消えてしまわなければならなかった。お延は小林なんぞに調戯からかわれる自分じゃないという態度を見せたのである。

「奥さん、あなた自分だって大概気がつきそうなものじゃありませんか」

今度は小林の方からこう云ってお延に働らきかけて来た。お延はたしかにそこに気がついていて、けれども彼女の気がついていて、夫の変化は、全く別ものであった。小林の考えている、少なくとも彼の口になっている、変化とはまるで反対の傾向を帯びてい

た。津田といっしょになってから、おぼろげ臆気ながらしだいしだいに明るくなりつつあるように感ぜられるその変化は、非常に見分けにくい色調しきちやうの階段をそろりそろりと動いて行く微妙なものであった。どんな鋭敏な観察者が外部そとから覗のぞいてもとうてい判りわかこない性質のものであった。そうしてそれが彼女の秘密であった。愛する人が自分から離れて行こうとする毫釐ごうりの変化、もしくは前から離れていたのだという悲しい事実を、今になって、そろそろ認め始めたという心持の変化。それが何で小林ごときものに知れよう。

「いっこう気がつきませんね。あれでどこか変わったところでもあ

るんでしょうか」

小林は大きな声を出して笑った。

「奥さんはなかなか空惚そりじつとほける事が上手だから、僕なんざあとても敵かなわない」

「空惚けるっていうのはあなたの事じゃありませんか」

「ええ、まあ、そんならそうにしておきましょう。——しかし奥さんはそういう旨うまいお手際てぎわをもっていられるんですね。ようやく解った。それで津田君がああ変化して来るんですね、どうも不思議だと思ったら」

お延はわざと取り合わなかった。と云って別に煩うるさい顔もしな

かった。あいぎよう愛嬌を見せた平気とでもいうような態度をとった。小林はもう一步前へ進み出した。

「藤井さんでもみんな驚ろいていますよ」

「何を」

藤井という言葉を目にした時、お延の細い眼がたちまち相手の上に動いた。誘おびき出だされると知りながら、彼女はついこういつて訊きき返さなければならなかった。

「あなたのお手際にです。津田君を手のうちに丸め込んで自由にするあなたの靈妙なお手際にです」

小林の言葉は露骨過ぎた。しかし露骨な彼は、わざと愛嬌半分

にそれをお延の前で披露ひろうするらしかった。お延はつんとして答えた。

「そうですか。わたくしにそれだけの力があるんですかね。自分にや解りませんが、藤井の叔父さんや叔母さんがそう云って下さるなら、おおかた本当なんでしょうよ」

「本当ですとも。僕が見たって、誰が見たって本当なんだから仕方がないじゃありませんか」

「ありがとう」

お延はさも軽蔑けいべつした調子で礼を云った。その礼の中に含まれていた苦々にがにがしい響は、小林にとって全く予想外のものであるらし

かった。彼はすぐ彼女を宥^{なだ}めるような口調で云った。

「奥さんは結婚前の津田君を御承知ないから、それで自分の津田君に及ぼした影響を自覚なさらないんでしょうが、——」

「わたくしは結婚前から津田を知っております」

「しかしその前は御存じないでしょう」

「当り前ですわ」

「ところが僕はその前をちゃんと知っているんですよ」

話はこんな具合にして、とうとう津田の過去に溯^{さかのほ}って行つた。

八十四

自分のまだ知らない夫の領分に這入り込んで行くのはお延にとつて多大の興味に違なかつた。彼女は喜こんで小林の談話に耳を傾けようとした。ところがいざ聴こうとすると、小林はけつして要領を得た事を云わなかつた。云つても肝心のところはわざと略してしまつた。例えば二人が深夜非常線にかかつた時の光景に一口触れるが、そういう出来事に出合うまで、彼らがどこで夜は深しをしていたかの点になると、彼は故意に暈しさつて、全く語らないという風を示した。それを訊けば意味ありげににやにや笑つて見せるだけであつた。お延は彼がとくにこうして自分を焦燥しているのではなからうかという気さえ起した。

お延は平生から小林を軽く見ていた。半ば^{なか}夫の評価を標準におき、半ば自分の直覚を信用して成立ったこの侮蔑^{ぶべつ}の裏には、まだ他^{ひと}に向って公言しない大きな因子^{ファクター}があつた。それは単に小林が貧乏であるという事に過ぎなかつた。彼に地位がないという点にほかならなかつた。売れもしない雑誌の編輯^{へんしゅう}、そんなものはきまつた職業として彼女の眼に映るはずがなかつた。彼女の見た小林は、常に無籍^{むせき}もののような顔をして、世の中をうろろしてゐた。宿^{しゆく}なしらしい愚痴^{ぐち}を零^{こぼ}して、厭^{いや}がらせにそこいらをまごつき歩くだけであつた。

しかしこの種の軽蔑に、ある程度の不気味はいつでも附物^{つきもの}で

あつた。ことにそういう階級に馴ならされない女、しかも経験に乏しい若い女には、なおさらの事でなければならなかった。少くとも小林の前に坐つたお延はそう感じた。彼女は今までに彼ぐらいな貧しさの程度の人に出合わないとは云えなかった。しかし岡本の宅うちへ出入ではいりをするそれらの人々は、みんなその分を弁わきまえていた。身分には段等だんとうがあるものと心得て、みんなおのれに許された範囲内においてのみ行動をあえてした。彼女はいまだかつて小林のように横着な人間に接した例がなかった。彼のように無遠慮に自分に近づいて来るもの、富も位地もない癖に、彼のように大きな事を云うもの、彼のようにむやみに上流社会の悪体あくたいを吐くもの

にはけっして会った事がなかった。

お延は突然気がついた。

「自分の今相手にしているのは、平生考えていた通りの馬鹿でなくって、あるいは手に余る擦れッ枯らしじゃなからうか」

軽蔑の裏に潜んでゐる不気味な方面が強く頭を持上げた時、お延の態度は急に改たまった。すると小林はそれを見届けた証拠にか、またはそれに全くの無頓着でか、アははと笑い出した。

「奥さんまだいろいろ残ってますよ。あなたの知りたい事がね」

「そうですか。今日はもうそのくらいでたくさんでしょう。あんまり一度きに伺ってしまうと、これから先の楽しみがなくなりま

すから」

「そうですね、じゃ今日はこれで切り上げときますかな。あんまり奥さんに気を揉もませて、歇ヒス斯的里テリでも起されると、後あとでまた僕の責任だなんて、津田君に恨うらまれるだけだから」

お延は後うしろを向いた。後は壁であつた。それでも茶の間に近いその見当けんとうに、彼女はお時の消息を聞こうとする努力を見せた。けれども勝手口は今まで通り静かであつた。疾とうに帰るべきはずのお時はまだ帰つて来なかつた。

「どうしたんでしょう」

「なに今に帰つて来ますよ。心配しないでも迷児まいごになる氣遣きづかいはな

いから大丈夫です」

小林は動こうとしなかった。お延は仕方がないので、茶を淹れ代えるのを口実に、席を立とうとした。小林はそれさえ遮ぎつた。

「奥さん、時間があるなら、退屈凌ぎに幾らでも先刻の続きを話しますよ。しゃべって潰すのも、黙って潰すのも、どうせ僕見たいな穀潰しにや、同なし時間なんだから、ちつとも御遠慮にや及びません。どうです、津田君にはあれでまだあなたに打ち明けないような水臭いところがだいぶあるんでしよう」

「あるかも知れませんか」

「ああ見えてなかなか淡泊たんぱくでないからね」

お延ははっと思った。腹の中で小林の批評を首肯うけがわない訳に行かなかった彼女は、それがあたっているだけになおの事感情を害した。自分の立場を心得ない何という不作法ふさほうな男だろうと思って小林を見た。小林は平気で前の言葉を繰り返した。

「奥さんあなたの知らない事がまだたくさんありますよ」

「あっても宜よろしいじゃないですか」

「いや、実はあなたの知りたいたいと思ってる事がまだたくさんあるんですよ」

「あっても構いません」

「じゃ、あなたの知らなければならぬ事がまだたくさんあるんだと云い直したらどうです。それでも構いませんか」

「ええ、構いません」

八十五

小林の顔には皮肉の渦うずが漲みなぎった。進んでも退しりぞいてもこっちのものだという勝利の表情がありありと見えた。彼はその瞬間の得意を永久に引き延ばして、いつまでも自分で眺め暮そしたいような素そふ振りさえ示した。

「何という陋劣な男だろう」

お延は腹の中でこう思った。そうしてしばらくの間じつと彼と睨めっ競をしていた。すると小林の方からまた口を利き出した。

「奥さん津田君が変った例証として、是非あなたに聴かせなければならぬ事があるんですが、あんまりおびえていらっしやるよ。うだから、それは後廻しにして、その反対の方、すなわち津田君がちつとも変わらないところを少し御参考までにお話しておきますよ。これはいやでも私の方では是非奥さんに聴いていただきたいのです。——どうです聴いて下さいますか」

お延は冷淡に「どうともあなたの御随意に」と答えた。小林は

「ありがたい」と云って笑った。

「僕は昔から津田君に軽蔑けいべつされてきました。今でも津田君に軽蔑されています。先刻さつきからいう通り津田君は大変変りましたよ。けれども津田君の僕に対する軽蔑だけは昔も今も同様なのです。毫ごうも変わらないのです。これだけはいくら怜悧りこうな奥さんの感化力でもどうする訳にも行かないと見えますね。もっともあなた方から見たら、それが理の当然なんでしょうけれどもね」

小林はそこで言葉を切って、少し苦しそうなお延の笑い顔に見入った。それからまた続けた。

「いや別に変って貰いたいという意味じゃありませんよ。その点

について奥さんの御尽力を仰ぐ気は毛頭ないんだから、御安心なさい。実をいうと、僕は津田君にばかり軽蔑されている人間じゃないんです。誰にでも軽蔑されている人間なんです。下らない女にまで軽蔑されているんです。有体ありていに云えば世の中全体が寄つてたかつて僕を軽蔑しているんです」

小林の眼は据すわっていた。お延は何という事もできなかつた。

「まあ」

「それは事実です。現に奥さん自身でもそれを腹の中で認めていらつしやるじゃありませんか」

「そんな馬鹿な事があるもんですか」

「そりゃ口の先では、そうおっしやらなければならぬでしょう」

「あなたもずいぶん僻^{ひが}んでいらっしやるのね」

「ええ僻^{ひが}んでるかも知れません。僻^{ひが}もうが僻^{ひが}むまいが、事實は事實ですからね。しかしそりゃどうでもいいんです。もともと無能^{やくざ}に生れついたのが悪いんだから、いくら軽蔑^{けいめつ}されたって仕方がありません。誰^{たれ}を恨^{うら}む訳にも行かないのでしよう。けれども世間からのべつにそう取り扱^{あつか}われつけて来た人間の心持を、あなたは御承知ですか」

小林はいつまでもお延の顔を見て返事を待っていた。お延には

何もいう事がなかった。まるつきり同情の起り得ない相手の心持、それが自分に何の関係があるう。自分にはまた自分で考えなければならぬ問題があつた。彼女は小林のために想像の翼つばささえ伸ばしてやる氣にならなかつた。その様子を見た小林はまた「奥さん」と云い出した。

「奥さん、僕は人に厭いやがられるために生きています。わざわざ人の厭がるような事を云つたりしたりするんです。そうでもしなければ苦しくつてたまらないんです。生きていられないのです。僕の存在を人に認めさせる事ができないんです。僕は無能です。幾ら人から軽蔑けいべつされても存分な讐かたきうち討うちができないんです。仕方

がないからせめて人に嫌われてでも見ようと思うのです。それが僕の志願なのです」

お延の前にまるで別世界に生れた人の心理状態が描き出された。誰からでも愛されたい、また誰からでも愛されるように仕向けて行きたい、ことに夫に対しては、是非共そうしなければならぬ、というのが彼女の腹であつた。そうしてそれは例外なく世界中の誰にでも当て^あて^はま^まつて、毫^{ごう}も悖^{もと}らないものだ、彼女は最初から信じ切っていたのである。

「吃^び驚^っりしたようじゃありませんか。奥さんはまだそんな人に会った事がないんでしょう。世の中にはいろいろの人があります

からね」

小林は多少溜飲りゆういんの下りたような顔をした。

「奥さんは先刻さつきから僕を厭がっている。早く帰ればいい、帰ればいいと思っている。ところがどうした訳か、下女が帰って来ないもんだから、仕方なしに僕の相手になっている。それがちゃんと僕には分るんです。けれども奥さんはただ僕を厭な奴やつだと思うだけ、なぜ僕がこんな厭な奴になったのか、その原因を御承知ない。だから僕がちよつとそこを説明して上げたのです。僕だってまさか生れたてからこんな厭な奴でもなかったんでしようよ、よくは分りませんけれどもね」

小林はまた大きな声を出して笑った。

八十六

お延の心はこの不思議な男の前に入り乱れて移って行つた。一には理解が起らなかった。二には同情が出なかった。三には彼のは真面目さが疑がわれた。反抗、畏怖、輕蔑、不審、馬鹿らしさ、嫌惡、好奇心、——雜然として彼女の胸に交錯したいろいろなものはけっして一点に纏まる事ができなかった。したがってただ彼女を不安にするだけであつた。彼女はしまいに訊いた。

「じゃあなたは私を厭いやがらせるために、わざわざここへいらしたと言明なさるんですね」

「いや目的はそうじゃありません。目的は外套がいうを貰いに来たんです」

「じゃ外套を貰いに来たついでに、私を厭いやがらせようとおっしゃるんですか」

「いやそうでもありません。僕はこれで天然自然のつもりなんですからね。奥さんよりもよほど技巧は少ないと思ってるんです」

「そんな事はどうでも、私の問にはつきりお答えになったらいいじゃないませんか」

「だから僕は天然自然だと云うのです。天然自然の結果、奥さんが僕を厭がられるようになるというだけなのです」

「つまりそれがあなたの目的でしょう」

「目的じゃありません。しかし本望ほんもうかも知れません」

「目的と本望とどこが違うんです」

「違いますかね」

お延の細い眼から憎悪ぞうおの光が射した。女だと思って馬鹿にするなという気性きしょうがありありと瞳子ひとみの裏うちに宿った。

「怒っちゃいけません」と小林が云った。「僕は自分の小さな料りょう簡けんから敵打かたきうちをしてるんじゃないという意味を、奥さんに説明して

上げただけです。天がこんな人間になって他ひとを厭いとがらせてやれと僕に命ずるんだから仕方がないと解釈していただきたいので、わざわざそう云ったのです。僕は僕に悪い目的はちつともない事をあなたに承認していただきたいのです。僕自身は始めから無目的だという事を知っておいていただきたいのです。しかし天には目的があるかも知れません。そうしてその目的が僕を動かしているかも知れません。それに動かされる事がまた僕の本望かも知れません」

小林の筋の運び方は、少し困こん絡がらかり過ぎていた。お延は彼の論ロジ理ツクの間隙すきを突くだけに頭が鍊ねれていなかった。といって無条件で

受け入れていいか悪いかを見分けるほど整った脳力ももたなかった。それでいて彼女は相手の吹きかける議論の要点を掴むだけの才気を充分に具えていた。彼女はすぐ小林の主意を一口に纏めて見せた。

「じゃあなたは人を厭がらせる事は、いくらでも厭がらせるが、それに対する責任はけっして負わないというんでしよう」

「ええそこです。そこが僕の要点なんです」

「そんな卑怯な——」

「卑怯じゃありません。責任のない所に卑怯はありません」

「ありますとも。第一この私があなたに対してどんな悪い事をし

た覚おぼえがあるんでしよう。まあそれから伺いますから、云って御覧なさい」

「奥さん、僕は世の中から無籍もの扱いにされている人間ですよ」

「それが私や津田に何の関係があるんです」

小林は待ってたと云わぬばかりに笑い出した。

「あなた方から見たらおおかたないでしょう。しかし僕から見れば、あり過ぎるくらいあるんです」

「どうして」

小林は急に答えなくなった。その意味は宿題にして自分でよく

考えて見たらよかろうと云う顔つきをした彼は、黙って煙草^{たばこ}を吹かし始めた。お延は一層の不快を感じた。もう好い加減に帰ってくれと云いたくなくなった。同時に小林の意味もよく突きとめておきたかった。それを見抜いて、わざと高を括^{くく}ったように落ちついてゐる小林の態度がまた癢^{しやく}に障^{さわ}った。そこへ先刻^{さつき}から心持ちに待ち受けていたお時がようやく帰って来たので、お延の蟠^{わだか}まりは、一定した様式^{もと}の下に表現される機会の来ない先にまた崩^{くず}されてしまわなければならなかった。

お時は縁側^{えんがわ}へ坐^まって外部^{そと}から障子^{しょうじ}を開けた。

「ただいま。大変遅くなりました。電車で病院まで行^いって参^{まゐ}りましたものですから」

お延は少し腹立たしい顔をしてお時を見た。

「じゃ電話はかけなかったのかい」

「いいえかけたんでございます」

「かけても通じなかったのかい」

問答を重ねているうちに、お時の病院へ行^いった意味がようやくお延に呑^のみ込めるようになって来た。――始め通じなかった電話は、しまいに通じるだけは通じても用を弁^わずる事ができなかった

た。看護婦を呼び出して用事を取次いで貰おうとしたが、それすらお時の思うようにはならなかった。書生だか薬局員だかが始終（しじゅう）相手になつて、何か云うけれども、それがまたちつとも要領を得なかった。第一言語が不明瞭（ふめいりょう）であつた。それから判切聞（はっきり）こえるところも辻褄（つじつま）の合わない事だらけだつた。要するにその男はお時の用事を津田に取次いでくれなかつたらしいので、彼女はとうとう諦（あきら）めて、電話箱を出てしまった。しかし義務を果さないでそのまま宅（うち）へ帰るのが厭（いや）だつたので、すぐその足で電車へ乗つて病院へ向つた。

「いったん歸つて、伺つてからにしようかと思ひましたけれど

も、ただ時間が長くかかるぎりでございますし、それにお客さまがこうして待っておいでの事をなまじい存じておるものでございますから」

お時のいう事はもつともであつた。お延は礼を云わなければならなかつた。しかしそのために、小林からさんざん厭いやな思いをさせられたのだと思うと、氣を利きかした下女がかえって恨うらめしくもあつた。

彼女は立つて茶の間へ入つた。すぐそこに据すえられた銅あかの金具の光る重かさね簞だん笥すの一番下の抽斗ひきだしを開けた。そうして底の方から問題の外套がいとうを取り出して来て、それを小林の前へ置いた。

「これでしよう」

「ええ」と云った小林はすぐ外套を手にとって、品物を改める古着屋のような眼で、それを引ッ繰返した。

「思ったよりだいぶ汚れていますね」

「あなたにやそれでたくさんだ」と云いたかったお延は、何にも答えずに外套を見つめた。外套は小林のいう通り少し色が変わっていた。襟を返して日に当たらない所を他の部分と比較して見ると、それが著しく目立った。

「どうせただ貰うんだからそう贅沢も云えませんかね」

「お気に召さなければ、どうぞ御遠慮なく」

「置いて行けとおっしゃるんですか」

「ええ」

小林はやッぱり外套を放さなかった。お延は痛快な気がした。

「奥さんちよつとここで着て見てもよござんすか」

「ええ、ええ」

お延はわざと反対を答えた。そうして窮屈そうな袖^{そで}へ、もがくようにして手を通す小林を、坐ったまま皮肉な眼で眺めた。

「どうですか」

小林はこう云いながら、背中をお延の方に向けた。見苦しい畳^{たた}み皺^{じわ}が幾筋もお延の眼に入^いった。アイロンの注意でもしてやるべ

きところを、彼女はまた逆さかに行いった。

「ちようど好いようですね」

彼女は誰も自分の傍そばにいないので、せっかく出来上った滑稽こっけいな後姿うしろすがたも、眼と眼で笑ってやる事ができないのを物足りなく思っ
た。

すると小林がまたぐるりと向き直って、外套を着たなり、お延の前にどっさり胡坐あぐらをかいた。

「奥さん、人間はいくら変な着物を着て人から笑われても、生きている方がいいものなんですよ」

「そうですか」

お延は急に口元を締めた。

「奥さんのような窮^{こま}った事のない方にや、まだその意味が解らないでしようがね」

「そうですか。私はまた生きてて人に笑われるくらいなら、いつそ死んでしまった方が好いと思います」

小林は何にも答えなかった。しかし突然云った。

「ありがとう。御蔭^{おかげ}でこの冬も生きていられます」

彼は立ち上った。お延も立ち上った。しかし二人が前後して座敷から縁側^{えんがわ}へ出ようとするとき、小林はたちまちふり返った。

「奥さん、あなたそういう考えなら、よく気をつけて他^{ひと}に笑われ

ないようにしないといけませんよ」

八十八

二人の顔は一尺足らずの距離に接近した。お延が前へ出ようとする途端、小林が後を向いた拍子、二人はそこで急に運動を中止しなければならなかった。二人はぴたりと止まった。そうして顔を見合せた。というよりもむしろ眼と眼に見入った。

その時小林の太い眉が一層際立ってお延の視覚を侵した。下に
ある黒瞳はじつと彼女の上に据えられたまま動かなかった。それ

が何を物語っているかは、こっちの力で動かして見るよりほかに途はなかった。お延は口を切った。

「余計な事です。あなたからそんな御注意を受ける必要はありません」

「注意を受ける必要がないのじゃありますまい。おおかた注意を受ける覚おぼえがないとおっしゃるつもりなんでしょう。そりやあなたは固もとより立派な貴婦人に違ないかも知れません。しかし——」

「もうたくさんです。早く帰って下さい」

小林は応じなかった。問答が咫尺しせきの間に起った。

「しかし僕のいうのは津田君の事です」

「津田がどうしたというんです。わたくしは貴婦人だけでも、津田は紳士でないとおっしゃるんですか」

「僕は紳士なんてどんなものかまるで知りません。第一そんな階級が世の中に存在している事を、僕は認めていないのです」

「認めようと認めまいと、そりゃあなたの御随意です。しかし津田がどうしたというんです」

「聞きたいですか」

鋭い稲妻いなずまがお延の細い眼からまともに迸ほとばしった。

「津田はわたくしの夫です」

「そうです。だから聞きたいでしょう」

お延は齒を嚙^かんだ。

「早く帰って下さい」

「ええ帰ります。今帰るところです」

小林はこう云ったなりすぐ向き直った。玄関の方へ行こうとして縁側^{えんがわ}を二足ばかりお延から遠ざかった。その後姿を見てたまらなくなつたお延はまた呼びとめた。

「お待ちなさい」

「何ですか」

小林はのっそり立ちどまつた。そうして衿^{ゆき}の長過ぎる古外套^{ふるがいとう}を着た両手を前の方に出して、ポンチ絵に似た自分の姿を鑑賞でも

するように眺め廻した後で、にやにやと笑いながらお延を見た。
お延の声はなお鋭くなった。

「なぜ黙って帰るんです」

「御礼は先刻さっき云ったつもりですがね」

「外套の事じゃありません」

小林はわざと空々そらそらしい様子をした。はてなと考える態度まで
粧よそおって見せた。お延は詰責きつせきした。

「あなたは私の前で説明する義務があります」

「何をですか」

「津田の事をです。津田は私の夫です。妻さいの前で夫の人格を疑ぐ

るような言葉を、遠廻しにでも出した以上、それを綺麗きれいに説明するのには、あなたの義務じゃありませんか」

「でなければそれを取り消すだけの事でしよう。僕は義務だの責任だのって感じの少ない人間だから、あなたの要求通り説明するのは困難かも知れないけれども、同時に恥はじを恥と思わない男として、いったん云った事を取り消すぐらいは何でもありません。――じゃ津田君に対する失言を取り消しましょう。そうしてあなたに詫あやまりましょう。そうしたらいいでしょう」

お延は黙然として答えなかった。小林は彼女の前に姿勢を正しくした。

「ここに改めて言明します。津田君は立派な人格を具えた人です。紳士です。（もし社会にそういう特別な階級が存在するならば）」

お延は依然として下を向いたまま口を利^きかなかった。小林は語を続けた。

「僕は先刻奥さんに、人から笑われないようによく気をおつけになつたらよかろうという注意を与えました。奥さんは僕の注意などを受ける必要がないと云われました。それで僕もその後^{あと}を話す事を遠慮しなければならなくなりました。考えるとこれも僕の失言でした。併^{あわ}せて取消します。その他もし奥さんの氣に障^{さわ}った事

があつたら、総て取消します。みんな僕の失言です」

小林はこう云った後で、沓脱くつぬぎに揃そろえてある自分の靴を穿はいた。そうして格子こうしを開けて外へ出る最後に、またふり向いて「奥さんさよなら」と云った。

微かすかに黙礼を返したぎり、お延はいつまでもぼんやりそこに立っていた。それから急に二階の梯子段はしごだんを駈かけ上って、津田の机の前に坐るや否や、その上に突ツ伏してわっと泣き出した。

幸いにお時が下から上あがつて来なかつたので、お延は憚はばかりなく当座の目的を達する事ができた。彼女は他ひとに顔を見られずに思う存分泣けた。彼女が満足するまで自分を泣き尽した時、涙はおのずから乾いた。

濡ぬれた手巾ハンケチを袂たもとへ丸め込んだ彼女は、いきなり机の抽斗ひきだしを開けた。抽斗は二つ付いていた。しかしそれを順々に調べた彼女の眼には別段目新しい何物も映らなかつた。それもそのはずであつた。彼女は津田が病院へ入る時、彼に入用いりようの手荷物を纏まとめるため、二三日にさんちまえ前すでにそこを捜さがしたのである。彼女は残された封筒ふうとうだの、物指ものさしだの、会費の受取だのを見て、それをまた一々鄭寧ていねいに

揃そろえた。パナマや麦藁むぎわら製のいろいろな帽子が石版で印刷されている広告用の小冊子めいたものが、二人で銀座へ買物に行った初夏しよかの夕暮を思い出させた。その時夏帽を買いに立寄った店から津田が貰って帰ったこの見本には、真赤まっかに咲いた日比谷公園の躑躅つつじだの、突当りに霞かすみが関せきの見える大通りの片側に、薄暗い影をこんもり漂よわせている高い柳などが、離れにくい過去の匂においのように、聯想れんそうとしてつき纏まつわっていた。お延はそれを開いたまま、しばらくじっと考え込んだ。それから急に思い立ったように机の抽斗をがちゃりと閉めた。

机の横には同じく直線の多い様式で造られた本箱があった。そ

こにも抽斗が二つ付いていた。机を棄^すてたお延は、すぐ本箱の方に向った。しかしそれを開けようとして、手を環^{かん}にかけた時、抽斗は双方とも何の抵抗もなく、するすると抜け出したので、お延は中を調べない先に、まず失望した。手応^{てごた}えのない所に、新らしい発見のあるはずはなかった。彼女は書き古したノートブックのようなものをいたずらに攪^かき廻^{まわ}した。それを一々読んで見るのは大変であつた。読んだところで自分の知ろうと思ふ事が、そんな筆記の底に潜^{ひそ}んでいようとは想像できなかつた。彼女は用心深い夫の性質をよく承知していた。錠^{じょう}を卸^{おろ}さない秘密をそこいらへ放^{ほう}り出^だしておくには、あまりに細^{こま}か過^すぎるのが彼の持前であつた。

お延は戸棚とだなを開けて、錠を掛けたものがどこかにないかという眼つきをした。けれども中には何にもなかった。上には殺風景な我楽多がらくたが、無器用に積み重ねられているだけであつた。下は長持でいっぱいになつていた。

再び机の前に取つて返したお延は、その上に乗せてある状差じょうさしの中から、津田宛あてで来た手紙を抜き取つて、一々調べ出した。彼女はそんな所に、何にも怪しいものが落ちているはずがないとは思つた。しかし一番最初眼につきながら、手さえ触れなかつた幾通の書信は、やっぱり最後に眼を通すべき性質を帯びて、彼女の注意を誘いざないつつ、いつまでもそこに残つていたのである。彼女は

つい念のためという口実の下に、^{もと}それへ手を出さなければならなくなつた。

封筒が次から次へと裏返された。中身が順々に繰りひろげられた。あるいは四半分、あるいは半分、残るものは全部、ことごとくお延によって黙読された。しかる後彼女はそれを元通りの順で、元通りの位置に復した。^{もと}

突然疑惑の焰が^{ほのお}彼女の胸に燃え上った。一束の古手紙へ油を^{そそ}濺いで、それを綺麗に^{きれい}庭先で焼き尽している津田の姿が、ありありと彼女の眼に映った。その時めらめらと火に化して舞い上る紙片^{かみきれ}を、津田は恐ろしそうに、竹の棒で抑え^{おさ}つけていた。それは初秋^{はつあき}

の冷たい風が肌を吹き出した頃の出来事であつた。そうしてある日曜の朝であつた。二人差向いで食事を済ましてから、五分と経たないうちに起つた光景であつた。箸を置くと、すぐ二階から細い紐で絡げた包を抱えて下りて来た津田は、急に勝手口から庭先へ廻つたと思うと、もうその包に火を点けていた。お延が縁側へ出た時には、厚い上包がすでに焦げて、中にある手紙が少しばかり見えていた。お延は津田に何でそれを焼き捨てるのかと訊いた。津田は嵩ばって始末に困るからだと言へた。なぜ反故にして、自分達の髪を結う時などに使わせないのかと尋ねたら、津田は何とも云わなかつた。ただ底から現われて来る手紙をむやみに

竹の棒で突ツついた。突ツつくたびに、火になり切れない濃い煙が渦を巻いて棒の先に起った。渦は青竹の根を隠すと共に、抑えつけられている手紙をも隠した。津田は煙に咽ぶ顔をお延から背けた。……

お時が午飯の催促に上って来るまで、お延はこんな事を考えつづけて作りつけの人形のようにじっと坐り込んでいた。

九十

時間はいつか十二時を過ぎていた。お延はまたお時の給仕で独

り膳^{ぜん}に向った。それは津田の会社へ出た留守に、二人が毎日繰り返す日課にほかならなかった。けれども今日のお延はいつものお延ではなかった。彼女の様子は剛張^{こわば}っていた。そのくせ心は纏^{まと}まりなく動いていた。先刻^{さつき}出かけようとして着換えた着物まで、平生^{へいぜい}と違ったよそゆきの気持を余分に添^なえる媒介^{なかだち}となった。

もし今の自分に触れる問題が、お時の口から洩^もれなかったなら、お延はついに一言^{ひとこと}も云わずに、食事を済ましてしまったかも知れなかった。その食事さえ、実を云うと、まるで気が進まなかったのを、お時に疑^いぐられるのが厭^{いや}さに、ほんの形式的に片づけようとして、膳に着いただけであつた。

お時も何だか遠慮でもするように、わざと談話を控えていた。しかしお延が一膳で箸^{はし}を置いた時、ようやく「どうか遊ばしましたか」と訊^きいた。そうしてただ「いいえ」という返事を受けた彼女は、すぐ膳を引いて勝手へ立たなかった。

「どうもすみませんでした」

彼女は自分の専断で病院へ行つた詫^{わび}を述べた。お延はお延でまた彼女に尋ねたい事があつた。

「先刻はずいぶん大きな声を出したでしょう。下女部屋の方まで聞こえたかい」

「いいえ」

お延は疑りうたぐの眼をお時の上に注いだ。お時はそれを避けるようにすぐ云った。

「あのお客さまは、ずいぶん——」

しかしお延は何にも答えなかった。静かに後を待っているだけなので、お時は自分の方で後をつけなければならなかった。二人の談話はこれが緒口いとくちで先へ進んだ。

「旦那様だんなさまは驚ろいていらっしやいました。ずいぶんひどい奴やつだつて。こっちから取りに来いとも何とも云わないのに、断りもなく奥様じきだんぱんと直談判を始めたなり何かして、しかも自分が病院に入っている事をよく承知している癖につて」

お延は軽蔑さげすんだ笑いを微かすかに洩もらした。しかし自分の批評は加えなかった。

「まだほかに何かおっしゃりやしなかったかい」

「外套だけやって早く返せっておっしゃいました。それから奥さんと話しをしているかと御訊おききになりますから、話しをしてもらっしやいますと申し上げましたら、大変厭いやな顔をなさいました」

「そうかい。それぎりかい」

「いえ、何を話しているのかと御訊きになりました」

「それでお前は何とお答えをしたの」

「別にお答えをしようがございませんから、それは存じませんと申し上げました」

「そうしたら」

「そうしたら、なお厭な顔をなさいました。いったい座敷なんかへむやみに上り込ませるのが間違っている——」

「そんな事をおっしゃったの。だって昔からのお友達なら仕方がないじゃないの」

「だから私もそう申し上げたのでございました。それに奥さまはちようどお召換めしかえをしていらっしやいましたので、すぐ玄関へおでになる訳に行かなかったのだからやむをえませんて」

「そう。そうしたら」

「そうしたら、お前はもと岡本さんにいただけあって、奥さんの事というと、何でも熱心に弁護するから感心だって、冷評ひやかされました」

お延は苦笑した。

「どうも御気の毒さま。それっきり」

「いえ、まだございます。小林は酒を飲んでやしなかったかとお訊きになるんです。私はよく気がつきませんでしたけれども、お正月でもないのに、まさか朝っぱらから酔払って、他の家ひとうちへお客にいらっしやる方もあるまいと思いましたが、——」

「酔っちゃいらっしやらないと云ったの」

「ええ」

お延はまだ後があるだろうという様子を見せた。お時は果して話をそこで切り上げなかった。

「奥さま、あの旦那様が、帰ったらよく奥さまにそう云えとおっしゃいました」

「なんと」

「あの小林って奴は何をいうか分らない奴だ、ことに酔うとあぶない男だ。だから、あいつが何を云ってもけっして取り合っちゃいけない。まあみんな嘘だと思っていれば間違はないんだからっ

て」

「そう」

お延はこれ以上何も云う気にならなかった。お時は一人でげら笑った。

「堀の奥さまも傍そばで笑っていらっしやいました」

お延は始めて津田の妹が今朝病院へ見舞に来ていた事を知った。

お延より一つ年上のその妹は、もう二人の子持であつた。長男はすでに四年前に生れていた。単に母であるという事実が、彼女の自覚を呼び醒ますには充分であつた。彼女の心は四年以来いつでも母であつた。母でない日はただの一日もなかつた。

彼女の夫は道楽ものであつた。そうして道楽ものによく見受けられる寛大の気性を具えていた。自分が自由に遊び廻る代りに、細君にもむずかしい顔を見せない、と云つてむやみに可愛がりもしない。これが彼のお秀に対する態度であつた。彼はそれを得意にしていた。道楽の修業を積んで始めてそういう境界に達せられるもののように考えていた。人世観という厳めしい名をつけて然

るべきものを、もし彼がもっているとすれば、それは取りも直さず、物事に生なまぬ温く触れて行く事であつた。微笑して過ぎる事であつた。何にも執着なんしない事であつた。呑のん気に、ずばらに、淡泊たんぱくに、鷹揚おうように、善良に、世の中を歩いて行く事であつた。それが彼のいわゆる通つうであつた。金に不自由のない彼は、今までそれだけで押し通して来た。またどこへ行っても不足を感じなかつた。この好成蹟こうせいせきがますます彼を楽天的にした。誰からでも好かれているという自信をもつた彼は、無論お秀からも好かれているに違ないと思ひ込んでいた。そうしてそれは間違でも何でもなかつた。実際彼はお秀から嫌われていなかったたのである。

器量望みで貰われたお秀は、堀の所へ片づいてから始めて夫の性質を知った。放蕩ほうとうの酒で臟腑ぞうふを洗濯されたような彼の趣おもむきもようやく解する事ができた。こんなに拘泥こうでいの少ない男が、また何の必要があつて、是非自分を貰いたいなどと、真面目まじめに云い出したものだろうかという不審さえ、すぐうやむやのうちに葬られてしまった。お延ほど根強くない彼女は、その意味を覚さとる前に、もう妻としての興味を夫から離して、母らしい輝やいた始めての眼を、新らしく生れた子供の上に注そそがなければならなくなった。

お秀のお延と違ふところはこれだけではなかった。お延の新世しんしよ帯たいが夫婦二人ぎりで、家族は双方とも遠い京都に離れているのに

反して、堀には母があつた。弟も妹も同居していた。親類の厄介者までいた。自然の勢い彼女は夫の事ばかり考えている訳に行かなかった。中でも母には、他の知らない気苦労をしなければならなかった。

器量望みで貰われただけあつて、外側から見たお秀はいつまで経つても若かつた。一つ年下のお延に比べて見てもやっぱり若かつた。四歳の子持とはどうしても考えられないくらいであつた。けれどもお延と違つた家庭の事情の下に、過去の四五年を費やして来た彼女は、どこかにまたお延と違つた心得をもつていた。お延より若く見られないとも限らない彼女は、ある意味から

云つて、たしかにお延よりも老^ふけていた。言語態度が老けているというよりも、心が老けていた。いわば、早く世帯染^{しよたいじ}みたのである。

こういう世帯染みた眼で兄夫婦を眺めなければならぬお秀には、常に彼らに対する不満があつた。その不満が、何か事さえあると、とかく彼女を京都にいる父母^{ちちはは}の味方にしたがつた。彼女はそれでもなるべく兄と衝突する機会を避けるようにしていた。ことに嫂^{あによめ}に気^き下^ま味^ずい事をいうのは、直接兄に当るよりもなお悪いと思つて、平生から慎^{つつ}しんでいた。しかし腹の中はむしろ反対であつた。何かいう兄よりも何も云わないお延の方に、彼女はいつ

でも余分の非難を投げかけていた。兄がもしあれほど派手好き（はでず）な女と結婚しなかったならばという気が、始終胸（しじゅう）の底にあつた。そうしてそれは身負（みびいき）に過ぎない、お延に気の毒な批判であるという事には、かつて思い至らなかつた。

お秀は自分の立場をよく承知しているつもりでいた。兄夫婦から煙（けむ）たがられないまでも、けっして快よく思われていないぐらいの事には、気がついていた。しかし自分の立場を改めようという考は、彼女の頭のどこにも入って来なかつた。第一には二人が厭（いや）がるからなお改めないのであつた。自分の立場を厭（いや）がるのが、結局自分を厭（いや）がるのと同じ事に帰着してくるので、彼女はそこに反

抗の意地を出したくなつたのである。第二には正しいという良心が働らいていた。これはいくら厭がられても兄のためだと思えば構わないという主張であつた。第三は単に派手好きなお延が嫌だきらいという一点に纏まとめられてしまわなければならなかつた。お延より余裕のある、またお延より贅沢ぜいたくのできる彼女にして、その点では自分以下のお延がなぜ気に喰わないのだろうか。それはお秀にとつて何の問題にもならなかつた。ただしお秀には姑しゅうとがあつた。そうしてお延は夫を除けば全く自分自身の主人公であつた。しかしお秀はこの問題に関聯かんれんしてこの相違すら考えなかつた。

お秀がお延から津田の消息を電話で訊きかされて、その翌日病院

へ見舞に出かけたのは、お時の行く小一時間前、ちようど小林が外套がいとうを受取ろうとして、彼の座敷へ上り込んだ時分であつた。

九十二

前の晩よく寝られなかつた津田は、その朝看護婦の運んで来てくれた膳ぜんにちよつと手を出したぎり、また仰向あおもむけになつて、昨夕ゆうべの不足を取り返すために、重たい眼を閉つぶっていた。お秀の入つて来たのは、ちようど彼がうとうとと半睡状態に入りいかけた間際まぎわだったので、彼は襖ふすまの音ですぐ眼を覚さました。そうして病人に斟酌しんしゃくを

加えるつもりで、わざとそれを静かに開けたお秀と顔を見合せた。

こういう場合に彼らはけっして愛嬌あいきょうを売り合わなかった。嬉しうれそうな表情も見せ合わなかった。彼らからいうと、それはむしろ陳腐過ちんぷぎる社交上の形式に過ぎなかった。それから一種の虚偽に近い努力でもあった。彼らには自分ら兄妹きょうだいでなくては見られない、また自分ら以外の他人には通用し悪い默契にくがあった。どうせお互いに好く思われよう、好く思われようと意識して、上部うわべの所作しよだけを人並に尽したところで、今さら始まらないんだから、いっそ下手に騙だまし合う手数を省はぶいて、良心に背そむかない顔そのまま

で、面と向き合おうじゃないかという無言の相談が、多年の間にいつか成立してしまったのである。そうしてその良心に背かない顔というのは、取も直さず、愛嬌のない顔という事に過ぎなかった。

第一に彼らは普通の兄妹として親しい間柄であつた。だから遠慮の要らないという意味で、不愛嬌な挨拶が苦にならなかった。第二に彼らはどこかに調子の合わないところをもっていた。それが災の元で、互の顔を見ると、互に弾き合いたくなつた。

ふと首を上げてそこにお秀を見出した津田の眼には、まさにこうした二重の意味から来る不精と不関心があつた。彼は何物をか

待ち受けているように、いったんきつと上げた首をまた枕の上に横たえてしまった。お秀はまたお秀で、それにはいっとう頓着なく、言葉もかけずに、そつと室の内に入つて来た。

彼女は何より先にまず、枕元にある膳を眺めた。膳の上は汚ならしかった。横倒しに引ッ繰り返された牛乳の罎の下に、鶏卵の殻が一つ、その重みで押し潰されている傍に、齒痕のついた焼麴が食欠のまま投げ出されてあつた。しかもほかにまだ一枚手をつけないのが、綺麗に皿の上に載っていた。玉子もまだ一つ残っていた。

「兄さん、こりやもう済んだの。まだ食べかけなの」

實際津田の片づけかたは、どっちにでも取れるような、だらしないものであつた。

「もう済んだんだよ」

お秀は眉をひそめて、膳を階子段の上り口まで運び出した。看護婦の手が隙かなかつたためか、いつまでも兄の枕元に取り散らかされている朝食の残骸は、掃除の行き届いた自分の家を今出かけて来たばかりの彼女にとって、あまり見つともいいものではなかつた。

「汚ならしい事」

彼女は誰に小言を云うともなく、ただ一人こう云つて元の座に

帰った。しかし津田は黙って取り合わなかった。

「どうしておれのここにいる事が知れたんだい」

「電話で知らせて下すったんです」

「お延がかい」

「ええ」

「知らせないでもいいって云ったのに」

今度はお秀の方が取り合わなかった。

「すぐ来^きようと思ったんですけれども、あいに^きく昨日は少し差支^{さしつか}

えがあつて——」

お秀はそれぎり後を云わなかった。結婚後の彼女には、こうい

う風に物を半分ぎりしか云わない癖がいつの間にか出て来た。場合によると、それが津田には変に受取れた。「嫁に行った以上、兄さんだってもう他人ですからね」という意味に解釈される事が時々あった。自分達夫婦の間柄あいだからを考えて見ても、そこに無理はないのだと思い返せないほど理窟りくつの徹とおらない頭をもった津田では無論なかった。それどころか、彼はこの妹のような態度で、お延が外へ対してふるまってくれば好いがと、暗あんに希望していたくらいであった。けれども自分がお秀にそうした素振そぶりを見せられて見るとけっして好い気持はしなかった。そうして自分こそ絶えずお秀に対してそういう素振そぶりを見せているのにと反省する暇も何にも

なくなってしまった。

津田は後を訊^きかずに思う通りを云った。

「なに今日だって、忙がしいところをわざわざ来てくれるには及ばないんだ。大した病氣じゃないんだから」

「だって嫂^{ねえ}さんが、もし閑^{ひま}があつたら行つて上げて下さいって、わざわざ電話でおっしゃったから」

「そうかい」

「それにあたし少し兄さんに話したい用があるんですの」

津田はようやく頭をお秀の方へ向けた。

九十三

手術後局部に起る変な感じが彼を襲って来た。それはガーゼを詰め込んだ創口きずぐちの周囲にある筋肉が一時に収縮するため起る特殊な心持に過ぎなかったけれども、いったん始まったが最後、あたかも呼吸か脈搏みやくはくのように、規則正しく進行してやまない種類のものではあつた。

彼は一昨日おとといの午後始めて第一の収縮を感じた。芝居へ行く許諾きよだくを彼から得たお延が、階子段はしごだんを下へ降りて行った拍子ひょうしに起つたこの経験は、彼にとって全然新しいものではなかつた。この前療

治を受けた時、すでに同じ現象の発見者であつた彼は、思わず「また始まつたな」と心の中で叫んだ。すると苦い記憶をわざと彼のために繰り返してみせるように、収縮が規則正しく進行し出した。最初に肉が縮む、詰め込んだガーゼで荒々しくその肉を擦すられた気持がする、次にそれがだんだん緩和されて来る、やがて自然の状態に戻ろうとする、途端に一度引いた浪がまた磯へ打ち上げるような勢で、収縮感が猛烈にぶり返してくる。すると彼の意志はその局部に対して全く平生の命令権を失つてしまふ。止めさせようと焦慮れば焦慮るほど、筋肉の方でなお云う事を聞かなくなる。——これが過程であつた。

津田はこの変な感じとお延との間にどんな連絡があるか知らなかった。彼は籠かごの中の鳥見たように彼女を取扱とくうのが気の毒になった。いつまでも彼女を自分の傍そばに引きつけておくのを男らしくないと考えた。それで快よく彼女を自由な空気の中に放してやった。しかし彼女が彼の好意を感謝して、彼の病床を去るや否や、急に自分だけ一人取り残されたような気がし出した。彼は物足りない耳を傾むけて、お延の下へ降りて行く足音を聞いた。彼女が玄関の扉を開ける時、烈はげしく鳴らした号鈴ベルの音さえ彼にはあまり無遠慮過ぎた。彼が局部から受ける厭いやな筋肉の感じはちょうどこの時に再発したのである。彼はそれを一種の刺戟しげきに帰した。

そうしてその刺戟は過敏にされた神経のお蔭かげにほかならないと考
えた。ではお延の行為が彼の神経をそれほど過敏にしたのだろう
か。お延の所作しよさに対して突然不快を感じ出した彼も、そこまでは
論断する事ができなかった。しかし全く偶然の暗合あんごうでない事も、
彼に云わせると、自明の理であつた。彼は自分だけの料簡りょうけんで、二
つの間にある関係を拵こしらえた。同時にその関係を後からお延に云つ
て聞かせてやりたくなつた。単に彼女を気の毒がらせるために、
病気で寝ている夫を捨てて、一日の歡樂に走つた結果の悪かつた
事を、彼女に後悔させるために。けれども彼はそれを適当に云い
現わす言葉を知らなかつた。たとい云い現わしても彼女に通じな

い事はたしかであつた。通じるにしても、自分の思い通りに感じさせる事はむずかしかつた。彼は黙つて心持を悪くしているよりほかに仕方がなかつた。

お秀の方を向き直つたとつさに、また感じ始めた局部の収縮が、すぐ津田にこれだけの顛末^{てんまつ}を思い起させた。彼は苦^{にが}い顔をした。

何にも知らないお秀にそんな細かい意味の分るはずはなかつた。彼女はそれを兄がいつでも自分にだけして見せる例の表情に過ぎないと解釈した。

「お厭^{いや}なら病院をお出^でになつてから後にしましょうか」

別に同情のある態度も示さなかった彼女は、それでも幾分か斟^{しんし}酌^{やく}しなければならなかった。

「どこか痛いの」

津田はただ首肯^{うなず}いて見せた。お秀はしばらく黙って彼の様子を見ていた。同時に津田の局部で収縮が規則正しく繰り返され始めた。沈黙が二人の間に続いた。その沈黙の続いている間彼は苦い顔を改めなかった。

「そんなに痛くっちゃ困るのね。嫂^{ねえ}さんはどうしたんでしょう。昨日^{きのう}の電話じゃ痛みも何にもないようなお話しだったのにね」

「お延は知らないんだ」

「じゃ嫂さんが帰ってから後で痛み始めたの」

「なに本当はお延のお蔭かげで痛み始めたんだ」とも云えなかった津田は、この時急に自分が自分に駄々だだっ子こらしく見えて来た。上部うわべはとにかく、腹の中がいかに兄らしくないのが恥はずかしくなつた。

「いったいお前の用というのは何だい」

「なに、そんなに痛い時に話さなくてもいいのよ。またにしましよう」

津田は優ゆうに自分を偽いつわる事ができた。しかしその時の彼は偽いつわるのが厭いやであつた。彼はもう局部の感じを忘れていた。収縮は忘れれ

ばやみ、やめば忘れるのをその特色にしていた。

「構わないからお話しよ」

「どうせあたしの話だから碌ろくな事じゃないのよ。よくって」
津田にも大よその見当けんとうはついていた。

九十四

「またあの事だろう」

津田はしばらく間まをおいて、仕方なしにこう云った。しかしその時の彼はもう例いづもの通り聴ききたくもないという顔つきに返って

た。お秀は心でこの矛盾を腹立たしく感じた。

「だからあたしの方じゃ先刻さつきから用は今度こんだの次にしようかと云つてるんじゃないませんか。それを兄さんがわざわざ催促するようにおっしゃるから、ついお話しする気にもなるんですわ」

「だから遠慮なく話したらいいじゃないか。どうせお前はそのつもりで来たんだろう」

「だって、兄さんがそんな厭いやな顔をなさるんですもの」

お秀は少くとも兄に対してなら厭えしやくな顔ぐらいで会釈えしやくを加える女ではなかった。したがって津田も気の毒になるはずがなかった。かえって妹の癖に余計な所で自分を非難する奴だぐらいに考え

た。彼は取り合わずに先へ通り過した。

「また京都から何か云って来たのかい」

「ええまあそんなところよ」

津田の所へは父の方から、お秀の許へは母の側から、京都の消息が重に伝えられる事にほきまっていたので、彼は文通の主を改めて聞く必要を認めなかった。しかし目下の境遇から云って、お秀の母から受け取ったという手紙の中味にはまた冷淡であり得るはずがなかった。二度目の請求を京都へ出してから以後の彼は、絶えず送金の有無を心のうちで氣遣っていたのである。兄妹の間に「あの事」として通用する事件は、なるべく聴くまいと用

心しても、月末つきずえの仕払や病院の入費の出所でどころに多大の利害を感じない訳に行かなかった津田は、またこの二つのものが互ごんに困絡がらかつて、離す事のできない事情の下もとにある意味合いみあひを、お秀よりもよく承知していた。彼はどうしても積極的に自分から押して出なければならなかった。

「何と云って来たい」

「兄さんの方へもお父さんから何か云って来たでしょう」

「うん云って来た。そりゃ話さないでもたいていお前に解かってるだろう」

お秀は解かっているともいえないとも答えなかった。ただ微かすかに薄

笑の影を締^{しま}りの好い口元に寄せて見せた。それがいかにも兄に打ち勝った得意の色をほのめかすように見えるのが津田には癩^{しゃく}だった。平生は単に妹であるという因縁^{いんねん}づくで、少しも自分の眼につかないお秀の器量が、こう云う時に限って、悪く彼を刺戟^{しげき}した。なまじい容色が十人並以上なので、この女は余計^{ひと}他の感情を害するのではなからうかと思う疑惑さえ、彼にとっては一^{ひと}度や二度の経験ではなかった。「お前は器量望みで貰^{もら}われたのを、生涯^{しょうがい}自慢にする気な^なだろう」と云ってやりたい事もしばしばあった。

お秀はやがてきちりと整った眼鼻を揃^{そろ}えて兄に向った。

「それで兄さんはどうなすったの」

「どうもしようがないじゃないか」

「お父さんの方へは何にも云っておあげにならなかったの」

津田はしばらく黙っていた。それからさもやむをえないといった風に答えた。

「云ってやったさ」

「そうしたら」

「そうしたら、まだ何とも返事がないんだ。もっとも家^{うち}へはもう来ているかも知れないが、何しろお延が来て見なければ、そこも分らない」

「しかしお父さんがどんなお返事をお寄こしになるか、兄さんに

は見当けんとうがついて」

津田は何とも答えなかった。お延の拵こしらえてくれた緹袍どてらの襟えりを手探てさぐりに探つて、黒八丈くろはちじょうの下から抜き取った小楊枝こようじで、しきりに前歯をほじくり始めた。彼がいつまでも黙っているのです、お秀は同じ意味の質問をほかの言葉でかけ直した。

「兄さんはお父さんが快よく送金をして下さると思つていらつしやるの」

「知らないよ」

津田はぶつきら棒に答えた。そうして腹立たしそうに後をつけ加えた。

「だからお母さんはお前の所へ何と云って来たかつて、先刻から訊^きいてるじゃないか」

お秀はわざと眼を反^そらして縁側^{えんがわ}の方を見た。それは彼の前であ
あ、ああと嘆息して見せる所作^{しよさ}の代りに過ぎなかつた。

「だから云わない事じゃないのよ。あたし始からこうなるだろう
と思つてたんですもの」

九十五

津田はようやくお秀宛^{あて}で来た手紙の中に、どんな事柄^{ことがら}が書いて

あるかを聞いた。妹の口から伝えられたその内容によると、父の怒りは彼の予期以上に烈しいものであった。月末の不足を自分で才覚さいかくするなら格別、もしそれさえできないというなら、これから先の送金も、見せしめのため、当分見合わせるかも知れないというのが父の実際の考えらしかった。して見ると、この間彼の所へそう云って来た垣根つくりの繕つくろいだとか家賃とちうちの滞とまりだとかいうのは嘘うそでなければならなかった。よし嘘でないにしろ、単に口先の云い前と思わなければならなかった。父がまた何で彼に対してそんなしらじらしい他人行儀を云って寄こしたものだろう。叱るならもっと男らしく叱ったらよさそうなものだのに。

彼は沈吟^{ちんぎん}して考えた。山羊髯^{やぎひげ}を生^はやして、万事にもつたいをつけたがる父の顔、意味もないのに束髪^{そくはつ}を嫌^{きら}って髻^{まげ}にばかり結^ゆいたがる母の頭、そのくらいの特色はこの場合を解釈する何の手がかりにもならなかった。

「いったい兄さんが約束通りになさらないから悪いのよ」とお秀が云った。事件以後何度となく彼女のよって繰り返されるこの言葉ほど、津田の聞きたくないものはなかった。約束通りにしないのが悪いくらいは、妹に教わらないでも、よく解っていた。彼はただその必要を認めなかったただけなのである。そうしてその立場を他^{ひと}からも認めて貰^{もら}いたかったのである。

「だってそりや無理だわ」とお秀が云った。「いくら親子だって約束は約束ですもの。それにお父さんと兄さんだけの事なら、どうでもいいでしょうけれども」

お秀には自分の良人おっとの堀がそれに関係しているという事が一番重要な問題であつた。

「良人うちでも困るのよ。あんな手紙をお母さんから寄こされると」
学校を卒業して、相当の職にありついて、新らしく家庭を構える以上、曲りなりにも親の厄介にならずに、独立した生計ひるを営んで行かなければならないという父の意見を翻ひるがえさせたものは堀の力であつた。津田から頼まれて、また無雑作むぞうさにそれを引き受

けた堀は、物価の騰貴^{とうき}、交際の必要、時代の変化、東京と地方との区別、いろいろ都合の好い材料を勝手に並べ立てて、勤儉一方の父を口説き^く落^{おと}したのである。その代り盆暮に津田の手に渡る賞与の大部分を割^さいて、月々の補助を一度に幾分か償却させるといふ方針を立てたのも彼であつた。その案の成立と共に責任のできた彼はまた至極^{しごく}呑気な男であつた。約束の履行^{りこう}などという事は、最初から深く考えなかつたのみならず、遂行^{すいこう}の時期が来た時分には、もうそれを忘れていた。詰責^{きつせき}に近い手紙を津田の父から受取つた彼は、ほとんどこの事件を念頭においていなかっただけに、驚ろかされた。しかし現金の綺麗^{きれい}に消費されてしまった後

で、気がついたところで、どうする訳にも行かなかった。楽天的な彼はただ申し訳の返事を書いて、それを終了と心得ていた。ところが世間は自分のズボラに適當するように出来上っていないという事を、彼は津田の父から教えられなければならなかった。津田の父はいつまで経っても彼を責任者扱いにした。

同時に津田の財力には不相応と見えるくらいな立派な指輪がお延の指に輝き始めた。そうして始めにそれを見つけ出したものはお秀であつた。女同志の好奇心が彼女の神経を鋭敏にした。彼女はお延の指輪を賞めた^ほ。賞めたついでにそれを買った時と所とを突きとめようとした。堀が保証して成立した津田と父との約束を

まるで知らなかったお延は、平生の用心にも似ず、その点にかけて、全く無邪気であつた。自分がどのくらい津田に愛されているかを、お秀に示そうとする努力が、すべての顧慮こりよに打ち勝つた。彼女はありのままをお秀に物語つた。

不断から派手過ぎる女としてお延を多少悪く見ていたお秀は、すぐその顛末てんまつを京都へ報告した。しかもお延が盆暮の約束を承知している癖に、わざと夫を唆そそのかして、返される金を返さないようにさせたのだという風な手紙の書方をした。津田が自分の細君に対する虚栄心から、内状をお延に打ち明けなかったのを、お秀はお延自身の虚栄心でもあるように、頭からきめてかかったの

である。そうして自分の誤解をそのまま京都へ伝えてしまったのである。今でも彼女はその誤解から逃^{のが}れる事ができなかった。したがってこの事件に関係していうと、彼女の相手は兄の津田よりもむしろ嫂^{あによめ}のお延だと云った方が適切かも知れなかった。

「いったい嫂^{ねえ}さんはどういうつもりでいらっしゃるんでしょう。こんだの事について」

「お延に何にも関係なんかありやしないじゃないか。あいつにや何にも話しやしないんだもの」

「そう。じゃ嫂^{ねえ}さんが一番気楽でいいわね」

お秀は皮肉な微笑を見せた。津田の頭には、芝居に行く前の

晩、これを質にでも入れようかと云つて、ぴかぴかする厚い帯を電灯の光に差し突けたお延の姿が、鮮あざやかかに見えた。

九十六

「いったいどうしたらいいんでしょう」

お秀の言葉は不謹慎な兄を困らせる意味にも取れるし、また自分の当惑を洩もらす表現にもなった。彼女には夫の手前というものがあつた。夫よりもなお遠慮勝しゅつとな姑しゅうとさえその奥には控えていた。

「そりゃ良人うちだつて兄さんに頼まれて、口は利きいたようなもの

の、そこまで責任をもつつもりでもなかったんでしようからね。と云って、何もあれは無責任だと今さらお断りをする気でもないでしょうけれども。とにかく万一の場合にはこう致しますからって証文を入れた訳でもないんだから、そうお父さんのように、法律づくめに解釈されたって、あたしが良人^{うち}へ対して困るだけだわ」

津田は少くとも表面上妹の立場を認めるよりほかに道がなかった。しかし腹の中では彼女に対して気の毒だという料簡^{りようけん}がどこにも起らないので、彼の態度は自然お秀に反響して来た。彼女は自分の前に甚^{はなは}だ横着な兄を見た。その兄は自分の便利よりほかにほ

とんど何にも考えていなかった。もし考えているとすれば新らしく貰った細君の事だけであつた。そうして彼はその細君に甘くなつていた。むしろ自由にされていた。細君を満足させるために、外部に対しては、前よりは一層手前勝手にならなければならなかつた。

兄をこう見ている彼女は、津田に云わせると、最も同情に乏しい妹らしからざる態度を取つて兄に向つた。それを遠慮のない言葉で云い現わすと、「兄さんの困るのは自業自得だからしようがないけれども、あたしの方の始末はどうつけてくれるのですか」というような露骨千万なものになった。

津田はどうするとも云わなかった。またどうする気もなかった。かえって想像に困難なものとして父の料簡を、お秀の前に問題とした。

「いったいお父さんこそどういうつもりなんだろう。突然金を送らないとさえ宣告すれば、由雄は工面くめんするに違ないとでも思っているのか知ら」

「そこなのよ、兄さん」

お秀は意味ありげに津田の顔を見た。そうしてまたつけ加えた。

「だからあたしが良人に対して困るって云うのよ」

微かな暗示が津田の頭に閃めいた。秋口に見る稲妻のように、それは遠いものであった、けれども鋭いものに違なかった。それは父の品性に関係していた。今まで全く気がつかずにいたという意味で遠いという事も云える代りに、いったん気がついた以上、父の平生から押して、それを是認したくなるという点では、子としての津田に、ずいぶん鋭く切り込んで来る性質のものであった。心のうちで劈頭に「まさか」と叫んだ彼は、次の瞬間に「ことによると」と云い直さなければならなくなった。

臆断の鏡によって照らし出された、父の心理状態は、下のよう
な順序で、予期通りの結果に到着すべく仕組まれていた。――最

初に体ていよく送金を拒絶する。津田が困る。今までの行いきがかり上堀じょうに訳を話す。京都に対して責任を感じずべく余儀なくされている堀は、津田の窮を救う事によつて、始めて父に対する保証の義務を果す事ができる。それで否いや応おうなしに例月分を立て替えてくれる。父はただ礼を云つて澄ましている。

こう段落をつけて考えて見ると、そこには或種の要心があつた。相当な理窟りくつもあつた。或程度の手腕は無論認められた。同時に何らの淡泊たんぱくさがそこには存在していなかつた。下劣とまで行かないでも、狐臭きつねくさい狡獪こうかいな所も少しはあつた。小額の金に対する度ど外ずれの執着心ことせうが殊更に目立って見えた。要するにすべてが父らし

くできていた。

ほかの点でどう衝突しようとも、父のこうした遣口やりぐちに感心しないのは、津田といえどもお秀に譲らなかつた。あらゆる意味で父の同情者でありながら、この一点になると、さすがのお秀も津田と同じように眉まゆを顰ひそめなければならなかつた。父の品性。それはむしろ別問題であつた。津田はお秀の補助を受ける事を快よく思わなかつた。お秀はまた兄夫婦しめつとに対して好い感情をもつていなかった。その上夫や姑への義理もつらく考えさせられた。二人はまず實際問題をどう片づけていいかに苦しんだ。そのくせ口では双方とも底の底まで突き込んで行く勇氣がなかつた。互いの忖度そんたく

から成立った父の料簡^{りようけん}は、ただ会話の上で黙認し合う程度に発展しただけであつた。

九十七

感情と理窟^{もつ}の縫^あれ合つた所を解^ほごしながら前へ進む事のできなかつた彼らは、どこまでもうねうね歩いた。局所に触るようなまた触らないような双方の態度が、心のうちで双方を焦^じ烈^れったくした。しかし彼らは兄妹^{きょうだい}であつた。二人共ねちねちした性質を共通に具えていた。相手の淡泊^{さつぱり}しないところを暗^{あん}に非難しながらも、

自分の方から爆発するような不体裁ふていさいは演じなかった。ただ津田は兄だけに、また男だけに、話を一点に括くくる手際てぎわをお秀より余計にもっていた。

「つまりお前は兄さんに対して同情がないと云うんだろう」

「そうじゃないわ」

「でなければお延に同情がないというんだろう。そいつはまあどっちにしたって同おんなじ事だがね」

「あら、嫂ねえさんの事をあたし何とも云ってやしませんわ」

「要するにこの事件について一番悪いものはおれだと、結局こうなるんだろう。そりゃ今さら説明を伺わなくってもよく兄さんに

は解ってる。だから好いよ。兄さんは甘んじてその罰を受けるから。今月はお父さんからお金を貰わないで生きて行くよ」

「兄さんにそんな事ができて」

お秀の兄を冷笑あざけるような調子が、すぐ津田の次の言葉を喚よび起おこした。

「できなければ死ぬまでの事さ」

お秀はついにきりりと緊しまった口元を少し緩ゆるめて、白い歯を微かすかに見せた。津田の頭には、電灯の下で光る厚帯を弄いじくっているお延の姿が、再び現れた。

「いっそ今までの経済事情を残らずお延に打ち明けてしまおう

か」

津田にとってそれほど容易たやすい解決法はなかった。しかし行きがかりから云うと、これほどまた困難な自白はなかった。彼はお延の虚栄心をよく知り抜いていた。それにできるだけの満足を与え、事が、また取とりも直なおさず彼の虚栄心にほかならなかった。お延の自分に対する信用を、女に大切なその一角いっかくにおいて突き崩くずすのは、自分で自分に打撲傷だぼくしょうを与えるようなものであった。お延に氣の毒だからという意味よりも、細君の前で自分の器量を下げなければならぬというのが彼の大きな苦痛になった。そのくらいの事をと他ひとから笑われるようなこんな小さな場合ですら、彼はすぐ

動く気になれなかった。家には現に金がある、お延に対して自己の体面を保つには有^{あり}余^{あま}るほどの金がある。の^のにという勝手な事実の方がどうしても先に立った。

その上彼はどんな時にでもむかつ腹を立てる男ではなかった。己^{おの}れを忘れるという事を非常に安^{やす}っぽく見る彼は、また容易に己れを忘れる事のできない性質^たに父母から生^うみつけられていた。

「できなければ死ぬまでさ」と放^{ほう}り出^だすように云った後で、彼はまだお秀の様子を窺^{うかが}っていた。腹の中に言葉通りの断^だ乎^{んこ}たる何物も出て来ないのが恥^はずかしいとも何とも思えなかった。彼はむしろ冷やかに胸の天秤^{てんびん}を働かし始めた。彼はお延に事情を打ち明け

る苦痛と、お秀から補助を受ける不愉快とを商量しやうりやうした。そうして
いっそ二つのうちで後の方を冒おかしたらどんなものだろうかと思え
た。それに応ずる力を充分もっていたお秀は、第一兄の心から後
悔していないのを慊あきたらなく思った。兄の後に御本尊うしろのお延が澄ま
して控えているのを悪にくんだ。夫の堀をこの事件の責任者でもあ
るように見倣みなして、京都の父が遠廻しに持ちかけて来るのがいか
にも業腹ごうはらであつた。そんなこんなわだかの蟠まりから、津田の意志が充
分見え透すいて来た後あとでも、彼女は容易に自分の方で積極的な好意
を示す事をあえてしなかつた。

同時に、器量望みで比較的富裕な家に嫁に行つたお秀に対する

津田の態度も、また一種の自尊心に充ちていた。彼は成上りものに近いある臭味しゅうみを結婚後のこの妹に見出したみいだ。あるいは見出したと思った。いつか兄という厳めしい具足ぐそくを着けて彼女に対するよきな気分きぶんに支配され始めた。だから彼といえども妄りみだにお秀の前に頭を下げる訳には行かなかった。

二人はそれでどっちからも金の事を云い出さなかった。そうして両方共両方で云い出すのを待っていた。その煮え切らない不徹底な内輪話の最中に、突然下女のお時が飛び込んで来て、二人の拵こしらえかけていた局面を、一度に崩くずしてしまったのである。

九十八

しかしお時のじかに来る前に、津田へ電話のかかって来た事も
たしかであつた。彼は階子段はしごだんの途中で薬局生の面倒臭そうに取り
次ぐ「津田さん電話ですよ」という声を聞いた。彼はお秀との対
話をちよつとやめて、「どこからです」と訊き返した。薬局生は
下りながら、「おおかたお宅からでしょう」と云つた。冷笑なこ
の挨拶あいさつが、つい込み入った話に身を入れ過ぎた津田の心を横着おつちやくに
した。芝居へ行つたぎり、昨日きのうも今日きょうも姿を見せないお延の仕う
ちを暗あんに快よく思っていなかつた彼をなお不愉快にした。

「電話で釣るんだ」

彼はすぐこう思った。昨日の朝もかけ、今日の朝もかけ、ことによると明日あしたの朝も電話だけかけておいて、さんざん人の心を自分の方に惹ひき着けた後で、ひょっくり本当の顔を出すのが手だろ
うと鑑定した。お延の彼に対する平生の素振そぶりから推して見ると、
この類測まんざらに満更な無理はなかった。彼は不用意の際に、突然とし
てしかも静肅しとやかに自分を驚ろかしに這入はいって来るお延の笑顔さえ想
像した。その笑顔がまた変に彼の心に影響して来る事も彼にはよ
く解っていた。彼女は一刹那いっせつなに閃めひらかすその鋭どい武器の力で、
いつでも即座に彼を征服した。今まで持ち応もこたえに持ち応え抜いた

心機をひらりと轉換させられる彼から云えば、見す見す彼女の術中に落ち込むようなものであった。

彼はお秀の注意もかわらず、電話をそのままにしておいた。

「なにどうせ用じゃないんだ。構わないよ。放ほうっておけ」

この挨拶あいさつがまたお秀にはまるで意外であった。第一はズボラを忌いむ兄の性質に釣り合わなかった。第二には何でもお延の云いなり次第になっている兄の態度でなかった。彼女は兄が自分の手前を憚はばかって、不断の甘いところを押し隠すために、わざと嫂あによめに対して無頓着むとんじやくを粧よそおうのだと解釈した。心のうちで多少それを小気味よく感じた彼女も、下から電話の催促をする薬局生の大きな声を

聞いた時には、それでも兄の代りに立ち上らない訳に行かなかった。彼女はわざわざ下まで降りて行った。しかしそれは何の役にも立たなかった。薬局生が好い加減にあしらって、荒らし抜いた後の受話器はもう不通になっていた。

形式的に義務を済ました彼女が元の座に帰って、再び二人に共通な話題の緒口^{いとくち}を取り上げた時、一方では急^{せき}込んだお時が、とうとう我慢し切れなくなつて自働電話を棄^すてて電車に乗ったのである。それから十五分と経^たたないうちに、津田はまた予想外な彼女の口から予想外な用事を聞かされて驚ろいたのである。

お時の帰った後の彼の心は容易に元へ戻らなかった。小林の性

格はよく知り抜いているという自信はありながら、不意に自分の留守宅に押しかけて来て、それほど懇意でもないお延を相手に、話し込もうとも思わなかった彼は、驚ろかざるを得ないのみならず、また考えざるを得なかった。それは外套がいつをやるやらないの問題ではなかった。問題は、外套とはまるで縁のない、しかし他の外套を、平気でよく知りもしない細君の手からじかに貰い受けに行くような彼の性格であつた。もしくは彼の境遇が必然的に生み出した彼の第二の性格であつた。もう一步押して行くと、その性格がお延に向つてどう働らきかけるかが彼の問題であつた。そこには突飛とつぴがあつた。自暴やけがあつた。満足の人間を常に不満足そう

に眺める白い眼があつた。新らしく結婚した彼ら二人は、彼の接
触し得る満足した人間のうちで、得意な代表者として彼から選^{せん}択^{たく}
される恐れがあつた。平生から彼を輕蔑^{けいべつ}する事において、何の容
赦も加えなかつた津田には、またそういう素地^{したじ}を作つておいた自
覺が充分あつた。

「何をいうか分らない」

津田の心には突然一種の恐怖が湧^わいた。お秀はまた反対に笑い
出した。いつまでもその小林という男を何とかかとか批評したが
る兄の意味さえ彼女にはほとんど通じなかつた。

「何を云つたって、構わないじゃありませんか、小林さんなん

か。あんな人のいう事なんぞ、誰も本気にするものはありやしないわ」

お秀も小林の一面をよく知っていた。しかしそれは多く彼が藤井の叔父おじの前で出す一面だけに限られていた。そうしてその一面は酒を呑んだ時などとは、生れ変ったように打って違った穏やかな一面であつた。

「そうでないよ、なかなか」

「近頃そんなに人が悪くなったの。あの人が」

お秀はやっぱり信じられないという顔つきをした。

「だって燐寸マッチ一本だって、大きな家うちを焼こうと思えば、焼く事も

できるじゃないか」

「その代り火が移らなければそれまででしょう、幾箱燐寸マツチを抱え込んでいたって。嫂ねえさんはあんな人に火をつけられるような女じゃありませんよ。それとも……」

九十九

津田はお秀の口から出た下半句しもはんくを聞いた時、わざと眼を動かさなかった。よそを向いたまま、じつとその後あとを待っていた。しかし彼の聞こうとするその後あとはついに出来なかった。お秀は彼の

気になりそうな事を半分云ったぎりで、すぐ句を改めてしまった。

「何だって兄さんはまた今日に限って、そんなつまらない事を心配していらっしゃるの。何か特別な事情でもあるの」

津田はやはり元の所へ眼をつけていた。それはなるべく妹に自分の心を気取^{けど}られないためであつた。眼の色を彼女に読まれないためであつた。そうして現にその不自然な所作^{しよさ}から来る影響を受けていた。彼は何となく臆病な感じがした。彼はようやくお秀の方を向いた。

「別に心配もしていないがね」

「ただ気になるの」

この調子で押して行くと彼はただお秀から冷笑ひやかされるようなものであった。彼はすぐ口を閉じた。

同時に先刻さつきから催おしていた収縮感がまた彼の局部に起った。

彼は二三度それを不愉快に経験した後で、あるいは今度も規則正しく一定の時間中繰り返さなければいけないのかという掛念けねんに制せられた。

そんな事に気のつかないお秀は、なぜだか同じ問題をいつまでも放さなかった。彼女はいったん緒口いとくちを失ったその問題を、すぐ別の形で彼の前に現わして来た。

「兄さんはいったい嫂さんねえをどんな人だと思っていらっしゃるの」

「なぜ改まって今頃そんな質問をかけるんだい。馬鹿らしい」
「そんならいいわ、伺わないでも」

「しかしなぜ訊きくんだよ。その訳を話したらいいじゃないか」
「ちよつと必要があつたから伺つたんです」

「だからその必要をお云いな」

「必要は兄さんのためよ」

津田は変な顔をした。お秀はすぐ後を云った。

「だって兄さんがあんまり小林さんの事を気になさるからよ。何

だか変じゃありませんか」

「そりやお前にゃ解らない事なんだ」

「どうせ解らないから変なんでしょうよ。じゃいったい小林さんがどんな事をどんな風に嫂さんに持ちかけるって云うの」

「持ちかけるとも何とも云っていやしないじゃないか」

「持ちかける恐れがあるという意味です。云い直せば」

津田は答えなかった。お秀は穴の開く^あようにその顔を見た。

「まるで想像がつかないじゃありませんか。たとえばいくらあの人^あが人が悪くなつたにしたところで、何も云いようがないでしょ

う。ちよつと考えて見ても」

津田はまだ答えなかった。お秀はどうしても津田の答えるところまで行こうとした。

「よしんば、あの人が何か云うにしたところで、嫂さんさえ取り合わなければそれまでじゃありませんか」

「そりや聴^きかないでも解^きつてるよ」

「だからあたしが伺^きうんです。兄さんはいったい嫂さんをどう思^{おも}つていらつしやるかつて。兄さんは嫂さんを信用^{しんよう}していらつしやるんですか、いらつしやらないんですか」

お秀は急に畳^{たたみ}みかけて来た。津田にはその意味がよく解^とらな

かった。しかしそこに相手の拍子ひょうしを抜く必要があったので、彼は判然はつきりした返事を避けて、わざと笑い出さなければならなかった。

「大変な権幕けんまくだね。まるで詰問でも受けているようじゃないか」

「ごまかさないで、ちゃんとしたところをおっしゃい」

「云えばどうするというんだい」

「私はあなたの妹です」

「それがどうしたというのかね」

「兄さんは淡泊たんぱくでないから駄目よ」

津田は不思議そうに首を傾けた。

「何だか話が大変むずかしくなってきたようだが、お前少し癩違かんちがい

をしているんじゃないかい。僕はそんな深い意味で小林の事を云い出したんでも何でもないよ。ただ彼奴あいつは僕の留守にお延に会つて何をいうか分らない困った男だというだけなんだよ」

「ただそれだけなの」

「うんそれだけだ」

お秀は急にあてはず的外れたような様子をした。けれども黙ってはいなかった。

「だけど兄さん、もし堀のいない留守るすに誰かあたしの所へ来て何か云うとするでしょう。それを堀が知って心配すると思つていらつしつて」

「堀さんの事は僕にや分らないよ。お前は心配しないと断言する気かも知れないがね」

「ええ断言します」

「結構だよ。——それで？」

「あたしの方もそれだけよ」

二人は黙らなければならなかった。

百

しかし二人はもう因果^{いんが}づけられていた。どうしても或物を或所

まで、会話の手段で、互の胸から敲き出さなければ承知ができなかった。ことに津田には目前の必要があつた。当座に逼る金の工面、彼は今その財源を自分の前に控えていた。そうして一度取り逃せば、それは永久彼の手に戻つて来そうもなかった。勢い彼はその点だけでもお秀に対する弱者の形勢に陥つていた。彼は失なわれた話頭を、どんな風にして取り返したものだろうと考えた。

「お秀病院で飯を食つて行かないか」

時間がちょうどこんな愛嬌をいうに適していた。ことに今朝母と子供を連れて横浜の親類へ行つたという堀の家族は留守なので、彼はこの愛嬌に特別な意味をもたせる便宜もあつた。

「どうせ家へ帰ったって用はないんだろう」

お秀は津田のいう通りにした。話は容易く二人の間に復活する事ができた。しかしそれは単に兄妹らしい話に過ぎなかった。そして単に兄妹らしい話はこの場合彼らにとってちつとも腹の足にならなかった。彼らはもっと相手の胸の中へ潜り込もうとして機会を待った。

「兄さん、あたしここに持っていますよ」

「何を」

「兄さんの入用のものを」

「そうかい」

津田はほとんど取り合わなかった。その冷淡さはまさに彼の自尊心に比例していた。彼は精神的にも形式的にもこの妹に頭を下げたくなかった。しかし金を取りたかった。お秀はまた金はどうでもよかった。しかし兄に頭を下げさせたかった。勢い兄の欲しがる金を餌^{えぼ}にして、自分の目的を達しなければならなかった。結果はどうしても兄を焦^じらす事に帰着した。

「あげましょうか」

「ふん」

「お父さんはどうしたって下さりっこありませんよ」

「ことによると、くれないかも知れないね」

「だってお母さんが、あたしの所へちゃんとそう云って来ていらっしやるんですもの。今日その手紙を持って来て、お目にかけてようと思つてて、つい忘れてしまったんですけれども」

「そりゃ知ってるよ。先刻さつきもうお前から聞いたじゃないか」

「だからよ。あたしが持つて来たつて云うのよ」

「僕を焦じらすためにかい、または僕にくれるためにかい」

お秀は打たれた人のように突然黙った。そうして見る見るうちに、美しい眼の底に涙をいっぱい溜ためた。津田にはそれが口惜くやしな涙みだとしか思えなかった。

「どうして兄さんはこの頃そんなに皮肉になったんでしょう。ど

うして昔のように人の誠を受け入れて下さる事ができないんでしょう」

「兄さんは昔とちつとも違つてやしないよ。近頃お前の方が違つて来たんだよ」

今度は呆^{あき}れた表情がお秀の顔にあらわれた。

「あたしがいつどんな風に変つたとおっしゃるの。云つて下さい」

「そんな事は他^{ひと}に訊^きがなくつても、よく考えて御覧、自分で解る事だから」

「いいえ、解りません。だから云つて下さい。どうぞ云つて聞か

して下さい」

津田はむしろ冷やかな眼をして、鋭どく切り込んで来るお秀の様子を眺めていた。ここまで来ても、彼には相手の機嫌きげんを取り返した方が得とくか、またはくしやりと一度に押し潰つぶした方が得かという利害心が働らいていた。その中間を行こうと決心した彼は徐ろおもむに口を開いた。

「お秀、お前には解らないかも知れないがね、兄さんから見ると、お前は堀さんの所へ行つてっから以来、だいぶ変ったよ」

「そりゃ変るはずですよ、女が嫁に行つて子供が二人もできれば誰だつて変るじゃありませんか」

「だからそれでいいよ」

「けれども兄さんに対して、あたしがどんなに変ったとおっしゃるんです。そこを聞かして下さい」

「そりゃ……」

津田は全部を答えなかった。けれども答えられないのではないという事を、語勢からお秀に解るようにした。お秀は少し間まをおいた。それからすぐ押し返した。

「兄さんのお腹なかの中には、あたしが京都へ告口つげぐちをしたという事が始終しじゅうあるんでしょう」

「そんな事はどうでもいいよ」

「いいえ、それできつとあたしを眼めの敵かたきにしていらっしやるんです」

「誰が」

不幸な言葉は二人の間に伏字ふせじのごとく潜在していたお延という名前に点火したようなものであった。お秀はそれを松明たいまつのように兄の眼先に振り廻した。

「兄さんこそ違ったのです。嫂ねえさんをお貰いになる前の兄さんと、嫂さんをお貰いになった後の兄さんとは、まるで違っています。誰が見たって別の人です」

津田から見たお秀は彼に対する僻見^{へきけん}で武装されていた。ことに最後の攻撃は誤解その物の活動に過ぎなかった。彼には「嫂さん、嫂さん」を繰り返す妹の声がかにも耳障り^{みみざわ}であつた。むしろ自己を満足させるための行為を、ことごとく細君を満足させるために起つたものとして解釈する妹の前に、彼は尠^{すくな}からぬ不快を感じた。

「おれはお前の考えてるような二本棒^{にほんぼう}じゃないよ」
「そりゃそうかも知れません。嫂さんから電話がかかって来て

も、あたしの前じゃわざと冷淡を装^{ようお}って、うつちゃっておおきになるくらいですから」

こういう言葉が所嫌^{ところきらひ}わずお秀の口からひよいひよい続発して来るようになった時、津田はほとんど眼前の利害を忘れるべく余儀なくされた。彼は一二度腹の中で舌打をした。

「だからこいつに電話をかけるなど、あれだけお延に注意しておいたのに」

彼は神経の亢奮^{こうふん}を紛^{まぎ}らす人のように、しきりに短かい口髭^{くちひげ}を引張った。しだいしだいに苦^{にが}い顔を始めた。そうしてだんだん言葉少なになった。

津田のこの態度が意外の影響をお秀に与えた。お秀は兄の弱点が自分のために一皮ずつ赤裸あかはだかにされて行くので、しまいに彼は恥はじ入って、黙り込むのだとばかり考えたらしく、なお猛烈に進んだ。あたかももう一息ひといきで彼を全然自分の前に後悔させる事ができでもするような勢いきおいで。

「嫂さんといっしょになる前の兄さんは、もっと正直でした。少なくとももっと淡泊たんぱくでした。私は証拠のない事を云うと思われるのが厭ありていだから、有体に事実を申します。だから兄さんも淡泊に私の質問に答えて下さい。兄さんは嫂さんをお貰もらいになる前、今度こんだのような嘘うそをお父さんに吐ついた覚おぼえがありますか」

この時津田は始めて弱った。お秀の云う事は明らかな事実であつた。しかしその事實はけっしてお秀の考えているような意味から起つたのではなかつた。津田に云わせると、ただ偶然の事實に過ぎなかつた。

「それでお前はこの事件の責任者はお延だと云うのかい」

お秀はそうだと答えたいところをわざと外そらした。

「いいえ、嫂さんの事なんか、あたしちつとも云つてやしません。ただ兄さんが変つた証拠しやうこにそれだけの事實を主張するんです」

津田は表向どうしても負けなければならぬ形勢に陥おちつて来

た。

「お前がそんなに変わったと主張したければ、変わったでいいじゃないか」

「よかないわ。お父さんやお母さんにすまないわ」

すぐ「そうかい」と答えた津田は冷淡に「そんならそれでもいいよ」と付け足した。

お秀はこれでもまだ後悔しないのかという顔つきをした。

「兄さんの変った証拠しやうこはまだあるんです」

津田は素知そしらぬ風をした。お秀は遠慮なくその証拠しやうこというのを挙げた。

「兄さんは小林さんが兄さんの留守へ来て、嫂ねえさんに何か云やしないかって、先刻さつきから心配しているじゃありませんか」

「煩うるさいな。心配じゃないって先刻説明したじゃないか」

「でも気になる事はたしかなんでしょう」

「どうでも勝手に解釈するがいい」

「ええ。——どっちでも、とにかく、それが兄さんの変った証拠じゃありませんか」

「馬鹿を云うな」

「いいえ、証拠よ。たしかな証拠よ。兄さんはそれだけ嫂さんを恐れていらっしやるんです」

津田はふと眼を転じた。そうして枕に頭を載せたまま、下からお秀の顔を覗き込むようにして見た。それから好い恰好をした鼻柱に冷笑の皺を寄せた。この余裕がお秀には全く突然であつた。もう一息で懺悔の深谷へ真ッ逆さまに突き落すつもりでいた彼女は、まだ兄の後に平坦な地面が残っているのではなからうかという疑いを始めて起した。しかし彼女は行けるところまで行かなければならなかつた。

「兄さんはついこの間まで小林さんなんかを、まるで鼻の先であしらっていらつしたじゃありませんか。何を云つても取り合わなかつたじゃありませんか。それを今日に限ってなぜそんなに怖

がるんです。たかが小林なんかを怖がるようになったのは、その相手が嫂さんだからじゃありませんか」

「そんならそれでいいさ。僕がいくら小林を怖がったって、お父さんやお母さんに対する不義理になる訳でもなからう」

「だからあたしの口を出す幕じゃないとおっしゃるの」

「まあその見当^{けんとう}だろうね」

お秀は赫^{かつ}とした。同時に一筋の稲妻^{いなずま}が彼女の頭の中を走った。

「解^{わか}りました」

お秀は鋭^いどい声でこう云^い放^{はな}った。しかし彼女の改^{きりこ}まった切^こ口^{うじ}上^{よう}は外面上何の変化も津田の上に持ち来^きさなかつた。彼はもう彼女の挑^{ちよう}戦^{せん}に応^おずる気^け色^{しき}を見^みせなかつた。

「解^{わか}りましたよ、兄^{あに}さん」

お秀は津田の肩^{かた}を揺^ゆぶるような具^ぐ合^あに、再^{また}び前^{まえ}の言^{こと}葉^はを繰^{くり}返^{かえ}した。津田は仕方なしにまた口^{くち}を開^{ひら}いた。

「何^{なに}が」

「なぜ嫂^{ねえ}さんに対して兄^{あに}さんがそんなに気^きをおいていらつしやるかという意味^{いみ}がです」

津田の頭に一種の好奇心が起った。

「云つて御覧」

「云う必要はないんです。ただ私にその意味が解ったという事だけを承知していただければたくさんなんです」

「そんならわざわざ断る必要はないよ。黙つて独りひとで解ったと思つているがいい」

「いいえよくないんです。兄さんは私を妹と見倣みなしていらつしやらない。お父さんやお母さんに關係する事でなければ、私には兄さんの前で何にもいう権利がないものとしていらつしやる。だから私も云いません。しかし云わなくつても、眼はちゃんとついて

います。知らないで云わないと思っておいでだと間違いますから、ちよつとお断り致したのです」

津田は話をここいらで切り上げてしまふよりほかに道はないと考へた。なまじいかかり合えばかかり合うほど、事は面倒になるだけだと思つた。しかし彼には妹に頭を下げる気がちつともなかつた。彼女の前に後悔するなどという芝居じみた真似まねは夢にも思いつけなかつた。そのくらいの事をあえてし得る彼は、平生から低く見ている妹にだけは、思ひのほか高慢であつた。そうしてその高慢なところを、他人に対してよりも、比較的遠慮なく外へ出した。したがっていくら口先が和解的でも大して役に立たな

かった。お秀にはただ彼の中心にある軽蔑けいべつが、微温なまぬるい表現を通して伝わるだけであつた。彼女はもうやりきれないと云つた様子を先刻さつきから見せている津田を毫ごうも容赦しなかつた。そうしてまた「兄さん」と云い出した。

その時津田はそれまでにまだ見出し得なかつたお秀の変化に気がついた。今までの彼女は彼を通して常に鋒先ほこさきをお延に向けていた。兄を攻撃するのも嘘うそではなかつたが、矢面やおもてに立つ彼をよそにしても、背後に控えている嫂あねだけは是非射とめなければならぬといふのが、彼女の真剣であつた。それがいつの間にか變つて来た。彼女は勝手に主客の位置を改めた。そうして一直線に兄の方

へ向いて進んで来た。

「兄さん、妹は兄の人格に対して口を出す権利がないものでしょうか。よし権利がないにしたところで、もしそうした疑^{うたがい}を妹が少しでももっているなら、綺麗^{きれい}にそれを晴らしてくれるのが兄の義務——義務は取り消します、私には不釣合な言葉かも知れませんが。——少なくとも兄の人情でしょう。私は今その人情をもつていらっしやらない兄さんを眼の前に見る事を妹として悲しみます」

「何を生意気な事を云うんだ。黙っている、何にも解りもしない癖に」

津田の癩癧^{かんしゃく}は始めて破裂した。

「お前に人格という言葉の意味が解るか。たかが女学校を卒業したぐらいで、そんな言葉をおれの前で人並に使うのからして不都合だ」

「私は言葉に重きをおいていけません。事実を問題にしているのです」

「事実とは何だ。おれの頭の中にある事実が、お前のような教養に乏しい女に捕ま^{つら}えられると思うのか。馬鹿め」

「そう私を軽蔑^{けいべつ}なさるなら、御注意までに申します。しかしよござんすか」

「いいも悪いも答える必要はない。人の病気のところへ来て何だ、その態度は。それでも妹だというつもりか」

「あなたが兄さんらしくないからです」

「黙れ」

「黙りません。云うだけの事は云います。兄さんは嫂^{ねえ}さんに自由にされています。お父さんや、お母さんや、私などよりも嫂さんを大事にしています」

「妹より妻^{さい}を大事にするのはどこの国へ行っただって当り前だ」

「それだけならいいんです。しかし兄さんのはそれだけじゃないんです。嫂さんを大事にしていながら、まだほかにも大事にして

いる人があるんです」

「何だ」

「それだから兄さんは嫂さんを怖こわがるのです。しかもその怖がるのは——」

お秀がこう云いかけた時、病室の襖ふすまがすうと開あいた。そうして蒼白あおしろい顔をしたお延の姿が突然二人の前に現われた。

百三

彼女が医者いしやの玄関げんかんへかかったのはその三四分前であつた。医者

の診察時間は午前と午後に分れていて、午後の方は、役所や会社へ勤める人の便宜^{べんぎ}を計るため、四時から八時までの規定になつていたので、お延は比較的閑静な扉^{ドア}を開けて内へ入る事ができたのである。

実際彼女は三四日前^{さんよつか}に来た時のように、編上^{あみあげ}だの畳^{たたみ}つきだのという雑然^{はきもの}たる穿物を、一足も沓脱^{くつぬぎ}の上に見出^{みいだ}さなかつた。患者の影は無論の事であつた。時間外という考えを少しも頭の中に入れていなかった彼女には、それがいかにも不思議であつたくらい四^{あた}囲^りは寂寞^{ひっそり}していた。

彼女はその森^{しん}とした玄関の沓脱^{くつぬぎ}の上に、行儀よく揃^{そろ}えられたた

だ一足の女下駄を認めた。価段ねだんから云つても看護婦などの穿はきそ
うもない新らしいその下駄が突然彼女の心を躍おどらせた。下駄はま
さしく若い婦人のものであつた。小林から受けた疑念で胸がいつ
ぱいになつていた彼女は、しばらくそれから眼を放す事ができな
かつた。彼女は猛烈にそれを見た。

右手にある小さい四角な窓から書生が顔を出した。そうしてそ
こに動かないお延の姿を認めた時、誰何すいかでもする人のような表情
を彼女の上に注いだ。彼女はすぐ津田への来客があるかないかを
確かめた。それが若い女であるかないかも訊きいた。それからわざ
と取次を断つて、ひとりで階子段はしごだんの下まで来た。そうして上を見

上げた。

上では絶えざる話し声が聞こえた。しかし普通雑談の時に、言葉が対話者の間を、淀^{よど}みなく往ったり来たり流れているのはだ**いぶ趣**^{おもむき}を異^{こと}にしていた。そこには強い感情があつた。亢^{こう}奮^{ふん}があつた。しかもそれを抑^{おさ}えつけようとする努力の痕^{あと}がありありと聞こえた。他聞^{たぶん}を憚^{はば}かるとしか受取れないその談話が、お延の神経を針のように鋭どくした。下駄を見つめた時より以上の猛烈さがそこに現われた。彼女は一倍猛烈に耳を傾むけた。

津田の部屋は診察室の真上にあつた。家の構造から云うと、階子段を上^あつてすぐ取^とつきが壁で、その右手がまた四畳半の小さい

部屋になっっているので、この部屋の前を廊下伝いに通り越さなければ、津田の寝ている所へは出られなかった。したがってお延の聴きこうとする談話は、聴きくに都合の好くない見当けんとう、すなわち彼女の後うしろの方から洩もれて来るのであった。

彼女はそつと階子段を上のぼった。柔婉しなやかな体格からだをもった彼女の足音は猫のように静かであつた。そうして猫と同じような成効せいこうをもつて酬むくいられた。

上あがり口ぐちの一方には、落ちない用心に、一間ほどの手欄てすりが拵こしらへてあつた。お延はそれに倚よつて、津田の様子を窺うかがつた。するとたちまち鋭えいどいお秀の声こゑが彼女の耳に入いつた。ことに嫂ねえさんがという

特殊な言葉が際立きわだって鼓膜こまくに響いた。みごとに予期はの外れた彼女は、またはっと思わせられた。硬い緊張が弛ゆるむ暇いとまなく再び彼女を襲って来た。彼女は津田に向ってお秀の口から抛なげつけられる嫂さんというその言葉が、どんな意味に用いられているかを知らなければならなかった。彼女は耳を澄ました。

二人の語勢は聴いているうちに急になって来た。二人は明らかに喧嘩けんかをしていた。その喧嘩の渦中かちゆうには、知らない間まに、自分が引き込まれていた。あるいは自分がこの喧嘩けんかの主な原因おもかも分らなかった。

しかし前後の関係を知らない彼女は、ただそれだけで自分の位

置をきめる訳に行かなかった。それに二人の使う、というよりもしろお秀の使う言葉は霰あられのように忙がしかった。後から後から落ちてくる単語の意味を、一粒ずつ拾って吟味ぎんみしている閑ひまなどはとうていなかった。「人格」、「大事にする」、「当り前」、こんな言葉がそれからそれへとそこに佇立たたずんでいる彼女の耳朶みみたぶを叩たたきに来るだけであつた。

彼女は事件が分明ぶんみょうになるまでじつと動かずに立っていようかと考えた。するとその時お秀の口から最後の砲撃のように出た「兄さんは嫂さんよりほかにもまだ大事にしている人があるのだ」という句が、突然彼女の心を震ふるわせた。際立きわだって明瞭めいりょうに聞こえたこ

の一句ほどお延にとって大切なものはなかった。同時にこの一句ほど彼女にとって不明瞭なものもなかった。後を聞かなければ、それだけで独立した役にはとても立てられなかった。お延はどんな犠牲を払っても、その後を聴かなければ気がすまなかった。しかしその後はまたどうしても聴いていられなかった。先刻から一言葉ごとに一調子ずつ高まって来た二人の遣取は、ここで絶頂に達したものと見倣すよりほかに途はなかった。もう一步も先へ進めない極端まで来ていた。もし強いて先へ出ようとすれば、どつちかで手を出さなければならなかった。したがってお延は不体裁を防ぐ緩和剤として、どうしても病室へ入らなければならなかった。

た。

彼女は兄妹きょうだいの中をよく知っていた。彼らの不和の原因が自分にある事も彼女には平生から解っていた。そこへ顔を出すには、出すだけの手際てぎわが要いった。しかし彼女にはその自信がないでもなかった。彼女は際きわどい刹那せつなに覚悟をきめた。そうしてわざと静かに病室ふすまの襖を開けた。

百四

二人ははたしてぴたりと黙った。しかし暴風雨がこれから荒れ

ようとする途中で、急にその進行を止められた時の沈黙は、けつして平和の象徴シンボルではなかった。不自然に抑おさえつけられた無言の瞬間にはむしろ物凄ものすごい或物が潜んでいた。

二人の位置関係から云って、最初にお延を見たものは津田であつた。南向の縁側の方を枕にして寝ている彼の眼に、反対の側がわから入って来たお延の姿が一番早く映るのは順序であつた。その刹那に彼は二つのものをお延に握られた。一つは彼の不安であつた。一つは彼の安堵あんどであつた。困ったという心持と、助かったという心持が、包み蔵つつかくす余裕のないうちに、一度に彼の顔に出た。そうしてそれが突然入って来たお延の予期とぴたりと一致した。

彼女はこの時夫の面上に現われた表情の一部分から、或物を疑つても差支さしつかえないという証左しょうさを、永く心の中うちに掴つかんだ。しかしそれは秘密であつた。とつさの場合、彼女はただ夫の他の半面に応ずるのを、ここへ来た刻下こっかの目的としなければならなかつた。彼女は蒼白あおしろい頬ほおに無理な微笑を湛たたえて津田を見た。そうしてそれがちようどお秀のふり返るのと同時に起つた所作しよさだったので、お秀にはお延が自分を出し抜いて、津田と默契を取り換わせているように取れた。薄赤い血潮が覺えずお秀の頬ほに上つた。

「おや」

「今日こんにちは」

軽い挨拶あいさつが二人の間に起った。しかしそれが済むと話はいつものように続かなかった。二人とも手持無沙汰てもちぶさたに圧迫され始めなければならなかった。滅多めったな事の云えないお延は、脇わきに抱えて来た風呂敷包を開けて、岡本の貸してくれた英語の滑稽本こっけいほんを出して津田に渡した。その指の先には、お秀が始終腹しじゅうの中で問題にしている例の指輪が光っていた。

津田は薄い小型な書物を一つ一つ取り上げて、さらさら頁ページを翻ひるがえして見たぎりで、再びそれを枕元へ置いた。彼はその一行さえ読む気にならなかった。批評を加える勇氣などはどこからも出て来なかった。彼は黙っていた。お延はその間にまたお秀と二言三言ふたことみ

言^{こと}ほど口^{くち}を利^きいた。それもみんな彼女の方から話しかけて、必要な返事だけを、云わば相手の咽喉^{のど}から圧^おし出したようなものであつた。

お延はまた懐中^{ふところ}から一通の手紙を出した。

「今^き来^きがけに郵便函^{ゆうびんばこ}の中を見たら入っておりましてから、持参^{もさん}しました」

お延の言葉は几帳面^{きちようめん}に改^かたまっていた。津田と差向^{さむかい}いの時に比べると、まるで別人^{べつじん}のように礼儀正しかった。彼女はその形式的なよそよそしいところを暗^{あん}に嫌^{きら}っていた。けれども他人の前、こ
とにお秀の前では、そうした不自然な言葉遣^{づか}いを、一種の意味か

ら余儀なくされるようにも思った。

手紙は夫婦の間に待ち受けられた京都の父からのものであった。これも前便と同じように書留になっていないので、眼前の用を弁ずる中味に乏しいのは、お秀からまだ何にも聞かせられないお延にもほぼ見当だけはついていた。

津田は封筒を切る前に彼女に云った。

「お延駄目だとさ」

「そう、何が」

「お父さんはいくら頼んでももうお金をくれないんだそうだ」

津田の云い方は珍らしく真挚の気に充ちていた。お秀に対する

反抗心から、彼はいつの間にかお延に対して平たい旦那様になつていた。しかもそこに自分はまるで気がつかずにいた。銜い氣のないその態度がお延には嬉しかった。彼女は慰さめるような温味のある調子で答えた。言葉遣いさえ吾知らず、平生の自分に戻つてしまった。

「いいわ、そんなら。こつちでどうでもするから」

津田は黙って封を切った。中から出た父の手紙はさほど長いものではなかった。その上一目見ればすぐ要領を得られるくらいな大きな字で書いてあった。それでも女二人は滑稽本の場合のように口を利き合わなかった。ひとしく注意の視線を巻紙の上に向け

ているだけであつた。だから津田がそれを読み了^{おわ}つて、元通りに封筒の中へ入れたのを、そのまま枕元へ投げ出した時には、二人にも大体の意味はもう呑^のみ込めていた。それでもお秀はわざと訊^きいた。

「何と書いてありますか、兄さん」

気のない顔をしていた津田は軽く「ふん」と答えた。お秀はちよつとよそを向いた。それからまた訊いた。

「あたしの云つた通りでしょう」

手紙にははたして彼女の推察する通りの事が書いてあつた。しかしそれ見た事かといったような妹の態度が、津田にはいかにも

気に喰わなかった。それでなくつても先刻さつきからの行いきがかり上じょう、彼は天然自然の返事をお秀に与えるのが業腹ごうはらであつた。

百五

お延には夫の気持がありありと読めた。彼女は心うちの中で再度の衝突を惧おそれた。と共に、夫の本意をも疑つた。彼女の見た平生の夫には自制の念がどこへでもついて廻つた。自制ばかりではなかつた。腹の奥で相手を下に見る時の冷かさが、それにいつでも付け加わっていた。彼女は夫のこの特色中に、まだ自分の手に余

る或物が潜んでいる事をも信じていた。それはいまだに彼女にとつての未知数であるにもかかわらず、そこさえ明瞭めいりょうに抑おさえれば、苦くもなく彼を満足に扱かい得るものとまで彼女は思い込んでいた。しかし外部に現われるだけの夫なら一口で評するのもそれほどむずかしい事ではなかった。彼は容易に怒おこらない人であった。英語で云えば、テンパーを失なわない例にもなろうというその人が、またどうして自分の妹の前にこう破裂しかかるのだらう。もっと、厳密に云えば、彼女が室へやに入つて来る前に、どうしてあれほど露骨に破裂したのだらう。とにかく彼女は退ひきかけた波が再び寄せ返す前に、二人の間に割り込まなければならなかつ

た。彼女は喧嘩^{けんか}の相手を自分に引き受けようとした。

「秀子さんの方へもお父さまから何かお音信^{たより}があつたんですか」

「いいえ母から」

「そう、やっぱりこの事について」

「ええ」

お秀はそれぎり何にも云わなかった。お延は後をつけた。

「京都でもいろいろお物費^{ものいり}が多いでしょうからね。それに元々こ

ちらが悪いんですから」

お秀にはこの時ほどお延の指にある宝石が光って見えた事はなかった。そうしてお延はまたさも無邪気らしくその光る指輪をお

秀の前に出していた。お秀は云った。

「そういう訳でもないんでしようけれどもね。年寄は変なもので、兄さんを信じているんですよ。そのくらいの工面くめんはどうにでもできるぐらいに考えて」

お延は微笑した。

「そりゃ、いざとなればどうにかこうにかかなりますよ、ねえあなた」

こう云って津田の方を見たお延は、「早くなるとおっしゃい」という意味を眼で知らせた。しかし津田には、彼女のして見せる眼の働らきが解っても、意味は全く通じなかった。彼はいつも繰

り返す通りの事を云った。

「ならん事もあるまいがね、おれにはどうもお父さんの云う事が
変でならないんだ。垣根を繕^{つく}ろったの、家賃が滞^{とど}ったのって、そ
んな費用は元来些細^{ささい}なものじゃないか」

「そうも行かないでしょう、あなた。これで自分の家^{うち}を一軒持っ
て見ると」

「我々だつて一軒持つてるじゃないか」

お延は彼女に特有な微笑を今度はお秀の方に見せた。お秀も同
程度の愛嬌^{あいぎょう}を惜まずに答えた。

「兄さんはその底に何か魂胆^{こんたん}があるかと思つて、疑つていらつ

しゃるんですよ」

「そりゃあなた悪いわ、お父さまを疑ぐるなんて。お父さまに魂胆のあるはずはないじゃありませんか、ねえ秀子さん」

「いいえ、父や母よりもね、ほかにまだ魂胆があると思ってるんですよ」

「ほかに？」

お延は意外な顔をした。

「ええ、ほかにあると思ってるに違ないのよ」

お延は再び夫の方に向った。

「あなた、そりゃまたどういう訳なの」

「お秀がそう云うんだから、お秀に訊きいて御覧よ」

お延は苦笑した。お秀の口を利く順番がまた廻まわつて来た。

「兄さんはあたし達が陰で、京都を突つついたと思ってるんですよ」

「だって――」

お延はそれより以上云う事ができなかった。そうしてその云った事はほとんど意味をなさなかった。お秀はすぐその虚きよを充みたした。

「それで先刻さつきから大變御機嫌ごきげんが悪いのよ。もつともあたしと兄さんと寄るときつと喧嘩けんかになるんですけれどもね。ことにこの事件

このかた」

「困るのね」とお延は溜息交りためいきまじに答えた後で、また津田に訊きかけた。

「しかしそりや本当の事なの、あなた。あなただって真逆まさかそんな男らしくない事を考えていらっしやるんじゃないでしょう」

「どうか知らないけれども、お秀にはそう見えるんだらうよ」
「だって秀子さん達がそんな事をなさるとすれば、いったい何の役に立つと、あなた思っ*て*いらっしやるの」

「おおかた見せしめのためだらうよ。おれにはよく解らないけれども」

「何の見せしめなの？　　いったいどんな悪い事をあなたなすったの」

「知らないよ」

津田は蒼蠅うるせそうにこう云った。お延は取りつく島もないといった風にお秀を見た。どうか助けて下さいという表情が彼女の細い眼と眉まゆの間に現われた。

百六

「なに兄さんが強情なんですよ」とお秀が云い出した。嫂あによめに対し

て何とか説明しなければならぬ位地に追いつめられた彼女は、
こう云いながら腹の中でなおの事その嫂を憎んだ。彼女から見た
その時のお延ほど、空々しいまたずうずうしい女はなかった。

「ええ良人は強情よ」と答えたお延はすぐ夫の方を向いた。

「あなた本当に強情よ。秀子さんのおっしやる通りよ。そのくせ
だけは是非おやめにならないといけませんわ」

「いったい何が強情なんだ」

「そりゃあたしにもよく解らないけれども」

「何でもかでもお父さんから金を取ろうとするからかい」

「そうね」

「取ろうとも何とも云っていやしないじゃないか」

「そうね。そんな事おっしやるはずがないわね。またおっしやつたところで効目ききめがなければ仕方ありませんからね」

「じゃどこが強情なんだ」

「どこがってお聴ききになっても駄目だめよ。あたしにもよく解らないんですから。だけど、どこかにあるのよ、強情なところが」

「馬鹿」

馬鹿と云われたお延はかえって心持ち好さそうに微笑した。お秀はたまらなくなつた。

「兄さん、あなたなぜあたしの持つて来たものを素直すなおにお取りに

ならないんです」

「素直にも義剛ぎごわにも、取るにも取らないにも、お前の方でてんから出さないんじゃないか」

「あなたの方でお取りになるとおっしゃらないから、出せないんです」

「こっちから云えば、お前の方で出さないから取らないんだ」

「しかし取るようにして取って下さらないければ、あたしの方だつて厭いやですもの」

「じゃどうすればいいんだ」

「解わかってるじゃありませんか」

三人はしばらく黙っていた。

突然津田が云い出した。

「お延お前お秀に詫あやまつたらどうだ」

お延は呆あきれたように夫を見た。

「なんで」

「お前さえ詫わまつたら、持って来たものを出すというつもりなんだろう。お秀の料簡りょうけんでは」

「あたしが詫わまるのは何でもないわ。あなたが詫わまれとおっしゃるなら、いくらでも詫わまるわ。だけど――」

お延はここで訴えの眼をお秀に向けた。お秀はその後あとを遮かきつ

た。

「兄さん、あなた何をおっしゃるんです。あたしがいつ嫂さんねえに詫まもって貰もらいたいと云いました。そんな言がかりを捏造ねつぞうされては、あたしが嫂さんに対して面目めんぼくなくなるだけじゃありませんか」

沈黙がまた三人の上に落ちた。津田はわざと口を利きかなかつた。お延には利く必要がなかった。お秀は利く準備をした。

「兄さん、あたしはこれでもあなた方に対して義務を尽しているつもりです。——」

お秀がやっとこれだけ云いかけた時、津田は急に質問を入れ

た。

「ちよっとお待ち。義務かい、親切かい、お前の云おうとする言葉の意味は」

「あたしにはどっちだって同おんなじ事です」

「そうかい。そんなら仕方がない。それで」

「それでじゃありません。だからです。あたしがあなた方の陰へ廻まわって、お父さんやお母さんをつねえついた結果、兄さんや嫂つらさんに不自由をさせるのだと思われるのが、あたしにはいかにも辛いんです。だからその額だけをどうかして上げようと云う好意から、今日わざわざここへ持きって来たと云うんです。実は昨日嫂のうさ

んから電話がかかった時、すぐ来^きようと思ったんですけども、朝のうちは宅^{うち}に用があつたし、午^{ひる}からはその用で銀行へ行く必要ができたものですから、つい来損^{きそこ}なっちまったんです。元々わずかな金額ですから、それについてとやかく云う気はちつともありませんけれども、あたしの方の心遣いは、まるで兄さんに通じていないんだから、それがただ残念だと云いたいんです」

お延はなお黙っている津田の顔を覗^{のぞ}き込んだ。

「あなた何とかおっしやいよ」

「何て」

「何てって、お礼をよ。秀子さんの親切に對してのお礼よ」

「たかがこれしきの金を貰うのに、そんなに恩に着せられちゃ厭いやだよ」

「恩に着せやしないって今云ったじゃありませんか」とお秀が少し癩走かんばしった声で弁解した。お延は元通りの穏やかな調子を崩くずさなかつた。

「だから強情を張らずに、お礼をおっしゃいと云うのに。もしお金を拝借するのがお厭いやなら、お金はただかないでいいから、ただお礼だけをおっしゃいよ」

お秀は変な顔をした。津田は馬鹿を云うなという態度を示した。

百七

三人は妙な羽目に陥^{おちい}つた。行^{いき}がかり上^{じょう}一種の關係で因果^{いんが}づけられた彼らはしだいに話をよそへ持つて行く事が困難になつてきた。席^はを外^{はず}す事は無論できなくなつた。彼らはそこへ坐^{すわ}つたなり、どうしてもこうでも、この問題を解決しなければならなくなつた。

しかも傍^{はた}から見たその問題はけつして重要なものとは云えなかつた。遠くから冷静に彼らの身分と境遇を眺める事のできる地位に立つ誰の眼にも、小さく映らなければならぬ程度のものに

過ぎなかった。彼らは他^{ひと}から注意を受けるまでもなくよくそれを心得ていた。けれども彼らは争わなければならなかった。彼らの背後^{せなか}に背負^{しよ}っている因縁^{いんねん}は、他人に解らない過去から複雑な手を延ばして、自由に彼らを操^{あやつ}った。

しまいに津田とお秀の間に下^{しも}のような問答が起った。

「始めから黙っていれば、それまでですけれども、いったん云い出しておきながら、持って来た物を渡さずにこのまま帰るのも心持が悪うござんすから、どうか取って下さいよ。兄さん」

「置いて行きたければ置いといでよ」

「だから取るようにして取って下さいな」

「いったいどうすればお前の氣に入るんだか、僕には解らないがね、だからその条件をもっと淡泊^{たんぱく}に云っちまったらいいじゃないか」

「あたし条件なんてそんなむずかしいものを要求してやしません。ただ兄さんが心持よく受取^{きようだい}って下されば、それでいいんです。つまり兄妹らしくして下されば、それでいいというだけです。それからお父さんにすまなかったと本氣に一口^{ひとくち}おっしゃりさえすれば、何でもないんです」

「お父さんには、とつくの昔にもうすまなかったと云っちまったよ。お前も知ってるじゃないか。しかも一口や二口じゃないや

ね」

「けれどもあたしの云うのは、そんな形式的小説のお詫じゃありません。心からの後悔です」

津田はたかがこれしきの事にと考えた。後悔などとは思っても寄らなかった。

「僕の詫様が空々しいとでも云うのかね、なんぼ僕が金を欲しが
るったって、これでも一人前の男だよ。そうぺこぺこ頭を下げら
れるものか、考えても御覧な」

「だけれども、兄さんは実際お金が欲しいんでしょう」

「欲しくないとは云わないさ」

「それでお父さんに謝罪^{あやま}ったんでしよう」

「でなければ何も詫^{あやま}る必要はないじゃないか」

「だからお父さんが下さらなくなったんですよ。兄さんはそこに気がつかないんですか」

津田は口を閉じた。お秀はすぐ乗^のしかかって行つた。

「兄さんがそういう気でいらっしゃる以上、お父さんばかりじゃないわ、あたしだって上げられないわ」

「じゃお止^よしよ。何も無理に貰^{もら}おうとは云わないんだから」

「ところが無理にでも貰おうとおっしゃるじゃありませんか」

「いつ」

「先刻さつきからそう云つていらつしやるんです」

「言がかりを云うな、馬鹿」

「言がかりじゃありません。先刻から腹の中でそう云い続けに云つてゐるじゃありませんか。兄さんこそ淡泊でないから、それが口へ出して云えないんです」

津田は一種嶮けわしい眼をしてお秀を見た。その中には憎悪ぞうおが輝やいた。けれども良心に対して恥ずかしいという光はどこにも宿らなかつた。そうして彼が口を利いた時には、お延でさえその意外なのに驚ろかされた。彼は彼に支配できる最も冷静な調子で、彼女の予期とはまるで反対の事を云つた。

「お秀お前の云う通りだ。兄さんは今改めて自白する。兄さんにはお前の持って来た金が絶対に入用だ。兄さんはまた改めて公言する。お前は妹らしい情愛の深い女だ。兄さんはお前の親切を感じる。だからどうぞその金をこの枕元へ置いて行ってくれ」

お秀の手先が怒りで顫えた。両方の頬に血が差した。その血は心のどこからか一度に顔の方へ向けて動いて来るように見えた。色が白いのでそれが一層鮮やかであった。しかし彼女の言葉遣いだけはそれほど変らなかった。怒りの中に微笑さえ見せた彼女は、不意に兄を捨てて、輝やいた眼をお延の上に注いだ。

「嫂さんどうしましょう。せつかく兄さんがああおっしゃるもの

ですから、置いて行つて上げましょうか」

「そうね、そりや秀子さんの御随意でござんすわ」

「そう。でも兄さんは絶対に必要だとおっしゃるのね」

「ええ良人^{うち}には絶対に必要かも知れせんわ。だけどあたしには必要でも何でもないのよ」

「じゃ兄さんと嫂さんとはまるで別^{べつ}ツこなのね」

「それでいて、ちつとも別ツこじゃないのよ。これでも夫婦だから、何から何までいっしょくたよ」

「だって——」

お延は皆まで云わせなかった。

「良人に絶対に必要なものは、あたしがちゃんと拵^{こしら}えるだけなのよ」

彼女はこう云いながら、昨日^{きのう}岡本の叔父^{おじ}に貰^{もら}って来た小切手を帯の間から出した。

百八

彼女がわざとらしくそれをお秀に見せるように取扱いながら、津田の手に渡した時、彼女には夫に対する一種の注文があつた。前後^{ゆき}の行^{ゆき}がかりと自分の性格から割り出されたその注文というの

はほかでもなかった。彼女は夫が自分としっくり呼吸を合わせ
て、それを受け取ってくれば好いがと心の中で祈ったのであ
る。会心の微笑を洩らしながら首肯うなづずいて、それを鷹揚おうように枕元へ
放ほうり出すか、でなければ、ごく簡単な、しかし細君に対して最も
満足したらしい礼をただ一口述べて、再びそれをお延の手に戻す
か、いずれにしてもこの小切手の出所でどころについて、夫婦の間に夫婦
らしい気脈が通じているという事実を、お秀に見せればそれで足
りたのである。

不幸にして津田にはお延の所作しよさも小切手もあまりに突然過ぎ
た。その上こんな場合にやる彼の戯曲的技巧が、細君とは少し趣おもむき

を異^{こと}にしていた。彼は不思議そうに小切手を眺めた。それから
ゆっくり訊^きいた。

「こりやいったいどうしたんだい」

この冷やかな調子と、等しく冷やかな反問とが、登場の第一歩
においてすでにお延の意気込^{うら}を恨めしく摧^{くじ}いた。彼女の予期^{はず}は外
れた。

「どうもしないわ。ただ要るから拵^{はしら}えただけよ」

こう云った彼女は、腹の中でひやひやした。彼女は津田が真面^{まじ}
目^めくさってその後を訊く事を非常に恐れた。それは夫婦の間に何
らの気脈が通じていない証拠を、お秀の前に暴露^{ばくろ}するに過ぎな

かった。

「訳なんか病氣中に訊かなくってもいいのよ。どうせ後で解^{わか}る事なんだから」

これだけ云った後でもまだ不安心でならなかったお延は、津田がまだ何とも答えない先に、すぐその次を付け加えてしまった。

「よし解らなくたって構わないじゃないの。たかがこのくらいのお金なんですもの、拵えようと思えば、どこからでも出て来るわ」

津田はようやく手に持った小切手を枕元へ投げ出した。彼は金を欲しがる男であつた。しかし金を珍重する男ではなかった。使

うために金の必要を他人より余計痛切に感ずる彼は、その金を軽^{けい}蔑^{べつ}する点において、お延の言葉を心から肯定するような性質をもっていた。それで彼は黙っていた。しかしそれだからまたお延に一口の礼も云わなかった。

彼女は物足らなかった。たとい自分に何とも云わないまでも、お秀には溜飲^{りゆういん}の下^{さが}るような事を一口でいいから云ってくれればいいのにと、腹の中で思った。

先刻^{さつき}から二人の様子を見ていたそのお秀はこの時急に「兄さん」と呼んだ。そうして懷^{ふところ}から綺麗な女持の紙入を出した。「兄さん、あたし持って来たものをここへ置いて行きます」

彼女は紙入の中から白紙はくしで包んだものを抜いて小切手の傍そばへ置いた。

「こうしておけばそれでいいでしょう」

津田に話しかけたお秀は暗あんにお延の返事を待ち受けるらしかった。お延はすぐ応じた。

「秀子さんそれじゃすみませんから、どうぞそんな心配はしないでおいで下さい。こっちでできないうちは、ともかくもですけれども、もう間に合ったんですから」

「だけどそれじゃあたしの方がまた心持が悪いのよ。こうしてせっかく包んでまで持って来たんですから、どうかそんな事を云

わずに受取っておいて下さいよ」

二人は譲り合った。同じような問答を繰り返し始めた。津田はまた辛防強しんぼうづよくいつまでもそれを聴きいていた。しまいには二人はとうとう兄に向わなければならなくなった。

「兄さん取っというて下さい」

「あなたただいてもよくって」

津田はにやにやと笑った。

「お秀妙だね。先刻はあんなに強硬だったのに、今度はまた馬鹿に安っぽく貰わせようとするんだね。いったいどっちが本当なんだい」

お秀は屹きつとなつた。

「どっちも本当です」

この答は津田に突然であつた。そうしてその強い調子が、どこまでも冷笑的に構えようとする彼の機鋒きほうを挫くじいた。お延にはなおさらであつた。彼女は驚ろいてお秀を見た。その顔は先刻と同じように火熱ほてつていた。けれども涼しい彼女の眼に宿る光りは、ただの怒りばかりではなかつた。口惜くやしいとか無念だとかいう敵意のほか、まだ認めなければならぬ或物がそこに陽炎かげろつた。しかしそれが何であるかは、彼女の口を通して聴きくよりほかに途みちがなかつた。二人は惹ひきつけられた。今まで持続して来た心の態度

に角度の轉換が必要になった。彼らは遮さへぎる事なしに、その輝やきの説明を、彼女の言葉から聴こうとした。彼らの予期と同時に、その言葉はお秀の口を衝ついて出た。

百九

「実は先刻さつきから云おうか止よそうかと思つて、考えていたんですけども、そんな風に兄さんから冷笑ひやかされて見ると、私だつて黙もくつて帰るのが厭いやになります。だから云うだけの事はここで云つてしまいます。けれども一応お断りしておきますが、これから申

し上げる事は今までのとは少し意味が違いますよ。それを今まで通りの態度で聴いていられると、私だって少し迷惑するかも知れません、というのは、ただ私が誤解されるのが厭だという意味でなくって、私の心持があなた方に通じなくなるという^{わけあい}誤合からです」

お秀の説明はこういう言葉で始まった。それがすでに自分の態度を改めかかっている二人の予期に一倍の角度を与えた。彼らは黙ってその^{あと}後を待った。しかしお秀はもう一遍念を押した。

「少しや真面目^{まじめ}に聴いて下さるでしょうね。私の方が真面目になったら」

こう云ったお秀はその強い眼を津田の上からお延に移した。

「もつとも今までが不真面目という訳でもありませんけれどもね。何しろ嫂さんねえさえここにいて下されば、まあ大丈夫でしょう。いつもの兄妹喧嘩きょうだいげんかになったら、その時に止めていただければそれまでですから」

お延は微笑して見せた。しかしお秀は応じなかった。

「私はいつから兄さんに云おう云おうと思っていたんです。嫂さんのいらっしやる前ですよ。だけど、その機会がなかったから、今日きょうまで云わずにいました。それを今改めてあなた方のお揃そろいになったところで申してしまうのです。それはほかでもあり

ません。よござんすか、あなた方お二人は御自分達の事よりほかに何にも考えていらつしやらない方だかたという事だけなんです。自分達さえよければ、いくら他ひとが困ろうが迷惑しようが、まるでよそを向いて取り合わずにいられる方だというだけなんです」

この断案を津田はむしろ冷静に受ける事ができた。彼はそれ自分の特色と認める上に、一般人の特色とも認めて疑わなかったのだから。しかしお延にはまたこれほど意外な批評はなかった。彼女はただ呆あきれるばかりであつた。幸か不幸かお秀は彼女の口を開く前にすぐ先へ行つた。

「兄さんは自分を可愛がるだけなんです。嫂さんはまた兄さんに

可愛がられるだけなんです。あなた方の眼にはほかに何にもないんです。妹などは無論の事、お父さんもお母さんももうないんです」

ここまで来たお秀は急に後を継ぎ足した。二人の中の一人が自分を遮ぎりはしまいかと恐れでもするような様子を見せて。

「私はただ私の眼に映った通りの事実を云うだけです。それをどうして貰いたいというわけではありません。もうその時機は過ぎました。有体にいうと、その時機は今日過ぎたのです。実はたった今過ぎました。あなた方の気のつかないうちに、過ぎました。私は何事も因縁ずくと諦らめるよりほかに仕方ありません。しか

しその事実から割り出される結果だけは是非共あなた方に聴いて
いただきたいのです」

お秀はまた津田からお延の方に眼を移した。二人はお秀のいわゆる結果なるものについて、判然はつきりした観念がなかった。したがってそれを聴く好奇心があつた。だから黙つていた。

「結果は簡単です」とお秀が云つた。「結果は一口で云えるほど簡単です。しかし多分あなた方には解らないでしょう。あなた方はけつして他の親切ひとを受ける事のできない人だという意味に、多分御自分じゃ気がついていらつしやらないでしょうから。こう云つても、あなた方にはまだ通じないかも知れないから、もう一

遍繰り返します。自分だけの事しか考えられないあなた方は、人間として他の親切に応ずる資格を失なっていらっしゃるというのが私の意味なのです。つまり他の好意に感謝する事のできない人間に切り下げられているという事なのです。あなた方はそれでたくさんだと思っていらっしゃるかも知れません。どこにも不足はないと考えるおいでなのかも分りません。しかし私から見ると、それはあなた方自身にとってとんでもない不幸になるのです。人間らしく嬉^{うれ}しがる能力を天^{てん}から奪われたと同様に見えるのです。兄さん、あなたは私の出したこのお金は欲しいとおっしゃるのでしょうか。しかし私のこのお金を出す親切は不用だとおっしゃるの

でしょう。私から見ればそれがまるで逆です。人間としてまるで逆なのです。だから大変な不幸なのです。そうして兄さんはその不幸に気がついていらっしやらないのです。嫂^{ねえ}さんはまた私の持つて来たこのお金を兄さんが貰わなければいいと思っていられしやるんです。さっきから貰わせまい貰わせまいとしていらっしやるんです。つまりこのお金を断ることによって、併^{あわ}せて私の親切をも排斥しようとなさるのです。そうしてそれが嫂^{ねえ}さんには大変なお得意になるのです。嫂^{ねえ}さんも逆です。嫂^{ねえ}さんは妹の実意を素直^{すなお}に受けるために感じられる好い心持が、今のお得意よりも何層倍人間として愉快だが、まるで御存じない方^{かた}なのです」

お延は黙っていられなくなつた。しかしお秀はお延よりなお黙っていられなかつた。彼女を遮さえぎろうとするお延の出鼻を抑おさえつけるような熱した語気で、自分の云いたい事だけ云つてしまわなければ気がすまなかつた。

百十

「嫂さん何かおっしゃる事があるなら、後でゆっくり伺いますから、御迷惑でも我慢して私に云うだけ云わせてしまつて下さい。なにも直じきです。そんなに長くかかりやしません」

お秀の断り方は妙に落ちついていていた。先刻^{さつき}津田と衝突した時に比べると、彼女はまるで反対の傾向を帯びて、激昂^{げっこう}から沈静の方へ推^おし移って来た。それがこの場合いかにも案外な現象として二人の眼に映った。

「兄さん」とお秀が云った。「私はなぜもっと早くこの包んだ物を兄さんの前に出さなかったのでしょうか。そうして今になってまた何でできまりが悪くもなく、それをあなた方の前に出されたのでしょうか。考えて下さい。嫂^{ねえ}さんも考えて下さい」

考えるまでもなく、二人にはそれがお秀の詭弁^{きべん}としか受取れなかった。ことにお延にはそう見えた。しかしお秀は真面目^{まじめ}であつ

た。

「兄さん私はこれであなを兄さんらしくしたかったです。たかがそれほどの金でかと兄さんはせせら笑うでしょう。しかし私から云えば金額は問題じゃありません。少しでも兄さんを兄さんらしくできる機会があれば、私はいつでもそれを利用する気なのです。私は今日^{きょう}ここでできるだけの努力をしました。そうしてみごとに失敗しました。ことに嫂さん^{ごしやう}がおいでになってから以後、私の失敗は急に目立って来ました。私が妹として兄さんに対する執着を永久に放り出さなければならなくなったのはその時です。

——嫂さん、後生^{ごしやう}ですから、もう少し我慢して聴いて下さ

い」

お秀はまたこう云って何か云おうとするお延を制した。

「あなた方の態度はよく私に解わかりました。あなた方から一時間二時間の説明を伺うより、今ここで拝見しただけで、私が勝手に判断する方が、かえってよく解るように思われますから、私はもう何なんにも伺いません。しかし私には自分を説明する必要がまだあります。そこは是非聴いていただかなければなりません」

お延はずいぶん手前勝手な女だと思いつつ黙っていた。しかし初手しよてから勝利者の余裕が附着している彼女には、黙っていても大した不足はなかった。

「兄さん」とお秀が云った。「これを見て下さい。ちゃんと紙に包んであります。お秀が宅うちから用意して持って来たという証拠にはなるでしょう。そこにお秀の意味はあります」

お秀はわざわざ枕元の紙包を取り上げて見せた。

「これが親切というものです。あなた方にはどうしてもその意味がお解りにならないから、仕方なしに私が自分で説明します。そうして兄さんが兄さんらしくして下さらなくても、私は宅から持って来た親切をここへ置いて行くよりほかに途みちはないのだという事もいっしょに説明します。兄さん、これは妹の親切ですか義務ですか。兄さんは先刻さっきそういう問を私におかけになりました。

私はどっちも同じだおんなと云いました。兄さんが妹の親切を受けて下
さらないのに、妹はまだその親切を尽くす気でいたら、その親切
は義務とどこが違うんでしょう。私の親切を兄さんの方で義務に
変化させてしまうだけじゃありませんか」

「お秀もう解ったよ」と津田がようやく云い出した。彼の頭に妹
のいう意味は判然はつきり入った。けれども彼女の予期する感情は少しも
起らなかった。彼は先刻から蒼蠅うるさいのを我慢して彼女の云い草
を聴いていた。彼から見た妹は、親切でもなければ、誠実でもな
かった。愛嬌あいきようもなければ気高けだかくもなかった。ただ厄介やっかいなだけで
あった。

「もう解ったよ。それでいいよ。もうたくさんだよ」

すでに諦^{あき}らめていたお秀は、別に恨^{うら}めしそうな顔もしなかった。ただこう云った。

「これは良^う人^ちが立て替えて上げるお金ではありませんよ、兄さん。良人が京都へ保証して成り立った約束を、兄さんがお破りになったために、良人ではお父さんの方へ義理ができて、仕方なしに立て替えた事になるとしたら、なんぼ兄さんだって、心持よく受け取る気にはなれないでしょう。私もそんな事で良^う人^ちを煩^{わづ}わせるのは厭^{いや}です。だからお断りをしておきますが、これは良人とは関係のないお金です。私のです。だから兄さんも黙ってお取りに

なれるでしょう。私の親切はお受けにならないでも、お金だけはお取りになれるでしょう。今の私はなまじいお礼を云っていただけより、ただ黙って受取っておいて下さる方が、かえって心持が好くなっているのです。問題はもう兄さんのためじゃなくなっているんです。単に私のためです。兄さん、私のためにどうぞそれを受取って下さい」

お秀はこれだけ云って立ち上った。お延は津田の顔を見た。その顔には何^{なん}という合図^{あいず}の表情も見えなかった。彼女は仕方なしにお秀を送^{はしご}って階子段^{だん}を降りた。二人は玄関先で尋常^{あいさつ}の挨拶^とを交り換^{かわ}せて別れた。

単に病院でお秀に会おうという事は、お延にとって意外でも何でもなかった。けれども出会った結果からいうと、また意外以上の意外に帰着した。自分に対するお秀の態度を平生から心得ていた彼女も、まさかこんな場面シーンでその相手になろうとは思わなかった。相手になった後あとでも、それが偶然の廻り合せまわあわのように解釈されるだけであつた。その必然性を認めるために、過去の因果いんがを迹あと付けて見ようという気さえ起らなかった。この心理状態をもっと砕けた言葉で云い直すと、事件の責任は全く自分にないという事

に過ぎなかった。すべてお秀が背負^{しよ}って立たなければならぬという意味であつた。したがってお延の心は存外平静であつた。少くとも、良心に対して疚^やましい点は容易に見出^{みい}だされなかつた。

この会見からお延の得た収獲は二つあつた。一つは事後に起る不愉快さであつた。その不愉快さのうちには、お秀を通して今後自分達の上に持ち来^{きた}されそうに見える葛藤^{かつとう}さえ織り込まれてゐた。彼女は充分それを切り抜けて行く覚悟をもつてゐた。ただしそれには、津田が飽^あくまで自分の肩を持つてくれなければ駄目だという条件が附帯してゐた。そこへ行くと彼女には七分^{しちぶ}通りの安心と、三分^{さんぶ}方の不安があつた。その三分方の不安を、今日の自分

が、どのくらいの程度に減らしているかは、彼女にとって重大な問題であつた。少くとも今日の彼女は、夫の愛を買うために、もしくはそれを買ひ戻すために、できるだけの実を津田に見せたという意味で、幾分かの自信をその方面に得たつもりなのである。

これはお延自身に解っている側の消息中で、最も必要と認めなければならぬ一端であるが、そのほかにまだ彼女のいっこう知らない間に、自然自分の手に入るように仕組まれた収獲ができた。無論それは一時的のものに過ぎなかつた。けれども当然自分の上に向けられるべき夫の猜疑の眼から、彼女は運よく免かれたのである。というのは、お秀という相手を引き受ける前の津田

と、それに悩まされ出した後の彼とは、心持から云つても、意識の焦点になるべき対象から見ても、まるで違っていた。だからこの変化の強く起つた際きわどい瞬間に姿を現わして、その変化の波を自然のままに拡ひろげる役を勤めたお延は、吾われ知らず儲もうけものをしたのと同じ事になつたのである。

彼女はなぜ岡本が強しいて自分を芝居へ誘つたか、またなぜその岡本の宅うちへ昨日きのう行かなければならなくなつたか、そんな内情に関するすべての自分を津田の前に説明する手て数かずを省はぶく事ができた。むしろ自分の方から云い出したいくらいな小林の言葉についてすら、彼女は一口も語る余裕をもたなかった。お秀の歸つたあとの

二人は、お秀の事で全く頭を占領されていた。

二人はそれを二人の顔つきから知った。そうして二人の顔を見合せたのは、お秀を送り出したお延が、階子段^{はしごだん}を上^あって、また室^{へや}の入口にそのすらりとした姿を現わした刹那^{せつな}であつた。お延は微笑した。すると津田も微笑した。そこにはほかに何^{なん}にもなかつた。ただ二人がいるだけであつた。そうして互の微笑が互の胸の底に沈んだ。少なくともお延は久しぶりに本来の津田をそこに認めたような気がした。彼女は肉の上に浮び上つたその微笑が何の象徴^{シムボル}であるかをほとんど知らなかった。ただ一種の恰好^{かっこう}をとつて動いた肉その物の形が、彼女には嬉しい^{うれ}記念であつた。彼女は大

事にそれを心の奥にしまい込んだ。

その時二人の微笑はにわかに変った。二人は齒を露あらわすまでに口を開あけて、一度に声を出して笑い合った。

「驚ろいた」

お延はこう云いながらまた津田の枕元へ来て坐った。津田はむしろ落ちついて答えた。

「だから彼奴あいつに電話なんかかけるなって云うんだ」

二人は自然お秀を問題にしなければならなかった。

「秀子さんは、まさか基督教キリストきようじゃないでしょうね」

「なぜ」

「なぜでも——」

「金を置いて行つたからかい」

「そればかりじゃないのよ」

「真面目まじめくさつた説法をするからかい」

「ええまあそうよ。あたし始めてだわ。秀子さんのあんなむずかしい事をおつしやるところを拝見したのは」

「彼奴は理窟屋りくつやだよ。つまりああ捏ね返こえさなければ気がすまない女なんだ」

「だってあたし始めてよ」

「お前は始めてさ。おれは何度だか分りやしない。いったい何で

もないのに高尚がるのが彼奴の癖なんだ。そうして生なまじい藤井の叔父の感化を受けてるのが毒になるんだ」

「どうして」

「どうしてって、藤井の叔父の傍そばにいて、あの叔父の議論好きのところを、始しじゆう終見ていたもんだから、とうとうあんなに口が達者になっちまったのさ」

津田は馬鹿らしいという風をした。お延も苦笑した。

久しぶりに夫と直じかに向き合ったような氣のしたお延は嬉うれしかった。二人の間あいだにいつの間まにかかけられた薄い幕を、急に切つて落した時の晴々はればれしい心持になつた。

彼を愛する事によつて、是非共自分を愛させなければやまない。——これが彼女の決心であつた。その決心は多大の努力を彼女に促うながした。彼女の努力は幸い徒勞に終らなかつた。彼女はついに酬むくいられた。少なくとも今後の見込を立て得るくらいの程度において酬むくいられた。彼女から見れば不慮の出来事と云わなければならぬこの破綻はたんは、取とりも直なおさず彼女にとって復活しよこの曙光しよこうであつた。彼女は遠い地平線の上に、薔薇ばら色の空を、薄明るく眺め

る事ができた。そうしてその暖かい希望の中に、この破綻から起るすべての不愉快を忘れた。小林の残酷に残して行つた正体の解らない黒い一点、それはいまだに彼女の胸の上にあつた。お秀の口から迸ほとばしるように出た不審の一句、それも疑惑の星となつて、彼女の頭の中に鈍にぶい瞬まばたきを見せた。しかしそれらはもう遠い距離に退しりぞいた。少くともさほど苦くにならなかつた。耳に入れた刹せつ那なに起つた昂奮こうふんの記憶さえ、再び呼び戻す必要を認めなかつた。

「もし万一の事があるにしても、自分の方は大丈夫だ」

夫に対するこういう自信さえ、その時のお延の腹にはできた。したがって、いざという場合に、どうしても臨機の所置をつけて見

せるといふ余裕があつた。相手を片づけるぐらゐの事なら訳はないといふ氣持も手伝つた。

「相手？　どんな相手ですか」と訊きかれたら、お延は何と答へただろう。それは臃おぼろげ氣に薄うす墨で描かれた相手であつた。そうして女であつた。そうして津田の愛を自分から奪う人であつた。お延はそれ以外に何なんにも知らなかつた。しかしどこかにこの相手が潜ひそんでいるとは思へた。お秀と自分ら夫婦の間に起つた波瀾はらんが、ああまで際きわどくならずすんだなら、お延は行いきがかり上じやう、是非共津田の腹のなかにいるこの相手を、遠くから探さぐらなければならぬ順序だつたのである。

お延はそのプログラムを狂わせた自分を顧みて、むしろ幸福だ
と思った。気がかりを後へ繰り越すのが辛くて耐らないとはけっ
して考えなかった。それよりもこの機会を緊張できるだけ緊張さ
せて、親切な今の自分を、強く夫の頭の中に叩き込んでおく方が
得策だと思案した。

こう決心するや否や彼女は嘘を吐いた。それは些細の嘘であつ
た。けれども今の場合に、夫を物質的と精神的の両面に亘って、
窮地から救い出したものは、自分が持って来た小切手だという事
を、深く信じて疑わなかった彼女には、むしろ重大な意味をもつ
ていた。

その時津田は小切手を取り上げて、再びそれを眺めていた。そこに書いてある額は彼の要求するものよりかえって多かった。しかしそれを問題にする前、彼はお延に云った。

「お延ありがとう。お蔭かげで助かったよ」

お延の嘘はこの感謝の言葉の後に随ついて、すぐ彼女の口を滑すべって出てしまった。

「昨日きのう岡本へ行ったのは、それを叔父さんから貰もらうためなのよ」

津田は案外な顔をした。岡本へ金策をしに行つて来いと夫から頼まれた時、それを断然跳はねつけたものは、この小切手を持って来たお延自身であつた。一週間と経たたないうちに、どこからそん

な好意が急に湧いて出たのだらうと思うと、津田は不思議でならなかった。それをお延はこう説明した。

「そりや厭いやなのよ。この上叔父さんにお金の事なんかで迷惑をかけるのは。けれども仕方がないわ、あなた。いざとなればそのくらしいの勇気を出さなくっちゃ、妻としてのあたしの役目がすみませんもの」

「叔父さんに訳を話したのかい」

「ええ、そりやずいぶん辛つらかったの」

お延は津田へ来る時の支度を大部分岡本に拵こしらえて貰もらっていた。

「その上お金なんかには、ちつとも困らない顔を今日きょうまでして来

たんですもの。だからなおきまりが悪いわ」

自分の性格から割り出して、こういう場合のきまりの悪さ加減は、津田にもよく呑み込めた。

「よくできたね」

「云えばできるわ、あなた。無いんじゃないんですもの。ただ云い悪いだけよ」

「しかし世の中にはまたお父さんだのお秀だのっていう、むずかしやも揃っているからな」

津田はかえって自尊心を傷けられたような顔つきをした。お延はそれを取り繕ろうように云った。

「なにそう云う意味ばかりで貰って来た訳でもないのよ。叔父さんにはあたしに指輪を買ってくれる約束があるのよ。お嫁に行くとき買ってやらない代りに、今に買ってやるって、此間こないだからそう云ってたのよ。だからそのつもりでくれたんでしようおかた。心配しないでいいわ」

津田はお延の指を眺めた。そこには自分の買ってやった宝石がちゃんと光っていた。

二人はいつになく融け合った。

今までお延の前で体面を保つために武装していた津田の心が吾知らず弛んだ。自分の父が鄙吝らしく彼女の眼に映りはしまいかという掛念、あるいは自分の予期以下に彼女が父の財力を見縊りはしまいかという恐れ、二つのものが原因になって、なるべく京都の方面に曖昧な幕を張り通そうとした警戒が解けた。そうして彼はそれに気づかずにした。努力もなく意志も働かせずに、彼は自然の力でそこへ押し流されて来た。用心深い彼をそつと持ち上げて、事件がお延のために彼をそこまで運んで来てくれたと同じ事であった。お延にはそれが嬉しかった。改めようとする決心な

しに、改たまつた夫の態度には自然があつた。

同時に津田から見たお延にも、またそれと同様の趣おもむきが出た。余事はしばらく問題外に措おくとして、結婚後彼らの間には、常に財力に関する妙な暗闘があつた。そうしてそれはこう云う因果いんがから来た。普通の人のように富を誇りとしたがる津田は、その点において、自分なるべく高くお延から評価させるために、父の財産を實際より遙はるか余計な額に見積つたところを、彼女に向つて吹聴ふいちょうした。それだけならまだよかった。彼の弱点はもう一步先へ乗り越す事を忘れなかった。彼のお延に匂におわせた自分は、今より大變楽な身分にいる若旦那わかだんなであつた。必要な場合には、いくらでも父

から補助を仰ぐ事ができた。たとい仰がないでも、月々の支出に困る憂はけっしてなかった。お延と結婚した時の彼は、もうこれだけの言責を彼女に対して背負って立っていたのと同じ事であった。利巧な彼は、財力に重きを置く点において、彼に優るとも劣らないお延の性質をよく承知していた。極端に云えば、黄金の光りから愛その物が生れるとまで信ずる事のできる彼には、どうかしてお延の手前を取繕わなければならないという不安があった。ことに彼はこの点においてお延から輕蔑されるのを深く恐れた。堀に依頼して毎月父から助けて貰うようにしたのも、実は必要以外にこんな魂胆が潜んでいたからでもあった。それでさえ彼はど

ここに煙たいところをもっていた。少くとも彼女に対する内と外にはだいぶんの距離があつた。眼から鼻へ抜けるようなお延にはまたその距離が手に取るごとくに分つた。必然の勢い彼女はそこに不満を抱かざるを得なかつた。しかし彼女は夫の虚偽を責めるよりもむしろ夫の淡泊でないのを恨んだ。彼女はただ水臭いと思った。なぜ男らしく自分の弱点を妻の前に曝け出してくれないのかを苦にした。しまいには、それをあえてしないような隔りのある夫なら、こつちにも覚悟があると一人腹の中できめた。するとその態度がまた木精のように津田の胸に反響した。二人はどこまで行っても、直に向き合う訳に行かなかつた。しかも遠慮があ

るので、なるべくそこには触れないように慎^{つつ}しんでいた。ところがお秀との悶着^{もんちやく}が、偶然にもお延の胸にあるこの扉を一度にがらりと敲^{たた}き破った。しかもお延自身毫^{ごう}もそこに気がつかなかった。彼女は自分を夫の前に開放しようという努力も決心もなしに、天然自然自分を開放してしまった。だから津田にもまるで別人^{べつにん}のよう^うに快よく見えた。

二人はこういう風で、いつになく融^とけ合った。すると二人が融け合ったところに妙な現象がすぐ起った。二人は今まで回避していた問題を平気で取り上げた。二人はいつしよになつて、京都に對する善後策を講じ出した。

二人には同じ予感が働いた。この事件はこれだけで片づくまいという不安が双方の心を引き締めた。きつとお秀が何かするだろう。すれば直接京都へ向ってやるに違いない。そうしてその結果は自然二人の不利益となるにきまつている。——ここまでは二人の一致する点であつた。それから先が肝心かんじんの善後策になつた。しかしそこへ来ると意見が区々まちまちで、容易に纏まとまらなかつた。

お延は仲裁者として第一に藤井の叔父を指名した。しかし津田は首を掉ふつた。彼は叔父も叔母もお秀の味方である事をよく承知していた。次に津田の方から岡本はどうだろうと云い出した。けれども岡本は津田の父とそれほど深い交際がないと云う理由で、

今度はお延が反対した。彼女はいつそ簡単に自分が和解の目的で、お秀の所へ行つて見ようかという案を立てた。これには津田も大した違存いぞんはなかった。たとい今度の事件のためでなくとも、絶交を希望しない以上、何らかの形式のもとに、両家の交際は復活されべき運命をもっていたからである。しかしそれはそれとして、彼らはもう少し有効な方法を同時に講じて見たかった。彼らは考えた。

しまいに吉川の名が二人の口から同じように出た。彼の地位、父との関係、父から特別の依頼を受けて津田の面倒を見てくれている目下の事情、——数えれば数えるほど、彼には有利な条件が

具^{そなわ}っていた。けれどもそこにはまた一種の困難があつた。それほど親しく近づき悪い^{にく}吉川に口を利^きいて貰^{もら}おうとすれば、是非共その前に彼の細君を口説^{くど}き落さなければならなかつた。ところがその細君はお延にとって大の苦手^{にがて}であつた。お延は津田の提議に同意する前に、少し首を傾けた。細君と仲善^{なかよし}の津田はまた充分成効^{せいこう}の見込がそこに見えているので、熱心にそれを主張した。しまいにお延はとうとう我^がを折つた。

事件後の二人は打ち解けてこんな相談をした後^{あと}で心持よく別れた。

百十四

前夜よく寝られなかった疲労の加わった津田はその晩案外きやす気易く眠る事ができた。翌日あくるひもまた透すき通るような日差ひざしを眼に受けて、晴々はれはれしい空気を簞はめ硝子ガラスの外に眺めた彼の耳には、隣りの洗濯屋で例の通りごしごし云わす音が、どことなしに秋の情趣を唆そそつた。

「……へ行くなら着て行かしゃんせ。シツシツシ」

洗濯屋の男は、俗歌を唄うたいながら、区切くぎり区切へシツシツシという言葉を入れた。それがいかにも忙がしそうに手を働かせている

彼らの姿を津田に想像させた。

彼らは突然変な穴から白い物を担いで屋根へ出た。それから物干へ上^{のほ}って、その白いものを隙^{すきま}間なく秋の空へ広げた。ここへ来てから、日ごとに繰り返される彼らの所作^{しよさ}は単調であつた。しかし勤勉であつた。それがはたして何を意味しているか津田には解^{わか}らなかつた。

彼は今の自分にもっと親切な事を頭の中で考えなければならなかつた。彼は吉川夫人の姿を憶^{おも}い浮べた。彼の未来、それを眼の前に描き出すのは、あまりに漠然^{ばくぜん}過ぎた。それを纏^{まと}めようとする
と、いつでも吉川夫人が現われた。平生から自分の未来を代表し

てくれるこの焦点にはこの際特別な意味が附着していた。

一にはこの間訪問した時からの引かかりがあつた。その時二人の間に封じ込められたある問題を、ぽたりと彼の頭に点じたのは彼女であつた。彼にはその後を聴くまいとする努力があつた。また聴こうとする意志も動いた。すでに封を切つたものが彼女であるとするれば、中味を披く権利は自分にあるようにも思われた。

二には京都の事が氣になつた。軽重を別にして考えると、この方がむしろ急に逼つていた。一日も早く彼女に会うのが得策のようにも見えた。まだ四五日はどうしても動く事のできない身体を持ち扱つた彼は、昨日お延の帰る前に、彼女を自分の代りに夫人

の所へやろうとしたくらいであつた。それはお延に断られたので、成立しなかつたけれども、彼は今でもその方が適当な遣口やりぐちだと信じていた。

お延がなぜこういう用向ようむきを帯びて夫人を訪ねるのを嫌きらつたのか、津田は不思議でならなかつた。黙つていてもそんな方面へ出入でいりをしたがる女のくせに。と彼はその時考えた。夫人の前へ出られるためにわざと用事を拵こしらえて貰もらつたのと同じ事だのにとまで、自分の動議を強調して見た。しかしどうしても引き受けたがらないお延を、たつて強しいる気もまたその場合の彼には起らなかった。それは夫婦打ち解けた気分にも起因していたが、一方か

ら見ると、またお延の辞退しようにも関係していた。彼女は自分が行くと必ず失敗するからと云った。しかしその理由を述べる代りに、津田ならきつと成効せいこうするに違ちがないからと云った。成効するにしても、病院を出た後あとでなければ会う訳に行かないんだから、遅くなる虞おそれがあると津田が注意した時、お延はまた意外な返事を彼に与えた。彼女は夫人がきつと病院へ見舞に来るに違ないと断言した。その時機を利用しさえすれば、一番自然にまた一番簡単に事が運ぶのだと主張した。

津田は洗濯屋の干物ほしものを眺めながら、昨日きのうの問答をこんな風に、それからそれへと手元へ手繰たぐり寄せて点検した。すると吉川夫人

は見舞に来てくれそうでもあった。また来てくれそうにもなかった。つまりお延がなぜ来る方をそう堅く主張したのか解らなくなった。彼は芝居の食堂で晚餐ばんさんの卓に着いたという大勢を眼先に想像して見た。お延と吉川夫人の間にどんな会話が取り換わされたかを、小説的に組み合せても見た。けれどもその会話のどこからこの予言が出て来たかの点になると、自分に解らないものとして投げてしまうよりほかに手はなかった。彼はすでに幾分の直覚、不幸にして天が彼に与えてくれなかった幾分の直覚を、お延に許していた。その点でいつでも彼女を少し畏おそれなければならなかった彼には、杜撰ずせんにそこへ触れる勇気がなかった。と同時に、

全然その直覺に信賴する事のできない彼は、何とかしてこっちら吉川夫人を病院へ呼び寄せる工夫はあるまいかと考えた。彼はすぐ電話を思いついた。横着にも見えず、ことさらでもなし、自然に彼女がここまで出向いて来るような電話のかけ方はなからうかと苦心した。しかしその苦心は水の泡あわを製造する努力とほぼ似たものであつた。いくら骨を折こしらつて拵こしらえても、すぐ後から消えて行くだけであつた。根本的に無理な空想を實現させようと巧たくらんでいるのだから仕方がないと気がついた時、彼は一人で苦笑してまた硝子ガラスごし越に表を眺めた。

表はいつか風立かぜだつた。洗濯屋の前にある一本の柳の枝が白い干

物といっしょになって軽く揺れていた。それを掠^{かす}めるようにかけ渡された三本の電線も、よそと調子を合せるようにふらふらと動いた。

百十五

下から上^{あが}って来た医者には、その時の津田がいかにも退屈そうに見えた。顔を合せるや否や彼は「いかがです」と訊^きいた後で、「もう少しの我慢です」とすぐ慰めるように云った。それから彼は津田のためにガーゼを取り易えてくれた。

「まだ創口きずぐちの方はそっとしておかないと、危険ですから」

彼はこう注意して、じかに局部を抑えおさつけている個所を少し緩ゆるめて見たら、血が煮染にじみ出したという話を用心のためにして聴きかせた。

取り易かえられたガーゼは一部分に過ぎなかった。要所を剥はがすと、血が迸ほとばしるかも知れないという身体からだでは、津田も無理をして宅うちへ帰る訳に行かなかった。

「やッぱり予定通りの日数にっすうは動かずにいるよりほかに仕方がないでしょうね」

医者は気の毒そうな顔をした。

「なに経過次第じゃ、それほど大事を取るにも及ばないんですがね」

それでも医者は、時間と経済に不足のない、どこから見ても余裕のある患者として、津田を取扱かっているらしかった。

「別に大した用事がお有ありになる訳でもないんでしよう」

「ええ一週間ぐらいはここで暮らしてもいいんです。しかし臨時にちよつと事件が起つたので……」

「はあ。——しかもう直じきです。もう少しの辛防しんぼうです」

これよりほかに云いようのなかった医者は、外来患者の方がまだ込み合あわないためか、そこへ坐すわって二三の雑談をした。中で、

彼がまだ助手としてある大きな病院に勤めている頃に起ったという一口話^{ひとくちばなし}が、思わず津田を笑わせた。看護婦が薬を間違えたために患者が死んだのだという嫌疑^{けんぎ}をかけて、是非その看護婦を殴^{なぐ}らせろと、医局へ逼^{せま}った人があつたというその話は、津田から見るといかにも滑稽^{こっけい}であつた。こういう性質^{たち}の人と正反對に生みつけられた彼は、そこに馬鹿らしさ以外の何物をも見出^{みいだ}す事ができなかった。平たく云い直すと、彼は向うの短所ばかりに気を奪^とられた。そうしてその裏側^{うら}へ暗^{あん}に自分の長所を点綴^{てんてつ}して喜んだ。だから自分の短所にはけっして思い及ばなかったと同一の結果に帰着した。

医者の診察が済んだ後で、彼は下らない病気のために、一週間も一つ所に括りつけられなければならない現在の自分を悲観しなくなった。気のせいか彼にはその現在が大変貴重に見えた。もう少し治療を後廻しにすれば良かったという後悔さえ腹の中には起った。

彼はまた吉川夫人の事を考え始めた。どうかして彼女をここへ呼びつける工夫はあるまいかと思うよりも、どうかして彼女がここへ来てくれればいいかと思う方に、心の調子がだんだん移って行った。自分を見破られるという意味で、平生からお延の直覚を悪く評価していたにもかかわらず、例外なこの場合だけには、そ

れがあたって欲しいような気もどこかでした。

彼はお延の置いて行つた書物の中から、その一冊を抽いた。岡本の所蔵にかかるだけあるなと首肯うなづかせるような趣おもむきがそここに見えた。不幸にして彼は諧謔ヒューモアを解する事を知らなかった。中に書いてある活字の意味は、頭に通じても胸にはそれほど応こたえなかった。頭にさえ吞のみ込めないのも続々出て来た。責任のない彼は、自分に手頃なのを見つけないとして、どしどし飛ばして行つた。すると偶然下しものようなのが彼の眼に触れた。

「娘の父が青年に向つて、あなたは私の娘わたしを愛しておいでなのですかと訊きいたら、青年は、愛するの愛さないのっていう段じゃあ

りません、お嬢さんのためなら死のうとまで思っているんです。
あの懐かしい眼で、優しい眼遣いをただの一度でもしていただく
事ができるなら、僕はもうそれだけで死ぬのです。すぐあの二百
尺もあろうという崖の上から、岩の上へ落ちて、めちやくちやな
血だらけな塊りになって御覧に入れます。と答えた。娘の父は首
を掉つて、実を云うと、私も少し嘘を吐く性分だが、私の家のよ
うな少人数な家族に、嘘付が二人できるのは、少し考えものです
からね。と答えた」

嘘吐という言葉がいつもより皮肉に津田を苦笑させた。彼は腹
の中で、嘘吐な自分を肯がう男であつた。同時に他人の嘘をも根

本的に認定する男であつた。それでいて少しも厭世的えんせいてきにならない男であつた。むしろその反対に生活する事のできるために、嘘が必要になるのだぐらいに考える男であつた。彼は、今までこういう漠然ばくぜんとした人世観もとの下に生きて来ながら、自分ではそれを知らなかつた。彼はただ行おこなつたのである。だから少し深く入り込むと、自分で自分の立場が分らなくなるだけであつた。

「愛と虚偽」

自分の読んだ一口ひとくち噺はなしからこの二字を暗示された彼は、二つのものの関係をどう説明していいかに迷つた。彼は自分に大事なある問題の所有者であつた。内心の要求上是非共それを解決しなければ

ばならない彼は、実験の機会が彼に与えられない限り、頭の中で
いたずらに考えなければならなかった。哲学者でない彼は、自身
に今まで行って来た人世観をすら、組織正しい形式の下に、わが
眼の前に並べて見る事ができなかつたのである。

百十六

津田は纏まとまらない事をそれからそれへと考えた。そのうちいつ
か午過ぎひるすになってしまった。彼の頭は疲れていた。もう一つ事を
長く思い続ける勇気がなくなつた。しかし秋とは云いながら、独ひと

り寝ているには日があまりに長過ぎた。彼は退屈を感じ出した。そうしてまたお延の方に想い^{おも}を馳^はせた。彼女の姿を今日も自分の眼の前に予期していた彼は横着^{おつちやく}であつた。今まで彼女の手前憚^{はば}からなければならぬような事ばかりを、さんざん考え抜いたあげく、それが厭^{いや}になると、すぐお延はもう来そうなものだと思つて平気でいた。自然頭の中に湧^わいて出るものに対して、責任はもてないという弁解さえその時の彼にはなかつた。彼の見たお延に不可解な点がある代りに、自分もお延の知らない事実を、胸の中^{うち}に納めているのだぐらいの料簡^{りょうけん}は、遠くの方で働らいていたかも知れないが、それさえ、いざとならなければ判然^{はつきり}した言葉になつ

て、彼の頭に現われて来るはずがなかった。

お延はなかなか来なかった。お延以上に待たれる吉川夫人は固より姿を見せなかった。津田は面白くなかった。先刻から近くで誰かがやっている、彼の最も嫌な謡の声が、不快に彼の耳を刺戟した。彼の記憶にある謡曲指南という細長い看板が急に思い出された。それは洗濯屋の筋向うに当る二階建の家であつた。二階が稽古をする座敷にでもなっていると見えて、距離の割に声の方がむやみに大きく響いた。他が勝手にやっているものを止めさせる権利をどこにも見出し得ない彼は、彼の不平をどうする事もできなかった。彼はただ早く退院したいと思うだけであつた。

柳の木の後^{うしろ}にある赤い煉瓦^{れんが}造りの倉に、山形^{やまがた}の下に一を引いた屋号のような紋が付いていて、その左右に何のためとも解^{わか}らない、大きな折釘^{おれくぎ}に似たものが壁の中から突き出している所を、津田が見るとも見ないとも片のつかない眼で、ぼんやり眺めていた時、遠慮のない足音が急に聞こえて、誰かが階子段^{はしごだん}を、どしどし上^{のぼ}って来た。津田はおやと思った。この足音の調子から、その主がもう七分通り、彼の頭の中では推定されていた。

彼の予覚はすぐ事実になった。彼が室^{へや}の入口に眼を転ずると、ほとんどおツつかツつに、小林は貰い立ての外套^{がいとう}を着たままつかつか入って来た。

「どうかね」

彼はすぐ胡坐あぐらをかいた。津田はむしろ苦しそうな笑いを挨拶あいさつの代りにした。何しに来たんだという心持が、顔を見ると共にもう起っていた。

「これだ」と彼は外套の袖そでを津田に突きつけるようにして見せた。

「ありがとう、お蔭かげでこの冬も生きて行かれるよ」

小林はお延の前で云ったと同じ言葉を津田の前で繰り返した。しかし津田はお延からそれを聴きかされていなかったたので、別に皮肉とも思わなかった。

「奥さんが来たろう」

小林はまたこう訊きいた。

「来たさ。来るのは当り前じゃないか」

「何か云ってたろう」

津田は「うん」と答えようか、「いいや」と答えようかと思つて、少し躊躇ちゅうちゅうよした。彼は小林がどんな事をお延に話したか、それを知りたかった。それを彼の口からここで繰り返させさえすれば、自分の答は「うん」だろうが、「いいえ」だろうが、同じ事であつた。しかしどっちが成功するかそこはとつさの際にきめる訳に行かなかつた。ところがその態度が意外な意味になつて小林

に反響した。

「奥さんが怒って来たな。きつとそんな事だろうと、僕も思ってたよ」

容易に手がかりを得た津田は、すぐそれに縋^{すが}りついた。

「君があんまり苛^{いじ}めるからさ」

「いや苛めやしないよ。ただ少し調戯^{からか}い過ぎたんだ、可哀^{かわいそう}想に。泣きやしなかったかね」

津田は少し驚ろいた。

「泣かせるような事でも云ったのかい」

「なにどうせ僕の云う事だから出鱈^{でたらめ}目さ。つまり奥さんは、岡本

さん見たいな上流の家庭で育ったので、天下に僕のような愚劣な人間が存在している事をまだ知らないんだ。それでちよつとした事まで苦にするんだろうよ。あんな馬鹿に取り合うなと君が平生から教えておきさえすればそれでいいんだ」

「そう教えている事はあるよ」と津田も負けずにやり返した。小林はハハと笑った。

「まだ少し訓練が足りないんじゃないか」

津田は言葉を改めた。

「しかし君はいつたいどんな事を云つて、彼奴あいつに調戲つたのか
い」

「そりゃもうお延さんから聴^きいたろう」

「いいや聴かない」

二人は顔を見合せた。互いの胸を忖^{そんたく}度しようとする試みが、同時にそこに現われた。

百十七

津田が小林に本音^{ほんね}を吹かせようとするところには、ある特別の意味があつた。彼はお延の性質をその著るしい断面においてよく承知していた。お秀と正反対な彼女は、飽^あくまで素直^{すなお}に、飽くま

で閑雅な態度を、絶えず彼の前に示す事を忘れないと共に、どうしてもまた彼の自由にならない点を、同様な程度でちゃんともつていた。彼女の才は一つであつた。けれどもその応用は両面に亘わたつていた。これは夫に知らせてならないと思う事、または隠しておく方が便宜べんぎだときめた事、そういう場合になると、彼女は全く津田の手にあまる細君であつた。彼女が柔順であればあるほど、津田は彼女から何にも掘り出す事ができなかつた。彼女と小林の間に昨日きのうどんなやりとりが起つたか、それはお秀の騒ぎで委細を訊きく暇もないうちに、時間が経たつてしまったのだから、事実やむをえないとしても、もしそういう故障のない時に、津田から

詳しいありのままを問われたら、お延はおいそれと彼の希望通り、綿密な返事を惜まずに、彼の要求を満足させたらうかと考えると、そこには大きな疑問があつた。お延の平生から推して、津田はむしろごまかされるに違ないと思つた。ことに彼がもしやと思つている点を、小林が遠慮なくしゃべつたとすれば、お延はなおの事、それを聴^きかないふりをして、黙つて夫の前を通り抜ける女らしく見えた。少くとも津田の観察した彼女にはそれだけの余裕が充分あつた。すでにお延の方を諦^{あきら}めなければならぬとすると、津田は自分に必要な知識の出所^{でどころ}を、小林に向つて求めるよりほかに仕方がなかつた。

小林は何だかそこを承知しているらしかった。

「なに何にも云やしないよ。嘘だと思ふなら、もう一遍お延さんに訊いて見たまえ。もつとも僕は歸りがけに悪いと思ったから、詫ま^{あや}って来たがね。実を云うと、何で詫ま^{あや}ったか、僕自身にも解らないくらいのものさ」

彼はこう云^いって嘯^{うそぶ}いた。それからいきなり手を延べて、津田の枕元にある読みかけの書物を取り上げて、一分ばかりそれを黙読した。

「こんなものを読むのかね」と彼はさも輕蔑^{けいべつ}した口調で津田に訊^きいた。彼はぞんざいに頁^{ページ}を剥^は繰^ぐりながら、終りの方から逆に始め

へ来た。そうしてそこに岡本という小さい見留印みとめいんを見出した時みいだ、彼は「ふん」と云った。

「お延さんが持つて来たんだな。道理で妙な本だと思った。——時に君、岡本さんは金持だろうね」

「そんな事は知らないよ」

「知らないはずはあるまい。だってお延さんの里さとじゃないか」

「僕は岡本の財産を調べた上で、結婚なんかしたんじゃないよ」「そうか」

この単純な「そうか」が変に津田の頭に響いた。「岡本の財産を調べないで、君が結婚するものか」という意味にさえ取れた。

「岡本はお延の叔父^{おじ}だぜ、君知らないのか。里^{さと}でも何でもありやしないよ」

「そうか」

小林はまた同じ言葉を繰り返した。津田はなお不愉快になつた。

「そんなに岡本の財産が知りたければ、調べてやろうか」

小林は「えへへ」と云った。「貧乏すると他^{ひと}の財産まで苦になつてしようがない」

津田は取り合わなかった。それでその問題を切り上げるかと思っていると、小林はすぐ元へ歸つて来た。

「しかしいくらぐらいあるんだろう、本当のところ」

こう云う態度はまさしく彼の特色であつた。そうしていつでも二様に解釈する事ができた。頭から向うを馬鹿だと認定してしまえばそれまでであると共に、一度こっちが馬鹿にされているのだと思ひ出すと、また際限もなく馬鹿にされている訳にもなつた。

彼に対する津田は実のところ半信半疑の真中に立っていた。だからそこに幾分でも自分の弱点が潜在する場合には、馬鹿にされる方の解釈に傾むかざるを得なかつた。ただ相手をつけあがらせない用心をするよりほかに仕方がなかつた彼は、ただ微笑した。

「少し借りてやろうか」

「借りるのは厭だ。貰うなら貰ってもいいがね。——いや貰うのも御免だ、どうせくれる気遣はないんだから。仕方がなければ、まあ取るんだな」小林はははと笑った。「一つ朝鮮へ行く前に、面白い秘密でも提供して、岡本さんから少し取って行くかな」

津田はすぐ話をその朝鮮へ持って行っった。

「時にいつ立つんだね」

「まだしっかり判らない」

「しかし立つ事は立つのかい」

「立つ事は立つ。君が催促しても、しなくっても、立つ日が来ればちゃんと立つ」

「僕は催促をするんじゃない。時間があつたら君のために送別会を開いてやろうというのだ」

今日小林から充分な事が聴^きけなかつたら、その送別会でも利用してやろうと思いついた津田は、こう云つて予備としての第二の機会を暗^{あん}に作り上げた。

百十八

故意だか偶然だか、津田の持つて行こうとする方面へはなかなか持つて行かれない小林に対して、この注意はむしろ必要かも知

れなかった。彼はいつまでも津田の問に応ずるようなまた応じないような態度を取った。そうしてしつこく自分自身の話題にばかり纏綿つけまつわった。それがまた津田の訊きこうとする事と、間接ではあるが深い関係があるので、津田は蒼蠅うるせくもあり、じれったくもあつた。何となく遠廻しに痛振いたぶられるような氣もした。

「君吉川と岡本とは親類かね」と小林が云い出した。

津田にはこの質問が無邪氣とは思えなかった。

「親類じゃない、ただの友達だよ。いつかも君が訊いた時に、そう云って話したじゃないか」

「そうか、あんまり僕に関係の遠い人達の事だもんだから、つい

忘れちゃった。しかし彼らは友達にしても、ただの友達じゃあるまい」

「何を云ってるんだ」

津田はついその後へ馬鹿野郎と付け足したかった。

「いや、よほどの親友なんだろうという意味だ。そんなに怒らなくってもよからう」

吉川と岡本とは、小林の想像する通りの間柄に違なかった。単なる事実はまだそれだけであつた。しかしその裏に、津田とお延を貼^はりつけて、裏表の意味を同時に眺める事は自由にできた。

「君は仕合せな男だな」と小林が云った。「お延さんさえ大事に

していれば間違はないんだから」

「だから大事にしているよ。君の注意がなくなっただけで、そのくらの事は心得ているんだ」

「そうか」

小林はまた「そうか」という言葉を使った。この真面目くさった「そうか」が重なるたびに、津田は彼から脅やかされるような気がした。

「しかし君は僕などと違って聡明だからいい。他はみんな君がお延さんに降参し切ってるように思ってるぜ」

「他とは誰の事だい」

「先生でも奥さんでもさ」

藤井の叔父や叔母から、そう思われている事は、津田にもほぼ見当^{けんとう}がついていた。

「降参し切っているんだから、そう見えたって仕方がないさ」

「そうか。——しかし僕のような正直者には、とても君の真似はできない。君はやッぱりえらい男だ」

「君が正直で僕が偽物^{ぎぶつ}なのか。その偽物がまた偉くって正直者は馬鹿なのか。君はいつまたそんな哲学を發明したのかい」

「哲学はよほど前から發明しているんだがね。今度改めてそれを発表しようと云うんだ、朝鮮へ行くについて」

津田の頭に妙な暗示が閃めかされた。

「君旅費はもうできたのか」

「旅費はどうでもできるつもりだがね」

「社の方で出してくれる事にきまったのかい」

「いや。もう先生から借りる事にしてしまった」

「そうか。そりゃ好い具合だ」

「ちつとも好い具合じゃない。僕はこれでも先生の世話になるのが気の毒でたまらないんだ」

こういう彼は、平気で自分の妹のお金さんを藤井に片づけて貰う男であつた。

「いくら僕が恥知らずでも、この上金の事で、先生に迷惑をかけるはすまないからね」

津田は何とも答えなかった。小林は無邪気に相談でもするような調子で云った。

「君どこかに強奪^{ゆす}る所はないかね」

「まあないね」と云い放った津田は、わざとそっぽを向いた。

「ないかね。どこかにありそうなもんだがな」

「ないよ。近頃は不景気だから」

「君はどうだい。世間とはにかく、君だけはいつも景気が好さそうじゃないか」

「馬鹿云うな」

岡本から貰った小切手も、お秀の置いて行つた紙包も、みんなお延に渡してしまった後の彼の財布は空と同じ事であつた。よしそれが手元にあつたにしたところで、彼はこの場合小林のために金銭上の犠牲を払う気は起らなかった。第一事がそこまで切迫して来ない限り、彼は相談に応ずる必要を毫も認めなかった。

不思議に小林の方でも、それ以上津田を押さなかった。その代り突然妙なところへ話を切り出して彼を驚ろかした。

その朝藤井へ行つた彼は、そこで例もするように昼飯の馳走になつて、長い時間を原稿の整理で過ごしているうちに、玄関の格

子が開いたので、ひよいと自分で取次に出た。そうしてそこに偶然お秀の姿を見出したのである。

小林の話をそこまで聴いた時、津田は思わず腹の中で「畜生ッ先廻りをしたな」と叫んだ。しかしただそれだけではすまなかつた。小林の頭にはまだ津田を驚ろかせる材料が残っていた。

百十九

しかし彼の驚ろかし方には、また彼一流の順序があつた。彼は一番始めにこんな事を云つて津田に調戲つた。

「兄妹喧嘩きょうだいいげんかをしたんだって云うじゃないか。先生も奥さんも、お

秀さんにしゃべりつけられて弱よってたぜ」

「君はまた傍そばでそれを聴きいていたのか」

小林は苦笑しながら頭を掻かいた。

「なに聴こうと思つて聴いた訳でもないがね。まあ天然自然てんねんしぜん耳へ入ったようなものだ。何しろしゃべる人がお秀さんで、しゃべらせる人が先生だからな」

お秀にはどこか片意地おもむきで一本調子な趣おもむきがあつた。それに一種の刺戟しげきが加わると、平生の落ちつきが全く無くなつて、不断と打つて変つた猛烈さをひよつくり出現させるところに、津田とはまる

で違った特色があつた。叔父はまた叔父で、何でも構わず底の底まで突きとめなければ承知のできない男であつた。単に言葉の上だけでもいいから、前後一貫して俗にいう辻褄つじつまが合う最後まで行きたいというのが、こういう場合相手に対する彼の態度であつた。筆の先で思想上の問題を始終取り扱しじゆうかいつけている癖が、活字を離れた彼の日常生活にも憑より移ってしまった結果は、そこによく現われた。彼は相手にいくらでも口を利かせた。その代りまたいくらでも質問をかけた。それが或程度まで行くと、質問という性質を離れて、詰問に変化する事さえしばしばあつた。

津田は心の中で、この叔父と妹と対坐たいざした時の様子を想像し

た。ことによるとそこでまた一波瀾ひとはらん起したのではあるまいかという疑うたがさえ出た。しかし小林に対する手前もあるので、上部うわべはわざと高く出た。

「おおかためちやくちやに僕の悪口でも云ったんだろう」

小林は御挨拶ごあいさつにただ高笑いをした後で、こんな事を云った。

「だが君にも似合わないね、お秀さんと喧嘩をするなんて」

「僕だからしたのさ。彼奴あいつだって堀の前なら、もっと遠慮すらあね」

「なるほどそうかな。世間じゃよく夫婦喧嘩っていうが、夫婦喧嘩より兄妹喧嘩の方が普通なものかな。僕はまだ女房を持った経

験がないから、そっちのほうの消息はまるで解^{わか}らないが、これでも妹はあるから兄妹の味ならよく心得ているつもりだ。君何だぜ。僕のような兄でも、妹と喧嘩^{けんか}なんかした覚はまだないぜ」

「そりゃ妹次第さ」

「けれどもそこはまた兄次第だろう」

「いくら兄だって、少しは腹の立つ場合もあるよ」

小林はにやにや笑っていた。

「だが、いくら君だって、今お秀さんを怒らせるのが得策だとは思ってやしまい」

「そりゃ当り前だよ。好んで誰が喧嘩^{けんか}なんかするもんか。あんな

奴と^{やつ}」

小林はますます笑った。彼は笑うたびに一調子^{ひとちょうし}ずつ余裕を生じて来た。

「蓋^{けだ}しやむをえなかった訳だろう。しかしそれは僕の云う事だ。

僕は誰と喧嘩したって構わない男だ。誰と喧嘩したって損をしつこない境遇に沈^{ちん}淪^{りん}している人間だ。喧嘩の結果がもしどこかにあるとすれば、それは僕の損にやならない。何となれば、僕はいまだかつて損になるべき何物をも最初からもっていないんだからね。要するに喧嘩から起り得るすべての変化は、みんな僕の得^{とく}になるだけなんだから、僕はむしろ喧嘩を希望してもいいくらいな

ものだ。けれども君は違ふよ。君の喧嘩はけっして得にやならない。そうして君ほどまた損得利害をよく心得ている男は世間にたんとないんだ。ただ心得てるばかりじゃない、君はそうした心得の下に、朝から晩まで寝たり起きたりしていられる男なんだ。少くともそうしなければならないと始終考えている男なんだ。好いかね。その君にして——」

津田は面倒臭そうに小林を遮ぎった。

「よし解った。解ったよ。つまり他と衝突するなと注意してくれらるんだらう。ことに君と衝突しちや僕の損になるだけだから、なるべく事を穏便にしろという忠告なんだらう、君の主意は」

小林は惚^{とぼ}けた顔をしてすまし返った。

「何僕と？　僕はちつとも君と喧嘩をする気はないよ」

「もう解ったというのに」

「解ったらそれでいいがね。誤解のないように注意しておくが、

僕は先刻^{さつき}からお秀さんの事を問題にしているんだぜ、君」

「それも解ってるよ」

「解ってるって、そりゃ京都の事だろう。あっちが不首尾になる
という意味だろう」

「もちろんさ」

「ところが君それだけじゃないぜ。まだほかにも響いて来るんだ

ぜ、気をつけないと」

小林はそこで句を切って、自分の言葉の影響を試験するため、津田の顔を眺めた。津田ははたして平気でいる事ができなかった。

百二十

小林はここだという時機を捕^{つか}まえた。

「お秀さんはね君」と云い出した時の彼は、もう津田を擒^{とりこ}にしていた。

「お秀さんはね君、先生の所へ来る前に、もう一軒ほかへ廻って来たんだぜ。その一軒というのはどこの事だか、君に想像がつくか」

津田には想像がつかなかった。少なくともこの事件について彼女が足を運びそうな所は、藤井以外にあるはずがなかった。

「そんな所は東京にないよ」

「いやあるんだ」

津田は仕方なしに、頭の中でまたあれかこれかと物色して見た。しかしいくら考えても、見当らないものはやっぱり見当らなかった。しまいには小林が笑いながら、その宅うちの名を云った時に、

津田ははたして驚ろいたように大きな声を出した。

「吉川？ 吉川さんへまたどうして行っただらう。何にも関係がないじゃないか」

津田は不思議がらざるを得なかった。

ただ吉川と堀を結びつけるだけの事なら、津田にも容易にできた。強い空想の援にたすけ依る必要も何にもなかった。津田夫婦の結婚するとき、表向媒妁おもてむきはいしやくの労を取ってくれた吉川夫婦と、彼の妹にあたるお秀と、その夫の堀とが社交的に関係をもっているのは、誰の眼にも明らかであった。しかしその縁故で、この問題を提ひっさげたお秀が、とくに吉川の門に向う理由はどこにも発見できなかった

た。

「ただ訪問のために行っただけだろう。単に敬意を払ったんだろう」

「ところがそうでないらしいんだ。お秀さんの話を聴^きいていると」

津田はにわかにその話が聴きたくなつた。小林は彼を満足させる代りに注意した。

「しかし君という男は、非常に用意周到なようでどこか抜けてるね。あんまり抜けまい抜けまいとするから、自然手が廻りかねる訳かね。今度の事だって、そうじゃないか、第一お秀さんを怒ら

せる法はないよ、君の立場として。それから怒らせた以上、吉川の方へ突ツ走らせるのは愚^ぐだよ。その上吉川の方へ向いて行くはずがないと思い込んで、初手^{しよて}から高を括^くっているなんぞは、君の平生にも似合わないじゃないか」

結果の上から見た津田の隙間^{すきま}を探^{さが}し出す事は小林にも容易であつた。

「いったい君のファーザーと吉川とは友達だろう。そうして君の事はファーザーから吉川に万事宜^{よろ}しく願つてあるんだろう。そこへお秀さんが馳^かけ込むのは当り前じゃないか」

津田は病院へ来る前、社の重役室で吉川から聴かされた「年寄

に心配をかけてはいけない。君が東京で何をしているか、ちゃんとこつちで解ってるんだから、もし不都合な事があれば、京都へ知らせてやるだけだ。用心しろ」という意味の言葉を思い出した。それは今から解釈して見ても冗談じょうだんはんぶん半分の訓戒に過ぎなかった。しかしもしそれをここで真面目まじめ一式な文句に転倒するものがあるとするば、その作者はお秀であつた。

「ずいぶん突飛とつぴな奴やつだな」

突飛という性格が彼の家伝にないだけ彼の批評には意外という観念が含まれていた。

「いったい何を云やがったろう、吉川さんで。——彼奴あいつの云う事

を真向まともに受けていると、いいのは自分だけで、ほかのものはみんな悪くなっちまうんだから困るよ」

津田の頭には直接の影響以上に、もっと遠くの方にある大事な結果がちらちらした。吉川に対する自分の信用、吉川と岡本との関係、岡本とお延との縁合えんあい、それらのものがお秀の遣口やりくち一つでどう変化して行くか分らなかった。

「女はあさはかなもんだからな」

この言葉を聴きいた小林は急に笑い出した。今まで笑ったうちで一番大きなその笑い方が、津田をはっと思わせた。彼は始めて自分が何を云っているかに気がついた。

「そりゃどうでもいいが、お秀が吉川へ行つてどんな事をしゃべったのか、叔父に話していたところを君が聴いたのなら、教えてくれたまえ」

「何かしきりに云つてたがね。実をいうと、僕は面倒だから碌に聴いちゃいなかったよ」

こう云つた小林は肝心なところへ来て、知らん顔をして圏外へ出てしまった。津田は失望した。その失望をしばらく味わった後で、小林はまた圈内へ歸つて来た。

「しかもう少し待ってたまえ。否でも応でも聴かされるよ」

津田はまさかお秀がまた来る訳でもなかろうと思つた。

「なにお秀さんじゃない。お秀さんは直^{じか}に来やしない。その代りに吉川の細君が来るんだ。嘘^{うそ}じゃないよ。この耳でたしかに聴いて来たんだもの。お秀さんは細君の来る時間まで明言したくらいだ。おおかたもう少ししたら来るだろう」

お延の予言はあたった。津田がどうかして呼びつけたいと思っている吉川夫人は、いつの間にか来る事になっていた。

百二十一

津田の頭に二つのものが相継^{あいつ}いで閃^{ひら}めいた。一つはこれからこ

こへ来るその吉川夫人を旨く取扱わなければならないという事前
の暗示であつた。彼女の方から病院まで足を運んでくれる事は、
予定の計画から見て、彼の最も希望するところには違なかつた
が、来訪の意味がここに新らしく付け加えられた以上、それに対
する彼の応答ぶりもおうつも変えなければならなかつた。この場合におけ
る夫人の態度を想像に描いて見た彼は、多少の不安を感じた。お
秀から偏見を注ぎ込まれた後の夫人と、まだ反感を煽られない前
の夫人とは、彼の眼に映るところだけでも、だいぶ違つていた。
けれどもそこには平生の自信もまた伴なつていた。彼には夫人の
持つてくる偏見と反感を、一場の会見で、充分引繰り返して見せ

るという覚悟があつた。少くともここでそれだけの事をしておかなければ、自分の未来が危なかつた。彼は三分の不安と七分の信力をもつて、彼女の来訪を待ち受けた。

残る一つの閃めきが、お延に対する態度を、もう一遍臨時に變更する便宜を彼に教えた。先刻までの彼は退屈のあまり彼女の姿を刻々に待ち設けていた。しかし今の彼には別途の緊張があつた。彼は全然異なつた方面の刺激を予想した。お延はもう不用であつた。というよりも、来られてはかえつて迷惑であつた。その上彼はただ二人、夫人と差向いで話してみたい特殊な問題も控えていた。彼はお延と夫人がここでいっしょに落ち合う事を、是非

共防がなければならぬと思ひ定めた。

附帯条件として、小林を早く追^{おっばら}払う手段も必要になつて来た。

しかるにその小林は今にも吉川夫人が見えるような事を云いながら、自分の歸る氣色^{けしき}をどこにも現わさなかつた。彼は他^{ひと}の邪魔になる自分を苦^くにする男ではなかつた。時と場合によると、それと知つて、わざわざ邪魔までしかねない人間であつた。しかもそこまで行つて、實際氣がつかずに迷惑がらせるのか、または心得があつて故意に困らせるのか、その判断を確^{しか}と他^{ひと}に与えずに平氣で切り抜けてしまふじれつたい人物であつた。

津田は欠^{あく}伸^びをして見せた。彼の心持と全く釣り合^あわな^いこの所^{しよ}

作が彼を二つに割った。どこかそわそわしながら、いかにも所在なさそうに小林と応対するところに、中断された気分の特色が斑まだらになって出た。それでも小林はすましていた。枕元にある時計をまた取り上げた津田は、それを置くと同時に、やむをえず質問をかけた。

「君何か用があるのか」

「ない事もないんだがね。なにそりや今に限った訳でもないんだ」

津田には彼の意味がほぼ解った。しかしまだ降参する気にはなれなかった。と云って、すぐ撃退する勇氣はなおさらなかった。

彼は仕方なしに黙っていた。すると小林がこんな事を云い出した。

「僕も吉川の細君に会って行こうかな」

冗談じょうだんじゃないと津田は腹の中で思った。

「何か用があるのかい」

「君はよく用々って云うが、何も用があるから人に会うとは限るまい」

「しかし知らない人だからさ」

「知らない人だからちよつと会って見たいんだ。どんな様子だろうと思ってね。いったい僕は金持の家庭へ入った事もないし、ま

たそんな人と交際^{つきあ}った例^{ためし}もない男だから、ついこういう機会に、ちよつとでもいいから、会っておきたくなるのさ」

「見世物^{みせもの}じゃあるまいし」

「いや単なる好奇心だ。それに僕は閑^{ひま}だからね」

津田は呆^{あき}れた。彼は小林のようなみすばらしい男を、友達の内にもっているという証拠を、夫人に見せるのが厭^{いや}でならなかった。あんな人と付合っているのかと輕蔑^{けいべつ}された日には、自分の未来にまで関係すると思った。

「君もよほど呑氣^{のんき}だね。吉川の奥さんが今日ここへ何しに来るんだか、君だって知ってるじゃないか」

「知ってる。――邪魔かね」

津田は最後の引導いんどうを渡すよりほかに途みちがなくなつた。

「邪魔だよ。だから来ないうちに早く帰ってくれ」

小林は別に怒おこつた様子もしなかつた。

「そうか、じゃ帰ってもいい。帰ってもいいが、その代り用だけは云つて行こう、せつかく来たものだから」

面倒になつた津田は、とうとう自分の方からその用を云つてしまつた。

「金だろう。僕に相当の御用なら承うけたまわつてもいい。しかしここには一文も持っていない。と云つて、また外套がいとうのように留守るすへ取りに

行かれちゃ困る」

小林はにやにや笑いながら、じゃどうすればいいんだという問を顔色でかけた。まだ小林に聴^きく事の残っている津田は、出立前^{しゅったつぜん}もう一遍彼に会っておく方が便宜^{べんぎ}であつた。けれども彼とお延と落ち合う掛念^{けねん}のある病院では都合^{つごう}が悪かつた。津田は送別会という名の下^{もと}に、彼らの出会うべき日と時と場所とを指定した後で、ようやくこの厄介者^{やっかいもの}を退去させた。

津田はすぐ第二の予防策に取りかかった。彼は床の上に置かれた小型の化粧箱を取り除^とけて、その下から例のレターペーパーを同じラヴェンダー色の封筒を引き抜くや否や、すぐ万年筆を走らせた。今日は少し都合があるから、見舞に来るのを見合せてくれという意味を、簡単に書き下^{くだ}した手紙は一分かかるかからないうちに出来上った。気の急^せいた彼には、それを読み直す暇さえ惜かった。彼はすぐ封をしてしまった。そうして中味の不完全なために、お延がどんな疑いを起すかも知れないという事には、少しの顧慮も払わなかった。平生の用心を彼から奪ったこの場合は、彼を忽^{そそ}卒^かしくしたのみならず彼の心を一直線にしなければやまな

かった。彼は手紙を持ったまま、すぐ二階を下りて看護婦を呼んだ。

「ちよつと急な用事だから、すぐこれを持たせて車夫を宅^{うち}までやって下さい」

看護婦は「へえ」と云つて封書を受け取つたなり、どこに急な用事ができたのだらうという顔をして、宛^{あて}名を眺めた。津田は腹の中で往復に費やす車夫の時間さえ考えた。

「電車で行くようにして下さい」

彼は行き違いになる事を恐れた。手紙を受け取らない前にお延が病院へ来てはせつかくの努力も無駄になるだけであつた。

二階へ歸つて来た後あとでも、彼はそればかりが苦くになつた。そう
思ふと、お延がもう宅うちを出て、電車へ乗つて、こっちの方角へ向
いて動いて来るような氣さえした。自然それといっしよに頭の中
に纏まつ付るのは小林であつた。もし自分の目的が達せられない先
に、細君が階子段はしごだんの上に、すらりとしたその姿を現わすとする
ば、それは全く小林の罪に相違ないと彼は考えた。貴重な時間を
無駄に費やさせられたあげく、頼むようにして歸つて貰つた彼の
後姿うしろすがたを見送つた津田は、それでももう少しで刻下こっかの用を弁ずるた
めに、小林を利用するところであつた。「面倒でも歸りにちよつ
と宅へ寄つて、今日来てはいけないとお延に注意してくれ」。こ

うという言葉がつい口の先へ出かかったのを、彼は驚ろいて、引ッ込ましてしまったのである。もしこれが小林でなかったなら、この際どんなに都合がよかつたろうにとさえ実は思つたのである。

津田が神経を鋭どくして、今来るか今来るかという細かい予期に支配されながら、吉川夫人を刻々に待ち受けている間に、彼の看護婦に渡したお延への手紙は、また彼のいまだ想い^{おも}いたらない運命に到着すべく余儀なくされた。

手紙は彼の命令通り時を移さず車夫の手に渡つた。車夫はまた看護婦の命令通り、それを手に持ったまますぐ電車へ乗つた。それから教えられた通りの停留所で下りた。そこを少し行つて、大

通りを例の細い往来へ切れた彼は、何の苦もなくまた名宛なあての苗字みょうじを小綺麗こぎれいな二階建の一軒の門札もんさつに見出みいだした。彼は玄関へかかった。そこで手に持った手紙を取次に出たお時に渡した。

ここまではすべての順序が津田の思い通りに行った。しかしその後あとには、書面したたを認める時、まるで彼の頭の中に入っていないなかった事実が横よこたわっていた。手紙はすぐお延の手に落ちなかった。

しかし津田の懸念けねんしたように、宅うちにいなかったお延は、彼の懸念したように病院へ出かけたのではなかった。彼女は別に行先を控えていた。しかもそれは際きわどい機会うまを旨く利用しようとする敏びんし捷ような彼女の手腕を充分に発揮した結果であった。

その日のお延は朝から通例のお延であつた。彼女は不断のよう
に起きて、不断のように動いた。津田のいる時と万事変りなく働
らいた彼女は、それでも夫の留守るすから必然的に起る、時間の余裕
を持て余すほど楽らくな午前を過ごした。午飯ひるめしを食べた後で、彼女は
洗湯せんとうに行った。病院へ顔を出す前ちよつと綺麗きれいになつておきたい
考えのあつた彼女は、そこでずいぶん念入ねんいりに時間を費やした後、
晴々せいせいした好い心持を湯上りの光沢つやつやしい皮膚はだに包みながら歸つて来
ると、お時から嘘うそではないかと思われるような報告を聴きいた。

「堀の奥さんがいらつしやいました」

お延は下女の言葉を信ずる事ができないくらいに驚ろいた。昨きの

日の今日きょう、お秀の方からわざわざ自分を尋ねて来る。そんな意外な訪問があり得べきはずはなかった。彼女は二遍も三遍も下女の口を確かめた。何で来たかをさえ訊きかなければ気がすまなかった。なぜ待たせておかなかったかも問題になった。しかし下女は何にも知らなかった。ただ藤井の帰りに通り路とおみちだからちよっと寄ったまでだという事だけが、お秀の下女に残して行つた言葉で解つた。

お延は既定のプログラムをとつさの間に変更した。病院は抜いて、お秀の方へ行先を転換しなければならないという覚悟をきめた。それは津田と自分との間に取り換わされた約束に過ぎなかった。

た。何らの不自然に陥おちいる痕迹こんせきなしにその約束を履行するのは今であつた。彼女はお秀あつの後おつを追かけるようにして宅を出た。

百二十三

堀うちの家は太略おおよその見当から云つて、病院と同じ方角にあるので、電車を二つばかり手前の停留所で下りて、下りた処から、すぐ右へ切れさえすれば、つい四五町の道を歩くだけで、すぐ門前へ出られた。

藤井や岡本の住居すまいと違って、郊外に遠い彼の邸やしきには、ほとんど

庭というものがなかった。車廻し、馬車廻しは無論の事であった。往来に面して建てられたと云つてもいいその二階作りと門の間には、ただ三間足らずの余地があるだけであつた。しかもそれが石で敷き詰められているので、地面の色はどこにも見えなかった。

市区改正の結果、よほど以前に取り広げられた往来には、比較的よそで見られない幅があつた。それでいて商売をしている店は、町内にほとんど一軒も見当らなかつた。弁護士、医者、旅館、そんなものばかりが並んでいるので、あたり四辺が繁華な割に、通りはいつも閑静であつた。

その上路みちの左右には柳の立木が行儀よく植えつけられていた。したがって時候の好い時には、殺風景な市内の風も、両側に揺くうごく緑りの裡うちに一種の趣おもむきを見せた。中で一番大きいのが、ちようど堀ほりの塀際へいぎわから斜めに門の上へ長い枝を差し出しているので、よそ目にはそれが家と調子を取るために、わざとそこへ移されたように体裁ていさいが好かった。

その他の特色を云うと、玄関の前に大きな鉄の天水桶てんすいおけがあった。まるで下町の質屋が何かを聯想れんそうさせるこの長物ちやうぶつと、そのすぐ横にある玄関の構かまえとがまたよく釣り合っていた。比較的間口の広いその玄関の入口はことごとく細い格子ほそこうしで仕切られているだけ

で、唐戸^{からど}だの扉^{ドア}だのの装飾はどこにも見られなかった。

一口でいうと、ハイカラな仕舞^{しも}うた屋^やと評しさえすれば、それですぐ首肯^{うなず}かれるこの家の職業は、少なくとも系統的に、家の様子を見ただけで外部から判断する事ができるのに、不思議なのはその主人であつた。彼は自分がどんな宅^{うち}へ入っているかいまだかつて知らなかった。そんな事を苦^くにする神経をもたない彼は、他^{ひと}から自分の家業柄^{かぎようがら}を何とあげつらわれてもいっこう平氣であつた。道樂者だが、満更無^{まんぜい}教育なただの金持とは違って、人柄からいえば、こんな役者向^{やくしやかう}の家に住^{すま}うのはむしろ不適當かも知れないくらいな彼は、極^{きわ}めて我^がの少ない人であつた。悪く云えば自己の

欠乏した男であつた。何でも世間の習俗通りにして行く上に、わが家庭に特有な習俗もまた改めようとしなない気楽ものであつた。

かくして彼は、彼の父、彼の母に云わせるとすなわち先代、の建てた土蔵造りのような、そうしてどこかに芸人趣味のある家に住んで満足しているのであつた。もし彼の美点がそこにもあるとすれば、わざとらしく得意がっていない彼の態度を賞めるよりほかに仕方がなかつた。しかし彼はまた得意がるはずもなかつた。彼の眼に映る彼の住宅は、得意がるにとしては、彼にとってあまりに陳腐過ぎた。

お延は堀の家を見るたびに、自分と家との間に存在する不調和

を感じた。家へ入^はいってからもその距離を思い出す事がしばしばあった。お延の考えによると、一番そこに落ちついてぴたりと坐^まっていてられるものは堀の母だけであつた。ところがこの母は、家族中でお延の最も好かない女であつた。好かないというよりも、むしろ応^お対^{たい}しにくい女であつた。時代が違^{ちが}う、残酷に云^いえば、隔^へ世^せの感がある、もしそれが当たらないとすれば、肌^はが合^あわ^ない、出^でが違^{ちが}う、その他評^{ひやう}する言葉はいくらでもあつたが、結果はいつでも同じ事に歸^{かへ}着^つした。

次には堀その人が問題であつた。お延から見たこの主人は、この家^{うち}に釣^つり合^あうようでもあり、また釣^つり合^あわ^ないようでもあつ

た。それをもう一歩進めていうと、彼はどんな家へ行っても、釣り合うようでもあり、釣り合わないようでもあるというのとほとんど同じ意味になるので、始めから問題にしないのと、大した変りはなかった。この曖昧あいまいなところがまたお延の堀に対する好悪こうおの感情をそのままに現わしていた。事実をいうと、彼女は堀を好んでいるようでもあり、また好いていないようでもあった。

最後に来るお秀きたに関しては、ただ要領を一口でいう事ができた。お延から見ると、彼女はこの家の構造に最も不向ふむきに育て上げられていた。この断案にもう少しもつたいをつけ加えて、心理的に翻訳すると、彼女とこの家庭の空気とはいつまで行っても一致

しつこなかつた。堀の母とお秀、お延は頭の中にこの二人を並べて見るたびに一種の矛盾を強^しいられた。しかし矛盾の結果が悲劇であるか喜劇であるかは容易に判断ができなかつた。

家と人とをこう組み合せて考えるお延の眼に、不思議と思われ
る事がただ一つあつた。

「一番家と釣り合の取れている堀の母が、最も彼女を手古摺^{てこず}らせると同時に、その反対に出来上っているお秀がまた別の意味で、最も彼女に苦痛を与えそうな相手である」

玄関の格子^{こうし}を開けた時、お延の頭に平生からあつたこんな考えを一度に蘇^{よみが}えらせさるべく号鈴^{べル}がはげしく鳴つた。

百二十四

昨日^{きのう}孫を伴^つれて横浜の親類へ行つたという堀の母がまだ歸つて
いなかったのは、座敷へ案内されたお延にとって、意外な機会であつた。見方によつて、好都合^{つごう}にもなり、また悪い跋^{ばつ}にもなるこの機会は、彼女から話しのしにくい年寄を^お追^おい除^のけてくれたと同時に、ただ一人面^{めん}と向き合つて、当の敵^{かたき}のお秀と応対しなければならぬ不利をも与えた。

お延に知れていないこの情実は、訪問の最初から彼女の勝手を狂わせた。いつもなら何をおいても小さな鬚^{まげ}に結^いつた母が一番先

へ出て来て、義理ずぐめにちやほやしてくれるところを、今日に限って、劈頭^{へきとう}にお秀が顔を出したばかりか、待ち設けた老女はその後^{あと}からも現われる様子をいっこう見せないのです、お延はいつも
の予期から出てくる自然の調子をまず外^{はず}させられた。その時彼女は
はお秀を一目見た眼の中に^{うち}、当惑の色を示した。しかしそれはす
まなかったという後悔の記念でも何でもなかった。単に昨日^{きのう}の戦
争に勝った得意の反動からくる一種のきまり悪さであつた。どん
な敵^{かたき}を打たれるかも知れないという微^{かす}かな恐怖であつた。この場
をどう切り抜けたらいいか知らという思慮の悩乱でもあつた。

お延はこの一瞥^{いちべつ}をお秀に与えた瞬間に、もう今日の自分を相手

に握られたという気がした。しかしそれは自分のもっている技巧のどうする事もできない高い源からこの一瞥いちべつが突如として閃めいひらてしまった後であつた。自分の手の届かない暗中から不意に来たものを、喰い止める威力をもっていない彼女は、甘んじてその結果を待つよりほかに仕方がなかつた。

一瞥ははたしてお秀の上によく働いた。しかしそれに反応してくる彼女の様子は、またいかにも予想外であつた。彼女の平生、その平生が破裂した昨日きのう、津田と自分と寄つてたかつてその破裂を料理した始末、これらの段取を、不断から一貫して傍はたの人の眼に着く彼女の性格に結びつけて考えると、どうしても無事に納ま

るはずはなかった。大なり小なり次の波瀾はらんが呼び起されずに片がつこうとは、いかに自分の手際に重きをおくお延にも信ぜられなかった。

だから彼女は驚ろいた。座に着いたお秀が案に相違していつもより愛嬌あいきょうの好い挨拶あいさつをした時には、ほとんどわれを疑うくらいに驚ろいた。その疑いをまた少しも後へ繰り越させないように、手てぬ抜きなく仕向けて来る相手の態度を眼の前に見た時、お延はむしろ気味が悪くなった。何という変化だろうという驚ろきの後から、どういう意味だろうという不審が湧わいて起った。

けれども肝心かんじんなその意味を、お秀はまたいつまでもお延に説明

しようとしなかった。そればかりか、昨日病院で起った不幸な行ゆき違ちがいについても、ついに一言も口を利く様子を見せなかった。

相手に心得があつてわざと際きわどい問題を避けている以上、お延の方からそれを切り出すのは変なものであつた。第一好んで痛いところに触れる必要はどこにもなかった。と云つて、どこかで区くぎ切りを付けて、双方さっぱりしておかないと、自分は何のために、今日ここまで足を運んだのか、主意が立たなくなつた。しかし和解の形式を通過しないうちに、もう和解の実を挙げている以上、それをとにかく表面へ持ち出すのも馬鹿げていた。

怜悯りこうなお延は弱らせられた。会話が滑なめらかにすべって行けば行

くほど、一種の物足りなさが彼女の胸の中に頭を擡もたげて来た。しまいには彼女は相手のどこかを突き破って、その内側を覗のぞいて見ようかと思ひ出した。こんな点にかけると、すこぶる冒険的なところのある彼女は、万一やり損そくなつた暁あかつきに、この場合から起り得る危険を知らないではなかった。けれどもそこには自分の腕に對する相当の自信も伴っていた。

その上もし機会が許すならば、お秀の胸の格別なある一点に、打診を試ろみたいという希望が、お延の方にはあつた。そこを敲たたかせて貰もらつて局部から自然に出る本音ほんねを充分に聴きく事は、津田と打ち合せを済ました訪問の主意でも何でもなかったけれども、お

延自身からいうと、うまく媾和こうわの役目をやり終おせて帰るよりも遙はるかに重大な用向ようむきであつた。

津田に隠さなければならぬこの用向は、津田がお延にないしよにしなければならぬ事件と、その性質の上においてよく似通つていた。そうして津田が自分のいない留守るすに、小林がお延に何を話したかを気にするごとく、お延もまた自分のいない留守るすに、お秀が津田に何を話したかを確しかと突きとめたかったのである。

どこに引ひかかりを拵こしらえたものかと思案した末、彼女は仕方なしに、藤井の歸りに寄つてくれたというお秀の訪問をまた問題にし

た。けれども座に着いた時すでに、「先刻^{さつき}いらしって下すつたそ
うですが、あいにくお湯に行っていて」という言葉を、会話の口^{くち}
切^{きり}に使った彼女が、今度は「何か御用でもおありだったの」とい
う質問で、それを復活させにかかった時、お秀はただ簡単に「い
いえ」と答えただけで、綺麗^{きれい}にお延を跳ね^はつけてしまった。

百二十五

お延は次に藤井から入って行こうとした。今朝^{けさ}この叔父^{おじ}の所を
訪ね^{たず}たというお秀の自白が、話しをそっちへ持って行くに都合の

いい便利を与えた。けれどもお秀の門構もんがまえは依然としてこの方面にも嚴重であつた。彼女は必要の起るたびに、わざわざその門の外へ出て来て、愛想よくお延に應對した。お秀がこの叔父の世話で人となつた事實は、お延にもよく知れていた。彼女が精神的にその感化を受けた点もお延に解わかっていた。それでお延は順序としてまずこの叔父の人格やら生活やらについて、お秀の氣に入りそうな言辞ことばを弄ろうさなければならなかつた。ところがお秀から見ると、それがまた一々誇張と虚偽の響きを帯びているので、彼女は真面まじ目めに取り合う緒口いとくちをどこにも見出す事ができないのみならず、長く同じ筋道を辿たどって行くうちには、自然氣色きしよくを悪くした様子を外

に現わさなければすまなくなつた。敏捷びんしょうなお延は、相手を見縊みくびり過ぎていた事に気がつくや否や、すぐ取つて返した。するとお秀の方で、今度は岡本の事を喋ちやつちやつ々し始めた。お秀対藤井とちようど同じ関係にあるその叔父は、お延にとって大事な人であると共に、お秀からいうと、親しみも何にも感じられない、あかの他人であつた。したがつて彼女の言葉には滑すべつこい皮膚があるだけで、肝心かんじんの中味に血も肉も盛られていなかった。それでもお延はお秀の手料理になるこのお世辞せじの返礼をさも旨うまそうに鵜吞うのみにしなければならなかつた。

しかし再度自分の番が廻つて来た時、お延は二返目の愛嬌あいぎやうを手

古盛こもりに盛り返して、悪くお秀に強いるほど愚かな女ではなかった。時機を見て器用に切り上げた彼女は、次に吉川夫人から煽あおつて行こうとした。しかし前と同じ手段を用いて、ただ賞ほめそやすだけでは、同じ不成蹟ふせいせきに陥おちいるかも知れないという恐れがあった。そこで彼女は善悪の標準を度外に置いて、ただ夫人の名前だけを二人の間に点出して見た。そうしてその影響次第で後の段取あとをきめようと覚悟した。

彼女はお秀が自分の風呂の留守るすへ藤井の歸りがけに廻まわつて来た事を知っていた。けれども藤井へ行く前に、彼女がもうすでに吉川夫人を訪問している事にはまるで想おもい到いたらなかった。しかも昨きの

日病院で起った波瀾の結果として、彼女がわざわざそこまで足を運んでいようとは、夢にも知らなかった。この一点にかけると、津田と同じ程度に無邪気であつた彼女は、津田が小林から驚ろかされたと同じ程度に、またお秀から驚ろかされなければならなかつた。しかし驚ろかせられ方は二人共まるで違つていた。小林のは明らさまな事実の報告であつた。お秀のは意味のありそうな無言であつた。無言と共に來た薄赤い彼女の顔色であつた。

最初夫人の名前がお延の唇から洩れた時、彼女は二人の間に一滴の靈藥が天から落されたような氣がした。彼女はすぐその効果を眼の前に眺めた。しかし不幸にしてそれは彼女にとって何の役

にも立たない効果に過ぎなかった。少くともどう利用していいか解らない効果であつた。その予想外な性質は彼女をはつと思わせるだけであつた。彼女は名前を口へ出すと共に、あるいはその場ですぐ失言を謝さなければならぬかしらとまで考えた。

すると第二の予想外が継いで起つた。お秀がちよつと顔を背けた様子を見た時に、お延はどうしても最初に受けた印象を改正しなければならぬなつた。血色の変化はけつして怒りのためでないという事がその時始めて解つた。年来陳腐なくらい見飽きている単純なきまりの悪さだと評するよりほかに仕方のないこの表情は、お延をさらに驚ろかさざるを得なかつた。彼女はこの表情の

意味をはつきり確かめた。しかしその意味の因^よつて来^{きた}るところは、お秀の説明を待たなければまた確かめられるはずがなかった。

お延がどうしようかと迷っているうちに、お秀はまるで木に竹を接^ついだように、突然話題を変化した。行^{ゆき}がかり上^{じょう}全然今までと関係のないその話題は、三度目にまたお延を驚ろかせるに充分なくらい突飛^{とっぴ}であつた。けれどもお延には自信があつた。彼女はすぐそれを受けて立つた。

お秀の口を洩れた意外な文句のうちで、一番初めにお延の耳を打ったのは「愛」という言葉であつた。この陳腐ちんぷなありきたりの一語が、いかにお延の前に伏兵のような新らし味をもつて起つたかは、前後の連絡を欠いて単独に突発したというのが重おもな原因に相違なかつたが、一つにはまた、そんな言葉がまだ会話の材料として、二人の間に使われていなかったからである。

お延に比べるとお秀は理窟りくつっぽい女であつた。けれどもそういう結論に達するまでには、多少の説明が要つた。お延は自分で自分の理窟を行為の上に運んで行く女であつた。だから平生彼女の議論をしないのは、できないからではなくって、する必要がない

からであつた。その代り他^{ひと}から注^つぎ込^こまれた知識になると、大した貯蓄も何にもなかつた。女学生時代に読み馴^なれた雑誌さえ近頃は滅^め多^たに手にしないくらいであつた。それでいて彼女はいまだかつて自分を貧弱と認めた事がなかつた。虚栄心の強い割に、その方面の欲望があまり刺戟^{しげき}されずにすんでいるのは、暇が乏しいからでもなく、競争の話し相手がないからでもなく、全く自分に大した不足を感じないからであつた。

ところがお秀は教育からしてが第一違つていた。読書は彼女を彼女らしくするほとんどすべてであつた。少なくとも、すべてでなければならぬように考えさせられて来た。書物に縁の深い叔

父の藤井に教育された結果は、善悪両様の意味で、彼女の上に妙な結果を生じた。彼女は自分より書物に重きをおくようになった。しかしいくら自分を書物より軽く見るにしたところで、自分
は自分なりに、書物と独立したまんまで、生きて働らいて行かなければならなかった。だから勢い本と自分とは離れ離れになるだけであつた。それをもつと適切な言葉で云い現わすと、彼女は折々柄がらにもない議論を主張するような弊に陥おちつた。しかし自分が議論のために議論をしているのだからつまらないと気がつくまでには、彼女の反省力から見て、まだ大分の道程だいぶんみちのりがあつた。意地の方から行くと、あまりに我がが強過ぎた。平たく云えば、その我が

つまり自分の本体であるのに、その本体に副^そぐわないうような理窟^{りくつ}を、わざわざ自分の尊敬する書物の中^{うち}から引張り出して来て、そこに書いてある言葉の力で、それを守護するのと同じ事に帰着した。自然弾丸^{たまたま}を込めて打ち出すべき大砲を、九寸五分^{くすんごぶ}の代りに、振り廻して見るような滑稽^{こっけい}も時々は出て来なければならなかった。

問題ははたして或雑誌から始まった。月の発行にかかるその雑誌に発表された諸家の恋愛観を読んだお秀の質問は、実をいうとお延にとってそれほど興味のあるものでもなかった。しかしまだ眼を通していない事実を自白した時に、彼女の好奇心が突然起つ

た。彼女はこの抽象的ちゆうしきな問題を、どこかで自分の思い通り活かしてやろうと決心した。

彼女はややともすると空論に流れやすい相手の弱点をかなりよく呑み込んでいた。際どい実問題きわにこれから飛び込んで行こうとする彼女に、それほど都合つごうの悪い態度はなかった。ただ議論のために議論をされるくらいなら、最初から取り合わない方がよっぽどましだった。それで彼女にはどうしても相手を地面の上に縛しばりつけておく必要があった。ところが不幸にしてこの場合の相手は、最初からもう地面の上にいなかった。お秀の口にする愛は、津田の愛でも、堀の愛でも、乃至ないしお延、お秀の愛でも何でもな

かった。ただ漫然^{まんぜん}として空裏^{くうり}に飛揚^{ひよう}する愛であつた。したがつてお延の努力は、風船玉のようなお秀の話を、まず下へ引き摺^ずりおろさなければならなかつた。

子供がすでに二人もあつて、万事自分より世帯染^{しよたいいじ}みているお秀が、この意味において、遙^{はる}かに自分より着実でない事を発見した時に、お延は口でははいはい向うのいう通りを首肯^{うけが}しながら、腹の中では、じれつたがつた。「そんな言葉の先でなく、裸でいらつしやい、実力で相撲^{すもう}を取りますから」と云いたくなくなった彼女は、どうしたらこの議論家を裸にする事ができるだろうと思案した。やがてお延の胸に分別^{ふんべつ}がついた。分別とはほかでもなかつた。

この問題を活かすためには、お秀を犠牲にするか、または自分を犠牲にするか、どっちかにしなければ、とうてい思つう壺ぼに入いって来る訳がないという事であつた。相手を犠牲にするのに困難はなかつた。ただどこからか向うの弱点を突つ付きさえすれば、それで事は足りた。その弱点が事実であらうとも仮説的であらうとも、それはお延の意とするところではなかつた。単に自然の反応を目的にして試みる刺戟しげきに対して、真偽の吟味ぎんみなどは、要いらざる斟酌しんしゃくであつた。しかしそこにはまたそれ相応の危険もあつた。お秀は怒おこるに違ちがひなかつた。ところがお秀を怒らせるという事は、お延の目的であつて、そうして目的でなかつた。だからお延は迷わ

ざるを得なかった。

最後に彼女はある時機を掴^{つか}んで起^たった。そうしてその起った時には、もう自分を犠牲にする方に決心していた。

百二十七

「そう云われると、何と云っていいか解^{わか}らなくなるわね、あたしなんか。津田に愛されているんだか、愛されていないんだか、自分じゃまるで夢中にいるんですもの。秀子さんは仕合せね、そこへ行くと。最初から御自分にちゃんとした保証がついていらっ

しやるんだから」

お秀の器量望みきりようのぞで貰もらわれた事は、津田といっしよにならない前から、お延に知れていた。それは一般の女、ことにお延のような女にとっては、羨うらやましい事実じつじに違ちがなかつた。始めて津田からその話を聴きかされた時、お延はお秀を見ない先に、まず彼女に対する軽い嫉妬しつとを感じた。中味の薄っぺらな事実じつじに過ぎなかつたという意味があとで解つた時には、淡い冷笑のうちに、復讐ふくしゅうをしたよ
うな快感さえ覚えた。それより以後、愛という問題について、お秀に対するお延の態度は、いつも軽蔑けいべつであつた。それを表向おもてむきさも嬉しい消息うれでもあるように取扱かつて、彼我ひがに共通するごとく

に見せかけたのは、無論一片のお世辞せじに過ぎなかった。もつと悪く云えば、一種の嘲弄ちやうろうであつた。

幸いお秀はそこに気がつかなかった。そうして気がつかない訳であつた。と云うのは、言葉の上はとにかく、実際に愛を体得する上において、お秀はとてもお延の敵でなかった。猛烈に愛した経験も、生一本きいつぽんに愛された記憶ももたない彼女は、この能力の最大限がどのくらい強く大きなものであるかという事をまだ知らずにいる女であつた。それでいて夫に満足している細君であつた。知らぬが仏ほとけという諺ことわざがまさにこの場合の彼女をよく説明していた。結婚の当時、自分の未来に夫の手で押しつけられた愛の判

を、普通の証文のようなつもりで、いつまでも胸の中へしまい込んでいた彼女は、お延の言葉を、その胸の中で、真面目に受けるほど無邪気だったのである。

本当に愛の実体を認めた事のないお秀は、彼女のいたずらに使う胡乱な言葉を通して、鋭いお延からよく見透かされたのみではなかった。彼女は津田とお延の関係を、自分達夫婦から割り出して平気でいた。それはお延の言葉を聴いた彼女が実際驚ろいた顔をしたのでも解った。津田がお延を愛しているかいないかが今頃どうして問題になるのだろう。しかもそれが細君自身の口から出るとは何事だろう。ましてそれを夫の妹の前へ出すに至って

は、どこにどんな意味があるのだろう。——これがお秀の表情であつた。

実際お秀から見たお延は、現在の津田の愛に満足する事を知らない横着者か、さもなければ、自分が充分津田を手の中へ丸め込んでおきながら、わざとそこに気のつかないようなふりをする、空々しい女に過ぎなかった。彼女は「あら」と云つた。

「まだその上に愛されてみたいの」

この挨拶あいさつは平生のお延の注文通りに来た。しかし今の場合におけるお延に満足を与えるはずはなかった。彼女はまた何とか云つて、自分の意志を明らかにしなければならなかった。ところがそ

れを判然^{はつきり}表現すると、「津田があたしのほかにまだ思っている人が別にあるとするなら、あたしだってとうてい今のままで満足できる訳がないじゃありませんか」という露骨な言葉になるよりほかに途^{みち}はなかった。思い切って、そう打って出れば、自分で自分の計画をぶち毀^{こわ}すのと一般だと感づいた彼女は、「だって」と云いかけたまま、そこで逡巡^{ためら}ったなり動けなくなつた。

「まだ何か不足があるの」

こう云つたお秀は眼を集めてお延の手を見た。そこには例の指^{ゆび}環^わが遠慮なく輝やいていた。しかしお秀の鋭^{いちべつ}どい一瞥は何の影響もお延に与える事ができなかった。指輪に対する彼女の無邪気さ

は昨日と毫きとうも変るところがなかった。お秀は少しもどかしくなつた。

「だって延子さんは仕合せじゃありませんか。欲しいものは、何でも買つて貰えるし、行きたい所へは、どこへでも連れていって貰えるし——」

「ええ。そこだけはまあ仕合せよ」

他ひとに向つて自分の仕合せと幸福を主張しなければ、わが弱味を外へ現わすようになって、不都合だとばかり考えつけて来たお延は、平生から持ち合せの挨拶あいさつをついこの場合にも使つてしまつた。そうしてまた行きつまつた。芝居に行った翌日あくるひ、岡本へ行つ

て継子と話をした時用いた言葉を、そのまま繰り返した後で、彼女は相手のお秀であるという事に気がついた。そのお秀は「そこだけが仕合せなら、それでたくさんじゃないか」という顔つきをした。

お延は自分がかかりそめにも津田を疑っているという形迹けいせきをお秀に示したくなかった。そうかと云って、何事も知らない風を粧よそおつて、見す見すお秀から馬鹿にされるのはなお厭いやだった。したがって応対に非常な呼吸が要いった。目的地へ漕こぎつけるまでにはなかなか骨が折れると思った。しかし彼女はとも見込のない無理な努力をしているという事には、ついに気がつかなかった。彼女は

また態度を一変した。

百二十八

彼女は思い切って一足飛びに飛んだ。情実に絡からまれた窮屈な云い廻し方を打ちやって、面めんと向き合ったままお秀しゅうけんに相見しようとしました。その代り言葉はどうしても抽象的にならなければならなかった。それでも論戦の刺撃で、事実の面影おもかげを突きとめる方が、まだましだと彼女は思った。

「いったい一人の男が、一人以上の女を同時に愛する事ができる

ものでしょうか」

この質問を基点として歩を進めにかかった時、お秀はそれに対してあらかじめ準備された答を一つももっていなかった。書物と雑誌から受けた彼女の知識は、ただ一般恋愛に関するだけで、毫もこの特殊な場合に利用するに足らなかった。腹に何の貯えたくわもない彼女は、考える風をした。そうして正直に答えた。

「そりゃちよつと解らないわ」

お延は気の毒になった。「この人は生きた研究の材料として、堀という夫をすでにもっているではないか。その夫の婦人に対する態度も、朝夕あさゆうそば傍にいて、見ているではないか」。お延がこう思

う途端に、第二句がお秀の口から落ちた。

「解^{わか}らないはずじゃありませんか。こっちが女なんですもの」

お延はこれも愚答だと思った。もしお秀のありのままがこうだとすれば、彼女の心の働らきの鈍さ加減が想^{おも}いやられた。しかしお延はすぐこの愚答を活かしにかかった。

「じゃ女の方から見たらどうでしょう。自分の夫が、自分以外の女を愛しているという事が想像できるでしょうか」

「延子さんにはそれができないの？」と云われた時、お延はおやと思った。

「あたしは今そんな事を想像しなければならぬ地位にいるんで

しょうか」

「そりゃ大丈夫よ」とお秀はすぐ受け合った。お延は直ちに相手
の言葉を繰り返した。

「大丈夫!？」

疑問とも間投詞とも片のつかないその語尾は、お延にも何とい
う意味だか解らなかった。

「大丈夫よ」

お秀も再び同じ言葉を繰り返した。その瞬間にお延は冷笑の影
をちらりとお秀の唇のあたりに認めた。くちびるしかし彼女はすぐそれを
切って捨てた。

「そりや秀子さんは大丈夫にきまつてるわ。もともと堀さんへいらっしやる時の条件が条件ですもの」

「じゃ延子さんはどうなの。やっぱり津田に見込まれたんじゃないの」

「嘘^{うそ}よ。そりやあなたの事よ」

お秀は急に応じなくなった。お延も獲物のない同じ脈をそれ以上掘る徒労^{はぶ}を省いた。

「いったい津田は女に関してどんな考えをもっているんでしょ
う」

「それは妹より奥さんの方がよく知ってるはずだわ」

お延は叩きつけられた後で、あと自分もお秀と同じような愚問をかけた事に気がついた。

「きょうだいだけど兄妹としての津田は、あたしより秀子さんの方によく解ってるでしょう」

「ええ、だけど、いくら解ってたって、延子さんの参考にやらないわ」

「参考に無論なるのよ。しかしその事ならあたしだって疾とうから知ってるわ」

お延の鎌かまは際きわどいところで投げかけられた。お秀ははたしてかかった。

「けれども大丈夫よ。延子さんなら大丈夫よ」

「大丈夫だけれども危険あぶないのよ。どうしても秀子さんから詳しい話を聴きかしていただかないと」

「あら、あたし何にも知らないわ」

こういったお秀は急に赧あかくなった。それが何の羞恥しゆうちのために起ったのかは、いくら緊張したお延の神経でも揣摩しまできなかつた。しかも彼女はこの訪問の最初に、同じ現象から受けた初度しよどの記憶をまだ忘れずにいた。吉川夫人の名前を点じた時に見たその薄赧うすあかい顔と、今彼女の面前に再現したこの赤面の間にどんな関係があるのか、それはいくら物の異同を嗅かぎ分ける事に妙を得た彼

女にも見当がつかなかった。彼女はの場合無理にも二つのものを繋つないでみたくってたまらなかった。けれどもそれを繋ぎ合わせる綱は、どこをどう探さがしたって、金輪際出こんりんざいて来っこなかつた。お延にとって最も不幸な点は、現在の自分の力に余るこの二つのものの間に、きつと或る聯絡れんらくが存在しているに相違ないという推測すいそくであつた。そしてその聯絡が、今の彼女にとって、すこぶる重大な意味をもっているに相違ないという一種の予覺であつた。自然彼女はそこをもつと突ツついて見るよりほかに仕方がなかつた。

とっさの衝動に支配されたお延は、自分の口を衝いて出る嘘を
抑える事ができなかつた。

「吉川の奥さんから伺った事があるのよ」

こう云った時、お延は始めて自分の大胆さに気がついた。彼女はそこへとまっつて、冒険の結果を眺めなければならなかつた。するとお秀が今までの赤面とは打って変つた不思議そうな顔をしながら訊き返した。

「あら何を」

「その事よ」

「その事って、どんな事なの」

お延にはもう後^{あと}がなかった。お秀には先があつた。

「嘘でしょう」

「嘘じゃないのよ。津田の事よ」

お秀は急に応じなくなった。その代り冷笑の影を締りの好い口元にわざと寄せて見せた。それが先刻^{さつき}より著るしく目立って外へ現われた時、お延は路を誤まつて一步^{ふかだ}深田の中へ踏み込んだような気がした。彼女に特有な負け嫌いな精神が強く働らかなかつたなら、彼女はお秀の前に頭を下げて、もう救^{すくい}を求めているかも知れなかった。お秀は云った。

「変ね。津田の事なんか、吉川の奥さんがお話しになる訳がない

のにね。どうしたんでしょう」

「でも本当よ、秀子さん」

お秀は始めて声を出して笑った。

「そりゃ本当でしょうよ。誰も嘘だと思っものなんかありやしな
いわ。だけどどんな事なの、いったい」

「津田の事よ」

「だから兄の何よ」

「そりゃ云えないわ。あなたの方から云って下さらくっちゃ」

「ずいぶん無理な御注文ね。云えったって、見^{けんとう}当がつかないんで

すもの」

お秀はどこからでもいらっしやいという落ちつきを見せた。お延の腋わきの下から膏汗あせが流れた。彼女は突然飛びかかった。

「秀子さん、あなたはキリストきようしんじや基督教信者じゃありませんか」

お秀は驚ろいた様子を現わした。

「いいえ」

「でなければ、昨日きのうのような事をおっしやる訳がないと思いますわ」

昨日と今日の二人は、まるで地位を易かえたような形勢に陥おちつた。お秀はどこまでも優者の余裕を示した。

「そう。じゃそれでもいいわ。延子さんはおおかた基督教がお嫌きら

いなんでしょう」

「いいえ好きなのよ。だからお願いするのよ。だから昨日のような気高^{けだか}い心持になって、この小さいお延を憐^{あわ}れんでいただきたいのよ。もし昨日のあたしが悪かったら、こうしてあなたの前に手を出^あいて詫^{あや}まるから」

お延は光る宝石入の指輪を穿^はめた手を、お秀の前に突いて、口で云った通り、実際に頭を下げた。

「秀子さん、どうぞ隠さずに正直にして下さい。そうしてみんな打ち明けて下さい。お延はこの通り正直にしています。この通り後悔しています」

持前の癖を見せて、眉^{まゆ}を寄せた時、お延の細い眼から涙が膝^{ひざ}の上へ落ちた。

「津田はあたしの夫です。あなたは津田の妹です。あなたに津田が大事なように、津田はあたしにも大事です。ただ津田のためです。津田のために、みんな打ち明けて話して下さい。津田はあたしを愛しています。津田が妹としてあなたを愛しているように、妻としてあたしを愛しているのです。だから津田から愛されているあたしは津田のためにすべてを知らなければならぬのです。津田から愛されているあなたもまた、津田のために万^{よろ}ずをあたしに打ち明けて下さるでしょう。それが妹としてのあなたの親切で

す。あなたがあたしに対する親切を、この場合お感じにならないでも、あたしはいつこう恨みうらとは思いません。けれども兄さんとしての津田には、まだ尽して下さる親切をもっていらっしゃるでしょう。あなたがそれを充分もっていらっしゃるのは、あなたの顔つきでよく解わかります。あなたはそんな冷刻な人ではけっしてないのです。あなたはあなたが昨日御自分でおっしゃった通り親切な方に違いないのです」

お延がこれだけ云って、お秀の顔を見た時、彼女はそこに特別な変化を認めた。お秀は赧あかくなる代りに少し蒼白あおしろくなった。そうして度外どはずれに急せぎ込こんだ調子で、お延の言葉を一刻も早く否定し

なければならぬという意味に取れる言葉遣い^{づか}をした。

「あたしはまだ何にも悪い事をした覚^{おぼえ}はないんです。兄さんに対しても嫂^{ねえ}さんに対しても、もっているのは好意だけです。悪意はちつとも有りません。どうぞ誤解のないようにして下さい」

百三十

お秀の言訳はお延にとって意外であつた。また突然であつた。その言訳がどこから出て来たのか、また何のためであるかまるで解らなかつた。お延はただはつと思つた。天恵のごとく彼女の前

に露出されたこの時のお秀の背後に何が潜んでいるのだろう。お延はすぐその暗闇くらやみを衝つこうとした。三度目の嘘うそが安々と彼女の口を滑すべって出た。

「そりゃ解ってるのよ。あなたのなすった事も、あなたのなすった精神も、あたしにはちゃんと解ってるのよ。だから隠しだてをしないで、みんな打ち明けてちょうだいな。お厭いや？」

こう云った時、お延は出来得る限りの愛嬌あいぎょうをその細い眼に湛たたえて、お秀を見た。しかし異性に対する場合の効果を予想したこの所作しよさは全く外はずれた。お秀は驚ろかされた人のように、卒爾そつじな質問をかけた。

「延子さん、あなた今日ここへおいでになる前、病院へ行っていたの」

「いいえ」

「じゃどこか外ほかから廻まわっていらしたの」

「いいえ。宅うちからすぐ上ったの」

お秀はようやく安心したらしかった。その代り後は何にも云わなかった。お延はまだ縋すがりついた手を放さなかった。

「よう、秀子さんどうぞ話してちょうだいよ」

その時お秀の涼しい眼のうちに残酷ざんこくな光が射した。

「延子さんはずいぶん勝手な方ね。御自分独ひとり精せい一杯いっぱい愛されな

くつちや気がすまないと見えるのね」

「無論よ。秀子さんはそうでなくっても構わないの」

「良^{うち}人を御覧なさい」

お秀はすぐこう云って退^のけた。お延は話頭^{わとう}からわざと堀を追^おい除^のけた。

「堀さんは問題外よ。堀さんはどうでもいいとして、正直の云^いいっ競^{くら}よ。なんぼ秀子さんだって、気の多い人が好きな訳はないでしょう」

「だって自分よりほかの女は、有れども無きがごとくしてような素直^{すなお}な夫が世の中にいるはずがないじゃありませんか」

雑誌や書物からばかり知識の供給を仰いでいたお秀は、この時突然卑近な實際家となってお延の前に現われた。お延はその矛盾を注意する暇さえなかった。

「あるわよ、あなた。なけりやならないはずじゃありませんか、いやしくも夫と名がつく以上」

「そう、どこにそんな好い人がいるの」

お秀はまた冷笑の眼をお延に向けた。お延はどうしても津田という名前を大きな声で叫ぶ勇気がなかった。仕方なしに口の先で答えた。

「それがあたしの理想なの。そこまで行かなくっちゃ承知ができ

ないの」

お秀が實際家になった通り、お延もいつの間にか理論家に変化した。今までの二人の位地いちぢは顛倒てんとうした。そうして二人ともまるでそこに気がつかずに、勢の運ぶがままに前の方へ押し流された。

あとの会話は理論とも實際とも片のつかない、出たところ勝負になつた。

「いくら理想だつてそりや駄目だめよ。その理想が実現される時は、細君以外の女という女がまるで女の資格を失つてしまわなければならぬんですもの」

「しかし完全の愛はそこへ行つて始めて味わわれるでしょう。そ

ここまで行き尽さなければ、本式の愛情は生涯経しょうがいたつたつて、感ずる訳に行かないじゃありませんか」

「そりやどうか知らないけれども、あなた以外の女を女と思わないで、あなただけを世の中に存在するたった一人の女だと思わないて事は、理性に訴えてできるはずがないでしょう」

お秀はとうとうあなたという字に点火した。お延はいつこう構わなかった。

「理性はどうでも、感情の上で、あたしだけをたった一人の女と思っていてくれれば、それでいいんです」

「あなただけを女と思えとおっしゃるのね。そりや解わかるわ。けれ

どもほかの女を女と思っちゃいけないとなるとまるで自殺と同じ事よ。もしほかの女を女と思わずにいられるくらいな夫なら、肝心のあなただって、やッぱり女とは思わないでしょう。自分の宅の庭に咲いた花だけが本当の花で、世間にあるのは花じゃない枯草だというのがと同じ事ですもの」

「枯草でいいと思いますわ」

「あなたにはいいでしょう。けれども男には枯草でないんだから仕方がありませんわ。それよりか好きな女が世の中にいくらでもあるうちで、あなたが一番好かれている方が、嫂さんにとってもかえって満足じゃありませんか。それが本当に愛されているとい

う意味なんですもの」

「あたしはどうしても絶対に愛されてみたいの。比較なんか始めから嫌きらいなんだから」

お秀の顔に軽蔑けいべつの色が現われた。その奥には何という理解力に乏しい女だろうという意味がありありと見透みすかされた。お延はむらむらとした。

「あたしはどうせ馬鹿だから理窟りくつなんか解らないのよ」

「ただ実例をお見せになるだけなの。その方が結構だわね」

お秀は冷然として話を切り上げた。お延は胸の奥で地団太じだんだを踏んだ。せつかくの努力はこれ以上何物をも彼女に与える事ができ

なかった。留守に彼女を待つ津田の手紙が来ているとも知らない彼女は、そのまま堀の家を出た。

百三十一

お延とお秀が対坐^{たいざ}して戦っている間に、病院では病院なりに、また独立した予定の事件が進行した。

津田の待ち受けた吉川夫人がそこへ顔を出したのは、お延宛^{あて}で書いた手紙を持たせてやった車夫がまだ帰って来ないうちに、時間からいうと、ちょうど小林の出て行った十分ほど後^{あと}であつた。

彼は看護婦の口から夫人の名前を聴いた時、この異人種に近い二人が、狭い室で鉢合せをしずにくだ好都合を、何より先にまづ祝福した。その時の彼はこの都合をつけるために払うべく余儀なくされた物質上の犠牲をほとんど顧みる暇さえなかった。

彼は夫人の姿を見るや否や、すぐ床の上に起き返ろうとした。夫人は立ちながら、それを止めた。そうして彼女を案内した看護婦の両手に、抱えるようにして持たせた植木鉢をちよつとふり返って見て、「どこへ置きましょう」と相談するように訊いた。津田は看護婦の白い胸に映る紅葉の色を美しく眺めた。小さい鉢の中で、窮屈そうに三本の幹が調子を揃えて並んでいる下に、

恰好かっこうの好い手頃な石さえあしらったその盆栽ぼんさいが床とこの間まの上に置かれた後で、夫人は始めて席に着いた。

「どうです」

先刻さつきから彼女の様子を見ていた津田は、この時始めて彼に対する夫人の態度を確かめる事ができた。もしやと思つて、暗あんに心配していた彼の掛念けねんの半分は、この一語いちごで吹き晴らされたと同じ事であつた。夫人はいつもほど陽気ではなかつた。その代りいつもほど上うわつ調子ちようしでもなかつた。要するに彼女は、津田がいまだかつて彼女において発見しなかつた一種の気分で、彼の室に入つて来たらしかつた。それは一方で彼女の落ちつきを極度に示している

と共に、他方では彼女の鷹揚おうようさをやはり最高度に現わすものらしく見えた。津田は少し驚ろかされた。しかし好い意味で驚ろかされただけに、気味も悪くしなければならなかった。たといこの態度が、彼に対する反感を代表していないにせよ、その奥には何があるか解らなかった。今その奥に恐るべき何物がないにしても、これから先話をしているうちに、向うの心持はどう変化して来るか解らなかった。津田は他ひとから機嫌きげんを取られつけている夫人の常として、手前勝手にいくらでも変って行く、もしくは変って行くとても差支さしつかえないと自分で許している、この夫人を、一種の意味で、女性の暴君と奉たてまつらなければならぬ地位にあった。漢語で

いうと彼女の一顰一笑が津田にはことごとく問題になった。この際の彼にはことにそうであつた。

「今朝秀子さんがいらしてね」

お秀の訪問はまず第一の議事のごとくに彼女の口から投げ出された。津田は固より相手に応じなければならなかった。そうしてその応じ方は夫人の来ない前からもう考えていた。彼はお秀の夫人を尋ねた事を知つて、知らない風をするつもりであつた。誰から聴いたと問われた場合に、小林の名を出すのが厭だつたからである。

「へえ、そうですか。平生あんまり御無沙汰をしているので、た

まにはお詫^{わび}に上らないと悪いとでも思ったのでしよう」

「いえそうじゃないの」

津田は夫人の言葉を聴^きいた後で、すぐ次の嘘^{うそ}を出した。

「しかしあいつに用のある訳もないでしょう」

「ところがあつたんです」

「へええ」

津田はこう云つたなりその後^{あと}を待った。

「何の用だかあてて御覧なさい」

津田は空^{そら}つ惚^{とぼ}けて、考える真^ま似^ねをした。

「そうですね、お秀の用事というと、——さあ何でしようかし

ら」

「分りませんか」

「ちよつとどうも。——元来私とお秀とは兄妹きょうだいでいながら、だいぶん質たちが違いますから」

津田はここで余計な兄妹関係をわざと仄ほのめかした。それは事の来る前に、自分を遠くから弁護しておくためであつた。それから自分の言葉を、夫人がどう受けてくれるか、その反響をちよつと聴いてみるためであつた。

「少し理窟りくつツぽいのね」

この一語を聞くや否や、津田は得えたり賢かしこしと虚きよにつけ込ん

だ。

「あいつの理窟と来たら、兄の私でさえ悩まされるくらいですもの。誰だって、とてもおとなしく辛抱して聴きいていられたものじゃございません。だから私はあいつと喧嘩けんかをすると、いつでも好い加減にして投げてしまいます。するとあいつは好い気になって、勝ったつもりか何かで、自分の都合の好い事ばかりを方々へ行つて触れ散らかすのです」

夫人は微笑した。津田はそれを確かに自分の方に同情をもった微笑と解釈する事ができた。すると夫人の言葉が、かえつて彼の思わくとは逆の見当けんとうを向いて出た。

「まさかそうでもないでしょうけれどもね。――しかしなかなか筋の通った好い頭をもった方じゃありませんか。あたしあの方は好^{すき}よ」

津田は苦笑した。

「そりやお宅なんぞへ上って、むやみに地^じ金^{かね}を出すほどの馬鹿でもないでしょうがね」

「いえ正直よ、秀子さんの方が」

誰よりお秀が正直なのか、夫人は説明しなかった。

津田の好奇心は動いた。想像もほぼついた。けれどもそこへ折れ曲って行く事は彼の主意に背いた。彼はただ夫人対お秀の關係を掘り返せばよかった。病氣見舞を兼た夫人の用向も、無論それについての懇談にきまっていた。けれども彼女にはまた彼女に特有な趣があつた。時間に制限のない彼女は、頼まれるまでもなく、機会さえあれば、他の内輪に首を突ツ込んで、なにかと眼下、ことに自分の氣に入つた眼下の世話を焼きたがる代りに、到るところでまた道楽本位の本性を露わして平氣であつた。或時の彼女はむやみに急いて事を纏めようとあせつた。そうかと思うと、ある時の彼女は、また正反對であつた。わざわざべんべんと

引ッ張るところに、さも興味でもあるらしい様子を見せてすま
していた。鼠ねずみを弄もてあそぶ猫のようなこの時の彼女の態度が、たとい傍はた
から見てどうあろうとも、自分では、閑散な時間に曲折した波瀾はらん
を与えるために必要な優者の特権だと解釈しているらしかった。
この手にかかった時の相手には、何よりも辛防しんぼうが大切であつた。
その代り辛防をし抜いた御礼はきつと来た。また来る事をもつて
彼女は相手を奨励した。のみならずそれを自分の倫理上の誇りと
した。彼女と津田の間に取り換わされたこの默契もつけいのために、津田
の蒙かぶつた重大な損失が、今までにたった一つあつた。その点で彼
女が腹の中でいかに彼に対する責任を感じているかは、伶俐れいりな津

田の見逃すところではなかった。何事にも夫人の御意を主眼に置いて行動する彼といえども、暗にこの強味だけは恃みにしていた。しかしそれはいざという万一の場合に保留された彼の利器に過ぎなかった。平生の彼は甘んじて猫の前の鼠となつて、先方の思う通りにじやらされていなければならなかった。この際の夫人もなかなか要点へ来る前に時間を費やした。

「昨日秀子さんが来たでしょう。ここへ」

「ええ。参りました」

「延子さんも来たでしょう」

「ええ」

「今日は？」

「今日はまだ参りません」

「今にいらっしゃるんでしよう」

津田にはどうだか分らなかった。先刻^{さっき}来るなという手紙を出した事も、夫人の前では云えなかった。返事を受け取らなかった勝手違も、実は氣にかかっていた。

「どうですかしら」

「いらっしゃるか、いらっしゃらないか分らないの」

「ええ、よく分りません。多分来ないだろうとは思うんですが」

「大変冷淡じゃありませんか」

夫人は嘲あざわけるような笑い方をした。

「私ですか」

「いいえ、両方がよ」

苦笑した津田が口を閉じるのを待って、夫人の方で口を開いた。

「延子さんと秀子さんは昨日きのうここで落ち合ったでしょう」

「ええ」

「それから何かあったのね、変な事が」

「別に……」

「空そらッ惚とぼけちゃいけません。あつたらあつたと、判然はつきりおっしやい

な、男らしく」

夫人はようやく持前の言葉遣いと特色とを、發揮し出した。津田は挨拶に困った。黙って少し様子を見るよりほかに仕方がないと思った。

「秀子さんをさんざん苛めたって云うじゃありませんか。二人して」

「そんな事があるものですか。お秀の方が怒ってぶんぶん腹を立てて帰って行っただのです」

「そう。しかし喧嘩はしたでしょう。喧嘩といったって殴り合じゃないけれども」

「それだつてお秀のいふような大袈裟おおげさなものじゃないんです」

「かも知れないけれども、多少にしろ有つたには有つたんですね」

「そりゃちよつとした行違いきちがいならございました」

「その時あなた方は二人がかりで秀子さんを苛いじめたでしょう」

「苛やさめやしません。あいつが耶蘇教ヤソキョウのような気焰きえんを吐はいただけです」

「とにかくあなたがたは二人、向うは一人だつたに違ちがないでしょう」

「そりゃそうかも知れません」

「それ御覧なさい。それが悪いじゃありませんか」

夫人の断定には意味も理窟りくつもなかった。したがってどこが悪いんだか津田にはいっこう通じなかった。けれどもこういう場合にこんな風になって出て来る夫人の特色は、けっして逆さからえないものとして、もう津田の頭に叩たたき込まれていた。素直すなおに叱なぐられているよりほかに彼の途みちはなかった。

「そういうつもりでもなかったんですけれども、自然いきおいの勢いきおいで、いつかそうなってしまったんでしよう」

「でしようじゃいけません。ですと判然はっきりおっしゃい。いったいこういうと失礼なようですが、あなたがあんまり延子さんを大事に

なさり過ぎるからよ」

津田は首を傾けた。

百三十三

伶俐^{れいり}な性分に似合わず夫人対お延の關係は津田によく呑^のみ込めていなかった。夫人に津田の手前があるように、お延にも津田におく氣^{きが}兼^ねがあつたので、それが真^ま向^{とも}に双方を了解できる聡明^{そうめい}な彼の頭を曇らせる原因になった。女の挨拶^{あいさつ}に相当の割引をして見る彼も、そこにはつい氣がつかなかったため、彼は自分の前でする

夫人のお延評を真に受けると同時に、自分の耳に聴こえるお延の夫人評もまた疑がわなかった。そうしてその評は双方共に美しくいものであった。

二人の女性が二人だけで心の内に感じ合いながら、今までそれを外に現わすまいとのみ力めて来た微妙な軋轢が、必然の要求に逼られて、しだいしだいに晴れ渡る靄のように、津田の前に展開されなければならなかったのはこの時であった。

津田は夫人に向って云った。

「別段大事にするほどの女房でもありませんから、その辺の御心配は御無用です」

「いいえそうではないようですよ。世間じゃみんなそう思ってますよ」

世間という仰山ぎょうざんな言葉が津田を驚ろかせた。夫人は仕方なしに説明した。

「世間って、みんなの事よ」

津田にはそのみんなさえ明瞭めいりょうに意識する事ができなかった。しかし世間だのみんなだのという誇張した言葉を強める夫人の意味は、けっして推察に困難なものではなかった。彼女はどうしてもその点を津田の頭たたに叩き込もうとするつもりしかかった。津田はわざと笑って見せた。

「みんなって、お秀の事なんでしょう」

「秀子さんは無論そのうちの一人よ」

「そのうちの一人でそうしてまた代表者なんでしょう」

「かも知れないわ」

津田は再び大きな声を出して笑った。しかし笑った後ですぐ気がついた。悪い結果になって夫人の上に反響して来たその笑いはもう取り返せなかった。文句を云わずに伏罪^{ふくざい}する事の便宜^{べんぎ}を悟った彼は、たちまち容^かちを改^ためた。

「とにかくこれからよく気をつけます」

しかし夫人はそれでもまだ満足しなかった。

「秀子さんばかりだと思つと間違ひですよ。あなたの叔父さんや叔母さんも、同^{おん}なじ考えなんだからそのつもりでいらつしやい」

「はあそうですか」

藤井夫婦の消息が、お秀の口から夫人に伝えられたのも明らかであつた。

「ほかにもまだあるんです」と夫人がまた付け加えた。津田はただ「はあ」と云つて相手の顔を見た拍子^{ひょうし}に、彼の予期した通りの言葉がすぐ彼女の口から洩^もれた。

「実を云うと、私も皆さんと同なじ意見ですよ」

権威でもあるような調子で、最後にこう云つた夫人の前に、

彼はもちろん反抗の声を揚げる勇気を出す必要を認めなかった。しかし腹の中では同時に妙な思おもわく違ちがいに想おもいいたった。彼は疑った。

「何でこの人が急にこんな態度になったのだろう。自分のお延を鄭重ていちょうに取扱い過ぎるのが悪いといって非難する上に、お延自身をもその非難のうちに含めているのではなからうか」

この疑いは津田にとって全く新らしいものであった。夫人の本意に到着する想像上の過程を描き出す事さえ彼には困難なくらい新らしいものであった。彼はこの疑問に立ち向う前に、まだ自分の頭の中に残っている一つの質問を掛けた。

「岡本さんでも、そんな評判があるんでしょか」

「岡本は別よ。岡本の事なんか私の関係するところじゃありません」

夫人がすましてこう云い切った時、津田は思わずおやと思っ
た。「じゃ岡本とあなたの方は別つこだったんですか」という次
の問が、自然の順序として、彼の咽喉^{のど}まで出かかった。

実を云うと、彼は「世間」の取沙汰^{とりざた}通り、お延を大事にするの

ではなかった。誤解^{ごかい}交^{まじ}りのこの評判が、どこからどうして起った

かを、他^{ひと}に説明しようとするれば、ずいぶん複雑^{てすう}な手数がかかるに

しても、彼の頭の中にはちゃんとした明晰^{めいせき}な観念があつて、それ

を一々掌たなごころに指さす事のできるほどに、事実の縞柄しまがらは解とつていた。

第一の責任者はお延その人であつた。自分がどのくらい津田から可愛がられ、また津田をどのくらい自由にしているかを、最も曲折の多い角度で、あらゆる方面に反射させる手際をいたるところに發揮して憚はばからないものは彼女に違ちがひなかつた。第二の責任者はお秀であつた。すでに一種の誇張がある彼女の眼を、一種の嫉しつ妬とが手伝とつて染めた。その嫉妬がどこから出て来るのか津田は知らなかつた。結婚後始めて小姑こいもつとという意味を悟つた彼は、せつかく悟つた意味を、解釈のできないために持て余した。第三の責任者は藤井の叔父夫婦であつた。ここには誇張も嫉妬しつともない代り

に、浮華ふかに対する嫌悪けんおがあまり強く働らき過ぎた。だから結果はやはり誤解と同じ事に帰着した。

百三十四

津田にはこの誤解を誤解として通しておく特別な理由があつた。そうしてその理由はすでに小林の看破かんぱした通りであつた。だから彼はこの誤解から生じやすい岡本の好意を、できるだけ自分の便宜べんぎになるように保留しようと試みた。お延を鄭寧ていねいに取扱うのは、つまり岡本家の機嫌きげんを取るのと同じ事で、その岡本と吉川と

は、兄弟同様に親しい間柄である以上、彼の未来は、お延を大事にすればするほど確かになって来る道理であつた。利害の論理ロジックに抜目のない機敏さを誇りとする彼は、吉川夫妻が表向おもてむきの媒妁人ばいしゃくにんとして、自分達二人の結婚に関係してくれた事実を、単なる名誉として喜こぶほどの馬鹿ではなかつた。彼はそこに名誉以外の重大な意味を認めたのである。

しかしこれはむしろ一般的の内情に過ぎなかつた。もう一皮剥むいて奥へ入ると、底にはまだ底があつた。津田と吉川夫人とは、事件がここへ来るまでに、他人の関知しない因果いんがでもう結びつけられていた。彼らにだけ特有な内外の曲折を経過して来た彼ら

は、他人より少し複雑な眼をもつて、半年前に成立したこの新しい関係を眺めなければならなかった。

有体ありていにいうと、お延と結婚する前の津田は一人の女を愛していた。そうしてその女を愛させるように仕向けたものは吉川夫人であつた。世話好きな夫人は、この若い二人を喰つつけるような、また引き離すような閑手段かんしゅだんを縦ほしいままに弄ろうして、そのたびにまごまごしたり、または逆のぼせ上あがつたりする二人を眼の前に見て楽しんだ。けれども津田は固く夫人の親切を信じて疑がわなかった。夫人も最後きたに来るべき二人の運命を断言して憚はばからなかった。のみならず時機の熟したところを見計つて、二人を永久に握手させようと

企てた。ところがいざという間際になって、夫人の自信はみごとに鼻柱を挫かれた。津田の高慢も助かるはずはなかった。夫人の自信と共に一棒に撲殺された。肝心の鳥はふいと逃げたぎり、ついに夫人の手に戻って来なかった。

夫人は津田を責めた。津田は夫人を責めた。夫人は責任を感じた。しかし津田は感じなかった。彼は今日までその意味が解らずに、まだ五里霧中に彷徨していた。そこへお延の結婚問題が起った。夫人は再び第二の恋愛事件に関係すべく立ち上った。そうして夫と共に、表向の媒妁人として、綺麗な段落をそこへつけた。

その時の夫人の様子を細かに観察した津田はなるほどと思っ

た。

「おれに対する賠償ばいしょうの心持だな」

彼はこう考えた。彼は未来の方針を大体の上においてこの心持から割り出そうとした。お延と仲善なかよく暮す事は、夫人に対する義務の一端だと思い込んだ。喧嘩けんかさえしなければ、自分の未来に間違はあるまいという鑑定さえ下した。

こういう心得に万遺筭ばんいさんのあるはずはないと初手しよてからきめてかかつて吉川夫人に対している津田が、たとい遠廻しにでもお延を非難する相手の匂においを嗅かぎ出した以上、おやと思うのは当然であつた。彼は夫人に気に入るように自分の立場を改める前に、ま

ず確かめる必要があつた。

「私がお延を大事にし過ぎるのが悪いとおっしゃるほかに、お延自身に何か欠点でもあるなら、御遠慮なく忠告していただきたいと思います」

「実はそれで上つたのよ、今日は」

この言葉を聴いた時、津田の胸は夫人の口から何が出て来るかの好奇心に充ちた。夫人は語を継いだ。

「これは私でない^{あたし}と面^{めん}と向つて誰もあなたに云えない事だと思つから云いますがね。——お秀さんに智慧^{ちえ}をつけられて来たと思つては困りますよ。また後でお秀さんに迷惑をかけるようだと、私

がすまない事になるんだから、よござんすか。そりやお秀さんもその事でわざわざ来たには違ちがいのよ。しかし主意は少し違ちがうんです。お秀さんは重おもに京都の方を心配しているの。無論京都はあなたから云えばお父さんだから、けっして疎略にはできませんまい。ことに良人うちでもああしてお父さんにあなたの世話を頼まれていて見ると、黙もくって放ほうつてもおく訳にも行かないでしょう。けれどもね、つまりそっちは枝で、根は別にあるんだから、私は根から先へ療治した方が遥はるかに有効だと思っんです。でないと今度こんだのような行違しぎちがいがまたきつと出て来ますよ。ただ出て来るだけならよござんすけれども、そのたんびにお秀さんがやって来るようだ

と、私も口を利く^きのに骨が折れるだけですからね」

夫人のいう禍^{わざわい}の根というのはたしかにお延の事に違なかつた。ではその根をどうして療治しようというのか。肉体上の病氣でもない以上、離別か別居を除いて療治という言葉はたやすく使えるものでもないのにと津田は考えた。

百三十五

津田はやむをえず訊^きいた。

「要するにどうしたらいいんです」

夫人はこの子供らしい質問の前に母らしい得意の色を見せた。けれどもすぐ要点へは来なかった。彼女はそこだと云わぬばかりにただ微笑した。

「いったいあなたは延子さんをどう思っているの」

同じ問が同じ言葉で昨日きのうかけられた時、お秀に何と答えたかを津田は思い出した。彼は夫人に対する特別な返事を用意しておかなかった。その代り何とでも答えられる自由な地位にあった。腹ふく蔵ぞうのないところをいうと、どうなりとあなたの好きなお返事を致しますというのが彼の胸中であつた。けれども夫人の頭にあるその好きな返事は、全く彼の想像のほかにあつた。彼はへどもどす

るうちににやにやした。勢い夫人は一步前へ進んで来る事になつた。

「あなたは延子さんを可愛がっていらつしやるでしょう」

ここでも津田の備えは手薄であつた。彼は冗談じょうだんはんぶん半分に夫人をあしらう事なら幾通いくとおりでもできた。しかし真面目まじめに改まつた、責任のある答を、夫人の氣に入るような形で与えようとすると、その答はけつしてそうすら出来なかつた。彼にとって最も都合の好い事で、また最も都合の悪い事は、どっちにでも自由に答えられる彼の心の状態であつた。というのは、事実彼はお延を愛してもいたし、またそんなに愛してもいなかつたからである。

夫人はいよいよ真剣らしく構えた。そうして二度目の質問をのっぴきさせぬ調子で掛けた。

「私^{あたし}とあなただけの間の秘密にしておくから正直に云つとしまいなさい。私の聴^ききたいのは何でもありません。ただあなたの思つた通りのところを一口伺えばそれでいいんです」

見当^{けんとう}の立たない津田はいよいよ迷^{まご}ついた。夫人は云つた。

「あなたもずいぶんじれったい方^{かた}ね。云える事は男らしく、さつさと云つちまったらいいでしょう。そんなむずかしい事を誰も訊^きいていやしないんだから」

津田はとうとう口を開くべく余儀なくされた。

「お返事ができない訳でもありませんけれども、あんまり問題が漠然ばくぜんとしているものですから……」

「じゃ仕方がないから私の方で云いましょうか。よござんすか」
「どうぞそう願います」

「あなたは」と云いかけた夫人はこの時ちよつと言葉を切つてまた継ついだ。

「本当によござんすか。——あたしはこういう無遠慮しやうらんな性分しやうぶんだから、よく自分の思ったままをずばずば云つちまつた後あとで、取り返しのつかない事をしたと後悔する場合がよくあるんですが」

「なに構かまいません」

「でももしか、あなたに怒られるとそれっきりですからね。後でいくら詫^{あや}まっても追^{おっ}つかないなんて馬鹿はしたくありませんもの」

「しかし私の方で何とも思わなければそれでいいでしょう」

「そこさえ確かなら無論いいのよ」

「大丈夫です。偽^{うそ}だろうが本当だろうが、奥さんのおっしゃる事ならけっして腹は立てませんから、遠慮なさらずに云つて下さい」

すべての責任を向うに背負^{しよ}わせてしまう方が遥^{はる}かに楽だと考えた津田は、こう受け合った後で、催促するように夫人を見た。何

度となく駄目^{だめ}を押して保険をつけた夫人はその時ようやく口を開いた。

「もし間違ったら御免遊ばせよ。あなたはみんなが考えている通り、腹の中ではそれほど延子さんを大事にしていらっしゃらないでしょう。秀子さんと違って、あたしは疾^とうからそう睨^{にら}んでいるんですが、どうです、あたしの観測はあたりませんかね」

津田は何ともなかった。

「無論です。だから先刻^{さつき}申し上げたじゃありませんか。そんなにお延を大事にしちゃいけませんて」

「しかしそれは御挨拶^{ごあいさつ}におっしゃっただけね」

「いいえ私は本当のところを云ったつもりです」

夫人は断々^{だんだんこ}乎として首肯^{うけが}わなかった。

「ごまかしつこなしよ。じゃ後^{あと}を云ってもよござんすか」

「ええどうぞ」

「あなたは延子さんをそれほど大事にしていらっしゃらないくせに、表ではいかにも大事にしているように、他^{ひと}から思われよう思われようとかかっているじゃありませんか」

「お延がそんな事でも云ったんですか」

「いいえ」と夫人はきっぱり否定した。「あなたが云ってるだけよ。あなたの様子なり態度なりがそれだけの事をちゃんとあたし

に解るようにして下さるだけよ」

夫人はそこでちよつと休んだ。それから後を付けた。

「どうですあたったでしょう。あたしはあなたがなぜそんな体裁ていさいを作っているんだか、その原因までちゃんと知ってるんですよ」

百三十六

津田は今日までこういう種類の言葉をまだ夫人の口から聴きいた事がなかった。自分達夫婦の仲を、夫人が裏側からどんな眼で観察しているだろうという問題について、さほど神経を遣つかっていないな

かった彼は、ようやくそこに気がついた。そんならそうと早く注意してくればいいのと思ひながら、彼はとにかく夫人の鑑定なり料簡りょうけんなりをおとなしく結末まで聴くのが上分別じやうぶんべつだと考えた。

「どうぞ御遠慮なく何でもみんな云つて下さい。私の向後こうごの心得にもなる事ですから」

途中まで来た夫人は、たとい津田から誘われなくても、もうそこで止まると訳に行かないので、すぐ残りのものを津田の前に投げ出した。

「あなたは良人うちや岡本の手前があるので、それであんなに延子さんを大事になさるんでしょう。もっと露骨なのがお望みなら、ま

だ露骨にだって云えますよ。あなたは表向延子さんおもてむぎを大事にするような風をなさるのね、内側はそれほどでなくつても。そうでしょう」

津田は相手の観察が真逆まさかこれほど皮肉な点まで切り込んで来たいようとは思わなかった

「私の性質なり態度なりが奥さんにそう見えますか」

「見えますよ」

津田は一刀で斬られたと同じ事であった。彼は斬られた後あとでその理由を訊きいた。

「どうして？ どうしてそう見えるんですか」

「隠さないでもいいじゃありませんか」

「別に隠すつもりでもないんですが……」

夫人は自分の推定が十の十まであたったと信じてかかった。心
の中でその六だけを首肯^{うけが}った津田の挨拶^{あいさつ}は、自然どこかに曖昧^{あいまい}な
節^{ふし}を残さなければならなかった。それがこの場合誤解の種になる
のは見やすい道理であつた。夫人はどこまでも同じ言葉を繰り返
して、津田を自分の好きな方角へのみ追い込んだ。

「隠しちゃ駄目よ。あなたが隠すと後が云えなくなるだけだか
ら」

津田は是非その後を聴きたかった。その後を聴こうとすれば、

夫人の認定を一から十まで承知するよりほかに仕方がなかった。夫人は「それ御覧なさい」と津田をやりこめた後で歩を進めた。

「あなたにはてんから誤解があるのよ。あなたは私を良人^{わたし}といっしょに見ているんでしよう。それから良人と岡本をまたいっしょに見ているんでしよう。それが大間違よ。岡本と良人をいっしょに見るのはまだしも、私を良人や岡本といっしょにするのはおかしいじゃないませんか、この事件について。学問をした方にも似合わないのねあなたも、そんなところへ行くと」

津田はようやく夫人の立場を知る事ができた。しかしその立場の位置及びそれが自分に対してどんな関係になっているのかまだ

解らなかつた。夫人は云つた。

「解り切つてゐるじゃありませんか。私だけはあなたと特別の關係があるんですもの」

特別の關係という言葉のうちに、どんな内容が盛られているか、津田にはよく解つた。しかしそれは目下の問題ではなかつた。なぜと云えば、その特別な關係をよく呑み込んでいればこそ、今日までの自分の行動にも、それ相当な一種の色と調子を与えて来たつもりだと彼は信じていたのだから。この特別な關係が夫人をどう支配しているか、そこをもっと明らかに突きとめたところ、新らしい問題は始めて起るのだと気がついた彼は、ただ

自分の誤解を認めるだけではすまされなかった。

夫人は一口に云い払った。

「私はあなたの同情者よ」

津田は答えた。

「それは今までついぞ疑^{うたぐ}って見た例^{ためし}もありません。私^{わたくし}は信じ切っています。そうしてその点で深くあなたに感謝しているものです。しかしどういう意味で？　どういう意味で同情者になって下さるつもりなんですか、この場合。私は迂^う潤^{かつ}ものだから奥さんの意味がよく呑^のみ込めません。だからもつと判^は然^っり話^きして下さい」

「この場合に同情者として私^{わたし}があなたにして上げる事がただ一つ

あると思うんです。しかしあなたは多分——」

夫人はこれだけ云って津田の顔を見た。津田はまた焦^じらされるのかと思った。しかしそうでないと断言した夫人の問は急に変わった。

「私の云う事を聴^ききますか、聴きませんか」

津田にはまだ常識が残っていた。彼はここへ押しつめられた何^{なん}人も考^{びと}えなければならぬ事を考えた。しかし考えた通りを夫人の前で公然明言する勇氣はなかった。勢い彼の態度は煮え切らないものであった。聴くとも聴かないとも云いかねた彼は躊躇^{ちゅうちゅう}した。

「まあ云つて見て下さい」

「まあじゃいけません。あなたがもつと判切はっきりしなくっちゃ、私だつて云う気にはなれません」

「だけれども——」

「だけれどもでも駄目だめよ。聴きますと男らしく云わなくっちゃ」

百三十七

どんな注文が夫人の口から出るか見当けんとうのつかない津田は、ひそかに恐れた。受け合つた後で撤回しなければならぬような窮地

に陥おちいればそれぎりであつた。彼はその場合の夫人を想像してみた。地位から云つても、性質から見ても、また彼に対する特別な関係から判断しても、夫人はけつして彼を赦ゆるす人ではなかつた。永久夫人の前に赦ゆるされない彼は、あたかも蘇生の活手段を奪われた仮死けいがいの形骸と一般であつた。用心深い彼は生還のぞみの望しかとしな
い危地に入り込む勇氣をもたなかつた。

その上普通の人と違って夫人はどんな難題を持ち出すか解らなかつた。自由の利き過ぎる境遇、そこに長く住み馴なれた彼女の眼には、ほとんど自分の無理というものが映らなかつた。云えばたいていの事は通つた。たまに通らなければ、意地で通すだけで

あつた。ことに困るのは、自分の動機を明瞭に解剖して見る必要に逼られない彼女の余裕であつた。余裕というよりもむしろ放漫な心の持方であつた。他の世話を焼く時にする自分の行動は、すべて親切と好意の発現で、そのほかに何の私もないものと、てんからきめてかかる彼女に、不安の来るはずはなかつた。自分の批判はほとんど当初から働かないし、他の批判は耳へ入らず、また耳へ入れようとするものもないとなると、ここへ落ちて来るのは自然の結果でもあつた。

夫人の前に押しつめられた時、津田の胸に、これだけの考えが蜿蜒り廻つたので、埒はますます開かなかつた。彼の様子を見た

夫人は、ついに笑い出した。

「何をそんなにむずかしく考えてるんです。おおかた私^{わたし}がまた無理でも云い出すんだと思ってるんでしょう。なんぼ私だってあなたにできっこないような不法は考えやしませんよ。あなたがやろうとさえ思えば、訳なくできる事なんです。そうして結果はあなたの得になるだけなんです」

「そんなに雑作^{ぞうさ}なくできるんですか」

「ええまあ笑談^{しょうだん}みたいなものです。ごくごく大袈裟^{おおげさ}に云ったところで、面白^{いたずら}半分の悪戯^{いたずら}よ。だから思い切ってやるとおっしゃい」

津田にはすべてが謎^{なぞ}であった。けれどもたかが悪戯^{いたずら}ならという

気がようやく彼の腹に起った。彼はついに決心した。

「何だか知らないがまあやってみましょう。話してみて下さい」

しかし夫人はすぐその悪戯の性質を説明しなかった。津田の保証を掴んだ後で、また話題を変えた。ところがそれは、あらゆる意味で悪戯とは全くかけ離れたものであった。少くとも津田には重大な関係をもっていた。

夫人は下の^{しも}のような言葉で、まずそれを二人の間に紹介した。

「あなたはその後清子^{きよこ}さんにお会いになって」

「いいえ」

津田の少し吃驚^{びっくり}したのは、ただ問題の唐突^{とつとつ}なばかりではなかつ

た。不意に自分をふり棄てた女の名が、逃がした責任を半分背負っている夫人の口から急に洩れたからである。夫人は語を継いだ。

「じゃ今どうしていらっしゃるか、御存知ないでしょう」

「まるで知りません」

「まるで知らなくっていいの」

「よくないったって仕方がないじゃありませんか。もうよそへ嫁に行ってしまったんだから」

「清子さんの結婚の御披露の時にあなたはおいでになったんでしたかね」

「行きません。行こうたってちよつと行き悪いにくですからね」

「招待状は来たの」

「招待状は来ました」

「あなたの結婚の御披露の時に、清子さんはいらっしやらなかったよね」

「ええ来やしません」

「招待状は出したの」

「招待状だけは出しました」

「じゃそれっきりのね、両方共」

「無論それっきりです。もしそれっきりでなかったら問題ですも

の」

「そうね。しかし問題にも寄り切りでしょう」

津田には夫人の云う意味がよく解らなかった。夫人はそれを説明する前にまたほかの道へ移った。

「いったい延子さんは清子さんの事を知ってるの」

津田は塞^{つか}えた。小林を研究し尽した上でなければ確^{しか}とした返事は与えられなかった。夫人は再び訊^きき直した。

「あなたが自分で話した事はなくって」

「ありやしません」

「じゃ延子さんはまるで知らずにいるのね、あの事を」

「ええ、少くとも私からは何にも聴^きかされちゃいません」

「そう。じゃ全く無邪気なのね。それとも少しは癪^{かん}づいているところがあるの」

「そうですね」

津田は考えざるを得なかった。考えても断案は控えざるを得なかった。

百三十八

話しているうちに、津田はまた思いがけない相手の心理に突き

当った。今まで清子の事をお延に知らせないでおく方が、自分の都合でもあり、また夫人の意志でもあるとばかり解釈して疑わなかった彼は、この時始めて気がついた。夫人はどう考えてもお延にそれを気ど^けつていて貰^{もら}いたいらしかったからである。

「たいていの見当はつきそうなものですがね」と夫人は云った。

津田はお延の性質を知っているだけになお答え悪^{にく}くなった。

「そこが分らないといけないんですか」

「ええ」

津田はなぜだか知らなかった。けれども答えた。

「もし必要なら話しても好ござんすが……」

夫人は笑い出した。

「今さらあなたがそんな事をしちゃぶち壊しよ。あなたはしまいまで知らん顔をしていなくっちゃ」

夫人はこれだけ云って、言葉に区切くぎりを付けた後で、新たに直した。

「私の判断わたしを云いましょうか。延子さんはああいう伶俐りこうな方かただから、もうきつと感づいているに違ちがないと思うのよ。何、みんな判るはずもないし、またみんな判っちゃこつちが困るんです。判ったようでもた判らないようなのが、ちようど持って来いという一番結構ころあいな頃合ころあいなんですからね。そこで私の鑑定から云うと、今の

延子さんは、都合よく私のお誂え通りのところにいらっしやるに
違ないのよ」

津田は「そうですか」というよりほかに仕方がなかった。しかしそういう結論を夫人に与える材料はほとんどなかろうにと、腹の中では思った。しかるに夫人はあると云い出した。

「でなければ、ああ虚勢を張る訳がありませんもの」

お延の態度を虚勢と評したのは、夫人が始めてであつた。この二字の前に怪訝けげんな思いをしなければならなかつた津田は、一方から見て、またその皮肉を第一に首肯うけがしなければならぬ人であつた。それにもかかわらず彼は躊躇ちゆうちよなしに応諾を与える事ができな

かった。夫人はまた事もなげに笑った。

「なに構わないのよ。万一全く気がつかずにいるようなら、その時はまたその時でこっちにいくらでも手があるんだから」

津田は黙ってその後を待った。^{あと}すると後は出ずに、急に清子の方へ話が逆転して来た。

「あなたは清子さんにまだ未練がおりでしょう」

「ありません」

「ちつとも？」

「ちつともありません」

「それが男の嘘うそというものです」

嘘を云うつもりでもなかった津田は、全然本当を云っているのでもないという事に気がついた。

「それでも未練があるように見えますか」

「そりゃ見えないわ、あなた」

「じゃどうしてそう鑑定なさるんです」

「だからよ。見えないからそう鑑定するのよ」

夫人の論議は普通のそれとまるで反対であつた。と云つて、支離滅裂はどこにも含まれていなかった。彼女は得意にそれを引き延ばした。

「ほかの人には外側も内側も同^{おん}なじとしか見えないでしょう。し

かし私^{わたし}には外側へ出られないから、仕方なしに未練が内へ引込^{ひっこ}んでいるとしか考えられませんか」

「奥さんは初手^{しよて}から私に未練があるものとして、きめてかかっていらっしやるから、そうおっしやるんでしょう」

「きめてかかるのにどこに無理がありますか」

「そう勝手に認定されてしまっちゃたまりません」

「私がいつ勝手に認定しました。私のは認定じゃありませんよ。事実ですよ。あなたと私だけに知れている事実を云うのですよ。

事実ですもの、それをちゃんと知ってる私に隠せる訳がないじゃありませんか、いくらほかの人を騙^{だま}す事ができたって。それもあ

なただけの事実ならまだしも、二人に共通な事実なんだから、両方で相談の上、どこかへ埋めちまわないうちは、記憶のある限り、消えっこないでしょう」

「じゃ相談ずくでここで埋めちゃどうです」

「なぜ埋めるんです。埋める必要がどこかにあるんですか。それよりなぜそれを活かして使わないんです」

「活かして使う？ 私はこれでもまだ罪悪には近寄りたくありません」

「罪悪とは何です。そんな手荒な事をしろと私がいつ云いました」

「しかし……」

「あなたはまだ私の云う事をしまいまで聴かないじゃありませんか」

津田の眼は好奇心をもつて輝やいた。

百三十九

夫人はもう未練のある証拠を眼の前に突きつけて津田を抑えたと同じ事であつた。自白後に等しい彼の態度は二人の仕合しあいに一段落をつけたように夫人を強くした。けれども彼女は津田が最初に

考えたほどこの点において独断的な暴君ではなかった。彼女は思ったより細緻さいちな注意を払って、津田の心理状態を観察しているらしかった。彼女はその実券じっけんを、いったん勝った後あとで彼に示した。

「ただ未練未練って、雲を掴つかむような騒ぎをやるんじゃないやありませんよ。私わたしには私でまたちゃんと握ってるところがあるんですからね。それでもあなたの未練をこんなものだといって他ひとに説明する事ができるつもりでいるんですよ」

津田には何が何だかさっぱり訳が解らなかった。

「ちよっと説明して見て下さいませんか」

「お望みなら説明してもよござんす。けれどもそうするとつまりあなたを説明する事になるんですよ」

「ええ構いません」

夫人は笑い出した。

「そう他の云う事が通じなくっちゃ困るのね。現在自分がちゃんとそこに控えていながら、その自分が解らないで、他に説明して貰^{もら}うなんてえのは馬鹿^{ばか}氣^げているじゃありませんか」

はたして夫人の云う通りなら馬鹿氣^{ばか}にいるに違なかつた。津田は首を傾けた。

「しかし解りませんよ」

「いいえ解ってるのよ」

「じゃ気がつかないんでしょう」

「いいえ気もついているのよ」

「じゃどうしたんでしょう。——つまり私が隠している事にでも帰着するんですか」

「まあそうよ」

津田は投げ出した。ここまで追いつめられながら、まだ隠し立だてをしようとはさすがの自分にも道理と思えなかった。

「馬鹿でも仕方ありません。馬鹿の非難は甘んじて受けますから、どうぞ説明して下さい」

夫人は微かに溜息を吐いた。

「あああ張合がないのね、それじゃ。せっかく私が丹精して拵えて来て上げたのに、肝心のあなたがそれじゃ、まるで無駄骨を折ったと同然ね。いつそ何にも話さずに帰ろうか知ら」

津田は迷宮に引き込まれるだけであつた。引き込まれると知りながら、彼は夫人の後を追かけなければならなかつた。そこには自分の好奇心が強く働いた。夫人に対する義理と気兼ねも、けつして軽い因子ではなかつた。彼は何度も同じ言葉を繰り返して夫人の説明を促がした。

「じゃ云いましょう」と最後に応じた時の夫人の様子はむしろ得

意であつた。「その代り訊ききますよ」と断つた彼女は、はたして劈頭へきとうに津田の毒氣どつきを抜いた。

「あなたはなぜ清子さんと結婚なさらなかったんです」

問は不意に來た。津田はにわかに息塞いきづまつた。黙っている彼を見た上で夫人は言葉を改めた。

「じゃ質問を易かえましょう。——清子さんはなぜあなたと結婚なさらなかったんです」

今度は津田が響の聲に應ずるごとくに答えた。

「なぜだかちつとも解らないんです。ただ不思議なんです。いくら考えても何にも出て來ないんです」

「突然せき関さんへ行っちゃったのね」

「ええ、突然。本当を云うと、突然なんてものは疾とつくの昔むかしに通とり越こしてましたね。あつと云って後うしろを向いたら、もう結婚してたんです」

「誰があつと云ったの」

この質問ほど津田にとって無意味なものはなかった。誰があつと云おうと余計なお世話としか彼には見えなかった。然しかるに夫人はそこへとまっつて動かなかった。

「あなたがあつと云ったんですか。清子さんがあつと云ったんですか。あるいは両方であつと云ったんですか」

「さあ」

津田はやむなく考えさせられた。夫人は彼より先へ出た。

「清子さんの方は平気だったんじゃないやありませんか」

「さあ」

「さあじゃ仕方がないわ、あなた。あなたにはどう見えたのよ、その時の清子さんが。平気には見えなかったの」

「どうも平気のようでした」

夫人は輕蔑けいべつの眼を彼の上に向けた。

「ずいぶん気楽ね、あなたも。清子さんの方が平気だったから、あなたがあつと云わせられたんじゃないやありませんか」

「あるいはそうかも知れません」

「そんならその時のあつゝの始末はどうつける気なの」

「別につけようがないんです」

「つけようがないけれども、実はつけたいんでしょう」

「ええ。だからいろいろ考えたんです」

「考えて解ったの」

「解らないんです。考えれば考えるほど解らなくなるだけなんです」

「それだから考えるのはもうやめちまったの」

「いいえやっぱりやめられないんです」

「じゃ今でもまだ考えてるのね」

「そうです」

「それ御覧なさい。それがあなたの未練じゃありませんか」
夫人はとうとう津田を自分の思うところへ押し込めた。

百四十

準備はほぼ出来上った。要点はそろそろ津田の前に展開されなければならなかった。夫人は機を見てしだいにそこへ入って行った。

「そんならもつと男らしくしちやどうです」という漠然^{ばくぜん}たる言葉が、最初に夫人の口を出た。その時津田はまたかと思った。先刻^{さつき}から「男らしくしろ」とか「男らしくない」とかいう文句を聴^きかされるたびに、彼は心の中で暗^{あん}に夫人を冷笑した。夫人の男らしいという意味ははたしてどこにあるのだらうと疑^{ぬぐ}った。批判的な眼を拭^{ぬぐ}って見るまでもなく、彼女は自分の都合ばかりを考えて、津田をやり込めるために、勝手なところへやたらにこの言葉を使うとしか解釈できなかつた。彼は苦笑しながら訊^きいた。

「男らしくするとは？——どうすれば男らしくなれるんですか」「あなたの未練を晴らすだけでさあね。分り切ってるじゃありません

せんか」

「どうして」

「全体どうしたら晴らされると思ってるんです、あなたは」

「そりゃ私には解りません」

夫人は急に勢いきお込んだ。

「あなたは馬鹿ね。そのくらいの事が解らないでどうするんです。会って訊くだけじゃありませんか」

津田は返事ができなかった。会うのがそれほど必要にしたところで、どんな方法でどこでどうして会うのか。その方が先決問題でなければならなかった。

「だから私が今日わざわざここへ来たんじゃないやありませんか」と夫人が云った時、津田は思わず彼女の顔を見た。

「実は疾うから、あなたの料簡をよく伺って見たいと思ってたところへね、今朝お秀さんがあの事で来たもんだから、それでちょうど好い機会だと思つて出て来たような訳なんですがね」

腹に支度の整わない津田の頭はただまごまごするだけであつた。夫人はそれを見澄してこういつた。

「誤解しちやいけませんよ。私は私、お秀さんはお秀さんなんだから。何もお秀さんに頼まれて来たからつて、きつとあの方の肩ばかり持つとは限らないぐらひは、あなたにだつて解るでしよ

う。先刻さつきも云った通り、私はこれでもあなたの同情者ですよ」

「ええそりゃよく心得ています」

ここで問答に一区切ひとくぎりを付けた夫人は、時を移さず要点に達する第二の段落に這入はいり込んで行つた。

「清子さんが今どこにいらっしやるか、あなた知ってらっしつて」

「関の所にいるじゃありませんか」

「そりゃ不断の話よ。私わたしのいうのは今の事よ。今どこにいらっしやるかっていうのよ。東京か東京でないか」

「存じません」

「あてて御覧なさい」

津田はあてっこをしたってつまらないという風をして黙っていた。すると思いがけない場所の名前が突然夫人の口から点出された。一日がかりで東京から行かれるかなり有名なその温泉場の記憶は、津田にとってもそれほど古いものではなかった。急にその辺の景色を思い出した彼は、ただ「へええ」と云ったぎり、後をいう智恵が出なかった。

夫人は津田のために親切な説明を加えてくれた。彼女の云うところによると、目的の人は静養のため、当分そこに逗留とまりゆうしているのであった。夫人は何で静養がその人に必要であるかをさえ知っ

ていた。流産後の身体からだを回復するのが主眼だと云って聴きかせた夫人は、津田を見て意味ありげに微笑した。津田は腹の中でほぼその微笑を解釈し得たような気がした。けれどもそんな事は、夫人にとっても彼にとっても、目前の問題ではなかった。一口の批評を加える気にもならなかった彼は、黙って夫人の聴き手になるつもりでおとなしくしていた。同時に夫人は第三の段落に飛び移った。

「あなたもいらっしやいな」

津田の心はこの言葉を聴く前からすでに揺うごいていた。しかし行こうという決心は、この言葉を聴いた後あとでもつかなかった。夫人

は一煽^{ひとあお}りに煽った。

「いらっしやいよ。行っただって誰の迷惑になる事でもないじゃありませんか。行って澄ましていればそれまででしょう」

「それはそうです」

「あなたはあなたで始めっから独立なんだから構った事はないのよ。遠慮^{きがね}だの気兼ね^{きがね}だのって、なまじ余計なものを荷にし出すと、事が面倒になるだけですわ。それにあなたの病気には、ここを出た後で、ああいう所へちよつと行って来る方がいいんです。私に云わせれば、病気の方だけでも行く必要は充分あると思うんです。だから是非いらっしやい。行って天然自然来たような顔をし

て澄ましているんです。そうして男らしく未練の片かたをつけて来るんです」

夫人は旅費さえ出してやると云って津田を促うながした。

百四十一

旅費を貰もらって、勤向つとめむきの都合をつけて貰って、病後の身体を心持の好い温泉場で静養するのは、誰にとっても望ましい事に違なかつた。ことに自己の快樂を人間の主題にして生活しようとする津田には滅多めったにない逃あつらえ向むきの機会であつた。彼に云わせると、

見す見すそれを取り外すのは愚の極であつた。しかしこの場合に
附帯している一種の条件はけつして尋常のものではなかつた。彼
は顧慮した。

彼を引きとめる心理作用の性質は一目瞭然であつた。けれども
彼はその働きの顕著な力に気がついていただけで、その意味を返
照する違がなかつた。この点においても夫人の方が、彼自身より
もかえつてしつかりした心理の観察者であつた。二つ返事で断行
を誓うと思つた津田のどこか渋っている様子を見た夫人はこう
云つた。

「あなたは内心行きたがつてゐるくせに、もじもじしていらつしや

るのね。それが私に^{わたし}云わせると、男らしくないあなたの一番悪いところなんですよ」

男らしくないと評されても大した苦痛を感じない津田は答えた。

「そうかも知れませんが、少し考えて見ないと……」

「その考える癖があなたの人格に^{たた}崇つて来るんです」

津田は「へえ？」と云つて驚ろいた。夫人は澄ましたものであつた。

「女は考えやしませんよ。そんな時に」

「じゃ考える私は男らしい訳じゃありませんか」

この答えを聴いた時、夫人の態度が急に嶮しくなった。

「そんな生意気な口応えをするもんじゃありません。言葉だけで他をやり込めればどこがどうしたというんです、馬鹿らしい。あなたは学校へ行ったり学問をしたりした方のくせに、まるで自分が見えないんだからお気の毒よ。だから畢竟清子さんに逃げられちまったんです」

津田はまた「えッ？」と云った。夫人は構わなかった。

「あなたに分らなければ、私が云って聴かせて上げます。あなたがなぜ行きたがらないか、私にはちゃんと分ってるんです。あなたは臆病なんです。清子さんの前へ出られないんです」

「そうじゃありません。私は……」

「お待ちなさい。——あなたは勇氣はあるという気なんでしょう。しかし出るのは見識けんしきに拘かわるといふんでしよう。私から云えば、そう見識けんしきばるのが取りも直さずあなたの臆病なところなんですよ、好よござんすか。なぜと云って御覧なさい。そんな見識はただの見栄みえじゃありませんか。よく云ったところで、上うわつ面つらの体裁ていさいじゃありませんか。世間に対する手前てまへと気兼きがねを引いたら後に何が残るんです。花嫁さんが誰も何とも云わないのに、自分できまりを悪くして、三度の御飯を控えるのと同おんなじ事よ」

津田は呆氣あつけに取られた。夫人の小言こごとはまだ続いた。

「つまり色気が多過ぎるから、そんな入らざるところに我を立てて見たくなるんでしょう。そうしてそれがあなたの己惚おのぼれに生れ変って変なところへ出て来るんです」

津田は仕方なしに黙っていた。夫人は容赦なく一歩進んでその己惚を説明した。

「あなたはいつまでも品ひんよく黙っていようというんです。じつと動かずにすまそうとなさるんです。それでいて内心ではあの事が始終しじゅうく苦になるんです。そこをもう少し押して御覧なさいな。おれがこうしているうちには、今に清子の方から何か説明して来るだろう来るだろうと思って——」

「そんな事を思ってるもんですか、なんぼ私^{わたくし}だって」

「いえ、思っているのと同じ^{おん}じだということです。実際どこにも変りがなければ、そう云われたってしようがないじゃありませんか」

津田にはもう反抗する勇気がなかった。機敏な夫人はそこへつけ込んだ。

「いったいあなたはずうずうしい性^た質^ちじゃありませんか。そうしてずうずうしいのも世渡りの上じや一徳^{いっとく}だぐらいに考えているんです」

「まさか」

「いえ、そうです。そこがまだ私に解らないと思つたら、大間違です。好いじゃありませんか、ずうずうしいで、私はずうずうしいのが好きなんだから。だからここで持前のずうずうしいところを男らしく充分發揮なさいな。そのために私がせつかく骨を折つて拵むすえて来たんだから」

「ずうずうしさの活用ですか」と云つた津田は言葉を改めた。

「あの人は一人で行つてゐるんですか」

「無論一人です」

「関は？」

「関さんはこっちよ。こっちに用があるんですもの」

津田はようやく行く事に覚悟をきめた。

百四十二

しかし夫人と津田の間には結末のつかないまだ一つの問題が残っていた。二人はそこをふり返らないで話を切り上げる訳に行かなかった。夫人が踵きびすを回めぐらさないうちに、津田は帰った。

「それで私が行くとしたら、どうなるんです、先刻さっきおっしゃった事は」

「そこです。そこを今云おうと思っていたのよ。私に云わせる

と、これほど好い療治はないんですがね。どうでしょう、あなたのお考えは」

津田は答えなかった。夫人は念を押した。

「解ったでしょう。後は云わなくつても」

夫人の意味は説明を待たないでもほぼ津田に呑^のみ込めた。しかしそれをどんな風にして、お延の上に影響させるつもりなのか、そこへ行くと彼には確^{しか}とした観念がなかった。夫人は笑い出した。

「あなたは知らん顔をしていればいいんですよ。後は私の方でやるから」

「そうですか」と答えた津田の頭には疑惑があつた。後あとを挙あげて夫人に一任するとなると、お延の運命を他人に委ゆだねると同じ事であつた。多少夫人の手腕を恐れている彼は危ぶんだ。何をされるか解らないという掛け念ねんに制せられた。

「お任せしてもいいんですが、手段や方法が解っているなら伺っておく方が便利かと思います」

「そんな事はあなたが知らないでもいいのよ。まあ見ていらつしやい、私わたしがお延さんをもつと奥さんらしい奥さんにきつと育て上げて見せるから」

津田の眼に映るお延は無論不完全であつた。けれども彼の氣に

入らない欠点が、必ずしも夫人の難の打ち所とは限らなかった。それをちゃんぽんに混同しているらしい夫人は、少くとも自分に都合のいいお延を鍛きたえ上げる事が、すなわち津田のために最も適当な細君を作り出す所以ゆえんだと誤解しているらしかった。それのみか、もう一步夫人の胸中に立ち入って、その真底しんそこを探ると、とてもない結論になるかも知れなかった。彼女はただお延を好かないために、ある手段を拵うづめえて、相手を苛いじめにかかるのかも分らなかった。氣に喰わないだけの根拠で、敵を打ち懲こらす方法を講じているのかも分らなかった。幸さいわいに自分でそこを認めなければならぬほどに、世間からも己おのれからも反省を強しいられていない境遇

にある彼女は、氣樂であつた。お延の教育。——こういう言葉が臆面なく彼女の口を洩れた。夫人とお延の間柄を、内面から看破る機会に出会つた事のない津田にはまたその言葉を疑う資格がなかつた。彼は大体の上で夫人の実意を信じてかかつた。しかし実意の作用に至ると、勢い危惧の念が伴なわざるを得なかつた。

「心配する事があるもんですか。細工はりゆうりゆう仕上を御覧うじろつて云うじやありませんか」

いくら津田が訊いても詳しい話しをしなかつた夫人は、こんな高を括つた挨拶をした後で、教えるように津田に云つた。

「あの方は少し己惚れ過ぎるところがあるのよ。それから内側

と外側がまだ一致しないのね。上部^{うわべ}は大変鄭寧^{ていねい}で、お腹^{なか}の中は
しっかりし過ぎるくらいしっかりしているんだから。それに利巧^{りこう}
だから外へは出さないけれども、あれでなかなか慢気^{まんき}が多いの
よ。だからそんなものを皆^みんな取っちまわなくっちゃ……」

夫人が無遠慮な評をお延に加えている最中に、階子段^{はしごだん}の途中で
足を止めた看護婦の声が二人の耳に入った。

「吉川の奥さんへ堀さんとおっしゃる方から電話でございます」
夫人は「はい」と応じてすぐ立ったが、敷居の所で津田を顧み
た。

「何の用でしょう」

津田にも解らなかつたその用を足すために下へ降りて行つた夫人は、すぐまた上つて来ていきなり云つた。

「大變大變」

「何が？　どうかしたんですか」

夫人は笑いながら落ちついて答えた。

「秀子さんがわざわざ注意してくれたの」

「何をです」

「今まで延子さんが秀子さんの所へ来て話していたんですって。歸りに病院の方へ廻るかも知れないから、ちよつとお知らせするって云うのよ。今秀子さんの門を出たばかりのところだって。」

——まあ好かった。悪口でも云つてるところへ来られようもんなら、大恥おおはじを搔かなくっちゃならない」

いったん坐すわった夫人は、間もなくまた立った。

「じゃ私わたしはもうお暇ひまにしますからね」

こんな打ち合せをした後でお延の顔を見るのは、彼女にとってもきまりが好くないらしかった。

「いらっしやらないうちに、早く退却しましょう。どうぞよろしく」

一言ひとことの挨拶あいさつを彼女に残したまま、夫人はついに病室を出た。

百四十三

この時お延の足はすでに病院に向つて動いていた。

堀の宅うちから医者い者の所へ行くには、門を出て一二丁町東へ歩いて、そこに丁字形ていじけいを描いている大きな往来をまた一つ向うへ越さなければならなかった。彼女がこの曲り角へかかった時、北から来た一台の電車がちょうど彼女の前、方角から云えば少し筋違すじかいの所でとまった。何気なく首を上げた彼女は見るともなしにこちら側がわの窓を見た。すると窓硝子まどガラスを通して映る乗客の中に一人の女がいた。位地いちの関係から、お延はただその女の横顔の半分もしくは

三分の一を見ただけであつたが、見ただけですぐはつと思つた。
吉川夫人じゃないかという気がたちまち彼女の頭を刺戟しげきしたから
である。

電車はじきに動き出した。お延は自分の物色に満足な時間を与
えずに走り去つたその後影をしばらく見送つたあとで、通りを東
側へ横切つた。

彼女の歩く往来はもう横町だけであつた。その辺の地理に詳し
い彼女は、いくつかの小路こうじを右へ折れたり左へ曲つたりして、一
番近い道をはやく病院へ行き着くつもりであつた。けれども電車
に会つた後の彼女の足は急に重くなつた。距離にすればもう二三

丁という所まで来た時、彼女は病院へ寄らずに、いったん宅^{うち}へ帰ろうかと思い出した。

彼女の心は堀の門を出た折からすでに重かった。彼女はむやみにお秀を突ッ付いて、かえってやり損^{そく}なつた不快を胸に包んでいた。そこには大事を明らさまに握る事ができずに、裏からわざわざ匂^{にお}わせられた羽痒^{はが}ゆさがあつた。なまじいそれを嗅^かぎつけた不安の色も、前よりは一層濃く染めつけられただけであつた。何よりも先だつのは、こっちの弱点を見抜かれて、逆^{さか}さに相手から翻^{ほん}弄^{ろう}されはしなかったかという疑惑であつた。

お延はそれ以上にまだ敏^{さと}い気を遠くの方まで廻していた。彼女

は自分に対して仕組まれた謀計はかりごとが、内密にどこかで進行しているらしいとまで癪かんづいた。首謀者は誰にしろ、お秀がその一人である事は確たしかであつた。吉川夫人が関係しているのも明かに推測された。——こう考えた彼女は急に心細くなつた。知らないうちに重じゅう囲うゐのうちに自分を見出みいした孤軍こぐんのような心境が、遠くから彼女を襲つて来た。彼女は周囲あたりを見廻した。しかしそこには夫を除いて依たよりになるものは一人もいなかった。彼女は何をおいてもまず津田に走らなければならなかつた。その津田を疑ぐつてゐる彼女にも、まだ信力は残つていた。どんな事があるうとも、夫だけは共謀者の仲間入はよもしまいと念じた彼女の足は、堀の門を出るや

否や、ひとりでにすぐ病院の方へ向いたのである。

その心理作用が今喰いとめられなければならなくなった時、通りで会った電車の影をお延は腹の底から呪った。もし車中の人吉川夫人であつたとすれば、もし吉川夫人が津田の所へ見舞に行つたとすれば、もし見舞に行つたついでに、——。いかに伶俐なお延にも考える自由の与えられていないその後は容易に出て来なかつた。けれども結果は一つであつた。彼女の頭は急にお秀から、吉川夫人、吉川夫人から津田へと飛び移つた。彼女は何がなしに、この三人を巴のように眺め始めた。

「ことによると三人は自分に感じさせない一種の電氣を通わせ

合っているかも知れない」

今まで避難場のつもりで夫の所へ駆け込もうとばかり思っていた彼女は考えざるを得なかった。

「この分じゃ、ただ行っただっていけない。行ってどうしよう」

彼女はどうしようという分別なしに歩いて来た事に気がついた。するとどんな態度で、どんな風に津田に会うのが、この場合最も有効だろうという問題が、さも重要らしく彼女に見え出して来た。夫婦のくせに、そんなよそ行いきの支度なんぞして何になるという非難をどこにも聴きかなかったので、いったん宅うちへ帰って、よく気を落ちつけて、それからまた出直するのが一番の上策だと思い

極^{きわ}めた彼女は、ついにもう五六分で病院へ行き着^{こうじ}こうという小路の中ほどから取^{にぎ}って返した。そうして柳の木の植^{うわ}っている大通りから賑^{にぎ}やかな往来まで歩いてすぐ電車へ乗った。

百四十四

お延は日のとぼとぼ頃に宅へ帰った。電車から降りて一丁ほどの所を、身に染^しみるような夕暮の霽^{もや}に包まれた後の彼女には、何よりも火鉢^{ひばち}の傍^{はた}が恋しかった。彼女はコートを脱ぐなりまずそこへ坐^{すわ}って手を翳^{かざ}した。

しかし彼女にはほとんど一分の休憩時間も与えられなかった。坐るや否や彼女はお時の手から津田の手紙を受け取った。手紙の文句は固^{もと}より簡単であつた。彼女は封を切る手数とほとんど同じ時間で、それを読み下す事ができた。けれども読んだ後の彼女は、もう読む前の彼女ではなかつた。わずか三行ばかりの言葉は一冊の書物より強く彼女を動かした。一度に外から持って帰つた気分^{おど}に火を点^つけたその書翰^{しょかん}の前に彼女の心は躍^{おど}つた。

「今日病院へ来ていけないという意味はどこにあるだろう」
それだけでなく、もう一遍出直すはずであつた彼女は、時間^{かま}に關^{かま}う余裕^{ぜい}さえなかつた。彼女は台所^{だいしよ}から膳^{ぜん}を運んで来たお時を

驚ろかして、すぐ立ち上がった。

「御飯は帰ってからにするよ」

彼女は今脱いだばかりのコートをまた羽織って、門を出た。しかし電車通りまで歩いて来た時、彼女の足は、また小路こうじの角でとまった。彼女はなぜだか病院へ行くに堪たえないような気がした。この様子では行つたところで、役に立たないという思慮が不意に彼女に働らきかけた。

「夫の性質では、とても卒直にこの手紙の意味さえ説明してはくれまい」

彼女は心細くなつて、自分の前を右へ行つたり左へ行つたりす

る電車を眺めていた。その電車を右へ利用すれば病院で、左へ乗れば岡本の宅であつた。いつそ当初の計画をやめて、叔父の所へでも行こうかと考えついた彼女は、考えつくや否や、すぐその方面に横わる困難をも想像した。岡本へ行つて相談する以上、彼女は打ち明け話をしなければならなかつた。今まで隠していた夫婦関係の奥底を、曝け出さなければ、一步も前へ出る訳には行かなかつた。叔父と叔母の前に、自分の眼が利かなかつた自白を綺麗にしなければならなかつた。お延はまだそれほどの恥を忍ぶまでに事件は逼つていないと考えた。復活の見込が充分立たないのに、酔興で自分の虚栄心を打ち殺すような正直は、彼女の最も輕

蔑^{べつ}するところであつた。

彼女は決しかねて右と左へ少しずつ揺れた。彼女がこんなに迷っているとはまるで気のつかない津田は、この時床^{とこ}の上に起き上つて、平気で看護婦の持つて来た膳に向いつつあつた。先刻^{さつき}お秀から電話のかかった時、すでにお延の来訪を予想した彼は、吉川夫人と入れ代りに細君の姿を病室に見るべく暗^{あん}に心の調子を整えていたところが、その細君は途中から引き返してしまったので、軽い失望の間に、夕食^{ゆうめし}の時間が来るまで、待ち草臥^{くたび}れたせい^{せい}か、看護婦の顔を見るや否や、すぐ話しかけた。

「ようやく飯か。どうも一人でいると日が長くつて困るな」

看護婦は体の小さい血色の好くない女であつた。しかし年頃はどうしても津田に鑑定のつかない妙な顔をしていた。いつでも白い服を着けているのが、なおさら彼女を普通の女の群むれから遠ざけた。津田はつねに疑つた。――この人が通常の着物を着る時に、まだ肩かた上あげを付けているだろうか、または除とっているだろうか。彼はいつか真面目まじめにこんな質問を彼女にかけて見た事があつた。その時彼女はにやりと笑つて、「私はまだ見習です」と答えたので、津田はおおよその見当を立てたくらいであつた。

膳を彼の枕元へ置いた彼女はすぐ下へ降りなかつた。

「御退屈さま」と云つて、にやにや笑つた彼女は、すぐ後あとを付け

足した。

「今日は奥さんはお見えになりませんね」

「うん、来ないよ」

津田の口の中にはもう焦げた麵麩がいっぱい入っていた。彼はそれ以上何も云う事ができなかった。しかし看護婦の方は自由であつた。

「その代り外のお客さまがいらっしゃいましたね」

「うん。あのお婆さんだろう。ずいぶん肥ってるね、あの奥さんは」

看護婦が悪口の相槌を打つ気色を見せないで、津田は一人で

しゃべらなければならなかった。

「もっと若い綺麗きれいな人が、どんどん見舞に来てくれると病気も早く癒なおるんだがな」と云って看護婦を笑わせた彼は、すぐ彼女から冷嘲ひやかし返された。

「でも毎日女の方ばかりいらっしやいますね。よっぽど間まがいいと見えて」

彼女は小林の来た事を知らないらしかった。

「昨日きのういらした奥さんは大変お綺麗ですね」

「あんまり綺麗でもないよ。あいつは僕の妹だからね。どこか似ているかね、僕と」

看護婦は似ているとも似ていないとも答えずに、やっぱりやにやしていた。

百四十五

それは看護婦にとって意外な儲け日^{もうび}であつた。下痢^{げり}の気味でいつもの通り診察場に出られなかった医者^{いしや}に、代理を頼まれた彼の友人は、午前の都合を付けてくれただけで、午後から夜へかけての時間には、もう顔を出さなかった。

「今日は当直だから晩には来られないんだそうです」

彼女はこう云って、不断のような忙がしい様子をどこにも見せず、ゆっくり津田の膳ぜんの前に坐すわっていた。

退屈たいくつ凌しのぎに好い相手のできた気になった津田の舌したには締りがなかった。彼は面白半分いろいろな事を訊きいた。

「君の国はどこかね」

「栃木県です」

「なるほどそう云われて見ると、そうかな」

「名前は何と云ったっけね」

「名前は知りません」

看護婦はなかなか名前を云わなかった。津田はそこに発見され

た抵抗が愉快なので、わざわざ何遍も同じ事を繰り返して訊いた。

「じゃこれから君の事を栃木県、栃木県って呼ぶよ。いいかね」
「ええよござんす」

彼女の名前の頭文字はつであつた。

「露^{つゆ}か」

「いいえ」

「なるほど露^{つゆ}じゃあるまいな。じゃ土^{つち}か」

「いいえ」

「待ちたまえよ、露^{つゆ}でもなし、土^{つち}でもないとする。——はは

あ、解^{わか}った。つや。だ。ろ。う。でなければ、常^{つね}か」

津田はいくらでもでたらめを云った。云うたびに看護婦は首を振って、にやにや笑った。笑うたびに、津田はまた彼女を追窮^{ついきゆう}した。しまい彼女の名がつきだと判^わ然^かった時、彼はこの珍らしい名をまだ弄^{もてあそ}んだ。

「お月^{つき}さんだね、すると。お月さんは好い名だ。誰が命^{めい}けた」
看護婦は返答を与える代りに突然逆襲した。

「あなたの奥さんの名は何とおっしゃるんですか」

「あてて御覧」

看護婦はわざと二つ三つ女らしい名を並べた後^{あと}で云った。

「お延^{のぶ}さんでしょう」

彼女は旨^{うま}くあてた。というよりも、いつの間にかお延の名を聴いて覚えていた。

「お月さんはどうも油断がならないなあ」

津田がこう云って興じているところへ、本人のお延がひょつくり顔を出したので、ふり返った看護婦は驚ろいて、すぐ膳を持っただけなり立ち上った。

「ああ、とうとういらした」

看護婦と入れ代りに津田の枕元へ坐ったお延はたちまち津田を見た。

「来ないと思っ
ていらしたんでしょ
う」

「いやそうでもない。
しかし今日はもう遅
いからどうかとも思
つていた」

津田の言葉に偽りいつわはなかつた。
お延にはそれを認めるだけの眼
があつた。けれどもそうすれば事の矛盾はなお募つのるばかりであつ
た。

「でも先刻さつき手紙をお寄こしになつたのね」

「ああやったよ」

「今日来ちゃいけないと書いてあるのね」

「うん、少し都合つごうの悪い事があつたから」

「なぜあたしが来ちゃ御都合が悪いの」

津田はようやく気がついた。彼はお延の様子を見ながら答えた。

「なに何でもないんだ。下らない事なんだ」

「でも、わざわざ使に持たせてお寄こしになるくらいだから、何かあったんでしょう」

津田はごまかしてしまおうとした。

「下らない事だよ。何でもまたそんな事を気にかけるんだ。お前も馬鹿だね」

慰藉いしやのつもりで云った津田の言葉はかえって反対の結果をお延

の上に生じた。彼女は黒い眉まゆを動かした。無言のまま帯の間へ手を入れて、そこから先刻の書翰しょかんを取り出した。

「これをもう一遍見てちょうだい」

津田は黙ってそれを受け取った。

「別段何にも書いぢやないぢやないか」と云った時、彼は腹はよ
うやく彼の口を否定した。手紙は簡単であつた。けれどもお延の
疑いを惹ひくには充分であつた。すでに疑われるだけの弱味をもつ
ている彼は、やり損そくなつたと思つた。

「何にも書いてないから、その理由わけを伺うんです」とお延は云つ
た。

「話して下すつてもいいじゃないですか。せつかく来たんだから」

「お前はそれを聴ききに來たのかい」

「ええ」

「わざわざ？」

「ええ」

お延はどこまで行つても動かなかつた。相手の手剛てごわさを悟さとつた時、津田は偶然好い嘘うそを思いついた。

「実は小林が來たんだ」

小林の二字はたしかにお延の胸に反響した。しかしそれだけで

はすまなかつた。彼はお延を満足させるために、かえってそこを説明してやらなければならなくなつた。

百四十六

「小林なんか逢^あうのはお前も厭^{いや}だろうと思つてね。それで気がついたからわざわざ知らしてやつたんだよ」

こう云つてもお延はまだ得心した様子を見せなかつたので、津田はやむをえず慰藉^{いしや}の言葉を延ばさなければならなかつた。

「お前が厭でないにしたところで、おれが厭なんだ、あんな男に

お前を合わせるのは。それにあいつがまたお前に聴かせたくないような厭な用事を持ち込んで来たもんだからね」

「あたしの聴いて悪い用事？　じゃお二人の間の秘密なの？」

「そんな訳のものじゃないよ」と云った津田は、自分の上に寸分の油断なく据えられたお延の細い眼を見た時に、周章てて後を付け足した。

「また金を強乞りに来たんだ。ただそれだけさ」

「じゃあたしが聴いてなぜ悪いの」

「悪いとは云やしない。聴かせたくないというまでさ」

「するとただ親切ずくで寄こして下すった手紙なのね、これは」

「まあそうだ」

今まで夫に見入っていたお延の細い眼がなお細くなると共に、微^{かす}かな笑が唇^{くちびる}を洩^もれた。

「まあありがたい事」

津田は澄ましていられなくなつた。彼は用意を欠いた文句を択^より除^のける余裕を失つた。

「お前だつて、あんな奴^{やつ}に会うのは厭^{いや}なんじゃないか」

「いいえ、ちつとも」

「そりゃ嘘^{うそ}だ」

「どうして嘘なの」

「だって小林は何かお前に云ったそうじゃないか」

「ええ」

「だからさ。それでお前もあいつに会うのは厭だろうと云うんだ」

「じゃあなたはあたしが小林さんからどんな事を聞いたか知っていらっしやるの」

「そりゃ知らないよ。だけどどうせあいつのことだから碌ろくな事は云やしなろう。いったいどんな事を云ったんだ」

お延は口へ出かかった言葉を殺してしまった。そうして反問した。

「ここで小林さんは何とおっしゃって」

「何とも云やしないよ」

「それこそ嘘です。あなたは隠していらっしゃるんです」

「お前の方が隠しているんじゃないかね。小林から好い加減な事を云われて、それを真^まに受けていながら」

「そりゃ隠しているかも知れませんが。あなたが隠し立てをなさる以上、あたしだって仕方がないわ」

津田は黙った。お延も黙った。二人とも相手の口を開くのを待った。しかしお延の辛防^{しんぼう}は津田よりも早く切れた。彼女は急に鋭^しどい声を出した。

「嘘よ、あなたのおっしゃる事はみんな嘘よ。小林なんて人はこへ来た事も何にもないのに、あなたはあたしをごまかそうと思つて、わざわざそんな拵^{こしらへ}え事をおっしゃるのよ」

「拵^{こしらへ}えたつて、別におれの利益になる訳でもなからうじゃないか」

「いいえほかの人が来たのを隠すために、小林なんて人を、わざわざ引張り出すにきまつてるわ」

「ほかの人？　ほかの人とは」

お延の眼は床の上に載せてある楓^{かえで}の盆栽^{ぼんさい}に落ちた。

「あれはどなたが持っていたんです」

津田は失敗しくじったと思った。なぜ早く吉川夫人の来た事を自白してしまわなかったかと後悔した。彼が最初それを口にしなかったのは分別ふんべつの結果であつた。話すのに訳はなかったけれども、夫人と相談した事柄の内容が、お延に対する彼を自然臆病にしたので、気の咎とがめる彼は、まあ遠慮しておく方が得策だろうと思案したのである。

盆栽をふり返った彼が吉川夫人の名を云おうとして、ちよつと口籠くちごもった時、お延は機先を制した。

「吉川の奥さんがいらしたじゃありませんか」

津田は思わず云った。

「どうして知ってるんだ」

「知ってますわ。そのくらいの事」

お延の様子に注意していた津田はようやく度胸を取り返した。

「ああ来たよ。つまりお前の予言^{よげん}があたった訳になるんだ」

「あたしは奥さんが電車に乗っていらした事までちゃんと知ってるのよ」

津田はまた驚ろいた。ことによると自動車が大通りに待っていたのかも知れないと思っただけで、彼は夫人の乗物にそれ以上細かい注意を払わなかった。

「お前どこかで会ったのかい」

「いいえ」

「じゃどうして知ってるんだ」

お延は答える代りに訊^きき返した。

「奥さんは何しにいらしたんです」

津田は何気なく答えた。

「そりゃ今話そうと思ってたところだ。——しかし誤解しちゃ困るよ。小林はたしかに来たんだからね。最初に小林が来て、その後へ奥さんが来たんだ。だからちようど入れ違になった訳だ」

お延は夫より自分の方が急^せき込んでゐる事に気がついた。この調子で乗^のしかかつて行つたところで、夫はもう圧^おし潰^{つぶ}されないと、いう見切^{みきり}をつけた時、彼女は自分の破綻^{ぼたん}を出す前に身を翻^{ひる}がえした。

「そう、そんならそれでもいいわ。小林さんが来たつて来なくつたつて、あたしの知つた事じゃないんだから。その代り吉川の奥さんの用事を話して聴^きかしてちょうだい。無論ただのお見舞でない事はあたしにも判つてゐるけれども」

「といったところで、大した用事で来た訳でもないんだよ。そんなに期待していると、また聴いてから失望するかも知れないか

ら、ちよつと断つとくがね」

「構いません、失望しても。ただありのままを伺いさえすれば、それで念晴しねんばらしになるんだから」

「本来が見舞で、用事はつけたりなんだよ、いいかね」

「いいわ、どっちでも」

津田は夫人の齎もたらした温泉行の助言じょごんだけをごく淡泊あっさり話した。お延にお延流の機略きりやくがある通り、彼には彼相当の懸引かけひきがあるので、都合の悪いところを巧みに省略した、誰の耳にも真卒しんそつで合理的な説明がたやすく彼の口からお延の前に描き出された。彼女は表向おもてむきそれに対して一言いちごんの非難さしはを挟さむ余地がなかった。

ただ落ちつかないのは互の腹であつた。お延はこの単純な説明を透とおして、その奥を覗のぞき込もうとした。津田は飽あくまでもそれを見せまいと覚悟した。極めて平和な暗闘が度胸比べと技巧比べで演出されなければならなかつた。しかし守る夫に弱点がある以上、攻める細君にそれだけの強味加わるのは自然の理であつた。だから二人の天賦てんぷを度外において、ただ二人の位地いちぢ関係から見ると、お延は戦かわない先にもう優者であつた。正味しょうみの曲直を標準にしても、競せり合あわない前に、彼女はすでに勝つていた。津田にはそういう自覚があつた。お延にもこれとほぼ同じ意味で大体の見当けんとうがついていた。

戦争は、この内部の事実を、そのまま表面へ追い出す事ができるかできないかで、一段落^{いちだんらく}つかなければならない道理であつた。津田さえ正直ならばこれほどたやすい勝負はない訳でもあつた。しかしもし一点不正直なところが津田に残っているとすると、これほどまた落し悪い^{にく}城はけっしてないという事にも帰着した。気の毒なお延は、否^{いや}応^{おう}なしに津田を追いつ出すだけの武器をまだ造り上げていなかった。向うに開門^{せま}を逼るよりほかに何の手段も講じ得ない境遇にある現在の彼女は、結果から見てもほとんど無能力者と扱^{えら}ぶところがなかった。

なぜ心に勝つただけで、彼女は美しく切り上げられないのだ

ろうか。なぜ凱歌^{がいか}を形の上にまで運び出さなければ気がすまないのだろうか。今の彼女にはそんな余裕がなかったのである。この勝負以上に大事なものがまだあったのである。第二第三の目的をまだ後^{あと}に控えていた彼女は、ここを突き破らなければ、その後をどうする訳にも行かなかったのである。

それのみか、実をいうと、勝負は彼女にとって、一義の位をもっていないかった。本当に彼女の目指^{めざ}すところは、むしろ真実相であつた。夫に勝つよりも、自分の疑を晴らすのが主眼であつた。そうしてその疑いを晴らすのは、津田の愛を対象に置く彼女の生存上、絶対に必要であつた。それ自身がすでに大きな目的で

あつた。ほとんど方便とも手段とも云われないほど重い意味を彼女の眼先へ突きつけていた。

彼女は前後の関係から、思量分別の許す限り、全身を挙げてそこへ拘泥^{こだわ}しなければならなかった。それが彼女の自然であつた。しかし不幸な事に、自然全体は彼女よりも大きかった。彼女の遙^{はる}か上にも続いていた。公平な光りを放って、可憐^{かれん}な彼女を殺そうとしてさえ憚^{はば}からなかった。

彼女が一口拘泥るたびに、津田は一足彼女から退^{しりぞ}いた。二口拘泥れば、二足退^{しりぞ}いた。拘泥るごとに、津田と彼女の距離はだんだん増^まして行つた。大きな自然は、彼女の小さい自然から出た行

為を、遠慮なく蹂躪した。一歩ごとに彼女の目的を破壊して悔くい
なかった。彼女は暗あんにそこへ気がついた。けれどもその意味を悟
る事はできなかった。彼女はただそんなはずはないとばかり思い
つめた。そうしてついにまた心の平静を失った。

「あたしがこれほどあなたの事ばかり考えているのに、あなたは
ちつとも察して下さらない」

津田はやりきれないという顔をした。

「だからおれは何にもお前を疑うたぐってやしないよ」

「当り前ですわ。この上あなたに疑うたぐられるくらいなら、死んだ
方がよっぽどましですもの」

「死ぬなんて大袈裟おおげさな言葉は使わないでもいいやね。第一何にもないじゃないか、どこにも。もしあるなら云って御覧な。そうすればおれの方でも弁解弁解もしようし、説明もしようけれども、初手しよてから根のない苦情くじょうじゃ手のつけようがないじゃないか」

「根はあなたのお腹なかの中にあるはずですわ」

「困るなそれだけじゃ。——お前小林から何かしゃくられたね。きつとそうに違ちがない。小林が何を云ったかそこで話して御覧よ。遠慮えんよは要いらないから」

津田の言葉つきなり様子なりからして、お延は彼の心を明瞭に推察する事ができた。——夫は彼の留守に小林の来た事を苦しんでいる。その小林が自分に何を話したかをなお気に病んでいる。そうしてその話の内容は、まだ判然掴んでいない。だから鎌をかけて自分を釣り出そうとする。

そこに明らかな秘密があつた。材料として彼女の胸に蓄わえられて来たこれまでのいっさいは、疑もなく矛盾もなく、ことごとく同じ方角に向つて注ぎ込んでいた。秘密は確実であつた。青天白日のように明らかであつた。同時に青天白日と同じ事で、どこにもその影を宿さなかつた。彼女はそれを見つめるだけであつ

た。手を出す術すべを知らなかった。

悩乱のうらんのうちにまだ一分いちぶんの商量しょうりょうを余した利巧りこうな彼女は、夫のかけた鎌はさを外さずに、すぐ向うへかけ返した。

「じゃ本当を云いましょう。実は小林さんから詳しい話をみんな聴きいてしまったんです。だから隠したってもう駄目だめよ。あなたもずいぶんひどい方かたね」

彼女の云い草ぐさはほとんどでたらめに近かった。けれどもそれを口にする気持からいうと、全くの真剣沙汰しんけんざたと何の異ことなるところはなかった。彼女は熱を籠こめた語気で、津田を「ひどい方かた」と呼ばなければならなかった。

反響はすぐ夫の上に来た。津田はこれでたらのめの前に退避^{たじ}ろぐ
気色^{けしき}を見せた。お秀の所で遣^やり損^{そく}なつた苦^{にが}い経験にも懲^こりず、ま
た同じ冒険を試みたお延の度胸は酬^{むく}いられそうになつた。彼女は
一躍して進んだ。

「なぜこうならない前に、打ち明けて下さらなかったんです」

「こうならない前」という言葉は曖昧^{あいまい}であつた。津田はその意味
を捕捉^{ほそく}するに苦しんだ。肝心^{かんじん}のお延にはなお解らなかつた。だか
ら訊^きかれても説明しなかつた。津田はただぼんやりと念を押し
た。

「まさか温泉へ行く事をいうんじゃないやあるまいね。それが不都合だ

と云うんなら、やめても構わないが」

お延は意外な顔をした。

「誰がそんな無理をいうもんですか。会社の方の都合がついて、病後の身体を回復する事ができれば、それほど結構な事はないじゃないですか。それが悪いなんてむちゃくちゃを云い募るあたしだと思っていらっしゃるの、馬鹿らしい。ヒステリーじゃあるまいし」

「じゃ行ってもいいかい」

「よござんすとも」と云った時、お延は急に袂から手帛を出して顔へ当てたと思うと、しくしく泣き出した。あとの言葉は、啜り

上げる声の間から、句をなさずに、途切とぎれ途切とぎれに、毀こわれ物のよ
うな形で出て来た。

「いくらあたしが、……わがままだって、……あなたの療養の……
邪魔をするような、……そんな……あたしは不断からあなたが
あたしに許して下さる自由に対して感謝の念をもっているんです
……のにあたしがあなたの転地療養を……妨げるなんて……」

津田はようやく安心した。けれどもお延にはまだ先があつた。

発作ほっさが静まると共に、その先は比較的すらすら出た。

「あたしはそんな小さな事を考えているんじゃないんです。いく
らあたしが女だって馬鹿だって、あたしにはまたあたしだけの体

面というものがあります。だから女なら女なり、馬鹿なら馬鹿なりに、その体面を維持して行きたいと思うんです。もしそれを毀損されると……」

お延はこれだけ云いかけてまた泣き出した。あとはまた切れ切れになった。

「万一……もしそんな事があると……岡本の叔父に対しても……叔母に対しても……面目なくて、合わす顔がなくなるんです。……それでなくつても、あたしはもう秀子さんなんぞから馬鹿にされ切っているんです。……それをあなたは傍で見ていながら、……すまして……すまして……知らん顔をしていらつしやるんで

す」

津田は急に口を開いた。

「お秀がお前を馬鹿にしたって？　いつ？　今日お前が行った時にかい」

津田は我知らずとんでもない事を云ってしまった。お延が話さない限り、彼はその会見を知るはずがなかったのである。お延の眼ははたして閃めいた。^{ひら}

「それ御覧なさい。あたしが今日秀子さんの所へ行った事が、あなたにはもうちゃんと知れているじゃありませんか」

「お秀が電話をかけたよ」という返事がすぐ津田の咽喉^{のど}から外へ

滑^{すべ}り出さなかつた。彼は云おうか止^よそうかと思つて迷つた。けれども時に一寸^{いっすん}の容赦^{ようしや}もなかつた。反吐^{へど}もどしていればいるほど形勢^{あや}は危^{あや}うくなるだけであつた。彼はほとんど行きつまつた。しかし間髪^{かんはつ}を容れずという際^{きわ}どい間際^{まぎわ}に、旨^{うま}い口実が天から降つて来た^{た。}。

「車夫^{くるまや}が歸つて来てそう云つたもの。おおかたお時が車夫に話した^{た。}んだらう」

幸いお延がお秀の後を追^{おっ}かけて出た事は、下女にも解つていた。偶発^{ぐふちゆう}の言訳が偶中^{こう}の功を奏した時、津田は再度の胸を撫^なで下^{おろ}した。

百四十九

遮しやにむに二無二津田を突き破ろうとしたお延は立ちどまつた。夫がそれほど自分をごまかしていたのではないと考える拍子ひょうしに気が抜けたので、一息ひといきに進むつもり彼女は進めなくなった。津田はそこを覘ねらった。

「お秀なんぞが何を云ったって構わないじゃないか。お秀はお秀、お前はお前なんだから」

お延は答えた。

「そんなら小林なんぞがあたしに何を云ったって構わないじゃあ

りませんか。あなたはあなた、小林は小林なんだから」

「そりゃ構わないよ。お前さえしつかりしていてくれれば。ただ疑ぐりだの誤解だのを起して、それをむやみに振り廻されると迷惑するから、こつちだって黙っていらなくなるだけさ」

「あたしだって同じ事ですわ。いくらお秀さんが馬鹿にしよう
と、いくら藤井の叔母さんが疎外しよう、あなたさえしつかり
して下されば、苦くになるはずはないんです。それを肝心かんじんのあ
なたが……」

お延は行きつまった。彼女には明瞭めいりょうな事実がなかった。した
がって明瞭な言葉が口へ出て来なかった。そこを津田がまた一掬ひとすく

い掬った。

「おおかたお前の体面に関わるような不始末でもすると思ってるんだろう。それよりか、もう少しおれに憑よりかかって安心していらいいじゃないか」

お延は急に大きな声を揚げた。

「あたしは憑りかかりたいんです。安心したいんです。どのくらい憑りかかりたがっているか、あなたには想像がつかないくらい、憑りかかりたいんです」

「想像がつかない？」

「ええ、まるで想像がつかないんです。もしつけば、あなたも

変つて来なくっちゃならないんです。つかないから、そんなに澄ましていらっしやられるんです」

「澄ましてやしないよ」

「気の毒だとも可哀相だとも思つて下さらないんです」

「気の毒だとも、可哀相だとも……」

これだけ繰り返した津田はいったん塞^{つか}えた。その後で継^{あと}ぎ足^たした文句はむしろ蹣^{まん}蹣^{さん}として揺^ゆめいていた。

「思つて下さらないたつて。——いくら思おうと思つても。——思うだけの因^{いん}縁^{ねん}があれば、いくらでも思つさ。しかしなけりや仕方がないじゃないか」

お延の声は緊張のために顫ふるえた。

「あなた。あなた」

津田は黙っていた。

「どうぞ、あたしを安心させて下さい。助けると思って安心させて下さい。あなた以外にあたしは憑よりかかり所のない女なんですから。あなたに外はずされると、あたしはそれぎり倒れてしまわなければならぬ心細い女なんですから。だからどうぞ安心しろと云って下さい。たった一口でいいから安心しろと云って下さい」

津田は答えた。

「大丈夫だよ。安心おしよ」

「本当？」

「本当に安心おしよ」

お延は急に破裂するような勢で飛びかかった。

「じゃ話してちょうだい。どうぞ話してちょうだい。隠さずにみんなここで話してちょうだい。そうして一思いに安心させてちょうだい」

津田は面喰^{めんくら}った。彼の心は波のように前後へ揺^{うご}き始めた。彼はいつその事思い切^きって、何もかもお延の前に浚^{さら}け出^だしてしまおうかと思った。と共に、自分はただ疑がわれているだけで、実証を握^{にぎ}られているのではないとも推断した。もしお延が事実を知って

いるなら、ここまで押して来て、それを彼の顔に叩きつけ^{たた}ないはずはあるまいとも考えた。

彼は気の毒になった。同時に逃げる余地は彼にまだ残っていた。道義心と利害心^{こうてい}が高低を描いて彼の心を上下^{うえした}へ動かした。するとその片方に温泉行の重みが急に加わった。約束を断行する事は吉川夫人に対する彼の義務であつた。必然から起る彼の要求でもあつた。少くともそれを済^すますまで打ち明けずにいるのが得策だという気が勝を制した。

「そんなくだくだしい事を云ってたつて、お互いに顔を赤くするだけで、際限がないから、もう止^よそうよ。その代りおれが受け

合ったらいいだろう」

「受け合うって」

「受け合うのさ。お前の体面に対して、大丈夫だという証書を入れるのさ」

「どうして」

「どうしてって、ほかに証文の入れようもないから、ただ口で誓うのさ」

お延は黙っていた。

「つまりお前がおれを信用すると云いさえすれば、それでいいんだ。万一の場合が出て来た時は引き受けて下さいって云えばいい

んだ。そうすればおれの方じゃ、よろしい受け合ったと、こう答えるのさ。どうだねその辺のところで妥協だきようはできないかね」

百五十

妥協という漢語がこの場合いかに不釣合に聞こえようとも、その時の津田の心事しんじを説明するには極めて穏当きわであつた。実際この言葉によって代表される最も適切な意味が彼の肚はらにあつた事はたしかであつた。明敏なお延の眼にそれが映つた時、彼女の昂奮こうふんはようやく喰くいとめられた。感情の潮うしおがまだ上のぼりはしまいかという

掛念^{けねん}で、暗^{あん}に頭を悩ませていた津田は助かった。次の彼には喰いとめた潮^{うしお}の勢^{いきおい}を、反対な方向へ逆用する手段を講ずるだけの余裕ができた。彼はお延を慰めにかかった。彼女の気に入りそうな文句を多量に使用した。沈着な態度を外部側^{そとがわ}にもっている彼は、また臨機に自分を相手なりに順応^{こうしや}させて行く巧者^{こうしや}も心得ていた。彼の努力ははたして空^{むな}しくなかった。お延は久しぶりに結婚以前の津田を見た。婚約当時の記憶が彼女の胸に蘇^{よみが}えった。

「夫は変ってるんじゃないかった。やっぱり昔の人だったんだ」
こう思ったお延の満足は、津田を窮地から救うに充分であった。暴風雨になろうとして、なり損^{そく}ねた波瀾^{はらん}はようやく収まつ

た。けれども事前^{じぜん}の夫婦は、もう事後^{じご}の夫婦ではなかった。彼ら
はいつの間にか吾^{われ}知らず相互^{さうご}の關係を変えていた。

波瀾^{はらん}の収まると共に、津田は悟った。

「畢竟女^{ひつきやう}は慰撫^{いぶ}しやすいものである」

彼は一場^{いちじやう}の風波^{ふうは}が彼に齎^{もたら}したこの自信を抱いてひそかに喜こん
だ。今までの彼は、お延^{のぶ}に対するごとに、苦手^{にがて}の感をどこかに起
さずにいられた事がなかった。女だと見下ろしながら、底氣味の
悪い思いをしなければならぬ場合^{ばあひ}が、日ごとに現前^{げんぜん}した。それ
は彼女の直覺であるか、または直覺の活作用とも見倣^{みな}される彼女
の機略^{きりやく}であるか、あるいはそれ以外の或物であるか、たしかな解^{かい}

剖^{ぼう}は彼にもまだできていなかったが、何しろ事實は事實に違いなかった。しかも彼自身自分の胸に畳み込んでおくぎりで、いまだかつて他^{ひと}に洩^もらした事のない事實に違いなかった。だから事實と云い条、その実は一個の秘密でもあった。それならばなぜ彼がこの明白な事實をわざと秘密に附していたのだろう。簡単に云えば、彼はなるべく己^{おの}れを尊^{とつと}く考がえたかったからである。愛の戦争という眼で眺めた彼らの夫婦生活において、いつでも敗者の位^い地に立^ちった彼には、彼でまた相当の慢心があった。ところがお延のために征服される彼はやむをえず征服されるので、心^{しん}から帰服するのではなかった。堂々と愛の擒^{とら}になるのではなくって、常に

騙し打だまうちに会っているのであつた。お延が夫の慢心を挫くじくところに気がつかないで、ただ彼を征服する点においてのみ愛の満足を感じずる通りに、負けるのが嫌きらいな津田も、残念だとは思ひながら、力及ばず組み敷かれるたびに降参するのであつた。この特殊な関係を、一夜いちやの苦説くぜつが逆さかにしてくれた時、彼のお延に対する考えは變るのが至当であつた。彼は今までこれほど猛烈に、また真正面に、上手うわてを引くように見えて、実は偽りのない下手したでに出たお延という女を見た例ためしがなかつた。弱点を抱だいて逃げまわりながら彼は始めてお延に勝つ事ができた。結果は明瞭めいりょうであつた。彼はようやく彼女を輕蔑けいべつする事ができた。同時に以前よりは余計に、彼女に

同情を寄せる事ができた。

お延にはまたお延で波瀾^{はらんご}後の変化が起りつつあった。今までかつてこういう態度で夫に向った事のない彼女は、一気に津田の弱点を衝^つく方に心を奪われ過ぎたため、ついぞ露^{あら}わした事のない自分の弱点を、かえって夫に示してしまったのが、何より先に残念の種になった。夫に愛されたいばかりの彼女には平常からわが腕に依頼する信念があった。自分は自分の見識を立て通して見せるという覚悟があった。もちろんその見識は複雑とは云えなかった。夫の愛が自分の存在上、いかに必要であろうとも、頭を下げて憐^{あわれ}みを乞うような見苦しい真似^{まね}はできないという意地に過ぎな

かった。もし夫が自分の思う通り自分を愛さないならば、腕の力で自由にして見せるという堅い決心であつた。のべつにこの決心を実行して来た彼女は、つまりのべつに緊張していると同じ事であつた。そうしてその緊張の極度はどこかで破裂するにきまつていた。破裂すれば、自分で自分の見識をぶち壊すのと同じ結果に陥^{おち}いるのは明瞭であつた。不幸な彼女はこの矛盾に気がつかずに邁進^{まいしん}した。それでとうとう破裂した。破裂した後で彼女はようやく悔いた。仕合せな事に自然は思ったより残酷でなかった。彼女は自分の弱点を浚^{さら}け出すと共に一種の報酬を得た。今までどんなに勝ち誇つても物足りた例のなかつた夫の様子が、少し変つた。

彼は自分の満足する見当に向いて一步近づいて来た。彼は明らかに妥協という字を使った。その裏に彼女の根限り掘り返そうと力めた秘密の潜在する事を暗に告白した。告白？。彼女はよく自分に念を押して見た。そうしてそれが黙認に近い告白に違いないという事を確かめた時、彼女は口惜しがると同時に喜こんだ。彼女はそれ以上夫を押さなかった。津田が彼女に対して気の毒という念を起したように、彼女もまた津田に対して気の毒という感じを持ち得たからである。

けれども自然は思ったより頑愚かたくなであつた。二人はこれだけで別れる事ができなかつた。妙な機はずみからいったん収まりかけた風波がもう少して盛り返されそうになつた。

それは昂奮こうふんしたお延の心持がやや平静に復した時の事であつた。今切り抜けて来た波瀾はらんの結果はすでに彼女の氣分に働らきかけていた。酔を感じる人が、その酔を利用するような態度で彼女は津田に向つた。

「じゃいつごろその温泉へいらつしやるの」

「ここを出たらすぐ行こうよ。身体からだのためにもその方が都合がよさそうだから」

「そうね。なるべく早くいらした方がいいわ。行くと事がきまったら以上」

津田はこれでまずよしと安心した。ところへお延は不意に出た。

「あたしもいつしよに行っていいんでしょう」

気の緩^{ゆる}んだ津田は急にひやりとした。彼は答える前にまず考えなければならなかった。連れて行く事は最初から問題にしていなかった。と云って、断る事はなおむずかしかった。断り方一つで、相手はどう変化するかも分らなかった。彼が何と返事をしたものだろうと思って分別^{ぶんべつ}するうちに大切の機は過ぎた。お延は催

促した。

「ね、行ってもいいんでしよう」

「そうだね」

「いけないの」

「いけない訳もないがね……」

津田は連れて行きたくない心の内を、しだいしだいに外へ押し出されそうになった。もし猜疑さいぎの眸ひとみが一度お延の眼の中に動いたら事はそれぎりであるとして見た彼は、実を云うと、お延と同じ心理状態の支配を受けていた。先刻さっきの波瀾から来た影響は彼にもう憑より移っていた。彼は彼でそれを利用するよりほかに仕方が

なかった。彼はすぐ「慰撫^{いぶ}」の二字を思い出した。「慰撫に限る。女は慰撫さえすればどうにかなる」。彼は今得たばかりのこの新らしい断案を提^ひさげて、お延に向った。

「行ってもいいんだよ。いいどころじゃない、実は行って貰^{もら}いたいんだ。第一一人じゃ不自由だからね。世話をして貰うだけでも、その方が都合がいいにきまつてるからね」

「ああ嬉^{うれ}しい、じゃ行くわ」

「ところがだね。……」

お延は厭^{いや}な顔をした。

「ところがどうしたの」

「ところがさ。宅はうちはどうする気かね」

「宅は時がいるから好いわ」

「好いわって、そんな子供見たいな呑気のんきな事を云っちゃ困るよ」

「なぜ。どこが呑気なの。もし時だけで不用心なら誰か頼んで来るわ」

お延は続けざまに留守居るすいとして適当な人の名を二三挙あげた。津田は拒こばめるだけそれを拒んだ。

「若い男は駄目だめだよ。時と二人ぎり置く訳にや行かないからね」
お延は笑い出した。

「まさか。——間違なんか起りっこないわ、わずかの間ですも

の」

「そうは行かないよ。けっしてそうは行かないよ」

津田は断乎^{だんこ}たる態度を示すと共に、考える風もして見せた。

「誰か適当な人はないもんかね。手頃なお婆さんか何かあるとちようど持つて来いだかな」

藤井にも岡本にもその他の方面にも、そんな都合の好い手の空^あいた人は一人もなかった。

「まあよく考えて見るさ」

この辺で話を切り上げようとした津田は的^{あて}が外^{はず}れた。お延は掴^{つか}んだ袖^{そで}をなかなか放さなかった。

「考えてない時には、どうするの。もしお婆さんがいなければ、あたしはどうしても行っっちゃ悪いの」

「悪いとは云やしないよ」

「だってお婆さんなんかいる訳がないじゃありませんか。考えないだってそのくらいの事は解わかってますわ。それより行って悪いなら悪いと判然はつきり云ってちようだいよ」

せっぱつまった津田はこの時不思議にまた好い云訳いいわけを思いついた。

「そりゃいざとなれば留守番なんかどうでも構わないさ。しかし時一人を置いて行くにしたところで、まだ困る事があるんだ。お

れは吉川の奥さんから旅費を貰もらうんだからね。他の金ひとを貰って夫婦連れで遊んで歩くように思われても、あんまりよくないじゃないか」

「そんなら吉川の奥さんからいただかないでも構わないわ。あの小切手があるから」

「そうすると今月分の払の方が差支えるよ」

「それは秀子さんの置いて行っただけがあるのよ」

津田はまた行きつまった。そうしてまた危あやうい血路けつろを開いた。

「少し小林に貸してやらなくっちゃならないんだぜ」

「あんな人に」

「お前はあんな人にと云うがね、あれでも今度遠い朝鮮へ行くんだからね。可哀想だよ。それにもう約束してしまったんだから、どうする訳にも行かないんだ」

お延は固より満足な顔をするはずがなかった。しかし津田はこれでどうかこうかその場だけを切り抜ける事ができた。

百五十二

後は話が存外楽に進行したので、ほどなく第二の妥協が成立した。小林に対する友誼を満足させるため、かつはいったん約束し

た言責^{げんせき}を果すため、津田はお延の貰^{もら}つて来た小切手の中^{うち}から、その幾分^さを割^さいて朝鮮行の贐^{はなむけ}として小林に贈る事にした。名義は固より貸すのであつたが、相手に返す腹のない以上、それを予算に組み込んで今後の的にする訳には行かないので、結果はつまりやる事になつたのである。もちろんそこへ行き着くまでにはお延にも多少の難色があつた。小林のような横着^{おつちやく}な男に金銭を恵むのはおろか、ちゃんとした証書を入れさせて、一時の用を足してやる好意すら、彼女の胸のどの隅^{すみ}からもあるはずはなかつた。のみならず彼女はややともすると、強^しいてそれを断行しようとする夫の裏側^{のぞ}を覗^{のぞ}き込むので、津田はそのたびに少なからず冷々^{ひやひや}した。

「あんな人に何だつてそんな親切を尽しておやりになるんだか、あたしにはまるで解らないわ」

こういう意味の言葉が二度も三度も彼女によつて繰り返された。津田が人情いってんぱり一点張でそれを相手にするけしき気色を見せないと、彼女はもう一步先の事まで云つた。

「だから訳をおっしゃいよ。こういう訳があるから、こうしなければ義理が悪いんだという事情さえ明瞭めいりようになれば、あの小切手をみんな上げても構わないんだから」

津田にはここが何より大事な関所なので、どうしてもお延を通させる訳に行かなかった。彼は小林を弁護する代りに、二人の過

去にある旧い交際と、その交際から出る懐かしい記憶とを挙げた。懐かしいという字を使つて非難された時には、仕方なしに、昔の小林と今の小林の相違にまで、説明の手を拡げた。それでも腑に落ちないお延の顔を見た時には、急に談話の調子を高尚にして、人道まで云々した。しかし彼の口にする人道はついに一個の功利説に帰着するので、彼は吾知らず自分の拵えた陷穽に向つて進んでいながら気がつかず、危うくお延から足を取られて、突き落されそうになる場合も出て来た。それを代表的な言葉でごく簡単に例で現わすと下のようになつた。

「とにかく困つてゐるんだからね、内地にいたたまれずに、朝鮮ま

で落ちて行こうてんだから、少しは同情してやってもよからう
じゃないか。それにお前はあいつの人格をむやみに攻撃するが、
そこに少し無理があるよ。なるほどあいつはしようない奴^{やつ}さ。
しようない奴には違^{ちが}ないけれども、あいつがこうな^{おこ}った因^{おこ}りを
よく考えて見ると、何でもないんだ。ただ不平だからだ。じゃな
ぜ不平だというと、金が取れないからだ。ところがあいつは愚^ぐ図^ず
でもなし、馬鹿でもなし、相当な頭を持ってるんだからね。不幸
にして正則の教育を受けなかったために、ああな^なったと思うと、
そりゃ気の毒になるよ。つまりあいつが悪いんじゃない境遇が悪
いんだと考えさえすればそれまでさ。要するに不幸な人なんだ」

これだけなら口先だけとしてもまず立派なのであるが、彼はついにそこで止まる事ができないのである。

「それにまだこういう事も考えなければならぬよ。ああ自暴棄（やけくそ）になつてゐる人間に逆（さか）らうと何をするか解（わか）らないんだ。誰とでも喧（けん）嘩（か）がしたい、誰と喧嘩をしても自分の得（とく）になるだけだつて、現にここへ来て公言して威張（えば）つてゐるんだからね、實際始末（お）に了えないよ。だから今もしおれがあいつの要求を跳ねつけるとすると、あいつは怒るよ。ただ怒るだけならいいが、きっと何かするよ。復讐（うち）をやるにきまつてゐるよ。ところがこつちには世間体（せけんてい）があり、向うにやそんなものがまるでないんだから、いざとなると敵（かな）いっこ

ないんだ。解ったかね」

ここまで来ると最初の人道主義はもうだいぶ崩れてしまう。しかしそれにしても、ここで切り上げさえすれば、お延は黙って点頭くよりほかに仕方がないのである。ところが彼はまだ先へ出るのである。

「それもあいつが主義としてただ上流社会を攻撃したり、または一般の金持を悪口するだけならいいがね。あいつのは、そうじゃないんだ、もっと実際的なんだ。まず最初に自分の手の届く所からだんだんに食い込んで行こうというんだ。だから一番災難なのはこれのおれだよ。どう考えてもここでおれ相当の親切を見せて、

あいつの感情を美しくして、そうして一日も早く朝鮮へ立って貰う
のが上策なんだ。でないといつどんな目に逢うか解ったもんじゃ
ない」

こうなるとお延はどうしてもまた云いたくなるのである。

「いくら小林が乱暴だって、あなたの方にも何かなくっちゃ、そ
んなに怖がる因縁がないじゃありませんか」

二人がこんな押問答をして、小切手の片をつけるだけでも、も
のの十分はかった。しかし小林の方がきまると共に、残りの所
置はすぐついた。それを自分の小遣として、任意に自分の嗜慾を
満足するという彼女の条件は直ちに成立した。その代り彼女は津

田といっしょに温泉へ行かない事になった。そうして温泉行の費用は吉川夫人の好意を受けるという案に同意させられた。

うそ寒さむの宵よいに、若い夫婦間に起った波瀾はらんの消長はこれでようやく尽きた。二人はひとまず別れた。

百五十三

津田の辛防しんぼうしなければならぬ手術後の経過は良好であつた。

というよりもむしろ順当に行つた。五日目が来た時、医者は予定通り彼のために全部のガーゼを取り替えてくれた後で、それを保

証した。

「至極^{しごく}好い具合です。出血も口元だけです。内部^{なか}の方は何ともありません」

六日目にも同じ治療法が繰り返された。けれども局部は前日より健康になっていた。

「出血はどうです。まだ止まり^とませんか」

「いや、もうほとんど止まりました」

出血の意味を解し得ない津田は、この返事の意味をも解し得なかった。好い加減に「もう癒^{なお}りました」という解釈をそれに付けて大変喜こんだ。しかし本式の事実は彼の考える通りにも行かな

かった。彼と医者の間に起った一場いちじょうの問答がその辺の消息を明らかにした。

「これが癒り損そくなったらどうなるんでしょう」

「また切るんです。そうして前よりも軽く穴が残るんです」

「心細いですな」

「なに十中八九は癒るにきまっています」

「じゃ本当の意味で全癒というと、まだなかなか時間がかかるんですね」

「早くて三週間遅くて四週間です」

「ここを出るのは？」

「出るのは明後日ぐらいで差支えありません」

津田はありがたがった。そうして出たらすぐ温泉に行こうと覚悟した。なまじい医者に相談して転地を禁じられてもすると、かえって神経を悩ますだけが損だと打算した彼はわざと黙っていた。それはほとんど平生の彼に似合わない粗忽そこつな遣口やりぐちであった。彼は甘んじてこの不謹慎を断行しようと決心しながら、肚はらの中ですでに自分の矛盾を承知しているので、何だか不安であった。彼は訊きかないでもいい質問を医者にかけてみたりした。

「括約筋かつやくきんを切り残したとおっしゃるけれども、それでどうして下からガーゼが詰つめられるんですか」

「括約筋はとば口にやありません。五分ほど引っ込んでます。それを下から斜はすに三分ほど削けずり上げた所があるのでです」

津田はその晩から粥かゆを食い出した。久しく麵麩パンだけで我慢していた彼の口には水ツぽい米の味も一種の新らしみであつた。趣味として夜寒よさむの粥を感じる能力を持たない彼は、秋の宵よいの冷たさを対照に置く薄粥うすがゆの暖かさを普通の俳人以上に珍重して啜すする事ができた。

療治の必要上、長い事止とめられていた便の疎通を計るために、彼はまた軽い下剤を飲まなければならなかつた。さほど苦くにもならなかつた腹の中が軽くなるに従つて、彼の気分もいつか軽く

なつた。身体からだの楽になつた彼は、寝転ねころんでただ退院の日を待つだけであつた。

その日も一晩明けるとすぐに来た。彼は車を持って迎いに來たお延の顔を見るや否や云つた。

「やっと歸れる事になつた訳かな。まあありがたい」

「あんまりありがたくもないでしょう」

「いやありがたいよ」

「宅うちの方が病院よりはまだましだとおっしゃるんでしょう」

「まあその辺かも知れないがね」

津田はいつもの調子でこう云つた後で、急に思い出したように

付け足した。

「今度はお前の拵こしらえてくれた纏袍どてらで助かったよ。綿が新らしいせいか大変着心地が好いね」

お延は笑いながら夫を冷嘲ひやかした。

「どうなすったの。なんだか急にお世辞せじが旨うまくおなりね。だけど、違ってるのよ、あなたの鑑定は」

お延は問題の纏袍を畳みながら、新らしい綿ばかりを入れたかった事実を夫に白状した。津田はその時着物を着換えていた。絞しぼりの模様の入った縮緬ちりめんの兵児帯へこおびをぐるぐる腰に巻く方が、彼にはむしろ大事な所作しよさであった。それほど軽く纏袍の中味を見てい

た彼の愛嬌は、正直なお延の返事を待ち受けるのでも何でもなかった。彼はただ「はあそうかい」と云ったぎりであった。

「お気に召したらどうぞ温泉へも持っていって下さい」

「そうして時々お前の親切でも思い出すかな」

「しかし宿屋で貸してくれる縋袍の方がずっとよかったり何かすると、いい恥っ掻きね、あたしの方は」

「そんな事はないよ」

「いえあるのよ。品質ものが悪いとどうしても損ね、そういう時には。親切なんかすぐどこかへ飛んでっちまうんだから」

無邪気なお延の言葉は、彼女の意味する通りの単純さで津田の

耳へは響かなかった。そこには一種のアイロニーが顫動^{せんどう}していた。縋^{とてら}袍^{シンボル}は何かの象徴であるらしく受け取れた。多少気味の悪くなった津田は、お延に背中を向けたままで、兵児^{へこおび}帯の先をこま結びに結んだ。

やがて二人は看護婦に送られて玄関に出ると、すぐそこに待たしてある車に乗った。

「さよなら」

多事な一週間の病院生活は、この一語でようやく幕になった。

目的の温泉場へ立つ前の津田は、既定されたプログラムの順序として、まず小林に会わなければならなかった。約束の日が来た時、お延から入用いりようの金を受け取った彼は笑いながら細君を顧みた。

「何だか惜しいな、あいつにこれだけ取られるのは」

「じゃ止よした方が好いわ」

「おれも止したいよ」

「止したいのになぜ止せないの。あたしが代りに行って断って来て上げましょうか」

「うん、頼んでもいいね」

「どこであの人にお逢あいになるの。場所さえおっしやれば、あたし行つて上げるわ」

お延が本気かどうかは津田にも分らなかつた。けれどもこういう場合に、大丈夫だと思つてつい笑談じょうたんに押すと、押したこつちがかえつて手古摺てこずらせられるくらいの事は、彼に困難な想像ではなかつた。お延はいざとなると口で云つた通りを真面まともに断行する女であつた。たとい違約であらうとあるまいと、津田を代表して、小林を撃退する役割なら進んで引き受けないとも限らなかつた。彼は危険区域へ踏み込まない用心をして、わざと話を不真面目ふまじめな方角へ流してしまつた。

「お前は見かけに寄らない勇氣のある女だね」

「それでも自分じゃあると思ってるのよ。けれどもまだ出した例^{ためし}がないから、實際どのくらいあるか自分にも分らないわ」

「いやお前に分らなくっても、おれにはちゃんと分ってるから、それでたくさんだよ。女のくせにそうむやみに勇氣なんか出された日にゃ、亭主が困るだけだからね」

「ちつとも困りゃしないわ。御亭主のために出す勇氣なら、男だって困るはずがないじゃないの」

「そりゃありがたい場合もたまには出て来るだろうがね」と云つた津田には固^{もと}より本氣に受け答えをするつもりもなかった。「今^{こん}

日^{にち}までそれほど感服に値する勇気を拝見した覚^{おぼえ}もないようだね」

「そりやその通りよ。だってちつとも外へ出さずにいるんですもの。これでも内側へ入って御覧なさい。なんぼあたしだってあなたの考えていらっしゃるほど太平じゃないんだから」

津田は答えなかった。しかしお延はやめなかった。

「あたしがそんなに気楽そうに見えるの、あなたには」

「ああ見えるよ。大いに気楽そうだよ」

この好い加減な無駄口の前に、お延は微^{かす}かな溜息^{ためいき}を洩^もらした後で云った。

「つまらないわね、女なんて。あたし何だって女に生れて来たん

でしょう」

「そりゃおれにかけ合ったって駄目だ。京都にいるお父さんかお母さんへ尻しりを持ち込むよりほかに、苦情の持ってきどころはないんだから」

苦笑したお延はまだ黙らなかつた。

「いいから、今に見ていらっしやい」

「何を」と訊きき返した津田は少し驚ろかされた。

「何でもいいから、今に見ていらっしやい」

「見ているが、いったい何だよ」

「そりゃ実際に問題が起って来なくっちゃ云えないわ」

「云えないのはつまりお前にも解^{わか}らないという意味なんじゃないか」

「ええそうよ」

「何だ下らない。それじゃまるで雲を掴^{つか}むような予言だ」

「ところがその予言が今にきつとあたるから見えていらっしやいというのよ」

津田は鼻の先でふんと云った。それと反対にお延の態度はだんだん真剣に近づいて来た。

「本当よ。何だか知らないけれども、あたし近頃^{しじゅう}始終^{しじゅう}そう思ってるの、いつか一度このお肚^{なか}の中にもってる勇気を、外へ出さな

くっちゃならない日が来るに違ちがないって」

「いつか一度？　だからお前まへのは妄想もうそうと同おんなじ事なんだよ」

「いいえ生涯しょうがいのうちでいつか一度じゃないのよ。近いうちなの。もう少ししたらのいつか一度なの」

「ますます悪くなるだけだ。近き将来において蛮勇ばんゆうなんか亭主ていしゅの前で発揮された日にや敵かなわない」

「いいえ、あなたのためによ。だから先刻さつきから云ってるじゃないの、夫のために出す勇氣だつて」

真面目まじめなお延のびの顔を見ていると、津田もしだいしだいに釣り込まれるだけであつた。彼の性格にはお延ほどの詩がなかった。そ

の代り多少気味の悪い事実が遠くから彼を威圧していた。お延の詩、彼のいわゆる妄想は、だんだん活躍し始めた。今まで死んでいるとばかり思つて、弄り廻していた鳥の翅が急に動き出すように見えた時、彼は変な気持がして、すぐ会話を切り上げてしまった。

彼は帯の間から時計を出して見た。

「もう時間だ、そろそろ出かけなくっちゃ」

こう云つて立ち上がった彼の後を送つて玄関に出たお延は、帽子かけから茶の中折を取つて彼の手に渡した。

「行つていらっしやい。小林さんによろしくつてお延が云つてた

と忘れずに伝えて下さい」

津田は振り向かないで夕方の冷たい空気の中に出た。

百五十五

小林と会見の場所は、東京で一番賑^{にぎ}やかな大通りの中ほどを、ちよつと横へ切れた所にあつた。向うから宅^{うち}へ誘^ういに寄^もつて貰^{もら}う不快を避けるため、またこつちで彼の下宿を訪^{たず}ねてやる面倒^{はづ}を省^{はぶ}くため、津田は時間をきめてそこで彼に落ち合う手順にしたのである。

その時間は彼が電車に乗っているうちに過ぎてしまった。しかし着物を着換えて、お延から金を受け取って、少しの間坐談ざだんをしていたために起ったこの遅刻は、何らの痛痒つうようを彼に与えるに足りなかった。有体ありていに云えば、彼は小林に対して克明に律義りちぎを守る細心の程度を示したくなかった。それとは反対に、少し時間を後おくらせても、放縦ほうしゅうな彼の鼻柱くじを挫くじいてやりたかった。名前は送別会だろうが何だろうが、その実金をやるものと貰うものとが顔を合せ席にきまつている以上、津田はたしかに優者であつた。だからその優者の特権をできるだけ緊張させて、主客しゅかくの位地いちちをあらかじめ作っておく方が、相手の驕慢きようまんを未前に防ぐ手段として、彼には

得策であつた。利害を離れた単なる意趣返しとしてもその方が面白かつた。

彼はごうごう鳴る電車の中で、時計を見ながら、ことによるとこれでもまだ横着な小林には早過ぎるかも知れないと考えた。もしあまり早く行き着いたら、一通り夜店でも素見^{ひやか}して、慾^{よく}の皮で硬く張つた小林の予期を、もう少し焦^じらしてやろうとまで思案した。

停留所で降りた時、彼の眼の中を通り過ぎた燭光^{あかり}の数は、夜の都の活動を目覚しく物語るに充分なくらい、右往左往へちらちらした。彼はその間に立って、目的の横町へ曲る前に、これらの燭^{あか}

光と共に十分ぐらい動いて歩こうか歩くまいかと迷った。ところが顔の先へ押し付けられた夕刊を除けて、四辺を見廻した彼は、急におやと思わざるを得なかった。

もうだいぶ待ち草臥くたびれているに違ないと仮定してかかった小林は、案外にも向う側に立っていた。位地いちは津田の降りた舗床ペーヴメントと車道へだを一つ隔てた四つ角の一端なので、二人の視線が調子よく合わない以上、夜と人とちらちらする燭光が、相互の認識を遮さへぎる便利があった。のみならず小林は真面まともにこつちを向いていなかった。彼は津田のまだ見知らない青年と立談たちばなしをしていた。青年の顔は三分の二ほど、小林のは三分の一ほど、津田の方角から見える

だけなので、彼はほぼ露見の恐れなしに、自分の足の停とまった所から、二人の模様を注意して観察する事ができた。二人はけつして余所見よそみをしなかった。顔と顔を向き合せたまま、いつまでも同じ姿勢を崩くずさない彼らの体ていが、ありありと津田の眼に映るにつれて、真面目まじめな用談の、互いの間に取り換わされている事は明瞭めいりょうに解わかった。

二人の後うしろには壁があつた。あいにく横側に窓が付いていないので、強い光はどこからも射さなかった。ところへ南から来た自動車自動車が、大きな音を立てて四つ角を曲ろうとした。その時二人は自動車の前側に装置してある巨大な灯光を満身に浴びて立った。津

田は始めて青年の容貌ようぼうを明かに認める事ができた。蒼白あおしろい血色は、帽子の下から左右に垂れている、幾力月となく刈り込まない※※さんさん（長く垂れ下がる）たる髪の毛と共に、彼の視覚を冒おかした。彼は自働車の過ぎ去ると同時に踵きびすを回めぐらした。そうして二人の立っている舗道ほどうを避けるように、わざと反対の方向へ歩き出した。

彼には何の目的もなかった。はなやかに電灯で照らされた店を一軒ごとに見て歩く興味は、ただ都会的で美しいというだけに過ぎなかった。商買が違うにつれて品物が変化する以外に、何らの複雑な趣おもむきは見出みいだされなかった。それにもかかわらず彼は到いたる処

に視覚の満足を味わった。しまいに或唐物屋とうぶつやの店先に飾ってあるハイカラな襟飾ネクタイを見た時に、彼はとうとうその家の中へ入って、自分の欲しいと思うものを手に取って、ひねくり廻したりなどした。

もうよかろうという時分に、彼は再び取って返した。舗道の上に立っていた二人の影ははたしてどこかへ行ってしまった。彼は少し歩調を早めた。約束の家の窓からは暖かそうな光が往来へ射していた。煉瓦れんが作りで窓が高いのと、模様のある玉子色の布きぬに遮さへぎられて、間接に夜の中へ光線が放射されるので、通り際とおぎわに見上げた津田の頭に描き出されたのは、穏やかな瓦斯ガス暖炉だんろを供えた品ひん

の好い食堂であつた。

大きなブロックの片隅に、形容した言葉でいうと、むしろひっそり構えているその食堂は、大して広いものではなかつた。津田がそこを知り出したのもつい近頃であつた。長い間仏蘭西^{フランス}とかに公使をしていた人の料理番が開いた店だから旨い^{うまい}のだと友人に教えられたのが原^{もと}で、四五遍食いに來た因縁^{いんねん}を措^おくと、小林をそこへ招き寄せる理由は他に何にもなかつた。

彼は容赦^{ようしや}なく扉^{とびら}を押して内へ入つた。そうしてそこに案のごとく少し手持無沙汰^{てもちぶさた}でもあるような風をして、真面目^{まじめ}な顔を夕刊か何かの前に向けている小林を見出した。

百五十六

小林は眼を上げてちよつと入口の方を見たが、すぐその眼を新聞の上に落してしまった。津田は仕方なしに無言のまま、彼の坐^{すわ}っている食卓^{テーブル}の傍^{そば}まで近寄って行つてこつちから声をかけた。

「失敬。少し遅くなった。よつぽど待たしたかね」

小林はようやく新聞を畳んだ。

「君時計をもってるだろう」

津田はわざと時計を出さなかった。小林は振り返つて正面の壁の上に掛っている大きな柱時計を見た。針は指定の時間より四十

分ほど先へ出ていた。

「実は僕も今来たばかりのところなんだ」

二人は向い合って席についた。周囲には二組ばかりの客がいるだけなので、そうしてその二組は双方ともに相当の扮装みなりをした婦人づれなので、室内は存外静かであつた。ことに一間ほど隔へだてて、二人の横に置かれた瓦斯ガスストーブの火の色が、白いものの目立つ清楚せいそな室へやの空氣に、恰好かっこうな温ぬくもりを与えた。

津田の心には、変な対照が描き出された。この間の晩小林のお蔭かげで無理に引つ張り込まれた怪しげな酒場バーの光景がありありと彼の眼に浮んだ。その時の相手を今度は自分の方でここへ案内した

という事が、彼には一種の意味で得意であつた。

「どうだね、ここの宅^{うち}は。ちよつと綺麗^{きれい}で心持が好いじゃないか」

小林は気がついたように四^{ぐる}辺を見廻した。

「うん。ここには探偵はいないようだね」

「その代り美しい人がいるだろう」

小林は急に大きな声を出した。

「ありやみんな芸者なんか君」

ちよつときまりの悪い思いをさせられた津田は叱るように云つた。

「馬鹿云うな」

「いや何とも限らないからね。どこにどんなものがあるか分からない世の中だから」

津田はますます声を低くした。

「だって芸者はあんな服装なりをしやしないよ」

「そうか。君がそう云うなら確たしかだろう。僕のような田舎いなかものには第一その区別が分らないんだから仕方がないよ。何でも綺麗な着物さえ着ていればすぐ芸者だと思っちまうんだからね」

「相変らず皮肉ひにくるな」

津田は少し悪い気色きしよくを外へ出した。小林は平気であつた。

「いや皮肉るんじゃないよ。実際僕は貧乏の結果そっちの方の眼がまだ開いていないんだ。ただ正直にそう思うだけなんだ」

「そんならそれでいいさ」

「よくなくっても仕方がない訳だがね。しかし事実どうだろう君」

「何が」

「事実当世にいわゆるレデーなるものと芸者との間に、それほど区別があるのかね」

津田は空っ惚ける事の得意なこの相手の前に、真面目な返事を与える子供らしさを超越して見せなければならなかった。同時に

何とかして、ゴツンと喰^{くら}わしてやりたいような気もした。けれども彼は遠慮した。というよりも、ゴツンとやるだけの言葉が口へ出て来なかった。

「笑談^{じょうたん}じゃない」

「本当に笑談^{じょうたん}じゃない」と云った小林はひよいと眼を上げて津田の顔を見た。津田はふと気がついた。しかし相手に何か考えがあるんだなと悟った彼は、あまりに伶俐^{りこう}過ぎた。彼には澄ましてそこを通り抜けるだけの腹がなかった。それでいて当らず障^{さわ}らず話を傍^{わき}へ流すくらいの技巧は心得ていた。彼は小林に捕^{つか}まらなければならなかった。彼は云った。

「どうだ君ここの料理は」

「ここの料理もどこの料理もたいてい似たもんだね。僕のような味覚の発達しないものには」

「不^{まず}味いかい」

「不味かない、旨^{うま}いよ」

「そりゃ好^{あんばい}い案配だ。亭主が自分でクッキングをやるんだから、ほかよりや少しはましかも知れない」

「亭主がいくら腕を見せたって、僕のような口^{かな}に合っちゃ敵^{かな}わないよ。泣くだけだあね」

「だけど旨けりやそれでいいんだ」

「うん旨けりやそれでいい訳だ。しかしその旨さが十銭均一の一品料理ひん ろんと同じ事だと云って聞かせたら亭主も泣くだろうじやないか」

津田は苦笑するよりほかに仕方がなかった。小林は一人でしゃべった。

「いったい今の僕にや、仏蘭西料理フランスだから旨いの、英吉利料理イギリスだから不味ののって、そんな通つうをふり廻す余裕なんかまるでないんだ。ただ口へ入るから旨いだけの事なんだ」

「だってそれじゃなぜ旨いんだか、理由わけが解わからなくなるじやないか」

「解り切ってるよ。ただ飢^{ひも}じいから旨いのさ。その他に理窟^{りくつ}も糸^{へち}瓜^まもあるもんかね」

津田はまた黙らせられた。しかし二人の間に続く無言が重く胸に応^{こた}えるようになった時、彼はやむをえずまた口を開こうとして、たちまち小林のために機先を制せられた。

百五十七

「君のような敏感者から見たら、僕ごとき鈍^{どんぶつ}物は、あらゆる点で軽蔑^{けいべつ}に値^{あた}しているかも知れない。僕もそれは承知している、軽蔑

されても仕方がないと思っている。けれども僕には僕でまた相当の云草があるんだ。僕の鈍は必ずしも天賦の能力に原因しているとは限らない。僕に時を与えよだ、僕に金を与えよだ。しかる後、僕がどんな人間になって君らの前に出現するかを見よだ」

この時小林の頭には酒がもう少し廻っていた。笑談とも真面目とも片のつかない彼の気焰には、わざと酔の力を藉ろうとする鬱散の傾きが見えて来た。津田は相手の口にする言葉の価値を正面から首肯うべく余儀なくされた上に、多少彼の歩き方につき合う必要を見出した。

「そりや君のいう通りだ。だから僕は君に同情しているんだ。君

だってそのくらいの事は心得ていてくれるだろう。でなければ、
こうやって、わざわざ会食までして君の朝鮮行ちようせんいきを送る訳がないか
らね」

「ありがとう」

「いや嘘うそじゃないよ。現にこの間もお延にその訳をよく云って聴き
かせたくらいなもの」

胡散臭うさんくさいなという眼が小林の眉まゆの下で輝やいた。

「へええ。本当ほんとかい。あの細君の前で僕を弁護してくれるなん
て、君にもまだ昔の親切が少しは残っていると見えるね。しかしそ
りや……。細君は何と云ったね」

津田は黙って懐^{ふところ}へ手を入れた。小林はその所作^{しよさ}を眺めながら、わざとそれを止め^やさせるように追加した。

「ははあ。弁護の必要があつたんだな。どうも変だと思ったら」

津田は懐へ入れた手を、元の通り外へ出した。「お延の返事はここにある」といって、綺麗^{きれい}に持って来た金を彼に渡すつもりでいた彼は躊躇^{ちゅうちゅう}した。その代り話頭^{わとう}を前へ押し戻した。

「やはり人間は境遇次第だね」

「僕は余裕次第だというつもりだ」

津田は逆^{さか}らわなかった。

「そうさ余裕次第とも云えるね」

「僕は生れてから今日までぎりぎり決着の生活をして来たんだ。まるで余裕というものを知らず生きて来た僕が、贅沢三昧わがまま三昧に育った人とどう違うと君は思う」

津田は薄笑いをした。小林は真面目であつた。

「考えるまでもなくここにいないか。君と僕さ。二人を見較べればすぐ解るだろう、余裕と切迫で代表された生活の結果は」

津田は心の中でその幾分を点頭いた。けれども今さらそんな不平を聴いたって仕方がないと思つているところへ後が来た。

「それでどうだ。僕は始終君に輕蔑される、君ばかりじゃない、

君の細君からも、誰からも軽蔑される。——いや待ちたまえまだいう事があるんだ。——それは事実さ、君も承知、僕も承知の事実さ。すべて先刻^{さつき}云った通りさ。だが君にも君の細君にもまだ解らない事がここに一つあるんだ。もちろん今さらそれを君に話したってお互いの位地^{いちち}が変る訳でもないんだから仕方がないようなものの、これから朝鮮へ行けば、僕はもう生きて再び君に会う折がないかも知れないから……」

小林はここまで来て少し昂奮^{こうふん}したような気色^{けしき}を見せたが、すぐその後から「いや僕の事だから、行つて見ると朝鮮も案外なので、厭^{いや}になつてまたすぐ歸つて来ないとも限らないが」と正直な

ところを付け加えたので、津田は思わず笑い出してしまった。小林自身もいったん頓挫とんざしてからまた出直した。

「まあ未来の生活上君の参考にならないとも限らないから聴きたまえ。実を云うと、君が僕を軽蔑している通りに、僕も君を軽蔑しているんだ」

「そりゃ解ってるよ」

「いや解らない。軽蔑けいべつの結果はあるいは解ってるかも知れないが、軽蔑の意味は君にも君の細君にもまだ通じていないよ。だから君の今夕こんゆうの好意に対して、僕はまた留別りゅうべつのために、それを説明して行こうてんだ。どうだい」

「よからう」

「よくないたって、僕のような一文^{いちもん}なしじゃほかに何も置いて行くものがないんだから仕方がなからう」

「だからいいよ」

「黙って聴くかい。聴くなら云うがね。僕は今君の御馳走^{ごちそう}になつて、こうしてぱくぱく食つてる仏蘭西^{フランス}料理も、この間の晩君を御招待申して叱^{なぐ}られたあの汚^{きた}らしい酒場^{バー}の酒も、どっちも無差別に旨^{うま}いくらい味覚の発達しない男なんだ。そこを君は軽蔑するだらう。しかるに僕はかえってそこを自慢にして、軽蔑する君を逆に軽蔑しているんだ。いいかね、その意味が君に解ったかね。考

えて見たまえ、君と僕がこの点においてどっちが窮屈で、どっちが自由だか。どっちが幸福で、どっちが束縛を余計感じているか。どっちが太平でどっちが動揺しているか。僕から見ると、君の腰は始終しじゅうぐらついているよ。度胸が坐すわってないよ。厭いやなものをどこまでも避けたがって、自分の好きなものをむやみに追おっかけたがってるよ。そりやなぜだ。なぜでもない、なまじいに自由が利きくためさ。贅ぜいたく沢をいう余地があるからさ。僕のように窮地に突き落されて、どうしても勝手にしやがれという気分になれないからさ」

津田はてんから相手を見縊みくびっていた。けれども事実を認めない

訳には行かなかった。小林はたしかに彼よりずうずうしく出来上っていた。

百五十八

しかし小林の説法にはまだ後があつた。津田の様子を見澄ました彼は突然思いがけない所へ舞い戻つて来た。それは会見の最初ちよつと二人の間に点綴てんてつされながら、前後の勢いきおいですぐどこかへ流されてしまった問題にほかならなかった。

「僕の意味はもう君に通じている。しかし君はまだなるほどとい

う心持になれないようだ。矛盾だね。僕はその訳を知ってるよ。第一に相手が身分も地位も財産も一定の職業もない僕だという事が、聡明^{そうめい}な君を煩^{わづ}わしているんだ。もしこれが吉川夫人か誰かの口から出るなら、それがもつとずつとつまらない説でも、君は襟^{えり}を正して聴くに違ないんだ。いや僕の僻^{ひがみ}でも何でもない、争うべからざる事実だよ。けれども君考えなくっちゃいけないぜ。僕だからこれだけの事が云えるんだという事を。先生だって奥さんだって、そこへ行くと駄目だという事も心得ておきたまえ。なぜだ？ なぜでもないよ。いくら先生が貧乏したって、僕だけの経験^なは嘗^なめていないんだからね。いわんや先生以上に樂をして生き

て来た彼輩かのはいにおいてをやだ」

彼輩とは誰の事だか津田にもよく解らなかつた。彼はただ腹の中で、おおかた吉川夫人だの岡本だのを指さすのだろうと思つたぎりであつた。實際小林は相手にそんな質問をかけさせる余地を与えないで、さつさと先へ行つた。

「第二にはだね。君の目下の境遇が、今僕の云つたような助言じょごん——だか忠告だか、または単なる知識の供給だか、それは何でも構わないが、とにかくそんなものに君の注意を向ける必要を感じさせないのだ。頭では解る、しかし胸では納得なっとくしない、これが現在の君なんだ。つまり君と僕とはそれだけ懸絶しているんだから仕

方がないと跳ねつけられればそれまでだが、そこに君の注意を払
わせたいのが、実は僕の目的だ、いいかね。人間の境遇もしくは
位地の懸絶といったところで大したものじゃないよ。本式に云え
ば十人が十人ながらほぼ同じ経験を、違った形式で繰り返してい
るんだ。それをもっと判然云うとね、僕は僕で、僕に最も切実な
眼でそれを見るし、君はまた君で、君に最も適当な眼でそれを見
る、まあそのくらいの違だろうじゃないか。だからさ、順境にあ
るものがちよつと面喰うか、迷児つくか、蹴爪ずくかすると、そ
らすぐ眼の球の色が変わって来るんだ。しかしいくら眼の球の色が
変ったって、急に眼の位置を変える訳には行かないだろう。つま

り君に一朝事いちぢうじがあつたとすると、君は僕のこの助言をきつと思ひ出さなければならなくなるというだけの事さ」

「じゃよく氣をつけて忘れないようにしておくよ」

「うん忘れずにいたまえ、必ず思ひ当る事が出て来るから」

「よろしい。心得たよ」

「ところがいくら心得たつて駄目だめなんだからおかしいや」

小林はこう云つて急に笑い出した。津田にはその意味が解らなかつた。小林は訊きかれない先に説明した。

「その時ひよつと氣がつくとするぜ、いいかね。そうしたらその時の君が、やつという掛声かけこえと共に、早変りができるかい。早変り

をしてこの僕になれるかい」

「そいつは解らないよ」

「解らなかない、解ってるよ。なれないにきまつてるんだ。憚りながらここまで来るには相当の修業が要るんだからね。いかに痴鈍な僕といえども、現在の自分に対してはこれで血の代を払ってるんだ」

津田は小林の得意が癢に障った。此奴が狗のような毒血を払って、はたして何物を掴んでいる？　こう思った彼はわざと輕蔑の色を面に現わして訊いて見た。

「それじゃ何のためにそんな話を僕にして聴かせるんだ。たとい

僕が覚えていたって、いざという場合の役にや立たないじゃないか」

「役にや立つまいよ。しかし聴かないよりましじゃないか」

「聴かない方がましなくらいだ」

小林は嬉し^{うれ}そうに身体^{からだ}を椅子^{いす}の背に靠^{もた}せかけてまた笑い出した。

「そこだ。そう来るところがこっちの思う壺^{つぼ}なんだ」

「何をいうんだ」

「何も云やしない、ただ事実を云うのさ。しかし説明だけはしてやろう。今に君がそこへ追いつめられて、どうする事もできなく

なつた時に、僕の言葉を思い出すんだ。思い出すけれども、ちつとも言葉通りに実行はできないんだ。これならなまじいあんな事を聴いておかない方がよかつたという気になるんだ」

津田は厭いやな顔をした。

「馬鹿、そうすりゃどこがどうするんだ」

「どうもしないさ。つまり君の輕蔑けいべつに対する僕の復讐ふくしゅうがその時始めて実現されるというだけさ」

津田は言葉を改めた。

「それほど君は僕に敵意をもってるのか」

「どうして、どうして、敵意どころか、好意精一杯というところ

だ。けれども君の僕を軽蔑しているのはいつまで行っても事実だろう。僕がその裏を指摘して、こっちから見るとその君にもまた軽蔑すべき点があると注意しても、君は乙おつに高くとまって平気でいるじゃないか。つまり口じゃ駄目だ、実戦で来いという事になるんだから、僕の方でもやむをえずそこまで行って勝負を決しようというだけの話だあね」

「そうか、解った。——もうそれぎりかい、君のいう事は」

「いやどうして。これからいよいよ本論に入ろうというんだ」

津田は一気に洋盃コップを唇くちびるへあてがって、ぐっと麦酒ビールを飲み干した

小林の様子を、少し呆あきれながら眺めた。

百五十九

小林は言葉を継ぐ前に、洋盃を下へ置いて、まず室内を見渡した。女伴おんなづれの客のうち、一組の相手は洗指盆フインガーボールの中へ入れた果物を食った後の手を、袂たもとから出した美しい手帛ハンケチで拭いていた。彼の筋向うに席を取って、先刻さつきから時々自分達の方を偷ぬすむようにして見る二十五六の方は、珈琲茶碗コーヒーぢゃわんを手にしながら、男の吹かす煙草たばこの煙を眺めて、しきりに芝居の話をしていた。両方とも彼らより先に来ただけあって、彼らより先に席を立つ順序に、食事の方の都合も進行しているらしく見えた時、小林は云った。

「やあちょうど好い。まだいる」

津田はまたはっと思った。小林はきっと彼らの気を悪くするよ
うな事を、彼らに聴こえようがしに云うに違なかつた。

「おいもう好い加減に止せよ」

「まだ何にも云やしないじゃないか」

「だから注意するんだ。僕の攻撃はいくらでも我慢するが、縁も
ゆかりもない人の悪口などは、ちつと慎しんでくれ、こんな所へ
来て」

「厭いやに小心だな。おおかた場末の酒場バとここといっしよにされ
ちやたまらないという意味なんだろう」

「まあそうだ」

「まあそうだなら、僕のごとき無頼漢ぶらいかんをこんな所へ招待するのが間違だ」

「じゃ勝手にしろ」

「口で勝手にしろと云いながら、内心ひやひやしているんだろう」

津田は黙ってしまった。小林は面白そうに笑った。

「勝ったぞ、勝ったぞ。どうだ降参したろう」

「それで勝ったつもりなら、勝手に勝ったつもりでいるがいい」

「その代り今後ますます貴様を輕蔑けいべつしてやるからそう思えだろ

う。僕は君の軽蔑なんか屁^へとも思っちやいないよ」

「思わなけりや思わないでもいいさ。五月蠅^{うるさ}い男だな」

小林はむっとした津田の顔を覗^{のぞ}き込むようにして見つめながら云った。

「どうだ解ったか、おい。これが実戦というものだぜ。いくら余裕があつたつて、金持に交際があつたつて、いくら氣位を高く構えたつて、実戦において敗北すりやそれまでだろう。だから僕が先刻^{さつき}から云うんだ、実地を踏^ふんで鍛^{きた}え上げない人間は、木偶^{でく}の坊^{ぼう}と^{おん}なじ事だつて」

「そうだそうだ。世の中で擦^すれっ枯^からしと酔^よ払いに敵^{かな}うものは一

人もないんだ」

何か云うはずの小林は、この時返事をする代りにまた女伴おんなづれの方を一順見廻いちじゆんした後で、云った。

「じやいよいよ第三だ。あの女の立たないうちに話してしまわないと気がすまない。好いかね、君、先刻の続きだぜ」

津田は黙って横を向いた。小林はいつこう構わなかった。

「第三にはだね。すなわち換言すると、本論に入って云えばだね。僕は先刻あすこにいる女達を捕つかまえて、ありや芸者かって君に聴いて叱しかられたね。君は貴婦人に対する礼義を心得ない野人として僕を叱ったんだろう。よろしい僕は野人だ。野人だから芸者

と貴婦人との区別が解らないんだ。それで僕は君に訊^きいたね、
いったい芸者と貴婦人とはどこがどう違うんだって」

小林はこう云いながら、三度目の視線をまた女伴の方に向け
た。手帛^{ハンケチ}で手を拭いていた人は、それを合図のように立ち上っ
た。残る一人^{いちにん}も給仕を呼んで勘定を払った。

「とうとう立っちまった。もう少し待ってると面白いところへ来
るんだがな、惜しい事に」

小林は出て行く女伴の後影^{うしろかげ}を見送った。

「おやおやもう一人も立つのか。じゃ仕方がない、相手はやっぱ
り君だけだ」

彼は再び津田の方へ向き直った。

「問題はそこだよ、君。僕が仏蘭西料理と英吉利料理を食い分ける事ができずに、糞と味噌をいっしょにして自慢すると、君は相手にしない。たかが口腹の問題だという顔をして高を括っている。しかし内容は一つものだけ、君。この味覚が発達しないのも、芸者と貴婦人を混同するのも」

津田はそれがどうしたと云わぬばかりの眼を翻がえして小林を見た。

「だから結論も一つ所へ帰着しなければならぬというのさ。僕は味覚の上において、君に軽蔑されながら、君より幸福だと主張

するごとく、婦人を識別する上においても、君に軽蔑されながら、君より自由な境遇に立っていると断言して憚はばからないのだ。つまり、あれは芸者だ、これは貴婦人だなんて鑑識があればあるほど、その男の苦痛は増して来るというんだ。なぜと云って見たまえ。しまいには、あれも厭いや、これも厭いやだろう。あるいはこれではなくっちゃいけない、あれでなくっちゃいけないだろう。窮屈千万じゃないか」

「しかしその窮屈千万が好きなら仕方なからう」

「来たな、とうとう。食物くいものだと相手にしないが、女の事になると、やっぱり黙っていられなくなると見えるね。そこだよ、そこ

を實際問題について、これから僕が論じようというんだ」

「もうたくさんだ」

「いやたくさんじゃないらしいぜ」

二人は顔を見合わせて苦笑した。

百六十

小林は旨^{うま}く津田を釣り寄せた。それと知った津田は考えがあるので、小林にわざと釣り寄せられた。二人はとうとう際^{きわ}どい所へ入り込まなければならなくなった。

「例^{たと}えばだね」と彼が云い出した。「君はあの清子^{きよこ}さんという女に熱中していたろう。ひとしきりは、何^{なん}でもかでもあの女でなければならぬような事を云ってたろう。そればかりじゃない、向うでも天下に君一人よりほかに男はないと思ってるように解釈していたろう。ところがどうだい結果は」

「結果は今のごとくさ」

「大變淡泊^{さつぱ}しているじゃないか」

「だってほかにしようがなかろう」

「いや、あるんだろう。あっても乙^{おつ}に氣取^{きど}って澄ましているんだろう。でなければ僕に隠して今でも何かやってるんだろう」

「馬鹿いうな。そんな出鱈目でたらめをむやみに口走るととんだ間違になる。少し気をつけてくれ」

「実は」と云いかけた小林は、その後あとを知ってるかと云わぬばかりの様子をした。津田はすぐ訊きたくなった。

「実はどうしたんだ」

「実はこの間あいだ君の細君にすっかり話しちまったんだ」

津田の表情がたちまち変った。

「何を？」

小林は相手の調子と顔つきを、噛かんで味わいでもするようになり、しばらく間まをおいて黙っていた。しかし返事を表へ出した時は、

もう態度を一変していた。

「嘘^{うそ}だよ。実は嘘だよ。そう心配する事はないよ」

「心配はしない。今になってそのくらいの事を云^いつけられたって」

「心配しない？　そうか、じゃこっちも本当だ。実は本当だよ。みんな話しちまったんだよ」

「馬鹿ッ」

津田の声は案外大きかった。行儀よく椅子^{いす}に腰をかけていた給仕の女が、ちよつと首を上げて眼をこっちへ向けたので、小林はすぐそれを材料にした。

「貴婦人^{レディー}が驚ろくから少し静かにしてくれ。君のような無頼漢^{ぶらいかん}といっしょに酒を飲むと、どうも外聞が悪くていけない」

彼は給使^{きゆうじ}の女の方を見て微笑して見せた。女も微笑した。津田一人怒^{おこ}る訳に行かなかった。小林はまたすぐその機に付け込んだ。

「いったいあの顛末^{てんまつ}はどうしたのかね。僕は詳しい事を聴^きかなかったし、君も話さなかった、のじゃない、僕が忘れちゃったのか。そりやどうでも構わないが、ありや向うで逃げたのかね、あるいは君の方で逃げたのかね」

「それこそどうでも構わないじゃないか」

「うん僕としては構わないのが当然だ。また実際構っちゃいない。が、君としてはそうは行くまい。君は^{おおかま}大構いだろう」

「そりや当り前さ」

「だから先刻^{さつき}から僕が云うんだ。君には余裕があり過ぎる。その余裕が君をしてあまりに贅沢^{ぜいたく}ならしめ過ぎる。その結果はどうかというと、好きなものを手に入れるや否や、すぐその次のものが欲しくなる。好きなものに逃げられた時は、地団太^{じだんだ}を踏んで口惜^{くや}しがる」

「いつそんな様^{よう}を僕がした」

「したともさ。それから現にしつつあるともさ。それが君の余裕

に崇たられてゐる所以ゆゑんだね。僕の最も痛快に感ずるところだね。貧ひん賤せんが富貴ふうきに向つて復讐ふくしゅうをやつてゐる因果応報いんがおうほうの理だね」

「そう頭から自分の掬こしうえた型かたで、他ひとを評価する気ならそれまでだ。僕には弁解の必要がないだけだから」

「ちつとも自分で型なんか掬こえていやしないよ僕は。これでも実際の君を指摘さししているつもりなんだから。分らなけりや、事実で教えてやろうか」

教えるとも教えるなとも云わなかつた津田は、ついに教えられなければならなかつた。

「君は自分の好みでお延のぶさんを貰もらつたろう。だけれども今の君は

けっしてお延さんに満足しているんじゃないかろう」

「だって世の中に完全なものない以上、それもやむをえないじゃないか」

「という理由をつけて、もっと上等なのを探し廻る気だろう」

「人間の悪い事を云うな、失敬な。君は実際自分でいう通りの無頼漢だね。観察の下卑て皮肉なところから云っても、言動の無遠慮で、粗野なところから云っても」

「そうしてそれが君の輕蔑に値する所以なんだ」

「もちろんさ」

「そらね。そう来るから畢竟口先じゃ駄目なんだ。やッぱり実戦

でなくっっちゃ君は悟れないよ。僕が予言するから見ている。今に戦いが始まるから。その時ようやく僕の敵でないという意味が分るから」

「構わない、擦れっ枯らしに負けるのは僕の名誉だから」

「強情だな。僕と戦うんじゃないぜ」

「じゃ誰と戦うんだ」

「君は今すでに腹の中で戦いつつあるんだ。それがもう少しすると実際の行為になって外へ出るだけなんだ。余裕が君を煽動して無役の負戦をさせるんだ」

津田はいきなり懷中から紙入を取り出して、お延と相談の上、

賤別せんべつの用意に持って来た金を小林の前へ突きつけた。

「今渡しておくから受取っておけ。君と話していると、だんだんこの約束を履行するのが厭いやになるだけだから」

小林は新らしい十円紙幣さつの二つに折れたのを広げて丁寧に、枚数を勘定した。

「三枚あるね」

百六十一

小林は受け取ったものを、赤裸あかはだかのまま無雑作むぞうさに背広せびろの隠袋ポケットの中

へ投げ込んだ。彼の所作しよさが平淡であつたごとく、彼の礼の云い方かたも横着であつた。

「サンクス。僕は借りる気だが、君はくれるつもりだろうね。いかなとなれば、僕に返す手段のない事を、また返す意志のない事を、君は最初から輕蔑の眼をもつて、認めているんだから」

津田は答えた。

「無論やつたんだ。しかし貰もらつてみたら、いかな君でも自分の矛盾に気がつかずにはいられまい」

「いやいっこう気がつかない。矛盾とはいったい何だ。君から金を貰うのが矛盾なのか」

「それでもないがね」と云った津田は上から下を見下すような態度をとった。「まあ考えて見たまえ。その金はい今まで僕の紙入の中にあつたんだぜ。そうして転瞬てんしゅんの間に君の隠袋の裏に移転してしまつたんだぜ。そんな小説的の言葉を使うのが厭なら、もつと判然はつきり云おうか。その金の所有権を急に僕から君に移したものは誰だ。答えて見ろ」

「君さ。君が僕にくれたのさ」

「いや僕じゃないよ」

「何を云うんだな禅坊主の寝言ねごと見たいな事を。じゃ誰だい」

「誰でもない、余裕さ。君の先刻さつきから攻撃している余裕がくれた

んだ。だから黙ってそれを受け取った君は、口でむちゃくちやに
余裕をぶちのめしながら、その実余裕の前にもう頭を下げている
んだ。矛盾じゃないか」

小林は眼をぱちぱちさせた後であとこう云った。

「なるほどな、そう云えばそんなものか知ら。しかし何だかおか
しいよ。実際僕はちっともその余裕なるものの前に、頭を下げて
る気がしないんだもの」

「じゃ返してくれ」

津田は小林の鼻の先へ手を出した。小林は女のように柔らかかそ
うなその掌てのひらを見た。

「いや返さない。余裕は僕に返せと云わないんだ」

津田は笑いながら手を引き込めた。

「それみろ」

「何がそれみろだ。余裕は僕に返せと云わないという意味が君にはよく解らないと見えるね。気の毒なる貴公子きこうしよだ」

小林はこう云いながら、横を向いて戸口の方を見つつ、また一句を付け加えた。

「もう来そうなものだな」

彼の様子をよく見守った津田は、少し驚ろかされた。

「誰が来るんだ」

「誰でもない、僕よりもまだ余裕の乏しい人が来るんだ」

小林は裸のまま紙幣をしまい込んだ自分の隠袋ポケットを、わざとらしく軽く叩たたいた。

「君から僕にこれを伝えた余裕は、再びこれを君に返せとは云わないよ。僕よりもっと余裕の足りない方へ順送りじゅんおくに送れと命令するんだよ。余裕は水のようなものさ。高い方から低い方へは流れるが、下から上へは逆行ぎゃくこうしないよ」

津田はほぼ小林の言葉を、意解いかいする事ができた。しかし事解じかいする事はできなかった。したがって半醒半酔はんせいはんすいのような落ちつきのない状態に陥おちいった。そこへ小林の次の挨拶あいさつがどさどさと侵入して来

た。

「僕は余裕の前に頭を下げるよ、僕の矛盾を承認するよ、君の詭弁^{しゅべん}を首肯^{しゅこん}するよ。何でも構わないよ。礼を云うよ、感謝するよ」

彼は突然ぽたと涙を落し始めた。この急劇な変化が、少し驚ろいている津田を一層不安にした。せんだつての晩手^{てこず}古摺^{こず}らされた酒場^{バー}の光景を思い出さざるを得なくなった彼は、眉^{まゆ}をひそめると共に、相手を利用するのは今だという事に気がついた。

「僕が何で感謝なんぞ予期するものかね、君に対して。君こそ昔を忘れているんだよ。僕の方が昔のままですいている事を、君はみんな逆^{さか}に解釈するから、交際がますます面倒になるんじゃない

か。例^{たと}えばだね、君がこの間僕の留守^{がいとう}へ外套を取りに行つて、そのついでに何か妻^{さい}に云つたという事も――」

津田はこれだけ云つて暗^{あん}に相手の様子を窺^{うかが}つた。しかし小林が下を向いているので、彼はまるでその心持の転化作用を忖^{そんたく}度する事ができなかつた。

「何も好んで友達の夫婦仲を割^さくような悪戯^{いたずら}をしなくつてもいい訳じゃないか」

「僕は君に関して何も云つた覚^{おぼえ}はないよ」

「しかし先^{さつき}刻……」

「先^{じょうだん}刻は笑談さ。君が冷嘲^{ひやか}すから僕も冷嘲したんだ」

「どっちが冷嘲し出したんだか知らないが、そりやどうでもいいよ。ただ本当のところを僕に云ってくれたって好きそうなものがね」

「だから云ってるよ。何にも君に関して云った覚はないと何遍も繰り返して云ってるよ。細君を訊きき糺ただして見れば解る事じゃないか」

「お延は……」

「何と云ったい」

「何とも云わないから困るんだ。云わないで腹うちの中で思っ
ていら
れちゃ、弁解もできず説明もできず、困るのは僕だけだからね」

「僕は何にも云わないよ。ただ君がこれから夫らしくするかしないかが問題なんだ」

「僕は――」

津田がこう云いかけた時、近寄る足音と共に新らしく入って来た人が、彼らの食卓の傍そばに立った。

百六十二

それが先刻大通りの角で、小林と立談たちばなしをしていた長髪の青年であるという事に気のついた時、津田はさらに驚ろかされた。けれ

どもその驚ろきのうちには、暗あんにこの男を待ち受けていた期待も交まじっていた。明らさまな津田の感じを云えば、こんな人がここへ来るはずはないという断案と、もしここへ誰か来るとすれば、この人よりほかにあるまいという予想の矛盾であつた。

実を云うと、自働車の燭光あかりで照らされた時、彼の眸ひとみの裏うちに映つたこの人の影像イメジは津田にとって奇異なものであつた。自分から小林、小林からこの青年、と順々に眼を移して行くうちには、階級なり、思想なり、職業なり、服装なり、種々な点においてずいぶんな距離があつた。勢い津田は彼を遠くに眺めなければならなかつた。しかし遠くに眺めれば眺めるほど、強く彼を記憶しなけ

ればならなかった。

「小林はああいう人と交際つきあってるのかな」

こう思った津田は、その時そういう人と交際つきあっていない自分の立場を見廻して、まあ仕合せだと考えた後あとなので、新来者に対する彼の態度も自おのずから明白であつた。彼は突然胡散臭うさんくさい人間に挨あい拶さつをされたような顔をした。

上へ反そつ繰り返つた細い鍰つばの、ぐにやぐにやした帽子を脱とつて手に持ったまま、小林の隣りへ腰をおろした青年の眼には異様の光りがあつた。彼は津田に対して現に不安を感じているらしかつた。それは一種の反感と、恐怖と、人馴ひとなれない野育ちの自尊心と

が錯雑さくざつして起す神経的な光りに見えた。津田はますます厭いやな気持ちになった。小林は青年に向って云った。

「おいマントでも取れ」

青年は黙って再び立ち上った。そうして釣鐘のような長い合羽かっぱをすぽりと脱いで、それを椅子いすの背に投げかけた。

「これは僕の友達だよ」

小林は始めて青年を津田に紹介ひきあわせた。原という姓と芸術家という名称がようやく津田の耳に入った。

「どうした。旨うまく行ったかね」

これが小林の次にかけた質問であった。しかしこの質問は充分

な返事を得る暇がなかった。小林は後からすぐこう云ってしまつた。

「駄目^{だめ}だろう。駄目にきまつてるさ、あんな奴^{やつ}。あんな奴に君の芸術が分つてたまるものか。いいからまあゆっくりして何か食いたまえ」

小林はたちまちナイフを倒^{さか}さまにして、やけに食卓^{テーブル}を叩^{たた}いた。

「おいこの人の食うものを持って来い」

やがて原の前にあつた洋盃^{コップ}の中に麦酒^{ビール}がなみなみと注^つがれた。

この様子を黙って眺めていた津田は、自分の持つて来た用事のもう済んだ事にようやく気がついた。こんなお付合^{つきあい}を長くさせら

れては大変だと思った彼は、機を見て好い加減に席を切り上げようとした。すると小林が突然彼の方を向いた。

「原君は好い絵を描くよ、君。一枚買ってやりたまえ。今困ってるんだから、気の毒だ」

「そうか」

「どうだ、この次の日曜ぐらいに、君の家へ持うちって行行って見せる事にしたら」

津田は驚ろいた。

「僕に絵なんか解らないよ」

「いや、そんなはずはない、ねえ原。何しろ持って行行って見せて

みたまえ」

「ええ御迷惑でなければ」

津田の迷惑は無論であつた。

「僕は絵だの彫刻だのの趣味のまるでない人間なんですから、どうぞ」

青年は傷けられたような顔をした。小林はすぐ応援に出た。

「嘘うそを云うな。君ぐらい鑑賞力の豊富な男は實際世間に少ないんだ」

津田は苦笑せざるを得なかつた。

「また下らない事を云つて、——馬鹿にするな」

「事実を云うんだ、馬鹿にするものか。君のように女を鑑賞する能力の発達したものが、芸術を粗末にする訳がないんだ。ねえ原、女が好きな以上、芸術も好きにきまつてるね。いくら隠したって駄目だよ」

津田はだんだん辛防^{しんぼう}し切れなくなつて来た。

「だいぶ話が長くなりそうだから、僕は一足先^{ひとあし}へ失敬しよう、——おい姉さん会計だ」

給仕が立ちそうにするところを、小林は大きな声を出して止めながら、また津田の方へ向き直った。

「ちょうど今一枚素敵^{すてき}に好いのが描^かいてあるんだ。それを買おう

という望手のぞみての所へ価値ねだんの相談に行った帰りがけに、原君はここへ寄ったんだから、旨い機会うまじゃないか。是非買いたまえ。芸術家の足元へ付け込んで、むやみに価値ね切り倒すなんて失敬な奴へは売らないが好いというのが僕の意見なんだ。その代りきつと買手を周旋してやるから、歸りにここへ寄るがいいと、先刻さつきあすこの角で約束しておいたんだ、実を云うと。だから一つ買つてやるさ、訳やないやね」

「他ひとに絵も何にも見せないうちから、勝手にそんな約束をしたつてしようがないじゃないか」

「絵は見せるよ。——君今日持つて歸らなかつたのか」

「もう少し待ってくれっていうから置いて来た」

「馬鹿だな、君は。しまいに口ハで捲まき上げられてしまっただけだぜ」

津田はこの問答を聴いてほっと一息吐ついた。

百六十三

二人は津田を差し置いて、しきりに絵画の話をした。時々耳にする三角派さんかくはとか未来派みらいはとかいう奇怪な名称のほかに、彼は今までかつて聴きいた事のないような片仮名をいくつとなく聴かされた。

その何処いずこにも興味を見出みいだし得なかつた彼は、会談の圏外けんがいへ放逐ほうちくされるまでもなく、自分から埒らちを脱ぬけ出したと同じ事であつた。これだけでも一通り以上の退屈である上に、津田は厭いやがらせる積極的なものがまだ一つあつた。彼は自分の眼前に見るこの二人、ことに小林を、むやみに新らしい芸術をふり廻したがる半可通はんかつうとして、最初から取扱つていた。彼はこの偏見プレジユジスの上へ、乙おつに識者おつぶる彼らの態度を追加して眺めた。この点において無知な津田を羨うらやましがらせるのが、ほとんど二人の目的でもあるように見え出した時、彼は無理にいったん落ちつけた腰をまた浮かしにかつた。すると小林がまた抑留した。

「もう直^{じき}だ、いっしょに行くよ、少し待^{まち}ってる」

「いやあんまり遅^{おそ}くなるから……」

「何もそんなに他^{ひと}に恥^{はにか}を搔^かせなくってもよかろう。それとも原君が食^くちまうまで待^{まち}てると、紳士の体面^{ていめん}に関^{かん}わるとでも云^いうのか」

原は刻^きんだサラダをハムの上へ載^のせて、それを肉^{ニク}叉^フで突^つき差^さした手を止^やめた。

「どうぞお構^{かま}いなく」

津田^{つだ}が軽^{かろ}く会^え釈^{しやく}を返^{かえ}して、いよいよ立^たち上^あがろうとした時、小林^{こばやし}はほとんど独^{ひとり}りごとのように云^いった。

「いったいこの席を何と思ってるんだろう。送別会と号して他を呼んでおきながら、肝心かんじんのお客さんを残して、先へ帰っちゃまうなんて、侮辱を与える奴やつが世の中にいるんだから厭いやになるな」

「そんなつもりじゃないよ」

「つもりでなければ、もう少しすこしいろよ」

「少し用があるんだ」

「こっちにも少し用があるんだ」

「絵なら御免だ」

「絵も無理に買えとは云わないよ。吝けちな事を云うな」

「じゃ早くその用を片づけてくれ」

「立ってちや駄目だ。紳士らしく坐^{すわ}らなくっちゃ」

仕方なしにまた腰をおろした津田は、袂^{たもと}から煙草を出して火を点^つけた。ふと見ると、灰皿は敷島の残骸^{ざんがい}でもういっぱいになっていた。今夜の記念としてこれほど適当なものはないという気が、偶然津田の頭に浮かんだ。これから呑^のもうとする一本も、三分経^たつか経たないうちに、灰と煙と吸口だけに變形して、役にも立たない冷たさを皿の上にとどめるに過ぎないと思うと、彼は何となく厭な心持がした。

「何だい、その用事というのは。まさか無心じゃあるまいね、もう」

「だから吝な事を云うなと、先刻から云ってるじゃないか」

小林は右の手で背広の右前を掴んで、左の手を隠袋の中へ入れた。彼は暗闇で物を探るように、しばらく入れた手を、背広の裏側で動かしながら、その間始終眼を津田の顔へぴったり付けていた。すると急に突飛な光景が、津田の頭の中に描き出された。同時に変な妄想が、今呑んでいる煙草の煙のように、淡く彼の心を掠めて過ぎた。

「此奴は懷から短銃を出すんじゃないだろうか。そうしてそれをおれの鼻の先へ突きつけるつもりじゃないかしら」

芝居じみた一刹那が彼の予感を微かに揺ぶった時、彼の神経の

末梢^{まつしょう}は、眼に見えない風に弄^{なぶ}られる細い小枝のように顫動^{せんどう}した。それと共に、妄^{みだ}りに自分で拵^{こしら}えたこの一場^{いちじょう}の架空劇をよそ目に見て、その荒誕^{こうたん}を冷笑^{せせうわう}う理智の力が、もう彼の中心に働^{はたら}いていた。

「何を探しているんだ」

「いやいろいろなものがいっしょに入ってるからな、手の先でよく探^{さが}しあてた上でないと、滅多^{めった}に君の前へは出されないんだ」

「間違^{さつき}えて先刻^{さつ}放^{ほう}り込んだ札^{さつ}でも出すと、厄介^{さつ}だろう」

「なに札は大丈夫だ。ほかの紙片^{かみぎれ}と違って活きてるから。こうやって、手で障^{さわ}って見るとすぐ分るよ。隠袋^{ポケット}の中で、ぴちぴち跳^は

ねてる」

小林は減らず口を利ききながら、わざと空むなしい手を出した。

「おやないぞ。変だな」

彼は左胸部にある表おもて隠かく袋へ再び右の手を突き込んだ。しかしそこから彼の撮つまみ出したものは皺しわだらけになった薄汚ない手帛ハンケチだけであつた。

「何だ手品てづまでも使う気なのか、その手帛で」

小林は津田の言葉を耳にもかけなかった。真面目まじめな顔をして、立ち上りながら、両手で腰の左右を同時に叩たたいた後で、いきなり云った。

「うんここにあつた」

彼の洋袴ズボンの隠袋から引き摺ずり出したものは、一通の手紙であつた。

「実は此奴こいつを君に読ませたいんだ。それももう当分君に会う機会がないから、今夜に限るんだ。僕と原君と話している間に、ちよつと読んでくれ。何訳わけやないやね、少し長いけれども」

封書を受取つた津田の手は、ほとんど器械的に動いた。

ペンで原稿紙へ書きなぐるように認め^{したた}られたその手紙は、長さから云つても、無論普通の倍以上あつた。のみならず宛名^{あてな}は小林に違なかつたけれども、差出人は津田の見た事も聴^きいた事もない全く未知の人であつた。津田は封筒の裏表を読んだ後で、それはたして自分に何の関係があるのだらうと思つた。けれども冷やかな無関心の傍^{かたわら}に起つた一種の好奇心は、すぐ彼の手を誘つた。封筒から引き抜いた十行二十字詰の罫紙^{けいし}の上へ眼を落した彼は一気に読み下した。

「僕はここへ来た事をもう後悔しなければならなくなつたのです。あなたは定めて飽^{あき}つぽいと思うでしょう、しかしこれはあな

たと僕の性質の差違から出るのだから仕方がないのです。またかと云わずに、まあ僕の訴えを聞いて下さい。女ばかりで夜が不用心だから銀行の整理のつくまで泊りに来て留守番をしてくれ、小説が書きたければ自由に書くがいい、図書館へ行くなら弁当を持って行くがいい、午後は画を習いに行くがいい。今に銀行を東京へ持って来ると外国語学校へ入れてやる、家の始末は心配するな、転居の金は出してやる。――僕はこんなありがたい条件に誘惑されたのです。もっとも一から十まで当にした訳でもないんですが、その何割かは本当に違いないと思い込んだのです。ところが来て見ると、本当は一つもないんです、頭から尻まで嘘の皮な

んです。叔父は東京にいる方が多いばかりか、僕は書生代りに朝から晩まで使い歩きをさせられるだけなのです。叔父は僕の事を「宅^{うち}の書生」といいます、しかも客の前です、僕のいる前でです。こんな訳で酒一合の使から縁側の拭き掃除までみんな僕の役になってしまふのです。金はまだ一銭も貰ったことがありません。僕の穿^はいていた一円の下駄が割れたら十二銭のやつを買って穿かせました。叔父は明日金^{あした}をやると云って、僕の家族を姉の所へ転居させたのですが、越してしまったら、金の事は噫^{おくび}にも出さないのです、僕は帰る宅さえなくなりました。

叔父の仕事はまるで山です。金なんか少しもないのです。そう

して彼ら夫婦は極めて冷やかな極めて吝嗇りんしょくな人達です。だから来た当座僕は空腹に堪えかねて、三日に一遍ぐらい姉の家うちへ帰って飯を食わして貰いました。兵糧ひょうりょうが尽きて焼芋やきいもや馬鈴薯じゃがいもで間に合せていたこともあります。もっともこれは僕だけです。叔母は極めて感じの悪い女です。万事が打算的で、体裁ていさいばかりで、いやにこそこせ突ツ付き廻したがるんで、僕はちくちく刺されどうしに刺されているんです。叔父は金のないくせに酒だけは飲みます。そうして田舎いなかへ行けば殿様などと云って威張るんです。しかし裏側へ入ってみると驚ろく事ばかりです。訴訟事件さえたくさん起っているくらいです。出発のたびに汽車賃がなくなつて、質屋へ

駈けついたり、姉の家へ行って、苦しいところを算段して来てやったりしていますが、叔父の方じゃ、僕の食費と差引にする気が何かで澄ましているのです。

叔母は最初から僕が原稿を書いて食扶持くいぶちでも入れるものでも思ってるんでしょう、僕がペンを持っていると、そんなに書いて書いたものはいったいどうなるの、なんて当擦りあてこすりを云います。新聞の職業案内欄に出ている「事務員募集」の広告を突きつけて謎なぞをかけたりします。

こういう事が繰り返されて見ると、僕は何しにここへ来たんだか、まるで訳が解らなくなるだけです。僕は変に考えさせられる

のです。全く形をなさないこの家の奇怪な生活と、変幻窮きわまりなきこの妙な家庭の内情が、朝から晩まで恐ろしい夢でも見ているような気分になって、僕の頭に崇たたってくるんです。それを他ひとに話したって、とうてい通じっこないと思うと、世界のうちで自分だけが魔に取り巻かれているとしか考えられないので、なお心細くなるのです、そうして時々は気が狂いそうになるのです。というよりももう気が狂っているのではないかしらと疑がい出すと、たまらなく恐こわくなって来るのです。土の牢の中で苦しんでいる僕には、日光がないばかりか、もう手も足もないような気がします。何となれば、手を挙げて足も足を動かしても、四方は真黒だからで

す。いくら訴えても、厚い冷たい壁が僕の声を遮ぎ^{さえ}って世の中へ
聴えさせないようにするからです。今の僕は天下にたった一人で
す。友達はないのです。あっても無いと同じ事なのです。幽霊の
ような僕の心境に触れてくれる事のできる頭脳をもったものは、
有るべきはずがないからです。僕は苦しさの余りにこの手紙を書
きました。救を求めるために書いたものではありません。僕はあな
たの境遇を知っています。物質上の補助、そんなものをあなたの
方角から受け取る気は毛頭ないのです。ただこの苦痛の幾分が、
あなたの脈管^{みやくかん}の中に流れている人情の血潮に伝わって、そこに同
情の波を少しでも立ててくれる事ができるなら、僕はそれで満足

です。僕はそれによって、僕がまだ人間の一員として社会に存在しているという確証を握る事ができるからです。この悪魔の重囲の中から、広々した人間の中へ届く光線は一縷いちるもないのでしょうか。僕は今それさえ疑っているのです。そうして僕はあなたから返事が来るか来ないかで、その疑いを決したいのです」

手紙はここで終っていた。

百六十五

その時先刻さつき火を点けて吸い始めた巻煙草まきたばこの灰が、いつの間にか

一寸近くの長さになって、ぽたりと罫紙けいしの上に落ちた。津田は豎たて横よこに走る藍色あいいろの枠わくの上に崩れ散ったこの粉末に視覚を刺撃されて、ふと気がついて見ると、彼は煙草を持った手をそれまで動かさずにいた。というより彼の口と手がいつか煙草の存在を忘れていた。その上手紙を読み終ったのと煙草の灰を落したのとは同時でないのだから、二つの間にはさまるぼんやりしたただの時間を認めなければならなかった。

その空虚な時間ははたして何のために起ったのだろう。元来をいうと、この手紙ほど津田に縁の遠いものはなかった。第一に彼はそれを書いた人を知らなかった。第二にそれを書いた人と小林

との関係がどうなっているのか皆目^{かいもく}解らなかつた。中に述べ立てである事柄に至ると、まるで別世界の出来事としか受け取れないくらい、彼の位置及び境遇とはかけ離れたものであつた。

しかし彼の感想はそこで尽きる訳に行かなかつた。彼はどこかでおやと思つた。今まで前の方ばかり眺めて、ここに世の中があるのだときめてかかつた彼は、急に後^{うしろ}をふり返らせられた。そうして自分と反対な存在を注視すべく立ちどまつた。するとああああこれも人間だという心持が、今日^{こんにち}までまだ会つた事もない幽霊のようなものを見つめているうちに起つた。極めて縁^{きわ}の遠いものはかえって縁の近いものだったという事実が彼の眼前に現われ

た。

彼はそこでとまった。そうして低徊^{ていかい}した。けれどもそれより先へは一步も進まなかった。彼は彼相応の意味で、この気味の悪い手紙を了解したというまでであつた。

彼が原稿紙から煙草の灰を払い落した時、原を相手に何か話しかけていた小林はすぐ彼の方を向いた。用談を切り上げるためらしい言葉がただ一句彼の耳に響いた。

「なに大丈夫だ。そのうちどうにかなるよ、心配しないでもいいや」

津田は黙って手紙を小林の方へ出した。小林はそれを受け取る

前に訊いた。

「読んだか」

「うん」

「どうだ」

津田は何とも答えなかった。しかし一応相手の主意を確かめて見る必要を感じた。

「いったい何のためにそれを僕に読ませたんだ」

小林は反問した。

「いったい何のために読ませたと思う」

「僕の知らない人じゃないか、それを書いた人は」

「無論知らない人さ」

「知らなくってもいいとして、僕に何か関係があるのか」

「この男がか、この手紙がか」

「どっちでも構わないが」

「君はどう思う」

津田はまた躊躇ちゆうちゆうした。実を云うと、それは手紙の意味が彼に通

じた証拠であつた。もっと明瞭めいりょうにいうと、自分は自分なりにその

手紙を解釈する事ができたという自覚が彼の返事を鈍にぶらせたのと

同様であつた。彼はしばらくして云つた。

「君のいう意味なら、僕には全く無関係だろう」

「僕のいう意味とは何だ？」

「解らないか」

「解らない。云つて見ろ」

「いや、——まあ止よそう」

津田は先刻さつきの絵と同じ意味で、小林がこの手紙を自分の前に突きつけるのではなからうかと疑った。何でもかでも彼を物質上の犠牲者にし終おおせた上で、後あとからざまを見ろ、とうとう降参したじゃないかという態度に出られるのは、彼にとって忍おどぶべからざる侮辱であつた。いくら貧乏の幽霊で威嚇おどかしたってその手に乗るものかという彼の感慨が、自然小林の上に働らきかけた。

「それより君の方でその主意を男らしく僕に説明したらいいじゃないか」

「男らしく？ ふん」と云っていったん言葉を句切った小林は、後から付け足した。

「じゃ説明してやろう。この人もこの手紙も、乃至^{ないし}この手紙の中味も、すべて君には無関係だ。ただし世間的に云えばだぜ、いいかね。世間的という意味をまた誤解するといけないから、ついでにそれも説明しておこう。君はこの手紙の内容に対して、俗社会にいわゆる義務というものを帯びていないのだ」

「当たり前じゃないか」

「だから世間的には無関係だと僕の方でも云うんだ。しかし君の道徳観をもう少し大きくして眺めたらどうだい」

「いくら大きくしたって、金をやらなければならないという義務なんか感じやしないよ」

「そうだろう、君の事だから。しかし同情心はいくらか起るだろう」

「そりゃ起るにきまつてるじゃないか」

「それでたくさんんだ、僕の方は。同情心が起るといふのはつまり金がやりたいという意味なんだから。それでいて実際は金がいりたくないんだから、そこに良心の闘いから来る不安が起るん

だ。僕の目的はそれでもう充分達せられているんだ」

こう云った小林は、手紙を隠袋ポケットへしまい込むと同時に、同じ場所から先刻の紙幣を三枚とも出して、それを食卓の上へ並べた。

「さあ取りたまえ。要るだけ取りたまえ」

彼はこう云って原の方を見た。

百六十六

小林の所作しよさは津田にとって全くの意外であつた。突然毒気を抜かれたところに十分以上の皮肉を味わわせられた彼の心は、相手

に向つて躍おどつた。憎悪ぞうおの電流とでも云わなければ形容のできないものが、とつさの間に彼の身体からだを通過した。

同時に聡明な彼の頭に一種の疑うたがいが閃ひらめいた。

「此奴こいつら二人は共謀ぐもになつて先刻さつきからおれを馬鹿にしているんじゃないかしら」

こう思うのと、大通りの角で立談たちばなしをしていた二人の姿と、ここへ来てからの小林の挙動と、途中から入つて来た原の様子と、その後三人の間に起つた談話の遣取やりとりとが、どれが原因ともどれが結果とも分らないような迅速の度合で、津田の頭の中を仕懸しかけ花火のようにくるくると廻転した。彼は白い食卓布テーブルクロスの上に、行儀よく順

次に並べられた新らしい三枚の十円紙幣を見て、思わず腹の中で叫んだ。

「これがこの摺れッ枯らしの拵え上げた狂言の落所だったのか。馬鹿奴、そう貴様の思わく通りにさせてたまるものか」

彼は傷けられた自分のプライドに対しても、この不名誉な幕切に一転化を与えた上で、二人と別れなければならないと考えた。けれどもどうしたらこう最後まで押しつめられて来た不利な局面を、今になって、旨くどさりと引繰り返す事ができるかの問題になると、あらかじめその辺の準備をしておかなかった彼は、全くの無能力者であった。

外觀上の落ちつきを比較的平氣そうに保っていた彼の裏側には、役にも立たない機智の作用が、はげしく往来した。けれどもその混雜はただの混雜に終るだけで、何らの歸着点を彼に示してくれないので、むらむらとした後の彼の心は、いたずらにわくわくするだけであつた。そのわくわくがいつの間にか狼狽の姿に進化しつつある事さえ、残念ながら彼には意識された。

この危機一髪という間際に、彼はまた思いがけない現象に逢着した。それは小林の並べた十円紙幣が青年芸術家に及ぼした影響であつた。紙幣の上に落された彼の眼から出る異様の光であつた。そこには驚ろきと喜びがあつた。一種の飢渴があつた。掴み

かかろうとする慾望の力があつた。そうしてその驚ろきも喜びも、飢渴も慾望も、一々真^{しん}その物の発現であつた。作りもの、拵^{こしら}え事、馴^なれ合^あいの狂言とは、どうしても受け取れなかつた。少くとも津田にはそうとしか思えなかつた。

その上津田のこの判断を確めるに足る事実が後^{あと}から継^ついで起つた。原はそれほど欲しそうな紙幣^{さつ}へ手を出さなかつた。と云つて断然小林の親切を斥^{しり}ぞける勇氣も示さなかつた。出したそんな手を遠慮して出さずにいる苦痛の色が、ありありと彼の顔つきで読まれた。もしこの蒼白^{あおじろ}い青年が、ついに紙幣^{さつ}の方へ手を出さないとする、小林の拵^{こしら}えたせつかくの狂言も半分はぶち壊^{こわ}しになる

訳であつた。もしまた小林がいったん隠袋ポケットから出した紙幣を、当初の宣告通り、幾分でも原の手へ渡さずに、再びもとへ収めたなら、結果は一層の喜劇に変化する訳であつた。どっちにしても自分の体面を繕つくろうのには便宜べんぎな方向へ発展して行きそうなので、そこに一縷いちるの望を抱いだいた津田は、もう少し黙って事の成行を見る事にきめた。

やがて二人の間に問答が起つた。

「なぜ取らないんだ、原君」

「でもあんまり御気の毒ですから」

「僕は僕でまた君の方を気の毒だと思つてゐるんだ」

「ええ、どうもありがとう」

「君の前に坐^{すわ}ってるその男は男でまた僕の方を気の毒だと思ってるんだ」

「はあ」

原はさっぱり通じないらしい顔をして津田を見た。小林はすぐ説明した。

「その紙幣は三枚共、僕が今その男から貰^{もら}ったんだ。貰い立てのほやほやなんだ」

「じゃなおどうも……」

「なおどうもじゃない。だからだ。だから僕も安々と君にやれる

んだ。僕が安々と君にやれるんだから、君も安々と取れるんだ」

「そういう論理ロジックになるかしら」

「当り前さ。もしこれが徹夜して書き上げた一枚三十五銭の原稿から生れて来た金なら、何ぼ僕だって、少しは執着が出るだろうじゃないか。額からぼたぼた垂れる膏汗あせに対しても済まないよ。

しかしこれは何でもないんだ。余裕が空間に吹き散らしてくれる浄財じやうさいだ。拾ったものが功德くどくを受ければ受けるほど余裕は喜こぶだけなんだ。ねえ津田君そうだろう」

忌々いまいまいしい関所をもう通り越していた津田は、かえって好いところで相談をかけられたと同じ事であった。鷹揚おうような彼の一諾は、今

夜ここに落ち合った不調和な三人の会合に、少くとも形式上体裁ていさいの好い結末をつけるのに充分であつた。彼は醜陋しゅうろうに見える自分の退却を避けるために眼前の機会を捕えた。

「そうだね。それが一番いいだろう」

小林は押問答の末、とうとう三枚のうち一枚を原の手に渡した。残る二枚を再びもとの隠袋ポケットへ収める時、彼は津田に云つた。

「珍らしく余裕が下から上へ流れた。けれどもここから上へはもう逆戻りをしないそうだ。だからやつぱり君に対してサックスだ」

表へ出た三人は濠端ほりばたへ来て、電車を待ち合わせる間大きな星月夜ほしづきよ

を仰いだ。

百六十七

間もなく三人は離れ離れになった。

「じゃ失敬、僕は停車場へ送って行かないよ」

「そうか、来たってよさそうなものだがね。君の旧友が朝鮮へ行くんだぜ」

「朝鮮でも台湾でも御免だ」

「情合のない事夥だしいものだ。そんなら立つ前にもう一遍こつ

ちから暇乞ひまがいに行くよ、いいかい」

「もうたくさんだ、来てくれなくっても」

「いや行く。でないと何だか気がすまないから」

「勝手にしろ。しかし僕はこないよ、来ても。明日あしたから旅行するんだから」

「旅行？ どこへ」

「少し静養の必要があるんでね」

「転地しやれか、洒落しやれてるな」

「僕に云わせると、これも余裕の賜物たまものだ。僕は君と違って飽あくまでもこの余裕に感謝しなければならないんだ」

「飽くまでも僕の注意を無意味に見せるという気なんだね」

「正直のところを云えば、まあそこいらだろうよ」

「よろしい、どっちが勝つかまあ見ている。小林に啓発けいはつされるよりも、事実その物に戒飭かいしよくされる方が、遥はるかに覲面てきめんで切実でいいだろう」

これが別れる時二人の間に起った問答であつた。しかしそれは宵よいから持ち越した悪感情、津田が小林に対して日暮以来貯蔵して来た悪感情、の発現に過ぎなかつた。これで幾分か溜飲りゅういんが下りたような気のした津田には、相手の口から出た最後の言葉などを考える余地がなかつた。彼は理非の如何いかんに関わらず、意地にも小林

ごときものの思想なり議論なりを、切つて棄てなければならなかつた。一人になつた彼は、電車の中ですぐ温泉場の様子などを想像に描き始めた。

明る^{あく}朝^{あさ}は風が吹いた。その風が疎^{まば}らな雨の糸^{すじ}を筋違^{すじかい}に地面の上へ運んで来た。

「厄介^{やっかい}だな」

時間通りに起きた津田は、縁鼻^{えんばな}から空を見上げて眉を寄せた。空には雲があつた。そうしてその雲は眼に見える風のように断えず動いていた。

「ことによると、お午^{ひる}ぐらいから晴れるかも知れないわね」

お延は既定の計画を遂行する方に賛成するらしい言葉つきを見せた。

「だって一日後おくれると一日徒為むだになるだけですもの。早く行つて早く歸つて来ていただく方がいいわ」

「おれもそのつもりだ」

冷たい雨によつて乱されなかつた夫婦間の取極とりきめは、出立間際になつて、始めて少しの行違を生じた。箆たんす笥ひきだしの抽斗から自分の衣裳いしやうを取り出したお延は、それを夫の洋服と並べて渋紙の上へ置いた。津田は気がついた。

「お前は行かないでもいいよ」

「なぜ」

「なぜって訳もないが、この雨の降るのに御苦労千万じゃないか」

「ちつとも」

お延の言葉があまりに無邪気だったので、津田は思わず失笑した。

「来て貰うのが迷惑だから断るんじゃないよ。気の毒だからだよ。たかが一日とかからない所へ行くのに、わざわざ送って貰うなんて、少し滑稽こっけいだからね。小林が朝鮮へ立つんでさえ、おれは送って行かないって、昨夜ゆうべ断っちまったくらいだ」

「そう、でもあたし宅うちにいたって、何にもする事がないんですもの」

「遊んでおいでよ。構わないから」

お延がとうとう苦笑して、争う事をやめたので、津田は一人俤くるまを駆って宅を出る事ができた。

周囲の混雑と対照を形成かたちづくる雨の停車場ステーションの佗わびしい中に立って、津田が今買ったばかりの中等切符ちゅうとうききふを、ぼんやり眺めっていると、一人の書生が突然彼の前へ来て、旧知己あいさつのような挨拶をした。

「あいにくなお天気で」

それはこの間始めて見た吉川の書生であった。取次に出た時玄

関で会ったよそよそしさに引き換えて、今日は鳥打を脱ぐ態度からしてが丁寧であつた。津田は何の意味だかいつこう気がつかなかつた。

「どなたかどちらへかいらっしゃるんですか」

「いいえ、ちよつとお見送りに」

「だからどなたを」

書生は弱らせられたような様子をした。

「実は奥さまが、今日は少し差支さしつかえがあるから、これを持って代りに行って来てくれとおっしゃいました」

書生は手に持った果物くだものの籃かごを津田に示した。

「いやそりやどうも、恐れ入りました」

津田はすぐその籃を受け取ろうとした。しかし書生は渡さなかつた。

「いえ私が列車の中まで持って参ります」

汽車が出る時、黙って丁寧に会釈えしやくをした書生に、「どうぞ宜しよろく」と挨拶を返した津田は、比較的込み合わない車室の一隅に、ゆつくりと腰をおろしながら、「やっぱりお延に来て貰わない方がよかったのだ」と思った。

お延の気を利かして外套がいとうの隠袋かくしへ入れてくれた新聞を津田が取り出して、いつもより念入りに眼を通してゐる頃に、窓外そうがいの空模様はだんだん悪くなつて来た。先刻さつきまで疎まばらに眺められた雨の糸が急に数を揃そろえて、見渡す限の空間を一度に充みたして来る様子が、比較的展望に便利な汽車の窓から見ると、一層凄すさまじく感ぜられた。

雨の上には濃い雲があつた。雨の横にも限界の遮さえぎられない限りは雲があつた。雲と雨との隙間すきまなく連続した広い空間が、津田の視覚をいっばいに冒おかした時、彼は荒涼こうりょうなる車外の景色と、その反対に心持よく設備の行き届いた車内の愉快とを思い較くらべた。身み

体を安逸の境に置くという事を文明人の特権のように考えている
彼は、この雨を衝ついて外部そとへ出なければならぬ午後ごの心持を想
像しながら、独り肩ひとを竦すくめた。すると隣りに腰をかけて、ぽつり
ぽつりと窓硝子まどガラスを打ったびに、点滴の珠たまを表面に残して砕けて行
く雨の糸を、ぼんやり眺めていた四十恰好しじゅうがっこうの男が少し上半身を前
へ屈かがめて、向側むこうがわに胡坐あぐらを掻かいている伴侶つれに話しかけた。しかし雨
の音と汽車の音が重なり合うので、彼の言葉は一度で相手に通じ
なかった。

「ひどく降って来たね。この様子じゃまた軽便の路みちが壊れやしな
いかね」

彼は仕方なしに津田の耳へも入るような大きな声を出してこう云った。

「なに大丈夫だよ。なんぼ名前が軽便だつて、そう軽便に壊れた日にや乗るものが災難だあね」

これが相手の答であつた。相手というのは羅紗らしやの道行みちゆきを着た六ろく十じゅう恰好がっこうの爺さんじいであつた。頭には唐物屋とうぶつやを採さがしても見当りそうもない変な鰐つばなしの帽子を被かぶっていた。煙草たばこ入だの、唐棧とうざんの小片こぎれだの、古代更紗こだいさらさだの、そんなものを器用にきちんと並べ立てて見世を張る袋物屋ふくろものやへでも行つて、わざわざ注文しなければ、とうてい頭へ載せる事のできそうもないその帽子の主人は、彼の言葉遣づかい

で東京生れの証拠を充分に挙げていた。津田は服装に似合わない
思いのほか潤達かつたつなこの爺さんの元気に驚ろくと同時に、どっちか
というと、ベランメーに接近した彼の口の利き方にも意外を呼ん
だ。

この挨拶あいさつのうちに偶然使用された軽便という語は、津田にとつ
てたしかに一種の暗示であつた。彼は午後の何時間かをその軽便
に揺られる転地者であつた。ことによると同じ方角へ遊びに行く
連中かも知れないと思つた津田の耳は、彼らの談話に対して急に
鋭敏になつた。転席の余地がないので、不便な姿勢と図ず抜ぬけた大
声を忍ばなければならなかつた二人の云う事は一々津田に聴こえ

た。

「こんな天気になろうとは思わなかったね。これならもう一日延ばした方が楽だった」

中折なかおれに駱駝らくだの外套がいとうを着た落ちつきのある男の方がこういって、爺さんはすぐ答えた。

「何たかが雨だあね。濡ぬれると思やあ、何でもねえ」

「だが荷物が厄介やっかいだよ。あの軽便あまげんへ雨曝あまげしのまま載せられる事を考えると、少し心細くなるから」

「じゃおいらの方が雨曝あまげしになって、荷物だけを室へやの中へ入れて貰う事にしよう」

二人は大きな声を出して笑った。その後で爺さんがまた云った。

「もつともこの前のあの騒ぎがあるからね。途中で汽缶^{かま}へ穴が開^あいて動けなくなる汽車なんだから、全くのところ心細いにや違ない」

「あの時やどうして向うへ着いたっけ」

「なにあっちから来る奴^{やつ}を山の中ほどで待ち合せてさ。その方の汽缶で引っ張り上げて貰ったじゃないか」

「なるほどね、だが汽缶を取り上げられた方の車はどうしたっけね」

「違えねえ、こっちで取り上げりや、向うは困らあ」

「だからさ、取り残された方の車はどうしたろうっていうのさ。

まさか他を救って、自分は立往生って訳もなからう」

「今になって考えりや、それもそうだがね、あの時や、てんで向うの車の事なんか考えちゃいられなかったからね。日は暮れかかるしさ、寒さは身に染みるしさ。顫えちまわあね」

津田の推測はだんだんたしかになって来た。二人はその軽便の通じている線路の左右にある三力所の温泉場のうち、どこかへ行くに違ないという鑑定さえついた。それにしてもこれから自分の身を二時間なり三時間なり委せようとするその軽便が、彼らのい

う通り乱暴至極のものならば、この雨中どんな災難に会わないとも限らなかった。けれどもそこには東京ものの持つて生れた誇張というものがあつた。そんなに不完全なものですかと訊いてみようととしてそこに氣のついた津田は、腹の中で苦笑しながら、質問をかける手数てすうを省はぶいた。そうして今度は清子とその軽便とを聯結れんけつして「女一人でさえ樂々往来ができる所だのに」と思いながら、面白半分にする興味本位の談話には、それぎり耳を貸さなかつた。

汽車が目的の停車場ステーションに着く少し前から、三人によって氣遣きづかわれた天候がしだいに穏かになり始めた時、津田は雨の収まり際おさぎわの空を眺めて、そこに忙がしそうな雲の影を認めた。その雲は汽車の走る方角と反対の側がわに向って、ずんずん飛んで行つた。そうして後あとから後からと、あたかも前に行くものを追おっかけるように、隙間すきまなく詰め寄せた。そのうち動く空の中に、やや明るい所ができてきた。ほかの部分より比較的薄く見える箇所がしだいに多くなつた。就中なかんずく一角はもう少しすると風に吹き破られて、破れた穴から青い輝きを洩らしそうな氣配けはいを示した。

思つたより自分に好意をもつてくれた天候の前に感謝して、汽

車を下りた津田は、そこからすぐ乗り換えた電車の中で、また先^{さつ}刻^き会^ふつた二人^{ふたり}伴^{づれ}の男を見出した。はたして彼の思わく通り、自分と同じ見当へ向いて、同じ交通機関を利用する連中だと知れた時、津田は気をつけて彼らの手荷物を注意した。けれども彼らの雨^{あま}曝^{ざう}しになるのを苦^くに病んだほどの大^{おお}嵩^{がさ}なものはどこにも見当らなかった。のみならず、爺^{じい}さんは自分が先刻云った事さえもう忘れていたらしいかった。

「ありがたい、大当りだ。だからやっぱり行こうと思った時に立^たつちまうに限るよ。これでぐずぐずして東京にいて御覧な。あつまらねえ、こうと知ったら、思い切って今朝立^たつちまえばよ

かったと後悔するだけだからね」

「そうさ。だが東京も今頃はこのくらい好い天気になってるんだろうか」

「そいつあ行って見なけりや、ちよいと分らねえ。何なら電話で訊^きいてみるんだ。だが大体^{たいてい}間違^{まちがい}はないよ。空は日本中どこへ行^いったって続^ついてるんだから」

津田は少しおかしくなった。すると爺^{おや}さんがすぐ話しかけた。

「あなたも湯治場^{とうじば}へいらっしやるんでしよう。どうもおおかたそうだろうと思^{おも}いましたよ、先刻^{さうご}から」

「なぜですか」

「なぜって、そういう所へ遊びに行く人は、様子を見ると、すぐ分りますよ。ねえ」

彼はこう云って隣りにいる自分の伴侶つれを顧みた。中折なかおれの人は仕方なしに「ああ」と答えた。

この天眼通てんがんつうに苦笑を禁じ得なかった津田は、それぎり会話を切り上げようとしたところ、快豁かいかつな爺さんの方でなかなか彼を放さなかった。

「だが旅行も近頃は便利になりましたね。どこへ行くにも身体からだ一つ動かせばたくさんなんですから、ありがたい訳さ。ことにこちらとら見たいな気の早いものにはお誂向あつらえむきだあね。今度だって荷物な

んか何にも持って来やしませんや、この合切袋がしやうふくろとこの大将のあの鞆かばんを差し引くと、残るのは命ばかりといたいぐらいのものだ。
ねえ大将」

大将の名をもって呼ばれた人はまた「ああ」と答えたぎりであつた。これだけの手荷物を車室内へ持ち込めないとすれば、彼らのいわゆる「軽便」なるものは、よほど込み合うのか、さもなければ、常識をもつて測るべからざる程度において不完全でなければならなかつた。そこを確かめて見ようかと思つた津田は、すぐ確かめても仕方がないという気を起して黙つてしまった。

電車を下りた時、津田は二人の影を見失つた。彼は停留所の前

にある茶店で、写真版だの石版だのと、思い思いに意匠を凝らし
た温泉場の広告絵を眺めながら、昼食を認めた。時間から云つ
て、平常より一時間以上も後れていたその昼食は、膳を貪ぼる人
としての彼を思う存分に發揮させた。けれども発車は目前に逼つ
ていた。彼は箸を投げると共にすぐまた軽便に乗り移らなければ
ならなかった。

基点に当る停車場は、彼の休んだ茶店のすぐ前にあつた。彼は
電車よりも狭いその車を眼の前に見つ、下女から支度料の剩錢
を受取つてすぐ表へ出た。切符に鈹を入れて貰う所と、プラット
フォームとの間には距離というものがほとんどなかった。五六歩

動くとすぐ足をかける階段へ届いてしまった。彼は車室のなかで、また先刻さつきの二人連れと顔を合せた。

「やあお早うがす。こっちへおかけなさい」

爺じいさんは腰をずらして津田のために、彼の腕に抱えて来た膝ひざかけを敷く余地を拵こしらえてくれた。

「今日は空すいてて結構です」

爺さんは避寒避暑二様の意味で、暮から正月へかけて、それから七八二月ふたつきに涉わたって、この線路に集ってくる湯治客とうじきやくの、どんなに雑沓ざつとつするかをさも面白そうに例の調子で話して聴きかせた後あとで、自分の同伴者を顧みた。

「あんな時に女なんか伴^っれてくるのは実際罪だよ。尻^{しり}が大きいから第一乗り切れねえやね。そうしてすぐ酔^ようから困^すらあ。鮎^{すし}のよ
うに押しつめられてる中で、吐いたり戻したりさ。見つともねえ
事^{こと}ったら」

彼は自分の傍^{そば}に腰をかけている婦人の存在をまるで忘れてい
らしい口の利き方をした。

百七十

軽便の中でも、津田の平和はややともすると年を取ったこの楽

天家のために乱されそうになった。これから目的地へ着いた時の様子、その様子しだいで取るべき自分の態度、そんなものが想像に描き出された旅館だの山だの溪流だのの光景のうちに、取りとめもなくちらちら動いている際さいなどに、老人は急に彼を夢の裡うちから叩たたき起した。

「まだ仮橋かりばしのまままでやってるんだから、呑気のんきなものさね。御覧なさい、土方があんなに働でみらみてるから」

本式の橋が去年の出水でみずで押し流されたまままだ出来上らないのを、老人はさも会社の怠慢のしでもあるように罵ののった後で、海へ注ぐ河の出口に、新らしく作られた一構ひとかまえの家を指さして、また津田の

注意を誘い出そうとした。

「あの家も去年波で浚われちまったんでさあ。でもすぐあんなに建てやがったから、軽便より少しや感心だ」

「この夏の避暑客を取り逃さないためでしょう」

「ここいらで一夏休むと、だいぶ応^{こた}えるからね。やっぱり慾^ほがなくっちゃ、何でも手っ取り早く仕事は片づかないものさね。この軽便だってそうでしょう、あなた、なまじいあの仮橋で用が足りてるもんだから、会社の方で、いつまでも横着^{おっちょく}をきめ込みやがって、掛け^かかえねえんでさあ」

津田は老人の人世観に一も二もなく調子を合すべく余儀なくさ

れながら、談話の途切れ目には、眼を眠るように構えて、自分自身に勝手な事を考えた。

彼の頭の中は纏まらない断片的な映像のために絶えず往来された。その中には今朝見たお延の顔もあつた。停車場まで来てくれた吉川の書生の姿も動いた。彼の車室内へ運んでくれた果物の籃もあつた。その蓋を開けて、二人の伴侶に夫人の贈物を配とうかという意志も働いた。その所作から起る手数だの煩わしさだの、こっちの好意を受け取る時、相手のやりかねない仰山な挨拶も鮮やかに描き出された。すると爺さんも中折も急に消えて、その代り肥った吉川夫人の影法師が頭の鬨を排してつかつか這入って来

た。連想はすぐこれから行こうとする湯治場とうじばの中心点になつてゐる清子に飛び移つた。彼の心は車と共に前後へ揺れ出した。

汽車という名をつけるのはもったいないくらいな車は、すぐ海に続いている勾配こうばいの急な山の中途を、危なかしくがたがた云わし
て駆かけるかと思うと、いつの間にか山と山の間に割り込んで、幾いく
度も上たひつたり下あがつたりした。その山の多くは隙間すきまなく植付けられ
た蜜柑みかんの色で、暖かい南国の秋を、美しい空の下に累々るると点綴てんてつ
していた。

「あいつは旨うまそうだね」

「なに根っから旨くないんだ、ここから見てゐる方がよっぽど綺きれ

麗いだよ」

比較的嶮けわしい曲りくねった坂を一つ上った時、車はたちまちとまった。停車場ステーションでもないそこに見えるものは、多少の霜しもに彩いろどられた雑木ぞうきだけであつた。

「どうしたんだ」

爺さんがこう云つて窓から首を出していると、車掌だの運転手だのが急に車から降りて、しきりに何か云い合つた。

「脱線です」

この言葉を聞いた時、爺さんはすぐ津田と自分の前なかにいる中折おれを見た。

「だから云わねえこっちゃねえ。きっと何かあるに違ねえと思つてたんだ」

急に予言者らしい口吻くつぷんを洩もらした彼は、いよいよ自分の駄弁ろを弄ろうする時機が来たと云わぬばかりにはしやぎ出した。

「どうせ家うちを出る時に、水盃みづさかずきは済まして来たんだから、覚悟はとうからきめてるようなものの、いざとなつて見ると、こんな所で弁慶べんけいの立往生たちおつじようは御免蒙ごうむりたいからね。といっていつまでこうやって待ってたって、なかなか元へ戻してくれそうもなしと。何しろ日の短かい上へ持つて来て、気が短かいと来てるんだから、安閑としちゃいられねえ。——どうです皆さん一つ降りて車を押して

やろうじゃありませんか」

爺さんはこう云いながら元気よく真先に飛び降りた。残るものは苦笑しながら立ち上った。津田も独り室内に坐すわっている訳に行かなくなったので、みんなといっしょに地面の上へ降り立った。そうして黄色に染められた芝草の上に、あっけらかんと立っている婦人を後うしろにして、うんうん車を押した。

「や、いけねえ、行き過ぎちゃった」

車はまた引き戻された。それからまた前へ押し出された。押し出したり引き戻したり二三度するうちに、脱線はようやく片づいた。

「また後^{おく}れちまったよ、大将、お蔭^{かげ}で」

「誰のお蔭でさ」

「軽便のお蔭でさ。だがこんな事でもなくっちや眠くっていいねえや」

「せっかく遊びに来た甲斐^{かい}がないだろう」

「全くだ」

津田は後れた時間を案じながら、教えられた停^{ステーション}車場で、この元気の好い老人と別れて、一人薄暮^{ゆうぐれ}の空気の中に出た。

靄^{もや}とも夜の色とも片づかないものの中にぼんやり描き出された町の様はまるで寂寞^{せきばく}たる夢であつた。自分の四辺^{しへん}にちらちらする弱い電灯の光と、その光の届かない先に横^{よこた}わる大きな闇^{やみ}の姿^{みく}を見較^{くら}べた時の津田にはたしかに夢という感じが起つた。

「おれは今この夢見たようなものの続きを辿^{たど}ろうとしている。東京を立つ前から、もっと几帳面^{きちようめん}に云えば、吉川夫人にこの温泉行を勧められない前から、いやもっと深く突き込んで云えば、お延と結婚する前から、——それでもまだ云い足りない、実は突然清子に背中を向けられたその刹那^{せつな}から、自分はもうすでにこの夢のようなものに崇^{たた}られているのだ。そうして今ちようどその夢を追^{おっ}

かけようとしている途中なのだ。顧^{かえり}みると過去から持ち越したこの一条^{ひとすじ}の夢が、これから目的地へ着くと同時に、からりと覚めるのかしら。それは吉川夫人の意見であつた。したがって夫人の意見に賛成し、またそれを実行する今の自分の意見でもあると云わなければなるまい。しかしそれははたして事実だろうか。自分の夢ははたして綺麗に拭^{ぬぐ}い去られるだろうか。自分ははたしてそれだけの信念をもつて、この夢のようにぼんやりした寒村^{かんそん}の中に立っているのだろうか。眼に入る低い軒、近頃砂利^{じやり}を敷いたらしい狭い道路、貧しい電灯の影、傾^{かた}むきかかった藁屋根^{わらやね}、黄色い幌^{ほろ}を下^{おろ}した一頭立^{いっとうだて}の馬車、——新とも旧とも片のつけられないこの

ひとかたまり

一塊の配合を、なおの事夢らしく粧よそおっている肌寒はださむと夜寒よさむと闇暗くらやみ、

もつろう

——すべて朦朧たる事実から受けるこの感じは、自分がここまで運んで来た宿命の象徴じゃないだろうか。今までも夢、今も夢、これから先も夢、その夢を抱だいてまた東京へ帰って行く。それが事件の結末にならないとも限らない。いや多分はそうなりそうだ。じゃ何のために雨の東京を立てこんな所まで出かけて来たのだ。畢竟馬鹿ひつぎやうだから？　いよいよ馬鹿と事がきまりさえすれば、ここからでも引き返せるんだが」

はんぶん

この感想は一度に来た。半分とかからないうちに、これだけの順序と、段落と、論理と、空想を具そなえて、抱き合うように彼の頭

の中を通過した。しかしそれから後の彼はもう自分の主人公ではなかった。どこから来たとも知れない若い男が突然現われて、彼の荷物を受け取った。一分の猶豫なく彼をすぐ前にある茶店の中へ引き込んで、彼の行こうとする宿屋の名を訊いたり、馬車に乗るか俥にするかを確かめたりした上に、彼の予期していないような愛嬌さえ、自由自在に忙がしい短時間の間に操縦して退けた。彼はやがて否応なしにズツクの幌を下した馬車の上へ乗せられた。そうして御免といいながら自分の前に腰をかける先刻の若い男を見出すべく驚ろかされた。

「君もいっしょに行くのかい」

「へえ、お邪魔でも、どうか」

若い男は津田の目指している宿屋の手代であつた。

「ここに旗が立っています」

彼は首を曲げて御者台の隅に挿し込んである赤い小旗を見た。

暗いので中に染め抜かれた文字は津田の眼に入らなかった。旗はただ馬車の速力で起す風のために、彼の座席の方へはげしく吹かれるだけであつた。彼は首を縮めて外套の襟を立てた。

「夜中はもうだいぶお寒くなりました」

御者台を背中に背負つてゐる手代は、位地の関係から少しも風を受けないので、この云い草は何となく小賢しく津田の耳に響い

た。

道は左右に田を控えているらしく思われた。そうして道と田の境目には小河の流れが時々聞こえるように感ぜられた。田は両方とも狭く細く山で仕切られているような気もした。

津田は帽子と外套の襟で隠し切れない顔の一部分だけを風に曝して、寒さに抵抗でもするように黙想の態度を手代に示した。手代もその方が便利だと見えて、強いて向うから口を利こうともしなかった。

すると突然津田の心が揺いた。

「お客はたくさんいるかい」

「へえありがとう、お蔭かげさまで」

「何人なんにんぐらい」

何人とも答えなかった手代は、かえって弁解がましい返事をした。

「ただいまはあいにく季節が季節だもんでげすから、あんまりおいでがございません。寒い時は暮からお正月へかけまして、それから夏場になりますと、まあ七八ふたつき月ですな、繁昌はんじょうするのは。そんな時にや臨時のお客さまを御断りする事が、毎日のようにございます」

「じゃ今がちょうど閑ひまな時なんだね、そうか」

「へえ、どうぞごゆくり」

「ありがとう」

「やっぱり御病氣のためにわざわざおいでなんで」

「うんまあそうだ」

清子の事を訊く目的で話し始めた津田は、ここへ来て急に痞え
た。彼は気がさした。彼女の名前を口にするに堪えなかった。そ
の上後あとで面倒でも起ると悪いとも思い返した。手代から顔を離し
て馬車の背に寄りかかり直した彼は、再び沈黙の姿勢を回復し
た。

百七十二

馬車はやがて黒い大きな岩のようなものに突き当ろうとして、その裾すそをぐるりと廻り込んだ。見ると反対の側がわにも同じ岩の破片とも云うべきものが不行儀に路傍みちばたを塞ふさいでいた。台上だいうえから飛び下りた御者ぎよしやはすぐ馬の口を取った。

一方には空を凌しのぐほどの高い樹きが聳そびえていた。星月夜ほしづきよの光に映る物凄ものすごい影から判断すると古松こしょうらしいその木と、突然一方に聞こえ出した奔湍ほんたんの音とが、久しく都会の中を出なかった津田の心に不時ふじの一転化を与えた。彼は忘れた記憶を思い出した時のような

気分になった。

「ああ世の中には、こんなものが存在していたのだっけ、どうして今までそれを忘れていたのだろうか」

不幸にしてこの述懐は孤立のまま消滅する事を許されなかった。津田の頭にはすぐこれから会いに行く清子の姿が描き出された。彼は別れて以来一年近く経つ今日まで、いまだこの女の記憶を失くした覚がなかった。こうして夜路を馬車に揺られて行くのも、有体に云えば、その人の影を一瞬に追かけている所作に違なかった。御者は先刻から時間の遅くなるのを恐れるごとく、止せばいいと思うのに、濫りなる鞭を鳴らして、しきりに瘦馬の尻を

打った。失われた女の影を追う彼の心、その心は無遠慮に翻訳すれば、取りも直さず、この瘦馬ではないか。では、彼の眼前に鼻から息を吹いている憐あわれな動物が、彼自身で、それに手荒な鞭を加えるものは誰なのだろう。吉川夫人？ いや、そう一概いちがいに断言する訳には行かなかった。ではやっぱり彼自身？ この点で精確な解決をつける事を好まなかった津田は、問題をそこで投げながら、依然としてそれより先を考えずにはいらなかった。

「彼女に会うのは何のためだろう。永く彼女を記憶するため？ 会わなくても今の自分は忘れずにいるではないか。では彼女を忘れるため？ あるいはそうかも知れない。けれども会えば忘れら

れるだろうか。あるいはそうかも知れない。あるいはそうでないかも知れない。松の色と水の音、それは今全く忘れていた山と溪^{たに}の存在を憶^{おも}い出させた。全く忘れていない彼女、想像の眼先にちらちらする彼女、わざわざ東京から後^{あと}を跟^つけて来た彼女、はどんな影響を彼の上に起すのだろう」

冷たい山間^{やまあい}の空気と、その山を神秘的に黒くぼかす夜の色と、その夜の色の中に自分の存在を呑^のみ尽された津田とが一度に重なり合った時、彼は思わず恐れた。ぞつとした。

御者^{ぎよしや}は馬の轡^{くつわ}を取ったなり、白い泡^{あわ}を岩角に吹き散らして鳴りながら流れる早瀬の上に架^かけ渡した橋の上をそろそろ通った。す

ると幾点の電灯がすぐ津田の眸ひとみに映ったので、彼はたちまちもう来たなと思った。あるいはその光の一つが、今清子の姿を照らしているのかも知れないとさえ考えた。

「運命の宿火しゅつかだ。それを目標めあてに辿たどりつくよりほかに途みちはない」

詩に乏しい彼は固もとよりこんな言葉を口にする事を知らなかった。けれどもこう形容してしかるべき気分はあった。彼は首を手代の方へ延ばした。

「着いたようじゃないか。君の家うちはどれだい」

「へえ、もう一丁ほど奥になります」

ようやく馬車の通れるくらいな温泉ゆの町は狭かった。おまけに

不規則な故意^{わざ}とらしい曲折を描いて、御者をして再び車台の上に鞭^{むち}を鳴らす事を許さなかった。それでも宿へ着くまでに五六分しかかからなかった。山と谷がそれほど広いという意味で、町はそれほど狭かったのである。

宿は手代の云った通り森閑^{しんかん}としていた。夜のためばかりでもなく、家の広いためばかりでもなく、全く客の少ないためとしか受け取れないほどの静かさのうちに、自分の室^{へや}へ案内された彼は、好時季に邂逅^{めぐりあわ}せてくれたこの偶然に感謝した。性質から云えばむしろ人中^{ひとなか}を択^{えら}ぶべきはずの彼には都合があつた。彼は膳^{ぜん}の向うに坐^{すわ}っている下女に訊^きいた。

「昼間もこの通りかい」

「へえ」

「何だかお客はどこにもいないようじゃないか」

下女は新館とか別館とか本館とかいう名前を挙げて、津田の不審を説明した。

「そんなに広いのか。案内を知らないものは迷^{まいご}児にでもなりそうだね」

彼は清子のいる見^{けんとう}当を確かめなければならなかった。けれども手代に露骨な質問がかけられなかった通り、下女にも卒直な尋ね方はできなかった。

「一人で来る人は少ないだろうね、こんな所へ」

「それでもございません」

「だが男だろう、そりゃ。まさか女一人で逗留とつりゆうしているなんてえのはなからう」

「一人いらっしやいます、今」

「へえ、病気じゃないか。そんな人は」

「そうかも知れません」

「何という人だい」

受持が違うので下女は名前を知らなかった。

「若い人かね」

「ええ、若いお美しい方です」

「そうか、ちよつと見せて貰もらいたいな」

「お湯にいらつしやる時、この室へやの横をお通りになりますから、御覧になりたければ、いつでも――」

「拝見できるのか、そいつはありがたい」

津田は女のいる方角だけ教わつて、膳ぜんを下げさせた。

百七十三

寝る前に一風呂浴びるつもりで、下女に案内を頼んだ時、津田

は始めて先刻^{さつき}彼女から聴^きかされたこの家の広さに気がついた。意外な廊下を曲つたり、思いも寄らない階子段^{はしごだん}を降りたりして、目的^{ゆっぽ}の湯壺^{ゆっぼ}を眼の前に見出^{みいだ}した彼は、實際一人で自分の座敷へ帰れるだろうかと思つた。

風呂場は板と硝子戸^{ガラスど}でいくつにか仕切られていた。左右に三つずつ向う合せに並んでいる小型な浴槽^{よくそう}のほかに、一つ離れて大きいのは、普通の洗湯に比べて倍以上の尺があつた。

「これが一番大きくって心持がいいでしょう」と云つた下女は、津田のために擦硝子^{すり}の簾^{はま}つた戸をがらと開けてくれた。中には誰もいなかった。湯気が籠^{こも}るのを防ぐためか、座敷で云えば欄^{らん}

間と云ったような部分にも、やはり硝子戸の設けがあつて、半分ほど隙かされたその二枚の間から、冷たい一道の夜気が、縋袍どてらを脱ぎにかかった津田の身体からだを、山里らしく襲おそいに來た。

「ああ寒い」

津田はざぶんと音を立てて湯壺の中へ飛び込んだ。

「ごゆっくり」

戸を閉めて出ようとした下女はいったんこう云った後で、また戻つて來た。

「まだ下にもお風呂場がございますから、もしそちらの方がお氣に入るようでしたら、どうぞ」

来る時もう階子段を一つか二つ下りている津田には、この浴槽の階下したがまだあろうとは思えなかった。

「いったい何階なのかね、この家はうち」

下女は笑って答えなかった。しかし用事だけは云い残さなかった。

「この方が新らしくって綺麗きれいは綺麗ですが、お湯は下の方がよく利きくのだそうです。だから本当に療治の目的でおいでの方はみんな下へ入らっしゃいます。それから肩や腰を滝でお打たせになる事も下ならできます」

湯壺から首だけ出したままで津田は答えた。

「ありがとう。じゃ今度^{こんだ}そっちへ入るから連れてつてくれたまえ」

「ええ。旦那様^{だんなさま}はどこかお悪いんですか」

「うん、少し悪いんだ」

下女が去った後の津田は、しばらくの間、「本当に療治^{あつ}の目的で来た客」といった彼女の言葉を忘れる事ができなかった。

「おれははたしてそういう種類の客なんだろうか」

彼は自分をそう思いたくもあり、またそう思いたくもなかった。どっち本位^{ほんい}で来たのか、それは彼の心がよく承知^{しやうち}していた。けれども雨を凌^{しの}いでここまで来た彼には、まだ商量^{しやうりやう}の隙間^{すきま}があつ

た。躊躇^{ちゆうちゆう}があつた。幾分の余裕が残っていた。そうしてその余裕が彼に教えた。

「今のうちならまだどうでもできる。本当に療治の目的で来た客になろうと思えばなれる。なろうとなるまいと今のお前は自由だ。自由はどこまで行っても幸福なものだ。その代りどこまで行っても片づかないものだ、だから物足りないものだ。それでお前はその自由を放^{ほう}り出そうとするのか。では自由を失^{あかつき}った暁に、お前は何物を確^{しか}と手に入れる事ができるのか。それをお前は知っているのか。御前の未来はまだ現前^{げんぜん}しないのだよ。お前の過去にあつた一条^{ひとすじ}の不可思議より、まだ幾倍かの不可思議をもっている

かも知れないのだよ。過去の不可思議を解くために、自分の思い通りのものを未来に要求して、今の自由を放り出そうとするお前は、馬鹿かな利巧かな」

津田は馬鹿とも利巧とも判断する訳に行かなかった。万事が結果いかんできめられようという矢先に、その結果を疑がい出した日には、手も足も動かせなくなるのは自然の理であつた。

彼には最初から三つの途があつた。そうして三つよりほかに彼の途はなかった。第一はいつまでも煮え切らない代りに、今の自由を失わない事、第二は馬鹿になつても構わないで進んで行く事、第三すなわち彼の目指すところは、馬鹿にならないで自分の

満足の行くような解決を得る事。

この三力条のうち彼はただ第三だけを目的にして東京を立つた。ところが汽車に揺られ、馬車に揺られ、山の空気に冷やさ
れ、煙の出る湯壺けむに漬ゆけられ、いよいよ目的の人は眼前にいと
いう事実が分り、目的の主意は明日あしたからでも実行に取りかかれる
という間際まぎわになって、急に第一が顔を出した。すると第二もいつ
の間にか、微笑して彼の傍かたわらに立った。彼らの到着は急であつた。
けれども騒々しくはなかった。眼界を遮さへぎる靄もやが、風の音も立て
ずにすうと晴れ渡る間から、彼は自分の視野を着実に見る事がで
きたのである。

思いのほかに浪漫的ロマンチックであつた津田は、また思いのほかに着実であつた。そうして彼はその両面の対照に気がついていなかった。だから自己の矛盾を苦くにする必要はなかった。彼はただ決すればよかった。しかし決するまでには胸の中で一戦争しなければならなかった。——馬鹿になつても構わない、いや馬鹿になるのは厭いやだ、そうだ馬鹿になるはずがない。——戦争でいったん片づいたものが、またこういう風に三段となつて、最後まで落ちて来た時、彼は始めて立ち上れるのである。

人のいない大きな浴槽よくそうのなかで、洗うとも摩こするとも片のつかない手を動かして、彼はしきりに綺麗きれいな温泉ゆをざぶざぶ使った。

百七十四

その時不意にがらがらと開けられた硝子戸ガラスどの音が、周囲あたりをまるで忘れて、自分の中にばかり頭を突込んでいた津田をはつと驚ろかした。彼は思わず首を上げて入口を見た。そうしてそこに半身を現わしかけた婦人の姿を湯気のうちに認めた時、彼の心臓は、合図の警鐘のように、どきんと打った。けれども瞬間に起った彼の予感、また瞬間に消える事ができた。それは本当の意味で彼を驚ろかせに来た人ではなかった。

生れてからまだ一度も顔を合せた覚おぼえのないその婦人は、寝掛ねかけと

見えて、白昼なら人前を憚はばかるような慎つつしみの足りない姿を津田の前に露あらわした。尋常の場合では小袖こそでの裾すその先にさえ出る事を許されない、長い襦袢じゆばんの派手はでな色が、惜気おしげもなく津田の眼をはなやかに照した。

婦人は温泉煙ゆけむりの中に乞食こじきのごとく蹲踞うづくまる津田の裸体姿はだかすがたを一目見るや否や、いったん入りかけた身体からだをすぐ後あとへ引いた。

「おや、失礼」

津田は自分の方で詫あやまるべき言葉を、相手に先へ奪とられたような気がした。すると階子段はしごだんを下りる上靴スリッパの音がまた聴こえた。それが硝子戸の前でとまったかと思うと男女の会話が彼の耳に入っ

た。

「どうしたんだ」

「誰が入ってるの」

「塞^{ふさ}がってるのか。好いじゃないか、こんでさえいなければ」

「でも……」

「じゃ小さい方へ入るさ。小さい方ならみんな空^あいてるだろう」

「勝^{かつ}さんはいないかしら」

津田はこの二人づれのために早く出てやりたくなった。同時に是非彼の入っている風呂へ入らなければ承知ができないといった調子のどこかに見える婦人の態度が気に喰^くわなかった。彼はここ

へ入りたければ御勝手にお入んなさい、御遠慮には及びませんか
らという度胸を据^すえて、また浴槽の中へ身体を漬^つけた。

彼は背の高い男であつた。長い足を楽に延ばして、それを温泉
の中で上下^{うへした}へ動かしながら、透^すき徹^{とお}るもののうちに、浮いたり沈
んだりする肉体の下^か肢^しを得意に眺めた。

時に突然婦人の要する勝さんらしい人の声がし出した。

「今晚は。大変お早うございますね」

勝さんのこの挨拶^{あいさつ}には男の答があつた。

「うん、あんまり退屈だから今日は早く寝ようと思つてね」

「へえ、もうお稽古^{けいこ}はお済みですか」

「お済みって訳でもないが」

次には女の言葉が聴こえた。

「勝さん、そこは塞ふさがつてるのね」

「おやそうですか」

「どこか新らしく拵こしらえたのはないの」

「ございます。その代り少し熱いかも知れませんよ」

二人を案内したらしい風呂場の戸の開あく音が、向うの方でし

た。かと思うと、また津田の浴槽よくそうの入口ががらりと鳴った。

「今晚は」

四角な顔の小作りな男が、またこう云いながら入って来た。

「旦那だんな流しましょう」

彼はすぐ流しへ下り立って、小判おけなりの桶へ湯を汲んだ。津田は否応いやおうなしに彼に背中を向けた。

「君が勝さんてえのかい」

「ええ旦那はよく御承知ですね」

「今聴きいたばかりだ」

「なるほど。そう云えば旦那も今見たばかりですね」

「今来たばかりだもの」

勝さんはははあと云って笑い出した。

「東京からおいでですか」

「そうだ」

勝さんは何時なんじの下りだの、上りだのという言葉遣つかつて、津田に正確な答えをさせた。それから一人で来たのかとか、なぜ奥さんを伴つれて来なかったのかとか、今の夫婦ものは浜の生糸屋きいとやさんだとか、旦那が細君に毎晩義太夫を習っているんだとか、宅うちのお上かみさんは長唄ながうたが上手だとか、いろいろの問をかけると共に、いろいろの知識を供給した。聴かないでもいい事まで聴かされた津田には、勝さんの触れないものが、たった一つしかないように思われた。そうしてその触れないものは取とりも直なおさず清子という名前であった。偶然から来たこの結果には、津田にとって多少の物足ら

なさが含まれていた。もちろん津田の方でも水を向ける用意もなかった。そんな暇のないうちに、勝さんはさっさとしゃべるだけしゃべって、洗う方を切り上げてしまった。

「どうぞごゆっくり」

こう云って出て行った勝さんの後影を見送った津田にも、もうゆっくりする必要がなかった。彼はすぐ身体を拭いて硝子戸ガラスどの外へ出た。しかし濡手拭ぬれてぬぐいをぶら下げて、風呂場の階子段はしごだんを上あがって、そこにある洗面所と姿見すがたみの前を通り越して、廊下を一曲り曲ったと思ったら、はたしてどこへ帰っていいのか解らなくなった。

百七十五

最初の彼はほとんど気がつかずに歩いた。これが先刻^{さつき}下女に案内されて通った路^{みち}なのだろうかと思ひ、淡い夢のように、彼の記憶を暈^{ぼか}すだけであつた。しかし廊下を踏んだ長さに比較して、なかなか自分の室^{へや}らしいものの前に出られなかつた時に、彼はふと立ちどまつた。

「はてな、もつと後^{あと}かしら。もう少し先かしら」

電灯で照らされた廊下は明るかつた。どっちの方角でも行こうとすれば勝手に行かれた。けれども人の足音はどこにも聴^{きこ}えな

かった。用事で往来ゆききをする下女の姿も見えなかった。手拭と石鹼シャボンをそこへ置いた津田は、宅うちの書斎でお延を呼ぶ時のように手を鳴らして見た。けれども返事はどこからも響いて来なかった。不案内な彼は、第一下女の溜りたまのある見当を知らなかった。個人の住宅とほとんど区別のつかない、植込うえこみの突当りにある玄関から上ったので、勝手口、台所、帳場などの所在ありかは、すべて彼にとっての秘密と何の忖えらぶところもなかった。

手を鳴らす所作しよさを一二度繰り返して見て、誰も応ずるもののないのを確かめた時、彼は苦笑しながらまた石鹼と手拭を取り上げた。これも一興だという気になった。ぐるぐる廻っているうちに

は、いつか自分の室の前に出られるだろうという酔興すいきようも手伝った。彼は生れて以来旅館における始めての経験を故意に味わう人のような心になってまた歩き出した。

廊下はすぐ尽きた。そこから筋違すじかいに二三度上あるとまた洗面所があった。きらきらする白い金盥かなだらうが四つほど並んでいる中へ、ニツケルの栓せんの口から流れる山水やまみずだか清水しみずだか、絶えずざあざあ落ちるので、金盥は四つが四つともいっぱいになっているばかりか、縁ふちを溢あふれる水晶すいしやうのような薄い水の幕の綺麗きれいに滑すべって行く様さまが鮮あざやかに眺められた。金盥の中の水は後あとから押されるのと、上から打たれるのとの両方で、静かなうちに微細な震盪しんとうを感ずるもののご

とくに揺れた。

水道ばかりを使い慣れて来た津田の眼は、すぐ自分の居場所おりばしょを彼に忘れさせた。彼はただもつたいないと思った。手を出して栓せんを締めておいてやろうかと考えた時、ようやく自分の迂濶うかつさに気がついた。それと同時に、白い瀬戸張せとばりのなかで、大きくなったり小さくなったりする不定な渦うずが、妙に彼を刺戟しげきした。

あたりは静かであつた。膳ぜんに向つた時下女の云つた通りであつた。というよりも事實は彼女の言葉を一々首肯うけがつて、おおかたこのくらいだろうと暗あんに想像したよりも遙はるかに静かであつた。客がどこにいるのかと怪しむどころではなく、人がどこにいるのかと

疑いたくなるくらいであつた。その静かさのうちに電灯は隈なく照り渡つた。けれどもこれはただ光るだけで、音もしなければ、動きもしなかつた。ただ彼の眼の前にある水だけが動いた。渦らしい形を描いた。そうしてその渦は伸びたり縮んだりした。

彼はすぐ水から視線を外した。すると同じ視線が突然人の姿に行き当つたので、彼ははつとして、眼を据えた。しかしそれは洗面所の横に懸けられた大きな鏡に映る自分の影像に過ぎなかつた。鏡は等身と云えないまでも大きかつた。少くとも普通床屋に具えつけてあるものぐらゐの尺はあつた。そうして位地の都合上、やはり床屋のそれのごとくに直立していた。したがって彼の

顔、顔ばかりでなく彼の肩も胴も腰も、彼と同じ平面に足を置いて、彼と向き合ったままで映った。彼は相手の自分である事に気がついた後でも、なお鏡から眼を放す事ができなかった。湯上りの彼の血色はむしろ蒼あおかった。彼にはその意味が解げせなかった。久しく刈込かりこみを怠った髪は乱れたままで頭に生おい被かぶさっていた。風呂で濡ぬらしたばかりの色が漆うるしのように光った。なぜだかそれが彼の眼には暴風雨に荒らされた後の庭先らしく思えた。

彼は眼鼻立の整った好男子であつた。顔の肌理きめも男としてはもったいたなくらい濃こかに出来上っていた。彼はいつでもそこに自信をもっていた。鏡に対する結果としてはこの自信を確かめる

場合ばかりが彼の記憶に残っていた。だからいつもと違った不満足な印象が鏡の中に現われた時に、彼は少し驚ろいた。これが自分だと認定する前に、これは自分の幽霊だという気がまず彼の心を襲った。凄く^{すこ}なった彼には、抵抗力があつた。彼は眼を大きくして、なおの事自分の姿を見つめた。すぐ二足ばかり前へ出て鏡の前にある櫛^{くし}を取上げた。それからわざと落ちついて綺麗に自分の髪を分けた。

しかし彼の所作^{しよさ}は櫛を投げ出すと共に尽きてしまった。彼は再び自分の室^{へや}を探すもとの我に立ち返った。彼は洗面所と向い合せに付けられた階子段^{はしごだん}を見上げた。そうしてその階子段には一種の

特徴のある事を発見した。第一に、それは普通のものより幅が約三分一ほど広がった。第二に象が乗っても音がしまいと思われるくらい巖丈がんじょうにできていた。第三に尋常のものと違って、擬まがいの西洋館らしく、一面に仮漆ニスが塗かっていた。

胡乱うろんなうちにも、この階子段だけはけっして先刻さつき下りなかったというたしかな記憶が彼にあつた。そこを上のぼつても自分の室へは帰れないと気がついた彼は、もう一遍あとほど後戻りをする覚悟で、鏡から離れた身体からだを横へ向け直した。

するとその二階にある一室の障子しょうじを開けて、開けた後あとをまた閉たて切る音が聴きこえた。階子段の構えから見ても、上にある室の数は一つや二つではないらしく思われるほど広い建物なのに、今津田の耳に入った音は、手に取るように判切はっきりしているので、彼はすぐその確たしか的さの度合から押して、室の距離を定める事ができた。

下から見上げた階子段の上は、普通料理屋の建築などで、人しばしば目撃するところと何の異ことなるところもなかった。そこには広い板の間があつた。目の届かない幅は問題外として、突き当りを遮さえぎる壁を目標めやすに置いて、大凡おおよその見当をつけると、畳一枚をたて敷くだけの長さは充分あるらしく見えた。この板の間から、

廊下が三方へ分れているか、あるいは二方に折れ曲っているか、そこは階段を上らない津田の想像で判断するよりほかに途はないとして、今聴えた障子の音の出所は、一番階段に近い室、すなわち下たから見える壁のすぐ後に違なかつた。

ひっそりした中に、突然この音を聞いた津田は、始めて階上にも客のいる事を悟った。というより、彼はようやく人間の存在に気がついた。今までまるで方角違いの刺戟に気を奪られていた彼は驚ろいた。もちろんその驚きは微弱なものであつた。けれども性質からいうと、すでに死んだと思つたものが急に蘇つた時に感ずる驚ろきと同じであつた。彼はすぐ逃げ出そうとした。それは

部屋へ帰れずに迷^ま見^ごついている今の自分に付着する間^ま抜^ぬさ加^か減^{げん}を
他^{ひと}に見せるのが厭^{いや}だったからでもあるが、実を云うと、この驚ろ
きによつて、多少なりとも度を失なつた己^{おの}れの醜^{みにく}さを人前に曝^{さら}
すのが恥^はずかしかったからでもある。

けれども自然の成行はもう少し複雑であつた。いったん歩^ほを回^{めぐ}
らそうとした刹^せ那^{つな}に彼は氣がついた。

「ことによると下女かも知れない」

こう思い直した彼の度胸はたちまち回復した。すでに驚ろきの
上を超^こえる事のできた彼の心には、続いて、なに客でも構わな
いという余裕が生れた。

「誰でもいい、来たら方角を教えて貰おう」^{もら}

彼は決心して姿見の横に立ったまま、階子段の上を見つめた。^{すがたみ}
^{はしごだん}

すると静かな足音が彼の予期通り壁の後で聴え出した。その足音は実際静かであった。踵へ跳ね上る上靴の薄い尾がなかったな^{かかと}^は^{スリッパ}
ら、彼はついにそれを聴き逃してしまわなければならぬほど静かであった。その時彼の心を卒然として襲って来たものがあつた。

「これは女だ。しかし下女ではない。ことによると……」

不意にこう感づいた彼の前に、もしやと思ったその本人が容赦なく現われた時、今しがた受けたより何十倍か強烈な驚ろきに囚^{とら}

われた津田の足はたちまち立ち竦すくんだ。眼は動かなかった。

同じ作用が、それ以上強烈に清子をその場に抑えつけたらしかった。階上の板の間まで来てそこでぴたりととまった時の彼女は、津田にとって一種の絵であつた。彼は忘れる事のできない印象の一つとして、それを後々まで自分の心に伝えた。のちのち

彼女が何気なく上から眼を落したのと、そこに津田を認めたのとは、同時に似て実は同時でないように見えた。少くとも津田にはそう思われた。無心むしんが有心ゆうしんに変わるまでにはある時がかつた。

驚ろきの時、不可思議の時、疑いの時、それらを経過した後で、あと彼女は始めて棒立になつた。横から肩を突けば、指一本の力で

も、土で作った人形を倒すよりたやすく倒せそうな姿勢で、硬く
なっただまま棒立に立った。

彼女は普通の湯治客とうじきやくのする通り、寝しなに一風呂入って温まるあたた
つもりと見えて、手に小型のタウエルを提さげていた。それから津
田と同じようにニッケル製の石鹼シヤボン入を裸はだかのまま持っていた。棒の
ように硬く立った彼女が、なぜそれを床の上へ落さなかったか
は、後からその刹那せつなの光景を辿たどるたびに、いつでも彼の記憶中に
顔を出したが、疑問であつた。

彼女の姿は先刻さつき風呂場で会った婦人ほど縦ほしいままではなかった。
けれどもこういう場所で、客同志が互いに黙認しあうだけの自由

はすでに利用されていた。彼女は正式に幅の広い帯を結んでいなかった。赤だの青だの黄だの、いろいろの縞しまが綺麗きれいに通っている派手はでな伊達巻だてまきを、むしろずるずるに巻きつけたままであった。寝巻ねまきの下に重ねた長襦袢ながじゆばんの色が、薄い羅紗製らしやせいの上靴スリッパを突つかけた素足すあしの甲おほを被おほっていた。

清子の身体からだが硬くなると共に、顔の筋肉も硬くなった。そうして両方の頬と額の色が見る見るうちに蒼白あおしろく変って行った。その変化がありありと分って来た中頃で、自分を忘れていた津田は気がついた。

「どうかしなければいけない。どこまで蒼くなるか分らない」

津田は思い切って声をかけようとした。するとその途端に清子の方が動いた。くるりと後を向いた彼女は止まらなかった。津田を階下に残したまま、廊下を元へ引き返したと思うと、今まで明らかに彼女を照らしていた二階の上り口の電灯がぱっと消えた。

津田は暗闇の中で開けるらしい障子の音をまた聴いた。同時に彼の気のつかなかった、自分の立っているすぐ傍の小さな部屋で呼鈴の返しの音がけたたましく鳴った。

やがて遠い廊下をぱたぱた馳けて来る足音が聴こえた。彼はその足音の主を途中で喰いとめて、清子の用を聴きに行く下女から自分の室の在所を教えて貰った。

百七十七

その晩の津田はよく眠れなかった。雨戸の外でするさらさらいう音が絶えず彼の耳に付着した。それを離れる事のできない彼は疑った。雨が来たのだろうか、たにがわ谿川が軒の近くを流れているのだろうか。雨としては底に響ひびがないし、谿川としては勢いきおいが緩漫過ぎるとまで考えた彼の頭は、同時にそれより遙はるか重大な主題のために悩まされていた。

彼は室に帰ると、いつの間にか気を利きかせた下女の暖かそうに延べておいてくれた床を、わが座敷の真中に見出みいしたので、すぐ

その中へ潜り込んだまま、偶然にも今自分が経過して来た冒険について思い耽ったのである。

彼はこの宵の自分を顧りみて、ほとんど夢中歩行者のような気がした。彼の行為は、目的もなく家中彷徨き廻ったと一般であつた。ことに階子段の下で、静中に渦を廻転させる水を見たり、突然姿見に映る気味の悪い自分の顔に出会ったりした時は、事後一時間と経たない近距離から判断して見ても、たしかに常軌を逸した心理作用の支配を受けていた。常識に見捨てられた例の少ない彼としては珍らしいこの気分は、今床の中に安臥する彼から見れば、恥ずべき状態に違なかつた。しかし外聞が悪いという事をほ

かにして、なぜあんな心持になったものだろうかと、ただその原因を考えるだけでも、説明はできなかった。

それはそれとして、なぜあの時清子の存在を忘れていたのだろうという疑問に推し移ると、津田は我ながら不思議の感に打たれざるを得なかった。

「それほど自分は彼女に対して冷淡なのだろうか」

彼は無論そうでないと信じていた。彼は食事の時、すでに清子のいる方角を、下女から教えて貰ったくらいであつた。

「しかしお前はそれを念頭に置かなかつたろう」

彼は實際廊下をうろろう歩行あるいているうちに、清子をどこかへ

ふり落した。けれども自分のどこを歩いているか知らないものが、他^{ひと}がどこにいるか知ろうはずはなかった。

「この見当^{けんとう}だと心得てさえいたならば、ああ不意^{ふいうち}打を食うんじゃない」
「なかつたのに」

こう考えた彼は、もう第一の機会を取り逃したような気がした。彼女が後を向いた様子、電気を消して上^{あか}り口^{くち}の案内を閉塞^{へいそく}した所作^{しよさ}、たちまち下女を呼び寄せるために鳴らした電鈴^{ベル}の音、これらのものを綜合^{そつごう}して考えると、すべてが警戒であつた。注意であつた。そうして絶縁であつた。

しかし彼女は驚ろ^{はる}いていた。彼よりも遙^{はる}か余計に驚ろいていた

た。それは単に女だからとも云えた。彼には不意の裡に予期があり、彼女には突然の中にただ突然があるだけであつたからとも云えた。けれども彼女の驚ろきはそれで説明し尽せているだろうか。彼女はもつと複雑な過去を觀面に感じてはいないだろうか。

彼女は蒼あおくなつた。彼女は硬くなつた。津田はそこに望みを繋つないだ。今の自分に都合つごうの好いようにそれを解釈してみた。それからまたその解釈を引繰返ひっくりかえして、反対の側がわからも眺めてみた。両方を眺め尽した次にはどっちが合理的だろうという批判をしなればならなくなつた。その批判は材料不足のために、容易に纏まとまらなかつた。纏つてもすぐ打ち崩くずされた。一方に傾くと彼の自信が

壊しに來た。他方に寄ると幻滅の半鐘が耳元に鳴り響いた。不思議にも彼の自信、卑下して用いる彼自身の言葉でいうと彼の己惚は、胸の中にあるような気がした。それを攻めに來る幻滅の半鐘はまた反対にいつでも頭の外から來るような心持がした。両方を公平に取扱かっているつもりでいながら、彼は常に親疎の區別をその間に置いていた。というよりも、遠近の差等が自然天然属性として二つのものに元から具わっているらしく見えた。結果は分明であつた。彼は叱りながら己惚の頭を撫でた。耳を傾けながら、半鐘の音を忌んだ。

かくして互いに追つ追われつしている彼の心に、静かな眠は來

ようとしても来られなかった。万事を明日あすに譲る覚悟をきめた彼は、幾度いくたびかそれを招き寄せようとして失敗しくじったあげく、右を向いたり、左を下にしたり、ただ寝返りねがえの数を重ねるだけであつた。

彼は煙草へ火を点つけようとして枕元にある燐寸マッチを取った。その時袖そで畳たたみにして下女が衣桁いこうへかけて行つた縷袍どてらが眼に入いつた。気がついて見ると、お延の鞆かばんへ入れてくれたのはそのままにして、先刻宿さつきで出したのを着たなり、自分は床の中へ入っていた。彼は病院を出る時、新調の縷袍どてらに対してお延に使つたお世辞せじをたちまち思い出した。同時にお延の返事も記憶の舞台に呼び起された。

「どつちが好いか比べて御覧なさい」

縋袍ははたして宿の方が上等であつた。銘仙と糸織の區別は彼の眼にも一目瞭然であつた。縋袍を見較べると共に、細君を前に置いて、内々心の中で考えた當時の事が再び意識の域上に現われた。

「お延と清子」

独りこう云つた彼はたちまち吸殻を灰吹の中へ打ち込んで、その底から出るじいという音を聴いたなり、すぐ夜具を頭から被つた。

強いて寝ようとする決心と努力は、その決心と努力が疲れ果ててどこかへ行つてしまつた時に始めて酬いられた。彼はとうとう

我知らず夢の中に落ち込んだ。

百七十八

朝早く男が来て雨戸を引く音のために、いったん破りかけられたその夢は、半醒半睡の間に、辛^{かろ}うじて持続した。室^{へや}の四角^{よすみ}が寝ていられないほど明るくなって、外部^{そと}に朝日の影が充^みち渡ると思う頃、始めて起き上った津田の瞼^{まぶた}はまだ重かった。彼は楊枝^{ようじ}を使いながら障子^{しょうじ}を開けた。そうして昨夜来の魔境から今ようやく覚醒した人のような眼を放って、そこいらを見渡した。

彼の室の前にある庭は案外にも山里らしくなかった。不規則な池を人工的に^{こしら}え、その周囲に稚^{わか}い松だの躑躅^{つづじ}だのを普通の約束通り配置した景色は平凡というよりむしろ卑俗であった。彼の室に近い築山の間から、谿^{たに}水^{みづ}を導いて小さな滝を池の中へ落している上に、高くはないけれども、一度に五六筋の柱を花火のように吹き上げる噴水まで添えてあった。昨夜^{ゆうべ}彼の睡眠を悩ました細工^{みなもと}の源を、苦笑しながら明らさまに見た時、彼の聯想^{れんそう}はすぐこの水音以上に何倍か彼を苦しめた清子の方へ推^おし移った。大根^{おおね}を洗えばそれもこの噴水同様に殺風景なものかも知れない、いやもしそれがこの噴水同様に無意味なものであったらたまらないと彼は

考えた。

彼が銜^{くわ}え楊枝^{ようじ}のまま懷^{ふところ}手をして敷居の上にぼんやり立っている
と、先刻^{さつき}から高箒^{たかほうき}で庭の落葉を掃^はいていた男が、彼の傍^{そば}へ寄つて
来て丁寧^{ていねい}に挨拶^{あいさつ}をした。

「お早う、昨夜^{さくや}はお疲れさまで」

「君だったかね、昨夕^{ゆうべ}馬車へ乗つてここまでいっしょに来てくれ
たのは」

「へえ、お邪魔様で」

「なるほど君の云った通り閑静だね。そうしてむやみに広い家^{うち}だ
ね」

「いえ、御覧の通り平地ひらちの乏しい所でげすから、地ならしをしてはその上へ建て建てして、家が幾段にもなっておりますので、――廊下だけは仰せの通りむやみに広くって長いかも知れません」

「道理で。昨夕僕は風呂場へ行つた歸りに迷まい児ごになつて弱つたよ」

「はあ、そりゃ」

二人がこんな会話を取り換かわせている間に、庭続の小山の上から男と女がこれも二人づれで下りて来た。黄葉こうようと枯枝すきまの隙間を動いてくる彼らの路みちは、稲妻形いなずまがたに林うちの裡を抜けられるように、また比較的急な勾配こうはいを樂のに上られるように、作つてあるので、ついそ

ここに見えている彼らの姿もなかなか庭先まで出るのに暇がかかった。それでも手代^{てだい}はじつとして彼らを待っていないかった。たちまち津田を放り出し^{ほうし}た現金な彼は、すぐ岡の裾^{すそ}まで駈け出して行つて、下から彼らを迎いに來たような挨拶^{あいさつ}を与えた。

津田はこの時始めて二人の顔をよく見た。女は昨夕^{ゆうべ}艶め^{なま}かしい姿をして、彼の浴室の戸を開けた人に違^{ちが}なかつた。風呂場で彼を驚ろかした大きな鬚^{まげ}をいつの間にか崩^{くず}して、尋常の束髪^ゆに結い更^かえたので、彼はつい同じ人と気がつかずにいた。彼はさらに声を聴^きいただけで顔を知らなかつた伴^{つれ}の男の方を、よそながらの初対面^{ひげ}といった風に、女と眺め比べた。短かく刈り込んだ当世風の髭

を鼻の下に生やしたその男は、なるほど風呂番の云った通り、どこかに商人らしい面影おもかげを宿もしていた。津田は彼の顔を見るや否や、すぐお秀の夫を憶い出した。堀庄太郎、もう少し略して堀の庄さん、もつと詰つめて当人のしばしば用ほりしやういる堀庄という名前が、いかにも妹婿の様子を代表しているごとく、この男の名前もきつとその髭を虐殺するように町人染ちやうにんじみていはしまいかと思われた。瞥見べっけんのついでに纏まとめられた津田の想像はここにとどまらなかった。彼はもう一步皮肉なところまで切り込んで、彼らがはたして本当の夫婦であるかないかをさえ疑問の中に置いた。うちしたがって早起をして食前浴後の散歩に出たのだと明言する彼らは、津田に

とつての違例な現象にほかならなかった。彼は楊枝で齒を磨りながらまだ元の所に立っていた。彼がよそ見をしているにもかかわらず、番頭を相手に二人のする談話はよく聴えた。

女は番頭に訊いた。

「今日は別館の奥さんはどうかですって」

番頭は答えた。

「いえ、手前はちつとも存じませんが、何か——」

「別に何って事もないんですけれどもね、いつでも朝風呂場でお目にかかるのに、今日はいらっしやらなかったから」

「はあさようで——、ことによるとまだお休みかも知れません」

「そうかも知れないわね。だけどいつでも両方の時間がちゃんと
きまつてるのよ、朝お風呂に行く時の」

「へえ、なるほど」

「それに今朝けさごいっしょに裏の山へ散歩に参りましょうってお約束をしたもんですからね」

「じゃちよつと伺って参りましょう」

「いいえ、もういいのよ。散歩はこの通り済んじまったんだから。ただもしやどこかお加減でも悪いのじゃないかしらと思つて、ちよつと番頭さんに訊いてみただけよ」

「多分ただのお休みだろうと思いますが、それとも――」

「それともなんて、そう真面目くさらなくってもいいのよ。ただ訊いてみただけなんだから」

二人はそれぎり行き過ぎた。津田は齒磨粉で口中をいっぱいにしながら、また昨夜の風呂場を探しに廊下へ出た。

百七十九

しかし探すなどという大袈裟な言葉は、今朝の彼にとって全く無用であった。路に曲折の難はあったにせよ、一足の無駄も踏まずに、自然昨夜の風呂場へ下りられた時、彼の腹には、夜来の自

分を我ながら馬鹿馬鹿しいと思う心がさらに新らしく湧いて出た。

風呂場には軒下に簷めた高い硝子戸ガラスどを通して、秋の朝日がかんかん差し込んでいた。その硝子戸越に岩だか土堤だかの片影を、近く頭の上に見上げた彼は、全身を温泉に浸けながら、いかに浴槽そうの位置が、大地の平面以下に切り下げられているかを発見した。そうしてこの崖がけと自分のいる場所との間には、高さから云つてずいぶんの相違があると思った。彼は目分量でその距離を一間半乃至二間と鑑定した後で、もしこの下にも古い風呂場があるとすれば、段々が一つ家の中に幾層もあるはずだという事に気がつ

いた。

崖の上には石落^{つわ}があつた。あいにくそこに朝日が射していないので、時々風に揺れる硬く光った葉の色が、いかにも寒そうに見えた。山茶花^{さざんか}の花の散って行く様も湯壺^{ゆっぼ}から眺められた。けれども景色は断片的であつた。硝子戸の長さの許す二尺以外は、上下とも全く津田の眼に映らなかつた。不可知な世界は無論平凡^{ちがひ}に違なかつた。けれどもそれがなぜだか彼の好奇心を唆^{そそ}つた。すぐ崖の傍^{そば}へ来て急に鳴き出したらしい鶉^{ひよどり}も、声が聴^{きこ}えるだけで姿の見えないのが物足りなかつた。

しかしそれはほんのつけたりの物足りなさであつた。実を云う

と、津田は腹のうちで遥はるかそれ以上気にかかる事件を捏こね返かえして
いたので、彼は風呂場へ下りた時からすでにある不足を暗あん々あんのう
ちに感じなければならなかった。明るい浴室に人影一つ見出みいださな
かった彼は、万事君の跋扈ばっこに任せるといった風に寂せき寞ばくを極きめた建
物の中に立って、廊下の左右に並んでいる小さい浴槽の戸を、念
のため一々開けて見た。もつともこれはそのうちの一つの入口
に、スリッパが脱すぎ棄すててあったのが、彼に或暗示を与えたの
で、それが機縁になって、彼を動うごかした所作しよさに過すぎないとも云え
ば云えない事もなかった。だから順々に戸を開けた手の番が廻まわつ
て来て、いよいよスリッパの前に閉たて切きられた戸にかかった

時、彼は急に躊躇ちゆうちゆうした。彼は固もとより無心ではなかった。その上失礼という感じがどこかで手伝った。仕方なしに外部そとから耳そはだを峙そはだてたけれども、中は森しんとしていたので、それに勢いきおいを得た彼の手は、思い切ってがらりと戸を開ける事ができた。そうしてほかと同じように空虚な浴室が彼の前に見出された時に、まあよかったという感じと、何だつまらないという失望が一度に彼の胸に起った。すでに裸になって、湯壺ゆつぽの中に浸つかった後あとの彼には、この引続きから来る一種の予期が絶えず働らいた。彼は苦笑しながら、昨夕ゆうべと今朝けさの間に自分の経過した変化を比較した。昨夕の彼は丸鬚まるまげの女に驚ろかされるまではむしろ無邪気であつた。今朝の彼はまだ

誰も来ないうちから一種の待ち設けのために緊張を感じていた。

それは主ぬしのないスリッパに唆そそのかされた罪かも知れなかった。けれどもスリッパがなぜ彼を唆のかしたかというところ、寝起ねおきに横浜の女と番頭の噂うわさに上のぼった清子の消息を聴きかされたからであつた。彼女はまだ起きていなかった。少くともまだ湯に入っていなかった。もし入るとすれば今入っているか、これから入りに来るかどっちかでなければならなかった。

鋭敏な彼の耳は、ふと誰か階段を下りて来るような足音を聴いた。彼はすぐじゃぶじゃぶやる手を止やめた。すると足音は聴えなくなつた。しかし気のせいかいったんとまったその足音が今度は

逆に階段を上^{のぼ}って行くように思われた。彼はその原因を想像した。他の例^{ひと}にならって、自分のスリッパを戸の前に脱ぎ捨^すてておいたのが悪くはなかったろうかと考えた。なぜそれを浴室の中心まで穿^はき込まなかったのだろうかという後悔^{きざい}さえ萌^もした。

しばらくして彼はまた意外な足音を今度は浴槽^{よくそう}の外側に聞いた。それは彼が石落^{つわ}の花を眺^{あと}めた後、鶉^{ひよどり}鳥の声を聴^きいた前であった。彼の想像はすぐ前後の足音を結びつけた。風呂場を避けた前の足音の主が、わざと外へ出たのだという解釈が容易に彼に与えられた。するとたちまち女の声がした。しかしそれは足音と全く別な方角から来た。下から見上げた外部の様子によつて考える

と、崖がけの上は幾坪かの平地ひらちで、その平地を前に控えた一棟ひとむねの建物が、風呂場の方を向いて建てられているらしく思われた。何しろ声はそっちの見当から来た。そうしてその主は、たしかに先刻さつき散歩の帰りに番頭と清子の話をした女であつた。

昨夕湯気を抜くために隙すかされた庇ひさしの下ガラスどの硝子戸が今日は閉たて切られているので、彼女の言葉は明かに津田の耳に入らなかつた。けれども語勢その他から推して、一事はたしかであつた。彼女は崖がけの上から崖の下へ向けて話しかけていた。だから順序を云えば、崖の下からも是非受け応うえの挨拶あいさつがなければならぬはずであつた。ところが意外にもその方はまるで音沙汰おとさたなしで、互

い違いに起る普通の会話はけっして聴かれなかった。しゃべる方はただ崖の上に限られていた。

その代り足音だけは先刻のようにとまらなかった。疑いもなく一人の女が庭下駄で不規則な石段を踏んで崖を上^{のぼ}って行^いった。それが上り切ったと思う頃に、足を運ぶ女の裾^{すそ}が硝子戸の上部の方に少し現われた。そうしてすぐ消えた。津田の眼に残った瞬間の印象は、ただうつくしい模様の翻^{ひる}がえる様であつた。彼は動き去つたその模様のうちに、昨夕階段の下から見たと同じ色を認めたような気がした。

百八十

室^{へや}に帰って朝食^{あさめし}の膳に着いた時、彼は給仕の下女と話した。

「浜のお客さんのいる所は、新らしい風呂場から見える崖の上だろう」

「ええ。あちらへ行つて御覧になりましたか」

「いいや、おおかたそうだろうと思っただけさ」

「よく当りましたね。ちとお遊びにいらっしゃいまし、旦那も奥さんも面白い方です。退屈だ退屈だって毎日困つてらっしゃるんです」

「よっぽど長くいるのかい」

「ええもう十日ばかりになるでしょう」

「あれだね、義太夫をやるってえのは」

「ええ、よく御存じですね、もうお聴ききになりましたか」

「まだまだよ。ただ勝さんに教わっただけだ」

彼が聴くがままに、二人についての知識を惜おしげもなく供給した下女は、それでも分も心得ていた。急所へ来るとわざと津田の問を外はずした。

「時にあの女の人はいったい何だね」

「奥さんですよ」

「本当の奥さんかね」

「ええ、本当の奥さんでしょう」と云った彼女は笑い出した。

「まさか嘘うその奥さんてのもないでしょう、なぜですか」

「なぜって、素人しろうとにしちやあんまり粹いきす過ぎるじゃないか」

下女は答える代りに、突然清子を引合ひきあいに出した。

「もう一人奥にいらっしゃる奥さんの方がお人柄ひとがらです」

間取まどりの関係から云って、清子の室へやは津田の後うしろ、二人づれの座敷

は津田の前に当った。両方の中間に自分を見出みいだした彼はようやく

首肯うなずいた。

「するとちやうど真中まんなかへんだね、ここは」

真中でも室が少し折れ込んでいるので、両方の通路にはなっていないかった。

「その奥さんとあの二人のお客とは友達なのかい」

「ええ御懇意です」

「元から？」

「さあどうですか、そこはよく存じませんが、——おおかたここへいらしってからお知合におんなすったんでしよう。始終しじゅう行ったり来たりしていらっしゃいます、両方ともお閑ひまなもんですから。昨日きのうも公園へいっしょにお出かけでした」

津田は問題を取り逃がさないようにした。

「その奥さんはなぜ一人でいるんだね」

「少し身体からだがお悪いんです」

「旦那だんなさんは」

「いらっしやる時は旦那さまもごいっしよでしたが、すぐお帰りになりました」

「置おいてきぼりか、そりゃひどいな。それつきり来ないのかい」
「何でも近いうちにまたいらっしやるのかという事でしたが、どう
なりましたか」

「退屈だろうね、奥さんは」

「ちと話しに行つて、お上げになったらいかがです」

「話しに行ってもいいかね、後で聴いといてくれたまえ」

「へえ」と答えた下女はにやにや笑うだけで本気にしなかった。

津田はまた訊^きいた。

「何をして暮しているのかね、その奥さんは」

「まあお湯に入ったり、散歩をしたり、義太夫を聴かされたり、

——時々花なんかお活^いけになります、それから夜よく手習をしていらっしやいます」

「そうかい。本は？」

「本もお読みになるでしょう」と中途半端に答えた彼女は、津田の質問があまり煩^{はん}瑣^さにわたるので、とうとうあははと笑い出し

た。津田はようやく気がついて、少し狼狽^{あわて}たように話を外^そらせた。

「今朝風呂場へスリッパを忘れていったものがあるね、塞^{ふさ}がっているのかと思ってはじめは遠慮していたが、開けて見たら誰もいなかったよ」

「おやそうですか、じゃまたあの先生でしょう」

先生というのは書の専門家であった。方々にかかっている額や看板でその落款^{らくかん}を覚えていた津田は「へええ」と云った。

「もう年寄だろうね」

「ええお爺^{じい}さんです。こんなに白い髯^{ひげ}を生やして」

下女は胸のあたりへ自分の手をやって書家に相応^{ふさ}わしい髯の長さを形容して見せた。

「なるほど。やっぱり字を書いてるのかい」

「ええ何だかお墓に彫りつけるんだって、大変大きなものを毎日少しずつ書いていらっしやいます」

書家はその墓碑銘を書くのが目的で、わざわざここへ来たのだと下女から聴^きかされた時、津田は驚ろいて感心した。

「あんなものを書くのにも、そんなに骨が折れるのかなあ。素人^{しろうと}は半日ぐらいで、すぐ出来上りそうに考えてるんだが」

この感想は全く下女に響かなかった。しかし津田の胸には口へ

出して云わないそれ以上の或物さえあつた。彼は暗あんにこの老先生の用向ようむきと自分の用向とを見較みくらべた。無事に苦しんで義太夫の稽古けいこをするという浜の二人をさらにその傍かたわらに並べて見た。それから何の意味とも知れず花を活けたり手習をしたりするらしい清子も同列に置いて考えた。最後に、残る一人の客、その客は話もしなければ運動もせず、ただぽかんと座敷に坐すわつて山を眺めているという下女の觀察を聴いた時、彼は云つた。

「いろんな人がいるんだね。五六人寄つてさえこうなんだから。夏や正月になつたら大変だろう」

「いっぱいになるとどうしても百三四十人は入りますからね」

津田の意味をよく了解しなかったらしい下女は、ただ自分達の最も多忙を極めなければならぬ季節に、この家へ入り込んでくる客の人数を挙げた。

百八十一

食後の津田は床の脇に置かれた小机の前に向った。下女に頼んで取り寄せた絵端書へ一口ずつ文句を書き足して、その表へ名宛を記した。お延へ一枚、藤井の叔父へ一枚、吉川夫人へ一枚、それで必要な分は済んでしまったのに、下女の持ってきた絵端書は

まだ幾枚も余っていた。

彼は漫然と万年筆を手にしたまま、不動の滝^{たき}だの、ルナ公園^{パーク}だのと、山里に似合わない変な題を付けた地方的の景色をぼんやり眺めた。それからまた印^{イン}氣^キを走らせた。今度はお秀の夫と京都にいる両親宛^{あて}の分がまたたく間^まに出来上った。こう書き出して見ると、ついでだからという氣も手伝って、ありたけの絵端書をみんな使ってしまったわないと義理が悪いようにも思われた。最初は考えていなかった岡本だの、岡本の子供^{こども}の一^{はじめ}だの、その一の学校友達という連想から、また自分の親戚^{みうち}の方へ逆戻りをして、甥^{おい}の真事^{まこと}だの、いろいろな名がたくさん並べられた。初手^{しよて}から氣がついて

いながら、最後まで名を書かなかったのは小林だけであつた。他の意味は別として、ただ在所ありかを嗅かぎつけられるという恐れから、津田はどうしてもこの旅行先を彼に知らせたくなかつたのである。その小林は不日ふじつ朝鮮へ行くべき人であつた。無検束をもつて自ら任みずる彼は、海を渡る覚悟ですでもう汽車に揺られているかも知れなかつた。同時に不規律な彼はまた出立と公言した日が来ても動かずにいないとも限らなかつた。絵端書を見て、（もし津田がそれを出すとすると、）すぐここへやって来ないという事はけっして断言できなかつた。

津田は陰晴定めなき天氣を相手にして戦うように厄介やっかいなこの友

達、もつと適切にいうとこの敵、の事を考えて、思わず肩を峙^{そば}だてた。するといったん緒口^{いとくち}の開いた想像の光景^{シーン}はそこでとまらなかつた。彼を拉^{らっ}してずんずん先へ進んだ。彼は突然玄関へ馬車を横付にする、そうして怒鳴^{どな}り込むような大きな声を出して彼の室^{へや}へ入ってくる小林の姿を眼前に髣髴^{ほうふつ}した。

「何しに来た」

「何しにでもない、貴様を厭^{いや}がらせに来たんだ」

「どういう理由^{わけ}で」

「理由も糸瓜^{へちま}もあるもんか。貴様がおれを厭^{いや}がる間は、いつまで経^たってもどこへ行っても、ただ追^{おっ}かけるんだ」

「畜生ッ」

津田は突然拳を固めて小林の横ツ面を撲らなければならなかった。小林は抵抗する代りに、たちまち大の字になって室の真中へ踏ん返らなければならなかった。

「撲ったな、この野郎。さあどうでもしろ」

まるで舞台の上でなければ見られないような活劇が演ぜられなければならなかった。そうしてそれが宿中の視聴を脅かさなければならなかった。その中には是非とも清子が交っていないなければならなかった。万事は永久に打ち砕かれなければならなかった。

事実よりも明瞭な想像の一幕を、描くともなく頭の中に描き出

した津田は、突然ぞつとして我に返った。もしそんな馬鹿げた立ち廻りが實際生活の表面に現われたらどうしようと考えた。彼は羞恥しゆうちと屈辱を遠くの方に感じた。それを象徴するために、頬ほの内側が熱ほてって来るような気さえした。

しかし彼の批判はそれぎり先へ進めなかった。他ひとに対して面目めんぼくを失う事、万一そんな不始末をしでかしたら大変だ。これが彼の倫理観の根柢こんていに横よこたわっているだけであつた。それを切りつめると、ついに外聞が悪いという意味に歸着するよりほかに仕方がなかった。だから悪い奴やつはただ小林になつた。

「おれに何の不都合ふつごうがある。彼奴あいつさえいなければ」

彼はこう云つて想像の幕に登場した小林を責めた。そうして自分を不面目にするすべての責任を相手に背負^{しよ}わせた。

夢のような罪人に宣告を下した後^{あと}の彼は、すぐ心の調子を入れ代えて、紙入の中から一枚の名刺を出した。その裏に万年筆で、

「僕は静養のため昨夜^{さくや}ここへ来ました」と書いたなり首を傾けた。それから「あなたがおいでの事を今朝^{けさ}聴きました」と付け足してまた考えた。

「これじゃ空々^{そらぞら}しくっていけない、昨夜^{ゆうべ}会った事も何とか書かなくっちゃ」

しかし当^{あた}り障^{さわ}りのないようにそこへ触れるのはちよつと困難で

あつた。第一書く事が複雑になればなるほど、文字が多くなつて一枚の名刺では事が足りなくなるだけであつた。彼はなるべく淡泊した口上を伝えたかつた。したがって小面倒な封書などは使いたくなかつた。

思いついたように違い棚の上を眺めた彼は、まだ手をつけなかつた吉川夫人の贈物が、昨日のままでちゃんと載せてあるのを見て、すぐそれを下へ卸した。彼は果物籃の蓋の間へ、「御病気はいかがですか。これは吉川の奥さんからのお見舞です」と書いた名刺を挿し込んだ後で、下女を呼んだ。

「宅に關さんという方がおいでだろう」

今朝給仕をしたのと同じ下女は笑い出した。

「関さんが先刻^{さつき}お話した奥さんの事ですよ」

「そうか。じゃその奥さんでいいから、これを持って行って上げてくれ。そうしてね、もしお差支えがなければちよつとお目にかかりたいって」

「へえ」

下女はすぐ果物籃を提^さげて廊下へ出た。

返事を待ち受ける間の津田は居据^{いすわ}りの悪い置物のように落ちつかなかつた。ことにすぐ歸つて来^くべきはずの下女が思つた通りすぐ歸つて来ないので、彼はなおの事心を遣^{つか}つた。

「まさか断るんじゃないやあるまいな」

彼が吉川夫人の名を利用したのは、すでに万一を顧慮したからであつた。夫人とそうして彼女の見舞品、この二つは、それを届ける津田に対して、清子の束縛を解^とく好い方便に違^{ちが}ひなかつた。単に彼と応接する煩^{わづ}わしさ、もしくはそれから起り得る嫌疑^{けんぎ}を避けようとするのが彼女の当体^{とうたい}であつたにいたるところで、果物籃^{くだものかご}の礼はそれを持って来た本人に会つて云うのが、順であつた。誰がど

う考えても無理のない名案を工夫したと信ずるだけに、下女の遅いのを一層苦くにしなければならなかった彼は、ふかしかけた煙草たばこを捨てて、縁側へ出たり、何のためとも知れず、黙って池の中を動いている緋鯉ひごいを眺めたり、そこへしゃがんで、軒下に寝ている犬の鼻面はなづらへ手を延ばして見たりした。やっとの事で、下女の足音が廊下の曲り角に聴きこえた時に、わざと取り繕つくろった余裕を外側へ示したくなるほど、彼の心はそわそわしていた。

「どうしたね」

「お待遠さま。大変遅かったでしょう」

「なにそうでもないよ」

「少しお手伝いをしていたもんですから」

「何の？」

「お部屋を片づけてね、それから奥さんの御髪おぐしを結いって上げたんですよ。それにしちや早いでしょう」

津田は女の鬚まげがそんなに雑作ぞうさなく結ゆえる訳のものでないと思っ
た。

「銀杏いちようがえ返しかい、丸鬚まるまげかい」

下女は取り合わずにただ笑い出した。

「まあ行って御覧なさい」

「行って御覧なさいって、行っても好いのかい。その返事を先刻さつき

からこうして待つてるんじゃないか」

「おやどうもすみません、肝心かんじんのお返事を忘れてしまつて。――
どうぞおいで下さいましつて」

やっと安心した津田は、立上りながらわざと冗談じょうだんはんぶん半分に駄目だめを押した。

「本当かい。迷惑むごつじゃないかね。向へ行むこつてから気の毒な思いを
させられるのは厭いやだからね」

「旦那様だんなさまはずいぶん疑うたぐり深い方ぶかですね。それじゃ奥さんおかさんもさぞ――
――」

「奥さんとは誰だい、関の奥さんかい、それとも僕の奥さんか

い」

「どっちだか解ってるじゃありませんか」

「いや解らない」

「そうでございますか」

兵児帯へこおびを締め直した津田の後ろうしへ廻った下女は、室へやを出ようと
する背中から羽織をかけてくれた。

「こっちかい」

「今御案内を致します」

下女は先へ立った。夢遊病者むゆうびようしゃとして昨夕ゆうべ彷徨さまよった記憶が、例の
姿見すがたみの前へ出た時、突然津田の頭に閃ひらめいた。

「ああここだ」

彼は思わずこう云った。事情を知らない下女は無邪氣に訊き返した。

「何がです」

津田はすぐごまかした。

「昨夕僕が幽霊に出会ったのはここだというのさ」

下女は変な顔をした。

「馬鹿をおっしやい。宅^{うち}に幽霊なんか出るもんですか。そんな事をおっしやると——」

客商売をする宿に対して悪い洒落^{しやれ}を云ったと悟った津田は、賢^{かし}

こく二階を見上げた。

「この上だろう、関さんのお室は」

「ええ、よく知ってらっしゃいますね」

「うん、そりゃ知ってるさ」

「天眼通てんがんつうですね」

「天眼通てんびつうじゃない、天鼻通と云って万事鼻で嗅かぎ分わけるんだ」

「まるで犬見たいですね」

階子段はしごだんの途中で始まったこの会話は、上り口あがくちの一番近くにある

清子の部屋からもう聴き取れる距離にあつた。津田は暗あんにそれを

意識した。

「ついでに僕が関さんの室を嗅ぎ分けてやるから見ている」

彼は清子の室の前へ来て、ぱたりとスリッパの音を止めた。

「ここだ」

下女は横眼で津田の顔を睨めるように見ながら吹き出した。

「どうだ当ったろう」

「なるほどあなたの鼻はよく利きますね。獵犬よりたしかです

よ」

下女はまた面白そうに笑ったが、室の中からはこの賑やかさに
対する何の反応も出て来なかった。人がいるかいないかまるで分
らない内側は、始めと同じように索寞していた。

「お客さまがいらっしやいました」

下女は外部そとから清子に話しかけながら、建てつけの好い障子しょうじをすうと開けてくれた。

「御免下さい」

一言いちごんの挨拶あいさつと共に室へやの中に入った津田はおやと思った。彼は自分の予期通り清子をすぐ眼の前に見出し得なかった。

百八十三

室は二間ふたまつづ続きになっていた。津田の足を踏み込んだのは、床とこの

ない控えの間の方であつた。黒柿の縁ふちと台の付いた長方形の鏡の
前に横よこ縦たて縞しまの厚い座蒲団ざぶとんを据すえて、その傍かたわらに桐きりで拵こしらえた小型の
長火鉢ながひばちが、普通の家庭に見る茶の間の体裁ていさいを、小規模ながら髻ほうぶつ
せしめた。隅すみには黒塗すみの衣桁いこうがあつた。異性に附着する花やかな
色と手触りてざわの滑すべこそうな絹の縞しまが、折り重なってそこに投げかけ
られていた。

間の襖あいふすまは開け放たれたままであつた。津田は正面に当る床の間に
活立いけだてらしい寒菊の花を見た。前には座蒲団が二つ向い合せに敷
いてあつた。濃茶こげちやに染めた縮緬ちりめんのなかに、牡丹ぼたんか何かの模様を
たった一つ丸く白に残したその敷物は、品柄から云つても、また

来客を待ち受ける準備としても、物々しいものであった。津田は席につかない先にまず直感した。

「すべてが改^{あらた}まっている。これが今日会う二人の間に横^{よこ}わる運命の距離なのだろう」

突然としてここに気のついた彼は、今この室へ入り込んで来た自分をとっさに悔いようとした。

しかしこの距離はどこから起ったのだろう？ 考えれば起るのが当り前であつた。津田はただそれを忘れていただけであつた。では、なぜそれを忘れていたのだろう？ 考えれば、これも忘れていたのが当り前かも知れなかった。

津田がこんな感想に囚^{とら}えられて、控^{ひかえ}の間に立^まったまま、室を出るでもなし、席につくでもなし、うっかり眼前の座蒲団を眺めている時に、主人側の清子は始めてその姿を縁側の隅^{すみ}から現わした。それまで彼女がそこで何をしていたのか、津田にはいっこう解^げせなかった。また何のために彼女がわざわざそこへ出ていたのか、それも彼には通じなかった。あるいは室を片づけてから、彼の来るのを待ち受ける間、欄干の隅に倚^よりかかりでもして、山に重^{かさ}なる黄葉^{こうよう}の色でも眺めていたのかも知れなかった。それにしても様子が変であつた。有体^{ありてい}に云えば、客を迎えるというより偶然客に出喰^{でつく}わしたというのが、この時の彼女の態度を評するには適

当な言葉であつた。

しかし不思議な事に、この態度は、しかつめらしく彼の着席を待ち受ける座蒲団や、二人の間を堰^せくためにわざと真中に置かれたように見える角火鉢^{かくひばち}ほど彼の気色^{きしよく}に障^{さわ}らなかつた。というのは、それが元から彼の頭に描き出されている清子と、全く釣り合わないまでにかけ離れた態度ではなかつたからである。

津田の知っている清子はけっしてせせこましい女でなかつた。彼女はいつでも優悠^{おっとり}していた。どっちかと云えばむしろ緩漫^{かんまん}というのが、彼女の氣質、またはその氣質から出る彼女の動作について下し得る特色かも知れなかつた。彼は常にその特色に信を置い

ていた。そうしてその特色に信を置き過ぎたため、かえって裏切られた。少くとも彼はそう解釈した。そう解釈しつつも当時に出来上った信はまだ不自覚の間に残っていた。突如として彼女が関と結婚したのは、身を翻^{ひる}がえす燕^{つばめ}のように早かったかも知れないが、それはそれ、これはこれであつた。二つのものを結びつけて矛盾なく考えようとする時、悩乱は始めて起るので、離して眺めれば、甲が事実であつたごとく、乙もやッぱり本当でなければならなかつた。

「あの緩^{のろ}い人はなぜ飛行機へ乗つた。彼はなぜ宙返りを打つた」
疑いはまさしくそこに宿るべきはずであつた。けれども疑おう

が疑うまいが、事実はいかに事実だから、けっしてそれ自身に消滅するものでなかった。

反逆者の清子は、忠実なお延よりこの点において仕合せであった。もし津田が室^{へや}に入って来た時、彼の気合を抜いて、間の合^まわない時分に、わざと縁側の隅^{すみ}から顔を出したものが、清子でなくって、お延だったなら、それに対する津田の反応ははたしてどうだろう。

「また何か細工をするな」

彼はすぐこう思うに違なかった。ところがお延でなくって、清子によって同じ所作^{しよさ}が演ぜられたとなると結果は全然別になっ

た。

「相変らず緩漫だな」

緩漫と思い込んだあげく、現に眼覚めざましい早技はやわざで取って投げられていながら、津田はこう評するよりほかに仕方がなかった。

その上清子はただ間まを外はずしたただけではなかった。彼女は先刻さっき津

田が吉川夫人の名前で贈りものにした大きな果物籃くだものかごを両手でぶら

提さげたまま、縁側の隅から出て来たのである。どういつつも

か、今までそれを荷厄介にやっかいにしているという事自身が、津田に対し

ての冷淡さを示す度盛どもりにならないのは明かであつた。それからそ

の重い物を今まで縁側の隅で持っていたとすれば無論、いったん

下へ置いてさらに取り上げたと解釈しても、彼女の所作は変に違^{ちがひ}なかつた。少くとも不器用であつた。何だか子供染^{こどもじ}みていた。しかし彼女の平生をよく知っている津田は、そこにいかにも清子らしい或物を認めざるを得なかつた。

「滑稽^{こっけい}だな。いかにもあなたらしい滑稽だ。そうしてあなたはちつともその滑稽なところに気がついていないんだ」

重そうに籃^{かご}を提^さげている清子の様子を見た津田は、ほとんどこ
う云いたくなつた。

すると清子はその籃かごをすぐ下女に渡した。下女はどうしていいか解わからないので、器械的に手を出してそれを受取ったなり、黙っていた。この単純な所作が双方の間に行われるあいだ、津田は依然として立っていなければならなかった。しかし普通の場合に起る手持無沙汰てもちぶさたの感じの代りに、かえって一種の気樂さを味わった彼には何の苦痛も来こずにすんだ。彼はただ間の延まびた挙動の引続きとして、平生の清子と矛盾しない意味からそれを眺めた。だから昨夜ゆうべの記憶からくる不審も一倍に強かった。この逼せまらない人が、どうしてあんなに蒼あおくなつたのだろう。どうしてああ硬く見えただのだろう。あの驚ろき具合とこの落ちつき方、それだけはどう

う考えても調和しなかった。彼は夜と昼の区別に生れて初めて気がついた人のような心持がした。

彼は招ぜられない先に、まず自分から設けの席に着いた。そうして立ちながら果物をくだもの皿に盛るべく命じている清子を見守った。

「どうもお土産みやげをありがとう」

これが始めて彼女の口を洩もれた挨拶あいさつであつた。話頭わとうはその土産を持って来た人から、その土産をくれた人の好意に及ばなければならなかった。もとより嘘うそを吐く覚悟で吉川夫人の名前を利用したその時の津田には、もうごまかすという意識すらなかった。

「道伴みちづれになつたお爺さんじいに、もう少しで蜜柑をやっちまうところ

でしたよ」

「あらどうして」

津田は何と答えようが平気であつた。

「あんまり重くつて荷になつて困るからです」

「じゃ来る途中^{しじゅう}始終手にでも提^さげていらしたの」

津田にはこの質問がいかにも清子らしく無邪氣に聴^{きこ}えた。

「馬鹿にしちやいけません。あなたじゃあるまいし、こんなものを提^さげて、縁側をあっちへ行ったりこっちへ来たりしていられるもんですか」

清子はただ微笑しただけであつた。その微笑には弁解がなかつ

た。云い換えれば一種の余裕があった。嘘うそから出立した津田の心はますます平気になるばかりであった。

「相変らずあなたはいつでも苦くがなさそうで結構ですね」

「ええ」

「ちつとももとと変わりませんね」

「ええ、だって同おんなじ人間ですもの」

この挨拶あいさつを聞くと共に、津田は急に何か皮肉を云いたくなくなった。その時皿の中へ問題の蜜柑を盛り分けていた下女が突然笑い出した。

「何を笑うんだ」

「でも、奥さんのおっしゃる事がおかしいんですもの」と弁解した彼女は、真面目な津田の様子を見て、後からそれを具体的に説明すべく余儀なくされた。

「なるほど、そうに違いございませんね。生きてるうちはどなたも同^{おん}なじ人間で、生れ変りでもしなければ、誰だって違った人間になれっこないんだから」

「ところがそうでないよ。生きてるくせに生れ変わる人がいくらでもあるんだから」

「へえそうですかね、そんな人があつたら、ちっとお目にかかりたいもんだけれども」

「お望みなら逢あわせてやってもいいがね」

「どうぞ」といった下女はまたげらげら笑い出した。「またこれでしよう」

彼女は人指指ひとさしゆびを自分の鼻の先へ持つて行つた。

「旦那様だんなさまのこれにはとても敵かないません。奥さまのお部屋をちゃんと臭においで嗅かぎ分かたける方かたなんですから」

「部屋どころじゃないよ。お前の年とし齡しから原籍から、生れ故郷から、何から何まであてるんだよ。この鼻一つあれば」

「へえ恐ろしいもんでございますね。——どうも敵わない、旦那様に会っちゃ」

下女はこう云って立ち上った。しかし室^{へや}を出^でがけにまた一句の
擲^や揄^ゆを津田に浴びせた。

「旦那様はさぞ猟がお上手でいらっしやいましょうね」

日当りの好い南向^{みなみむき}の座敷に取り残された二人は急に静かになつた。津田は縁側に面して日を受けて坐っていた。清子は欄干^{らんかん}を背にして日に背^{そむ}いて坐っていた。津田の席からは向うに見える山の襞^{ひだ}が、幾段にも重なり合つて、日向日裏^{ひなたひうら}の区別を明らさまに描き出す景色が手に取るように眺められた。それを彩^{いろ}どる黄葉^{こうよう}の濃淡がまた鮮^{あざ}やかな陰影の等差を彼の眸中^{ぼうちゆう}に送り込んだ。しかし眼界の豁^{ひろ}い空間に対している津田と違って、清子の方は何の見るもの

もなかった。見れば北側の障子と、その障子の一部分を遮ぎる津田の影像イメジだけであつた。彼女の視線は窮屈であつた。しかし彼女はあまりそれを苦にする様子もなかった。お延ならすぐ姿勢を改めずにはいられないだろうというところを、彼女はむしろ落ちついていた。

彼女の顔は、昨夕ゆうべと反対に、津田の知っている平生の彼女よりも少し紅あかかつた。しかしそれは強い秋の光線を直下じかに受ける生理作用の結果とも解釈された。山を眺めた津田の眼が、端なく上気した時のように紅く染つた清子の耳みみたぶに落ちた時、彼は腹のうちでそう考えた。彼女の耳朵は薄かつた。そうして位置の関係か

ら、肉の裏側に差し込んだ日光が、そこに寄った彼女の血潮を通
過して、始めて津田の眼に映ってくるように思われた。

百八十五

こんな場合にどっちが先へ口を利き出すだろうか、もし相手がお延だとすると、事實は考えるまでもなく明瞭であつた。彼女は津田に一寸の余裕も与えない女であつた。その代り自分にも五分の寛ぎさえ残しておく事のできない性質に生れついていた。彼女はただ随時随所に精一杯の作用をほしいままにするだけであつ

た。勢い津田は始終受身の働きを余儀なくされた。そうして彼女に応戦すべく緊張の苦痛と努力の窮屈さを嘗めなければならなかった。

ところが清子を前へ据えると、そこに全く別種の趣が出て来た。段取は急に逆になった。相撲で云えば、彼女はいつでも津田の声を受けて立った。だから彼女を向うへ廻した津田は、必ず積極的に作用した。それも十が十まで楽々とできた。

二人取り残された時の彼は、取り残された後で始めてこの特色に気がついた。気がつくとき昔の女に対する過去の記憶がいつの間にか蘇生していた。今まで彼の予想しつつあった手持無沙汰の感

じが、ちょうどその手持無沙汰の起らなければならぬと云う間
際へ来て、不思議にも急に消えた。彼は伸び伸びした心持で清子
の前に坐っていた。そうしてそれは彼が彼女の前で、事件の起ら
ない過去に経験したものと大して変っていなかった。少くとも同
じ性質のものに違ちがないという自覚が彼の胸のうちに起った。した
がって談話の途切れた時積極的に動き始めたものは、昔の通り彼
であつた。しかも昔むかしの通りな気分で動けるといふ事自身が、彼
には思いがけない満足になつた。

「関君はどうしました。相変わらず御勉強ですか。その後御無沙ごぶさ汰
をしていっこうお目にかかりませんが」

津田は何の気もつかなかった。会話の皮切かわきりに清子の夫を問題にする事の可否は、利害関係から見ても、今日こんにちまで自分ら二人の間に起った感情の行掛り上ゆきがかじょうから考えても、またそれらの纏綿てんめんした情実を傍かたわらに置いた、自然不自然の批判から云つても、実はひとしあん一思案しなければならぬ点であつた。それを平生の細心にも似ず、一顧の掛念けねんさえなく、ただ無雑作むぞうさに話頭わとうに上せた津田は、まさに居常きよじょうお延に対する時の用意を取り忘れていたに違ちがひなかつた。

しかし相手はすでにお延でなかつた。津田がその用心を忘れても差支えなかつたという証拠は、すぐ清子の挨拶あいさつぶりぶりで知れた。

彼女は微笑して答えた。

「ええありがとう。まあ相変らずです。時々二人してあなたのお噂^{うわさ}を致しております」

「ああそうですか。僕も始終^{しじゅう}忙がしいもんですから、方々へ失礼ばかりして……」

「良人^{うち}も同^{おん}なじよ、あなた。近頃じゃ閑暇^{ひま}な人は、まるで生きていられないのと同なじ事ね。だから自然御互いに遠々しくなるんですわ。だけどそれは仕方がないわ、自然の成行だから」

「そうですね」

こう答えた津田は、「そうですね」という代りに「そうですか」と訊^きいて見たいような気がした。「そうですね、ただそれだ

けで疎遠になったんですか。それがあなたの本音ほんねですか」という詰問はこの時すでに無言の文句となつて彼の腹の中に蔵かくれていた。

しかも彼はほとんど以前と同じように単純な、もしくは単純とより解釈のできない清子を眼前に見出みいだした。彼女の態度には二人の間に関を話題にするだけの余裕がちゃんと具そなわっていた。それを口にして苦くにならないほどの淡泊たんぱくさが現われていた。ただそれは津田の暗あんに予期して掛かつたところのもので、同時に彼のかつて予想し得なかったところのものに違なかつた。昔のままの女主人公に再び会う事ができたという満足は、彼女がその昔しのままの鷹おう

揚^{よう}な態度で、関の話^わを平気で津田の前にし得るという不満足と
いっしょに來なければならなかった。

「どうしてそれが不満足なのか」

津田は面と向ってこの質問に対するだけの勇氣がなかった。関
が現に彼女の夫である以上、彼は敬意をもつて彼女のこの態度を
認めなければならなかった。けれどもそれは表通りの沙汰^{さた}であつ
た。偶然往來を通る他人のする批評に過ぎなかった。裏には別な
見方があつた。そこには無関心な通りがかりの人と違つた自分と
いうものが頑張^{がんば}つていた。そうしてその自分に「私」という名を
命^めける事のできなかった津田は、飽^あくまでもそれを「特殊な人」

と呼ぼうとしていた。彼のいわゆる特殊な人とはすなわち素人しろうとに
対する黒人くろうとであつた。無知者に対する有識者であつた。もしくは
俗人に対する専門家であつた。だから通り一遍のものより余計に
口を利く権利をもっているとした、彼には思えなかつた。

表で認めて裏で首肯うけがわなかつた津田の清子に対する心持は、何
かの形式で外部へ発現するのが当然であつた。

百八十六

「昨夕ゆうべは失礼しました」

津田は突然こう云って見た。それがどんな風に相手を動かすだろうかというのが、彼の覗^{ねら}いどころであつた。

「私^{わたくし}こそ」

清子の返事はすらすらと出た。そこに何の苦痛も認められなかった時に津田は疑つた。

「この女は今朝^{けさ}になつてもう夜の驚ろきを繰り返す事ができないのかしら」

もしそれを憶^{おも}い起す能力すら失っているとすると、彼の使命は善にもあれ悪にもあれ、はかないものであつた。

「実はあなたを驚ろかした後で、すまない事をしたと思つたので

す」

「じゃ止^よして下さればよかったのに」

「止せばよかったのです。けれども知らなければ仕方がないじゃありませんか。あなたがここにいらっしやろうとは夢にも思いがけなかったのですもの」

「でも私への御土産^{おみやげ}を持って、わざわざ東京から来て下すったんでしよう」

「それはそうです。けれども知らなかった事も事実です。昨夕は偶然お眼にかかったただけです」

「そうですか知ら」

故意を昨夕の津田に認めているらしい清子の口吻が、彼を驚ろかした。

「だって、わざとあんな真似をする訳がないじゃありませんか、なんぼ僕が酔興だつて」

「だけどあなたはだいぶあすこに立っていらしたらしいのね」
津田は水盤に溢れる水を眺めていたに違なかつた。姿見に映るわが影を見つめていたに違なかつた。最後にそこにある櫛を取つて頭まで梳いてぐずぐずしていたに違なかつた。

「迷児になつて、行先が分らなくなりや仕方がないじゃありませんか」

「そう。そりやそうね。けれども私にはそう思えなかったんですもの」

「僕が待ち伏せをしていたとでも思ってるんですか、冗談じょうたんじゃない。いくら僕の鼻が万能まんのうだって、あなたの湯泉ゆに入る時間まで分りやしませんよ」

「なるほど、そりやそうね」

清子の口にしたなるほどという言葉が、いかにもなるほどと合がて点んしたらしい調子を帯びているので、津田は思わず吹き出した。

「いったい何だって、そんな事を疑うたぐっていらっしやるんです」

「そりや申し上げないだって、お解りになってるはずですよ」

「解りっこないじゃありませんか」

「じゃ解らないでも構わないわ。説明する必要のない事だから」

津田は仕方なしに側面から向った。

「それでは、僕が何のためにあなたを廊下の隅で待ち伏せていたんです。それを話して下さい」

「そりゃ話せないわ」

「そう遠慮しないでいいから、是非話して下さい」

「遠慮じゃないのよ、話せないから話せないのよ」

「しかし自分の胸にある事じゃありませんか。話そうと思ひさえすれば、誰にでも話せるはずだと思いますがね」

「私の胸に何にもありやしないわ」

単純なこの一言^{いちごん}は急に津田の機鋒^{きほう}を挫^{くじ}いた。同時に、彼の語勢を飛躍させた。

「なければどこからその疑いが出て来たんです」

「もし疑ぐるのが悪ければ、謝^{あや}まります。そうして止^よめます」

「だけど、もう疑ったんじゃないやありませんか」

「だってそりや仕方がないわ。疑ったのは事実ですもの。その事実を白状したのも事実ですもの。いくら謝^{あや}まったってどうしたって事実を取り消す訳には行かないんですもの」

「だからその事実を聴^きかせて下さればいいんです」

「事実はずでに申し上げたじゃないの」

「それは事実の半分か、三分一です。僕はその全部が聴きたいんです」

「困るわね。何とってお返事をしたらいいんでしょう」

「訳ないじゃありませんか、こういう理由があるから、そういう疑いを起したんだって云いさえすれば、たった一口で済んじまう事です」

今まで困っていたらしい清子は、この時急に腑ふに落ちたという顔つきをした。

「ああ、それがお聴きになりたいの」

「無論です。先刻さつきからそれが伺いたければこそ、こうしてしつこくあなたを煩わづらわせているんじゃないやありませんか。それをあなたが隠そうとなさるから——」

「そんならそうと早くおっしゃればいいのに、私隠しも何にもしませんわ、そんな事。理わけ由は何でもないのよ。ただあなたはそういう事をなさる方なのよ」

「待伏せをですか」

「ええ」

「馬鹿にしちゃいけません」

「でも私の見たあなたはそういう方なんだから仕方がないわ。嘘うそ

でも偽りいつわでもないんですもの」

「なるほど」

津田は腕を拱こまぬいて下を向いた。

百八十七

しばらくして津田はまた顔を上げた。

「何だか話が議論のようになってしまいましたね。僕はあなたと問答をするために来たんじゃないかったのに」

清子は答えた。

「私にもそんな気はちつともなかったの。つい自然そこへ持つて行かれてしまったんだから故意こいじゃないのよ」

「故意でない事は僕も認めます。つまり僕があんまりあなたを問いつめたからなんでしょう」

「まあそうね」

清子はまた微笑した。津田はその微笑のうちに、例の通りの余裕を認めた時、我慢しきれなくなった。

「じゃ問答ついでに、もう一つ答えてくれませんか」

「ええ何なりと」

清子はあらゆる津田の質問に応ずる準備を整えている人のよう

な答えぶりをした。それが質問をかけない前に、少なからず彼を失望させた。

「何もかももう忘れているんだ、この人は」

こう思った彼は、同時にそれがまた清子の本来の特色である事にも気がついた。彼は駄目^{だめ}を押すような心持になって訊いた。

「しかし昨夕階子段^{ゆうべはしごだん}の上で、あなたは蒼く^{あお}なったじゃありませんか」

「なったでしょう。自分の顔は見えないから分りませんけれども、あなたが蒼くなつたとおっしゃれば、それに違ないわ」

「へえ、するとあなたの眼に映ずる僕はまだ全くの嘘吐^{うそつき}でもな

かったんですね、ありがたい。僕の認めた事実をあなたも承認して下さるんですね」

「承認しなくつても、実際蒼くなったら仕方がないわ、あなた」
「そう。——それから硬かたくなりましたね」

「ええ、硬くなったのは自分にも分っていましたわ。もう少しあのままで我慢していたら倒れたかも知れないと思っただくらいですもの」

「つまり驚ろいたんでしよう」

「ええ、いぶん吃驚びっくりしたわ」

「それで」と云いかけた津田は、俯向加減うつむきかげんになつて鄭寧ていねいに林檎りんごの

皮を剥むいている清子の手先を眺めた。滴したたるように色づいた皮が、ナイフの刃を洩もれながら、ぐるぐると剥むけて落ちる後に、水氣の多そうな薄蒼うすあおい肉がしだいに現われて来る変化は彼に一年以上経たった昔を憶おもい起させた。

「あの時この人は、ちようどこういう姿勢で、こういう林檎りんごを剥むいてくれたんだっけ」

ナイフの持ち方、指の運び方、両肘りょうじうを膝ひざとすれすれにして、長い袂たもとを外へ開いている具合、ことごとくその時の模写であつたうちに、ただ一つ違うところのある点に津田は気がついた。それは彼女の指を飾る美しい二個ふたつの宝石であつた。もしそれが彼女の

結婚を永久に記念するならば、そのぎらぎらした小さい光ほど、津田と彼女の間を鋭どく遮さえぎるものはなかった。柔婉しなやかに動く彼女の手先を見つめている彼の眼は、当時を回想するうつとりとした夢の消息のうちに、燦然さんぜんたる警戒の閃ひらめきを認めなければならなかった。

彼はすぐ清子の手から眼を放して、その髪を見た。しかし今朝下女が結いってやったというその髪は通例の底ひさしであった。何の奇も認められない黒い光沢つやが、櫛くしの齒を入れた痕あとを、行儀正しく豎たてに残しているだけであった。

津田は思い切って、いったん捨てようとした言葉をまた取り上

げた。

「それで僕の訊ききたいのはですね——」

清子は顔を上げなかった。津田はそれでも構わずに後を続けた。

「昨夕ゆうべそんなに驚ろいたあなたが、今朝はまたどうしてそんなに平気でいられるんでしょう」

清子は俯向うつむいたまま答えた。

「なぜ」

「僕にやその心理作用が解らないから伺うんです」

清子はやっぱり津田を見ずに答えた。

「心理作用なんてむずかしいものは私にも解らないわ。ただ昨夕はああで、今朝はこうなの。それだけよ」

「説明はそれだけなんですか」

「ええそれだけよ」

もし芝居をする気なら、津田はここで一つ溜息ためいきを吐くところであつた。けれども彼には押し切つてそれをやる勇気がなかつた。

この女の前にそんな真似をしても始まらないという気が、技巧に走ろうとする彼をどことなく抑おさえつけた。

「しかしあなたは今朝いつもの時間に起きなかつたじゃありませんか」

清子はこの問をかけるや否や顔を上げた。

「あらどうしてそんな事を御承知なの」

「ちゃんと知ってるんです」

清子はちよつと津田を見た眼をすぐ下へ落した。そうして綺麗に剥いた林檎に刃を入れながら答えた。

「なるほどあなたは天眼通でなくって天鼻通ね。実際よく利くのね」

冗談とも諷刺とも真面目とも片のつかないこの一言の前に、津田は退避いだ。

清子はようやく剥き終った林檎を津田の前へ押しやった。

「あなたいかが」

百八十八

津田は清子の剥むいてくれた林檎りんごに手を触れなかった。

「あなたいかがです、せっかく吉川の奥さんがあなたのためにと
いって贈ってくれたんですよ」

「そうね、そうしてあなたがまたわざわざそれをここまで持って
来て下さったんですね。その御親切に対してもいただかなくっ
ちや悪いわね」

清子はこう云いながら、二人の間にある林檎の一片ひときれを手にとった。しかしそれを口へ持って行く前にまた訊きいた。

「しかし考えるとおかしいわね、いったいどうしたんでしょう」
「何がどうしたんです」

「私吉川の奥さんにお見舞をいただくとは思わなかったのよ。それからそのお見舞をまたあなたが持って来て下さろうとはなおさら思わなかったのよ」

津田は口のうちに「そうでしょう、僕でさえそんな事は思わなかったんだから」と云った。その顔をじつと見守った清子の眼はつきりに、判然した答を津田から待ち受けるような予期の光が射した。

彼はその光に対する特殊な記憶を呼び起した。

「ああこの眼だっけ」

二人の間に何度も繰り返された過去の光景^{シーン}が、ありありと津田の前に浮き上った。その時分の清子は津田と名のつく一人の男を信じていた。だからすべての知識を彼から仰いだ。あらゆる疑問の解決を彼に求めた。自分に解らない未来を挙^あげて、彼の上に投げかけるように見えた。したがって彼女の眼は動いても静であった。何か訊^きこうとするうちに、信と平和の輝きがあった。彼はその輝きを一人で専有する特権をもって生れて来たような気がした。自分があればこそこの眼も存在するのだとさえ思った。

二人はついに離れた。そうしてまた会った。自分を離れた以後の清子に、昔のままの眼が、昔と違った意味で、やっぱり存在しているのだと注意されたような心持のした時、津田は一種の感慨に打たれた。

「それはあなたの美くしいところです。けれどももう私を失望させる美しさに過ぎなくなったのですか。判然教えて下さい」

津田の疑問と清子の疑問が暫時視線ざんじの上で行き合った後、最初に眼を引いたものは清子であった。津田はその退き方ひかたを見た。そうしてそこにも二人の間にある意気込いきごみみの相違を認めた。彼女はどこまでも逼せまらなかつた。どうしても構わないという風に、眼をよそ

へ持って行った彼女は、それを床の間に活けてある寒菊の花の上に落した。

眼で逃げられた津田は、口で追かけなければならなかった。

「なんぼ僕だってただ吉川の奥さんの使に來ただけじゃありません」

「でしよう、だから変なのよ」

「ちつとも変な事はありませんよ。僕は僕で独立してここへ來ようと思つてるところへ、奥さんに会つて、始めてあなたのここにいらつしやる事を聴かされた上に、ついお土産まで頼まれちまつたんです」

「そうでしょう。そうでもなければ、どう考えたって変ですからね」

「いくら変だって偶然という事も世の中にはありますよ。そうあなたのように……」

「だからもう変じゃないのよ。訳さえ伺えば、何でも当り前になっちまうのね」

津田はつい「こっちでもその訳を訊ききに來たんだ」と云いたく
なつた。しかし何にもそこに頓着とんじゃくしてないらしい清子の質問は
正直であつた。

「それであなたもどこかお悪いの」

津田は言葉少なに病気の顛末^{てんまつ}を説明した。清子は云った。

「でも結構ね、あなたは。そういう時に会社の方の御都合^{ごつごう}がつくんだから。そこへ行くと良人^{うち}なんか気の毒なものよ、朝から晩まで忙がしそうにして」

「関君こそ酔興^{すいきょう}なんだから仕方がない」

「可哀想^{かわいそう}に、まさか」

「いや僕のいうのは善い^い意味での酔興ですよ。つまり勉強家という事です」

「まあ、お上手だ事」

この時下から急ぎ足で階子段^{はしごだん}を上^{のぼ}って来る草履^{ぞうり}の音が聴えたの

で、何か云おうとした津田は黙って様子を見た。すると先刻^{さつき}とは違つた下女がそこへ顔を出した。

「あの浜のお客さまが、奥さまにお午^{ひる}から滝の方へ散歩においでになりませんか、伺つて来いとおっしゃいました」

「お供^{とも}しましょう」清子の返事を聴いた下女は、立ち際に津田の方を見ながら「旦那様^{だんなさま}もいっしょにいらっしゃいました」と云つた。

「ありがとう。時にもうお午なのかい」

「ええただいま御飯を持って参ります」

「驚ろいたな」

津田はようやく立ち上った。

「奥さん」と云おうとして、云い損そくなつた彼はつい「清子さん」と呼び掛けた。

「あなたはいつごろまでおいでです」

「予定なんかまるでないのよ。宅うちから電報が来れば、今日にでも帰らなくっちゃならないわ」

津田は驚ろいた。

「そんなものが来るんですか」

「そりゃ何とも云えないわ」

清子はこう云って微笑した。津田はその微笑の意味を一人で説

明しようと試みながら自分の室^{へや}に帰った。

— 未完 —

「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気付きの場合、ご連絡をいただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML（一部は HTML）形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



一冊堂・青空文庫 pdf データ

2016 年 3 月 15 日 第一期製作

原 稿 青空文庫

発行者 佐藤 聖

発行所 一冊堂

〒165-0025
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘 C 室
mail : issatudo@gmail.com
